



財団法人 地域創造
Japan Foundation for
Regional Art-Activities



文化・芸術を活用した地域活性化に関する調査研究 別冊 資料集

平成24年 3 月

財団法人地域創造

◎ 目次

代表事例調査

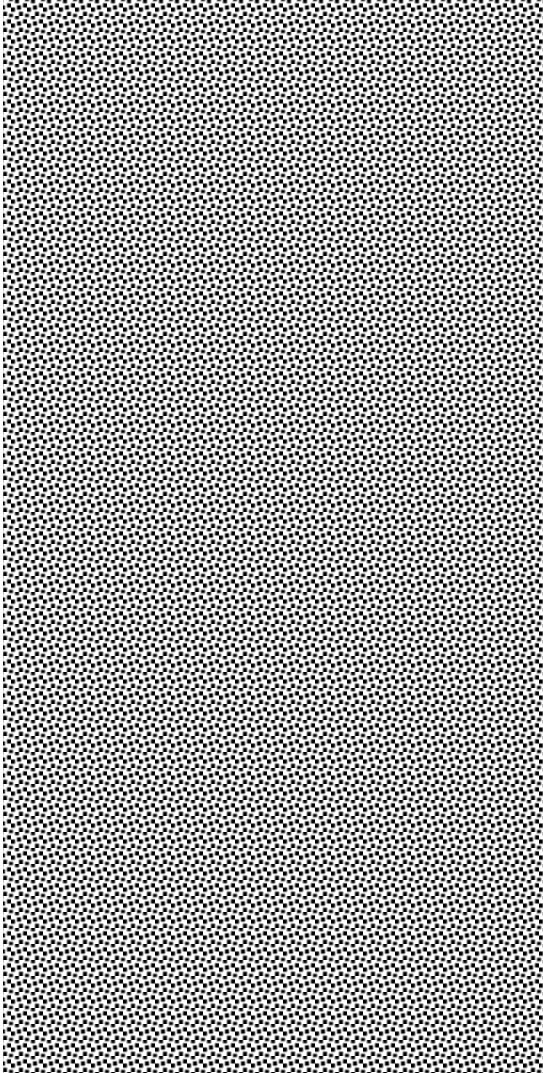
1. 「写真の町」東川町	3
◎ 事例の概要	5
(1) 町長へのインタビュー	13
(2) 町職員へのインタビュー	17
(3) 事業担当者へのインタビュー	21
(4) 実行委員長へのインタビュー	26
(5) 写真家へのインタビュー	29
(6) ボランティアへのインタビュー	33
(7) 参加者へのインタビュー	36
2. 神山アーティスト・イン・レジデンス	41
◎ 事例の概要	43
(1) NPO へのインタビュー	49
(2) KAIR 実行委員長・事務局スタッフへのインタビュー	57
(3) KAIR 実行委員へのインタビュー①	62
(4) KAIR 実行委員へのインタビュー②	67
(5) 町長・教育長へのインタビュー	72
(6) 町職員へのインタビュー	76
(7) ボランティアへのインタビュー	78
(8) アーティストへのインタビュー①	82
(9) アーティストへのインタビュー②	85

3. BEPPU PROJECT	89
◎ 事例の概要	91
(1) NPO へのインタビュー	98
(2) NPO・市民へのインタビュー①.....	107
(3) NPO・市民へのインタビュー②.....	110
(4) 大学教員へのインタビュー.....	115
(5) 市長へのインタビュー	118
(6) 市職員へのインタビュー①.....	120
(7) 市職員へのインタビュー②.....	124
(8) 県職員へのインタビュー	127
(9) アーティストへのインタビュー.....	131
4. DANCE BOX／神戸市	135
◎ 事例の概要	137
(1) NPO へのインタビュー.....	145
(2) アーティストへのインタビュー①※	
(3) 参加者へのインタビュー.....	152
(4) アーティストへのインタビュー②	154
(5) アーティストへのインタビュー③	156
(6) 出演者へのインタビュー	159
(7) 市職員へのインタビュー	161
※ インタビュー対象者ご本人の希望により、WEB上での掲載を控えさせていただきます。ご了承ください。 (製本された別冊資料編では149～151ページに掲載されています)	
5. いわき芸術文化交流館・アリオス	165
◎ 事例の概要	167
(1) 支配人へのインタビュー.....	178
(2) マーケティンググループへのインタビュー	181
(3) コミュニティサービスグループへのインタビュー	188
(4) 市民へのインタビュー	193
(5) アーティストへのインタビュー	198
(6) 参加者へのインタビュー	202

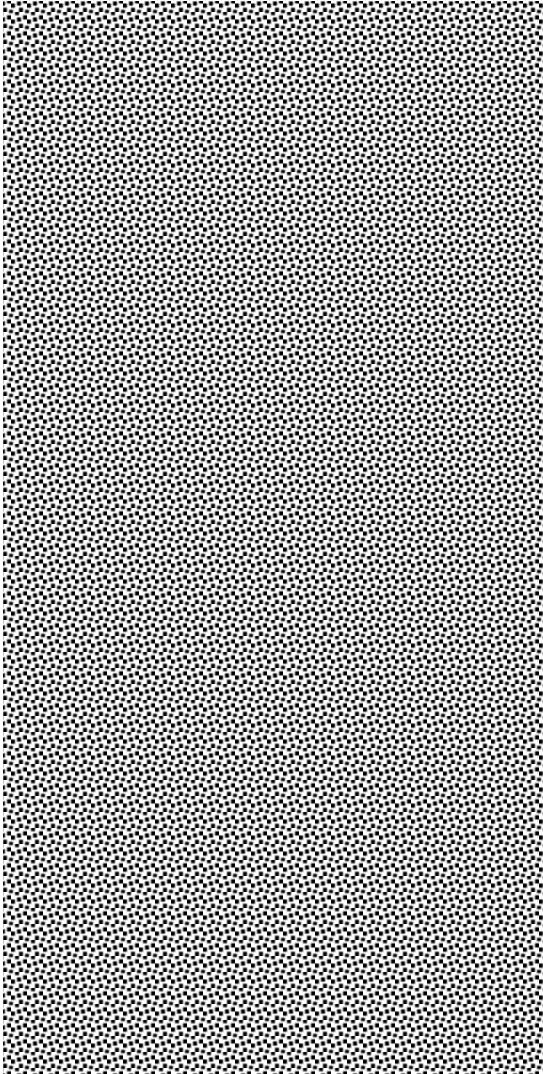
6. イザ！カエルキャンペーン！	205
◎ 事例の概要	207
(1) NPO へのインタビュー	212
(2) アーティストへのインタビュー	219
(3) 市職員へのインタビュー	227
(4) 主催団体へのインタビュー	230

参考事例集

参考事例一覧	237
参考事例集	243



代表事例調査



1. 「写真の町」東川町

文化が牽引する過疎から「価疎」への転換

① 「写真の町」東川町

——文化が牽引する過疎から「価疎」への転換

事例の概要

◎市町村データ

市町村名	東川町	都道府県	北海道
人口 ¹	7,859人	面積(人口密度)	247.06km ² (31.8人/km ²)
歳入決算額 ²	4,665百万円	歳出決算額	4,479百万円
市町村概要	北海道のほぼ中央に位置し、東部は山岳地帯で、大規模な森林地域を形成している。豊富な森林資源と優れた自然の景観は、観光資源として高く評価されている。道北の中核都市旭川市の中心部から13km(車で約15分)、旭川空港から7km(車で約8分)の地点にある。		

1 総務省統計局「国勢調査報告」2010年 2 総務省自治財政局「市町村別決算状況調」2008年

◎主たる事業主体の概要

団体名	東川町 写真の町課 写真の町推進室		
職員数	7名 うち、東川町文化ギャラリーの館長・スタッフ3名を含む		
設置年	2007年	連絡先	0166-82-2111(内線591)
団体概要	東川賞の授賞、国際写真フェスティバル・写真甲子園の実施、写真の町を通じた活性化事業を行う。また、東川町文化ギャラリーの管理運営、写真等芸術作品の展示を行っている。		
URL	http://town.higashikawa.hokkaido.jp/phototown/declaration.htm		

◎関連する文化施設の概要

施設名	東川町文化ギャラリー		
運営母体	東川町(写真の町課 写真の町推進室)		
管理時間	10:00～17:00	休館日	12月31日～1月5日
施設概要	第1展示室:104m ² ／第2展示室:176m ² ／第3展示室:168m ² ／第4展示室:56m ² ／第1収蔵庫／第2収蔵庫／他		
運営スタッフ数	3名 館長(写真の町課長兼務)1名、スタッフ2名		
URL	http://www.photo-town.jp/gallery/		
所在地	北海道上川郡東川町東町1丁目19-8		

◎事業の概要

事業名・クレジット	事業の内容			
東川町国際写真フェスティバル (愛称:東川町フォトフェスタ) 主催:東川町写真の町実行委員会《構成団体》東川町、東川町観光協会、東川町農業協同組合、東川町商工会他 後援:外務省、環境省、文化庁、北海道開発局、北海道、北海道教育委員会、旭川市、日本写真協会、日本写真家協会、日本広告写真家協会、日本写真文化協会、日本旅行写真家協会、全日本写真連盟、日本写真家連盟、北海道観光振興機構、北海道新聞社、朝日新聞北海道支社、毎日新聞社、読売新聞北海道支社、日本経済新聞社旭川支局、NHK旭川放送局、北海道放送、札幌テレビ放送、北海道テレビ放送、テレビ北海道、北海道文化放送、AIR-G'エフエム北海道、FM・ノースウェーブ 協賛:キャンノンマーケティングジャパン株式会社、株式会社シグマ、株式会社スタート・ラボ、株式会社ニコン、株式会社ニコンイメージングジャパン、富士フイルム株式会社、HOYA株式会社PENTAXイメージング・システム事業部、株式会社リコー、日本写真映像用品工業会、株式会社カシマ、MEM、ツァイト・フォト・サロンの写真の町	1985年、東川町は豊かな文化田園都市づくりを目指し、写真文化によって町づくりや生活づくり、人づくりをしようという「写真の町宣言」を行った。 「写真の町宣言」に謳われた、写真によって出会いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル(愛称:東川町フォトフェスタ)」が開催されている。 - 東川町フォトフェスタは全体の会期を約1カ月とし、7月末に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やシンポジウム、写真家たちと出会う各種パーティー、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・大学生によるストリートフォトギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われている。 - また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、町民や初心者を対象とした写真教室、町民写真展など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えている。			
	事業開始年	開催時期	参加者数	予算規模
	1985年	7月26～31日	33,950人 ¹	2,260万円
全国高等学校写真選手権大会 (愛称:写真甲子園) 主催:写真甲子園実行委員会《構成団体》東川町、美瑛町、上富良野町、東神楽町、旭川市、北海道新聞社、全国新聞社事業協議会、東川町写真の町実行委員会 後援:文部科学省、北海道、北海道教育委員会、社団法人全国高等学校文化連盟、北海道高等学校文化連盟、共同通信社、NHK 特別協賛:キャンノン株式会社、キャンノンマーケティングジャパン株式会社 協賛:レキサーメディア マイクロンジャパン株式会社、北海道環境福祉専門学校、旭川福祉専門学校	- 全国の高校の写真部やサークルを対象にして行われる全国高等学校写真選手権大会(愛称:写真甲子園)は1994年から毎年開催。地元のサポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが熱戦を繰り広げる。 - 各学校が自由にテーマを設定し撮影した組写真を主催者に応募。全国8地域ブロックから選抜校を選考し、本戦に招待する地区代表校を決定。 - 本戦大会は、毎年7月下旬北海道を舞台に4日間かけて行われる。各校は3名1組の団体戦で、主催1市4町(東川町・美瑛町・上富良野町・東神楽町・旭川市)内の大雪山国立公園一帯の決められた数か所のステージ(撮影ポイント)内にて組写真を創る。 - 審査は1st審査会、2nd審査会、ファイナル審査会の3回、公開で行われる。この3回の合計得点で順位が決まる。審査会では各校2校ずつ対戦形式のプレゼンテーションが行われ、審査員が講評する。			
	事業開始年	開催時期	参加者数	予算規模
	1994年	7月26～29日	3,500人	2,923万円

¹ 「2011ひがしかわどんとこい祭り」「写真甲子園2011」を含む参加者数。

インタビュー調査の要約

1. 事業の背景、経緯

1985年、東川町が「写真の町」を宣言したことから事業が開始した。「写真の町」宣言は、札幌のイベント企画会社から当時の町長に、東川町フォトフェスタと併せて提案があった。当初、東川町フォトフェスタとは別に、商工夏祭り、農業祭りという3つのイベントが個別に開催されていたが、現在から10年程前に1つの大きなイベントになった。

事業に大きな転機が訪れたのは、写真甲子園の開催である。全国から高校生が東川町を訪れることで、写真を介した地域内外の交流が生まれ始めた。また、「写真の町」事業を担い続けてきた札幌の企画会社が事業から撤退したことも大きな転機となった。それ以来、町職員が町民とともに事業の企画制作を担うようになった。2011年現在、東川町フォトフェスタは第27回、写真甲子園は第18回を迎えている。

2. 地域と連携した事業の内容①: 東川町国際写真フェスティバル(東川町フォトフェスタ)

毎年7月末をメイン会期として、第27回写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展、受賞作家フォーラム、写真インディペンデンス展合評の集い、ポートフォリオレビュー、ストリートギャラリー、東川フォトミーティングプレイス、マイ・カメラアングル写真展といった、多彩なプログラムを提供している。

また、東川賞受賞作家や東川賞審査会委員をはじめ、写真家、写真評論家など多数ゲストに招き、行政と住民が一体となって一連の事業を実施している。

メイン会期は道草館(地元の道の駅)付近から東川町文化ギャラリーまでを歩行者天国にして、東川フォトクラブによるウォールギャラリー野外展示とストリートギャラリー用のオリジナル移動展示パネルを設置する。また、写真イベントと地元の祭り「ひがしかわどんとこい祭り」が一体となり、夏の風物詩として大きな賑わいを生み出している。

年表

1985年	東川町が「写真の町」を宣言。第1回東川町国際写真フェスティバル(東川町フォトフェスタ)開催。
1987年	写真の町に関する条例を制定。目的、推進事項、東川賞、東川賞審査会、姉妹都市提携等を条例で明文化。
1994年	第1回全国高等学校写真選手権大会(写真甲子園)開催。
2005年	「写真の町」事業の企画制作を行ってきた札幌の企画会社が事業から撤退。
2007年	写真の町課が設立(それ以前は産業振興課の中に特別対策室があり、写真の町推進担当が置かれていた)。



● 東川賞受賞作家作品展のチラシ

3. 地域と連携した事業の内容②: 全国高等学校写真選手権(写真甲子園)

全国高等学校写真選手権大会(写真甲子園)は、全国8ブロックの代表校が本戦大会に出場し、撮影1から撮影5までの撮影フィールドで、熱い戦いを繰り広げる。

写真家・立木義浩氏を審査委員長とする5名の審査委員により、テーマが設定された公開審査会が3回行われる。各公開審査会とも8点の組写真で作品発表が行われる。3回の公開審査会ごとに5名の審査委員が採点し、ポイント合計により写真甲子園の各賞が決定する。

大会運営には、地元の高校生たちや北海道外からも「高校生サポーター」として、開会式の司会やサポート、大会の様子を記録し、その記録写真は思い出のスライドとして上映し、大会に花を添えている。

1985年に「写真の町」宣言をしたものの、しばらくは町民の理解が十分に浸透していなかった。しかし、1994年の写真甲子園の開始によって、町民が写真に理解を持ち、親しむことにつながった大きなきっかけとなった。

現在も、多くの町民にとって、町外から来る高校生たちとの清々しい交流が生まれる恒例行事となっている。

4. 事業による成果や効果

◎町職員の意識や町民との関わり方の変化

町長や事業を担当する町職員が自ら認めている成果は、「写真の町」の事業に携わることで町職員の意識や町民との関わり方が変化したことが挙げられている。

「東川町フォトフェスタ」、「写真甲子園」、「ひがしかわどんとこい祭り」の3つが同時多発的に開催される中で、東川町の職員が町民と同じ立場でイベントに携わる。そのことで、町職員の義務的・受動的ではなく、自発的・能動的なイベント運営の関わり方に変化するとともに、町民と互いに協力して祭りを成功させようと努力することにつながっている。

町民の立場からも、町職員との顔の見える関わりが生まれ、行政と住民が一体感を持って地域の魅力を生み出そうとする機運が高まった。



全国高等学校写真選手権大会〈写真甲子園2011〉の会場

インタビューから

- (「写真の町」事業に)町民が能動的に関わるようになったことや、町職員が義務としての仕事を超えて動いていることを考えると、写真の町としての取り組みは効果があったのではないかと。(東川町長:松岡氏)
- (町職員が)いろいろな人の協力があってイベントが成り立っていることを知り、自分だけでは何もできないという意識が生まれる。それが住民へのサービス向上につながっている。(写真の町課:竹部氏)
- 行政との一体感ができた。普通はまちづくりに関する事業は行政にまかせっきりなのではないだろうか。行政も民間もやらされているという雰囲気がなくなってきた。(「写真の町」実行委員長:高木氏)

◎地域の人々や自然環境の魅力の再発見

写真を通じて、あるいは地域外から訪れる人々を通じて、改めて地域に住む人々や自然環境を見直し、魅力を再発見するということも効果のひとつである

地域住民は、身近にある自然や景観の価値に普段は気づかず、往々にして、地域外の人々に指摘されることで改めて気づくことがある。東川町の場合は、「写真写りの良い町づくりを目指す」という言葉のとおり、被写体として美しい地域でありたいという自覚を、自然な形で町民に促している。

フォトフェスタや写真甲子園によって、地域外の人々が東川町の魅力を知り、地域の人々が、地域外の人々に向けて魅力をアピールするために、より美しい町にしようとする相乗効果が生まれている。

◎地域のブランディングや商業・観光の活性化

東川産の農産物の販売では、地域のブランディングに写真が一役買っている。

例えば、東川町内の農産物の直売店では、パッケージに生産者の写真が貼られている。また、人生の様々な節目で、町からのお祝いを込めてプロカメラマンが記念写真を無料で撮影する取り組みや、東川産の「ほしのゆめ」(お米)約1合が入っているショート缶サイズの缶に、オリジナルの写真やデザインを施すサービスを提供している。

「写真の町・東川町」としての認知度が向上することで、地域における農産品の振興や観光業の活性化にも繋がっている。

インタビューから

- 写真甲子園を通じて東川町の魅力を知り、町の職員として町のために何かしたいと思って移り住む。こういう人が生まれて将来的に町に入ってくることが、東川町にとってのメリットになる。(写真の町課:今野氏)
- みんながこの町のアルバムを作っているというイメージが無意識に出てきている。だから、町をよりきれいに、より素晴らしく撮りたいという思いも生まれてくる。(写真家:竹田津氏)
- イベント時だけでなく、普段の町の人の姿を見て、素朴にこの町を愛していることが分かった。生活の中で、人々が自分の町に親近感を持っているこの町に住みたいと思った。(写真の町課:吉里氏)

インタビューから

- 写真に撮ってもらえるような環境づくりから、生まれた子どもへの写真のプレゼントや、喜寿を迎えた人の写真撮影など、住民が写真にふれる機会をつくったり、写真を用いたグッズを開発したり、様々なアイデアが出てきている。(東川町長:松岡氏)
- 例えば、農産物には生産者の写真がついている。「写真の町」としての東川のブランディングができているからこそ写真が生産物のアピールに一役買っている。(東川町〈写真の町〉実行委員:高木氏)
- 町を知ってもらうことは観光客の増加につながっており、人の動きによって商店街の活性化や観光業の活性化になっている。(写真の町課:竹部氏)

◎出会いと交流による人々の内面的な変化

主として写真甲子園に参加した高校生の、写真の技術だけではない内面的な成長に及ぼす影響が大きいという意見が多く聞かれた。

写真甲子園で東川町に滞在しているのは、わずか数日間だが、その間にプロの写真家、東川町の住民、他校の生徒、そして同じ写真部の仲間たちと、写真を介して濃密な交流を体験する。それは、多感な高校生にとって何物にも変えられない体験であり、大人へと成長するきっかけを与えている。

また、そうした高校生の姿に接することで、地域住民に地域に対する誇りを持つことにつながっている。高校生にとっても、また地域住民にとっても、写真を介した出会いや交流によって、内面的な変化が現れているようだ。

2. 事業の実施体制

◎主催者

東川町フォトフェスタの主催者は、東川町写真の町実行委員会で、その構成団体は東川町、東川町観光協会、東川町農業協同組合、東川町商工会などとしている。また、写真甲子園の主催者は、写真甲子園実行委員会で、その構成団体は、東川町、美瑛町、上富良野町、東神楽町、旭川市、北海道新聞社、全国新聞社事業協議会、東川町写真の町実行委員会となっている。

◎事務局

両事業の実質的な事務局運営は、東川町の庁内組織である写真の町課が担当。課長以下4名の職員のほか、東川町文化ギャラリーの展示作業員が2名と、事務補助員として臨時職員が1人。また、東川町フォトフェスタの運営をサポートするボランティアスタッフ「フォトフェスタふれんず」を全国から公募し、2011年度では15名が11日間にわたり作品展示作業やイベント進行スタッフとして活動した。

インタビューから

- 生徒たちには、第一線で活躍するプロの写真家と一緒に活動する機会があったが、プロの写真家の方は見返りなしで、生徒たちに付き合ってくれた。それは彼らも自分たちが高校生のときにプロとふれあったことが大きな経験になっているからだろう。(宮城県柴田農林高校:山下氏)
- 世の中にはこんなに楽しいことがあるんだということを、写真甲子園を通じて感じる事ができて、幸せだと思っている。(フォトフェスタふれんず:長谷川氏)
- 全国から来る高校生が、「東川町って素晴らしい」と思っている姿を見れば、自分の町は写真を使ってこれだけ素晴らしいことをしてるんだという誇りを持ってくれるのではないか。(写真の町課:今野氏)



東川町長 松岡市郎氏



写真の町課 課長 竹部修司氏

◎ボランティア

写真甲子園の運営では出場校の選手たちの食事を支給するための「町民サポーター」(商工会女性部、自治振興会、JA女性部、東川町赤十字奉仕団、東川消費者協会の5団体のお母さんたち)が活躍する。本戦出場を果たせなかった高校や東川町周辺の写真部の有志が、高校生サポーターとして参加するなど、両事業の期間中に延べ2,000名余の町内外ボランティアが事業運営に携わっている。



町民サポーターによる食事の準備

4. 現在の課題、将来のビジョン

イベントとしてより充実させるための課題として、プロの写真家と住民との交流機会を増やすことや、写真甲子園の応募校数を増やすことなどが挙げられている。イベントの運営についても、将来に向けて持続可能な次世代への引き継ぎが求められている。

一方で、写真という文化・芸術を振興するだけでなく、写真を通じて幅広い政策につなげる姿勢や、関心が希薄な地域住民ともコミュニケーションを図ろうとしている。

また、東川町長はいわゆる「過疎」の自治体と言われる東川町は、「疎」に価値を見出し、価値のある「価疎」の町を目指しており、その価値を生み出すのが文化・芸術だと考えている。

インタビューから

- 熱心に支えてくれる人がコミュニティの中の消耗品になってしまっはいけない。常に後継者を作って若い世代へ引き継いでいくことが重要である。(〈写真の町〉実行委員長:高木氏)
- イベントだけでなく、まちづくり、ひとづくりに活かしていけるような政策を考えていかなければならない。(写真の町課:竹部氏)
- 町全体の誇りを生むために、無関心層のところへ説明に行ったり、反対派が思っていることを知ることによって少しずつ関心を高めようとはしている。(写真の町課:今野氏)
- 過疎でも過密でもなく適度に遊びの空間として、「疎」がある状態が「適疎」であると捉えている。また、過疎も「過」ではなく、価値のある「価疎」にしていこうと考えている。そこで、「疎」に価値をつけるのは文化・芸術ではないだろうか。(東川町長:松岡氏)

5. 文化・芸術を活用した地域活性化について

1985年に「写真の町」を宣言した東川町で、そのインパクトを自覚するようになったのが「ここ10年くらい前から」というとおり、文化・芸術による地域活性化が認識されるまでには、長い時間を要している。

仮に、短期的な経済効果等を求めていれば、文化・芸術活動を持続することは極めて困難であろう。東川町の場合は「写真の町」宣言や条例の策定、町が主体的に取り組む体制が整備されて、単なるイベントではない位置付けとなり、長期の取り組みが可能となった。

広い視野で見た場合、文化・芸術が地域活性化に果たす役割として東川町長は「人をつなぐことを可能にする」と言う。小さな町だからこそ、町内外の人と人とのつながり、ネットワークが財産であると言う。

インタビューから

- 写真の町のインパクトはここ10年くらい前から表に出てきたと考えている。まちの人や職員に誇りがでてきたこと、人がたくさん訪れることによる活性化、観光面へプラスに働いていることが挙げられる。(写真の町課:竹部氏)
- 地域づくりに文化を取り入れても、単純な経済効果は生まれるものではない。ああでもない、こうでもない「のりくらりと」耐えるしかない。しかし、そうしていれば他者が評価してくれる。(写真家:竹田津氏)
- マスコミやその他の知恵を持っている人などが、文化を通じて町に入ってきて、それをまちづくりに生かすことができる。人と人とのつながりは重要であり、文化は人をつなぐことを可能にする。(同上)

(1) 町長へのインタビュー

日時:2011年7月29日 16:00～17:00

会場:東川町役場2階町長室

対象:松岡市郎(東川町長)

1. 事業の背景、経緯

- 東川町が「写真の町」を宣言したのは1985年。今年で27年目になる。当時は写真の町を宣言してどうなるのかという不安と期待があったが、最初は不安のほうが大きかった。まちづくりにどのような貢献をするのかという疑いの目で見える住民も多かった。
 - 「写真の町に関する条例」を制定して、東川町国際写真フェスティバルを始めたのは元町長の中川音治氏である。当時は一村一品ということで、物を加工することで、価値を出して地域の経済を潤そうという視点が強かった。そのような中で中川元町長は写真という「文化」を取り入れた。その理由として、カメラが各世帯に普及しているということ、カメラの歴史が北海道の開拓の歴史と時を同じくしていること、風光明媚な山や美しい田園があったことなどが挙げられる。
- － 写真の町を宣言した当時、一人の町職員としてそれをどのように受け止めていたか？
- 当時は農林課の職員だったが、「写真の町」の企画員でもあったので「カメラの被写体になるようなまちをつくらう」ということで、花を植えるなど産業分野でできることに積極的に取り組んだ。
 - その後、社会教育課に変わったが、「写真の町条例」の「国際的な交流と写真文化を通じ、世界に開かれた自然と文化の調和する活力と潤いに満ちた町づくりの推進を図る」という目的ののっとなって何ができるか考えてきた。
 - 例えば、授賞式に自宅でとれたハーブでブーケを作って渡すという「ハーブフレンド」という事業の提案や、海外交流を推進するなど自分の分野で何ができるかを、それぞれの町職員が考えてやってきたと思う。
 - 当時は反対派もいたが、条例化して町の目標として掲げたのは中川元町長と当時の議会である。条例と宣言があったがゆえに、経済状況や町長が変わるなどの変化が起きても止めることなく続いてきた。

－ 反対派が減ったきっかけは？

- 当初、町は条例を掲げているだけで、イベントの企画制作や受賞者の選考等の実務的な部分は札幌の企画会社にすべてを任せていた。しかし、その企画会社が倒産したことで、町職員や民間で構成される企画委員が自分たちで実務を行わなければならなくなった。そこから写真の町に関する事業の当事者意識が高まり、「やらされ仕事」という感じがなくなった。
- 最近では、写真の町や写真甲子園を否定する人は非常に少なくなってきた。それはイベントの中に住民が関わる部分が多くなってきたからだと思う。住民が関わるのは大変だが、その分だけ充実感がある。
- 「写真の町」という事業を続ける上で、条例は意義があったと思う。条例に基づいて事業を実施するという前提があったから、「写真に対して賞金を出すなら住民の福祉に使え」というような反論もなく続いてきたのではないかな。

2. 事業の実施体制

- 町の税収が8億円程度の中で、文化事業に5,000万円を使っているということは、文化に対する予算の割合は大きいと思う。しかし、文化に関する事業は必ず外につながりを作っている。人口規模が小さいからこそ、外からノウハウを得て、官民間問わず様々な団体と連携し、ネットワークを築くということが、小さな町が伸びていく要因だと思う。だから職員にも積極的に外へ出てもらっている。
- 人が動かなければ町は活性化しない。だから安易にはアウトソーシングしない。アウトソーシングするとしても、職員自らが動きながら、町の企業など互いが向上するところと組んでいく。
- 「写真の町」に関しては企業との連携は欠かせない。そのつながりは写真の町を掲げてから生まれたものである。それ以外にも文化事業が生み出したつながりは数多くあり、様々なところでプラスに働いている。費用対効果は高いのではないだろう

か。

3. 事業による成果や効果

- 一つは、町民が前向きに活動するようになってきたことである。もう一つは、まちづくりの中に東川らしさをどのように打ち出すのかという取り組みが行われていることである。
- 写真うつりのいい施設を造ろう、カメラを向けられても堂々としていられるように子どもたちを育成していこう動きが起こっている。町を訪れた人々は「きれいなところですね」と言ってくれるが、それは住民のパワーによるものである。住民自らがやるという意識が以前よりも高まったのではないかな。
- 写真甲子園の開会式で地元の幼稚園児の迎ええや小学生のブラスバンドの演奏があったり、パーティーの時に地元の方がジギスカンを振舞ったり、ホームステイを行ったりすることで、コミュニケーションが生まれ、友達の輪が広がってくる。
- 町民が能動的に関わるようになったことや、町職員が義務としての仕事を超えて動いていることを考えると、写真の町としての取り組みは効果があったのではないかな。写真の町を宣言したことは、町に大きく貢献したと捉えている。

－ 町の職員はどのように変化したのか？

- 写真に撮ってもらえるような環境づくりから、生まれた子どもへの写真のプレゼントや、喜寿を迎えた人の写真撮影など、住民が写真にふれる機会をつくったり、写真を用いたグッズを開発したり、様々なアイデアが出てきている。ふるさと納税を「寄付」といわずに「株主の投資」と発想を変えた「ひがしかわ株主制度」も職員のアイデアだ。
- 年度の途中で挙がってきたアイデアも採用している。婚姻届に、婚姻届を出した瞬間の夫婦の写真とメッセージが残すことができるというアイデアは8月に出された。一般的には来年度の事業案にまわすことになるが、それでは半年間のタイムロスがある上に、予算の要求時に再び情報を収集し、資料を作成する手間が生まれてしまう。いいものがある

ったらやりましょう、ということで柔軟に対応している。

- コンサートや演劇は、北海道や旭川に来たついでに東川で公演を行ってもらおう。東川のためだけに来ってもらうことはほとんどない。だからこそ、機会があった時に柔軟に対応できるような予算編成にしている。
- 私が社会教育課に在籍していた時に、やりたい企画があっても、予算がない、前例がない、他の自治体ではやっていない、と言われてボツにされたしまった。
- しかし、まちづくりのソフト分野にかかる経費は、施設整備などのハード分野に比べれば規模が小さく、助成などで最小限の経費で抑えることが可能である。金銭よりも、町職員が外へとコンタクトをとって作ったネットワークのほうが大きな財産であると考えている。人の動きを作るということが町の活性化の基本であり、動きをどう作るかということが重要である。
- 他の町に比べると、東川町は職員の出張に対して制約が少ない。自分で発想して何かやろうとする時には積極的に外に出て、行動を起こしてもらおう。外に出ればモチベーションも高くなるし、失敗してもまたやろうという気になる。町職員のやる気をつぶさないということが重要だと考えている。
- 町の職員が作成した予算の説明資料で、前年度の数字だけを入れ替えた資料を持ってくると、「我々にとってこの書類は、芸術家の作品のようなものなのだから、内容も咀嚼しないで年度の数字を入れ変えただけではダメだ。ちゃんと自分の魂を入れた資料を書いてこい」と言っている。
- 自分のやりたいことは自分で責任を持って、自分の作品だと思ってどんどんやりなさいと言っている。そこから職員のモチベーションが高まり、自由な発想が出てくるのではないかな。
- 実現した様々なアイデアを情報発信してメディアに積極的に取り上げてもらうことによって、職員の自信や誇りが生まれ、やる気へとつながっている。チャンスが訪れたときにチャンスを逃がさない。

- 震災で被災された方の写真の洗浄のお手伝いをされたボランティアの話も聞いた。
- 東川に住んでいる写真家が被災地に足を運び、ボランティアをしたことがきっかけで始まった。写真の専門学校や写真の町の企画員の人々が協力して洗浄を行った。
- 写真家も住んでいるし、写真だから参加する人はいる。それは「写真の町」としてやっていた積み重ねだと思う。写真甲子園の夕食も住民ボランティアが振舞っているが、人口がわずか約7,800人のまちで、これだけの住民がボランティアに関わっていることはすごいことだと思う。

4. 現在の課題、将来のビジョン 等

- 文化に予算を使うことの価値を、住民に対してどのように説明しているのか？
- 現在、新築を計画している東川小学校の校庭に、東京ミッドタウンや東京国際フォーラムに作品が置かれている、北海道出身の彫刻家の安田侃氏の作品を置こうと考えている。相当な予算額を必要とするので反対もあるが、世界的に活躍している作家の作品が校庭にあることで、子どもたちに何らかの文化的な刺激を与え、子どもたちの探究心や好奇心を育み、「写真うつりのいい子ども」の育成につながるのではないかと考えている。
- 小学校に安田侃氏の作品を置くのは開拓120周年の記念事業として行っている。記念事業として豪華なパンフレットを作ったり打ち上げ花火をやったりするよりは、次世代の子どもたちの刺激になるようなものを残すべきではないかと考えている。
- 多くの人にとって安田侃氏の作品は、見ても分からない、という印象を持つだろう。分からないということは好奇心や探究心を生み出す源となるのであって、分かるものを置いてもそれは単なる「物」でしかありえない。
- 子どもたちは、感性を磨くことで個性が生まれてくるのではないだろうか。反対の人は予算のことをと

やかく言うが、教育はお金には代えられない価値を生み出すものであることを強く訴えている。

- 「過疎」ではなく「適疎」という考え方をご紹介いただきたい。
- 都心部との違いは何かと考えたときに、土地が広い農村の価値は「疎」にあると考えた。過疎でも過密でもなく適度に遊びの空間として、「疎」がある状態が「適疎」であると捉えている。また、過疎も「過」ではなく、価値のある「価疎」にしていこうと考えている。そこで、「疎」に価値をつけるのは文化・芸術ではないだろうか。
- 東川小学校等の新築の計画では、広さは16ヘクタールある。広すぎるという意見がでていますが、狭く、自然も少ないような環境にある都会の小学校では、子どもたちが衣食住に必要なものを作る第一次、第二次産業に従事するようなたくましい大人に育つとは思えない。
- 山が見えて水があって、のびのびした環境で勉強できる。子どもたちがそのようなところに農村の価値を見出し、将来、地元に戻って地元の産業を継ごうと思えるのではないかと考えている。そのためにはやはり広さは必要であり、そのことが衣食住という「文化」を育んでいくと考えている。

5. 文化・芸術を活用した地域活性化について

- 写真を切り口にまちづくり、産業、教育という取り組みがなされているが、例えば高齢者に写真が与えた影響はあるか？
- 高齢者の老人クラブの中に写真クラブができ、発表会を行っている。また、通常の遺影用の写真は暗いものが多く、もっと笑顔の写真を残そうということになった。遺影用というわけではないが、笑顔の写真を残そうということで、喜寿になったときに写真を撮り、額にいれてプレゼントするという取り組みを行っている。
- イベントをやるのが高齢者の社会参画の機会となっている。そのような機会が高齢者の元気の源になっているし、何もしないよりまちのために何か

しようという意識が生まれている。

- 文化を通じた出会いによって、損失を被った例はない。我々のような小さな町では、すべてをそこだけでやるには限界がある。マスコミやその他の知恵を持っている人などが、文化を通じて町に入ってきて、それをまちづくりに生かすことができる。人と人とのつながりは重要であり、文化は人をつなぐことを可能にする。

(2) 町職員へのインタビュー

日時:2011年7月31日(日)12:00~13:00

会場:東川町役場2階応接室

対象:竹部修司(東川町 写真の町課 課長)

1. 自己紹介

- もともと総務系の仕事を長くやっていた。写真の町課の前任は地域活性課である。地域活性課は地域コミュニティを中心に、国際交流、環境衛生、交通安全、防犯、まちの広報誌など幅広い分野を扱う課である。
- ただし、文化は含まれておらず、文化の分野は写真の町課と教育委員会の社会教育系のところが担当している。
- 写真の町課は「写真の町」事業だけを行っており、その他の文化事業は行っていない。写真の町課が設立されたのは4年前であり、その前は産業振興課の中に特別対策室があり、写真の町推進担当という形で行われていた。
- 電話交換にしても文書にしても、東川町の前には必ず「写真の町」という言葉を添えて外部にPRをしているので、やはり写真の町の事業を中心として動ける専門の課が必要だろうとなったのが設立経緯である。
- 写真の町課の事務所はもともと庁舎内にあったが、文化ギャラリーの館も管理しながら、写真の町の事業を行っていきこうということで文化ギャラリー内に移動した。
- 以前は、ギャラリーには教育委員会の管轄下で館長と展示スタッフがおり、場所だけでなく運営も別で行っていたが今は一体化している。事業の流れやコストを考えると、組織改正は成功だったと思う。

2. 事業の背景、経緯

- かつて「一村一品運動」というのがあって、東川町は写真を核として取り上げていこうという流れになった。1985年に元町長が「写真の町」を宣言したが、当時は写真の町に関係しない部署にいたので、なぜ写真の町なのか疑問に思っていたし、職員全体にもそういう風潮があった。
- 人と文化、自然と人、写真うつりのいい町並みや

人づくりといった様々な発想の展開があって、まちづくりの核にしようということになったが、それが理解されるまでにはかなりの時間がかかった。住民からは「なぜ写真の町なのか」という批判の声だけでなく、どんなメリットがあるのかも聞かれた。文化のためにやっている部分もあるが、経済効果というのが求められる部分もあった。

- 写真の町を宣言してから10年経ったときに「写真甲子園」という企画を始めることになった。10年、20年、30年先を見たときに、今のままではだめだということで新たな策を打ち出す必要性があったからである。
- プロの写真家ばかりではなく、高校生の写真活動をしている部活動や同好会に焦点を当てて、写真の町の10年から20年に向けての取り組みとして実施を始めた。
- 写真を撮る高校生やボランティアが町を歩いたり、マスコミに出たりしたことによって、写真の町としての知名度が上がり、住民も関わることで理解を得られるようになってきた。写真甲子園がきっかけで住民が理解してくれるようになったと思っている。
- 写真甲子園を企画したのは、写真の町を提案した札幌のイベント会社。写真の町の事業は民間の企画会社を中心となり運営を行い、そこに職員がスタッフとして関わるという形で行っていた。
- 7、8年ほど前にイベント会社が倒産してしまい、事業から撤退しまったが、事業は継続しなければならなかった。それ以降は、委託業者に任せているというこれまでの感じから、職員全体が、自分たちの手で取り組もうという意識へと変わっていった。

3. 事業の実施体制

- 写真の町課は私を筆頭に、室長、今野、吉里の4名が正職員である。そのほかに、交替で勤務しているギャラリーの展示作業員が2名と、事務補助員として臨時職員が1人いて、1日単位でみると、6人体制で動いている。今年に限っては旭川市との

研修交流をしており、6、7月の2ヶ月間は旭川市から職員を受け入れているので、1名増えている。

- 「東川町写真の町実行委員会」と「写真甲子園実行委員会」という2つの実行委員会組織がある。写真の町実行委員会の中に企画委員が所属している。町長が会長で、観光協会長、農協組合長、商工会長が副会長を務めている。観光協会長は議長も兼任している。副町長が本部長であり、写真の町課は事務局を担当している。
- 東川町写真の町実行委員会と写真甲子園実行委員会は、以前は別に動いていたが、現在は一本化され、写真の町実行委員会の委員が写真甲子園の企画も手伝うという関係性になっている。
- 予算は総額約5,800万円で、町からの財源は約2,000万円で、残りは財団法人地域創造などの助成金と民間企業の協賛金である。民間企業はカメラのメーカーを中心に7、8社が協賛しており、総額は約3,500万円になる。助成金は200～300万円ほどである。
- 町の一般会計の予算は51億円程度である。バブル期が終了した平成4年頃が42～3億円程度で、現在は10億円ほど増額している。それは様々な国の事業にいち早く手を上げて事業に取り組んだ結果である。
- 二番煎じ、三番煎じではお金が出てこない。そのために、建設分野でもソフト分野でも、職員は情報をいち早く察知して対応することを心がけている。近隣の市町村がハード事業を抑え、予算規模を縮小する中で、東川町だけは右肩上がりになっている。

－どのように町職員は事業に関わっているのか？

- 自ら写真甲子園の専属スタッフを3年間務めたことでようやく理解することができた。職員でも理解するのに10年はかかったという気がする。現在は様々なスタッフが事業に関わっている。
- 若い職員を早いうちから関わらせることで写真の町の理解が早まると思っているが、全国や世界各国からゲストが訪れる中で、失礼があってはいけないということで、セクションのリーダーには中枢の

人間をつけ、実務は若い職員が中心で担うという体制に変わってきた。

- 東川町が写真の町であることを、役場の職員としての知識のひとつとして習得するために、役場に入る前の職員研修の中で写真の町の説明を必ず行っている。そのおかげか職員の意識も少しずつ変わってきていると思う。
- また、職員は写真フェスティバル、写真甲子園、どんとこい祭りの3本のイベントのどこかに必ず関わることになっている。入ったばかりの職員は「なぜ写真なのか」と思うかもしれないが、イベントに関わることで、私たちが10年かかって理解したものを2、3年で理解できるのではないだろうか。

－事業では民間企業との接点も多い。

- 今までは民間企業と接点がない部署にいたが、写真の町課に移って、民間と同じように事業を実施するための協賛金を集める営業を行うようになった。この課は町民との接点もあるが、民間企業との接点も大きい。民間といろいろな話をする中で意識は変わってくる。企業も、役所とやりとりしているのではなく、民間とやりとりするような感覚で接していると思う。
- －「どんとこい祭り」と写真の町のイベントを並行して実施することになった経緯は？
- もともとは両者別々に行っていたが、写真のイベントだけでは人が集まらなかった。人が来なければ始まらないということから、写真の町実行委員会から「どんとこい祭り」の実行委員会と一緒にやろうとアプローチした。
- すり合わせはきちんとできるようになってきたが、どんとこい祭りを活用した写真の町の取り組みのアピールはまだまだできると思っている。例えば、ニコンの協賛で行っているストリートギャラリーという取り組みでは、グランプリの写真が決まるのが祭りの最終日の夜になっている。それだと祭りに来た観客に、どの写真がグランプリだったのか見せることができない。審査日をずらすことで祭りのステージでグランプリの写真をPRし、表彰式も祭り内で行うなど変えられる部分はまだまだある。これも一体

化してきたから考えられることである。

4. 事業による成果や効果

- プロの写真家も東川に数人住んでおり、広告写真家協会が学校の生徒を撮る機会もある。そのためかどうかは分からないが、東川の子どもたちは誰にでもあいさつができるし、カメラを向けられればいい顔をする。子どもたちが人懐っこい。
- 大きな町だと知らない人としやべるなどと言われると思うが、この町では知らない人同士が気軽にあいさつをする。写真の町効果と言っているか分からないが、いい傾向である。子育て環境としてもいいと言えるのではないだろうか。
- 写真甲子園では老人ホームに撮影に行くことも多い。お年寄りには高校生から元気をもらい、高校生もお年寄りが頑張る姿を見て元気をもらうという光景も見られる。
- 自然や人といった被写体を求めて、町には平日でもカメラを提げたおじさん、おばさんがやってきてまちをぶらぶらしている。そのような交流人口も増加している。
- － 写真の町の事業では、住民ではない高校生や写真家に対して事業費の大半が使われるが、そのことに対する意見はあるか？
- 写真甲子園が始まるまでは、写真フェスティバルの賞金を税金で出すことに対する批判は強かった。現在は批判こそ出ないが、写真フェスティバルの授賞式に関しては、まだ住民には馴染みがなく特異なものである。受賞パーティーも、もともとは町が主催して会費を取ってクローズな形でやっていたが、今はボランティアの企画員が運営し、入場無料で誰でも入れる。受賞作家を町民みんなでお祝いをしようという形になっている。
- － 特徴のある文化事業を町主体の事業として行うことで、行政全体にはどのような影響があったのか？
- 特殊なイベントなので、写真の町を理解したことで他の業務に反映できるかどうかは定かではない。

しかし、選手係の担当者が、町民のホームステイをきっかけにホストファミリーとの付き合いが始まるなど、町民をより深く知ってもらうということでは大きな効果だと考えている。

- 夜中まで勤務することが1週間ほど続くので、通常の仕事に戻ったあとも頑張りがきく気がしている。東川町役場は公務員と言いつつ、民間企業的な性格が強いと思っている。若い世代で入ってきた人は公務員になりたくて入ってきている人が多いが、イベントや事業に関わることで民間的な発想へと意識的に変わってきている。
- 役所では定時になったら帰るのが一般的だが、うちではまずない。21時、22時までは電気がついていて、誰かしらは業務を行っている。職員の忍耐力が鍛えられたのではないだろうか。
- イベントに関わることで、いろいろな人の協力があってイベントが成り立っていることを知り、自分だけでは何もできないという意識が生まれる。それが住民へのサービス向上につながっている。

－ 観光面には、何か効果が生まれているか？

- 事業が始まった当初は、写真家を天人峡や旭岳温泉に泊めていたが、交通の便のこともあり、現在は旭川に泊まってもらっている。それでも、リピーターとして来てくれる人たちは増えていると思う。
- フォトフェスタ・ふれんずで来た方も、町の魅力にふれて、さっそく東京から友達を連れてくると言っている。町を知ってもらうことは観光客の増加につながっており、これだけの人の動きがあることは商店街の活性化や観光業の活性化になっている。また、わずかではあるが税収のアップにもつながっている。

－ 企業誘致に効果を及ぼすことは？

- 現在は様々なメーカーに工場誘致を呼びかけているが、なかなかスムーズにはいかないのが現状である。水が売りのまちなので、製麺工場ができるなどはあったが、写真関連の誘致はできていないので、なんとかしたいと思っている。

5. 現在の課題、将来のビジョン 等

- 写真の町を傍から見ていた部分では大雑把にし
か見えなかったものが、実際に行ってみるとこれだ
け大変な思いをしながら準備をしていることが分か
った。傍から見ると、イベントだけやって、イベント
が終われば楽になるのだらうと思っていたが、1年
かかってこれだけのイベントができていたことが見
えてくると、新しい事業の展開としても、なかなか
厳しいことは分かっている。
- 写真甲子園は出場校が20校となり、応募校数も
403校で過去最多だったが、応募校数をもっと増
やす策を考えてさらに知名度のある大会にしてい
きたい。
- 写真フェスティバルは、今はまだプロの写真家の
イベントになっているが、もっと住民が気軽に関わ
れるような事業展開を考えていきたい。
- 百日のお祝い・傘寿のお祝いに記念写真を撮っ
てもらう事業を行っているが、そのようなことも写真
の町の事業として増やしていきたい。住民にもっと
理解が得られてこそ写真の町ということができると
で、より多くの住民の理解を得られるような企画を
工夫していかなければならない。
- 写真文化を、イベントだけでなく、まちづくり、ひと
づくりに活かしていけるような政策を考えていかな
ければならない責任は感じている。町の名前の前
に「写真の町」とついているので、写真の町課の課
長としては、外にも内にもPRするのが役目である。
新たな展開までいけるかは分からないが、現在の
事業を展開しつつ新たな事業へと発展させていき
たい。
- 韓国の寧越(ヨンウォル)郡との文化交流協定を結
んだり、中国の作家のギャラリーの視察を行ったり、
キヤノン中国の支社長らが30人ほどで東川町に視
察に来たり、写真の町としての国際交流も展開し
ていければと思っている。
- いろいろな人脈を築き、写真の町としてPRを行っ
ていきたい。経済でつながっているとどうしても利
害関係がでてきてしまうが、文化は人と人とのつな
がりである。町民との接点ももちろんだが、文化に

よって人脈を作り、それを活かしてまちにプラスに
なることを行うセクションが写真の町課だと思っ
ている。

6. 文化・芸術を活用した地域活性化について

- 自分が写真の町に住んでいるということを誇りや
自慢に思う意識はあるのではないかと。また、写真う
つりのいいまちづくりを考えているので、自分ので
きることから環境を整備していこうという動きが生
まれている。100パーセントの人間が賛成している
とは思っていないが、理解してくれている方の意識
や行動は変わってきている。
- マスコミに出ることも多くなったので、東京に行っ
たときに、通常は旭川から来たと言う方が理解は早
いが、「旭川の隣にある写真の町、東川です」と言
うと「写真の町、知っているよ」と言われることが多
くなってきた。そういうことが積み重なり、住民にこ
の町にいてよかったなという気持ちが生まれてきて
いる。
- 写真の町のインパクトはここ10年くらい前から表
に出てきたと考えている。効果としては、まちの人や
職員に誇りがでてきたこと、人がたくさん訪れるこ
とによる活性化、観光面へプラスに働いていることが
挙げられる。
- 民間の力を借りて行っている事業なので、企業関
係の方がどんどん来てくれている。そのことで企業
誘致など違った展開になっていく可能性も持って
いるのではないだろうか。
- 写真の町だからということだけでなく、東川町がも
ともと持っている魅力を見て、東川町に定住してく
れる方もいる。その人たちと写真の町との直接的
な関係はないかもしれないが、写真の町に関連す
るイベントによって町の知名度が上がり、町を知る
人が増えた。その中で、陶芸家やクラフト作家が
移住してきて、20年ほど前に「クラフト街道」とい
う通りもできた。

(3) 事業担当者へのインタビュー

日時:2011年7月31日(日)14:00~15:00

会場:東川町役場2階応接室

対象:吉里演子、今野裕太(写真の町課)

1. 自己紹介

吉里(以下、「Y」):高校3年のときに、2005年の写真甲子園第12回大会に近畿ブロック代表で出場した。大学に入ってから、毎年ボランティアとして東川町を訪れていた。卒業のタイミングで、東川町文化ギャラリーで人材を1人募集するということを知り、大学卒業と同時に東川町へ移住した。

大学の卒業制作で、「自分の中のふるさと」というテーマの中で数点、東川町を題材に写真を撮った。年4回ほど訪れ、東川町のお宅にホームステイさせてもらいながら長期滞在をする中で、様々な人と知り合った。その中で、イベント時だけでなく、普段の町の人の姿を見て、素朴にこの町を愛していることが分かった。私は大阪出身で、地元にも愛着があったが、訪れた人に良さを分かって欲しいというほどではなかった。生活の中で、人々が自分の町に親近感を持っているこの町に住みたいと思った。そこで、ボランティアをしながら、住みたいとアピールし続けていた。

大学で学芸員の資格を取得したが、ちょうど東川町に写真作品の寄贈が数多く寄せられることになり、専門スタッフをサポートする人が必要ということで、写真の町課に勤めることになった。現在は、文化ギャラリーの写真の収蔵や展示、写真フェスティバルの担当をしている。

今野(以下、「K」):生まれは美瑛町で、大学のときは東京で過ごしていた。東京での就職も考えていたが、こちらの職員採用試験を受けたら受かり、将来ずっと住むことを考えたら、自然もあり、実家も近いところがいいと思ったので戻ってくることにした。

いくつかの自治体からどこに就職するか選べたので、それぞれの町のことを調べていたが、東川町に関してはまず第一に写真甲子園に関心を持った。そこで初めて隣の東川町でこんな楽しい大会が開かれていることを知った。

地元の美瑛町は、自然の観光資源が豊富なところで、それを活かしたまちづくりを行っているが、それはあくまで観光資源としての高いポテンシャルを持っていたからできているにすぎない。東川町はゼロ

から創り上げる「文化」をまちづくりに取り入れている。「あるもの」を使うのではなく、「心のなかにあるもの」を使ってまちづくりを行っているところが他にはないと思った。

実際まちに行ってみると、商店には手作りの看板があり、高い建物もなく旭岳もよく見える。それを見たときに、まちづくりを通して写真に写されてもいい町をつくると言っている意味が初めて分かった。いろいろな自治体を見た中で、東川町のまちづくりが一番自分に合っており、また、他の町より突出して面白いと思い、このまちで働くことにした。

ー 東川町に住むことに決めたときの周囲の反応は？

Y:自分が思っている以上に、周りの人に東川町のことばかり話していたようで、移住したことは自然な流れだったのかなと言われた。

ー 来る前と、実際に住んで今の立場で仕事を始めてからの東川町の印象は？

Y:ボランティアをして感じていたのは、まちの人たちが一丸となってイベントに取り組んでいるということ。高校生で写真甲子園に出場したときは、自分のことだけで精一杯で周囲のことがあまり見えていなかったが、ボランティアを始めて、スタッフの様子が見えるようになった。みんなぼろぼろになりながら選手が快適に大会を過ごすことを第一に考えて行動する姿を見て、自分たちはこういう人たちに支えられて、自分のことだけ考えて写真を撮っていたんだということに気付き、そのとき、心から「ありがとう」という気持ち湧き上がってきた。

初めは夏に東川町でボランティアができるだけ満足だったが、何年かボランティアで参加していると、運営を手伝っているが、自分はやはりお客様でしかないことに気付いた。スタッフの方が選手にもボランティアにもとても気を遣っているのを見て、この人たちの輪の中に入って働いてみたいと思った。

実際入ってみると、思っていた以上にハードな現場だが、達成感はとてもあるし思い入れもひとしおである。不安もあったが後悔はない。町民の人も優しく、子育てにはとてもいい環境だし、今後も住み続けたいと思っている。

－写真の町課で働いてみた印象は？

K:平成17年採用で東川町役場に地方公務員として就職した。最初は税務課におり、住民税や固定資産税に関する業務を行っていた。3年前から写真の町課に異動となり、写真フェスティバルと写真甲子園を主催している。税務課のときから、イベント期間中だけの専属スタッフという形でお手伝いをしていたので、どれだけ忙しいものかということは分かっていたが、それでもこんなに忙しいのかということが実際に所属して分かった。終わった後は楽しいが、やっているときは、こんな課に二度と来たくないと思う。それでも1ヶ月くらいするとまたやりたくなる。やっているときは本当に辛い、終わったときの達成感と充実感のために1年間頑張っているのかなと思う。

2. 事業の目的、内容

－東川町が、税金を使って全国の高校生のためのイベントを開いていることを、どのように考えているか？

Y:何をするにも100%の賛成というものはないので、写真甲子園をやることに対して懐疑的な人ももちろんいるし、写真甲子園に対してほとんど思い入れがない人もいる。しかし、写真甲子園に対して思い入れを持って、高校生のために協力してくださる方もいる。外から来た人に東川町の良さを分かってもらうのは大切だが、町の人に東川町の取り組みを理解してもらうことも重要だと思う。東川町が写真の町として写真甲子園を開催していることで、高校生がいい思い出を作って帰っていくことや、写真フェスティバルで、ここでしかできないイベントが開かれていることが、町の人々の共通認識になっていけばいいと思っている。

－写真でまちづくりをする際に、写真を用いる特性とは何か？

Y:「リアルな今」を残せることだと思う。今年、写真甲子園に来た高校生たちが撮った写真は今しか撮れな

いものである。仮に来年に来て、建物や物は変わっていても、自分は変わっているし、何かが絶対に変わっている。今を残すということは次に伝えていくことだと思っているが、それは写真ならではの。人の優しさ、自然の美しさといった東川町のよさを次に伝えていくことに対して写真という媒体は合っているのではないかと。写真甲子園は18年目だが、高校生が撮影した写真のデータはすべてストックされ、ギャラリーで保管されている。

3. 事業の実施体制

K:写真の町課というセクションに配属になって、企業とも住民とも距離が近いということが一番大きく感じたことである。電話がかかってくると、ほとんど民間企業である。これは公務員にとって得がたい経験で、驚きだった。民間企業と接してみると、住民ではない感覚を持っていて、気遣いや会社経営の姿勢など、とても勉強になる部分が多い。それはこの課にきて良かったことのひとつである。会社に行った際には、社の風潮や、理念なども見ることができ、社によってカラーがあることを知った。

住民の方には無償で写真甲子園を手伝ってくれている。「本当は疲れているし、仕事もしているけど、町役場の人たちがこれだけ頑張っているから協力している」と言われたときに、人は心じゃないと動かないんだろうな、ということを思った。そのようなところからも気遣いの大切さを住民の方が教えてくれた。

－写真フェスティバルの写真家と地域との交流は？

K:過密スケジュールの中で、なかなか地域との交流ができていないのは大きな課題だと感じている。今年はできなかったが、滞在中にワークショップを行ってもらうなど、事業を行う上で考えていかなければならない。今年は「出会いの広場」という、自分が持ってきた写真を第一線で活躍する雑誌の編集者や写真家に見てもらってアドバイスをいただけるというイベントを行ったが、まだまだ参加者が少ないので工夫が必要である。

例えば、立木義浩先生は大変忙しい方なので、滞

在期間を延ばしてもらうことがなかなか難しい。しかし、過去には写真甲子園以外の時期に東川町にやってきて、地域住民のポートレート写真を撮って、それらを東川町のギャラリーで展示したこともあったので、そのような企画も今後展開できればと思っている。

立木先生は、実はいろいろなところを見ている方で、写真甲子園期間中に地域のおばちゃんたちが炊き出しをしているところに必ずあいさつに行って交流している。裏方に対して気遣って、交流し、何かを渡すことを忘れていない。そういう点では毎年交流ができていると思う。

－ 写真の町課以外の課は、写真の町の取り組みに対してどのように関わっているか？

K: 全員が、自らの仕事を休んでもボランティアで参加したいというほど写真の町に賛同してくれているわけではないが、町職員としてできる限り配慮して、写真甲子園や写真フェスティバルに無償で働いてください、とお願いはしている。町民の方と同じで少しずつ理解してもらっている。

－ 町長の考え方や行動について個人的にはどのように感じるか？

K: 今の町長は、東川町外に発信する能力が近隣の自治体の町長に比べて突出して高いと思う。どんな方でも名刺交換した後には必ずメールを送り、やりとりをずっと続けることで、町長自らが様々なところとパイプをつくって、職員へと還元してくれる。そのスタンスはとてもやりやすい。町長自ら動いてくれることを知っているのも、なんとか成果として返したいと思っている。心が通じ合っている気はする。

4. 事業による成果や効果

K: 写真甲子園で言えば、住民自らボランティアとして関わることで、必ず何らかのものが町に還元されていると考えている。例えば、吉里が職員としていることは、写真甲子園の大きな成果である。写真甲子園を通じて東川町の魅力を知り、町の職員として町の

ために何かしたいと思って移り住む。住民に直接還元がないとしても、こういう人が生まれて将来的に町に入ってくるのが、東川町にとってのメリットになる。また、我々や住民が還元したことによって、高校生たちが「東川町」という言葉をいろいろなところで言ってくれる。その結果、どんな町なのだろうとまちを見に来る方がかなり増えた。そういう点で東川町の「広報担当」はどんどん増えていると思う。長期的に考えれば、大きな投資なのではないか。

写真フェスティバルも、表立って還元するというのは難しいが、写真家が小学校に行って子どもたちの写真を撮るなど、心の交流が行われている。子どもを育てていく中で、プロの写真家に撮られることで、子どもたちが写真を撮られることに慣れていき、自分に自信ができて写真に撮られても恥ずかしくない人間になろうと心から思ってくれるのではないかと考えている。

形に表れるものではなく、心の中から育てていくということで「写真の町」を宣言している。費用対効果がすぐ現れないのは歯痒いが、将来的にはメリットがあると信じてやっている。

税金を直接町民に還元できていないといわれるかもしれないが、例えば道外にいても、東川町に寄付することで、東川町の特別町民となる「ひがしかわ株主制度」を利用し、そのことで、東川町とのつながりができ東川町を応援する人全国各地に増えていく。町外にこれだけ応援してくれ、多少は寄付をしてくれる人がいるなら、「写真の町」の事業に税金を使ってもいいのではと、東川町民が思えるような構図となっていけばいいと思っている。

－ 住民が写真に撮られるようになって何か変化はあったか？

Y: ホームステイによって、年配の方が高校生から元気をもらっているのではないかと。私自身は甲子園のときにはホームステイはしなかったが、大学のお宅のとき制作を通して知り合ったご家族がいる。そのお宅のおばあちゃんはお高年齢なのだが、私が訪ねるととても喜んでくれて名前を呼んでくれた。後でそのお宅の娘さんに、そのおばあちゃんの名前が

なかなか覚えられず、近所の人の名前を忘れてしまうのだが、私の名前だけは忘れずに覚えていてくれたということを聞いた。

写真の町に関連して来た人のことを覚えていてくれるのはとてもうれしかった。「7月がくると賑やかになるね」と言っている人もおり、写真甲子園を待ちわびている人がいる。写真甲子園で若者が一気にやってくるインパクトは大きいと思う。

まちの人たちも撮られることを楽しみにしていて、「高校生が来るから道に立ってしようか」などと言って期待している人もいる。みんな写真に撮られ慣れていて、写真に自然に写ってくれる。初めは写りたくないと思っていた人も、毎年来るうちに高校生に対して愛着がわいて、撮らせてくれるようになったのではないかな。

－ サポートしてくれる住民について印象に残っているエピソードは？

Y: 写真甲子園出場ときに撮影を通してとても仲良くなった農家の方がいた。写真甲子園後も文通をしており、おうちで採れた野菜やお米を送ってくれた。実際に、町職員として働き始めてからも、事務局に町民の方がたびたび訪れてきて、「甲子園で知り合った高校生とやりとりがしたいので名前を知りたい」と言ってきた。

また、自ら希望したお宅に高校生を受け入れてもらっている。2008年から始まり、毎年やっているお宅もあれば、今年から参加するお宅もある。ホームステイを受け入れるお宅は高校生ととても仲良くなっている。一度ホームステイを行ったお宅は、写真甲子園への思いが強くなっていると感じている。甲子園のために何かしたいと心から動いてくれている。

－ 写真家の竹田津先生から「町の人が、写真は分らないけれど、それを受け入れてくれている」とお聞きしましたが、それについてどう思うか？

Y: 町の人には、芸術的な写真は分からないとよく言うけれど、分からないなりに、「分からないけどこういうのもあるんだ」という視点からの質問を頂いたりもするし、批判的な意見はほとんど聞かない。受け入れてくれていると思う。

5. 現在の課題、将来のビジョン 等

K: 参加校数が増えることだけが写真甲子園の今後の目標だとは思っていない。高校生世代の写真文化を育成することが写真甲子園のひとつの目標だと思っているので、出場できなかった学校にもメリットを感じさせるような大会にならないかな。一生懸命頑張ったけれど落選してしまった学校も、東川町が自分たちのことを考えてくれていると実感できる取り組みができればと思っている。

例えば、地域の本選が終わった後に、作品を審査員のもとに持って行き、講評を受けられる機会を作ることによって、写真の文化や写真の技術を基本から向上させられるのではないだろうか。それぞれの地域でそういったプログラムを行い、不平等がないようにすることで日本全国の高校生の写真のレベルが上がる。東川町がそのことに寄与することで、若年層世代に還元できるまちとなっていくのではないかな。

Y: 私は文化ギャラリーで働いており、今年は写真フェスティバルも担当していたので、今まで写真の町東川賞を受賞された方から寄贈された作品をもっと公開していく環境を整えていき、東川賞を認知度の高い賞にしていきたいと考えている。現在、ホームページに作品をアップしていく作業も徐々に始めている。

－ 写真の町の取り組みに対して無関心な層にどのように働きかけたいか？

K: 事業を100パーセント理解してくれる人をつくることはどのまちでも不可能だと思うが、「写真の町・東川町」として外に発信していることに誇りを持ってほしいと思っている。町全体の誇りを生むために、無関心層のところへ説明に行ったり、反対派が思っていることを知ることによって少しずつ関心を高めようとはしている。

写真の町を掲げて27年目になるが、いまだに根強く「どうして写真の町なんだろう」と思っている方もいるので、理解を得るにはまだまだ時間をかけていかな

ければならない。

文化というのは根付くのに時間がかかる。写真が嫌い、カメラが嫌いという方もいるので、そういう方を納得させるのはなかなか難しい。東川町では授業の一環で夏休み期間中に写真絵日記をつけてもらっているが、写真が嫌いな方にも自分の孫が写真絵日記つけている姿や、高校生が写真を撮っている姿を見てもらい、交流していく中で、「若い世代がこういうことをしているんだから少しは認識してあげよう」という気持ちになってもらえればと思っている。全国から来る高校生が、わざわざ東川町に来て、汗を流し、涙を流し、「東川町って素晴らしい」と思ってくれている姿を見てももらえれば、自分の町は写真を使ってこれだけ素晴らしいことをしてるんだという誇りを持ってくれるのではないだろうか。だから、もう少しそのような姿を見せられる機会を作れればと個人的には思っている。

－ 将来に向けて写真を愛好するひとづくりは行っているか？

K: スポーツ少年団やスクールバンドのように、「写真少年団」というものがあってもいいのではないかと考えていて、そこで写真を撮る機会を増やせればと考えている。生徒全員が参加するものではないが、写真が好きな子がそこに参加し、その技術をクラスに持ち帰ることで、小中学生世代に少しずつ写真の技術や写真の文化普及していくのではないだろうか。

さらに少年団で技術を得た子どもたちが、例えば両親の結婚記念日に写真を撮ってあげるなど、上の世代へと還元される活動を行うようになればと思っている。子どもが写真を上手に撮れるという構図もいつかつくっていきたい。

写真を撮ることだけが東川町の望んでいることではなく、写真を通じて「東川町で生活してよかった」と思ってもらえることが、最終的な目標だと思っている。文化というのは心がすべて。「写真の町」であることが、町民が心からすがすがしい気持ちを持って、東川町で生まれて東川町で最後を遂げることにつながっていけばいいと思っている。

(4) 実行委員長へのインタビュー

日時:2011年7月31日(日)10:00~11:00

会場:東川町役場2階応接室

対象:高木正晴(東川町〈写真の町〉実行委員)

1. 自己紹介

- 東川町生まれ。学生時代は旭川高専卒業後、関西のタイヤメーカーでタイヤの設計をしていた。家業の鉄工所を継ぐために東川町に帰ってきた。私で3代目となる。
- Uターンしてきたときに、私の恩師に、自分の仕事は自分で守りながら、まちが素晴らしい町となるように自分のできる範囲で町づくりに積極的に参加することが、会社勤めとは違うひとつの生きがいとなると言われた。それが今の活動の原点となっている。

2. 事業に参加した経緯、動機

- まちづくりに関わったのは、Uターンしたばかりのときに商工会青年会に入ったことがきっかけである。写真の町が始まる前は、いかに町をPRするかということで、観光PRを行っていた。小樽博覧会や札幌大通り公園に、旭岳に残っている雪を運んで雪だるまをつくり、来場者に特産品を配るという活動を行っていたが、PR効果は薄かった。
- そのときに当時の町長が、札幌の企画会社の持ち込んできた「フォトフェスティバル」という企画をやりたいと言い出した。いきなり写真と言われても、町民とはかけはなれたものでしかなく、なかなか町民の心に入っていかなかった。

3. 事業の実施体制

- 写真の町を宣言した当時は、写真フェスティバル、商工夏祭り、農業祭りという3つのイベントが行われていたが、3つのイベントを個別に行う必要はないのではということで、まず農業と商業の若い世代が集まって「どんとこい祭り」をつくった。そのときは、写真フェスティバルは町がやっているもので、自分たちがやっている「どんとこい祭り」とは別物だという意識があった。
- 全部のイベントが1つになったのは10年前のことだ。

どんとこい祭りと写真フェスティバルの企画委員の半分ほどは同じメンバーであり、時期も一緒だが、今でも予算や企画委員は別である。

ーどんとこい祭りと写真の町事業の関わり方についてご説明いただきたい。

- どんとこい祭りは一般町民が楽しめることをねらいとしている。町民が写真文化は難しいと考えていたので、イベントの中に写真をテーマにしたステージを作ろうということになった。それが町民を引き込むひとつの材料となった。
- この時期、町職員は「どんとこい祭り」と「写真フェスティバル」のどちらかには必ず携わっている。最初は不満もあったが、私は、町職員は「まちづくり株式会社」のトップだと思っているので、彼らが先頭をきって動いていかなければ何も変わっていかないのではないだろうか。
- 予算は最初の段階でおおまかに決まっており、企画委員は、その後の写真の町の事業の詳細を詰めたり、審査員や招待客のアポイントをとったりしている。
- 開会式の仕切りは専門家に入ってもらっている。式典は公式行事なので、ある程度お金をかけてきちんとしたものをするようにしている。そこにいかに多くの町民を呼び込むかというのは企画員の仕事である。
- 写真と音楽のコラボレーションによるコンサートは5~6年前から行っている。写真フェスティバルと写真甲子園の様子を記録しておき、巨大スクリーンを作り音楽と写真を合わせて流しており、町民が写真の町の取り組みを知ることができる。

4. 事業の感想、参加者の変化

- 農作物にしても、温泉や家具にしても、「もの」として考えたら、他の地域との大きな差別化は出来ない。だからこそ東川らしさという部分を出していかなければならない。東川町に関しては「もの」ではなく「文化」が東川らしさだということで勝負している。

- 途中で町長が変わり、見直しを行ったが、結局は「もの」ではなく「文化の香るまち」を本物にしなければならぬということになった。小学校では写真の授業があり、ギャラリーを借りて子どもたちの写真展を行うなど、徐々に面白い形になっている。
- 例えば、農産物には生産者の写真がついている。「写真の町」としての東川のブランディングができているからこそ写真が生産物のアピールに一役買っている。ただ、写真の町の事業が行われている時期は農作業が忙しく農業従事者が直接関われないことが多いので、その点は課題である。
- 最初は、いろいろなところに視察に言っても「東川町」と言えなかった。それは東川町は知られていないという自覚があったからだ。町職員でさえ「旭川市の隣の町です」と言っていた。それはおかしいだろうということで、「北海道旭岳の麓の町の東川です」と言っていたが、今では「写真の町・東川です」と町民が言えるようになった。この近隣で自分の町の名前と特徴を最初に言う町はなかなかない。みんな「旭川の隣の」と言っている。自分の町に対する町民意識をつくれたのは大きいのではないかな。
- 「町民賞」という賞があると聞いた。
- 町民賞は写真甲子園に出された写真の中から好きな写真を1枚選んで町民が投票するというもの。町民賞が始まってから何年も経つ。今年の町民賞の結果と優勝校が合致していることを考えると町民もだんだんと見る目が上がってきていると思う。第1ステージ、第2ステージ、第3ステージの写真がどんどん変わっていくのを町民もきちんと分かっている。最初の組写真を見て優勝校を予想したりするが、3年連続で的中させている人もいる。
- まちづくりに文化や写真を使う意味を、どのように考えられているのか。
- 写真そのものではなく、家の周りをきれいにしようとか、身だしなみをきちんとしようとか「写真うつりのいい」という点で町民は分かっていると思う。写真うつりのいい町をつくるために、写真うつりのいい人がいる。写真うつりのいい人というのは、好感をも

たれるとか、人の心が分かるとか、心遣いができるということではないだろうか。あくまでその人の一部が写真という「文化」になっている。その中に「東川町」というものがある。

- 写真フェスティバルの受賞者は世界でも活躍されている方々である。子どもたちにとって大切なことは、世界の本物を目にすることである。それを高尚なものとしてではなく、日常的なものとして出会える機会があるということが重要である。そのような環境の中でギャラリーも気軽に訪れることのできる場として機能してきている。
- 過去30年間の東川町の変化を、どのようにご覧になっているか？
- 事業を持ち込んできたのが企画会社だったため、専門的過ぎて町民には手も足もでず、反対の声も挙がっていた。図らずも企画会社が倒産したことで、企画委員が自分たちのものとしての責任を持ち始めた。
- 最初は写真のことが全く分からず、受賞作品も本当にいいものなのか分からなかった。受賞作家のところに評価について直接聞きに言ったところ、東川賞の評価を詳しく教えてもらい、そういうものかと納得することができた。
- 毎年事業が終わると反省会を開き、事業のあるべき姿を話し合っている。最初のスタートの頃は企画委員は名前だけであり、関わり方に満足できなかった。企画委員は、ボランティア活動と同じで自らが進んでメンバーとなっている。だから、事業に対する達成感や喜びがないと継続できないと思う。
- 行政との一体感がでてきた。普通はまちづくりに関する事業は行政にまかせっきりののではないだろうか。行政も民間もやらされているという雰囲気はなくなってきた。

4. 現在の課題、将来のビジョン 等

- 参加する側と仕掛ける側の、より一層の一体感を作っていきたい。やってもらうことが当たり前ではなく、自分たちのことは自分たちでやるような意識を

持てるコミュニティができ、いつまでも同じ人間が引っ張っているのではなく、どんどん人が変わっていくようになってほしいと思っている。やはり同じ人間でやっているとマンネリ化してしまう。

- 熱心に支えてくれる人がコミュニティの中の消耗品になってしまっはいけない。そんな姿を見たら次の世代が関わろうとは思わなくなる。常に後継者を作って若い世代へ引き継いでいくことが重要である。順々に各行政区でリーダーを出していくなど、いろいろな人が携われる仕組みを考えていかなければならない。

(5) 写真家へのインタビュー

日時:2011年7月29日(金) 11:00~12:00

会場:東川町文化ギャラリー

対象:竹田津実(写真家、獣医)

1. 自己紹介

- 東川町に住んで7年目になる。その前は道東の小清水町に住んでいた。
- 自分は写真家と名乗るべきなのかどうかはよく分からない。写真でお金が入るようになると周囲が肩書きをつけたがる。ある日気がついたら、出版社が「写真家」という肩書きをつけていた。そのうちに文章を書くようになったら、「エッセイスト」という肩書きがついていた。「写真家」や「エッセイスト」という肩書きは他者が勝手につけたものであり、自分では、本来は獣医であると思っている。
- 写真は記録だと思っている。長い間キツネを調査して記録をつけていたのだが、メモを取るために双眼鏡から目を離してしまうと、その間の観察ができなくなってしまう。そこで、見たものを記録できないかということでカメラを導入した。何十年間も記録つけていたら、出版社のほうから「これはいい写真だ」と言われて写真集を出すことになった。生態学的には使い物にならないと思っていた写真がいいと言われたので、何がいいのか全然分からなかった。
- だから「写真とはなにものだ」という大上段なことを考えたことはないし、これからも考えることはないと思う。しかし、写真の持っている「記録」という機能は非常に大事にすべきであり、その部分でのお手伝いができるのではと思い、関わっている。

2. 事業に参加した経緯、動機

- 「写真の町」を宣言する前年に、町職員の方が手伝ってほしいとやってきた。その頃はまちおこし運動の全盛期であり、私が道東にあるオホーツクの村で行っている人工林を天然林を育てるプロジェクトに携わっていたこともあって、声がかかったのだと思う。手伝えることがあったら手伝いましょうということで、東川町と関わることになった。
- もう29年も経つので、東川町とは長い付き合いである。一度だけアフリカに行っていたため出られな

かったが、それ以外の写真フェスティバルにはすべて参加している。

- アートとしての写真を撮っているわけではないので、審査をするときにアートの世界が登場するとどう解釈したらいいのか困ってしまう。しかし、アーティスト志向の写真家が多い中で、アートを志向しない私みたいな人間を審査員として残したいということが、町の意向なのかもしれない。
- 普通の人間の感覚をどこかで参加させたいと思っている。田舎だからかもしれないが、文化というとみんなひれ伏してしまう。そこまでひれ伏さず、生きている人間の言葉として捉えてもいいのではないかということを思ってもらうのが、自分の役目だと思っている。
- 文化と文明を整理すると、文化はどちらかという方言で、文明は標準語のようなものだと思っている。田舎には特有の文化的なものがとても多いが、田舎が恥ずかしいから標準語に近づこうとしてしまうところはある。そのような動きには抗っている。文化というのは各地に特殊なものがあって、それらが集合離散を繰り返すことが根幹となっていると考えている。全てが標準語になってしまっただけでは仕様がなだらうと思っている。
- 田舎には独特の世界があって、文化人は特別な人間だと勝手に思っているところもあり、写真の町に対してもいろいろな声が挙がる。その人たちの気持ちも分かるが、写真家でもあるので微妙な立場である。いつも批判的にはなっているがそれも役目だと思っている。
- 全てがアートであると、何か分からないことを勝手にやっているやつだと思われ、地元からは総スカンになるだろう。地元とアーティストの中間にいるような人がもう少し増えると楽になるのだが。反発して田舎が孤立するか、擦り寄って都市と同じになるか、どちらを選択するのかということを考えなければいけない。

ー 他で行われている写真コンペや写真によるまちおこしなどと、東川町の違いは何か？

- 他で行われている事業では、写真家の大物が関

わっており、彼らの記念館を柱にすることが多いのではないだろうか。しかし、東川町には大物は誰もいない。大物がいないことでエネルギーの結集に手間はかかったが、そのぶん強いものになっている。

- 大物がいると彼らに「おんぶに抱っこ」になってしまい、彼らが亡くなると後継者の動きに左右されてしまう。また、文化を創造するということに関しては、蝦夷の開拓の歴史と同じように、庶民が動く中で出てくるものではないかと思う。
- 審査委員長の立木義浩氏は「写真家を育てたいとは思わない」と言っている。「将来結婚したときに子どもを背負って写真展を見に行く人を作ろう」というのが合言葉になっている。
- この言葉に共感して企画を手伝っている。写真少年・少女がこの4日間で燃焼し尽くして、その後写真を撮らなくなっても、ある日、街角の写真展にふらっと入っていく。そんな人を作りたい。だから、写真の面白さをどのように伝えるかということだと思っている。

3. 事業の感想、参加者の変化

- 高校生というのはまだ子どもであって、新しいものをどんどん取り入れて自分を変えていく一番いい時期である。わずか4日間でこれほどに変わるのか、と驚くような変化を見せる子どもも毎回現れる。青春の一時期に、ある意味の「燃焼」を提供することで、彼らにとって満足なものを与えていると思っている。
- けなし言葉の語彙はあってもほめ言葉の語彙はなかなか持ってなくて、つい、けなししてしまうことも多い。あのとき、こういうふうに誉めてやればよかったな、と思うこともあるが、誉めて間違いを起こされても困る、とも思う。
- 私のエッセイを読んだ漁師の息子が、「写真家になりたい」と中学卒業と同時に家にやってきた。一晚説教をして、漁師をやりながら写真を撮ればいいと追い返した。今は漁師をやっているが写真もと

ても好きだそうだ。そういう世界が写真甲子園の中で繰り返されていると思うと、余計に、かけた言葉を改めて考えてしまうこともある。

ー 東川町の魅力は何なのか？

- 18年間、写真甲子園を開催し、町の人々や自然を撮っていると、みんながこの町のアルバムを作っているというイメージが無意識に出てきている。脈々と受け継がれてきた写真甲子園の写真が土地の具体的な記憶となっていく。それらの写真データは、とてつもなく大きな財産であり、それを生み出すプロセスに関わっていることを写真甲子園に参加する子どもたちも徐々に自覚してきている。だから、町をよりきれいに、より素晴らしく撮りたいという思いも生まれてくる。
- 今までの作品を作品集として出そうという話もあがっている。それが具体化したらもっと強い思いとなってくるのではないかな。
- 自分たちのイメージで自分たちを主人公にして写真を撮っていて、「北海道」というのが土俵にあがっていない組が毎年いる。部屋の中で作品を撮ることはアートなのかもしれないが、何のためにここに来たのか分からない。地元の間人はみんなそう思う。審査員の中でそれを言うのは自分の役割だと思っている。
- 理論で何かできると思われているが、理論では何も変わらない。やはり時間、年月である。年月はそこに膨大なエネルギーを蓄積している。今となつては「写真の町」を宣言したことは住民にとっては普通のことであり、イベントは年中行事となっている。やっとな特別なものではない、自分たちのものになってきているのではないだろうか。
- 町職員もイベントの準備は大変と言いながらも、半分楽しんでいる面もある。いい感じで安定してきたと思う。これが文明化してしまうとつまらないものになる可能性もある。そうならないような仕組みを用意しなければいけない。

ー 変化のきっかけとして、札幌の企画会社が離れたことがあったのか？

- やりはじめたときは町長も含めて誰も分からなかつ

た。企画会社の仕事は、東京都写真美術館にやってくるような「写真好き」のセンスを、人口7,000人のこの町に取り入れようとしたものだった。それはおかしいとずっと感じていたので私は批判的な態度をとっていた。この町が請け負うものとしてベターなものを常に考えていかなければいけない。

- 自分たちのレベルを高くしようと町の人々は努力したが、結局、写真のことが分からず限界にきていた。そのときに企画会社がなくなり、こだわらなくてもいいのではないかという流れになり、町の独自性が出てきた。
- レベルの高い「写真」と自分たちの理解できる「写真」とのせめぎあいはずっと続いていたと思う。水と米、全部が融解しているような「おかゆ」にはなっていないけれど、米粒や具材が残っているが食べやすい「おじや」みたいな感じになっている。
- 前は、分からないのは自分のレベルが低いからだと思ってしまっていたが、今は分からないものは分からないと思えるような雰囲気が多少ある。それなりに芽は出ていると思う。

－「分からない写真」を見せてきたことによってインパクトはあったのか？

- あると思う。世の中には分からないものがあっていいということをみんなが静かに思い始めたことはすごい世界である。
- それまでは拒否しかなく、なぜそれに金を出すのかということはいつも選挙の争点となっていた。しかし、世の中には分からないものがあって、それをいいという人もいるということだけは、この町の人々はみんな知っている。そういう点ではすごく面白い町になっている。それを成し得たのはやはり年月である。やはり文化は1、2年でやれるものではない。
- 役に立たないことが当たり前のもので存在するのが一番豊かなことである。役に立たないものが排除されたらこんなつまらない社会はない。文化がどのようなものか追求する必要はないと思うが、いつの間にか漠然と自分の体に入り込んでいるというのはいいことだと思う。いろいろなところを見て

きたが、東川町はそういう意味で成功している町ではないかと思う。

－人間の内面が変わったことは大きいのではないか？

- 荒木経惟氏の女性のヌード写真を文化ギャラリーに飾ったときに、小学生を入れるかどうかで議論になった。町職員だけでなく議会でも話し合われた。そこで初めて、荒木さんの作品は文化ではないのかということになった。今年の写真甲子園ではヌードが一点あるので相当な抵抗があるのかと思いきや、誰も抵抗しなかった。人口7,000人の町で、当たり前前の世界を壊すというのはいいことである。

－写真の町となってから、町長が何度か交代しているが、それによって変化はあったのか？

- 一期前の町長選挙で、写真の町の施策の見直しを掲げた候補者が選ばれたが、どのように見直すかが全く示されてなかった。そのときに、この事業は見直すものではなく、終了か継続かの判断しかないということに気付かされ、悩んだ。そのことが、なぜこの事業をやっているのか考える契機になり、内部で相当議論された。結局、終了する理由はなく、そのまま事業は継続されることになった。

4. 文化・芸術を活用した地域活性化について

- 町長や行政は、写真を用いることで、人々が町を訪れ、地元の産物が売れることを夢見たと思うが、それが見事に外れたところが、私としてはうれしいことだと思っている。
- 地域づくりに文化を取り入れても、単純な経済効果は生まれるものではない。北海道は農業の労働賃金が高いので、安い賃金でも工場で働くような労働力はなかった。そのため、道内において工場誘致で成功したところはほとんどない。別な世界を考えないといけない。
- 日本の経済は「隣の芝生の経済」だと思う。自分がこういう世界を創りたいと思っていまの世界を創ったわけではなく、企業に巧妙にデザインされた中

で社会は誘導されてきた。だから本当の意味での「経済」というものは、全然ないと考えてもいいのではないか。それが本当の意味での文化であると思う。町長や行政の経済的な思惑が外れたことが、文化によるまちづくりがうまくいったことの表れなのではないか。

- 事業の立ち上げに、写真に対する純粋さを持って、清く正しく美しくある人がいたからこそ出発できた事業ではある。それがうまい具合に変わっていった。様々なところでまちづくりに関わっているが、「正義」という言葉が登場するのが一番困る。正義には抗えない。
- 町職員が様々なことに耐えた結果、今の東川町があると思う。誉めるとすれば、ここの職員を誉めたい。町長や役場の職員のことをよく知っているわけではないが、彼らはよく勉強している。外から入ってきた情報を組み立てて構築し、自分たちのものとしているところは感心する。
- 初めの志は高いほうがいいと思う。どんどん妥協していく中で、最初の形が分からなくなってしまっても、初めの志が高ければ崩れるのに時間がかかる。志が低ければすぐに崩れてしまう。

ー 東川町の今後の可能性について、お考えを聞かせてほしい。

- このまま写真の町として続いていけば、写真関係の工場や写真の専門学校が来るなど、企業が擦り寄ってくる可能性もある。そうなると当初の思惑が成功することにはなるだろう。短期的な経済効果はなかったが、そこに投下されたエネルギーは時間を経ることで蓄積され効果を発揮する。
- 行政は常に短期決戦で成果を見てしまう。時間に対しては、清く正しく美しくではなく、ああでもない、こうでもない「のらりくらりと」耐えるしかない。しかし、そうしていれば他者が評価してくれる。文化を文明にしない手前のところでいかに抑えていられるかということである。

(6) ボランティアへのインタビュー

日時:2011年7月29日(金) 10:00~11:00

会場:東川町文化ギャラリー

対象:長谷川明(フォトフェスタふれんず)

1. 自己紹介

- 出身は大阪で、現在も大阪に住んでいる。中学時代から写真を撮りたいと思っていたので、「映像デザイン科」という学科のある大阪市立工芸高校に入学した。写真部に所属し、2008年に写真甲子園に出場した。卒業してからも写真を続けたいと思い、今は専門学校の写真学科に行っている。
- 写真甲子園に出て人生が変わった。写真甲子園の初戦のための写真は3、4ヶ月かけて完成させるため、その間に部員同士に、ライバルであり仲間であるという関係が生まれる。その過程を経て、北海道で様々なものが一気ににはじけ飛んだ。
- 写真甲子園に参加したことで、やっぱり写真っていいなと思った。それだけでなく、今までの人生をもっと楽しめばよかったとさえ思った。世の中にはこんなに楽しいことがあるんだということを、写真甲子園を通じて感じる事ができて、幸せだと思っている。
- 予選の時期は写真のことだけしか考えていなかった。当時はそれがしんどいと思ったが、後から考えると、楽しかったな、と思える。何回でも挑戦したいという気持ちになる。そう思えるのはやはり仲間の存在が大きい。
- いろいろな人への感謝の気持ちがある。写真を撮ることで、いろいろな人に支えられていることに気付いた。

ー 写真甲子園・写真フェスティバルで何を担当したか？

- 去年はスタッフとして写真甲子園に関わった。「選手係」という、現地入りした選手のお世話をする係をしていた。私が出場したときは、他校へのライバル意識が強く、あまり他校と交流せず自分たちだけで固まってしまっていた。しかし、今の出場者は交流が盛んで、みんな仲が良く新しい友達もできているようだ。自分ももっと他校と関わっておけばよかったと思った。
- 今年は「フォトフェスタふれんず」として参加している。大阪で専門学校のOBが運営してきたギャラリ

ーを、今は自分が引き継いで運営しているのだが、その運営メンバーの中に2年前にフォトフェスタふれんずのメンバーだった人がいた。展示や作品の扱い方などギャラリー運営に活かせることが学べるから「行って学んでこい」と言われたことが参加のきっかけである。また、今年の写真の町東川賞を自分の通う専門学校の先生が受賞していることもあって参加を決めた。

2. 事業の実施体制

- フォトフェスタふれんずは、受賞作家の作品の額装や設営など、展示に関わる仕事全般のサポートを行う。とても貴重な作品が目の前にあって、それを扱うことの緊張感は半端なものではなく、かなりの精神力が必要とされる。
- インターネットで募集をしており、それを見て応募するようになっている。定員は15名で多ければ抽選になる。今年は少し多かったようなので、選ばれたときは嬉しかった。
- 朝起きてギャラリーに行き、夜まで仕事をするという生活である。滞在期間は10日間ほどで、展示の準備は1週間。最後の2日間はイベントである。作業時間のかかるとても大きな作品もあり、作家が設営を行うときは時間がかかることが多い。いつのまにか時間が経っている。作業に際しては、展示のディレクターなどが、「指導員」としてフォトフェスタふれんずを指導してくれる。
- 写真甲子園のスタッフとフォトフェスタふれんずのどちらも経験しているが、仕事内容は全く異なるし、互いの交流はない。
- 報酬は出ないが、普通はボランティアに任せない仕事をやらせてもらえるので、とても勉強になる。実際の展示が作られていく様子を見ることができて感動もしたが、自分が知らないことばかりだったので戸惑いもあった。
- 専門学校で展示を行うことはあったので、額装はやったことがあったが、自分の作品なので、ここまで気をつけてデリケートに扱ったことはなかった。

ここで写真の扱いを教えてもらい、写真はデリケートなものだということが改めて分かって、自分は作品を雑に扱いすぎたと反省した。

- プロの素晴らしい作品を間近で見られることはもちろん、作家の作品に対するこだわりを直接見ることができるのはいい経験である。

－ フォトフェスタふれんずには、どんなメンバーがいるのか？

- 各地から様々な人が来ている。みんな写真に興味を持ってこの町に来ている。ここに来るまでは、専門学校生や大学生が多いと思っていたが、会社員の方もいて幅広い。今まで知り合うことがなかった人と出会えたり、他の場所で会っていたら今回のような付き合い方は出来なかっただろう。一緒に生活して、一緒に展示の準備をしていく中で輪が広がっていくのだと思った。
- 宿泊所でお互いの写真を見せ合っている。こういう考え方もあるんだ、こんな写真を撮っているんだ、と様々なことが刺激になる。
- 普段、学校での授業や展示を見に行く以外では、人の作品を見ることも、自分の作品を見てもらうこともない。いろいろな写真を見られるだけでなく、その人から直接写真のコンセプトを説明してもらえことは面白い。作品そのものも刺激になるし、その人の写真に対する考え方も刺激になる。

－ 東川町の町民との接点はあるか？

- 東川町に来るようになって今年で3年目だが、東川町に住んでいる人たちが、写真甲子園や写真フェスティバルに来る人のために、ご飯を作ってくれたり、困ったことはないかと聞いてくれたりする。こんなにもやってくれることに、感謝の気持ちでいっぱいだ。
- 高校の先輩の吉里演子さんが、写真甲子園をきっかけに東川町が好きになり、移住して町役場で働いている。吉里さんが頑張っている姿を見て、こんなにもイベントに対してパワーを注ぐことができる町はすごいと思った。

－ 吉里さん以外にOB、OGは参加しているか？

- 私が写真甲子園に出場したときに同じチームだった子が、今年の写真甲子園の選手係のボランティアをやっている。また、今年の大阪市立工芸高校は本戦出場を逃してしまったが、どうしても東川町にきたい現役のメンバーがボランティアで参加している。

－ 写真を撮っている人の中で、東川町や写真甲子園のことが話題に上ることはあるか？

- ボランティアをやっていたという人に会ったことがある。友達の友達がフォトフェスタふれんずで、初めて会ったが親近感が沸いた。

3. 活動による成果や効果

- 写真甲子園や写真フェスティバルでは、町の人たちが、カメラを掲げているとどんどん話しかけてくる。東川町の人には写真甲子園や写真フェスティバルで来ている人を受け入れてくれる。
- 写真甲子園や写真フェスティバルに関係する人だけでなく、いろいろなところで写真を撮っている人が来て、作品を見て自分も参加したいと思って、再び東川に来るようになったら楽しいと思う。
- 自分が写真甲子園に出場したときは、他校とのふれあいが少なかったのも、その後連絡を取り合っていないが、チーム内ではよく連絡を取り合う。
- 母校の写真部が写真甲子園に応募するのは18年目になり、ひとつの区切りとして作品集を出すことになり、それと同時に写真展も開催しようということになった。OBや現役生が集まって展示に向けて夜な夜な準備をして結束が高まった。みんな仲がいい。

－ 大阪で写真を撮ることと、東川町で写真を撮ることの違いはあるか？

- 大阪では見られない風景が見られることはもちろんだが、東川は写真の町を掲げていて、ここに来れば町全体で写真とふれあえる。大阪でも写真は見る事ができるが、町全体という感じはない。

－ 長谷川さんにとっての東川町とは？

- また来年も来たいし、住みたいと思う気持ちもある。
東川の町の人には本当にお世話になったし、恩を返したいと思う。毎年毎年、行きたくなる。
- 私にとって東川町は「本当にありがとう」と思える町。
写真甲子園をやってくれたことも、写真甲子園に出場できたことも、フォトフェスタふれんずに参加させてくれたことも、町の人も、すべてに「ありがとう」と伝えたい。

(7) 参加者へのインタビュー

日時:2011年7月30日(土)10:00~11:00

会場:東川町役場2階応接室

対象:山下学(宮城県柴田農林高校写真部)、宮城県柴田農林高校写真部生徒3名

1. 自己紹介

山下(以下、「Y」):柴田農林高校での教員歴は13年目で、科目は農業を担当している。この高校に来て初めて写真部の顧問になった。もともとコンピュータが好きだったので、周辺機器としてデジタルカメラには興味はあったが、写真を撮ったり、指導したりという機会は一切なかった。初めの5、6年は前の顧問のやり方に倣ってやってきたが、他校の顧問の先生と話すうちに徐々に写真が面白いと思うようになってきた。

生徒A(以下、「A」):柴田農林高校の写真部が有名だったのは知っていたが、写真部か家庭科部で悩んでいた。家庭科部が週2回しか活動していないのに対して、写真部は毎日活動していたので、毎日部活をして充実した高校生活を送りたいと思ったので写真部に入った。

生徒B(以下、「B」):高校の体験入学のときに、山下先生が「写真というのはみんな同じ土台でスタートしていて、身体能力とは関係なしに努力次第で先へ進めるものだ」とおっしゃっていたのを聞いた。今まで運動部に所属していたが、周りの人たちに追いつけず苦勞していた。写真なら身体能力に関係なくついていけるので、写真部に所属することに決めた。

生徒C(以下、「C」):前からカメラには興味があったが、高価なのでなかなか手が出せなかった。高校を選ぶときに柴田農林高校に写真部があることを知って、ここに入って写真部で活動しようと思い、この高校を選んだ。

ー 卒業後の進路について

A:子どもとふれあうのが好きなので、子ども写真館(子どもが対象の写真スタジオ)に勤めたいと思っている。

Y:写真部の先輩で子ども写真館を受けている人がいたので、彼女もそれを見てそこに行きたいと思ったようだ。

B:私も内心はカメラスタジオに勤めたいと思っていたが、そちらは一般求人になってしまうので、高校求

人の採用が終わった後に、決まっていなかったら受けるようになると思う。

C:まだ1年生なので考えられていないが、就職したいとは思っている。

2. 事業に参加した経緯、動機

Y:2006年頃の写真甲子園から、予選の結果が分かるようになった。結果を見たところ、地区の決勝まで残っていたことが分かった。当時の生徒たちと、「これは面白いじゃないか、もう少しけるんじゃないか」ということになり、翌年度から本格的に取り組み始めた。前年に地区の決勝まで行った3年生が、本選に残ることは残念ながらできなかったが、1年生がよい作品を撮り、2007年に本選に行くことができた。一度出たら大会の魅力が分かり、それ以来、部としてこの大会に積極的に取り組んでいる。2008年は本選に出ることはできなかったが、2009年、2010年と連続で本選に出させてもらっている。

私自身もとても夢中になっていて、部活だけしかしていないと言われぬように他の仕事をしているというくらい、部活動が柱になっている。部活動では優れた成績を残すことはもちろんだが、いろいろな活動ができた、生徒の成長が見られたりする。そこが部活動の面白いところだと思っている。

ー 過去に経験したプログラム、例えば高校の総合文化祭との違い何か?

Y:総合文化祭はすでに作ったものを置いて飾るだけで、交流会や撮影会の時間も非常に短いので、自分たちと同じ県内の人と交流する程度で終わってしまう。しかし、写真甲子園は参加者が、ゼロから始めるという同じ条件の中で何日も過ごす。参加者も必死に取り組んでいるが、そのバックには町の協力があり、スタッフも公務員のイメージを超越するような働きをしている。表向きに大会に関わっている人以外に関わっている人が大勢いて、その見えないところの層の厚さが大会の良さを作り出していると思う。生徒たちも3回の審査会を経て、だんだん交流するようになっていし、顧問は顧問で集まって話をして

いる。そのような姿や写真甲子園のクオリティの高さは他の大会では見られない。だからこそ生徒もはまっているが、実は顧問たちが一番はまっているのではない。単なる「大会」、「写真を撮る」というものでないのかなと思っている。

今回の写真甲子園で一緒になった埼玉栄高校と、復興応援プロジェクトを行うことになったり、写真甲子園に参加している他校の活動に影響を受け、様々な活動を始めてみたり、他校から学ばせてもらうことも多い。大会で生まれた輪がよい輪となっていくことも、コンテスト主観的なプログラムとは一線を画すのではないかな。

優勝、準優勝と名前がつくと勝ち負けにこだわってしまいがちだが、写真甲子園に関しては、終わったあとの交流会で勝ち負けを超えて交流している様子が見られる。勝った子も負けた子も閉会式で泣けるというのはその表れではないかな。

ー 県内の写真部との交流について

Y: 県内の学校はまだ写真甲子園に出ているところが少ないし、おたくは強いから、と敬遠されているところがある。本校の写真部の生徒たちにとっては、県内よりも他県の写真甲子園に参加している高校の方が、親近感が湧くのではないかな。それは、県内のイベントが大会的なものばかりで、顧問の先生が賞状をもらってきて学校で見せたいという思いが強く、交流がないからである。意味のある講習や生徒たちがやりたいものをやっていたら結果は自然とついてくるものであるし、賞状が欲しければ、雑誌に応募するなどやりようは他にいくらでもある。そうではないものをやりたいが、なかなかできていない現状がある。今回、震災をきっかけに出場した県内の被災校が写真甲子園を広めるきっかけになればと思っている。

B: 他のコンテストや大会は「出たら終了」という感じで、作品は提出するだけでどこまで上にいけるか、というもの。写真甲子園はそれらとは違って、今まで自分たちが撮った写真を選んでいただいて、この写真を撮る学校だったらやってくれるんじゃないかな、という期待をもらって、さらに8枚の写真新しい状

況の下で作っていく。それは他の大会とは違うと感じるところである。

A: みんなスタートが一緒なので、初めは敵のように感じてしまうが、審査会を経るごとに他校から学ぶことが多いことに気付かされる。たしかに勝ち負けもあるけれど、結果はどうであれ、一緒に戦ったということで、同じ仲間になることができる。それが他の大会とは違う点である。

3. 事業の感想、ご自身の変化

A: ファイナルの作品を撮る前日に、夜中までみんなで話し合った。『ちゅっ』というテーマが決まってからどのように構図を決めるか、考えているだけで楽しかったし、それを実際に撮ったこともいい思い出になっている。

Y: ファイナルで撮った町長の写真(副町長二人が町長を挟んで頬にキスをしている写真)は、最初のアポイントだけを私が手伝い、あとは生徒たちに任せている。私は基本的には撮影には付き添わないようにしている。付き添うとアドバイスもできるが、大人がどこかで見たような固まった写真になってしまい、創造性がなくなってしまう。それよりは若い発想を活かしてほしいと思っている。

B: ファイナルの写真に至るまでは「未来を継ぐ人たちに会った」という内容で子どもの写真を撮ろうとしていたが、天気や時間の都合で被写体になってくれる子どもがまちにいないだろうということになり、『ちゅっ』というテーマに変更した。

Y: テーマが出たときに、「こんなバカなことをやるのはうちの学校だけだろう」と思い、一発逆転を狙ってこのテーマに決定した。結果的には、審査員に写真の意図が上手く伝えられなかったが、会場の笑いを想像以上にとることもできたし、生徒たちはとても満足している。

大会の勝ち負けという意味では負けてしまったのかもしれないが、子どもを撮って賞をもらったときよりも、今回のテーマで撮ったときの方が、満足度が高いのではないかな。普通の大会では賞を撮ったときの

ほうが満足だが、やったことに対しての満足度が得られることがこの大会の面白さであり、写真甲子園ならではのことだと思う。

－ まちの人とのふれあいで印象に残ったことを、紹介してほしい。

B: 当たり前だが、夫婦でキスしてくださいと言うと、普通は断るし、知らない人の前でキスする理由もない。しかし、カメラを持って「こういう写真を作っていて、このまちの幸せを私たちは見たいんです」と言うと、作品にするのなら協力すると言ってくださった方がいた。この撮影をしなかったら絶対に会うことのなかった人たちと会って話ができることが、私にとっても、みんなにとっても一番大きいと思う。

A: 去年も出ているので、私たちを覚えてくれている人がいて、「また撮ってもいいよ」と言ってくれた。去年も今年も協力してくれた優しさと、覚えていてくれた嬉しさを感じられた。

－ 4日間の生徒たちの変化について、先生から見た印象はどのようなものか？

Y: 3年生の2人に関しては去年も出ているので、今回はある程度勝手が分かっていたのかなと思うが、どの生徒も4日間で何かしらの変化は起きていると思う。

ここに来る前は校長に対して「優勝します」と宣言していたが、やっているうちに写真を撮ること自体が楽しくなってきて、勝ち負けを超えたもっと違う価値があり、それを追求したいという気持ちになっていた。「ファイナルであんなことをするなんて勇気がある」と他校の顧問には言われたが、最後の作品は勝ち負けではなくて自分たちに相応しいかどうかが基準となっていたところで、3年生の2人は変わったのかと思う。

1年生のCは、初日のホームステイ先では「人と喋るのが苦手だ」と言って泣いていたのだが、写真を撮るために人と喋らなければいけない状況に放り出されて、一人で撮影に行けるようになっていたところに成長を感じる。

4日間で人間が変わる機会など、そうそうないのだ

が、写真甲子園ではそれが起きている。それがみんなが「はまってしまう」理由なのではないか。

C: ドキドキしたが、話しかけることが少しできるようになった。先輩を見ていると話を続けるのが達者だなと思ってしまう。

－ 写真の撮影を断られたときと、応じてもらったときでは気持ちにどんな違いがあるか？

B: 被写体になることを断られることもあるが、がっかりして悲しみにくれているよりは、次の被写体を探すために先に進もうと思ってやっている。

A: 断られたことで立ち止まっていたらいい写真は撮れないと思うし、次に進むためには断られることも必要だと思える。そういう経験ができたからこそいい作品が撮れる。

－ 予選の作品とファイナルの作品は、表現のテイストがかなり違うのはなぜか？

A: 予選の写真はかなり暗いものだが、それは柴田農林の伝統になっている。先輩たちの作品も暗く、それを見てきたから影響されているのかもしれない。作る時点では「青春」や「幸せ」がテーマになっていたのだが、いろいろなことを考えてやってみた結果で出来た写真ではある。テイストは全く違うがどちらも自分たちの表現だと思っている。

4. 文化・芸術を活用した地域活性化について

B: 町の人たちには、カメラで撮られることがすごく好きな人も多い。それはやはり写真の町で、写真が大好きな町からだ。だからこそ写真甲子園がここで成り立っていることは、とても納得がいく。別の町でやってもここまで高校生が「来たい」と思える大会になるとは思えない。

A: 全く知らない人でも話しかければ撮っていいと言われるし、カメラを持っているだけで話しかけてくれる人もいる。そういう優しい人たちが集まっているからこそ大会ができているのだと思う。

－ 全国の高校で、写真をやっている人々から東川町はどのように見られているのか？

Y:我々もそうだったのだが、外から見ていると「そういう大会があるんだな」というイメージしかないだろう。しかし、一度出てみて体験すると、この大会のおかげで人生が変わってしまうと言うくらいに、のめり込んでしまう。いい作品、悪い作品は関係ないから、「いつか本選に出るんだ」という気持ちを持って、とにかく出し続けたほうが良いと地元では勧めている。

－ 東川町に住んでみたいか？

B:スタッフとして手伝ってみたいとは思っている。

A:住んでみたいとも思うが、逆に旅行で遊びに来てみたいとも思う。

C:人はあったかいので住んでみたいとは思っている。

－ 写真甲子園を通じて、どのようなつながりが生まれたのか？

Y:この子たちが第一線で活躍するプロの写真家と一緒に活動したときに、写真家の方は見返りなしで付き合ってくれた。それは、彼らも自分たちが高校生のときに、プロとふれあったことが大きな経験になっているからだろう。

一生懸命活動している高校生を応援したいと思ってくれる素敵な大人に支えられている子どもたちは、とても幸せだと思う。写真家の方たちとも写真甲子園のつながりで知り合えた。採算度外視で付き合ってくれるつながりができていることは、写真、文化のいいところなのではないか。写真は意外とプロとの距離が近くて、ちょっとしたきっかけで雑誌に載っているようなプロとも関わることができる。それらの一つひとつの体験が子どもたちの心に響いている。

また、埼玉栄高校が震災を機に写真を撮っていて、被災地に展示したいが当てがないと困っていたので、展示場所を探す協力をするようになった。そのときに、埼玉から送られてくるという一方向ではなく、柴田農林の生徒が返事のメッセージを撮って送るという、相互の交流が生まれた。しかし、実際に被災地に展示するのはハードルが高かった。ちょうどその頃、以前から付き合いのあったイベント会社が、震災による自粛の雰囲気を変えようとイベントを企画しており、そこに展示の誘いがあったので、展

示をすることになった。県内の高校にも声をかけたことで、復興応援プロジェクトとして、地域で起こったことに対して文化を通して高校生が関わることができた。

また、今回のプロジェクトは目的が明確なので、知らない人に声をかけて写真を撮ったことのなかった高校生たちが、被写体に声をかけやすく、写真を撮る新たなやり方を学ぶことができ、人々との交流も体験することができた。さらに、地域を越えた広がりのある活動となっている。

「単に写真を撮って飾るだけで実際に何がかわるのか」と言われたら、何も変わらないのかもしれないが、子どもたちも写真を見た人も、心の根底では何かが変わっているのではないかと。被災地の避難所にも写真を飾っているが、写真を見たおばあちゃんが「こんなに応援してもらっているなら私たちががんばらなきゃ」と言ったことなど、写真や文化はすごいと思う。また、津波でみんなの写真が流されてしまったので、家族の記念写真を撮って台紙に貼ってプレゼントするという活動も行い、とても喜ばれた。これらの活動を通して、子どもたちが自分の存在価値、存在意義を感じることができたのではないだろうか。なぜこのような活動ができたのかと立ち返ったときに、写真甲子園が顧問の部活動や関わりに対する考えを変えてくれたことが大きいと思っている。この大会は、勝ち負けではない、本来持つべき価値観を与えてくれる。大会を機に埼玉栄高校と柴田農林高校だけで行っていたプロジェクトに加わりたいという高校や生徒がいて、さらに輪が広がりそうだ。そのようなつながりが出来るのは写真甲子園だけである。写真甲子園が様々な活動の原点となっている。写真甲子園に出られるなら他の大会の賞状はいらないと部員と言っているくらい素敵な大会だ。写真甲子園やこの町にお世話になっていて、ここが様々なつながりを生み出してくれていることは、子どもたちも感じている。

－ 教育、福祉、まちづくり等に、文化・芸術を介して、学校はどのように関わられるのか？

Y:運動はできるできない、やれるやれないがはっきりしているが、絵や写真を見てきれいだと思う気持ちは人間に共通しているものだと思うから、文化は運動よりは関わるハードルが低いと思っている。だから、教育やまちづくりに活用されているのは悪くはないのではないか。

柴田農林高校の近くに木造建築の中学校があったが、取り壊すことになったので、部員を連れて写真を撮りに行った。初めはプリントした写真をあげたのだが、最終的に、写真集を作って中学生や同窓会にあげたらとても喜ばれた。また、写真集のことは地元のメディアにも取りあげられた。そのことが子どもたちにとって、自分たちのやったことが社会に認められたという体験となっているし、自分が大人になったときに自分たちがやれることをやれば、地域の盛り上がりにつながっていくということを実感できるのではないか。

本校の生徒の多くは地元で就職する。学校生活を通して何かの活動をやっていくことは、地元に残ったときに地域で何かやれるという気持ちを持ってもらえるいいチャンスなのではないかと思っている。

2. 神山アーティスト・イン・レジデンス

AIR を起点とした「創造的過疎」への挑戦

② 神山アーティスト・イン・レジデンス

——AIRを起点とした「創造的過疎」への挑戦

事例の概要

◎市町村データ

市町村名	神山町	都道府県	徳島県
人口 ¹	6,038人	面積(人口密度)	173.31km ² (34.8人/km ²)
歳入決算額 ²	4,152百万円	歳出決算額	3,962百万円
市町村概要	徳島県の中央部、標高1,000m級の剣山山系に囲まれ、吉野川の支流鮎喰川上中流域を中心に位置する。産業面では山林を生かしていたが、木材の価格低迷により、現在では立地を生かした農業振興により、全国一のすだちの産地、県下の梅の産地として知られている。		

1 総務省統計局「国勢調査報告」2010年 2 総務省自治財政局「市町村別決算状況調」2008年

◎主たる事業主体の概要

団体名	特定非営利活動法人グリーンバレー		
職員数	5名(常勤職員3名、非常勤職員2名)		
設置年	2004年(前身の神山町国際交流協会は1992年設立)	連絡先	088-676-1177
団体概要	「日本の田舎をステキに変える！」をミッションとして神山アーティスト・イン・レジデンス(KAIR)、栗生の森づくり、サテライトオフィス誘致事業など様々な事業を実施している。		
URL	http://www.in-kamiyama.jp/		

◎関連する文化施設の概要

施設名	神山町農村環境改善センター		
運営母体	神山町、特定非営利活動法人グリーンバレー(指定管理者)		
管理時間	8:30～22:00	休館日	12月29日～1月3日、毎週月曜日
施設概要	多目的ホール／教養室(15帖)／教養室(12帖)／大会議室／生活調理教室／相談室／青年談話室／図書閲覧室／生活研修室／住民談話コーナー／玄関ホール		
所在地	徳島県名西郡神山町神領中津132		

◎事業の概要

事業名・クレジット	事業の内容	
神山アーティスト・イン・レジデンス (通称:KAIR) 主催:神山アーティスト・イン・レジデンス実行委員会 共催:NPO法人グリーンバレー 助成:神山町、文化立県とくしま推進事業、財団法人文化・芸術による福武地域財団、アサヒ・アート・フェスティバル2011	●『とくしま国際文化村』構想のコアのひとつとなる活動として1999年に神山国際交流協会が事業を開始した。 ●国内外から招聘したアーティストが、地域住民の協力のもと創作活動に専念できる環境を提供し、ここで得た体験が今後の作家活動に何らかの好影響を及ぼすこと、芸術と呼ばれる分野や、そこに生きる人々との交流に恵まれることの少ない地域住民が、この事業を通じて新しい発見・新しい価値観・新しい交流を享受できることを目的としている。 ●毎年8月から11月にかけて、国内外から招聘した芸術家が地域住民の協力のもとで創作活動に専念できる環境を提供している。 ●日本人1名、外国人2名を招聘し、2ヶ月間滞在。一人当たり予算70万円で渡航費・滞在費・材料費を支給。 ●アーティストの滞在期間中に、町内の小中学校での「課外授業」、地域住民が作品創作をサポートする「制作交流」、ウェルカムパーティー、オープン・アトリエ、さよならパーティーなどの公式イベントが行われる。 ●アーティスト・イン・レジデンス事業は実行委員会が主催し、NPO法人グリーンバレーの共催としている。 ●グリーンバレーはアーティスト・イン・レジデンス以外に、移住交流支援センター、栗生の森づくり(地域の里山の保全活動)、空き家改修プロジェクト、サテライトオフィス誘致など、多種多様な事業を展開しているが、それぞれの事業の由来や成果に、アーティスト・イン・レジデンスが大きな要因となっている。	
	事業開始年	開催時期
	1999年	8月下旬～11月上旬

現地調査の要約

1. 事業の背景、経緯

1992年に神山国際交流協会を民間で設立。1997年、徳島県による「とくしま国際文化村構想」の発表をきっかけとして、神山国際交流協会から、環境と芸術の2本柱を掲げて「国際芸術家村づくり構想」を県に提案。先進事例の視察等を踏まえて1999年から神山アーティスト・イン・レジデンス(以下、「KAIR」)を開始。当初は神山町教育委員会が事務局を務めていた。

KAIR1年目は町外の美術館学芸員にアーティストの選考に関わってもらっていたが、住民と考え方が対立し、住民主導のアーティストの選考に切り替え、美術大学の先生が協力している。2002年頃からKAIRで滞在したアーティストが引き続き神山町に住みたいとの意向が聞かれるようになる。

2004年、NPO法人グリーンバレーを設立し、グリーンバレーの事業の一つとしてKAIRを共催に位置づけながら、実行委員会が主催・事務局を務める。グリーンバレーは移住交流支援センター、空き家回収プロジェクト、サテライトオフィスの誘致など、KAIR以外にも様々な事業を展開している。

KAIR開始当初は、神山町だけでなく、文化庁や徳島県からの助成金や補助金があったものの、2004年頃から神山町の助成金のみが財源となり、財政難を迎えた時期もあった。

その一方で、KAIRの選考にもれた作家など、自費でも神山町に滞在したいというアーティストが多いため、2008年頃から有償で宿舍やアトリエの貸し出す「ベッド&スタジオ」を開始。また、民間の助成団体からの資金調達努力をしながら、持続可能な活動のあり方を模索している。

NPO法人グリーンバレーは2009年度の国際交流基金地球市民賞を受賞。「アートを柱に世界と地域をつなぎ、グローバルな地域活性化を図る」ことなどが受賞理由となっている。

年表

1992年	民間主導により神山国際交流協会が立ち上がる。
1997年	徳島県が「とくしま国際文化村構想」を発表し、神山国際交流協会が「国際芸術家村づくり構想」を提案。
1999年	神山アーティスト・イン・レジデンスを開始。神山町教育委員会が事務局。
2004年	神山国際交流協会を前身としてNPO法人グリーンバレーを設立。
2008年	総務省モデル構築事業でwebサイト「イン神山」と移住支援センター業務を開始。 有償で宿舍やアトリエの貸し出す「ベッド&スタジオ」を開始。
2009年	国際交流基金地球市民賞をグリーンバレーが受賞。

インタビューから

- もともとは国際交流がメインである。1992年に青い目の人形をきっかけとした国際交流を行い、その後も外国人を受け入れるなど交流を継続していた。(KAIR実行委員会会長：杉本氏)
- いつやめてもいいといいながらも、やめるわけにはいかないという思いはあった。(KAIR実行委員：岩丸氏)やめたら二度とできないだろうという認識があった。細々でもやるだけやってみようという方向性だった。(KAIR実行委員：河野氏)
- 人を通じた地域おこしがしたくて、アートはひとつの手段、材料である。(KAIR実行委員：森氏)その活動が認められて、去年は地球市民賞をいただいた。(KAIR実行委員：中原氏)

2. 地域と連携した事業の内容：神山アーティスト・イン・レジデンス(KAIR)

毎年8月下旬から11月上旬にかけて、国内外から招聘したアーティストが地域住民の協力のもとで創作活動に専念できる環境を提供している。海外から2名、国内から1名のアーティストを実行委員会が選考する。2ヶ月間の滞在期間に宿泊施設とアトリエを提供するほか、渡航費・滞在費・材料費を支給する。

アーティストの滞在期間中に、町内の小中学校での「課外授業」、地域住民が作品創作をサポートする「制作交流」、その他、ウェルカムパーティー、食の交流、オープン・アトリエ、アートツアー、さよならパーティーなどの公式イベントが行われる。

また、アーティストの作品制作を支えるボランティアを「お父さん」、生活面を支えるボランティアを「お母さん」とする「お父さん、お母さん制度」があり、地域住民とアーティストの密な交流が生まれている。

2011年現在、KAIRを通じて招聘された作家は16カ国、42名となっている。

3. 事業による成果や効果

◎「人が人を引き寄せる」創造的な吸引力の形成

AIRを継続的に実施してきたことで、徐々に国内外のアーティストやクリエイターが定住する事例が生まれた。また、滞在・定住するアーティストやクリエイターから神山町が紹介されて、人が引き寄せられている。

こうした動向が、移住交流支援センターやサテライトオフィス誘致などのAIR以外の事業にも波及し、アーティストやクリエイター以外にも創造的な人材を引き寄せる吸引力が形成されている。



オープン・アトリエの様子

インタビューから

- われわれが日常的にやっていることでも、アーティストの視点で見たらすごく素敵なことなんだと気付かされる。感性の交換みたいなものではないか。(KAIR実行委員：森氏)よそから来た人から反対に神山のよさを教わることも多い。住んでいたらなかなか見えない。そういうことも長年やっていたメリットである。(KAIR実行委員：中原氏)
- 来たアーティストに最大限の満足度を与えるということが、神山のレジデンスの価値になるはずだと考えた。海外では見られないような日本独自のホスピタリティを提供することである。(NPO法人グリーンバレー理事長：大南氏)

インタビューから

- 第3回のアーティスト・イン・レジデンスで来たアーティストで、今も神山に住んでいるミュージシャンの中嶋恵樹さん夫妻もちょうど神山で住む家を探しており、彼らが見つけた家に一緒に住もうということになった。(KAIRボランティア：手島氏)
- 神山町が面白い場所だということになると、クリエイティブな人たちがやってくる。そうすると人が人を呼んで、よそからどんどん面白い人がやってくる。彼らが新たなコンテンツとなり、また人を呼ぶ。今は、連鎖と循環がおこっている。(NPO法人グリーンバレー理事長：大南氏)

◎文化・芸術を契機とした環境活動の取り組み

AIRでの作品づくりや作品の設置が契機となって、地域の森林保全への取り組みが始まった。当初は、山林の中での作品展示と引き換えに、無償で下草刈りや枝打ち作業を行うものだった。それが、里山生活を体験したいという都会からの若者を呼び込む活動となった。

芸術活動から発展した環境活動への共感が、都市住民からの若者の関心と呼び「田舎の魅力」を発信している。

◎IT企業の誘致など将来の地域産業の芽生え

AIRが発端として創造的な人材が神山町に引き寄せ、IT企業のサテライトオフィスを誘致が可能となった。もともと神山は国際交流活動が盛んで、AIR事業によって国際的にも開かれたまちのイメージが定着してきた。

そこで町内全域での光ファイバーケーブルの敷設によるインターネット通信の基盤整備を実施。そのことで、東京のIT企業が古民家を改修してオフィスに転用する事例が生まれた。

自然豊かな生活環境に加えて、開かれたまちのイメージや良好な労働環境をIT企業に提供することで、将来の神山町を支える地域産業が芽生えている。

4. 事業の実施体制

◎主催者・事務局

KAIR実行委員会が主催。実質的にはNPO法人グリーンバレーの主要なメンバーが実行委員を務めている。事務局はグリーンバレー内に設置し、KAIR実行委員長と事務局スタッフ2名が事業を担当している。KAIRでは通訳に掛かる人件費以外は事業費の対象外であるため、実行委員長や実行委員メンバー、事務局スタッフも基本的にボランティアである。

◎アーティスト

アーティストは公募。作家選考は、武蔵野美術大学の教員などの専門家が参加するものの、実行委員と対等

- (森づくり事業は)山を無償できれいにする代わりに、作品を作ってもいいという許可を出すという協定書を結ぶという案だった。持ち主は無償で山がきれいになり、アーティストも使いたい場所を使うことができ、双方にとってハッピーな状態が生まれている。(NPO法人グリーンバレー理事長:大南氏)
- アーティストが山に作品を置いても気味が悪かったので、森がきれいになったら作品にとってもいいのではないということで、アイデアを膨らませ企画書を作り、グリーンバレーの理事会のメンバーに提案した。それはいいということで事業が始まった。(KAIRボランティア:手島氏)
- 移住希望者にはどうして神山に住みたいかを聞いているが、そのなかにかかれる神山の印象が、自然が豊かだというだけではなく、国際的な町というイメージがあるという感想や、アーティスト・イン・レジデンス事業を行っているので人の出入りがあって面白いという感想が結構な割合で書かれている。(KAIR実行委員会事務局:工藤氏)
- 現在、IT関係の企業も移住してきている。企業は来てほしいがアートはいらないという意見もあるが、彼らが移住を決めたのはアートもあるからである。(KAIR実行委員:佐藤氏)



KAIR実行委員の顔ぶれ

インタビューから

- 自分ができるときに自分がやれることをやれる時間やるというのが前提となっている。ただし、誰かが何かをやっていた

な立場で審査している。招聘作家3名の枠に、毎年100人近い応募がある。

5. 現在の課題、将来のビジョン

KAIRを開始してから13年経過したことで、実行委員会のメンバーも徐々に高齢化している。メンバーには、外部から神山町に移住して来た若い人たちも加わり始めており、必ずしも固定化しているわけではないが、町内に生まれ育った若者たち(例えば現実行委員メンバーの息子たちの世代)と、町外から移住してきた人たちが、ともにKAIRを担う体制となることが望まれている。

また、そうした若い世代にKAIRを継承しながら、KAIRに参加した作家たちが、より高いステージへと羽ばたいてほしいと考えている。

6. 文化・芸術を活用した地域活性化について

文化・芸術そのものに地域の未来があるというよりは、文化・芸術によって惹き付けられた「人」に可能性がある。あるいは、可能性を引き出すために文化・芸術を活用する。そのことが地域の活性化につながっている。

また、神山町の場合は、観光客を主体とした交流人口が地域経済を潤すという考え方ではなく、交流人口の中でも「創造的な人材」の存在が、まちの持続可能性を実現する鍵となっている。

たとえ人口が減少していく傾向にあったとしても、地域の中で、年少人口、生産人口、高齢人口が一定のバランスで維持されていれば、まちの持続可能性は可能となる。そこで、常に創造的な人材を外から引き寄せ、人を介してまちの魅力を高める。それを「創造的過疎」と名付けている。

らそれを手伝うという形で13年間続いている。(KAIR実行委員会会長:杉本氏)

インタビューから

- われわれも年配になってきたので、これからの将来を見据えた場合、若い人をどう育てていくのが重要になってくる。移住交流でやってきた若い人がサポートに入ってくれており、これ以上にありがたいことはない。(KAIR実行委員:中原氏)次世代の地元の人間が興味を持って加わってくることが一番ではないか。関わってくれ始めているが、どんどん仲間を増やして、ここに住もうと思う人間が事業を続けてくれればありがたい。(KAIR実行委員:森氏)



NPO法人グリーンバレー 理事長 大南信也氏

インタビューから

- 交流人口が増えたらその地域は持続していくかというところでもないと思っている。交流人口の捉え方を、クリエイターの交流人口と、観光などの交流人口は分けて考えたほうがいい。ものを創造してくれる人の交流人口を増やさないと、まちは変わっていかないし、地域づくりはできない。(NPO法人グリーンバレー理事長:大南氏)
- 過疎で問題としているのは人口が減ることであるが、たとえ人口が減ったとしても、人口構造や人口構成が何十年か後に健全な形として形成されるようにしていけば、その町は持続していく可能性があるのではないかと考え動いている。(NPO法人グリーンバレー理事長:大南氏)

(1) NPOへのインタビュー

日時:2011年9月24日(土)17:00~18:00

会場:神山村農村環境改善センター

対象:大南信也(NPO法人グリーンバレー理事長)

1. 自己紹介

- 現在、グリーンバレーの理事長をやっている。神山村で生まれ、神山村で育った。大学は東京だったが、小さいときから海外への憧れが強く、大学院はアメリカに行った。家業が建設業と生コンの製造業をやっており、継ぐために神山に帰ってきた。地域に対して自分が何のアドバンテージを持っているか考えたときに、やはり海外生活の経験があることが大きいのではないのかと考え、神山の子どもたちに対して国際交流の機会を作りたいと思った。
- 学校教育はどこにいても均等に受けられるが、特に国際交流に関しては、東京と徳島、徳島と神山ではそれぞれ10年くらいの差があるのではないだろうか。自分が国際交流の流れを作っていけたら、神山に生まれた子どもたちも広い世界を見つめられるようになるのではないかと思い、活動を始めた。

2. 事業の背景・経緯

- 1990年くらいから始まった活動の1つに「青い目の人形アリスの里帰り」がある。母校の小学校に昭和2年に送られてきた「青い目の人形」が残っていた。その人形が持っているパスポートにアメリカのペンシルバニア州のウィルキンズバーグから来たことが記載されていた。もしかすると贈り主が生きているかもしれないと思い、ウィルキンズバーグの市長宛てに人形の贈り主を探してほしいと手紙を出した。大々的な搜索ののち、半年後に贈り主が見つかった。人形を里帰りさせるために委員会を立ち上げた。
- 「アリス里帰り推進委員会」は、初めは小学校内で組織されていたが、翌年には町内へと規模を拡大しようとした。そこで、「神山国際交流協会」を民間で立ち上げ活動を始めた。
- 初めは人形のプロジェクトを展開していくことで、まちを劇的に変化させる出来事が起きるのではない

かと思っていたが、結果的には人形では何も見えてこなかった。

- 1997年に、徳島県が神山を中心とした地域に国際文化村をつくるという構想が発表された。
- 今後は、公が造った施設であっても、民間、特に住民が管理運営する時代が来るだろうと感じていた。しかし、今までのハード中心の国際文化村ができて、うまく運営できないと思った。そこで、施設ができる前から県に対して提案をしていこうということになった。
- 国際交流協会の中で議論し、「環境」と「芸術」の2本柱を掲げた。環境に対する事業は「アドプトプログラム」という道路清掃のプログラムを日本で初めて行うことで、モデル地域となり、全国へと発信していこうと考えた。また、神山にあるキャンプ場、「コットンフィールド」を運営している森さんが、若い頃に全国を旅しており、芸術家村ならば資本がないところでもできるのではないかと以前から構想していた。そこで、芸術に関しては、「国際芸術家村構想」を立ち上げた。
- 国際芸術家村に関しては、当初は具体的なアイデアがなかったが、県庁とも話をする中で、淡路島の津名町(現・淡路市)も国際交流のまちをつくらうとしており、「アーティスト・イン・レジデンス(以下、AIR)」を行っているということを聞いた。そこで、県庁の担当者とともに視察に行ったのが1997年のことである。
- 淡路島では、町役場にノウハウがないので、まずはアートコンサルタントの会社が事業の運営を行い、現地でのアーティストの世話は教育委員会の職員が行っていた。実際に見た結果、自分たちでも事業ができるのではないかと思った。さらに、自分たちにはすでに国際交流のノウハウがあったので、役所がやるよりも神山町の住民が世話をしたほうがいいのではないかと思った。とにかくやってみようということで、アーカスの事業担当者などに来てもらい、まずはプレイベントを行ったのが1999年である。

3. 事業の目的、内容

◎神山アーティスト・イン・レジデンス

- 1999年から、「フルサポート」という形で外国人2名、日本人1名を招聘している。渡航費、滞在費、材料費は実行委員会から、一人当たり70万円程度を出している。事業の総額は300万円ほどであり、町からは140万円弱の補助金が出ており、残りはグリーンバレーや他から補填している。
- AIR事業を始めたときは、知名度がゼロであった。それでも神山を選んでくれるという状況を作らなければならなかった。「滞在するアーティストに最大限の満足度を与える」ということが、神山のレジデンスの価値を高めることになるはずだと考えた。満足度を与えるというのは、甘やかすという意味ではなく、海外では見られないような日本独自のホスピタリティを提供することである。
- 例えば、冬が近づいてきて、アーティストの滞り場所が寒いという話が出てきたときに、その情報をメーリングリストに流すと、次の日の朝にアーティストが玄関の戸を開けると石油ストーブが3台並んでいたというエピソードもある。満足度を高めることによって価値を上げるという考え方はグリーンバレーのほかのすべての事業にも通じる考え方である。
- アーティストによると、海外のレジデンスではそんなことは考えられないそうだ。普通は、展示場所はすでに決まっており、作品を作ってそれで終わりである。神山独自のホスピタリティがひとつの価値となってアーティストに伝わり、この事業を10年以上やっても、毎年100人近い応募が来る理由となっている。
- 今まで、訪れるアーティストに対しては、全面的には部分的に支援を行っていたが、現在は、制作旅行で来るアーティストが神山にお金を落とすような状況を作りたいと考え、ビジネスモデルを構築することも同時に行っている。
- 何年間かは「フルサポート」一本で、3人ずつ選んで事業を行っていたが、それだと100人応募してもらっても3人しか取れない。あるとき、残りの97人の声を聞いてみようということで、今まで選出からまれ

てしまった人のアンケート調査を行った。その結果、制作費などは他から調達する手段もあるが、日本で制作滞在をする場合の一番の障害は安く、長く滞在して制作できる場所がない、もしくはあったとしても、それらの情報が海外に流れてこないということであった。

- そこで、こちらでアトリエと宿舎を提供する「パーシャルサポート」を実施したところ、3年間で6、7人の利用があった。これが仕組みとして上手く機能することが分かったので、仮にこの先、町からの補助金が打ち切られたとしても、レジデンス事業は続けられるという自信につながっている。セーフティネットがあるということは事業全体により影響を与えている。
- 2009年からは「神山でアート」というプログラムを作り、自前の宿舎やアトリエを有償で貸し出しており、現在は10数名が訪れている。そのような中で、オランダの旅行会社がオランダ人アーティストを常時2名程度送り込みたいので施設を探してほしいとか、アメリカの旅行会社からは神山を訪問する田舎旅を企画したいといった話が舞い込んできている。
- グリーンバレーは、観光バスで大勢の観光客が押しかける状況は想定していないし、大規模で来られても恩恵を受けるのは一部の人間に限られ、多くの住民にとっては住環境が壊されるという点で失うものが大きいと考えている。今後も、満足度を高めた小規模な旅行に限って取り組んでいこうと思っている。
- アーティストに最大限の満足度を与える姿勢は、移住やサテライトオフィスにもつながっている。この場所は他とは違って特別な場所だと考えてくれる人が多い気がする。
- 現在は15ほどのプロジェクトが動いている。神山AIRだけでなく、神山町農村環境改善センターという中央公民館にあたる建物の指定管理事業や、神山町移住交流支援センター受託運営事業も行っている。

◎webサイト「イン神山」(総務省モデル構築事業)

- アートの制作滞在需要をビジネス化して、グリーン

バレーの将来の柱にするために、総務省の事業に応募し、「イン神山」というwebサイトを整備した。

- サイトを立ち上げたときは、「神山でアート」と「神山日記帳」をメインコンテンツに考えていたが、実際に多く読まれたのは「神山で暮らす」であり、他のページの5～10倍の閲覧数があった。このサイトが立ち上がるまで、神山に移住したいと考える人がこれほどまでに居るとは思いも寄らなかった。「神山でアート」や「神山日記帳」で町の空気を掴み、この町に住むにはどのような古民家があり、どの程度で借りられるのかと「神山で暮らす」で知り、移住してくるという流れになっている。

◎移住交流支援センター

- 移住交流支援センターというのは県内に12箇所あるが、他の場所は市役所や町役場内にあり、うまく機能していない。神山の場合はNPOに任せてもらっており、住民が移住者を選んでいくとスタイルを取っており、順調に移住者を増やしている。
- 移住交流支援センターでは、まず家族構成や物件の希望などを登録してもらう。しかし、それらは個人情報であるため、行政が運営している場合には地域住民が移住希望者の情報を尋ねてもまず教えてもらえない。ところが、神山の場合はグリーンバレーが窓口になっており、運営委託機関として移住者情報を把握できる状況にある。
- 2000年以前の神山はほとんどIターンのない町であり、私の知る限り、1980年代前半に2家族のIターンしか記憶にない。ところが1999年に始めたレジデンス事業が変化を先導し、2002年頃から毎年のように、滞在アーティストから引き続きこの町に住みたいという声があがり始めた。仲間内のネットワークを使い、彼らに住居を紹介しているうちに、だんだんと移住のノウハウが身についてきた。最終的に、徳島県の全ての市町村に移住交流支援センターを置くという構想が出たときに、神山の場合はグリーンバレーがやってくれるだろうということで、事業が委託されることになった。
- また、他の町では、空き家を一不動産物件とみなしており、どのような物件を希望するかといった情

報の記入を求めている。しかし神山の場合は、不動産の希望情報だけでなく、まず、「夢」や「神山で実現したいこと」などを問い、続いて当面および将来の生活設計を書いてもらっている。

- 「イン神山」をデザインしてくれた西村佳哲さんは、デザイナーではなく、働き方研究家を自認しており、人と仕事との関わり方を研究している。彼が考えたのはAIRの読み替え。アーティストをワークに置き換えて考えるということだった。つまり、神山の町が必要としている職種を呼び込む仕組み(ワーク・イン・レジデンス)を作ろうというものだった。
- 「ワーク・イン・レジデンス」は、将来まちにとって必要な働き手や企業家を公募で逆指名する仕組み。この空き家にはこんな職を持っている人に住んでもらいたい、という要素を予め指定して募集を行うものである。通常、移住に関しては地元が常に受身。この仕組みはその姿勢を変え、地元の人々がどのようなまちにしていきたいか自分たちで考え、それを実現できる機能を持っている。
- 現在は、空き店舗の目立つ商店街に新たな店をオープンする人を公募するなど、移住・起業・商店街の再生を同時に実現しようと事業を展開している。また、商店街の南側は森になっており、木々の成長とともに商店街への日差しが遮られている。住民の高齢化に伴って、管理が行き届かない状況となっている。そこでグリーンバレーが空き店舗を管理すると同時に、森づくりも行うことで、商店街全体の環境づくりを行っている。
- グリーンバレーが昔のキラキラと輝いていたまちを取り戻してくれるのではないかと、そんな夢を抱いている人が現れてきている。行政の場合は予算という名の資金によって物事を動かすことができるかもしれないが、NPOはお金では物事を動かせない。そのため、事業を進めるには住んでいる人の心を動かすしかない。「北風と太陽」ではないが、まちに太陽が注ぎ込むような状況を作っていくことで、信頼してくれる人は自ずと増えてくる。

◎栗生の森づくり

- 一般的な森づくりは、地球温暖化やCO2など環境

面の取り組みから始まっているのがほとんどである。しかし、神山の場合はアートから入っていった。

- アーティストが無断で個人所有の山中に作品を作ってしまう、後で実行委員が気付く、謝りに行くというようなことが何度か続いた。事あるごとに謝りに行くのもしんどいので、謝らなくても作らせてもらえる方法を考えようということになった。山を無償で手入れする代わりに、作品を作ってもいいという協定書を結ぶという案だった。持ち主は無償で山が手入れされ、アーティストも思い通りの場所に作品を作ることができ、双方にとってハッピーな状態が生まれている。
- この森づくりでは、グリーンバレーのメンバーは単に労力を提供しているだけに見えるかもしれない。しかも参加者は昼食代と保険代を賄うためにワンコイン(500円)を持参して他人の山を手入れしている。中には、プロの林業労働者も参加しており、先生とか師匠とか呼ばれ、指導に当たってくれている。
- 森づくりによって、アートでは引き付けられなかった層の人たちがレジデンス事業に加わってくれるようになった。アーティストが木の作品を作りたいと言った場合に森づくりのプロたちが協力をしてくれるという状況も生まれている。

◎空き家改修プロジェクト

- 空き家改修プロジェクトも手がけている。そのうちの一軒は「ブルーベアーオフィス」と名付け、オフィスとして活用している。借りているのはイギリス人のトム・ヴィンセントさんという方である。彼はここには年に1週間ほどしか来ないので他の期間は空いている。その期間は自分の知り合いのクリエイターたちに貸しており、クリエイターが1ヶ月～1ヶ月半ほどのペースで次々とやってきている。第1号となった映像作家は1ヶ月半くらいの滞在の予定が、結局神山に移り住んだ。
- 東京藝術大学建築学科と一緒にやっている空き家改修もひょんなことがきっかけで始まった。ニューヨークで働いていた、徳島出身の建築家の坂東さんが、2008年のリーマンショックの影響で仕事が

なくなってしまった。日本に帰ろうかと考えていたときに、以前から見ていたイン神山の「神山で暮らす」を思い出し、月2万円で家が借りられるなら神山で暮らそうかという話になり、夫婦で見学に訪れた。しかし、彼はクリエイター系のエリートであり、神山にはその力を活かす場所はないということで、もう一度ニューヨークで頑張ることを勧めた。それから1年後の2009年12月、彼が母校の建築科の助手として帰国することになり、彼の所属する研究室の院生に神山の空き家改修をやってみないかと呼びかけてプロジェクトが始まった。

◎サテライトオフィス誘致

- 「サテライトオフィス」の取り組みもしており、現在、クラウドで名刺管理サービス業務を行う「三三(さんさん)」というITベンチャー企業が入っている。三三が来たきっかけは、坂東さんのニューヨークの知り合いで、空き家改修を手伝ってくれた建築家の須磨さんという方が、日本に帰国して初めて手がけた仕事が、彼の大学の同期の寺田さんが代表を務める三三のインテリアデザインだったことである。須磨さんが寺田さんに空き家を改修してオフィスにしているという話をしたところ、三三が理念として掲げる、「社員に最適な就業空間を提供すること」、さらに「顧客に対して新しい働き方を提案すること」を実現できる場ではないのかということで、実際に神山にやってきた。
- すぐに神山にサテライトオフィスを置くことになり、まずは開発部門の人たちがやってきた。次いで広報・マーケティング、法務担当などが来ており、どの業務がサテライトで実現可能であるのか実験している。このサテライトオフィスという働き方は、日本の田舎が変わる可能性を秘めている。また、これらは人と人がつながることによって生まれた事業である。
- 寄井商店街は、一昔前に神山で一番にぎわっていた場所である。ここを再生しようという計画も立ち上がっている。職人やクリエイターの移住計画を考えており、工房と宿舎を兼用した長屋をいくつか連ねている。今は、商品はネットで販売できるの

で、商店をやってもらおうというよりは、もっと制作風景や制作過程が見えるようにしていきたい。今年の夏は東京藝術大学などの学生が延べ250名ほどやってきて、プランを立てていった。

- 従来の商店街は他の場所で作られた商品を神山に運んできて売っていた。しかし、現在では30分ほどのところに大型スーパーや量販店があり、従来型の商業はもはや成立しない。そこで、イタリアなどで革製品の職人として修行をした若者たちの起業をサポートすることで、事業として成り立たせていく方法を模索している。こうすることによって、ここにしかない商店街ができてくる。
- 「棚田の再生」にしても、人材育成の「神山塾」にしても、やっていることは、神山や地域を変える人材の発掘である。ちょっと変わった子がいると、変化を起こしてくれるだろう、と引き止めるようにしている。たとえば、棚田に行って地域の人に苦労話しか聞かされなくても、それでもやりたいと言う子がいる。そういう子は今までの農業と違った視点から農業を見ている可能性が高いので突破口を開いてくれる場合が多い。

4. 事業の実施体制

- NPO法人グリーンバレーのミッションは「日本の田舎をステキに変える！」である。「日本の田舎」というのは、神山のことでもあるし、神山のようなまちは全国に数千もあると思う。しかし、人口が6000人程度のまちはコンパクトで顔が見える関係にあり、モデルが作りやすい。神山でモデルを作って、それを他のまちでも展開していくことで、日本全体の田舎の底上げができるのではないかと考えている。
- ミッションにつながるビジョンの1つ目として、「人」をコンテンツとしたクリエイティブな田舎づくりを掲げている。神山のコンテンツはアートでもアドプトでもなくて、究極に言ってしまうと「人」である。面白い人が集まることで、人が人を呼ぶ循環が生まれ、そこから新たなアイデアが持ち込まれ、活動が起こってくる。
- 2つ目は国際交流をやっていく流れの中で、多様な人の知恵が融合する「せかいのかみやま」づくりを行っている。
- 3つ目は「創造的過疎」による持続可能な地域づくりである。創造的過疎というのは私の造語である。創造的人口減少という言葉はすでにあったがしっくりこなかった。単に人口減少という言葉だと危機感が伝わらない。日本の田舎の場合はもっと厳しい「過疎」である。また、過疎で問題としているのは人口が減ることであるが、たとえ数としての人口が減ったとしても、人口構造や人口構成が何十年か後に健全な形にしておけば、その町は持続していく可能性があるのではないかと考え動いている。
- 「グリーンバレー・ウェイ」はグリーンバレーの基本的な行動指針である。「できない理由より、できる方法を！」、もしその方法が見つかったら「とにかく始めろ！（Just do it!）」の2つを掲げている。
- 国際文化村構想が立ち上がったときに、町内で長年まちづくり活動をしている人々に集まってもらった。しかし、そこでの話し合いで出たのは、「あれができなかった」、「これができなかった」という今まで出来なかった理由探しばかりだった。結果論として物事を語っても状況は今までと何も変わらない。もう少し前向きになれる方法はないかと思い、ちょうどナイキのCMで「just do it」という言葉が使われていたので、それをキャッチフレーズとして使用し、理由探しはやめにして、できる方法を探していき、思いを行動へ移そうとした。
- キャッチフレーズを使い始めてから、みんなの気持ちがちどころに変わってきて、物事を前向きに考えるようになった。逆に、アイデアをどんどん潰したがるアイデアキラーは会合に来なくなった。結果、いろいろなことをどんどんやりたい、いい意味で浮ついた人間が集まってきて、アイデアが集積されてきた。そのような状況の中で、今まで難しいと思っていたことがあまり難しくないように感じられてきた。成功事例が積み重なり、変化や結果が見えてくるので、やっている人間が自信を持って進めることができるようになってきた。
- グリーンバレーの仕事は行政としてはやれないだ

ろう。政治家や行政が行うことはみんなの声を聞かなければいけないし、結果を出さなければいけない。NPOとはスタンスが全く違う。グリーンバレーの事業も仕事としてやらされたら、自然とノルマがのしかかり無理が出る。無理をすると地域に弊害が出てくる可能性が高い。

－KAIRの実施体制を説明していただきたい。

- 知名度ゼロでレジデンスを始めてもアーティストは集まらない。そこで1年目は学芸員に入ってもらい2人のアーティストを推薦してもらった。その結果、アーティストが住民ではなく、学芸員のほうばかり見て作品を作っていくと感じた。そのときに、アーティストが神山のレジデンスに参加するのは、学芸員に対するある種の「貸し」であることが垣間見えてきた。2年目も学芸員による推薦をお願いしたが、選考会を前に「今年の組み合わせはこの3人」というように全てが事前の推薦で決められるという状況になってしまった。そのため住民側の選考委員の反乱がおきた。推薦された全てには同意できないということになり、真っ向から対立。学芸員は抜けてしまい、専門家のいないレジデンスになってしまった。
- 住民側の選考委員と学芸員の双方とも、レジデンスの価値を高めたいという思いは同じであったが、その方法が違っていた。学芸員にとっては、評価の定まったアーティストを連れてきて、その人の作る作品によって、神山の価値が高まることを目指したが、住民側では作品そのものよりも、もっとアーティストという「人間」と関わっていきかった。
- 専門家がいなのはさすがにアーティストに無責任だろうということで、以前より面識のあった武蔵野美術大学芸術文化学の先生に泣きつき、新見先生が選考委員としてやってきた。それ以来、武蔵野美術大学との関係ができています。学芸員という専門家がいなくなったことも、武蔵野美術大学とつながるチャンスへと転じた。
- 武蔵野美術大学とは「神山アート」というプログラムをやっている。神山アートも最初は県から資金が出ていたが、数年後に打ち切られた。今は、武蔵

野美術大学と住民でお金を出し合うことで、もう12年間続いている。本来マイナスになることがプラスに作用している。

5. 事業による成果や効果

- アートの素地の全くないところにアートを持ってきたとしても、地域の人には相手にされない。そんな時期が4、5年以上続く。実はそれが非常に重要なことである。関心がないから邪魔されない。例えば、神山の特産品のすだちで何か新しいことをしようとしたら、たちまち反感を買う。しかし、現代アートは誰も全く分からないから言いようがない。彼らが放っておいてくれている間に、自分たちの思う形に組み立てることができる。気がついたときには、誰も邪魔ができないような確固としたものが築けている。
- 一生懸命やっているのに関心を持ってくれなかったとつらく思わなくていい。もう少し頑張ったら変化がでてくるものである。今、徳島県内で、「アートといえどどこか」と質問すれば、8割、9割の人たちが神山と答えると思う。これはわずか13年の間での変化である。4、5年がひとつの山であるが、その手前で何も変わらないとか、公のお金が出ないということでやめてしまうことが多い。そこを乗り越えたら次に違うものが見えてくる。
- 神山町が面白い場所だということになると、クリエイティブな人たちがやってくる。人が人を呼んで、よそから次々と面白い人がやってくるようになる。そうしてやってきた面白い人たちが、新たな神山コンテンツとなり、また面白い人を呼ぶ。今は、こうした連鎖と循環が起こっている。
- 神山がアートを高めたかということ必ずしもそうではない。しかし、神山ではアートを媒介として人が集まってくる。そういう意味でアートがいい方向に効いている。すべての起源はAIRだった。

－AIRが起源だと思える理由は何か？

- 人を呼び寄せるきっかけを作ったのは滞在したアーティストが移住し始めたことにある。もちろん、ア

アーティスト以外でもこうした変化を引き起こすことは可能かもしれない。しかし、私たちにとって、アーティストを呼び込むことは自分たちの力で実現できたことだったから、ここから始まったと言える。いきなりITベンチャーを呼ぶというアプローチを取っても、うまくいかなかったかもしれない。一つひとつのアクションが次の展開を生み、それらを深堀していく中で新たな出会いが生まれ、それらが連なって現在の状態を作り出しているのだと思う。

— 実際にアーティストが来て、勝手に森の中に作品を作るなど予想できないことが起こっていったことが、様々な事業に結びついたという実感はあるか？

- アーティストに対してこれはダメ、あれはダメと制限していることのほとんどは、こちらの経験に基づいていることであり、経験していないことはたぶんできないのだろうと予断しているにすぎない。例えば個人の山を使うことに関しても、たぶん断られるだろうと思いついて無理には行動を起こさない。しかし、アーティストたちは赴くままに行動を起こしていく。我々の固定概念に非常に大きな力で切り込んでいく。彼らが予想しないことを起こし、それに対処していく中で、新たな思考が強制的に引き出されていく。それらによって今まで気付かなかった自分たちの可能性が引き出されていく。それが面白い。

6. 現在の課題、将来のビジョン 等

- 需要があって、これに最大限応えるというのが現在の経済のあり方で、機会損失がない最善の状態だと考えられている。需要に応えられていないことは、機会を逃して無能だとレッテルを貼られてしまう。必ずしもそうではない。心地よい部分があるということは実は重要であり、それを超えると歪になり、しんどくなってくる。儲かるうちに儲けておこうというようにブルドーザーのように動いていくと結局後には何も残らない。匙加減は非常に難しいが。
- ブルーベアーオフィスのトムさんが、このまちのつ

かず離れずという感じが心地いいと言っていたそうだ。海外の人が来ても熱烈に歓迎するというわけではなくさらっとしている。移住に関しても、神山に来てとはわざと言わない。こちらからは、神山はあくまで移住の選択肢のひとつであるということを使うが、不思議と戻ってきてくれる。ぎらぎらしていないから、いやらしさが出てないのかもしれない。

- 象徴的な話だが、神山全域をWi-Fiのフリースポットにしようと提案したら、費用対効果が低いと言われた。たしかに費用対効果は低いかもしれない。しかし、そういう話ではない。神山町全部がフリースポットになると話を聞きつけた人の中には、必ず反応してくれる人がいる。その人は神山が必要としている人である。みんなに電波が届かなくても、それを必要としてくれる人に届けば事業は成功しているといえるのではないだろうか。神山の情報戦略もそれと同じである。

- 小さなまちだから、人気が出て1,000万人の人が来ればむしろつぶれてしまう。120万人の人が来てくれれば、それが適正規模で心地いい。アートというひとつのスクリーンを通して、クリエイターに情報がきちんと伝わっていればそれでいい。

— 大南さんの本業の建設業は、ハードと結びつく考え方をすることが多いが、グリーンバレーのようなソフト事業に注力しているのはなぜか？

- 建設業をやりながら、このような形がまちのためになるのかなという疑問がどこかにあったように思える。仕事があるのはもちろんうれしいが、あまり健全な形でないような気がした。莫大なお金をかけて企業を誘致したとしても、結局、工場はみんな中国に行ってしまう、壊さなければならぬ建物ばかりが残ることが現実には起きている。
- グリーンバレーが大きな予算を持っているのであれば、企業誘致もできるのかもしれないが、幸いにしてそのような資金はない。工場は呼べないけれど、人は呼べる。人を呼ぶのは工場を誘致する労力の10分の1ででき、去っていったとしても大きな打撃はない。絶対にできないことを考え続けるのではなく、自分たちの力の範囲内にあることは、

すべての力を注ぎ込んで取り組んでいる。

- 物事をお金で考えた場合、100円と1万円を交換する人はいないが、森づくりをはじめとして、お金とは異なる価値を交換していくので、両者が幸せになれる状況を生み出せる。誰も顔をしかめる必要なしに前に進んでいく状況は、事業をやっている自分たちもわくわくするものである。
- また、お金が絡んでいないので、人間のきれいな部分だけで物事が進んでいき、一番自然な形で交換が成立していく。アートをやっていなかったらここまでは来ていなかっただろう。扉を開かせてくれたのはアートであり、地域外から来た人である。

7. 文化・芸術を活用した地域活性化について

- まちづくりと言っても、「もの」をベースに置くのか、「人」をベースに置くのかというところで大きく違ってくる。B級グルメなども「もの」の最たる例で、誰でもものについては考える。しかし、ものは流行り廃りがあり、何年かすると陳腐化してしまう。しかし、人は循環を続ける限り、最新のシステムで動いていく。こちらがB級グルメを考えようと言わなくても、自然と何かを考え、ことを起こしてくれる。
- 県内の別な町で国民文化祭を行ったことがあった。同じアートであっても、あれは観光客的なアートの鑑賞者を引き寄せるというモデルである。神山はアーティストでなくても、自分の夢を持ち寄って、新しいものを創る人に来てもらうことを目指しており、まちづくりに対する向き合い方が根本的に違う。
- 初めは、アートの中に神山の未来があるのかと思っていたが、やっていくなかで、アートによって惹き付けられて来た人や移住者という「人」に可能性があるということが分かった。人形のプロジェクトも、環境のプロジェクトもAIR事業もすべて、最終的には「人」へとつながっていることを実感している。
- ずっと国際交流をやっていくなかで、クリエイティブな人々をはじめとした、多様な人々がこの土地に集まり、価値観をぶつけていくことから、変化が生まれてきている。それがいずれは世の中をリードする力を持つと実感できるところまで来たと思っている。
- 通常のまちづくりは、交流人口を増やすことに注力しているが、交流人口が増えたらその地域は持続していくかというところでもないと思っている。交流人口の捉え方を、クリエイターの交流人口と、観光などの交流人口は分けて考えたほうがいい。ものを創造してくれる人の交流人口を増やさないと、まちは変わっていかないと、地域づくりはできない。ただ単に経済がまわるというところだけで話が終わってしまう。町の変化という流れをアートがひとつの要素となって創り上げている。
- 人をベースにした仕組みが重要だが、成果がでるまで時間がかかるので、どうしてもものに流れがちである。5、6年こらえられたところは何かしらを見つけて、成功しているのではないかな。

(2) KAIR実行委員長・事務局スタッフへのインタビュー

日時:2011年9月24日(土)14:00~15:00

場所:神山町農村環境改善センター

対象:杉本哲男(KAIR実行委員長)、工藤桂子(KAIR実行委員会事務局員)

1. 自己紹介

杉本(以下、「S」):神山で生まれ育った。高校を卒業してから7年間は愛知で働いていたが、家庭の都合で神山に戻ってきた。仕事は自営業で、電子部品の製造をしており、その傍らNPOの仕事も行っている。

神山アーティスト・イン・レジデンス(以下、KAIR)の立ち上げ当初にはかかわっていなかったが、作家のパソコンが壊れたから直してほしいと言われたことをきっかけに関わるようになった。2004年まで写真を撮られていた方と以前からお付き合いがあり、事業の写真を撮る手伝いをしてほしいということで、初めは写真を撮っていた。若い世代に受け継ぎたいという会長の意向もあり、いつのまにか会長になった。

工藤(以下「K」):KAIR実行委員会の事務局等の仕事をしている。2007年にNPO法人グリーンバレーで働き始めた。1年目は神山町教育委員会がKAIRの事務局をしていて、2008年から教育委員会の手を離れて、グリーンバレーに事務局が移った。それからは事務や作家のサポートや通訳等を行っている。生まれは徳島県で、最初の2年は隣の石井町から通っていたが、2009年からは神山に住んでいる。高校3年から、大学、就職と海外に出ており、2003年に帰ってきた。その後、市内での仕事を経て、職員募集の求人を見たことをきっかけにグリーンバレーで仕事をするようになった。

当時は「イン神山」のサイトもできておらず、ブログはあったが、情報は少なかった。しかし、神山のことは新聞などで見たことがあり、応募することにした。働き始めてからは神山でどっぷり過ごしている。

ーこれまでの文化・芸術活動の経験は？

S:アマチュアで写真を撮ずっとやっていて、プロになりたいという気持ちもあった。今はデジタルだが、当時は現像から何からお金がかさんでしまいあきらめた。徳島に帰ってきてからは、ほとんどカメラも触らずにいたが、手伝ってと言われたときにまた始めた。

K:神山で仕事を始めるまでは、文化、芸術の分野の仕事はしていなかった。しかし、1年目にKAIRのサポートをするなかで興味が湧いた。作家と接するにあたって、全く知らないというわけにもいかないもので、自然と展覧会を見る回数も増えた。作家と近いところで接しているので、彼らと話す中でも勉強させてもらっている。

グリーンバレーの事業のアートの部分に特に惹かれたというわけではなく、国際交流やまちづくりや環境など全体的に何か面白いことをしているところだと思い、何か関わればと思い応募した。

2. 事業の目的、内容

S:芸術家を神山町に招いて2ヶ月ちょっと創作活動をしてもらう中で、住民とふれあい、そこから作家も刺激を受けて何かできるのではないかという趣旨で行っている。

ウェルカムパーティーから始まり、食の交流や課外授業を行い、さよならパーティーで終わるという一連の流れは初年度に決まったものであり、そこから変わっていない。

我々はハコモノが全くないので、空き教室や空き地や家を借りて作品を作ってもらっており、それは今も継続している。

ーアーティストが学校を訪れるなど、事業の展開はどのようにになっているのか？

S:最初の年は作家のアトリエを学校の空き教室に置こうということで、町内の小学校2校、中学校1校、高校の分校1校の空き教室を使っていた。2003年くらいまでは教室を使っていたのだが、アーティストの創作活動が夜であることが多く、セキュリティや学校に部外者が出入りする安全面などが問題となったことで、それからはNPOと協力して、劇場や保育所など現在使用されていない施設を使用している。学校と違って出入り自由なので、作家にとっては制作環境が整ってきたといえる。

当初から課外授業ということで1~2コマは学校を訪れてもらっている。今はアトリエが学校にないので、

アーティストとふれあう機会は課外授業ぐらいで、あとは個人的な出会いとなっている。

– 地域住民との交流についてご説明いただきたい。

K: 公式行事として、食の交流と、オープンアトリエデー、アートツアーが交流の機会だが、制作過程の中で、作品制作を手伝ったり、道具を借りたり、素材についてアドバイスをいただいたりと、グリーンバレーやKAIRの実行委員以外の住民の方にも協力してもらっている。道具だったらこの人に聞くというように、ある程度のネットワークはすでに確立しているように思う。また、全く関わりのなかった人も、作品制作を通じてサポートをしていく中で新しく交流や関わりが生まれることもある。そのように少しずつ、じわりじわりと交流が行われているように思う。

– その他の事業の目的や内容は？

S: 清掃活動に関しては、道路を掃除し、掃除した団体や会社がその道路に看板を立てるというアメリカで行われている「アドプト・アウェイ」という事業を日本で初めて導入した。

3. 事業の背景・経緯

S: もともと国際交流がメインである。1992年に青い目の人形をきっかけとした国際交流をスタートし、その後も外国人を受け入れるなど交流を継続してきた。県と神山村双方で国際文化村をつくるという構想が立ち上がった。県のほうはハコモノを造る事業であったが、我々も国際文化村について考えた結果、クリーンな環境をつくることと、現代アートを取り入れることになり、その後の国際文化村は清掃活動と芸術活動の2本立てで行っている。

芸術活動に関しては、その当時、わりと活発に行われていた「アーティスト・イン・レジデンス(以下、AIR)」を行っている。どちらの事業も現在も継続しており、13年目を迎える。

4. 事業の実施体制

S: 1998年にアートフォーラムを開催して、そのなかでAIR事業を行うことが決まり、1999年から事業が始まった。初年度は学芸員に来てもらい、AIRのやり方を教えてもらいながらやっていた。

2年目からは選考委員会から作品発表まですべてを我々がやることになった。たまたまその年に、武蔵野美術大学が神山でワークショップを開くことになった。そのつながりから、武蔵野美術大学の先生に選考委員と作品の講評を依頼している。

初年度は徳島県と神山村、文化庁の予算が入っており予算が潤沢にあった。徳島県とは日本文化デザイン会議や国民文化祭などの事業で関係は続いている。

K: 今は全体予算の約3分の1は神山村の助成であり、残り3分の2弱が財団からの助成、さらにグリーンバレーからも自主財源を充てている。全体の規模としては300万～400万未満である。人件費はイベント時の通訳を雇うくらいしか含まれておらず、ほとんどがボランティアである。

– グリーンバレーはどのような位置づけなのか？

S: グリーンバレーの事業のなかの一つとしてAIRがあるが、グリーンバレーと実行委員会は、関わる人は共通しているが別の組織である。当初はAIRという言葉を入れた名前で立ち上げようとしたが、それだと活動がかなり制限されてしまう。そのため新たに「グリーンバレー」という名前をつけた。団体の名前にAIRを掲げていたら、森づくりや移住者支援など、ここまでの広がりは見られなかっただろう。

– 地元の企業とはどのような関わりがあるのか？

S: 企業ではないが、神山温泉や、地元の大工や生コンの製造会社など、小さなところとはつながりがたくさんあるが、大手とのつながりはない。

K: 藍染をしたいという作家がおり、以前には藍の館や、阿波和紙伝統工芸会館に協力いただいたこともある。今年も、市内の藍染の染め師の方に協力をいただいている。

S:我々の活動はきちんとした体制ではなく、自分ができるときに自分ができることをできる時間にするというのが前提となっている。そのような形で13年間続いている。また、拘束がなく出入りが自由である。組織的にはコアメンバーは10人くらいではあるが、その人たちもべったりという訳ではない。

5. 事業による成果や効果

S:前会長とも話していたが、効果が出始めたのはここ最近である。2009年に山中カメラさんと呼んだときに、我々だけがサポートするのではなく、滞在する地区に協力をお願いしてみようということになった。その結果、その地区の方々がメインとなってサポート役となり、地域が一体となって盛り上がった。山中さんはその地域に今でも行き来している。それまでは目に見える効果を感じたことはなかったが、ちょっとずつ移住してくる人が増えたことも効果のひとつとして挙げられる。当初は作家が作品を作って帰るだけであったが、環境や面倒見がよいため、また神山に来たいのでアトリエはないかと言われることが多くなった。グリーンバレーでは移住支援センターの業務を委託されているが、地元のネットワークがあるので、行政がやる移住者の支援とは異なっているようにも思う。そのせいか移住者が徐々に増えてきている。しかし、空き家が少ないことがネックになっている。空き家や空き部屋自体はあるのだが、なかなか貸してくれない。神山に屋敷を持ったまま市内に移り住んでいる人が多く、たまに神山に帰ってきたいし、市内に持っていけない荷物も置いておきたいので貸せないという人が多い。最近では理解がある人が増えてきて、貸してくれる人が少しずつ増えてきている状況である。

K:グリーンバレーが移住支援センターの業務を委託されたのが2008年、イン神山のwebサイトが整備されたのも2008年である。それまで神山AIRの活動や神山町の取り組みなど、見えていなかった部分が見えるようになったのか、その頃から問い合わせが急に

増えた。

移住希望者が記入する移住希望登録書には、「なぜ神山に住みたいのか」という項目があるが、そのなかにかかれる神山の印象が、自然が豊かだというだけではなく、国際的な町というイメージがあるという感想や、AIR事業を行っているので人の出入りがあって面白いという感想が結構な割合で書かれている。これはレジデンス事業を続けてきた成果のひとつなのかもしれないと思う。

2008年あたりから、「ベッド&スタジオ」というプログラムを実施している。神山には設備の整ったアトリエがあるわけでもなく、宿泊施設もそのときに空いているところを使っていたので、必ずしも滞在条件が良いわけではないが、プログラムを開始したところ、以前神山に来たアーティストが訪ねてきたり、滞在制作をしている。こちらがサポートできる時期がレジデンスやイベントがない期間に限られるが、海外から自費で滞在制作していくという人も少しずつ増えている。

これは、2004、2005年に行っていた「パーシャルサポート」からの流れである。作家に自費で来てもらい、滞在場所やサポートをこちらで用意するというものである。選考に漏れた作家に自費でも来たいかアンケートを取ったところ、かなりの割合で来たいと答えたことに端を発している。

S:2004年、2005年あたりは予算が神山町だけになり、資金繰りが苦しかった。そこからパーシャルサポートを実験的に始めることになった。予算がなくてもある程度事業ができることが実証された。これまで事業に参加した招聘作家の中には結局神山に移住した人もいる。

ー 外から人が移住したり、外から神山のまちが評価されたりするにつれて、住民の意識が変わってきたか？

S:一般の住民の意識の変化はあまりないと思う。頻繁に人が来るので、今年誰が来るのか気になってはいるし、覗きに来る人はいる。ただ、地元の人が芳名帳には名前を書いてくれないので、来ているけれど記録には残っていない。

K: 芳名帳に名前を書いているのは鑑賞者の3分の1くらいだと思う。レジデンス事業にサポーターとして参加していないおじさん、おばさんと道で会ったときも、今年は誰が来ているとか、どこどこに人が移住したねという話をしているが、なんでそんなに神山がいいのだろうと不思議がる人が多い。

S: もともとお遍路さんの札所があり、通りすがりのお遍路さんを歓迎し、接待するという慣習がある。受け入れやすさや話のしやすさは土地柄ではないか。

K: 外国人作家も地元の食堂に通っているが、作家の少しの日本語と、食堂のおばちゃんの少しの英語で、あとは心で何とか通じ合っているみたい。

S: まちに全然知らない人が増えたことは住民も実感していると思う。

－ 海外からアーティストがやってきたときの子どもたちの反応は？

S: すでに国際交流事業でALTを招くなどしていたので、海外の方が来た驚きはそこまでなかったが、子どもたちは興味本位でアトリエを覗いていた。初年度の日本人作家の黒蔵壮さんは、子どもと一緒に作品を作るということで、子どもたちが彫るのを手伝ったり、子どもたちと一緒に船をプールに浮かべて乗ったりした。

K: 毎年の恒例行事になっているので、アーティストが課外授業に来たらそれを楽しんでいるという感じがある。私はこの事業に携わって5年だが、13年も継続していて、小学1年生だった子はもう中学生だろうし、中学1年生だった子は大学生になっている。その子たちの記憶には何か残っているのかなと想ったりはする。

S: 追跡調査はしていないが、誰かが作家になったらいいなという話をしていて、実際何人か作家になっているという状況が生まれている。絵を描く子や写真をやっている子、歌を歌っている子など、課外授業がきっかけになっているかどうか断定できないが、何かにはなっているのかなとも思う。

－ アーティストに関わる中で、驚いたことは？

S: ありすぎて何から話していいのか分からないが、使うものに自然のものが多くことに驚いた。私たちは

「藁」と言ったら、わらじとかむしろくらいは思いつくが、それが作品になるとは思ってもみなかった。田んぼ何反分の藁が必要と言われて必死で集めたけれどそれでも足りなかったということもあった。だんだんスケールが大きくなってきている気がする。一口に絵を描くといっても普通サイズのものから、大きな窓一枠全部に書くという場合もある。体育館の床一面全部にパフォーマンスで絵を描いていて、それでも絵になっているのは不思議であった。

K: ある外国人アーティストが駐車場のアスファルトの張り替え作業を見て、その廃材を利用して作品を作っていたのだが、彼がアスファルトの破片を毎日積み上げていく様子を、いつもは展覧会に来たことはない近所に住むおじさんが毎日見にくるようになった。おじさんとアーティストは言葉の違いもあり、会話は成立していないのだが、毎日制作を見に来て、何かやりとりをしていた。最終的に作品は安全面の関係で撤去されてしまったのだが、「それなら自分の家の庭に作ってもらえばよかった」と悔やんでいたことがあった。このように個々のエピソードはある。

－ 神社に作品を展示した際に、最初は難色を示していた神主さんが作品をみて喜んだとお聞きしたが？

K: 作品プランに関して、作家と神社と私たちで食い違いがあった。作家から作品プランを聞いてそれを通訳していたつもりだったが、デッサンもなかったのも、まさか拝殿の中に作品を置き、拝殿も布で覆い隠してしまうとは思っていなかった。その地区の代表の方々から反対されてしまったが、展覧会まで日がせまっており、どうしようもない状態だった。やりとりの最中に作家が照明をつけたら、神々しくきれいな作品だった。それを見たその中の一人が、「こんなにきれいなものもない」と言って、承諾してくださり、なんとか神社で展示できた。

－ 交流人口が増えたことによる経済効果はあるか？

S: 経済効果はあると思うが、きちんと調べていない。

– 神山のまちのブランディングにAIRが与えた効果は大きいのではないか。始めた当初はそのような効果が出るとは思っていなかったのではないかな？

S: 作家がどんなものを作るのか、その工程や作家の
人柄を見てみたいという好奇心が一番大きかった。
我々としてはその気持ちが積み重なっているだけだ
と思っている。

6. 現在の課題、将来のビジョン 等

S: 最初に実行委員会の会長に就いたときは、まちの
あちこちに作品があるという光景を描いていたが、
何年か前に移住したアーティストが中心となり、商
店街の店先や民家を使い、住民との協力で作品を
展示したりと新しい動きも出てきた。これからは作家
だけでなく町民も含めて、普通の民家の外にちょっ
と作品が掛けられているような光景が見られればと
思っている。大学の学生と連携していきたいと思っ
ていたところに、武蔵野美術大学や東京芸術大学
をはじめとする学生たちが、大勢神山にやってきて、
事業を行うという流れもできている。また、人材育成
事業の一環として開いている「神山塾」も2期目にな
り、定員15名のところに30名の応募があるような状況
もある。これらができているのも交流と人とのつなが
りが大きいように思う。

(3) KAIR実行委員へのインタビュー①

日時:2011年9月25日(日)16:00~17:00

場所:神山村農村環境改善センター

対象:森昌楓、中原亨、栗飯原康史(KAIR実行委員)

1. 自己紹介

栗飯原(以下、「A」):郵便局に勤めて43年7ヶ月が経った2003年に退職し、今は農業をしている。アーティスト・イン・レジデンス(以下、AIR)が始まる以前の、1991年から行っている国際交流事業である「青い目の人形」以来ずっとグリーンバレーの活動に関わっており、現在に至る。

中原(以下、「N」):元学校教員で神山中学校の校長を務めていたが、2003年に退職した。スタート時の神山AIRの事業では、かつては少子化によって使われなくなった教室をアーティストのアトリエとして使用していた。当時、私は神山村にある神領小学校の校長を務めており、校長室の隣が作家のアトリエだったことから事業に関わり始めた。

作家が来たら町民はお父さん役、お母さん役となる。英語は得意ではないのだが、言葉は通じなくても互いに通じ合うことはできる。そういうところが面白い。神山は昔から国際交流が盛んであり、外国の方が来ても臆さずに前に出ようという町民性がある。これは今まで我々が活動してきた実績のひとつであると自負している。

森(以下、「M」):普段は「コットンフィールド」というキャンプ場を営んでいる。神山AIRに関しては、第1回から第7回までの実行委員長を務めた。キャンプ場はもちろんだが、AIRによって、芸術や文化をツールにして、地域に若い人がたくさん訪れて、地域が活発になればいいなという思いが事業を始める前からあった。

2. 事業の目的・内容

– 「お父さん、お母さん制度」についてご紹介いただきたい。

N:「お父さん」というのは作家が必要な資材の調達や作品の買出しの世話をする役で、「お母さん」というのが生活全般のサポートをする役である。

– 事業の目的や基本軸として、「これがズレたら関われない」という点はあるか？

M:事業を始めて3年目に、作家のためのレジデンスなのか、美術館の学芸員のためのレジデンスなのか、我々のためのレジデンスなのかという問題にぶつかった。実行委員会の中にもいろいろな意見があり、そのとき意見が違っていた人は降りてしまい、今は関わっていない。それでも我々のやりたい方法でやる、それでだめになるようならレジデンスを始めた意味もないし、やる必要もないという考えに至った。自分たちのレジデンスであるから、自分たちが興味のある作家を選んで、地域で交流してもらうことが最初からの目的だった。作家を選ぶ方法も、小学校をアトリエにするということも交流ということが原点にある。それだけは絶対に譲れない。それが続いた理由でもあると思う。

手伝ってくれる人の中には新しく神山村に来た方もいる。神山で始まったレジデンスであるが、今は後から移住してきた人の力によって続いているようにも思う。

3. 事業の背景、経緯

M:神山を含めた徳島県の中山間地域に国際芸術村をという構想が起こったが、県もどういふものなのかよく分かっていなかった。そこで、私たちの想像する国際文化村はどういふものかを話す中で、私は芸術家のアトリエが多くあり、芸術家がたくさん住んでいる村なのではないかと考えた。それもあって、実行委員長に就任した。AIRという言葉を知ったのは、それから1年も後のことである。

また、芸術だけではなく地域そのものも美しくならなければいけないということで、環境プログラムである「アドプト・ア・ハイウェイ」を大南さんが提案した。そこから、とにかく第1回のレジデンスを素人だけでやってみた。

N:最初の3年ほどはインターネットがあまり普及していなかったが、インターネットが普及するとともに、だいたいの情報が広がるようになり、応募者が増えた。

ネットの発達とともに、レジデンスやNPOも発展してきたと言っても過言ではない。いい情報も悪い情報入ってくるので、上手に活用していこうと心がけている。やり方は先端的だが、内容は先端的ではない。そこが田舎らしい独特の魅力をつくっている。

－なぜ、文化・芸術をツールにしようと考えたのか？

M: 若い人が興味を持ってくれるということが大きい。地域外の人が訪ねてきてくれるのは文化・芸術だと考えた。また、地元にとって文化・芸術が一番遠い存在だったので、我々もそういう世界を知りたいという興味があった。

軽井沢や清里は何十年も前から創造的な人が住んでおり、若い人がたくさん来ている状況がある。明石海峡大橋が架かったら、神山も関西の軽井沢になるのではないかと思いがあった。

最初は、クリエイティブな人をとにかく呼んできて神山に住んでもらい、彼らの作品を見に来る学生や先生といった若い人が地域を闊歩する姿を想像していた。

N: 瀬戸内海の直島も漁業を中心とした小さな島だが、今はベネッセが加わってアートの島となっている。あれも最初から成功していたのではないと思う。何十年にもわたる住民の意識改革を経て、今のような成功を収めているのではないのだろうか。神山も13年目を迎えるので、町民の意識もだんだん改革されてきていると実感している。

4. 事業の実施体制

N: AIR事業は世界的な事業のひとつであり、日本でも何十箇所で行われているが、大半は市や財団がバックアップしているものである。神山の場合は、アートの「ア」の字も知らない素人集団が立ち上げたこと、そしてそれを13年間も続けてきたことに大きな特色がある。実行委員が単なる素人集団の組織ではないということ、今から5、6年前にNPO法人グリーンバレーを立ち上げた。

－素人がやっているところの強みは何か？

N: 役所がやった場合は、事業が続いたとしても2、3年であり、報告書を出してそれで終わってしまうことが多い。神山の強みは継続性である。

もちろん、神山町は高齢化が進んでいることもあり、インスタレーション作品などはなかなか理解してもらえない。初年度は学校にアトリエを作ったが、それによって、子どもたちが作家の制作活動を直に見ることがや制作を手伝うことができ、子どもたちを通じてAIRのことをPRできた。2001年に大阪の小学校で殺傷事件が起きたことで、学校で外部の人が出入りすることが難しくなり、地域内にアトリエを移したが、初年度に校内にアトリエを構えるときには、私は進んで受け入れた。

M: 神山の場合は、他のレジデンスと目的が違う。他は予算ありきで事業がスタートしているところが多いように思えるが、神山ではお金がなくてもなんとかやってみようというスタンスで始まっている。初年度はお金が全くなかったの、町民から1,000円を募金して会員になってもらうというやり方で三十何万ほど集め、新聞社や町に補助金をお願いしてスタートした。2年目からは文化庁の補助金を申請してみようということで、5年間の補助をもらい活動を行った。補助金があったおかげで作家に対して自信を持って宣伝できた。

N: お金の問題はいつもつきまとう。多いときは文化庁と徳島県と神山町の3者から補助があったが、どんどん打ち切られて今は神山町と財団からの助成金でまかなっている。今も資金繰りは苦しい。

M: 資金繰りが苦しいということもあり、NPO法人を立ち上げてきちんと資金調達をしようということになった。最初は「アドプト・ア・ハイウェイ」と「AIR」の2つの事業から始めたが、武蔵野美術大学のインターンシップを受け入れたり、野外ポスター展を行ったりというようにアートに関連する事業は様々な形で発展していた。そこで、事業のすべてをNPO法人が統括し、AIR事業はそのなかに含まれるという形にした。

N: 実行委員とNPO法人のメンバーはだいぶ共通してはいるが。

M: NPO法人になってから移住者支援事業なども始まり、事業の幅はだいぶ広がった。

－ 行政に求めることは何か？

M: やはり資金を提供してほしい。

N: これまで継続してきて、神山町があらゆる面で活性化していることが見えているので、文化・芸術に対する予算が減っていく中で、神山町自体は補助金を出してくれている。

M: 文化・芸術は結果がすぐに見えない。道路を新しくしたというように目に見えない。「毎年100数万円を出しているけれど、何になっているのか」ということになりやすい。しかし、最近はいろいろなところから神山町がアートのまちだと認識されつつある。目には見えないけれど、よその人にはそう映っているのではないだろうか。だから神山町がAIR事業に対する予算をゼロにすることはできないと思ってきているのではないか。それが今までやってきた価値である。

N: NPOがないときは教育委員会で事務局を置いていたが、NPOになったこともあり、その団体がきちんと事業を実施せよということで教育委員会からNPOへと事務局が移った。

－ 行政の下請けという意識を感じることはあるか？

M: 現在、神山町農村環境改善センターの指定管理者となっているが、上手に管理することで、人件費が出るし、事務所としても利用している。指定管理者制度を利用してNPOが運営することで、町にとっても人件費が抑えられて、きちんと管理する団体が入っているのでもいいのではないか。下請けという意識を感じたことはないし、町に利用されるだけの存在ではないと思っている。

5. 事業による成果や効果

A: 現在就業訓練プログラムとして「神山塾」を行っている。自宅に塾生が2人泊まっているのだが、海外から来るアーティストのために英語の案内地図を作成している。いいことをしてくれるなと思っている。

N: レジデンス参加後に神山に移住してくる作家が何人かいる。

インターネットを通じて世界にレジデンスの募集をし

ているが、少ないときは十数人ほどの応募だったのに、200人ほどになる年もある。応募数が多いときは我々である程度まで選考して、武蔵野美術大学の先生の助言をいただきながら、最終選考をしている。武蔵野美術大学とは長い付き合いである。また、最近では京都造形大学の先生もプログラムを応援してくれている。

M: 作家を選んだり、呼んだりするときにレジデンスの特徴が出てきている。作家を選ぶ基準について、ある美術館の学芸員さんは、「有名で名の知れ渡った作家を呼ばなければ、そのレジデンスは長続きしない」と言っていた。我々のレジデンスの目的は有名な作家を呼んできてその地域が有名になることではない。地域と交流してくれて、十分ではなくても地域住民がある程度アートのことを理解でき、来た人も地元の良さを分かってくれるような作家を選んでいく。いい作品を作ってもらおうというのは半分くらいで、地域といかに交流してくれるということにも半分くらいのウエイトを置いている。

選ぶ人がその作家の作品に対してどれだけの興味があるかということが基準となっている。選考委員はみんな一票ずつ票を持っており、票を集めて選ばれた作品はみんなが一番興味のある作品である。だからその作品に思い入れがあり、作品ができる過程に関わりたい、手伝いたいと思う。作家も地域からの協力が一番得られる。その結果、作家も神山に来てよかったと思ってくれる。それが神山のレジデンスが長続きしたり、応募者が増えたり、後から移住してきたりする理由ではないだろうか。

N: 毎年約3名のアーティストを招聘しているので、今年までで40人ほどのアーティストがやってきている。ランドアート作品はもともと外に置くことを想定して作られているが、絵画や写真の作品管理に関してはまだまだ課題がある。そこで、神山温泉などの公共施設に貸し出したり、廃校になっている学校をAIRの美術館として利用したりしている。

－ AIRを始めるにあたって、作品を収蔵する美術館や、アーティストの宿泊施設、アトリエといったハコモノを

造っていたら今とは全く違う状況が生まれていたのではないか？

N: 国際文化村の構想が出ていたときはハコモノを建設する計画であったが、経済的な事情でできなくなってしまった。しかし、どこかに美術館ができたり、ホールができたりすることは、実は我々にとってはどうでもいいことである。やっていく中でどうしても必要だったら後から造れば良いという考えでやっている。ハコモノよりはソフトである。

レジデンスの応募要項にも、立派な施設がないことは明記している。その代わりに、地域との交流やサポートはよその地区に負けないことも謳っている。

A: 反省会を開くときに作家からの声も聞いているが、こんなにサポートをしてくれるところはない、と言われることもある。自分たちで選んだ作家をきちんとサポートしなければいけないという意識がある。だから来た作家は「神山は良かった」と言って帰っていつてくれる。

N: メーリングリストがあり、作家が必要だといったものはすぐ用意できる体制である。作家が寒いのでストーブがほしいと言っていたら、お父さん役がすぐにメーリングリストに流す。そうしたらすぐに誰かが持ってきてくれる。

－ 中山間地域には、住民が自分の土地への意識が強く、排他的な雰囲気のある地域もあるが、神山は新しい人の受け入れ方が柔軟ではないだろうか？

N: 神山にやってきて、神山のファンになった人はみんなそのフレンドリーさに驚く。

M: 神山から出て行く人は、経済的な事情もあるだろうし、止めることができない。だからこそ新しい若い子が神山を好きになって、神山に入ってくれるならこんなにうれしいことはない。そういう人が集まれば必ず地域は変わる。

A: お遍路さんの文化があるので、町外から来た人を受け入れてお接待する気持ちが自然と備わっているのではないだろうか。

M: 国際交流協会も早くからできて、外国人をはじめとするよそから入ってくる方を歓迎し、排他的にならずにすぐに受け入れる風土がある。

N: 県からの予算がなくなったため、現在は行っていないが、今から5、6年前に「神山ウィークエンド事業」というのを行っていた。これは夏休みを利用して県内にいるALTを神山に招き、研修会を行うというものであった。30人～40人が神山町内のお宅に1泊ほど泊まっていくというのを10年くらい行っていた。それもあってか、外国人に対してもフレンドリーに接することができていると思う。

M: レジデンスや国際交流が盛んに行われる前までは、外国人やアーティストに対して畏れ多い気持ちを抱く人もいたかもしれないが、今はそんな様子は見られない。もしかするとレジデンスや国際交流事業の成果なのかもしれない。

アーティストとは常にオープンでオープンな関係が築けている。むしろこちらが積極的にサポートすることに対して尊敬してくれることもある。また、制作の様子を手伝う中で、こんなふうを作るんだと学ぶこともある。こちらが与えるばかりでなく、こちらも与えられている。

－ 作家の活動を目の当たりにした子どもに何か変化は見られたか？

N: 将来アーティストになりたいという子どもが1人でも2人でも出てほしいと思っている。子どもたちは作家と一緒に給食を食べるなどしながら交流を深めており、非常に喜んでいる。今の学校のカリキュラムには総合的な学習の時間が設けられているが、AIRが授業の題材を提供してくれている。

M: 1年や2年で子どもにすぐ変化が見られることや、変化を期待して活動しているわけではない。それよりも、子どもが大きくなって、外国に行ったり、作品を見たりするときに、「昔こんな人が来て、自分はこんなことを手伝った」とか、「あんなこと教えてくれたよな」とか思い出して、アートを少しでも身近に感じ、また、外国人と気軽に話してくれるだけで十分に効果があると思う。

－ どんな授業があったのか？

N: 図画工作の授業をする人が多いが、中にはギターを弾き語りながら自分の生い立ちを語ったアーティストもいた。子どもたちには大受けだった。

6. 現在の課題、将来のビジョン 等

N:我々も年配になってきたので、これからの将来を見据えたときに、若い人をどう育てていくのが重要になってくる。移住交流でやってきた若い人がサポートに入ってくれること、これ以上にありがたいことはない。

A:若い世代へと世代交代がうまくできていけばいいなと思う。

M:この事業を継続していけることである。

N:ここへ来た作家が神山のレジデンスを踏み台に躍進してほしい。我々は跳び箱の踏み切り板みたいなものだ。

M:次世代の地元の人間が興味を持って加わってくることが一番ではないか。すでに関わり始めているが、どんどん仲間を増やして、ここに住もうと思う人が事業を続けてくれればありがたい。地元のことに協力して、地元の後継者と言われる立場となって、地元に着目した中で新しい考えを入れないと評価されない。

7. 文化・芸術を活用した地域活性化について

－ 芸術家ならではの見方、発想に出会うことはあるか？

M:そこが一番面白いところである。これに興味がある。

N:こういう発想をするのかとびっくりすることがある。

M:我々が日常的にやっていることでも、アーティストの視点で見たらすごく素敵なことなんだと気付かされる。感性の交換みたいなものではないか。

N:よそから来た人から、逆に神山のよさを教わることも多い。住んでいたらなかなか見えない。そういうことも長年やっていたメリットである。

－ AIRがあったことで自身に変化はあったか？

M:自分がどう変わったか、なかなか計りにくい。

N:現代アートは最初の入り方がとても難しく感じるがだんだん受け入れられるようになっていっていると思う。

M:「これもありなんだ」というように、どんなことでも受け入れられるようにはなっている。

A:芸術は遠い存在だと思っていたが、こういうことに関わって身近に感じられるようになった。作品も最初はどこがいいのか全然分からなかったが、作品が、一人ひとりの感じ方が違うことを訴えかけていることが分かった。

－ アートの専門家ではないからこそ、アートを特化することにこだわらなかった。そのことが結果として文化芸術の活用につながったのではないか？

M:人を通じた地域おこしがしたかった。アートはひとつの手段、材料である。

N:去年、独立行政法人国際交流基金から地球市民賞をいただいたのは、その活動が認められたからこそだと思う。

(4) KAIR実行委員へのインタビュー②

日時:2011年9月25日(日)15:00~16:00

場所:神山町農村環境改善センター

対象:佐藤英雄、河野公雄、岩丸潔(KAIR実行委員)

1. 自己紹介

岩丸(以下、「I」):最初は国際交流やアドプトプログラムやアーティスト・イン・レジデンス(以下、AIR)を自分でやっていたが、現在は、AIRの事業はグリーンバレーの活動の一部として行っている。移住者や町外からの支援者がグリーンバレーの活動を通じて、AIRの活動も支えているので、その関わりが最近が多くなってきた。

AIRの事業に関わって13年になるが、地元のおじさん、おばさんとともに地域を盛り上げてくれる町外参加者がだいぶ増えた。

初年度からAIR事業に関わっているが、初めは作家が集まらずに苦労した。出来るところまでやってみようかという感じで始めたので、逆に言えばいつやめてもいいなと思い、無理せずにやっている。集客を望まずに、世界的に有名にならなくてもいいというスタンスである。

最初は、アーティストを迎えてよく飲食をともにした。作品に関してはよく分からないので、制作にはノータッチで、主に生活面のフォローをしていた。仕事は衣料品店を営んでいる。今までアートと無縁な土地でアートと無縁な生活をしており、コラボレーションやインスタレーションと言われても全く分からなかったが、人を呼び込むにはアートが面白いと直感的に思った。淡路島や高知県の土佐村にも視察に行き、自分たちだけで出来る範囲でやっていたということで始めた。

佐藤(以下、「S」):AIRの実行委員会副会長を務めている。職業は地元で建材業を営んでいる。作家がこういうものがほしい、こういうものがしたいと言ったときに、実際にその作業ができるように大工を紹介したり、材料を調達したり、作家とプロフェッショナルの間をつなぐ接点として関わっている。アーティストのお父さんのような役割である。

AIRに関わるまでは、スポーツばかりの体育会系の人間だったので一番対極にあるように思われるアートに携わるとは夢にも思わなかった。しかし、こうして13年活動が続けてみると、休日には美術館に行くなど積極的にアートに関わるようになっていた。

森づくりを始めたあたりから、町民の意識が変わってきたと思う。少しずつ活動が認知されるようになってきた。

2009年、2010年のレジデンスのオープニングパーティーは、昔は劇場として使用されていて、今はアーティストの制作・展覧会場として使われている劇場「寄井座」という場所で、市内のジャズバンドを招きコンサート兼ウェルカムパーティーを開催した。そのときには地元の商工会の方にも関わっていただき、実行委員やサポーターの方以外の町内の方々にも参加いただくなど、徐々に交流もみられて反響も大きくなってきたように思う。

河野(以下、「K」):現在、グリーンバレーの事務局長をしている。元銀行員であり、今年の3月に定年退職。神山町の生まれである。高度成長期の頃の銀行員であり、仕事ばかりの生活だったが、1991年に父親が亡くなり、長男ということもあって実家に帰ってきた。グリーンバレーのメンバーとはそれ以来の付き合いである。銀行というのは効率や合理性や生産性を追い求める場であるが、それに疲れていた部分があった。自分にとってアートは癒しや息抜きであった。

時代の流れとして西洋の合理主義や効率が息詰まってきたので、アートとかそういう分野に目が向き始めていると思う。そう意味では神山は先見性があったと思う。

I:たまたまこういう形になっただけである。いろいろな面で協力者がどんどん増えてきた。

K:携わるスタッフは理屈をあまり言わず、体育会系の人が多いと思う。芸術家やキュレーターがコアで関わっていると、それぞれの理屈があっていがみ合うこともあったかもしれないが、我々はアートをよく知らないし、昔からの顔見知りである。その点であまり理屈を捏ねまわさず、アバウトな感じできた。それが結果的によかったのではないかな。

2. 事業の実施体制

I: 役所には頼らないようにしようというのは決めていた。役所が関わるとお金の切れ目が事業の切れ目になるし、物事を決めるのにも時間がかかる。我々だけで今日決めたことは明日、あさってには実現できるけれど、県や町を通すと手続きに時間がかかる。初めに事務局さえてくれたら後は我々でできると思った。

人間は自分ができなかつたら誰かがフォローしてくれるようになっていく。助けてくれるメンバーに素晴らしい人たちが集まってきているのが現在の状況である。始めた当初は通訳を探すのも一苦労だった。しかし、気付いたら通訳のできるスタッフがどんどん増えてきている。

アートのまちというイメージが固まり始めたら、芸大や美大、海外で活躍しているアート系の人たちが神山で何かしたいと言って問い合わせるようになった。スタッフはシンプルに対応し、すぐに、それならここでやればいいと、どんどん話を進めていく。その人が活躍できる場が生まれ、なんとなく成功していくことで、その人が友達や知り合いを呼んでくる。渦巻きがどんどん大きくなってきている。

なんで神山に人が集まるのかという話を来訪者としていたら、やはり「人」だと言われた。神山には人を受け入れる素地があるので、みんなが来てくれる。こういう田舎は日本の各地にあるが神山はほっとするそうだ。自分の存在を認めてくれて、自分の活躍する場があることが大きいと言っていた。そうしようと思っているのではなく、我々は自然体で接しているので、いまだに何で人が来るのか分からない部分もある。

－退職者の地域コミュニティへの参加が社会的な課題となっているが、グリーンバレーの活動に入ってくるのに抵抗や入りにくさはなかったか？

K: 仕事を100%している中で、ぱっと入ってくるのは難しいと思うが、私は仕事をしていながら週末はグリーンバレーの活動に関わっており、以前から接点を持っていた。だからそこまで難しさは感じなかった。

来やすかった理由として、週末に来る約束をしていてそれがだめになったときでも誰も文句を言わなかったことがあると思う。何事もなかったようにしてくれたことが何度となくあった。

－地域活動や文化活動では男性よりも女性の参加が多くみられるが、神山町では男性の参加が多いのはなぜだろうか？

K: それは都会の話だと思う。

I: 隣の村は女性の方の参加が多いと聞かすが、地域によるところはあると思う。たまたま男性が多いというくらいのものである。

S: 予算が限られているので、その予算をカバーするのは手間だという考えが実行委員の間では浸透している。手伝えるところは役員が手伝っている。作業が力仕事となることが多いのもあり、どうしても男手が必要となるのではないだろうか。

I: アートのことだけではなく、生活サポートのシステムができあがっている。たとえば、町外から来て家を改修したいという人が、カーテンがないと言ったら持ってきてあげたり、ゴミ類を持って帰ってあげたり、ご飯の世話をしたり、アーティストだけでなく町に来る人に対して世話をするのが自然な形になっている。だから来た人も居やすい。常に誰かが誰かをサポートをしているのがこのあたりの人の生活のシステムになっている。みんな感心するぐらいよく世話をしている。

神山塾の塾生が、1期は13名、2期は17名来ているが、この人たちに対してもみんなが優しくしてあげている。これにはアーティストが来て作品制作を手伝った経験や、国際交流でいろいろな外国人を迎え入れた経験が積み重なっていった結果である。人を受け入れるノウハウと寛容さが備わった。

I: 誰に何を頼めばいいのか分かっているのも、トラブルがない。

3. 事業の背景、経緯

－2005年に資金が少なくなり、活動が厳しくなったとお聞きしたが、どのように乗り越えたのか？

I: 文化庁の予算が終わってしまつときである。アーティストの人数を減らすか、報告書をもっとシンプルなものにしようという話もでた。あちこちから少しずつ助成をもらい、なんとか続けた。資金繰りがきついのは今でも変わらない。

K: いつも綱渡りだ。それでも、今までなぜか知らないがうまく渡っていている。

I: いつやめてもいいといいながらも、やめるわけにはいかないという思いはあった。

K: やめたら二度とできないだろうと認識があった。細々でもやるだけやってみようという方向性だった。

I: 学校関係も協力的に動いてくれた。これといって危機というのを感じたことはない。やめようと思わなかった。

過去に途中で帰った作家は1人だけいたが、それはそれで仕方がないと思っている。選ぶ際には顔も分からない、もちろん性格も分からない。ましてや選んだ作家3人の相性なんて分からない。精力的に作品を作ってくれる作家もいたり、いろいろだと思う。

－ 選考員全員が作品すべてに目を通してプレゼンテーションするとお聞きした。

I: プレゼンテーションをしたのは今回で2回目である。

S: 様々な理由から、選考会に参加する実行委員が担当を決め、作家のプレゼンテーションをする形を始めた。

I: それでも今まで続けてきて、慣れてきたこともあるのか、少しずつ視野が広がってくる。

S: それにしても、アーティストはみんな人がいいのかなと思うくらい誰を選んでもいい人がくる。

I: 日本人作家応募が1人もいなかったときは、アーティストに直接電話をかけてレジデンスに来てもらったこともあった。最初の3、4年は作家が集まらずだいぶ苦労した。やっていくなかでいろいろ反省もして、やり方を試行錯誤している。

始めた当初に学校関係が受け入れをしてくれたことはありがたかった。作家のアトリエが学校内にあったので、何か問題があったときだけ動けばよかったということもあり、案外楽に回っていったように思う。作

品を子どもたちと一緒に作ったこともあった。今は地域内にアトリエスペースが確保できたので、学校内にアトリエはない。作家が子どもの声やチャイムの音が気になり、夜しか制作できないという状況も生まれてしまい、学校では続けるのが難しくなってしまった。今は課外授業という形で関わっている。

－ 地域にアトリエができたことで、学校にあったときよりも地域との接点が増えたのではないか？

I: 学校を離れてから地域との接点は増えた。それまでは、作家が作品を作る場所も限られていた。

4. 事業による成果や効果

－ なぜ、アートが面白いと感じたのか？

I: 結果がないから。結論が出せない。見る人によって、いろいろな考え方、見方、表現ができる。人間というのはわけの分からないものに一番興味がある。なんとなく神山の土地に合いそうでいいなと思った。徳島県のどこでもやっていないのも、始める動機としてあった。

－ 外部から移住してきた方が、「AIRは地域に開く窓だった」と言っていたが、どのように考えているか？

I: 移住に関してもAIRの存在は大きい。

S: 現在、IT関係の企業も移住してきている。企業は来てほしいがアートはいらないという意見もあるが、彼らが移住を決めたのはアートもあるからである。アートがなかったら神山はただの田舎であり、そんな田舎は全国どこにでもある。アートを含めいろいろな活動をしており、いろいろな人が来るということが神山の面白さへとつながっている。連鎖反応でいろいろなことが起きている。また、長年続けてきて、それがどのように変化するかという楽しみもある。

－ AIRを始めてみて町の人はどう変化したか？

S: 法事などで町外からやってきた人が、口々に「神山ってすごいな」と言う。そのことによって町内の人も「神山でこんなことができてるのはすごいんだ」と思い始めている。神山でやっていることが町内外にだいぶ伝わってきたと実感している。

I: 楽観的と言われれば楽観的だが、全員賛成してくれなくても、自分たちが「これが一番いい方法だ」と思ってやっているの、それでいいと思っている。無理してまで反対する人を説得しようとはしていない。

K: 田舎なので60代、70代の人が多いが、それくらいの年の人の価値観を変えるのは無理である。アートが何の役に立つのかと聞かれて説得するのは困難である。

I: 中にはアートで金儲けをしるという人もいる。反対する人はどこでもいるのでほっといている。

S: 神山温泉はレジデンスに訪れたアーティストも含めて外国人がよく利用するのだが、地元住民は日本語で平気で話しかけている。それを考えると神山市はかなり外国人慣れしている。AIRをする意味が分からないという人もいるけれど、国際交流という点ではかなり貢献しているのではないかな。

I: 神山は東京より英語をしゃべる機会が多いと言う人もいる。

ー サテライトオフィスや移住支援によって神山に企業や店舗が増えて、雇用が増えることで、将来、神山出身の子どもたちが地元で仕事をする機会が増えるのではないかな？

I: 地元採用が増えれば、地元に住続ける人や帰ってきてくれる人は増えると思う。しかし、この町が好きでこの町にきたいという人を優先的に住ませたほうがいいという意識もある。私たちの年代は地元に残って何かをするという意識が強かったが、今は海外も含めて住もうと思えばどこでも住めるし、職業のシステムも変わってきている。都会のほうが羽ばたけるという人もいるし、田舎暮らしのほうが合うという人もいる。価値観の違いがあるのは構わないので、戻ってくることを無理強いしたくない。

S: 昔は遊ぶときも川で鮎を釣ったりしていたが、今は子どもたちが忙しくなり、神山の自然で遊ぶという体験をしていないまま市内の高校に行ってしまうこともあるように思う。そうすると都会の子と生活が大して変わらない。だから神山に対する愛着が薄くなってしまっているのではないだろうか。そういう点でも私たちのと

きとは感覚が変わってきている。むしろ都会の人のほうが、よりいっそう神山のことをいいなと言ってくれるのではないかなと思ったりする。いいと思う人に神山に住んでもらうしかないのだろう。

5. 現在の課題、将来のビジョン 等

K: 140万円弱を町から補助金としてもらっているが、「アートで飯が食えるか」、といういまだに根強い反対意見があるということもあり、議員さんに案内を出したりしている。

インターネットで発信している様子を見ると、町のみんながこの事業を応援しているようにも見えるが、現実の世の中には依然として反対する人はいる。全人口の中のアーティストの割合を考えると、それは当然のことであると思う。もちろん、芸術や文化に力を入れているというイメージはついてきたと思うので、やっている意義は感じている。

ー 若い世代になって地域外に出る人が多くなってくると、こういったネットワークの維持が難しいのではないかな？

I: 次の世代は違うかもしれないが、余力がある限り自分は頑張ろうと思う。しかし、息子世代に無理強いするつもりはない。なんでもいつかは消えるものであるから、そこにしがみついてやろうとは思わない。

S: 次の世代がなかなか育たない。しかし、楽観主義なのでなんとかかなと思っている。また、移住してきた層は神山やこの活動が好きで来ている。地元だけにこだわらず、よそから移住してきた人とジュニア世代がちょっとずつジョイントしていけばいいと思う。

ー 地元住民と外部から来た人では価値観の違いがあり、地域内に外部から人をいれたくない、または外部からは地域内に入りづらいといった問題があると思うが、どのように対処しているかな？

I: 表立っては出ていないが、細かな問題はいくらでもあると思う。どれだけ妥協点を持っていけるかが大切である。

S: 不動産屋を経由して個人的に移住してきた人は地域のコミュニティとはほとんど接触がないが、グリーンバレーが紹介をして移住してきた人に関しては、若い人も集落の会に入ってもらい地域との関わりを持ってもらっている。トラブルもあるかもしれないが、そういう点では住みやすいのではないかなと思う。

I: 入っていてもいいところと、入ってはいけないところは個人個人で違うので我々も分からないところもあるが、とりあえず大きなトラブルは今まで起きていない。

6. 文化・芸術を活用した地域活性化について

I: 垣根をできるだけ作らずに人を受け入れる場所になっていかないと日本の田舎は伸びていかない。田舎であっても保守的にならず開放しているべきである。そういう考えに至ったのも、AIR事業をきっかけに移住者が増えたことがある。彼らの話を聞くことで移住してきた人が何を求めているか分かった。交流によって私たちの意識も変わってきた。

住民の意識を少しずつやわらかくしていき、開放的な環境をつくっていくことが私たちの仕事だと思っている。前よりも貸してもいいという大家さんが増えてきたことは意識が変わってきたということだと感じている。

K: アーティストは人とは違った見方や考え方を提示してくれる。いろいろと刺激を受ける。また、アーティストの、例え経済的に難しい状況であっても、自分の時間を確保して自分の作品を作りたいと思う姿勢には驚かされる。

S: 第1回のアーティストは森さんの経営しているコッソフィールドのコテージに泊めていたが、朝10時頃に迎えにいったときに、3人が腹ばいになって談笑していた。そのときゆったりした時間の流れを感じたことは忘れられない。関わり始めたばかりでアートのことはよくわからなかったが、「アートってええなあ」と思った。

I: 住みたい人に住んでもらうしか田舎が生き残る道はないと思う。やわらかく、一人ひとりを受け入れる気

持ちを持たないといけない。無駄な抵抗かもしれないが何もしないよりも何かをしたほうがましだと思う。

K: 「10年住んだら家賃が半額」、というように定住のためのプログラムが用意されているところがあるが、それではなかなか大変だと思う。公のところはそれなりにお金を使うので、どうしても見返りが必要になってしまう。難しいとは思いますが、もっともったいい加減さがなければいけない。半年しか来ないとか、定住という姿勢が見えない人でもどんどん受け入れていかないと。いろいろな形でもっと人が来てもいいのではないかなと思う。

田舎の悪いところは澁みにある。人がほとんど変わらず、地元有力者が代々根を張っている。いい人がトップだったらいいが、頭の固い人が地域で力を持っていると、お伺いを立てても何も進まない。そういうところに新しい人をつつこんでかき回していかないといけない。

－ どれくらいまで新しい人が増えきていると思うか？

I: 100分の3くらいである。今後も移住交流を進めてゆきたいと思っている。田舎に移住するための条件がいくつかある。こちらに空き家があり、大家さんがこちらに住んでいないが快く貸してくれる、バストイレはある程度まで整備されている、家賃が安いなどである。その条件を満たしていないと人が寄ってこないの、住環境の整備は必要である。今のうちから環境をどんどん整備していけると思うし、しなければいけないと思う。

－ やっていてどんな点に楽しさややりがいを感じるか？

S: この年になって様々な世代の人たちと一緒に交流できるのは楽しい。

I: 若い世代の人たちと接するのはとても楽しい。話題が新鮮で、病気やぐちなど暗い話にもならない。また、成果が出てきていることはうれしい。苦しいときもあるが、全般的には楽しみながら、学びながらやっている。

(5) 町長・教育長へのインタビュー

日時:2011年9月26日(月)10:00~11:00

場所:神山町役場

対象:後藤正和(神山町長)、河野善行(神山町教育委員会教育長)

1. 事業の背景、経緯

後藤(以下「G」):神山アーティスト・イン・レジデンス(以下、KAIR)は、行政は見守るという形でやっている。当初、住民は新しい試みが始まったという目で見ていたが、さすがに13年も続くとみんな慣れてきたのではないだろうか。参画される人の中にはかなり深い関わりをしている人もいる。住民にとっては芸術、特に作品にはずっと心に入ってくるものとそうではないものがあるので、必ずしもみんなが理解できるものにはなっていないが、そういった世界をまず見るということが重要である。

2. 事業の実施体制

河野(以下「K」):最初の10年間は教育委員会のほうで会計など事務的なことを担当していた。しかし、住民が活動に対し積極的に参加する形になってきて、最後には教育委員会が事務的なことをやるのではなく、主体も事務もすべてNPO法人グリーンバレーにおまかせしようということになり、2008年度からは事業報告をしてもらう以外はタッチしていない。今は、芸術家の渡航費と滞在費だけを町から出し、お世話をはじめとした、それ以外のすべてを地域の方が行っている。そういう点で地域の活性化や芸術に対する考えの変化は見られてきたと考えている。

G:国や県がある時期から予算を切ってきたということは、当時の行財政改革の流れを鑑みると当然のことである。また、教育委員会が行っていた業務をグリーンバレーに一任したのも同じ流れであるが、それはグリーンバレーが独立してやっていける実力や体力がついてきたと感じられた頃合だったこともある。

— 黎明期から事業をサポートしてきた中で、町としてはこれからどのようにNPOとパートナーシップを結んでいこうと考えているか？

G:NPOとべったりくっついてしまっただけは、事業がいつひっくり返るか分からない。やはり行政が前に出てはいけなくて常に感じている。行政は常に少し引いていくスタイルでやっていくことが、NPOにとっては

やりやすい形なのではないか。高度経済成長期の地方自治の時代は終わっており、地方自治の次の時代に入っている。その中で、自らやっていたという意欲のある団体が出てきたら、彼らにどんどんやってもらいたくない。今の財政状況ではわずかな助成補助くらいのことしかできていないが、そういうものがなかったら最低限の依って立つところがないし、それがモチベーションの維持に少しでもつながればと思っている。行政がカバーできるところは行政がカバーするが、文化芸術活動は奥が深いので、それがなかなか難しいところがある。枠をかつちりすることだけがいいのではなく、ある程度の自由も必要とされる。

3. 事業による成果や効果

G:田舎では当然美術館はなく、芸術は遠いものだと思われている。身近に作家がおり、彼らが制作する過程を見ることは大切なことである。また、子どもたちや地域住民が作品の制作に関与するという状況が現在進行形であり、当初よりも深みが出てきたのではないかという気はしている。

作家が学校に行き、ワークショップを行い、子どもたちが創作活動に携わることで、人格形成の中で情操の基となると考えている。それが継続していくにつれて、何十人の中からももしかしたら大物のアーティストになる子が出てくるかもしれない。

— 課外授業に関して、AIRが始まった頃と今では子どもたちの受け止め方に変化は見られるか？

K:最初の頃に関しては教育長ではなかったので詳しく知らないが、神山町出身のアーティストの育成というのはひとつの目標だったのかもしれない。去年、神山町出身の高校生が全国デザインコンクールで一番になった。こじつけかもしれないが、もしかしたらAIRが関係しているかもしれないという話も教育委員会が出ている。

— 学校関係者でも賛成する人と反対する人のどちらもいたとお聞きしたが？

G: 個人個人いろいろな趣味があることで、世の中の多様性が構築されているわけだから、理解を示す人とそうでない人がいるのは当たり前である。

K: ワークショップをはじめとして、子どもたちが学校でアーティストにふれあうことができるようになり、外国の方と話す機会がなかったところから、物怖じしないで話すという状況が見られている。教育という面でも効果を感じている。

芸術に関しては、若手作家の新しい現代の芸術や文化と、今までの地域にあった農村文化がふれあうなかで、自分たちの農村文化を大切にしなければいけないという意識が芽生えてきている。

－ 外部から評価されることによる間接的、波及的な影響についてどのように考えているか？

G: グリーンバレーが次々と新しい情報発信をしていることから、AIR事業によって外部の人々がよく来るようになったという印象を地域住民が抱いているのは確かである。重層的な情報発信の中で、町外の人々が神山町やAIR事業を知るといって非常に大きな効果が出てきている。

神山を訪れた人々がいろいろなところに帰って、神山は面白いところだということを口々に言ってくれる。そのことによるネットワークの広がりも感じている。最近もグリーンバレーの行っている移住交流センターの事業による空き家斡旋の取材があった。ちょうど今もテレビ東京が来ているように、マスコミが次々と訪れるようになったことも、今までの地道な活動が外に広がり、その輪がどんどん広がっていくといういい効果が生まれている証なのではないか。

4. 現在の課題、将来のビジョン 等

G: 神山町は産業構造の変化で人口が流出し、高度経済成長の労働力の供給源、という日本の田舎の典型になってしまっていた。しかし、バブルがはじけて経済が落ち込んだ中で、今やっと生き方や働き方に対する疑問が人々の中で生まれてきている。過去の文化芸術の話に関しては、ここは農業地帯なので、田植えの後の一息に、お祭りで人形浄瑠

璃が上演されるということや、稲刈りの後の収穫祭で秋祭りを催すなど農作業にまつわる文化はあった。しかし、産業構造が変わり、人口が減少する中で、そういった文化が維持しにくくなったという現実がある。最近ではレジデンス・アーティストが地域のお祭りに参加し、それが作品へと反映されるような姿も見られる。消してはならない、消えてはならない伝統文化を何十年かの月日をかけて、アーティストが新たな形で継承していけるという可能性もあるのではないかと考えている。

日本文化デザイン会議が2006年に徳島で開催したときに、「棒搗き」という、儀式であり競技であるものが38年ぶりに復活した。これにはアーティストも参加している。時代の流れの中で、伝統文化の発掘や継承に、クリエイターの目を生かすのは面白いのではないだろうか。

住民以外、特に外国人の方の視点が加わることによってまちに対する新たな発見も生まれると思っている。

K: 文化で飯が食えるかと否定的に言う人ももちろんいる。しかし、文化は自己を生きていくうえで、その人の心を豊かにしてくれる。また生きがいにもなる。運動も大切だが、年を取っていく中で、文化というものが力になっていくのではないだろうか。

G: これからの展望に関しては、今まで手作りでこつこつ積み上げてきた成果が今出てきたと感じている。これはメンバーの思いが人に伝わっていった結果である。もし行政が主導していたら首長の考えによって、事業が急激に変わってしまう可能性がある。それよりは思い入れのある人々が集まって、この町で文化芸術を花開かせてまちを活性化していこうとしたことによって、今日まで来れたのだと思う。文化芸術はゆとりの世界であるから、そこを実際にどれだけ発信していくかが重要である。アーティストが来て交流していくことも重要だが、13年も続いているのでそろそろ神山にきたアーティストから、広告塔となり得るような、有名になってくるアーティストを輩出できたら面白いなと思っている。そのことで、絶対に理解を示さない住民を、有無を言わず納得させることができるのではないだろうか。

メンバーの方は年々階段を上っている実感があり、彼らにとっては楽しみになっていると思う。それがこういう風に花開いていくのかというところである。だからこそ町長である限りは支援して見守っていきたいと考えている。

個人的にも芸術はわりと好きで、必要性は感じているので応援していきたい。人間は遊びの達人であるから、遊びの世界をとってはいけないと思う。

K: 私としては、神山出身の子が日本を代表する芸術家になることを願いたい。また、温泉施設や道の駅にきちんとしたギャラリーを作るなど町民にも発表の機会を与え、事業がもっと庶民の文化に波及していくといいと思う。文化で飯が食えるかということではなく、文化で心豊かな人生を生きていきたいと思う町民が少しでも増えてほしい。どんなアートでもいいからそういうところに興味がある子どもたちが育ってほしいと思っている。

5. 文化・芸術を活用した地域活性化について

G: 「感動」というような、文化や芸術が与えてくれる力は一瞬のものであると思うし、それを感じることで感性がなければなかなか分らないと思う。また、ある種のゆとりが必要とされるが、反対に追い詰められたときの救いにもなり得る。世界的に経済が落ち込み、東日本大震災による被害もあり、通常ならば芸術という分野には目が向けられないだろう。しかし、そのような中で砂漠の中のオアシスのように、癒しとしての文化が必要とされている。

昔の農業はすべて手作業であり本当に厳しかった。夜が明ける前から日が暮れるまで毎日毎日働くなかで、年に2回のお祭りだけが唯一の楽しみであった。それはひとつの文化であるし、生きていくうえで重要な要素である。

ー 文化が余暇や癒しだけでなく、創造的な活動を生み出すことに関して重要な資源となることを、神山のサテライトオフィスや移住の事例が示していると思うが、そのことについてどのように考えているか？

G: 創造的な活動を生み出す資源として文化はひとつの要素でしかない。サテライトオフィスがある理由は、必ずしも文化・芸術だけではない。神山町が県庁所在地である徳島市から30～40分で来られるという立地条件にありながら田舎が体験できるというロケーションを持つこと。自然環境やゆったりとした人間性、なんだかくつろげる世界観、会えば見ず知らずの人でもあいさつするという環境の中に、人々の日本の田舎の原風景がある。人間性の回復ができる場所であるだけでなく、IT環境が整っていることで、新たな産業の誘致に有利に働いているのではないだろうか。

芸術はやはり専門的な世界であり、普通の人の生活にとっては365日のうち1日かゼロ日くらいしか触れることのないものである。芸術だけではなくいろいろな切り口が神山町にあるからこそ、サテライトオフィスをはじめとして移住してくる人が増えてきたのではないだろうか。

ー 神山が全国の創造都市のモデルと成り得ると思うか？

G: グリーンバレーのメンバーの興味も、アートの世界だけではなく、どうにかして人口が減少していく神山の土地を活性化していきたいという思いの中で、その切り口としてアートがあったのだと捉えている。文化や芸術が、日本のように知的創造産業が成熟してきた社会のこれからを支えていくのは確かだが、それらが発展していくためには、まちに受け皿が開かれているということがまずは重要である。お遍路文化の影響かもしれないが、神山の場合はメンバーも、メンバー以外の人にもよその人を受け入れる心構えができています。そこからいろいろなことがつながってきたのであり、そこにまちの可能性があると考えている。今の社会に求められているものが神山にあるのではないだろうか。

ただ、神山のよさは適度な人口で育まれる日常生活の中にあるので、モデル都市として人がたくさん訪れ、観光地のようになってしまうのは神山のよさが失われてしまうので、どんどん宣伝すればいいということでもない。人は来てほしいが、日常生活を考

えると人の出入りのバランスは難しいところである。
神山には農業も林業もあり、アートだけではない。ア
ートはひとつの分野であり、そのアンテナが立って
いるから人が集まってくる。そこに人がいて受け皿
があるから現状が生み出されているのではないだろ
うか。

(6) 町職員へのインタビュー

日時:2011年9月26日(月)11:30~12:00

場所:神山町役場

対象:栗飯原正博(神山町産業建設課)

1. 事業の背景、経緯

- グリーンバレーの前身の国際交流協会が行っていた事業の一つである芸術家招聘活動、すなわちアーティスト・イン・レジデンス(以下、AIR)は、当初、事務局を教育委員会内に設置していた。そのときは私が3年ほど事務局を担当していた。
 - その後、国際交流協会が発展しNPO法人化するときに、事務局をいつまでも行政に置いておくわけにはいかないということで、グリーンバレーに事務員を雇ってもらい、教育委員会にあった事務局はグリーンバレーに完全に移した。
 - 事務局が移ってから、補助金を受ける側と支給する側という関係になっており、立場が明確化している。それまで神山町では、住民と行政との協働ということがひとつの売りだったが、それを境に、当初よりも関係は薄らいだといえるのではないだろうか。
- ー グリーンバレーがNPO法人として行政から独立して、どんな変化があったか？
- メリットは、自由にしてもらえるというところであり、デメリットは抑えがきかないというところである。一事業体の活動に対して行政は意見を言える立場ではないので、事業が補助金の事業計画に沿っていないときぐらいしか意見が言えない。ブレーキがきかないというところがいいところでもあり、悪いところでもある。
 - 自由な発想でリスクを考えずに前向きに事業展開していけるので、発展のスピードは早くなっている。行政ではできないような面白そうな事業をしているので、個人的にはうらやましい。教育委員会で事務局業務に携わっていたときは、喧嘩もしたが楽しかった。
 - 今はグリーンバレーの事業はグリーンバレー独自でやっている状況なのでなかなか絡みづらくなっている。行政サイドはたまに様子を見に行く程度になっている。

2. 事業の実施体制

- 産業建設課としては、神山温泉の向かいに「創造の森」という公園があり、その管理に関して、グリーンバレーを指定管理者として委託契約をしている。もうひとつは移住交流センターに関して、移住者から産業建設課に空き家がないかという相談があったときに、「グリーンバレーに話を聞いてください」という形で紹介をしている。AIR事業に関しては、教育委員会で補助金のやりとりをしており、産業建設課では直接的には関わりはない。
- ー 移住者交流に関する情報について、行政では扱いにくいこともNPOだと柔軟に対応できる。
- 神山に移住したい人のほとんどは空き家を探して住む。そうすると民と民のつながりのやりとりになる。その中に行政が入り込んでいき、借りの側、貸す側のどちらかに偏ってしまうと問題になる。移住者を民で受け入れ、民に紹介するというやり方は、行政としては非常にありがたい。
 - サテライトオフィス誘致事業については、グリーンバレーが独自で行っている事業なので、今のところは、私は直接関係していない。ブロードバンドを利用した新規事業だが、目のつけどころが鋭いなという感じである。携わりは全くない。

3. 事業による成果や効果

- ー 産業振興の観点から見て、サテライトオフィスをどのように考えているか？
- 神山町は企業が少ないので、企業誘致という点で非常に興味深い話ではある。私も4月からこの部署にきたので、詳しいことはまだ分かっていないが、従来の空き家を活用し、住居と働く場所が一体となった場づくりは田舎でしかできないのではないだろうか。
 - 神山町としては、空いている工場跡地などを事業展開する場として提供できればいいなとは思っている。しかし、今の時代ハード整備というのは、住民にも議会にも理解してもらうのはハードルが高

い。行政からは支援する手立てはなかなかない。逆に、行政側で、オフィスがあることを利用して企業誘致をさせてもらえないかと考えているが、グリーンバレーに頼まれないのに勝手に宣伝することできないのでなかなか動けないところもある。

- 現在、県でもサテライトオフィスの事業が展開され始めているので、それが一般化してきたら、神山独自の色を出していかなければいけないと思っている。特色として挙げられるのは、民家で仕事ができるということなので、そこは大切にしながらホームページなどを活用し、全国に紹介していきたい。

－ グリーンバレーの大学やボランティアなどとの連携についてどのように考えているか？

- 交流人口が増えるということは、神山に足を運んで、ファンとなってくれる人が増えるということである。来た方が神山のよさを体験し、それを人伝えに広めてくれると、そこからさらなる交流人口が生まれてくる。今後も交流人口の拡大に努めていきたい。

－ 神山の場合、行政がNPOを下請けにするという関係ではなく、NPOが事業を主導し、その敷かれたレールを行政が活用するという形が起り始めているように思う。

- 従来ありがちな、事務局は行政が担っているという形であれば、このようにスピード感を持って事業を進めることはできなかっただろう。グリーンバレーに行政から職員が行ったとしても向こうとしてもやりづらい。役場は広報の媒体くらいに思ってもらえれば、いい距離感を保ってともに活動していけるのではないだろうか。そんな形が築けたらと思っている。

－ 一団体ばかりを応援するのは行政的には難しいところもあるのではないかな？

- 神山町はそれほど大きい町ではないので、NPOもそこまで多くない。今のところは頑張っているところを応援していくというスタンスでうまくいっている。それで不満の声があがったらそのときは考えてい

かなければいけないが。NPO法人は法人ではあるが、一種のボランティア活動としても捉えられるので、その点も企業活動をしているところを応援することとは異なってくる。

4. 現在の課題、将来のビジョン 等

- もしグリーンバレーがなかったら、行政として別の動きをしていたかもしれない。しかし、地域内で別の動きをしている方はいたし、行政がやりにくいことをNPOがしてくれるというのが、世間一般の行政とNPOとの立場の自然の流れなので、別の形でグリーンバレーのような立場を担う人はいたのではないかなと思う。昔から神山町は住民あつてのまちなので、グリーンバレー以前から、こんなことをしたいと言ってくる住民がいて、行政がそれに対して動くという流れができていた。企画はまち主導ではなく住民主導で行ってきたので、住民の活動が発展した形にグリーンバレーが存在していると思う。

(7) ボランティアへのインタビュー

日時:2011年9月24日(土)17:00~18:00

場所:神山町手島邸

対象:手島史嗣、手島恭子(KAIRボランティア)

1. 自己紹介

史嗣(以下「F」):2人とも移住組である。私は高知県の出身。神山町に来て1年半ほどである。以前は理学療法士をしがてら、旅行が好きで東南アジアなどいろいろなところを旅行し、タイで8年間ほどバックパッカー相手の民宿を営んでいたこともあった。日本人はほとんど来ない、少数民族がまわりに住んでいるような村で、温泉があり自然が美しい村だった。そこで知り合ったタイ人と仲良くなり、あれよという間にゲストハウスをやるということになり、ゲストハウスを始めた。

妻とは、彼女と彼女の亡くなった旦那さんが世界一周旅行をしている中で、自分の経営するゲストハウスに泊まったことがきっかけで知り合った。その後、経営していた民宿が洪水に遭い、村も壊滅状態になったので日本に帰ることになり、出身地である高知の室戸市に戻り理学療法士として3年間働いていた。妻と前の旦那さんが神山にいたということを、2人のホームページで見て知っていたので、徳島に出張した際に訪ねてみた。しばらくぶりに彼女と会って、旦那さんが亡くなられたことや、亡くなった旦那さんが中心となって始めた森づくりをはじめとしたグリーンバレーの活動を知り、私も手伝ってみようということで何かある際には手伝いに来るという関わりを1年ほど続け、その後、神山町に移住した。

恭子(以下「K」):神山に来たのは9年前である。仕事は歯科医師をしている。前の旦那さんも歯医者であり、姫路で歯科勤務医をしていたが、長期の旅行に出ることにした。もともとアウトドアが好きだったが、旅行をしたことでもっと自然の中で暮らしたいと考えられるようになった。そこで車に荷物を積み、四国や九州を終の棲家を探し、旅をする1年半の日々を過ごした。

第3回のアーティスト・イン・レジデンス(以下、AIR)で来たアーティストで、今も神山に住んでいるミュージシャンの中嶋恵樹さん夫妻もちょうど神山に住む家を探しており、彼らが見つけた家に一緒に住もうということになった。私たちは住もうと思って来たわけではなかったが、行くところもないし、ぶらぶらす

るのも疲れたので、とりあえず住んでみようということになった。9年前なので今のように空家がばんばん出るわけではなく、移住者も全くいなかった。前の旦那さんの風貌がよい加減だったこともあり、不審がられたので、彼は髪をすぐに切ってなるべく怪しまれないように心がけた。

最初は海暮らしをしようと思っていたので、ここでの暮らしは仮住まいだったが、暮らしているうちにお世話してくださる方もいい人で、大家さんもよくしてくれたので、定住することに決めた。また、まきを使った山の暮らしも面白いと感じるようになった。

よく知るために、AIRやアドプトプログラムに積極的に関わってみようということで仲間に入れてもらった。その間に住まいも見つけたかったので、積極的に家を探していますと言ったがなかなか見つからなかった。もう土地でもいいということで探していたら、森づくりが縁で現在住んでいる土地を見つけることができた。トラックの車庫を、近所の方に手伝ってもらい、半年かけて、住めるように自分たちで改装した。形になったのは3、4年前である。そのうちに主人の病気が発覚し、治療の甲斐なく他界してしまったが、私一人でもここで住んでいこうと思っていた。そのうちに今の旦那さんである彼が来てくれるようになり、また何か始められそうな雰囲気の中で1年が経った。

ー 神山に移住するまでアートに関心はあったのか？

K:自分で作ったりしないが、美術館にはたまに行っていた。アートに突出して興味があったかというところではないが、人がどんなふうに見て、それをどんなふう形にするのかということは面白い。

2. 事業に参加した経緯、動機

K:2004年のレジデンスの際に、前の主人が多少英語を話すことができたので、通訳として関わっていた。私はシャーロット・マクゴワン・グリフィンさんの作品制作が終盤にはいって、手が足りなくなってきたときにお手伝いをした。2005年のコーネリア・コンラツさんのときには母親役をやった。普段からウエル

カムパーティーや食の交流といったKAIRの中の誰でも参加できるプログラムにはお邪魔して、家を探していることはアピールしていた。

コミュニティへの窓が開いているところがあったので、そこに入れてもらった。それ以降は通訳やお母さん役として関わっている。

F:彼女の亡くなった旦那さんが中心となって始めた森づくりやグリーンバレーの活動を知り、私も手伝ってみようということで何かある際に手伝いに来たことがきっかけである。最初は森づくりに参加した。彼の遺志を継ぐというわけではないが、事業がずっと続けばいいなと思って手伝い始めた。全く知らない人たちのコミュニティにぼんと入ったわけだが、実際に参加してみると、気軽に声をかけ、仲良くしてくれた。ここは面白い人たちがいるところだなというのが第一印象だった。

－過去に同様のボランティアを経験したことはあるか？

K:今までは興味はあったけれど実際にやったことはない。災害ボランティアに少し関わったことがある程度である。

－「森づくり」を立ち上げたきっかけを教えてください。

K:AIRをやっているけれども、アートの枠組みの中でやっている限り、興味がある人は見るけれど、そうではない人にとっては好きな人の道楽だと思われる状況があるのではないかと前の主人と話していた。ましてやこの事業には町や県のお金が入っているので、よりいっそう公共性が求められている。しかし、実際には関わる人が固定されてしまっており、まちの人がもう少し興味を持ってくれるようなやり方を考えなければいけないことを感じていた。杉林ばかりで鬱蒼とした森が多く、アーティストが山に作品を置いても気味が悪かったので、森がきれいになったら作品にとってもいいのではないということで、アイデアを膨らませ企画書を作り、グリーンバレーの理事会のメンバーに提案した。それはいいということで事業が始まった。

お茶やお昼、燃料を準備してみんなでやっているう

ちに、アートでは関わってこれなかったおじさんたちが関わるようになり、今ではいろいろな人が参加するようになった。アーティストの中でも山の中で何かしたいとか、自然の材料を使いたいという方も多いので、そのときは森づくりのメンバーが協力するという流れができてきている。

F:森づくりがきっかけで移住された方もいるし、新しい窓が開いたと思う。

－企画書を持っていったときの反応はどうだったか？

K:こちらの格好が怪しかったのだが、グリーンバレーの中心となって活動を行っている方々は好奇心が強いので、見た目にとらわれず話しかけてくれた。さらに関わる中でどんどん打ち解けてくれた。おそろおそろでも外まきに見ないで受け入れてくれる方たちだと、今、思い起こしてみると強く感じる。

3. 事業の感想、参加者の変化

F:今、カナダからきているレジデンス・アーティストのケビンさんが10歳の男の子と一緒に約3ヶ月の予定で滞在しているが、その男の子が地元の小学校に週4日で通っている。そのことは私の中ではかなりのトピックで、地元の学校の先生たちが海外からやってきた子をどうぞとすんなり受け入れていることは驚きであり、うれしい出来事だった。それは、過去に来町したアーティストたちがAIRの活動の一環としての課外授業を町内の各小中学校で行ってきた積み重ねの結果ではないかと思っている。

小学校でも英語が必修となってきたため、先生方はある程度話せるし、子どもたちも片言ではあるが積極的に話しかけてくれているようである。今は3年生のクラスと一緒に勉強しているが、生徒数が7人しかいないのもあり、すぐに溶け込んでいるみたい。英語の授業はALTの先生と一緒に高学年のクラスで先生の補佐的な役割をしてくれているようである。もうすぐ運動会があるのでその練習にも参加している。先ほど名前が出た中嶋さんの娘さんが今2年生で、運動会のダンスで彼のパートナーを務め

ているなど、招聘作家同士の子どもたちを通じた新しいつながりも広がっている。

－ どんどころに日本と海外の価値観の差や共通点を感じたか？

K: 日本と海外というよりは、個性の問題、人の問題と思う。日本に来るということで、みんなそれなりに自分の国とは違うという意識は持っているが、遠慮がちな人もいれば、自分らしさを突き通す人もいる。日本人的な、相手を見ながら合わせるということが得意じゃない方だなかなか大変なところはある。向こうのペースに合わせるとこっちがとても疲れるわと思う人もたまにいる。初期の頃はもっと大変だったのではないだろうか。

F: 個人の主張が強すぎてやりづらい部分もあった。タイでゲストハウスを営んでいたときに、世界中からいろいろな国の人が来ていたので、外国の方との付き合いをそんなに大変だとは思っていなかったが、それでも大変だった。

K: 人としての圧力、情熱が強かったのが大変だったのかもしれない。

F: そのアーティストはラトビアの方であったが、国がいろいろな経緯を経て成り立っているの、死ぬか生きるかという中でアーティストになっており、私たちは根本的に違っていると思った。

－ お父さん、お母さん役は何回くらいやっているか？

F: 今回で2回目である。

K: もっと前から一応やっているが、私はざっくりと関わっており、主人のほうが頑張っている。コーネリアスのときは、お遍路道を歩きたいと言うので一緒に歩いたり、食の交流でお国料理を作るときにサポートはしたが、作品づくりのサポートはあまりしていない。

お母さん役はしていないが、3年くらい前に来た日本人アーティストの方とは、個人的な会話もするようになり、交流が深まっている。彼女とはアーティストとサポーターというよりは友達という感じで付き合っている。今でも彼女は時々神山に来てイベントを手伝ったり、自分でもイベントを行ったりしている。他の神山に住み始めたアーティストとも友達のような関わり

である。大事な友達が少しずつ増えている感じである。

－ ここではボランティアは、自分のできる範囲のことを自分のスタンスでやるというやり方であるように感じるが、それについてはどう思っているか？

F: 他のお父さん役がどんなことをしているのか私はよく知らないが、去年は来て1年目にいきなりお父さん役と言われて大変だった部分もあった。でも、今年はだいぶ肩の力を抜いてやっていけていると思う。

K: 他のお父さん、お母さん役を見ている、みんなが自分の得意分野で関わっている。初めにアーティストをマッチングされるが、得意分野によってどんどんサポートが入ってくる。お父さん、お母さん役を交代するわけではなく自然な形でシフトしていつている。

－ 作品とアーティストの印象の違いはあるか？

F: それはあまり感じない。

K: どちらかというと「なるほど」と思う人のほうが多い。

－ 神山の人たちの、外部者を受け入れる姿勢についてどのように感じたか？

F: オープンな感じだと思う。自分も四国の出身なのであまり強く感じたことはないが、お遍路さんの文化があるので、昔からよそ者を受け入れる姿勢ができていろいろな人から聞いている。

タイの田舎で受け入れてもらえたという経験があるので、最低限してはいけないことをきちんと守れば、そんな難しいことではないと思っている。ここでは、私が来る前に、妻たちがいたのでよりすんなり受け入れてもらったのかもしれない。

パーソナリティーや経験による部分は多いと思う。住んでいける人もいるし、いけない人もいる。田舎に住むのは都会に住むのとはちょっと違い、温度差や大切にしている部分の違いをきちんと捉えて暮らしていかなければいけないと思う。

－ 地域内と地域外の人が折り合いをつけていく中で、AIRはどのように機能しているか？

F: 今、ケビンさんのお父さん役のようなことをしているが、例えばケビンさんに木工の旋盤がどこかにない

かと聞かれると、まずグリーンバレーの理事の方に相談し、場所や人を紹介してもらい、実際に私がケビンさんと一緒に足を運ぶ。それがきっかけでその場所の方と初めて知り合うことができる。レジデンスがきっかけで新しいつながりが生まれお付き合いがはじまる。一人で暮らしていると知り合うことができなかった人との接点が生まれる。

ボランティアは今年で2回目だが、やっていると地元の人ともアーティストとも知り合える。グリーンバレーの方とも少しずつ積み重ねていけるものがある。人が知れる、深さが知れるということがやっていて面白いと感じる。

－ ボランティアとしてAIRに参加したことで、ご自身に何か変化は？

F: 自分自身の変化はあまり感じていない。タイでゲストハウスを始めたのも自分がよそに行かなくてもあちこちから人が来てくれて、自分のところで話ができるということが大きかったのだが、今、神山にいと外国人だけでなく、日本で面白いことをやろうとしている人がやってくる。それが楽しみである。

4. 文化・芸術を活用した地域活性化について

K: アーティストの友達ができてから、アートと地域の関わりはなんだろうと自分のなかで考えるようになった。それまでの私にとってのAIRは、いろいろな人が来て楽しいし、面白いものが地元で見られるという程度で、自分には関係がないものであった。去年から「か・み・や・まるけつ」というプログラムを始めた。そこは神山や徳島在住のアーティストの作品が見られたり、手作りの物やご飯を作る人がお店を出すフリーマーケットのようなものである。森づくりもそうであるが、「か・み・や・まるけつ」がもっといろいろな人が関わるきっかけとして機能すればいいなと思っている。

－ 地元の住民の関わりに変化を感じるか？

K: 当初から関わっている顔ぶれはあまり変わっていないのではないと思う。しかし、長年続けているので、

関わっていない人にとっても外国人がいることが普通になっている。神山町以外のところのスポーツジムにアーティストが行ったときに、神山に住んでいるといっただけで「アートの人か」と言われた。神山＝アートというのがそれなりに定着しているのだなということが変化だと思う。しかし、もう少し多くの人が興味を持って関わってくれるのが理想であると感じている。その点はいまだに課題であるのではないか。ただ、課外授業を長年やっていて、課外授業を受けた子どもたちが成人してきているので、また違った変化が見られてくるのではないだろうか。はっきり分からない形で浸透しているのではないか。

－ 活動を継続していくにあたって、行政に対して要望することはあるか？

K: グリーンバレーの活動に対して町に要望を出すほど活動に関わっていないが、町がいろいろやっていないからグリーンバレーの活動があるのだろうとは思っている。

役場は3年ぐらいで人が変わるので、そこでつながりが切れてしまう。個人として興味を持ってもらえないのだろうけれど、もう少し継続したつながりが持てるといいと思う。事業に対する抵抗はないし、協力してくれる部分はあるのだろうけれど、縦割りのところが邪魔をしていると思う。分かれているけれどもみんなでサポートしているという姿勢があればいいとは思いますが、それが理想論であることも分かっている。

(8) アーティストへのインタビュー①

日時:2011年9月25日(日)14:00~15:00

場所:劇場寄井座

対象:井上唯(アーティスト)

1. 自己紹介

- 大学では織物を学んでいた。最初から織物を学ぼうと思っていたわけではないが、大学が、いろいろな手法を体験してから選考を選ぶ仕組みになっており、織っていると予想外の表情が生まれてくるのが面白くて織物を選んだ。
- 構造体としての糸がにじみ出ていく様子や、糸と糸の間に空気を孕みながら空間に広がっていく様子に絵画との違いを感じ、だんだんと空間に興味湧いてきた。展示する場所で全く見え方が変わったり、光がどんどん変化したり、人が動くことで見え方が変わったりする中で、人と場所とものの関係性が面白いと思うようになった。今回の作品に藍染を取り入れているように、織りだけではなく、他の素材や染めなどの他の技法も用いて、場所に対して作るということを行っている。
- 作家活動は大学を卒業してからなので、4年ほどである。

2. プロジェクトに参加した経緯、動機

- レジデンスであちこち行きたいと思っており、神山アーティスト・イン・レジデンスは「AIR-J(エア・ジャパン)」というサイトで見つけた。アーティスト・イン・レジデンス(以下、AIR)は、神山で2箇所目である。
- 2010年に香川県三豊市の栗島という、人口200人ほどの平均年齢が60~70歳くらいの小さな島でレジデンスを行った。レジデンスをする際に、事前に場所のリサーチをすると面白くないと思い、ほとんどリサーチをせずに行ったら、その島は子どもが1人もいないということを知り驚いた。その島にレジデンスしていたアーティストは若手ばかりだったので、私たちが島で一番若かった。
- 神山は条件がいいわけではないが、地域の力で動かししているという様子が伝わってきて興味を持った。栗島でのAIRは行政が主体だったので、そこはまた違う人との関わりができるだろうと思っ

た。

- 栗島も、島民と市の職員の関係は良好だったので、上から来ている話という感じはあまりなかったが、神山は地域の人がやっているの、たとえば、大工さんが必要なら顔なじみで探してきてくれて手伝ってくれるなど、手助けの仕方もストレートである。また、地域の行事にも住民と同じレベルで参加できることも面白い。
- 場所に対して興味を持つようになったことと、以前から、あちこちに行くのが好きだったことが大きい。旅で通り過ぎるのと住むのとの違いに加え、期間や目的などで場所や人との関わり方が異なってくる。そこが面白いと思っているので、レジデンスという関わり方が今の自分にとってちょうどピンときた。
- 少し前から藍染で作品を作りたいと思っていたが、場所やタイミングから作れずにいた。神山の自然に囲まれている様子が、藍染の作品のイメージによく合う気がしたことも応募の動機である。

3. プロジェクトの感想、参加者の変化

- ホームページを見たときには、こんなに山に囲まれていると思っていなかった。それに加えて、川と光がとても美しい。光と水と木に囲まれている町である。雨が降ると、白いもやが多く出て、川も濁流となり、すべてが濡水に包まれているような印象を受ける。
- 宇宙など大きなものとつながっている感覚を、作品として表現したいと漠然と思っていたが、ここに来て自然とつながっていることを日々の生活の中で、自分の体で感じられることが作品にも良い影響を及ぼしている。また、空間によって、制作へのモチベーションも変わるが、神山はモチベーションを高めてくれる場所だと思う。
- 2ヶ月はやはり短く感じる。来てからアイデアを練るが、その間は川に潜ったりして、自分の興味のままに動いたり、いろいろな人と話す中で、自分が気付かされたことからアイデアにしていける。なので、ア

アイデアを練る期間が長ければ長いほど、良い作品になるのではないだろうか。もっと期間が長いといいなと思う。

－マーケットを意識して制作することと、AIRで制作することに違いはあるか？

- 作品を売るといって制作をしていないので、マーケットを意識していない。AIRのように滞在場所や制作費をもらえるという仕組みが、今の自分には一番ありがたい。
- カヤックをしたり、自転車で旅に出たり、そのときにしたい様々なことをする中で、それらが作品へとつながっていると思っている。自分の体を使って、自然と関わりながら暮らしていくことや生きていく上での知恵を学んでいくことに興味があり、それを体感する中で得る気付きや驚きが制作にもつながってくる。自然と上手に関わっている神山での制作は私のスタンスにとってしっくりくる。

－「お父さん・お母さん制度」や、地域の方とふれあう中で、影響を受けることはあるか？

- お父さん、お母さんに限らず、地域の人と関わる中で、気付かされることや違和感があり、なぜそう感じたのかと考えたことの蓄積が作品へとつながっていると思う。
- 向かいにおばさんが住んでいて、食材や調理したものをくれるが、その中には今まで見たことのない食材や料理があり、料理を教えてもらうこともある。今まで知らなかったことを知っていくことはやはり面白い。それが制作に直接つながっているのかと聞かれると困るが、確実に何らかの影響は受けていると感じている。
- 神山の人たちは自然と上手に付き合いながら生きていることを感じる。神山に来て、「ミュージック&バースデーパーティー」というのがあり、招かれて行ってみたが、移り住んだ若い人や外国の人が多くことに驚いた。私は田舎のおじいちゃん、おばあちゃんがいっぱいのところに行くんだと思っていたのに、グローバルで予想外だった。しかし、住んでいくうちに、ここを選んで来ている人がいるという理由が分かった。自然と上手に付き合う生き方を

したいと思った人たち、そして何かをやりたい人たちが移り住んでいるのだと思う。

－地域にも藍染をやっている人がおり、そういう人たちと関われることについてどう思うか？

- 同じことをやっている人がいるのは、関わるきっかけになるのでうれしい。普段会わなかった人とも会える。しかし、滞在期間が短いので、すぐに作品を制作しないといけない。いろいろな人と関わりたいのに関われない状況はある。
- いろいろなことをしたり、いろいろな人と関わったり、アイデアのネタはどんどん増えていくので、もっと関わりたいと思う気持ちと、展示期間は決まっているので、そこまでに作品を制作するために集中しなければいけないと思う気持ちのどちらもある。やはりもっと制作期間が長いとうれしい。長いほうが残っていく作品もいいものになると思う。

－学校にワークショップに行くことについてどう考えているか？

- とても楽しみにしていると同時に、プレッシャーもある。ワークショップというのは、住民が作品からだけでなく、様々なものを受けることのできる機会だと思う。今回は、中学1年～3年の50人に対して「ハッピーな服を作ろう」というワークショップを行う。家にある古着を持ち寄り、着る人も見る人もハッピーになるコスチュームを作るという内容である。生徒たちがどのようなものを作るのか楽しみである。

－集中して制作だけするのと、レジデンスで様々な人と関わりながら制作するので違いはあるか？

- 全く違っている。人と関わりとうれしさやジレンマを感じる。関わってくる人の数や自分が体験することもあるので、レジデンスのほうが関わってくるエネルギーが断然大きい。
- 集中するのが難しい環境ではあるが、私はぎりぎりまでアイデアをかき混ぜたいので、レジデンスが合っている。もちろんレジデンスをしても集中する時間を作ることはできる。

– 神山は作品を残していかなければいけないが、持って帰っていいレジデンスもある。その2つのタイプについてどう考えているか？

- 作家としては、持ち帰っていいのは助かるが、その場所に作ったものを何度も見てもらえる機会があるのはうれしい。私の作品はその場所に対して作るの、持って帰って他の場所に展示することは不可能ではないが、同じように再現することはできないので、その場所で展示されることもいいと思っている。
- 作品制作のスタイルとして、各地のレジデンスを渡り歩く人も多いが、ご自身の制作スタイルは？
- 関わり方の違いで受けるものや自分が発するものも変わってくるし、やりたいことは変化していくので、レジデンスばかりがやりたいわけではない。制作以外の活動も私にとって重要で、それがあって制作も面白くなってくるので、今は制作することと、生きていくことの興味のつながりを模索しているところである。なので、ちょうど「制作&生活」であるレジデンスに興味がある。

川や畑など、やりたいことができる場所があることも魅力的。制作するために短く滞在するだけではもったいない。それより、ここに住んで、腰を落ち着けて生活と制作をしつつ、ここから時々各地にフラフラと行けたら最高である。

- 作品よりも、アーティストが住んで地域と関わる方がいいと思っている。アーティストがいることによって、いろいろな提案や活動が起こる。そこから面白い展開が生まれてくると思う。
- 「作品を作ることがアーティストの仕事だ」というスタンスと、「まちづくりや教育にアートを使ってもらいたい」というスタンスに分かれることが多いが、井上さんはどのようなスタンスを持っているか？
- 大前提として、自分が楽しめる、自分がいいなと思う作品を作ることはあるが、アートという切り口で関わっていけることは多いと思うし、面白いことが出来るはずだと思う。それによって何かに気付く人がいたらうれしい。

4. 文化・芸術を活用した地域活性化について

- まず、期間を長くしてほしい。滞在費がなくても、家を貸してくれるというサポートなどがあれば希望者は長くいることができる。それ以外は特にない。いろいろサポートしてもらえて、無理も聞いてもらっており、大変ありがたく思っている。
- 事業に対して地域の方が関わっているといっても、まだまだ関わっていない人が多いので、アーティストがもっといろいろな関わり方を創出していけるのではないかと考えている。そのためには、やはりもっと期間が長くて、作家にゆとりがないとなかなか厳しい状況である。
- レジデンス期間が終わった後に、もう一度神山で制作をしたいと思うか？
- ここは住むのにすごくいい場所である。広いところをアトリエにできることも大きい。また、個人的には

(9) アーティストに対するインタビュー②

日時:2011年9月26日(月) 13:00~14:00

場所:アトリエ

対象:Marina Carvalho(アーティスト/ポルトガル)、Kevin Yates(アーティスト/カナダ)

1. 事業に参加した経緯、動機

Marina Carvalho(以下、「M」):インターネットで神山アーティスト・イン・レジデンス(以下、KAIR)のことを知った。アーティスト・イン・レジデンス(以下、AIR)への参加はこれが初めてではなかったが、日本でAIRに参加したいと思い、いろいろ調べたところ、他のAIRは都市で実施しているものが多かった。私は自然の中で制作活動をしたかった。KAIRの情報をインターネットで読んだところ、自然だけではなく地元の人々とも親密な交流が行われたり、地域との双方向のやりとりが含まれていたりしたので、KAIRを選んだ。

Kevin Yates(以下、「K」):AIRに応募するのは今回が初めての経験だったが、いつも日本には来たいと思っていた。文化にふれたり、人々に会ったり、日本国内を旅行したりすれば、私の作品に新しい活力がもたらされ、全く新しいアプローチができるのではないかと考えていた。

私もKAIRのことはインターネットで調べて知った。(KAIRに連れて来た)自分の子どものためにも小さなコミュニティが望ましいと思っていて、地域の規模感や現代美術との関係性を考えて、神山を選んだ。

2. 事業の感想、参加者の変化

– マリーナさんは、今までに参加した他のAIRと比べて神山AIRのことをどのように思うか？

M:どのAIRが一番好きかということはいえないが、確かに違いはある。ただ、これまで私が参加したAIRは、どれも小さな町に立地していて、自然とのふれあいが容易なものだった。でも、この神山では、さらに地域や住民とのコネクションの強さを感じる。地域の人たちが、今までの所よりアクティブだ。同時に、KAIRは、私が今まで経験したAIRの中では非常に歴史が浅いが、運営はとてもプロフェッショナルだと感じる。私たちの活動に対する支援を含め、運営の仕組みがしっかりとできていて、AIRで何

をすべきか、ミッションをよく理解しているのではないかと思う。

– ケビンさんはAIRが初めてということだが、想像していたより良かったことや違っていたことはないか？

K:私は日本に来るまで、日本がこんなに小さくて、都会と田舎が近い、ということを知らなかった。私の場合、作品制作に必要な素材や道具を調達するためには、町にアクセスしなければならない。そういう点で、この神山は徳島市に非常に近いので気に入っている。それでも神山は市内からは離れて、隔離された独自の自然環境の中にある。ここの谷川は本当に素晴らしい。

私は息子連れて来たが、彼もこのコミュニティを気に入っている。私がスタジオでの作品制作をしている間に、彼が学校に通ったりする際にも、地域みなさんが本当によく支援してくれている。息子がここで地域の方々と家族的なつきあいを経験できるのは素晴らしいことだと思う。

私は、ミニチュアの作品を作るので、特別な道具が必要になるときもあるのだが、そういうときも、神山の方々はいろいろ手伝ってくれる。

私はトロントの大学で教授をしながら、レジデンス活動をした経験があるが、生徒が多かったこともあって、何でも自分でやらなければならなかった。しかしここは、アーティストの活動を支えるコミュニティがしっかりしているので、自分であれこれ心配する必要がない。

日常的な事柄が非常によく整理されていて、ここに滞在することはとても心地よく感じる。住居やインターネットを使える場所、スタジオスペースも整っていて、サポーターのみなさんはとても寛大で必要なものを提供してくれる。

M:私は、これまでにこんなにインフラの整ったAIRに参加したことがない。

– 逆に困ったことや、サポートしてくれるのはうれしいが、放っておいてほしいと思ったことはないか？

K:スタジオでの制作活動についてはほとんど何もない。あえて挙げるならば、地域のイベントやインタビュー、夕食会などがとても多くて、もう少しスタジオで

じっくり作品に取り組みたいと思うこともあるが、地域の方々と交流するのは素晴らしいことなので、そのことが不満だという訳ではない。

M: サポートやケアも含め、あまりにも多くのことがあるということはあるかもしれない。でも神山では、地域の方々が、私たちが何をやっているか、本当によく見てくださっていると思う。それでも、作品制作は自由にやらせてもらっている。自分のやり方でできて、地域の人々やグリーンバレーの方々にもよくしてもらえる。だから、アーティストとしてやりたいようにできることと、地域のみなさんからのサポートが、非常にバランスが取れている、と思う。

– KAIRはアートの専門家の方々があまり関わっていないので、例えば作品の売買のような次のステップに結びつくことは少ないかもしれないが、そういう点についてどのように思うか？

M: ギャラリーやマーケットと結びつくということは、私自身の制作活動の外側にあることで、現時点で私自身の制作、作品とマーケットとの結びつきはあまり必要だとは思わない。それはどちらかというと学芸員などの役割ではないか。

むしろ、日本でのAIRの経験は、自分のアーティストとしてのキャリアにとって重要である。特に、ポルトガルやヨーロッパに帰った場合に。たとえKAIRがアートマーケットやギャラリー、学芸員などに結びついていなくても、私は日本のAIRに参加することは意義のあることだと思う。

K: (KAIRで) 私の作品を大勢の観客に見せることはできなくても、自分の住んでいる世界とは別の場所にやってきて、そこに滞在し、地域の方々との交流を経験したり、このロケーションや文化から様々なことをインスパイアされたりすることは、私にとってとても重要なことだ。それは、自分の国にいたのでは決してできない経験である。

– 子どもたちとのワークショップはもう行ったのか？

K: 小学校ではすでに行った。20人ぐらいの生徒を対象にした楽しめる授業を実施した。4つに折った1枚の紙に4人の生徒が体のパーツを1つずつ好きなように描いていき、4人がそれぞれのパーツを描き

終わると1つの空想上のキャラクターができているというプログラムで、みんな思い思いに描くことを、とても楽しんでもらって、私もとても面白かった。

中学校では明日行う予定で、ボディ・キャスト（実際の体を鋳型の原型とする彫刻）を実施する予定だ。

M: 私は音楽とドローイングを結びつけるようなプログラム、ボディ・エモーション（身体の感情）にも関係したものを行った。どうやって音を表現するのかを考えながら、同じ音を聞いてドローイングをしたり、ジェスチャーで表現する、というもの。

私にとっては、子どもたちが熱中することと、学ぶこととの間で、どのようにバランスを取るか、ということが重要。学校で子どもたちとワークショップをすることで、コミュニティにより深く関わることになるように思う。

– コミュニティに滞在して作品を制作するという一方で特に意識していることはあるか？

M: 私にとって、アートというのは何かを表現すること。もし、私が何かを表現したいと思う場合、それは自分のために表現するということではなく、周囲の人たち全員とそれを共有することが目的だ。

例えば、アーティストが1つの作品を制作して人に見せるとき、仮にそれが、通りや公園のパブリックアートだとすると、必ずしもすべての人がその作品を受け入れるとは限らない。でも、地域の人々との交流活動を行って、お互いのことを知るようになると、そのアーティストの制作した作品を、地域の人々は気にかけてくれるようになる。

K: 私が現在制作活動を行っているプロジェクト（鮎喰川にかかる橋のミニチュア作品を制作）に関して言えば、アーティストと地域の交流は特別な意味を持っている。私は地域外から来たアウトサイダーなので、地域の人々が日頃気にかけることとは別のこと、今まで見過ごしがちだったことに注目するかもしれない。

場合によっては、私が経験した地域の問題や課題に対して注意を喚起するようなこともあるだろう。そ

れを、視覚的な言語によって(美術作品として)提示することもできると思う。

3. 文化・芸術を活用した地域活性化について

K: 神山では、AIRで制作されたアーティストの作品を屋外に展示、保存している。それは町の外から観客を誘引する要因になるだろうし、展覧会のような形で、もっと組織立てて行くことも可能だと思う。ここのような小さな町にとってはとても良い状況だと思う。カナダでは、アトランタやバンクーバー、モントリオールのような大都市だけでなく、国内の数多くの小さな町でも、同じようにアーティストのコミュニティを何とか維持しようとしていて、神山AIRにとっても良いモデルになると思う。

M: 私は、アートには変革をもたらす可能性があると感じている。それは経済的にも影響を及ぼすだろう。私の個人的な印象だけでなく、ここの地域の人々も同様に感じていると思うが、KAIRは地域の人たちだけではなく、都会の若者たちも惹きつける要素があると思う。

それは、いつも芸術的な活動がこの地域にあるからで、しかもそれがアートマーケットから離れていて、地域やそこでの生活に根付いたものとして存在しているからかもしれない。

— アーティストにとって、アートがツールとして使われることで、プライドを傷つけられる、というようなことはないか？

K: 私は今回のAIRが初めての経験だが、私の作品をここに置いていかなければならない、ということは気にしていない。それよりも、ここで得られたインスピレーションをカナダに持って帰れることは、私にとって良いチャンスであり、そこから様々なアイデアが生まれ続けると思う。

長期的な視点から考えて、私は、ここのレジデンスに参加してこの地域の一員になれたことに、本当に感謝している。

アーティストにとって、作品を作るということと、地域活動をするとは別のもので、中には地域活動にアー

トが道具として使われることに違和感を抱くアーティストもいるだろう。

M: 私は地域と連携して仕事をするのが好きだ。それが、私の仕事の仕方でもある。私には他の国に来て、地域の人々や地域ならではの素材との交流なしに作品を作るということは考えられない。そういうことができるから、他の地域でも作品を作ることができる。

それは私が母国のポルトガルで仕事をする時も、同じである。私にとっては、地域と交流し、地域の方々と考え方をシェアすることや自分が地域に何ができるのかということが重要だ。また、アーティストは地域に対して様々なことを提供できて、同時に地域からたくさんのことを得て、それを自分の国に持ち帰ることができる。

レジデンス・プログラムに参加することだけではなく、私はランドアートを制作するため、自然との交感ということ大切にしているので、それも重要な要素である。

— 制作過程を見られながらAIRで作品制作をすることと、母国の自分のスタジオで作品制作することの違い、また、これからの作家活動の方向性について、どのように考えているのか？

K: 母国のスタジオで仕事をするということと、神山のスタジオで作品を制作することの違いは、私が、ミニチュアの作品を作る、ということに関係しているかもしれない。作品を作るために特殊な道具を用意したり、特殊な技法を使ったりする必要はあるが、場所が変わったからといって、適切な道具を用意するために特別に新しいことが必要なわけではない。

スポンサーの方々と一緒にそれを整えること自体が楽しいことだし、手伝ってくれる友人もいる。地域のみなさんがいろいろしてくださることで、一人だけで作品を作っているという気がしない。ミーティングをすると、新しいアイデアを提供してくれる。プレッシャーは全くないし、同時に地域のみなさんから批評やフィードバックもない。

地域の方々は、私の作品がどんなものになろうとも、それを待ち望んでくださっていて、私が自由にオープンに作品を制作できるよう配慮してくれている。母

国のスタジオで作品を作るときは、展覧会の締切があるが、ここでも作品を残さなければならないので、その点に関しては、あまり変わらない。これまでのKAIRの出版物やパンフレットに掲載された過去の作品などを見ると、自分も同じようにしっかりした作品を作って残さなければならない、というプレッシャーのようなものは感じる。

もうひとつ付け加えることがあるとすると、KAIRの出版物やWEBサイトについてで、それは、アートがツールとして使われることをどう思うか、という前の質問にも関係するかもしれない。

KAIRでは、カタログやインターネットでこれまでの作家や作品がすべて見られるようになっていて、それは私たちにとっては作品を見せられるもうひとつの会場のような重要な要素となっている。私はここ神山に実際に滞在して作品を制作しているわけだが、インターネットの中でヴァーチャルにも存在し、それが成長し続けているわけで、それも重要なことだと思う。

M: WEBサイトに情報が掲載されている、ということは、KAIRがどんなものかということが世界に発信されていることだし、(海外とKAIRの間で)コミュニケーションもしやすいと思う。

私もケビンと同じように、ここでは作品を自由に制作できる、と感じているが、地域の人たちから作品に対してもう少しフィードバックがほしいと感じることもある。私たちの仕事のじゃまをしてはいけない、と思っているのかもしれないが、遠慮せずにもっとフィードバックしてもらっても問題ない。

私は、地元の大工さんに材料や道具、技術について様々な質問をしたり、地域のお寺や宗教的なことを教えてもらったりすることを楽しみにしている。地元の音楽家とも一緒に仕事ができないだろうか、場合によっては作品展示と一緒にパフォーマンスをやってもらえないだろうか、とも思っている。地域の人たちと一緒に作品を作っているの、私は一人ではない。

でもポルトガルでは大きな違いがある。ポルトガルでは、作品が自然の中に設置されることはあまりなく、ランドアートは盛んではない。そういう作品を鑑賞す

る人々も限られている。都会では、ギャラリーの展覧会やパフォーマンスなどいろいろなことが行われているが、屋外のアートの展示はあまり行われていない。ポルトガルに戻ったら、そういう屋外での作品制作や展示、あるいはもっと地域と関わるようなアートをやってみたいと思っている。

3. BEPPU PROJECT

「触媒」としての文化・芸術の価値を求めて

③ BEPPU PROJECT

——「触媒」としての文化・芸術の価値を求めて

事例の概要

◎市町村データ

市町村名	別府市	都道府県	大分県
人口 ¹	125,385人	面積(人口密度)	125.23km ² (1,001.2人/km ²)
歳入決算額 ²	42,185百万円	歳出決算額	41,522百万円
市町村概要	九州の北東部、瀬戸内海に面した大分県の東海岸のほぼ中央に位置し、緑豊かな山々や高原と波静かな別府湾に囲まれた美しい景観を誇る。大地から立ちのぼる「湯けむり」は別府を象徴する風景として市民はもちろん観光客からも親しまれている。		

¹ 総務省統計局「国勢調査報告」2010年 ² 総務省自治財政局「市町村別決算状況調」2008年

◎主たる事業主体の概要

団体名	特定非営利活動法人BEPPU PROJECT		
設置年	2006年(NPO法人化)	連絡先	0977-22-3560
団体概要	世界有数の温泉地・別府市を活動拠点とするアートNPO。国際芸術フェスティバルを開催することをマニフェストに掲げ、現代芸術の紹介や教育普及活動、人材育成講座や出版事業、市街地の空き店舗をリノベーションする「platform」制作事業など様々な事業を実施している。		

◎関連する文化施設の概要

施設名	platform、その他の施設	運営母体	特定非営利活動法人BEPPU PROJECT
開館年	2009年	管理時間	不定
施設概要	platform01:コンテンポラリーダンスや演劇の練習・公演、作品の展示・上映、集会／02:アートギャラリーやアーティストの滞在制作／03:絵から話本題の本まで楽しめるブックカフェ／04:別府のアート作品を取り扱うショップ／05:アートのスペースとしての作品展示や、創作者の短期滞在／06:子どもからお年寄りま気軽に立ち寄れる交流サロン／07:竹細工の制作から販売まで行う工房／08:各platformや中心市街地の活性化進捗状況を紹介する情報発信拠点／清島アパート:若手アーティストの居住・制作の場／永久別府劇場:閉館したストリップ劇場を市民劇場として再生		
URL	http://www.beppuproject.com/space/		
所在地	別府市中心市街地各所(元町、中央町、北浜、末広町)		

◎事業の概要

事業名・クレジット	事業の内容	
別府現代芸術フェスティバル2009 「混浴温泉世界」 主催：別府市、別府現代芸術フェスティバル2009実行委員会	● 国籍も多様な8組のアーティストが別府を訪れ、それぞれの場所を選び、その場所でしか成立しない作品を発表した。これらを探して別府を散策する、旅としての展覧会「アートゲート・クルーズ」を核として、国内若手アーティストが古いアパートで滞在制作する「わくわく混浴アパートメント」、コンテナポラリーダンスのプロジェクト「ベップダンス」や、市内の特徴的な場を会場とする音楽ライブ「ベップオンガク」、別府の路地裏を案内する散策ツアー「ベップナビゲート」など、多彩なプログラムが開催された。	
	事業開始年	開催時期
	2009年	4月11日～6月14日
中心市街地リノベーション事業 (platform事業) 主催：別府市中心市街地活性化協議会	● 中心市街地の活性化を目的とする、別府市中心市街地活性化協議会が、家主のご協力のもとに改装工事(リノベーション)を行い、活用する。駅のプラットフォームのように、様々な人々が集い交流し、この事業を通じて別府のまちが、いきいきとした活動の場となることを目指している。 ● 別府市中心市街地活性化協議会は約60組の団体によって構成され、BEPPU PROJECTもこの一員となっている。	
	事業開始年	開催時期
	2008年	通年
ベップ・アート・マンス2011 主催：別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」実行委員会	● 毎年11月の1ヶ月間、別府で開催される様々な文化事業を紹介し、開催を支援する登録型のプラットフォーム事業。小規模文化団体の育成・支援を目的に広報協力や事務局業務代行、企画の実現に向けたサポートを行うことで、市民の主体的な参画を促進し、別府市における芸術文化の振興と活力あふれる地域の実現を目指す。 ● 2回目の開催となる2011年度は、57団体による87企画が登録され、別府市内各所の約40会場で開催された。 ● ベップ・アート・マンスとあわせて開発された「BP」は、1枚あたり100円相当のクーポン型金券。6枚のうち1枚はアート専用券とし、その他の5枚はアート鑑賞やグルメ、ショッピングや温泉などに使える共通券。 ● BPは、店頭でBPマークを掲示した加盟店(BEPPU PROJECTが厳選したお店や施設)にて利用できる。販売箇所はplatform04 SELECT BEPPU、platform08 やよいふらはち、別府市観光協会駅構内案内所、ほか。	
	事業開始年	開催時期
	2010年	11月1日～30日

現地調査の要約

1. 事業の背景、経緯

2004年、海外研修を終えた山出氏が帰国、別府に関心を寄せて積極的にキーパーソンと出会う。2005年にBEPPU PROJECTとして活動を開始し、2006年にNPO法人化。同年、全国アートNPOフォーラムを開催し、国際現代芸術フェスティバルの構想を発表した。

中心市街地活性化法の改正を受けて、2007年に「別府市中心市街地活性化基本計画」が国から認定される。別府市中心市街地活性化協議会にはBEPPU PROJECTも参加し、積極的に事業の提案を行う中で、行政や商業・まちづくり関係の民間団体とのネットワークが形成された。

2007年、創造都市国際シンポジウムを開催。チャールズ・ランドリー（都市プランナー、コメディア代表／イギリス）、ジャン＝ルイ・ボナン（ナント市文化顧問／フランス）、浜田博（別府市長）などをパネリストに、文化・芸術活動が地域や市民に対して与える影響について論議したことで、文化・芸術を活用した中心市街地活性化の機運が高まった。

2008年、中心市街地にある空き店舗等を地権者の協力を得て改装工事（リノベーション）を行い、プラットフォーム（platform）と名づけ、アートスペース、コミュニティカフェ、竹工芸の実演展示などで活用する「platform事業」（当初は「星座型面的アートコンプレックス構想」）を開始した。

2009年、4月から6月の65日間、別府市内約30ヶ所を主な会場エリアとする別府現代芸術フェスティバル2009「混浴温泉世界」を開催。9万2千人が鑑賞した。フェスティバルの期間中、テレビ、新聞、雑誌などのメディア掲載で別府市各所が賑わいを見せた。

2010年、次回の現代芸術フェスティバルに向けて、より多くの方々に日常的にアートを体験していただくためのアートイベント「BEPPU PROJECT 2010」を開催。その中でクーポン型金券「BP」の使用開始。2011年から「ベップ・アート・マンス」として展開している。

年表

2005年	任意団体としてBEPPU PROJECTを発足、翌年にNPO法人化。
2006年	全国アートNPOフォーラムを開催。
2007年	創造都市国際シンポジウムを開催。。
2008年	「platform事業」を開始。
2009年	別府現代芸術フェスティバルを開催。
2010年	アートイベント「BEPPU PROJECT 2010」にてクーポン型金券「BP」の使用開始。
2011年	ベップ・アート・マンス2011を開催。



別府市の中心市街地

インタビューから

- 別府でできないと言われるのは、土壌がないということである。観客もマーケットもなく、アートをやっている人がいないので、組織を作ってもお金がないことは分かっていた。しかし、東京のようにすでにプレイヤーがたくさんいるところでやっても意味がないと思っていた。根拠はないが、別府でやることに対する確信はもっていた。（BEPPU PROJECT: 山出氏）

2. 地域と連携した事業の内容:①別府現代芸術フェスティバル2009「混浴温泉世界」

国籍も多様なアーティストが別府を訪れ、それぞれの場所でしか成立しない作品を発表。国内外の8組のアーティストが会期前に別府を訪れ、まちを体験し、展示場所を決めた。明治時代の名残りのある旧旅館、築100年の長屋、昭和初期の住宅兼迎賓館、神社、港など、温泉観光地として栄えてきた別府を象徴する、その場所ならではの作品が設置された。

また、別府市街地にある古い下宿アパート3棟を使って、様々なジャンルから集まった国内若手アーティストの滞在制作・展示を行った「わくわく混浴アパートメント」にはたくさんの人が毎日訪れ、フェスティバルの終了後もアーティストにより運営され、絶えず作品や出会いが生まれ続ける場所となった。

その他、コンテンポラリーダンスのプロジェクト「ベップダンス」や、市内の特徴的な場を会場とする音楽ライブ「ベップオンガク」、別府の路地裏を案内する散策ツアー「ベップナビゲート」など、多彩なプログラムが開催された。

3. 地域と連携した事業の内容:②platform事業

中心市街地の活性化を目的とする、空き店舗等の改装工事と活用。当初、「星座型面的アートコンプレックス構想」として別府市中心市街地活性化協議会で検討が重ねられた。

中心市街地を多目的な交流の場と捉え、そこに拠点となる「platform」を点在させた。platformは地権者の協力を得て空き店舗や空き家の改装工事(リノベーション)を行うもので、アートスペース、アートギャラリー、コミュニティカフェ、ブックカフェ、アート&レジデンススペース、三世代交流サロン、竹工芸工房、情報発信スペースとして8箇所設置された。

この事業を通じて、地域の回遊性を高め、若者やクリエイターたちのまちなかの居住や店舗展開を促進させることで、人が集まる必然性を生むことを目指している。



「混浴温泉世界」で制作されたマイケル・リン氏の作品

インタビューから

- 混浴温泉世界では、国際的に活躍しているアーティストが発表していくことと、国内の若手作家がアパートでいろんなことをやっている動きの2つの軸がある。その2つの軸の構造が面白いとは言われたが、根本的なところを考えると、混浴温泉世界は地方でなかなか見られない芸術作品が核となるのだろう。(BEPPU PROJECT: 山出氏)

インタビューから

- BEPPU PROJECTとしては、platformはアーティストのための場として考えられているのかもしれない。しかし私としては、市は各店舗に直接援助をすることはできないので、人がそこにくる要素を見つけたいというのがplatform構想につながった。(別府市商工課: 安達氏)



platform01での活動

4. 地域と連携した事業の内容:③ベップ・アート・マン ス

毎年11月、別府での様々な文化事業を紹介、支援する登録型のプラットフォーム事業。2009年の別府現代芸術フェスティバルを経て、次回(2012年)のフェスティバルに向けて、より多くの方々に日常的にアートを体験していただくためのアートイベント「BEPPU PROJECT 2010」から、毎年定例の別府の「文化月間」として地域に根差した文化・芸術活動を紹介している。

小規模な文化団体の育成・支援を目的に、広報協力、事務局業務代行、企画立案から実現に向けたサポートを行うことで、市民の主体的な参画を促進し、別府市における芸術文化の振興と活力あふれる地域の実現を目指している。

5. 事業による成果や効果

◎分野や世代を越えた人材のネットワーク化

BEPPU PROJECT発足以前から、地域で活発な活動を展開していたまちづくり分野のNPO、民間企業のリーダーたちが、文化・芸術という異質な領域の専門能力を持つ地域外から来た若い人材に触発されて、ネットワークが広がり、活性化した。

また、BEPPU PROJECTのスタッフや事業に参加するアーティスト、クリエイターの年齢層が若く、地域内外の若者層の関心を引き寄せている。特に、フェスティバルの来訪者の多くが20代、30代の比較的若い女性であった。そのことから、今後の文化・芸術振興のみならず、観光振興やまちづくりにおける次世代の地域リーダーを触発し、育成しつつある。

◎中心市街地の賑わいと回遊性の形成

2009年の別府現代芸術フェスティバルでは65日間で約9万2千人が鑑賞した。開催後も様々な事業で中心市街地に回遊性が定着し始めている。

フェスティバル型の事業では、とにかく来訪者数が評価の対象となりがちだが、別府でのフェスティバルやplatform事業の場合は、特定の施設に人々が直行・直

インタビューから

- 「ベップ・アート・マンズ」は別府の「文化月間」であり、イベントではない。1ヶ月間別府で何かやる人を無料で登録する。想定しているのは文化活動を行う小規模な団体、個人であり、いくつか決まりはあるが、選考はなくアンデパンダンな形である。(BEPPU PROJECT:山出氏)
- 市民にホストとして参加してもらうためには、市民がプレイヤーになることが重要である。また、その人たちが家族や友人達を呼ぶ。その輪の広がりを期待している。(BEPPU PROJECT:山出氏)

インタビューから

- 彼(山出氏)はアートを持ち込んでいるが、ソフトフェアを作るといふ点では私たちの活動と似ている。活動にいくつかの共通点があることと、彼のモチベーションを信じていることができたことが、一緒にやれた大きな理由である。(NPO法人ハットウ・オンパク:鶴田氏)
- BEPPU PROJECTでやっていることがまちづくりと似ているから、私にとっては違和感がない。彼らもにとっても、私たちが以前から築いてきたネットワークがベースになっているはずである。(NPO法人八湯トラスト:菅氏)
- 若い人たちがイキイキとした。しかし、BEPPU PROJECTに関係している若い人たちがまちの中でまだまだ融合されていないと思う。彼らがもっとたくさんの人と顔見知りになってネットワークを広げてほしい。(NPO法人八湯トラスト:菅氏)

インタビューから

- platformに行くことが目的ではなく、platformに行くためにまちを歩いてほしいというのと、途中にある店に立ち寄ってほしいというのが目的としてある。観客がどのようなルートを通ったのか、逆にどのようなルートを通してほしいか、観客の動線を考えながら作品や企画を仕掛けていくという工夫はできる。(別府市商工課:安達氏)

帰するのではなく、拠点から拠点へと移動することで、中心市街地での滞在時間を長め、賑わいを醸成している。

つまり集客を第一義の目的として、大きな文化施設で著名なアーティストの展示や公演を行い、来訪者は単に目当ての芸術を鑑賞し、鑑賞後はすぐに帰ってしまう形態とは異なる。中心市街地の小さな拠点を移動しながら、芸術鑑賞だけでなく、飲食やショッピング、体験型観光など、回遊性を高めて市街地での滞在時間を増やし、そのことで経済的な波及効果を高めようとしている。

◎地域資源の発掘と新しい価値の付加

platformや清島アパートのように、老朽化した空き店舗や空き家などの建物に好奇心や興味を持ち、地域資源として発掘した。この発掘のプロセスに文化・芸術の専門的な視点を持ち込んだことで、それらの地域資源に価値を発見し、あるいは新たな価値を与えることに成功している。

同時に、老朽化した空き店舗や空き家を改修する場合も、デザインや機能をすべて塗り替えてしまうのではなく、その建物や空間に元来備わっていたデザインや機能を活かしながら、改修している。そのことが、地域の人々にとっては過去の思い出や記憶を残し、地域外の人々には、別府ならではの歴史性や特徴をアピールすることにつながっている。

6. 事業の実施体制

◎主催者・事務局

別府現代芸術フェスティバルは、別府市および実行委員会が主催。platform事業は、別府市中心市街地活性化協議会が主催。ベップ・アート・マンスは、実行委員会が主催。以上の事業の実質的な事務局を、NPO法人BEPPU PROJECTが担っている。

発足当初は学生や社会人ボランティアが中心の脆弱な組織体制だったが、しっかりとした組織体制を作り、資金調達に努めている。「地域の課題に対してアートというものをハブにしてつなげていく」という考え方で、事業の目的や内容に応じて、協働のパートナーとの利害が一致する関係づくりに努めている。

インタビューから

- 内閣府の調査費をいただいて別府市内の空き家の調査をP3に委託して行った。そのときに、空き家や空き店舗のリサーチを行い、建築士も入って活用できそうな建物を洗い出した。その中からplatform事業の建物だけでなく、混浴温泉世界で使われた清島アパートなどの建物を発見した。(大分大学福祉科学研究科: 棕野氏)

インタビューから

- 2005年の4月に任意団体としてBEPPU PROJECT を立ち上げ、若い世代を中心に10名ほどで活動を開始した。半年間の準備を経て、2006年5月に法人となった。(BEPPU PROJECT: 山出氏)
- 地方のNPOは毎年のイノベーションが求められるし、そうしなければ生きていけない。どうイノベーションしていくかがとても大きい。(BEPPU PROJECT: 山出氏)

7. 現在の課題、将来のビジョン

事業の実施母体となる事務局と、行政とのパートナーシップの仕組みを構築すること、BEPPU PROJECTの事務局としての経験不足が課題として挙げられている。また、BEPPU PROJECTが主たる事務局機能を担う中心市街地活性化協議会では、会員の自主的な参加と若い世代のネットワーク化が必要となっている。

事業内容では、中心市街地における、より日常的な回遊性のある拠点の形成(子育て世代の家族連れ観光客が、回遊し、滞在できる場とプログラムの開発)が求められている。事業評価のあり方も課題として挙げられ、具体的には、単年度では見えない成果の評価の仕組みが必要となっている。

今後、大分県とBEPPU PROJECTの協働による、国東半島や広域連携を視野に入れた地域振興が計画されており、別府市内での事業とともにBEPPU PROJECTに大きな期待が寄せられている。

8. 文化・芸術を活用した地域活性化について

BEPPU PROJECTの場合、「現代芸術」という、まだ評価の定まっていない表現に可能性を見出している。それらは、すでに歴史的にも定評のある作品や作家とは違い、鑑賞者自身の感性や鑑賞を経験する文脈によって評価が変化し、多数の人々から一定の共感や理解を得ることは難しい。

しかし、だからこそ閉塞的な見方や考え方に風穴を開けることができ、価値観に多様性が生まれ、人間の想像力や創造力を引き出すことができる。

文化・芸術を地域の活性化に活用する場合、文化・芸術そのものの価値よりも、人と人、物事と場所、異なる価値観を出会わせるような「触媒」としての価値に着目することが重要である。BEPPU PROJECTは、その触媒としての文化・芸術の力を、まちづくりや観光振興などに最大限に活用しようとしている。

インタビューから

- 一番大きな課題として、行政、特に別府市との関係性がある。正直に言うと理解はほとんどされていない。組織として信頼されておらず、行政ときちんとパートナーシップを組んでいない。(BEPPU PROJECT:山出氏)
- 評価という軸で見るのは非常に難しい。基本計画上では24年度末に目標をどれだけ達成したのか数値を出さなければいけないが、それでまちが終わるわけではない。今やっていることが10年、20年後にどのようなになっているかが重要である。(別府市商工課:安達氏)
- BEPPU PROJECTが文化を起こすことが、新しい観光地に脱皮しようという別府の地域づくり触媒として機能している。BEPPU PROJECTの活動は地域活性化という面もあるが、大観光地の別府の再生の切り札として頑張ってもらいたいと考えている。(大分県地域振興局:藤澤氏)



NPO法人BEPPU PROJECT 代表 山出淳也

インタビューから

- 文化・芸術には、その単体としての価値よりも、触媒としての価値に可能性を感じている。文化・芸術は、それに関わる人間の想像力や創造力を引き出す。それによって多様な創造性が育まれ、再生し、覚醒することができ、社会そのものが創造力を持つ(BEPPU PROJECT:山出氏)
- 文化・芸術には、創造性の育成や多様な人の社会参加を促す役割、まちの誇りやオリジナリティの発見があるということを実感している。(大分大学福祉科学研究科:棕野氏)

(1) NPOへのインタビュー

日時:2011年8月30日(火)16:30~17:30

場所:BEPPU PROJECT事務所

対象:山出淳也(NPO法人BEPPU PROJECT代表)

1. 自己紹介

- 1970年生まれ。大分県出身。高校時代からアーティストとして活動を開始した。高校3年のときに初めて展覧会を開き、当時はバブルで作った作品もどんどん売れたので、「アートって儲かるんだ」と思いそのままアーティスト活動を行っていった。美術系の教育は受けていない。
- もともと作家であり、プロデュース業やNPOの運営は経験がなかった。2004年の秋に日本に帰ってくるまでは、ニューヨークやドイツ、フランスに行っていた。それまで作っていた作品は「プロジェクト」と呼ばれるリレーショナル型のものである。
- 別府で活動を開始したきっかけは、2003年の末か2004年の頭に、初代の観光庁長官の本保芳明さんが書いた、「今、別府が面白い」というインターネット記事をパリで読んだこと。大分県の人間だった自分にとって、別府は1年に1、2回は行く場所であり、特徴的で面白い町であるという30年ほどの記憶がよみがえってきた。
- それが、バブルの時期と同じくしてどんどん衰退していった。私が高校生の頃に、シンボリックなホテルが倒産してしまったが、にわかに信じ難いことであった。
- 今のまちと当時のまちを比べると、お客さんの数の違いはもちろんだが、圧倒的に違うのが浴衣を着て歩いている人の数である。今は浴衣を着てまちを歩いている人はほとんどいないが、昔は浴衣を着ている人が圧倒的なマジョリティであった。
- 別府は変わってしまった。幼少期に、いつか大人になったら別府に遊びにいきたいな、と思っていた場所が突然消えてしまったある種の喪失感があった。
- 20代のときに、別府でレジデンス・プレイスを作るなど、何かやりたいと思っていたが、なかなか実現には至らなかった。記事を読んだときに、そのときの記憶がよみがえってきて、日本に帰り、別府で何かやろうと決めた。
- そこで、本保さんの記事に出ていた人たち全員に会おうと思い、鶴田さんや野上さん、菅さんにお会

いした。別府で自分が何をしたいのか、いま一つよく分かっていなかったが、少なくとも、海外で会ってきたアーティストやキュレーターが別府を見たらどんなふうに思い、どんな作品を作るのか興味があった。それがフェスティバルという形なのではないかとおぼろげに思っていた。

- 当時、別府には知り合いは一人しかおらず、その人ともとりわけ親しい間柄というわけでもなかったが、こういうことがしたいと話しにいったのは2004年10月のこと。彼女から何人か紹介してもらおうと同時に、私の知り合いのアート関係者にも話を聞きにいった。
- 東京のアート関係者には、観光地でアートというと、「湯布院でも何かやっているんじゃないか」とか、「福岡や大阪や東京でやったほうがいいんじゃないか」と言われ、別府ではアートフェスティバルは無理だという意見ばかりだった。
- 私自身は何ができるのか見当もついていない時期だったが、みんなに反対されたことは逆にチャンスだと思った。別府でできないと言われるのは、土壤がないということである。観客もマーケットもなく、アートをやっている人がいないので、組織を作ってもお金がないことは分かっていた。しかし、東京のようにすでにプレイヤーがたくさんいるところでやっても意味がないと思っていた。根拠はないが、別府でやることに對しての確信は持っていた。
- アート活動を始めたばかりのころは大分で活動しており、アートに関心のある人は、ここにはそれほど多くはないことを知っていたはずなのに、いつのまにか当然アートが盛り上がっているはずだと思い込んでいた。3ヶ月くらいいろいろな人と話をする中で、誰一人現代アートやアートフェスティバルのことを知らないことに気付かされ、ふと我に返った。
- 有名なキュレーターを呼んできてどうするというやり方ではなく、10年、20年と時間をかけ、別府に合ったフェスティバルの形を模索していくことが大切である。もう少し段階を踏んだ形で戦略的にフェスティバルを作っていくには最短で4年かかると思った。そのプロセスに基づいて計画を作っていた。
- いろいろな人と知り合ったことや、時代の中で「創

造都市」という概念を学んだおかげで、中心市街地活性化事業にアートを取り入れてはどうかと提案することができた。そこから、次第に混浴温泉世界というものが立ち上がっていった。

2. 事業の目的・内容

◎別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」

- 混浴温泉世界はBEPPU PROJECTの事業のひとつの核だが、立ち上げていくプロセスが重要だということに気付いた。プロセスというのはフェスティバルを行うためにインフラとして何が必要か考えることである。
- 初回の混浴温泉世界では、国際的に活躍しているアーティストが発表していくことと、国内の若手作家がアパートでいろんなことをやっている動きの2つの軸があった。その2つの軸の構造が面白いとは言われたが、根本的なところを考えると、混浴温泉世界は地方でなかなか見られない芸術作品が核となるのだろう。
- しかし、予算には限りがあることと、実行委員会がどこまでコントロールできるのかということもあり、異なるベクトルを持つ軸をどちらもいれていくのは難しい。そこで、今はその2軸をあえて切り離そうとしている。
- 混浴温泉世界が有名なアーティストだけ来るものになるとあまり魅力的に思えない。しかし、市民が文化祭的に小さくやっていることでは集客が難しい。この住み分けを考える上で、性格の違いを作ろうとしている。
- 前回の混浴温泉世界の参加アーティストは170組ほどおり、そのうち132組は「わくわくアパートメント」に関わった作家である。今回は8組(=8プロジェクト)だけであり、一つひとつのプロジェクトを丁寧に作り上げる。それはまちの中に新しい源泉が生まれ、8つの湯煙が立つというイメージである。その間にいろいろなことが起こっていく「状況」を作りたいと思っている。そのためにアート・マンスとBPが機能する。

◎中心市街地リノベーション事業

- platformの構想の根底には、関わる人たちの関わる理由を作ることがある。2007年に「星座型面的アートコンプレックス構想」というものを発表した。中心市街地の空き店舗をコミュニティスペースとしてリノベーションし、回遊のルートによって、星座の形が様々に変わり、それらが点となるところがどんどん生まれていくことを目指している。
- 中心市街地活性化協議会のコンセプトメイキングをする会議に参加して、platformの案を出したが、現在の部長で当時の商工課の課長しか面白いと言ってくれなかった。1年で駄目になるとか、お金をかけない駄目だろうと言われていたが、他に案もなかったのでもとにかくやってみようということになった。
- BEPPU PROJECTも会員である中心市街地活性化協議会がplatformを運営しており、BEPPU PROJECTなどplatformを使用する団体と、協議会で使用契約を結んでいる。お金は別府市から中心市街地活性化協議会に補助金が入り、イベントはplatformを管理運営する団体が各自で企画している。借り手は協議会、運営はBEPPU PROJECTなどである。
- ビジネス目的ではなく、商店街の活性化のためであることを丁寧に説明して、通常の3分の1ほどの価格で借りている。リノベーションの費用は別府市からでている。
- 8つのplatformのうち、4つはBEPPU PROJECTが運営しており、残りは他のいくつかの団体が運営している。毎月1回は情報共有のために集まっている。必ずしもうまくいっているとは言えないが、なんとか事業を続けて3年が経つ。
- やっていく中で、小さな拠点が町に点在することで回遊性が生まれてくることに気付いた。platformが生まれる前年の10月末に国際シンポジウムを開催し、platform案を発表すると、大分大学の棕野先生が面白いと言って協力してくれた。別府市に話に行き、翌年の当初予算がついた。このスピードは一般的にはありえないことであった。

- 当初予算では3つくらいしか造れなかったが、混浴温泉世界にあわせてとにかく造ろうということで場所を探しにいった。第1号となるplatform01は間口も広く、場所もよく、今後まちへ動くときの「へそ」になる場所だと感じた。また、持ち主は商工会議所の理事をされていて、その方が使わせてくれることも大きかった。絶対に使いたかったので、交渉に交渉を重ねた。
- 実現にはいくつかの課題があった。ひとつは不動産の価格である。固定資産税が絡んできたりして、建物自体には価値がなくても家賃が高い。これを下げていくのはなかなか難しい。
- 提案はBEPPU PROJECTだったので、当初はBEPPU PROJECTがplatformを運営していけばいいという風潮だった。しかし、これは中心市街地活性化協議会の事業である。まちなかの回遊性を高めるという大きな目標がある中で、イニシャルコストをかけずに人の動きで回していく仕組みをつくらなければいけないと思った。
- その仕組みを作っていくためには、様々な調整をしていかなければならないが、その役目は誰も負いたくない。それをBEPPU PROJECTが引き受けることで、仕組みを成り立たせてきた。どんなことでも誰かが実際に動かなければ何も進まない。platform事業が今でも残っている最大の理由がこの進め方である。
- 今までのハコモノ行政だったら、箱さえあれば何かをやることができるだろうということが前提となっていた。箱を造ることも公民館づくりには違いないが、人が動く仕組みづくりのための小さな拠点を造るとというのがplatform事業であると思う。
- 課題はそれぞれ持っている。あとは組織の実行力、行動力次第というところである。まちのなかで行動を起こす人たちが生まれて、彼らが活動する場所がまちの中にあり、まちの可能性として語られていくことがとてもいいと思っている。

◎ベップ・アート・マンズ

- 2010年から始まった、「ベップ・アート・マンズ(以下、アート・マンズ)」は別府の「文化月間」として、実施

する文化イベント。1ヶ月間別府で何かやる人を無料で登録する。想定しているのは文化活動を行う小規模な団体、個人。いくつか決まりはあるが、選考はなくアンデパンダンな形であり、イベントの規模や質は問わない。

- 今年は40団体60企画になると思う。前回は27団体43企画なので大幅に増えた。アート・マンズは助成金事業ではないので、参加団体には金銭的なサポートはないが、パンフレット掲載といくつかの会場が無料で使えることだけでなく、事務局代行も行っている。小規模の文化団体や個人にとって事務局業を行うことは難しいので、そのサポートを行っている。
- 参加してくれる方の特徴はピアノの発表会と近いところがあって、血縁関係プラスアルファを呼んでくるような感じ。アート・マンズの事業はその客層を狙っている。そこで、毎年アート・マンズ会期中に混浴温泉世界を知ってもらうためのシンポジウムを開催しているし、来年は混浴温泉世界とアート・マンズを同時開催する。
- 前回の混浴温泉世界のときもやりたいことがあったが、あれもこれもという中で散漫になってしまったので、混浴温泉世界は凝縮した形で行う。そのかわりにアート・マンズも必ずやることで、理想とする混在性を目指す。
- 混浴温泉世界のように中心市街地を使う場合、一番の課題となるのは場所の問題である。別府は飲食業ばかりなので、倉庫などの大きなスペースがない。アート・マンズで場所を使ってもらうことで新たな場所の使い方のモデルを提示し、それに触発されて新たな場所を見つけることを目指している。
- BEPPU PROJECTや民間が持っている場所を無料で貸し出すのは、光熱費もかかるのでなかなか難しいが、小さな文化団体だと会場使用料を払うお金もない。そこで、人材育成ということで、別府市から補助をもらい、会場を無料で使うことができる仕組みを作った。
- 今年から始めたチャレンジとして、ディスカウント会場を用意している。上限1日2万円までサポートして、会場や集客数によってサポート額が変わる。

お寺や公民館など様々な場所が会場となっている。有料でもどれくらいのニーズがあるのか知りたいということと、来年はこういうスペースがあるから使ってみないかという声をかけてもらうことをねらいとしている。

- 今年積極的に団体間の交流を促すために、交流会を2回ほど行っている。プレイヤーが増えること、まちに眠っているプレイヤーを発掘することを目指し、ハードルを少し低くして、ちょっと背中を押す手伝いをしている。
- 市民にホストとして参加してもらうためには、市民がプレイヤーになることが重要である。また、その人たちが家族や友人たちを呼ぶ。その輪の広がりを期待している。

◎クーポン型金券「BP」

- 混浴温泉世界2009のときは、料飲(料理飲食)協同組合の組合長などに来てもらい、何度も説明を行ったが、具体的な取り組みはほとんど生まれなかった。今回混浴温泉世界2012を開催するが、ただ開催するといっても協力してくれる人は少ないだろう。そこにはターゲットに対する考え方が全く異なるという根本的な問題がある。
- 準備の中で時間をかけて、小売店の方たちと話し合い、こちらの思いも伝えたいし、あちらの思いも汲みたい。そのための仕組みとしてクーポン型金券「BP」を考えた。
- 混浴温泉世界2009を開催するときに、観客の楽しみとして、アートだけでなく温泉や観光もあるだろうと考えた。前回は温泉や飲食店などのスポットを記した手作りのマップを作った。それを始まりとして、2010年より金券を発行し、地域のお店に加盟していただくことで、2年間かけて仲間を増やしてきた。
- 現在のBPにはBEPPU PROJECTが入ってもらいたいところだけに入ってもらっているが、今年からは行政のサポートを受けてパンフレットを作る予定である。そうすると個人個人へのお願いではなく、商店会や料飲協同組合など組織に対してのお願いになる。しかし、そうなると、パンフレットに掲載しているお店をどこまでお薦めできるのかという保証が

なくなる。そのため、前回の混浴温泉世界のときはBPを実現できなかった。

- 2010年3月にミニフェスティバルを開催したときは、主催がBEPPU PROJECTだったので自分たちで責任を取れるということでBPを取り入れてみた。評判はよく、ある程度の実績を作ることでもできた。そこから何回か更新をして、加盟店舗数は増えているが、やめたいという店は一店舗もない。
- BPは加盟料や広告費を取っていない。そのかわり10%の手数料を取っている。これは比較的高い手数料だが、お客が増えていることと、お店をやっている人たちも、まちづくりに貢献したいという思いがあるので参加してくれている。お金や人手を出すことは難しいが、BPなら売り上げにもつながるし、参加しやすいようだ。
- 金券なので換金しなければならない。現在は100店舗近く加盟しており、それぞれの注文があり対応はなかなか大変だが、彼らはBEPPU PROJECTにとって要である。彼らは観客と最前線でつながっている。お互いに言いたいことを言える関係を作りながら理解していくことが、ホストを広げていくためには重要である。
- 利害関係を持ちつつ協力してもらうあり方を作っていかなければならない。広告費のほうに分かりやすいが、金券のほうがより継続的に関係をもっていける。また、金券を始めてから、各店舗に金券の帳簿をつけてもらっている。金券の利用率とBEPPU PROJECTのイベントの実施内容を組み合わせてマーケティングをしていくことも可能である。広告では何人来たか実数をはっきりしないが、金券にはそのよう利点もある。
- BPは600円分の金券を500円で買え、余剰分の100円はアートイベントでしか使えない。日常的にアートイベント用のBPを使っていく仕組みとして、現在、SELECT BEPPUという別府の名産品やBEPPU PROJECTのグッズなどを取り扱うセレクトショップをplatform04にオープンしている。

◎旅手帖 beppu

- F1層(放送・広告業界の用語で20～34歳の女性を

指す)を引きとめるための工夫として、SELECT BEPPUや「旅手帖 beppu」という冊子を作り、まちにきた人や混浴温泉世界を知らない人たちに伝えていくための情報発信のやり方を考えている。

- 旅手帖 beppuは120ページのフリーペーパーで、年4回発行の季刊誌。誰がアート・マンズのプレイヤーとなったり、観客に情報を伝えてくれたりするかと考えたときに、「別府っていいよ」と言いたくなる人を増やすことが重要であると考えた。ターゲットとしては35歳くらいまでの女性を考えている。
- デザイナーと写真家はプロだが、編集は完全な素人であり、彼女たちが編集とBPの営業を兼ねている。彼女たちがアートというものをおぼろげに感じながら動いていることと、ターゲットと世代が同じところがとてもいいと思っている。アートに詳しい人がアートを語るより、彼女たちが自分たちもアートが分からないと言いながら、読者と同じ目線で接していることは効果を発揮している。
- まちの人にとって、アートはやはり近付き難い存在だったようだが、彼女たちがいい意味で敷居を低くしてくれている。今まではまちづくりに熱心な、いわゆる「ノイズ・マイノリティ」ばかりが事務所を訪れていたが、最近では「サイレント・マジョリティ」の中の「サイレント・パトロン」としてお店を営んでいる人などが来てくれている。これは旅手帖 beppuの編集を担当する彼女たちのおかげである。

3. 事業の背景、経緯

- 2005年の4月に任意団体としてBEPPU PROJECTを立ち上げ、若い世代を中心に10名ほどで活動を開始した。半年間の準備を経て、2006年5月に法人となった。当時はまだ「混浴温泉世界」という名称もなかったが、アートフェスティバルを開催したいと思っていた。
- 2005年は数多くのイベントを実施したが、イベントが多いと疲れてしまう。次の年はステップアップを図っていこうということで、2006年に全国アートNPOフォーラム、2007年に創造都市をテーマとした国際

会議を開催した。2008年は国際会議で提案した「platform事業」を開始し、2009年に混浴温泉世界を開催した。

- 計画は2005年の4月の段階ではできていたが、どのように実現していくのかは自分の中で見えていなかった。今でこそ自分で助成金を取ってくる作家も多く、プレゼンテーションが上手な人も多いが、かつては自分で申請書も書いたこともなかったので助成金をとるのも一苦労だった。今でも書類を書くのは苦手だし、プレゼンテーションもあまり得意ではない。
- 2005年に立ち上げたときはアサヒ・アート・フェスティバル以外に助成はなかった。資金を集める方法としては2つあり、ひとつは違う助成金や補助金を集めるというやり方、もうひとつは小さな額でいいからファンドレイジングをしていくというやり方である。後者のほうを達成するために、例えば祭りでカキ氷を売ったらどうかという話もでたが、必要な額を考えるとあまりにも現実的ではなさすぎた。
- アートの現場を共有しない限り、アートがどういうものか見たことがない人が大きなフェスティバルをやるための原動力になることはないと思った。別府はイベント慣れしているまちなので、無理してでもアートを先に導入していかなければならない。コツコツとカキ氷を売って資金調達することも不可能ではないが、お金を集めることだけが目標となってしまう、それだと大きな目標が見失ってしまうと思った。そこで、助成金や補助金を獲得するというやり方を選んだ。

4. 事業の実施体制

- 組織は学生中心で、社会人もいたが、他にも仕事をしており、フルタイムでできる人間は私しかいないという非常に弱くもろいものだった。鶴田さんと話をする中で、補助金を狙ってはどうかということになったが、1年目で実績も全くないので、公的団体のバックアップが見えないと補助金や協賛金の獲得は難しいだろうといわれた。そこで、しっかりと

した組織体制を作ることを目指し、観光協会、商工会、顧問団体、美術館関係者や専門家に個人委員になってもらった。

- 鶴田さんは単発のイベントをやるだけの団体にはそれほど協力的ではなかったが、BEPPU PROJECTには非常に協力してくれた。時間をかけてやろうとしているところに好感を持ったと言っていた。1年目は、助成金の申請書を出すときは全て鶴田さんに添削してもらった。
- 大分県の地域活性化事業の助成金に応募したときに、公開プレゼンテーションがあったが、初めてのプレゼンテーションで何を言っているのか分からなくなってしまい、散々な結果だった。その助成金は選考が2回に分かれており、プレゼンテーションがもう一度あった。資金の当ては他にはなく、必死で挑んだ結果、次の選考で満額を取ることができ、活動をスタートした。
- 現在は中心市街地活性化協議会に入り、中心となって活動しているが、私は別府には住んでいないので、やはり住んでいる人が考えないといけないと思い、初めは協議会にも入っていなかったし、会議にも出席していなかった。しかし、実際に出席する中で、商店街を経営している人たちが70歳を越えており、自分たちで何か活動する体力もないという実情も見えてきた。今は、BEPPU PROJECTが何かしなくてはいけないという状況になっているが、実際に別府に住んでいる人は本当にそれでいいのかという矛盾を感じることもある。
- 地方のNPOは毎年のイノベーションが求められるし、そうしなければ生きていけない。どうイノベーションしていくかがとても大きい。BEPPU PROJECTの事業のうち、自分たちや一部の人のためにしかない事業は継続していない。
-

5. 事業による成果や効果

- 成果はまだまだ上がってないと考えている。どう評価するかというのがないと成果は見えてこない。今まで事業を単年度で評価していたが、大きな方向

性として評価の仕組みを構築しなければいけないと考えている。

- 現在文化庁から委託を受けている中で、新たな取り組みとしてバランススコアカードによる評価を取り入れることを検討している。バランススコアカードの一番のポイントは視点の設定である。どういった観点から事業を見るかということがあり、ファンドレイジングや地域、観客など様々な視点が想定される。一年間でここまでやるというより、大きなビジョンを設定する中で、どこまでそれを成立させていけるか、マイルストーンをどこに置くのかを考えていく。
- 混浴温泉世界の「成功」と言ったときに、成功が何であるのか。観客数、プレイヤー数、満足度、リピート率など、混浴温泉世界のどこに評価を置くのかを設定する。さらに短期目標、中期目標、長期目標を設定し、最終的にはグラフや数値として可視化する。
- スタッフに評価の仕組みについての完全な理解を求めてもなかなか難しいと思う。ある程度やっていく中で、振り返ったときに見えてくるものであると考えているので、やりながら進めていきたい。
- 混浴温泉世界以降、20名近くのクリエイターが引っ越してきている。こういう方々が発表する場としてアート・マンスを用意したところもあるが、1年に1回しかない。月に2度ほどワークショップを行っており、そこに講師として呼んでいるがその講師料だけでは生活ができない。アーティストがお金を得るあり方をもっと開拓していかなければならない。作品を売るか、講師をするかだけでなく、新しい仕事を作れないかということを事務局としても考えている。
- アート・マンスは前回成功したかという話になったときに、片や成功したと言え、片や成功していないと言える。成功しているといえるのは視点があるからである。しかし、まだまだ成功とは言えない部分もある。
- アート・マンスやplatformの仕組みができたところを評価するのならば、成功と言える。しかし、さらにどれだけの人が関わりを持ったのか、関わった人が次にどのような展開をしているかを見ていくためにはいろいろな調査しなければいけない。

- 成功するか分からなくても種をどんどん撒いていくという、拡散型の考え方をしている。一見すると、とても遠回りなやり方をしているが、成功させるためには必要なことであり、広がっていくことで経営的に回収できる場面が増えてくる。1年間で回収できるものもあれば、3年かかるものもある。

－混浴温泉世界の開催を経て、山出さんの関心がアートプロジェクト、アートフェスティバルを行うというよりは、アートを要素にしながら仕組みを作っていくことに移っているように思える。山出さんの中で、アートと仕組みの2つがどのような位置づけとなっているのか？

- たしかに、仕組みづくりや文化政策的なことに非常に興味があるし、それが求められていることも分かっている。アートも仕組みも相互関係だと思っている。
- 混浴温泉世界2012は「やっぱりアートじゃなきゃできないんだ」ということをテーマに、まちづくりの中に位置づけられるアートではないものを見せたいと思っている。アートプロジェクトとまちは分離するものではない。

－BEPPU PROJECTの活動と山出さんがアーティストとして作っていた作品に似ているものを感じるが、山出さんにとって、BEPPU PROJECTの活動もアーティストとしての活動の延長線なのではないか？

- それは間違いない。作品を制作していたときは、コンセプトとして、いろいろなものを集めて別なフィルターから放出するということをやっていた。私自身はそういった考え方しかできない。BEPPU PROJECTでは、代表であり、プロデューサーに近いがディレクションもしているという立場で活動しているので、活動が作品と似てくるとは思っている。
- しかし、BEPPU PROJECTが自分の作品であるとは思っていない。BEPPU PROJECTが次の代表者に変われば、その考えによってBEPPU PROJECTも変容していく。あくまで、フィールドでありプラットフォームである。

6. 現在の課題、将来のビジョン 等

- 一番大きな課題として、行政、特に別府市との関係性がある。正直に言うとう理解はまだ進んでいない。組織として信頼されておらず、行政ときちんとパートナーシップを組めていない。混浴温泉世界は市民主導型ということを謳っており、「新たな公共」という考え方にも近い。どのように行政と一緒にやれる仕組みを作れるかということが鍵だが、前はそれがうまくできなかった。今でも理解いただけるような説明ができていない。
- platformの仕組み、シンポジウム、フォーラムは行政との関係づくりのためにも行いたかった。県と組んで仕事をすることもあるし、別府市からも委託を受けているが、我々が面白い存在だと思ってくれている個人との信頼関係で成り立っている。もっと組織としてつながっていかないと駄目だと思っている。
- 混浴温泉世界では、BEPPU PROJECTが事務局を担っていたが、経験不足が露呈してしまった。予算も固まっておらず、資金や運営の算段もついていない中で、経験もない私が、「とにかくやる」と言っていて開催してしまったので、どう見ても危うかった。
- 幸いにも、若いスタッフたちがすごく頑張れたし、その頑張りが傍目にも明かだったので、観客もしょうがないかと思ってくれて、そこまで批判はなく、無事に終えることができた。アーティストも私たちが空回りしているのを見ていたが、共感を持ってくれて、協力してくれた。
- 課題は山のようにでて、反省もするけれど、これはすごいチャンス。なんとなくよくなかったことが分らなくなっているよりは、よくないことが明確にできたことはありがたいことである。3年後に再び開催しようということになっていたのも、課題の中で必要なことをやっているところである。
- もうひとつの課題として、コアなファンは来たが、前は集客が絶対的に足りなかったことがある。当初は別府市民が20%で、別府市以外は40%と踏んでいた。しかし、実際に来た別府市民は14%であった。もちろん広報不足は大きいのだが、別府

市の就業人口構成として、第1次産業1.5%に対し、第3次産業は81.8%である。第3次産業も、旅館や飲食などサービス産業が圧倒的に多いことが要因に挙げられる。

- 彼らは忙しいし、観客が来る機会があれば少しでも商売をしていきたい。その人たちを観客として考えていたのは大きな間違いである。別府市民は観客ではなくパートナー、ホストとして参加してもらわなければならない。そこが最も根本的に間違っていたところだった。実行委員会の中に商工会議所や観光協会のトップだけがいても機能しない。
- 市民主導型と言っている一番の利点はフットワークと実行力、決断力の早さなので、上の人間ばかり増やしても決断が遅くなってしまう。どのように関係性を作るか、そのための仕組みとしてアート・マンズとBPを考えた。
- 市民に混浴温泉世界を知ってもらい、ホストとなってくれる人を増やすことと、集客をどのように増やしていくかという2つの大きな課題を考えていく中で、混浴温泉世界が目指すものを明確にしようとしている。
- 中心市街地を活性化する中で、行政にとって商店街の活性化は命題ではあるが、platformを造り、イベントを催しているだけでは人の賑わいは足りない。もっと日常的な行き来、回遊していく拠点を考えなければならない。
- 圧倒的に午前中はまさに人が少ない。商店街が開いておらず、通路にしかならない。アーケードのある商店街は自転車の通行量が多いことも、通行人の歩みにくさに拍車をかけている。
- 20代～40代前半の方が子どもを連れて別府に行く理由がない。昔は商店街におもちゃ屋など子どもが行ける場所があったが、今はそれがショッピングモールやデパートに入ってしまった。子どもがまちに来る理由もない。
- 家族連れが来てまちに滞在してくれても、それをケアする場所がない。BEPPU PROJECTはアートに関係することができるが、なかなか子どもに対するケアはできない。
- これらの課題を考えていく中で、今やろうとしてい

ることが、単純に言う「おもちゃを作ろう」というプロジェクトである。まずアーティストにおもちゃを発注する。ワークショップ的にやってもらうのではなく、もっとドライに職能を生かしてもらおうという考え方で、きちんとブランディングを行う。

- 床が軟らかくて子どもが転んでも大丈夫なので、platform01を会場にする。時間は実験的に土日の午前中にする。お客さんは午前中に遊びに来て、お昼にまちでご飯を食べる。
- もうひとつのターゲットは、北浜旅館街という大型旅館の多いところに泊まりに来る客である。その客層は家族連れが多く、子どもが来ている。団体客はすでに行程が組まれているが、家族客は子どもが遊べる場があれば寄ってくれる。北浜旅館関係者たちに組織に入ってもらい、コンソーシアムを結成し、そこから呼べるようなあり方を作っていき、新しい朝の楽しみ方を提供する。
- 朝の早い時間帯にやっているカフェが今は少ないが、子どもの遊んでいる間にお母さんたちがお茶を飲めるようにしたいので、商店街に協力をもらいながら、そういったサービスも作っていききたい。
- 子どもがたくさんいれば、自転車で通路に入るのをためらうようになるだろう。商店街やその利用者の意識改革も目指している。
- 場所の管理は、大分県内の保育園、保育所のOG、OBに登録してもらい、給料というほどのお金は出せないで、限りなくボランティアに近い形で協力してもらおう。今は組織づくりを行っている段階である。
- 来年の混浴温泉世界のときには500種類以上のおもちゃの開発を目指したい。その中で商品として売れそうなものは商品にしていきたい。知育玩具が中心で、キャラクターものは一切いれない。もっと不思議なおもちゃを作っていきたい。
- 子どもは大人よりも考え方が柔軟で、私の娘たちも「面白いものを作ってくれる人」＝アーティストだと思っている。子どもたちがそういう人たちと出会っていろいろな体験をすることで、別府はすごく面白かったなと思ってくれて、20年後、30年後に別府に戻ってきてくれることにつながれば一番いい。

- 必ずしもアートをやりたいということではない。地域の課題に対してアートというものをハブにしてつなげていければと考えている。おもちゃを作ろうというプロジェクトの広がり方は私の考えていることを具現化した良い例である。

7. 文化・芸術を活用した地域活性化について

- BEPPU PROJECTのミッションとして、アートの可能性を社会的に位置づけていきながら、多様な価値が内包され、創造され続ける世界のあり方を追求していくということがある。アートの単体の価値よりも、「触媒としてのアート」に可能性を感じている。
 - アート作品というものが、関わる人間それぞれの中に眠っているイマジネーションやクリエイティビティを引き出していくと信じている。そうやって多様な創造性が育まれたり、再生したり、覚醒したりすることがも起こるのであれば、この社会そのものがクリエイティビティを保つ世界であり、アートという存在そのものであると考えている。「アート作品」を切り分けて考えてはいない。
 - このような考え方をするようになったのは、フランスのナント市文化顧問のジャン＝ルイ・ボナン氏から「お前の職場はどこだ？」と言われたことが大きい。それまでは、混浴温泉世界が実現したならば、BEPPU PROJECTが残るか残らないかは重要ではないと思っていた。混浴温泉世界の意味を引き継ぐ団体が生まれればいいが、続くことが目的ではないと思っていた。
 - また、私自身は続けるつもりはなく、混浴温泉世界が終わったらアーティストに戻るというイメージが強かった。しかし、美術館が職場で、作品を作る人がアーティストであるのかと考えたときに違和感があった。作品を作らなくてもアーティストたりえる。作品から仕組みへと関心は移っているが、自分自身のアート観が変わったわけではない。
- ー 作品を媒介として地域との関係を作ろうというプロジェクトは他にもあるが、仕組みの提案はないものがほとんどである。混浴温泉世界で作品を媒介とした

関わりがありつつ、それ以外の仕組みをアート・マン
スで作ろうとしているところにオリジナリティや可能性を感じる。

- 作品だけでなく、仕組みも提案するところがBEPPU PROJECTの存在理由であると考えている。今まで組織が存在していることには手ごたえを感じている。しかし、待っているものの大きさも感じている。

ー最後のゴールとして何をイメージしているのか？

- 個人的なイメージだが、あらゆる境界をなくしていきたいと考えている。混浴温泉世界は集客事業ではあるので、集客が増えるにこしたことはないが、20万人が100万人になったら成功かと考えたときに、必ずしもそこに手ごたえを感じるとは思えない。
- 抽象的な話になるが、雷の多発する砂漠に400本のステンレス製のポールを建て、ポールに落雷する際の光や轟音を観客が体験するというウォルター・デ・マリアの『ライトニング・フィールド』という作品がある。観客は雨が降り、雷が落ちるのを想像しながらひたすらそれを待ち続けなければいけない。待ち続けるということをもっと能動的にやることで、バトンを渡していきたいと考えている。
- アートの力を体験してもらいたいということ、信じていたいという思いは強い。アートは触媒としての可能性を非常に持っている。アートは人の心に直接つながりやすいが、場合によっては、必ずしもプラスの方向にだけ作用するわけではない。それもアートの側面である。しかし、人間の心の奥底に対峙していく営みとして重要である。また、感じ方や見方は規定されているものではなく、人と違っていることが肯定されるものとして存在しているところにも可能性を感じている。
- このまちでいろいろなことをやらせてもらっていることに恩を感じているので、このまちで自分ができることは何なのか考えている。別府に来たばかりのころは、まちづくりにアートを使っていると言われることにとても抵抗があった。最近はBEPPU PROJECTにとってアートは目標を達成するための手段であり、最大の武器であると考えられるようになった。

(2) NPO・市民へのインタビュー①

日時:2011年9月1日(木)15:00~16:00

場所:ホテルニューツルタ

対象:鶴田浩一郎(NPO法人ハットウ・オンパク代表理事)

1. 事業に参加した経緯、動機

- 別府は団体享楽型の観光温泉地であったが、バブルがはじけたあたりから日本人の旅行形態が変わって個人中心となってきた。その流れの中で温泉地域は衰退していき、今では危機に瀕しているところも多い。
- 小泉政権となつてから、国が観光施策を積極的に行之始めたが、いまでも予算規模は小さい。そのため、観光地は民間の自助努力が不可欠である。
- バブルがはじけて状況はどんどん悪くなっているのに、なんとか生活はできていたので、状況を見ないふりをして何も対策を練らずにいるうちに、一緒に商売をしていた人たちがいなくなってきた。
- 90年代中盤に入り、「なんとかしないと」と思う人は現れ始めた。しかし、このままでいいと思う保守派と、流れを変えたいと思う人との反目関係が生まれてきた。その中で、現場でイノベーションが起こってきた。
- 地域のイノベーションは現場でしか生まれない。行政がシナリオを書いても機能しない。結局のところ、気がついた人から先にやればいだけである。そのときに行政や旧来型の組織と一緒にやる必要は必ずしもない。
- 地域資源を活用しながら、お金がないのでソフトウェアで勝負しようということになった。そこで、体験交流型の商品群を作り、個人の観光客獲得に努めた。そのような試みの中でオンパク(別府八湯温泉泊覧会)が生まれてきた。今は10年が経ち、非常に安定してきている。
- 新しい目玉を作って集客交流を行おうとは思っておらず、今あるものを磨いていくことが再生期にある私たちの役目だと思っている。国から既存の商店街に補助があり、チャレンジショップなどを作るなどしているが、モチベーションのある人間を集められる組織を作らなければ、補助金が止まったら終わってしまう。まず、お金がなくてもやりたいという地域活性へ精神的なモチベーションがなければ事業は続かない。

- 2004年に山出さんが別府に来たとき、彼は最初に別府のまちが面白いと言ってきた。彼は金銭的欲求ではなく、まちの面白さと、私たちがやってきたまちづくりの動きを面白いと思い、動いている。作品が、あるときは高値で売れ、翌年は名前さえ消えているようなアートマーケットが嫌になっていたのではないだろうか。
- 山出さんは次の場を求めており、ある種の閉塞感を感じていた。その閉塞感を開放する場として彼にとって別府があった。別府の今のまちの様子を魅力的に感じ、熱いまちづくりの人間もいるという状況に、ここで何かやってみたいと思ったということ聞き、彼とは何かできるのではないかと考えた。
- 最大3,000万くらいだったら、何とか集めることができると思ったが、一般的に現代アートといっても良く分からないし、信用がない。しかし、信用がないとお金を得ることができない。そこで彼と一緒に県や市に行き、資金調達の手伝いをした。
- 彼はアートを持ち込んでいるが、ソフトフェアを作るという点では私たちの活動と似ている。活動にいくつかの共通点があることと、彼のモチベーションを信じることができたことが、一緒にやれた大きな理由である。

ー 山出さんを信用できた理由として彼のモチベーションは大きかったのか？

- 考え方がブレているかブレていないかが重要である。商品作りは毎年お客様が変わるから少しずつ変化しなければいけないところがあるが、その中でブレてはいけない哲学が絶対にある。
- 別府は日本の10%の源泉数が集まっている特殊な土地である。地球エネルギーがこれだけ噴出しているところは世界でもなかなかない。また、温泉文化が伝統的にある。それは地域のコミュニティの場として共同湯が機能していることである。1階が共同湯で2階が公民館というところが多い。これは別府独自であるが、温泉に入る場所が地域コミュニティの場所になっているのは知恵である。
- もうひとつは震災を受けていないので、都市計画がされておらず路地だらけである。また、別荘の文

化や、進駐軍が入ってきた影響もある。それを基本として大切にしたい。それがブレてしまうと、別府の文化が揺らぐ。

- そこをブレさせないで、見せ方をどんどん進化させていかなければ陳腐化してしまう。そのためにたくさんの知恵や新たなソフトウェアが持ち込まれる必要がある。私たちも山出さんもまちというハードに対してソフトウェアを導入する点では共通している。彼の場合そのソフトウェアがアートであり、それによって新たな活動を生み出している。

2. 事業の感想、参加者の変化

－BEPPU PROJECTが開始してからまちはどのように変化したか？

- まちは人間と同じで生き物であるから、変わってよくなったと思うと次の衰退要因が生まれている。10年～20年スパンぐらいで衰退がやってきて、気付いたときには遅い。衰退は避けられない運命であるが、その期間を短くし、いかに再生するのかということが重要である。
- 現場の人間にとって一番いいのは、発展している最中である。失敗しても次の手が打てる。しかし、ピークを迎えると、あとは下がっていくばかりである。山出さんはピークにするまではきっと頑張るだろう。下がるとき次の手をどう打ってくるかが重要。それは10年スパンで考えなければいけないものだが、それほど長期でこの地に足をつけて仕事をするかどうかは彼の考え次第である。
- まちが変わるといって、まちの盛衰は必ずある。今の別府はいい要素と悪い要素のどちらもある中立的な位置にある。それがマイナスになったときにくいとめる人的なパワーが、オンパクやBEPPU PROJECTなどの別府の民間の組織にはあると思う。
- 旧体制の保守勢力は新しい芽を摘んでいきたいと思う。そこでブレイクスルーするエネルギーを山出さんは持ち続けなければいけない。今は、ホップ、ステップの2段階ぐらいブレイクスルーをしている状

態である。次のブレイクスルーをしたら、彼が新しい保守の中に入っていく。そしてまた新しい人々が入っていく中で、地域は盛衰を繰り返していくのだろう。

－旧来の体制から新しいものを再構築するときに、山出さんが両者のフックとなる重要なポジションを占めているように思う。

- 彼が世代交代をするフックにならざるを得ない。彼は自分のやりたいことがあり、そのために反対派にも理解を得なければならない。全体を調整しながらフックをかけていかなければならない。ただし、彼にとってフックをかけることにモチベーションがあるわけではなく、本当はこの事業をやるためにフックをかけている。だからこそ、事業の理念、テーマ性や、継続性、地域に対する気持ちが重要であり、そこが揺らげば、別府でフックをかけていく必要はなくなってしまうだろう。

3. 文化・芸術を活用した地域活性化について

－まちの中には衰退しきっているところもあると思うが、そのようなところでも自分たちのところのものに目をかけて磨くことはできるのか？

- 例えば限界集落でも場所次第でできると思う。ただし、そのときの条件として、外からの人間が必要なことと、農業ができる環境が整っているかどうかがあると思う。限界集落では外から移民を受け入れる必要があるが、土が弱っていて、農業すらできないとどうにもならないだろう。
- 昔、街であったようなところはさらに難しい。他に稼ぎ口がある人が多いので、店舗が開いていてもほったらかしにしているケースが多い。そうなるとうちにもならない。ただ、その時のキーワードは地域の独自の文化再生である。諦めたときに終わる。
- 大切なのは人である。日本はわりとどこにいても自然が多くて風景が良く、それなりに地域資源を持っているところが多い。人が来てくれるところと、来てくれないところの違いはソフトウェアの違いである。ソフトウェアを植えつけるのは人の知恵であ

る。地元を知恵がなければ、よそから人の知恵を取り入れなければいけない。山出さんもよその知恵である。

- しかし、儲かる土地はよそものがどんどん集まる。外から来た人間のほうが飯を食わなければいけないから、モチベーションが高い。そうすると地域が食われてしまうこともある。矛盾を感じることもある。

－ オンパクのようなNPOの先輩がいることは山出さんにとっても大きいのではないか？

- NPOもあまりに他の資金源に依存すると人の手足になって働くことになってしまう。人の手足になってまちづくりをするつもりはない。自分のやりたいことをまちの中でやりたいから、自分で意思決定をしたい。だから既存組織の意思決定に従わなくていい組織を作りたい。そのためには組織のマネジメントがしっかりしていなくてはいけない。ガバナンスとファイナンスの問題は常に考えていかなければいけない。

－ BEPPU PROJECTは別府においては後発のNPOであるが、存在が異質なために連携が難しいと思ったことはあるか？

- BEPPU PROJECTに関しては全くない。私は自分と同じ能力を持っている存在はいらないと思っており、異質であればあるほどよい。これは企業のマネジメントとは全く異なっている。自分と同質の人間や組織ばかりだと、攻撃を受けたときに耐えられない、まちは多様な人材を必要としている。まちの中で、異質な能力を持つ人材を育成し、ネットワークしていくことが重要である。
- オンパクは3年ほど前から安定期に入っており、別府の中で伸びていくのはなかなか難しい時期にはいつている。オンパクが成熟している段階であるが、BEPPU PROJECTは発展中である。ノビシロも大きくBEPPU PROJECTにとっても期待している。

(3) NPO・市民へのインタビュー②

日時:2011年8月30日(火)15:00~16:00

場所:BEPPU PROJECT事務所

対象:菅健一(NPO法人八湯トラスト理事長)

1. 自己紹介

- BEPPU PROJECTが活動する以前からまちづくりの活動を行っており、「別府八湯」ということでいろいろなイベントを行っている。以前からこの地域にはまちづくりのグループがいくつかあり、まとまって何かやりたいと思っていたがなかなか実現しなかった。
- 一緒に何かやるきっかけとなったのは、1995年の阪神大震災の際に、避難所に別府の温泉を持っていこうと企画したことである。1つの団体では実現が難しいので、別府環境産業経営研究会(以下、産研)が中心となり、別府商工会議所青年部や観光協会などが加わり、毎週末に1チームが交代でお湯を持って計8回現地に行った。それが契機となり、いろいろな人が連携すると活動の幅が広がるという意識が生まれた。
- 別府には8つの温泉があるが、今まではまとめて「別府温泉」と言っていた。しかし、なかなかまとまらないので、「別府八湯」という冠のもとで、それぞれが独立して活動することで、狭いながらも地域間競争を生んでいこうという流れになった。そして1996年に各温泉の独立宣言を行った。
- そこからだんだんと地域でやっている人の顔が見えてくるようになり、BEPPU PROJECTやハットウ・オンパクを始めとした、現在のまちづくり活動につながってきている。
- 宣言から1年ほどは特に目立った動きはなかったが、やはり情報の共有が必要ということで、97年にメーリングリストを作って情報を共有していった。一番多いときで別府市内外の450人ほどがリストに登録されていた。今は情報を共有する手段が変わってきてメーリングリストは下火になってきているが、300人ほどは登録している。
- もともと産研の会長を務めていた。別府八湯について考えようということで、大分県出身である筑紫哲也さんの講演会をひらき、200人ほどで考える会を開いた。
- みんなの意識をひとつにするまでに最初はかなり

の時間がかかった。自分の足元から始めることが地域活動だと再認識したきっかけは、「冬の花火」というイベントと連携して、竹瓦温泉の前の通りで縁日を行ったことである。大きなことではなく小さなものを積み重ねていくことがまちづくりなのだということで、通り会で炊き出しを行うなど活動が広がっていった。

- 当時、竹瓦温泉界隈の賑わいづくりをしていこうとしていたが、行政とぶつかっており、今までの人間関係では進めるのが困難だった。そのときに、現在ハットウ・オンパクの理事を務めている野上さんが別府に戻ってきた。彼にまちづくりのグループのリーダーの1人になってもらい、さらに一人に責任が集中しないように代表者を4人立て、新たな人間関係でグループを形成することにした。そして結成したのが「竹瓦倶楽部」である。
- 第1回の活動は1999年の7月に行った「竹瓦路地裏散歩」というタウン・ウォッチングであった。倶楽部内の連絡はメーリングリストで行っており、そこに実験的にまちを歩いてみようと呼びかけたところ当日は50人以上集まった。
- 翌月は野上さんが自分一人で毎週日曜日に散歩を行うことを提案し、実際にやってみたところ結構な人気があった。今まで一日も欠かさずやっているが、参加者数がゼロだったことはない。好評であることがメーリングリストで流れると、他の地域からやってみようという声が挙がった。さらに、他の地域の人が別の地域のウォーキングに参加することで、他地域の取り組みを実際に体験してもらったこともまち歩きに拍車をかけた。今では八湯すべての地域で行っている。
- 野上さんから路地裏を使ったイベントがやりたいという提案があり、「路地裏文化祭」を始めた。野上さんが「裏が表の10日間」というキャッチコピーをつけてユニークな企画を行った。これがオンパクの原点となっている。
- 例えば、温度計を持って温泉を巡り、温泉の温度が熱いことをアピールする「あちち探検隊」という企画では、竹瓦温泉の温度が熱いので観光客は水を入れたいが、地元の人には水を入れると怒るという

状況があった中で、「こんなに熱いんだから水を入れても仕方がない」と地元の人に納得してもらうことを意図していた。他には「路地裏食堂」と銘打って路地裏で露店を出したことや、早風呂を競う「カラスの行水王選手権」、赤丸ポストを探す「赤丸君を探せ」などの企画を行った。

- アイディアがでたらすぐ実行する。いつ実行するかという情報共有はメーリングリストを使用している。
- 産研で市の温泉課長を呼んで将来構想を話し合っている中で、竹瓦温泉を建て替える計画があるということが分かった。そのときに、建て替えるのではなく、保存していくべきだという声があがった。場が賑やかであれば壊されることはないだろうということで、活性化の動きが始まった。
- 亀川の温泉地にある浜田温泉が壊されることになったが、ぜひ再築してほしいということで運動が起こった。そこで、トラストの前身となる「別府八湯の宝を守り育てる会」ができた。温泉の前で「風呂端会議」を行った。それがきっかけとなり、篤志家が援助してくれて再築することができた。
- この動きをこれからも維持していこうということで、「別府八湯トラスト」ができた。私は立ち上げ時から理事を務めている。

2. 事業に参加した経緯、動機

- 中心市街地活性化事業の話があり、まちづくり会社と商工会議所がセットになって中核とならなければならなかった。別府市内にはまちづくり会社があったがうまく機能しておらず、八湯トラストとハットウ・オンパクの2つのNPOがまちづくりの機構として認定されて、活性化事業の中核となっていた。
- その頃に、山出さんが別府にやってきた。当時はわけ分からない人間がうろちょろしているという感じだったが、たった一人の知り合いを頼ってこの広くて狭い別府に入り込んできたのは大したものだと思う。
- 最初は、中心市街地活性化事業にBEPPU PROJECTの企画は入っていなかった。しかし、何

かしなければいけないが、既存のシステムが壊れていたもので、新たな人間をいれたほうが良いという状況になり、山出さんにも事業に参加してもらった。

- 既存の役割として一番壊れていたのは商店街であった。商店街のリーダー全員に入ってもらったが一向に動かない。イベントも頼めば手伝ってくれることもあるが、ボランティア精神を発揮して自主的に手伝ってくれることは全くない。そういう人々とやっていても拉致があかなかった。
- 「platform」を構想したのは山出さんである。空家対策にもなるし、商店街の人々もシャッターが開く場所が少しでも多くなれば良いということで計画はどんどん進んでいった。
- しかし、物件を借りるのは難航した。シャッターが閉まっているが、貸さないし、売らないというものばかりだった。物件第1号(のちのplatform01)を貸してくれた方は商工会議所理事の議員だったが、難しい人物で交渉は大変だった。しかし、その方あとは「その人が貸すのなら」ということで次々に物件が決まっていっていった。
- platform01の大家さんも、オープンしたばかりの頃はイベントに顔を出してくれていたが、やっていることを理解するのはなかなか難しかったようだ。コンテンポラリーダンスを見に来たが、わけが分からないと帰ってしまった。でも、以前よりBEPPU PROJECTのスタッフとのコミュニケーションは取れてきている。
- BEPPU PROJECTでやっていることがまちづくりと似ているから、私にとっては違和感がない。彼らにとっても私たちが以前から築いてきたネットワークがベースになっているはずである。何かやるときには以前から使っているメーリングリストに情報を流すと、いろいろな人が集まってくれる。

—platform01の立ち上げにあたって、菅さんや八湯トラストの協力はあったのか？

- トラストではなく、私個人が関わっていた。01の大家さんと、その物件のある通りの会長は折り合いが悪かったのだが、両者は私の先輩にあたることもあ

り、大家さんの説得を買ってでた。

- 1つが成功したあとは、BEPPU PROJECTのスタッフだけでどんどん物件を増やしていった。それぞれの使い方は市と協議しながら決めている。商工課が窓口となっているが、竹の組合や老人連合会と一緒に交渉に行くなど、積極的に協力してくれる。しかし、市議会の人々はイベントには誰一人として来ず、事業に関心を示さない状態である。

－混浴温泉世界でのお立場と関わり方についてご説明いただきたい。

- 副実行委員長を務めた。中心市街地活性化協議会で応援しようということになり、協議会の会長が実行委員長になった。
- 「混浴温泉世界」という字面が先行して、別府中の共同温泉が混浴になるんじゃないかという話にもなったので、コンセプトを説明するのには苦労した。アートのいろいろなものが混在するから「混浴温泉世界」なんだという話をして、みんなには期待するなど言っておいた。それは、期待しないほうが、「するっと見たときにぽっと感じるものがあるかもしれない」と思ったからである。
- 私は混浴温泉世界がきっかけで直島にも行って見た。直島はベネッセという資本力があって大々的にやっているが、別府はそれに比べればずっと混沌としている。その混沌としているところが面白いのではないかな。
- 別府では「地方の元気再生事業」でBEPPU PROJECTを含めた市内の4つのNPOと商工会議所と市が組んで、2年間助成金をもらっている。直接的な関わりではないが、資金面でもつながっているところがある。

3. 事業の感想、参加者の変化

- ソルパセオ銀座商店街の組合長は喜んでくれている。ただ、昔の商店主は従業員がいたが、今の商店主は従業員がいないので店を空けられない。もう少しイベントに参加してほしいが、なかなか参加できないので、本当に理解してくれているのか

はまだ不安なところである。

- 中心市街地活性化協議会も既存のリーダーでは全く具体的な動きがないので、若い世代の人たちをピックアップして会を立ち上げた。この人たちは通り会では何の役員にもなっていないが、そこで出てくる意見は現場の意見であり、貴重である。その会で何か企画をやってみようということになっている。
- 私は立ち上げには関わっていたが、今はその会の若い世代の人たちの中でリーダーを決めてやっている。予算も全然ないし、今は商工会議所が事務局を担っていて、中心市街地活性化事業の中ではまだまだ末端の組織だが、これから面白いアイディアがでてきてどんどん動き出せばいいなと思っている。

－世代を超えたネットワークが築かれているように思えるが、昔さんの前の世代から受け継がれてきたもののなか？

- 前の世代とはなかなかうまくつながれなかったが、一人だけ私たちより以前からまちづくりを行っている先輩がいて、今でも私たちとつながっている。その人は、今は自分でクルーザーを買って、「海路地裏散歩」を行っている。

－山出さんや、彼がやっていること(アートや混浴温泉世界)に対しての最初の印象は？

- 彼自身のことはアーティストだと思わず、何かの企画を持ってくる人だと思っていた。山出さんがやってきたのと同時期に、国連の関連する映画祭の企画が持ち込まれた。どちらも怪しかったのだが、そちらよりは山出さんのほうが地元で何かやってくれそうな気がした。
- 山出さんになぜ別府に来たのか聞いたら、フランスで「別府が熱い」という記事を見て、別府が何かいろいろやっていることを知って来たと言われた。それも怪しいと思ったが、大分の出身者だったこともあり、そこまで怪しく感じなかった。
- 2006年に初めて「踊りに行くぜ」が来たときは消化不良で今までで一番疲れた。地方でこういったプログラムをやることはないと言われて行ってみたが、

どこが面白いのか分からなかった。有名人が来た
というように構えてしまったので、その人がどうい
うことを語っているかもっとゆっくり見ればよかった。

- そのとき、イベントの手法として面白いと思ったの
が、一つひとつは小さなイベントで参加者も少ない
が、まとめるとひとつの大きな物語となっており、報
告書を読むものすごいことをやったように見える
ということである。
- 今までやっていたイベントでは、1,000人くらい入
るホールで講演会をやったたくさん人を集めるとい
うことをやっていたが、小規模だが、一人ひとりが参
加した実感を持てるような場も必要である。

－まちづくりにBEPPU PROJECTが関わり、混浴温泉
世界があったことを経て何か変化はあったか？

- 若い人たちがイキイキとした。しかし、BEPPU
PROJECTに関係している若い人たちがまちの中
でまだまだ融合されていないと思う。彼らがもっと
たくさんの人と顔見知りになってネットワークを広げ
てほしい。

4. 現在の課題、将来のビジョン 等

- 中心市街地活性化協議会では、自主的に参加し
ようというムードはまだまだない。しかし、次の世代
は育ってきている。自分の店以外にも屋台村に店
を出すなど積極的に動く人が多く、自分たちでも
何かできるという思いが生まれてきている。もう少し
経つとまちとの関わりも変化してくるかもしれない
- 今事業が行われているのは、旧別府市内である。
しかし、別府には8つの温泉地があるので、その地
域の人たちがまちなかだけで事業が行われている
ことに違和感があるかどうかは気になっている。あ
るならば、そこも含めて一緒にやれる方法を模索し
ていきたいし、若い世代のネットワークづくりも必要
である。

－世代交代について、ご自身のお考えをご紹介いた
だきたい。

- 「地方の元気再生事業」でNPOの壁を越えてつな

がっていることは世代間の壁を越えることにもつな
がっていると思う。

- 逆にトラスト自体のことを考えると、世代交代は進
んでいない。変に古い組織が残るよりは、トラストの
理念だけが残ってトラストという組織は残らなくても
いいと思っている。NPOも解散するときは簡単に
解散できるような仕組みにしたほうがいいと思う。き
ちんと活動している団体だけが残るようにしたほう
がいい。

5. 文化・芸術を活用した地域活性化について

－まちづくりに芸術が入ってきたことをどのように考え
ているのか？

- こういうものがアートなのかというのにまず驚いた。
まちづくりとアートはあまり関係ないと思っていたが、
アートというのに付き合ったおかげで、まちづくりの
中で、アートが賑わいの演出の方法として有効だ
ということに気付かされた。
- 混浴温泉世界の時期にはまちなかにパスポートを
持った若い女性やカップルの姿が数は少ないがあ
ちこちに見られた。しかし、行政はまだまだ団体客
志向で、そのことがなかなか評価されない。
- アートで賑わいを演出することは地元の人間には
できないことである。私たちにできることは来てくれ
るアーティストをサポートしたり、歓迎したりするこ
とで、別府に居ついてもらうような環境をつくり、アー
ティスト達を巻き込むことである。
- 清島アパートはいい例。どう見ても人が住める状態
ではなかったが、そこに住んで活用しようとする人
がいるというのがすごいことである。大家さんは足
が悪く一人で歩ける状態ではなかったが、若い人
たちに会いたいということで、歩く練習をして自宅
から一人で歩いてアパートにやってくるまでに元気
になった。
- 横のネットワークがしっかりしているので、いろい
ろな事業がつながっている。清島アパートは内閣府
からの歴史的建物の調査事業で発見したものであ
ったが、それが混浴温泉世界につながっている。

一緒に何か事業をやることによって垣根を越えることが今後へとつながっていく。

－普通なら面白いと思えないものを見つけてきて、面白いと思って使おうとするのは、やはりアートだからかもしれない。

- やはりアーティストのチームは面白いものをたくさん見つけてくる。建築家の岸健太さんが連れてきたチームも面白いものを見つけてきていた。
- 今やっていることは中心市街地活性化であるが、中心市街地活性化協議会のメンバーが勝手にやっていることになっている。内閣府に提出したプランの中には入っていない。募集要項と実際に事業をやるにあたって必要なことは少しずつれているのかもしれない。共同温泉の改築や、駅前のplatformは今年度からやっとプログラムに組み込まれた。

－行政とのつながりについて教えていただきたい。

- 私たちの窓口は2つ。観光ツーリズム部の観光まちづくり課と共に作っている、まちづくりグループや個人が集まった「泉都まちづくりネットワーク」というチーム。もうひとつは商工会議所のほうで商工課とつながっている。
- 商工課だけでは何も動かないので、必死になって私たちのほうにつながってきてくれる。泉都まちづくりネットワークも、交流会を開き地道に活動しながらネットワークづくりを行っている。青年団がないので、青年団を作ろうという人が入ってきたり、そこも世代交代が進んでいる。
- 商工課系の基盤とまちづくり系の基盤の2つがあり、BEPPEU PROJECTを始めとして両方に関わっている団体はあるのだが、2つは融合されていない。泉都まちづくりネットワークは話し合いだけで、まだ事業には至っていない。1つの場所でどちらの話も行ったらいいと思うのだが、市役所内でも部署が違うなど管理する側の問題もあり、なかなか難しいようだ。市役所の中の縦割りを私たちがどうやって勝手に崩すかというところである。

－ネットワークの上手い使い方やネットワークの担い手の次の世代が見えてきているように思える。

- 次の担い手の人々とのつながり方にはTwitterやFacebookを使った新たな方法があるだろう。そのためには常に情報を発信しなければならない。

－他の地域と比較する話がないところが興味深い。視線が外に向きすぎていない。

- 路地裏文化祭が谷根千(東京の谷中・根津・千駄木地域)からとってきたというように、どこかから持ってきたものもある。それを機に谷根千との交流も生まれている。別府流にアレンジするのが上手いのかもしれない。
- 混浴温泉世界を機にやっていたアーティストが別府に住みたいと言ってくれたのはすごくうれしかった。さらにそこから清島アパートにご飯を届けてくれる山本さんのようないろいろな人が出てくる。
- 後から分かったことだが、山本さんは実は私の後輩の弟だった。そういう狭いネットワークは地方の強さである。何かあったときには、お互いに保証がきく。

(4) 大学教員へのインタビュー

日時:2011年9月1日(木)10:00~11:00

場所:BEPPU PROJECT事務所

対象:棕野美智子(大分大学 福祉科学研究科 教授)

1. 自己紹介

- 大分県出身。大学を卒業して厚生労働省で2006年まで働いていた。社会保障政策に関わっていたが、両親に介護が必要になり、大分県に帰ってくることになった。大分大学に採用され、少子化対策などの社会保障や地域福祉などを研究している。福祉科学研究科センターの所属なので、教えることよりも研究をメインで行っている。
- 東京では中央のレベルで制度、政策をどう組み立てるのかということに関わっていたが、制度の限界や、中央で制度を作ることにより地方の現場を動かすという難しさを感じていた。
- 制度は重要であり、今でも研究テーマであるが、制度ではないインフォーマルな事業やボランティア、また地域そのものに対する関心もあった。せっかく大分に帰ってきたので、そういった分野に取り組んでみようと思ったことが動機のひとつである。
- アート関係の交流会の中で、私が社会保障の研究者であることが紹介されるとみんな驚くのだが、私としては近いものを感じている。特に福祉の分野は施設から地域へと移行しており、それはアートの流れと重なっている。また、市民、当事者の参加ということが重要視されるようになってきている。専門家に任せておくのではなく、当事者の意見が注目されている点も今日のアートと類似しているように思われる。子どもにお金をかけることで未来への投資となることもまた共通点ではないだろうか。
- 個人的には80年代にフランスに行っており、まちなかにアート作品が置かれている様子を見ていいなと思っていたことや、別府への愛着が動機としてある。実家のある別府の古いまちなみが、帰るたびに壊されていき駐車場になっている状況を目の当たりにし、なんとかしたいという思いがあった。

2. 事業に参加した経緯、動機

- 東京にいたときに「大分学」という講座を聞きにいき、そこで鶴田さんのお話を聞いた。その後、大分

に休暇で帰ってきたときに、菅さんや鶴田さんとお会いした。BEPPU PROJECTとの出会いは、2006年に大分に帰ってきたときに鶴田さんの紹介で山出さんにお会いしたことがきっかけである。

- その頃、中心市街地活性化協議会の話が動き始めており、私も関わりたいということでメンバーに加わった。その流れでplatform事業にも関わるようになった。
- 2007年に別府市から委託費をもらい、大学で中心市街地の調査を行った。これは幅広い調査であり、中心市街地の住民、商店主、中心市街地外に住む市民が中心市街地をどのように見ているのか、ホテルに宿泊する方、障がい者の中心市街地へのニーズなどを調査したほか、BEPPU PROJECTに協力いただき、空き店舗の調査も行った。
- 2008年度からは「福祉のまちおこし調査研究事業」として文部科学省から特別教育研究経費をもらい、地域と連携した小規模事業と研究を行った。フィールドとしては、別府の中心市街地をはじめとして、大分の郊外住宅団地や限界集落などもあった。調査研究の中で耐震補強改修実験を行った。platform04を長屋の雰囲気を残したまま、耐震改修を行い、現行耐震基準1をクリアした。また、03も耐震改修を施した。
- platform03では2008年から2010年にかけての1年ちょっと、コミュニティカフェ「まちなかカフェ」の運営実験をした。誰でも来て無料でお茶を飲み、おしゃべりができるスペースとして開放して、来た方々をつなげ、地域につながりをつくりだすことと、精神障がい者の就労のために彼らを雇用する会社にコーヒーの販売を行ってもらった。
- また、2008年度は八湯トラストの中の歴史的建造物調査会で、内閣府の調査費をいただいて、別府市内の空き家の調査をP3に委託して行った。そのときに、空き家や空き店舗を住民が多数参加してリサーチし、地元の建築士にも入って活用できそうな建物を洗い出した。その中からplatform事業の建物だけでなく、混浴温泉世界で使われた清島アパートなどの建物を発見した。
- 地元の人が参加することに意義があるということで、

ワークショップで物件を探す散策を行い、その後、本格的に使いたいところの調査には、建築士に入ってもらった。

- 2008年度には浜脇地区で、健康生きがい財団との協働事業で、老朽木造建築を改修サロンの運営を行った。土地柄もあり、なかなか地域に溶け込むのが難しく、現在は手を離れて地域の方の自主運営となっている。
- 2010年、2011年度はオックスフォード大学のテレザ・スミス前教授と共同で、コミュニティカフェの日英の比較調査や、アートによる地域再生の調査を行っている。私もスミス先生もアートそのものよりもコミュニティや地域福祉に関心があるので、社会的包摂がアートによりどう実現できるかという観点で調査を行っている。山出さんにも参加してもらった研究会もある。
- スミス先生との共同研究の中で、イギリスでのアートによるコミュニティ・リジェネレーションを詳しく知ることができ、改めてBEPPU PROJECTを見る目が変わってきた。

3. 事業の感想、ご自身の変化

- コミュニティカフェを運営してみて、利用客をつなげるスタッフの重要性を感じた。利用客の方とはネットワークができ、カフェが終了しても会うことがあるのだが、まずは、カフェに入ることが最初のハードルとしてあるようだ。そこで、コンサートを開いたり、子どもたちに絵を描いてもらったりという活動が最初のハードルを低くして、人々をつなげる役割を果たしていた。
- 精神障がい者の就労支援と併せて事業を行っていたが、地域の方が居心地よくつながれる空間を作ることと、障がいのある方の働く場という機能を両立させることは難しかった。
- 個人的にコミュニティダンスが好きということもあり、JCDNの佐東さんがアメリカとイギリスのカンパニーを福岡に呼んだときに、お願いをして大分にも来てもらい、「太陽の家」という障がい者の施設と郊外

住宅団地の公民館の2箇所で行った。子どもからお年寄りまで、初対面でいきなり体を支えあうというようなことをやる中で、本当に信頼関係ができ、コミュニケーションが年齢や障がいの有無を越えて成立している姿を見た。佐東さんから、イギリスで問題行動を起こしているような子どもたちが参加するコミュニティダンスのプログラムがあり、それを日本でも行いたいという話を聞いていたが、その可能性に気付かされた。

- アートと福祉の分野の人をなんとかつなげないかと現在はフォーラムを企画している。アートの分野の人からすると、福祉施設の人は施設の中のこと、制度内のことばかりに取り組んでいて協力的ではないという意識があり、実際にそのような施設も多いが、異分野との関わりを導入しているところもあるので、相互に紹介したいという趣旨である。

ープロジェクトに参加した学生の気づきや変化は？

- 大分大学が別府から遠いため、学生は夏休みの期間少し来る程度である。気づきが全くないわけではないが、変化が見られるような継続的な関わりはしていない。

4. 現在の課題、将来のビジョン 等

- お金が足りないのは確かなので、もっと助成があるにこしたことはないが、アートによる地域活性化で一番大きいのは首長の意識だと思う。そういう人に文化・芸術を活用した地域活性化に対する意識を持ってもらうことが重要である。
- 大分で県立美術館を造るという話がでていますが、箱ができることではなく、造る過程でみんなを巻き込むことが重要であるということも私も山出さんもしつこく言っている。そういうことを首長も分かってくれる環境を作っていただきたい。
- 一部の芸術が好きな市民が、専門家の芸術をまじめに見せていただくというのではなく、いろいろな方が参加できるような場となしてほしい。大分は男女共同参画が遅れていることもあり、特に女性、子ども、障がい者がもっと参加でき楽しめる場として

の文化施設という面も備えたものにぜひしてほしい。

- 美術館やホールと、フェスティバルとの連携。イギリスのブライトンでもこれを行っており、難しい面もあるが効果が上がっているという声を聞いている。地域のアート活動のネットワークができる支援も行っていきたい。
- アートと福祉、教育、産業との連携。よく言われていることだが、自治体はなかなかこのような発想になっていないように思える。
- 一般のアーティストの、継続した活動の拠点にしていけるといいと思っている。自治体は税金を使うので、文句を言われないうちに無難な大家や郷土出身の作家に偏りがちだが、若手を見つけて育成することも重要である。一般のアーティストがここを核としてもっと地域へと広がっていくことで、市民がもっと関われるようになるのではないだろうか。
- 箱ばかりが意識されるが、まずソフトなんだということを分かってほしい。

5. 文化・芸術を活用した地域活性化について

- 文化・芸術には、創造性の育成や多様な人の社会参加を促す役割、まちの誇りやオリジナリティの発見があるということは実感している。古い建物＝「老朽、汚い、建て直す」という意識を少しずつ変えていけるという役割は大きい。
- トラストで活動したときも、参加者には、文化財になるようないい建物をなんとかしたいという意識が強く、ただの空き店舗には意識がなかった。関わる中で「B級建築」のよさにも目がいくだろうという話を建築の先生ともしていたが、やっていくうちにその面白さに気付いてくれた。
- 中心市街地に関わった当初、商店街会にもヒアリングを行ったが、どこかにあるものを持ってくれば活性化するという発想ばかりだった。しかし、東京や福岡にすでにあるものを持ってきても、同じものを持って来られるはずもなく、それは二流、三流のものでしかない。そこにアーティストの眼差しが入

ることで意識を少しずつ変えていけるのではないかと期待している。

－福祉政策の優先順位が近年の政策全体の中で上がったように、文化の優先順位もあがると思うか？

- 政策の優先順位付けには財政の問題が関わる。福祉に関しては、理念的に地域で暮らす重要性もあるが、それよりも財政的に高齢者が増えた場合、施設を造るよりもまちで暮らしてもらうほうが安いという身も蓋もない話がある。
- 障がいに関しても、発達障がいも問題視されるようになり、それを含めると、以前よりも障がいの出現率が高くなった。このことも、財政的な観点からも地域で暮らせるようにしていかなければという流れにつながった。
- イギリスでも、本当はコミュニティの統合に対する効果があったとしても、結局それは測れないので、測定可能な経済効果を持ち出すと言っていた。アートも、優先順位を言うには財政効果を言わざるを得ないのだろう。それに対応する方法として創造都市の概念や福祉との関連などが挙げられているのではないか。その時代が一番大きな課題に対して、アートがどのようなアプローチができるのかということであると思う。

(5) 市長へのインタビュー

日時:2011年8月31日(水)14:30~15:30

場所:別府市役所市長応接室

対象:浜田博(別府市長)

1. 事業の背景、経緯

- 私が進めているのは温泉ツーリズムのまちづくりだが、温泉をローマ字で「ONSEN」と書いて、そこに音の泉の「音泉」という意味もかけている。温泉そのものに頼るのではなく、音楽会をはじめとした文化を中心としたまちづくりをしたいと思っていた。
- そこに混浴温泉世界の企画が立ち上がった。物見遊山的な観光ではなく、体験型の温泉ツーリズムというスタイルで、まちづくりを総合産業として完成させたいというのが私の思いだ。その中で、混浴温泉世界は文化を育むきっかけとなったと思っている。
- 「混浴温泉世界」では、別府の一部の子どもたちや学生、まちの人たちは、最初は戸惑っていたような感じがあった。短期間で単発的なものであったが、アートを通して、日常的なものを体験してもらう機会となったと思う。
- それに伴っていろいろなことが発生し、期待された市民の文化のレベルの向上や文化政策による経済発展、地域力の向上と同時に、課題もでてきており、今は発展の途中にあるのではないだろうか。

2. 事業の実施体制

- 文化・芸術はONSENツーリズムの2本柱となっている。行政がやっているのではなく市民がやる気になっていて、市民と協働のまちづくりになっている。
- 混浴温泉世界以外にも、「別府アルゲリッチ音楽祭」や、竹瓦温泉でのコンサートやイベントなど、様々なところでまちづくりに文化的な要素が取り入れられている。
- 「来てよし、住んでよし」のまちづくりを目指しているが、文化・芸術がそれらのまちづくりの重要な要素となっていることを実感している。

3. 事業による成果や効果

- BEPPU PROJECTが地域に果たした役割は、新しいアートの世界を全国各地から集まってきて市民に対して紹介してくれたことにあると思う。
- 市民は、最初は理解し難かったようで、とにかく多様な人が集まっているという印象しか受けていないようだったが、海外の様々な地域からアーティストが来たり、中央でも評価され始めたりしたことによって風向きは変わったと思う。
- 別府や市民のため、別府の芸術を求めて活動してくれているBEPPU PROJECTとは、しっかりと関係を築いて継続していきたいと思っている。別府の文化を発掘し、それを全国に宣伝してくれたことに感謝している。
- 若者が中心だったが、アートによってこんなにたくさんの方が別府に来たことは驚きだった。当初は不審に思っていた市民も、若いアーティストと一緒に地元の共同温泉に入り裸の付き合いをする中でだんだんと仲良くなっていった。
- 中には、別府が好きになり、移り住むという人もおり、そこから新たなつながりが生まれることもある。別府を愛して地域に根ざしてくれていると思う。彼らが来たことも大きな財産である。

ー 市民に対する説明でご苦労された経験は？

- マスコミや市民に対して、私自身が説明を行った。それだけでなく、アーティストが毎週土日に松原公園という公園でイベントを行ってくれた。それらが少しずつ市民へのアピールとなったと思っている。
- 宣伝するのは、何とか分かってほしいという思いが根底にあるからなので、苦労は感じていない。見るだけではなく体験するというのが理解へとつながり、それは温泉文化とつながっていると考えている。
- 私自身、若いアーティストと話したり、彼らの制作風景を見たりする中で、文化や芸術は別府の様々なところにあることを再発見した。

4. 現在の課題、将来のビジョン 等

- 私の理想は市民と協働のまちづくりであるので、行政が主導してはいけないと思っている。行政が大々的に予算を組んで、「アートをやるんだ」と言っても理解を得られるのは非常に難しいと感じている。
- 文化というのは今日やって明日効果が出るものではない。市民のボランティアによる地道な活動の中で根付いていく。行政はそれを応援する立場であるべきだ。協働体制をいかに作っていくかが重要であると考えている。

5. 文化・芸術を活用した地域活性化について

- 文化・芸術を活用した地域の活性化ということをもっと市民へと浸透させていきたいと考えているが、実際、市民生活の中でアートの占める割合や、それらを理解している人の割合は非常に少ない。文化の大切さについて、時間をかけて伝えていく必要がある。

(6) 市職員へのインタビュー①

日時:2011年8月30日(火)18:00~19:00

場所:BEPPU PROJECT事務所

対象:安達勤彦(別府市商工課課長)

1. 自己紹介

- 商工課に勤めて6年目になる。以前は公園緑地課という建設部関係の部署にいた。
- 2006年に法改正があり、中心市街地の活性化に関する法律の基本計画の見直しが私に預けられたテーマだった。
- 商工課では、商店街の活性化はもちろん、雇用関係や中小企業への融資関係、伝統産業会館の運営等も行っている。
- その見直しの段階で山出さんと知り合い、BEPPU PROJECTを知った。そしてまちの人と知り合って、今に至っている。
- 以前はアートや芸術とは無縁であった。2007年に開かれた「別府中心市街地活性化国際シンポジウム」が、行政がアートや芸術に関わるきっかけとなっている。それまでは山出さん、そしてBEPPU PROJECTの求めるもの、模索しているものが、このシンポジウムで見えてきた。シンポジウムがすべてのスタートである。
- 文化芸術が、まちづくりにも視点を置いている気がした。自分は商業のことばかりやっていたけれど、他の視点も必要なことに気付かされた。

2. 事業の目的・内容

- platformは現在8箇所ある。目的は山出さんの提唱する「星座型面的アートコンプレックス構想」である。理想としては、下がギャラリーで上が居住スペースとなっている建物を用意し、アーティストに居住しながら、制作や展示を行うというものであった。しかし、居住と展示が両立できる建物はなかなかなく、金銭的にも厳しかった。
- BEPPU PROJECTとしては、platformはアーティストのための場として考えられているのかもしれない。しかし私としては、市来街者につながる要素を見つけないというのがplatform構想につながった。
- platformは、アートギャラリーやダンス公演の場として使われたり、老人クラブ連合会がやっている竹

細工や各NPO団体の集まれる交流拠点となっている。いろいろな人がまちなかに来られる状況を作りたいというのが今の流れになっている。

- 常時開くということができないのでなかなか難しいところである。開けることはできても、そこで何かをやっているという空間を作るのが難しい。
- 竹細工の工房となっているplatform06は、中で何をやっているのが外からでもよく見える造りになっているので非常にいいが、職人が素材を持ってそこに行かなければいけない。職人が忙しくなってしまうとなかなか開けられない状況が生まれてしまう。その中でも、platform01は市のストレッチ教室や子育て支援、健康相談の場としても使用されるなど広がりを見せているところもある。
- まだ土台づくりの部分ではあるが、2009年に「混浴温泉世界」をやったおかげでここまで来られている。あれがなかったら今でも活性化とは程遠いところにいただろう。「BP」や「アート・マンス」など、混浴温泉世界がきっかけで様々な事業へと発展している。まだこれからだが、楽しみである。
- 最初は何も分からなかったからすべてが目新しかった。5年間も携わっているとだんだん目が肥えてくる。しかし、別府以外の場所でやっているアートのスペースを訪れたときに、仲間だけでやっている感じが強すぎて居心地の悪さを感じた。2009年の混浴温泉世界のときは、まちなかでやっているものが得体のしれないものとして見られていたんだと実感した。
- いきなり混浴温泉世界の事業だったので、行政も含めてまち全体がまだ一步入る勇気につながっていなかったと思う。BEPPU PROJECTに関しては、自分は仕事として関わっている部分もあるし、長年付き合っているうちに友達感覚になっているので踏み込みやすくなっているのかもしれない。他のアートのスペースで感じたことはそのことに気付かされるいい経験だったと思う。
- 職員に混浴温泉のことを知ってもらいたいということで、「混浴温泉通信」というものを市内に週1ペースで流していた。しかしほとんど反応がなかった。その中でも、platformに足を踏み入れてくれた職

員は継続的に訪れてくれている。しかし、最初の敷居はまだ高いようだ。

- 清島アパートの住民である若いアーティストたちが敷居の高さをかなり拭い去ってくれている。まちに住んでいて、友達感覚でつきあえるようになっていく。「芸術はよく分からないけれど、アーツが作っているなら行ってみよう」という気にさせてくれる。

3. 事業の背景、経緯

- 中心市街地活性化基本計画は2008年に国からの認定を受けた。2000年にも一度作成しているが、その頃は、基本計画を作るだけでいい時代であり、基本計画で認められている事業であるだけで補助金がでていた。ただ補助金を取って、整備するだけでは活性化につながっていないということで法の内容が見直されていった。2006年に新たに法律が改正され、計画が認定を受けなければならなくなった。
- 新しい計画の中で一番精力的に動いてくれているのはBEPPU PROJECTである。彼らがいないと基本計画は成り立たない。platform事業一つにしても、彼らの案から出ている。活動自体も商店街を巻き込んだ形に特化している。
- 基本計画には「観光客を増やす」、「まちなかの賑わいを増やす」、「小売商業の販売額を増やす」という3つの目標がある。この目標に近づくためには彼らの施策が一番合致していると考えている。
- 今までになかったアートイベントを催すことで、人が集まり賑わいが増える。ただし、まだ長期的ではなく、切り取った部分での活性化になっているので、それをどう長期的なものに変えていくかが重要である。

－BEPPU PROJECTが関わっている以外の中心市街地活性化事業は何か？

- 全部で36事業あるが、その中で大きいものはまちなかのマンション建設事業、八湯オンパクが中心となっている「オンパクタウン構想」の2つである。しかし、なかなか進んでいない。

4. 事業の実施体制

- まちなかで活動している人々の集まりで山出さんと初めて出会った。その中で、山出さんは他のまちづくりの団体の方に比べて話す内容が斬新で、個性が際立っていた。中心市街地活性化基本計画を見直すタイミングがなければ行政とBEPPU PROJECTの関わりは違ってきたと思う。タイミングがよかった。

－各団体間の利害関係の調整や合意を得るのは易しいことではないのでは？

- リノベーションは足並みが揃わないことが若干あった。行政が直接やるのが難しい事業があると、どこかの団体をお願いするしかなくなる。しかし、1つの団体だけに特化することもできない、そこで活性化協議会という組織に投げたが、組織の中でどれだけのコンセンサスがとれているかがあいまいな部分もあった。結局は山出さんがリードしている状態で終わっている気がする。

－中心市街地活性化協議会はどのような構成メンバーなのか？

- 基本計画を作るときには活性化協議会を組織することが努力義務となっており、認定を受ける場合は必ず組織しなければならない。組織には2つの柱が必要である。ひとつは商業を司る人、もうひとつはまちづくりを司る人である。商業に関しては、だいたいどこも商工会議所が中心となっており、別府も例外ではない。まちづくりに関しては、まちづくり会社を作るところが多い。別府市は推進機構としてハットウトラストを定めている。
- 全体で会員は51名ほど。山出さんやオンパクなど事業を実際に行う人々が正会員であり、各通り会の関係者は準会員になっている。50人もいるので、全員が集まるのは年に1回の総会のみ。その中で主だった案件を話していく。

5. 事業による成果や効果

- それぞれに意味を持たせた8ヶ所のplatformは、中心市街地に点在させることで来街者の回遊性を生み出すことを目的としているが、2009年には年間約4万人が来場、その約8割がすべてのplatformを訪れている。1日あたり10数名程度ではあるが、まちなかを巡り、滞在しているという事実は大きい。そして、さらに回遊性を高めるためには、各platformでの仕掛けが必要なのは言うまでもない。
- 本当は、仕掛けのときに、周りの商店が自分はどういうことをしてみようというところまで発展していけばもうちょっと違うまちになったのかなと思う。
- 一店舗だけ、まちが面白くなったといって店を構えたところがある。混浴温泉世界でまちの中を人がマップ片手にあるいているのを見てケーキ屋を始めた。platform04のオープンのときにはケータリングをしてくれ、ほかにもいろいろなところでお手伝いをしてもらっている。お店はBPマップにも載っている。
- 勃発的ではあるけれど、いいムードのまちなかになってきている。新しいお店はBPを取り入れている。BPは2009年の反省点から生まれた。まちとどこかで溶け込む仕組みとして機能している。
- 遠くから来た人、特にアートの関係だと遠方から来る人たちが、立ち寄ったお店のリピーターにはなくても口コミで誰かに伝えてくれるかもしれない。今、「てくてくマップ」など作っているが、そういうものを通してお店が紹介されていくことで、目に見えない中心市街地活性化を生み出している。
- platformに行くことが目的ではなく、platformに行くためにまちを歩いてほしいというのと、途中にある店に立ち寄ってほしいというのが目的としてある。観客がどのようなルートを通ったのか、逆にどのようなルートを通してほしいか、観客の動線を考えながら作品や企画を仕掛けていくという工夫はできる。
- 基本計画上の目標数値につながるわけではないが、回遊するということは、まちなかに滞在しているということである。

- 本当はplatformにアンケートを置いてみたいが、みんな面倒に思ってしまう。しかし、答えやすくすると単なる統計にしかない。なかなかいい方法は見つかっていない。
- 混浴温泉世界2009では各会場に各アーティストが作ったスタンプを置いていたが、回遊を促すのに機能した。アナログ的なもののほうが印象に残るようだ。platformにもスタンプを置いて、全部集めたらささやかなプレゼントがあるという仕組みもいいかもしれない。
- まちはおもちゃのようにして遊んでいくべきだ。文化・芸術を掲げてしまうと、堅さや難解さが出てきてしまい、敷居がどんどん上がってしまう。それを壊せる媒体を間に持っていって、壊してみたら意外と面白かったと思えるまちにつながる施策を考えていかなければいけない。
- BEPPU PROJECTと行政の関わりも重要だが、それよりもまちの人がもっと関わっていったほうが絶対に面白い。まちの人がちょっと手伝ってくれるスタッフになってくれて、まちの中に点在して、観客の声を集めてくれて、それを集約したら面白い声が聞けるかもしれない。

6. 現在の課題、将来のビジョン 等

- 以前から、まちづくりや観光振興に関わるNPOが市内で活動しているようだが、協議会を立ち上げるときにはスムーズにそのネットワークを活かすことはできたのか？
- 難しい部分は全くなかった。市が組織する団体ではないので、協議会の事務局となっている商工会議所で団体を指定して会員を構成したので、わかまりはなかった。
- しかし、当て職的に選ばれている感覚があるので、実際に何かやりたくて会に入った人との温度差がある。まちづくりをしたいと自ら言って入ってきた人はわずかである。会議をしても何も意見や議論がなく終わってしまうということもある。
- 山出さんやBEPPU PROJECTがやろうとしているこ

とに協議会関係者がもっと関われば、広がりを見せるはずである。今は、総会場でただ事後報告するだけで終わってしまっている。イベント情報などを事前に知らせてほしいといわれるのだが、実際は知らせている。やはり興味を示していないので見てもらえていない。結果同じ顔ぶれになってしまふ。

- 引っ張る人がいないと物事は動かないので引っ張る人は必要だが、それだと周りは傍観者になってしまう。傍観者になっているので、リスクを負わないだけでなく、興味も持ってくれない。platformを活用したイベントは積極的に行われているけれども、いつも同じ顔ぶれになってしまっている。
- 共通のコンセプトはみんな持っているけれども行動にはなかなか結びついていない。そして本当に動く人は数に限りがあるので、そこに比重がかかってきてしまう。また、出る杭は打たれるというようにやっかみもある。なかなか難しいところが多い。
- だからと言って行政が引っ張っていくのは絶対にいいことではない。民間の人が引っ張っていくと、反発もあるが必ず民間の人がついてきてくれる。本当のスタッフになってくれる味方が必ず出てくる。
- 行政は施策によって予算が割り振られていく。文化・芸術にいくらでもお金をつけられるというわけにはいかない。文化施設を造ったとしても、今の財政状況を考えていくと、施設の建設だけで費用を使い尽くしてしまい費用対効果が全く見えない。建設にお金をつぎ込んで、後は疲弊してしまうと、建物がお荷物になってしまう。今あるものを最大限利用して、それを有効的に使うことを模索したときに、星座型面的アートコンプレックス構想はひとつの方法である。
- だからと言って星座型アート面的コンプレックス構想が100パーセントいいとは思っていないし、越後妻有や横浜など他の事例の話も聞くが、それらはひとつの方策でしかないし、決して100パーセントの成功を収めているとは思っていない。しかし、仕掛けづくりはどんどんしていかなければならない。
- 評価という軸で見るのは非常に難しい。基本計画

上では24年度末に目標をどれだけ達成したのか数値を出さなければいけないが、それでまちが終わるわけではない。今やっていることが10年、20年後にどのようなになっているかが重要である。目指すのは10年、20年後には10年、20年前も面白いまちだったよねと言われ、その状態が残っていることである。もしなくなってしまったとしても、逆に10年、20年前はこういうものがあったというように変化することのできるまちになってほしい。

- 今のまちを伝える人材としてAPUの学生は大きい。彼らが体験したことを持ち帰って、子どもができたならまた別府に来てくれて、じいちゃん、ばあちゃんになってもまた別府に来てくれるようになったらと思う。別府を大切に残していくためには、今のうちに新しい血を入れなければならない。別府の場合、それがたまたま芸術だったということである。
- 別府という名前はとても大きいし、温泉という資源はすでにある。しかし、温泉だけではなく、それ以外の試みもやっているまちなんだということを知ってほしい。

(7) 市職員へのインタビュー②

日時:2011年8月31日(水)15:45~17:00

場所:別府市役所

対象:是永敏明(別府市文化国際課課長)、安部純子(別府市文化国際課)

1. 自己紹介

是永(以下「K」):今年度から文化国際課に配属となった。文化国際課に来る前に一番長くいたのは税務課で、税の重要性は分かっているつもりである。公金は文化だけでなく、福祉、教育などすべての分野に使われなければいけない。文化だけではご飯は食べられないので、基盤ができた上での文化である。その意味でもバランスが重要である。

2. 事業の目的・内容

安部(以下「A」):BEPPU PROJECTがアートNPOとして継続していく中で、より市民に開かれた存在でなければいけない。大きなフェスティバルもするけれど、ベップ・アート・マンスは、別府市活動する中で必要なものである。

市民に知ってもらうにもとてもいい。3年に1回大きなフェスティバルをしているだけではなかなか市民との接点を作れない。

市内に手品を披露する男性がいたが、今までほとんど外から呼ばれたことはなかった。今はplatformで手品の教室を開き、今年度のアート・マンスでは永久別府劇場でショーをやることになった。そういうことがひとつずつ増えている状況である。

ベップ・アート・マンスで市民の小さな活動をきちんと汲んでいきながら、3年に1回は混浴温泉世界をみんなで迎えてパワーアップしていきたい。

市民の人たちと積み重ねてきたものがあり、失敗もいっぱいあり、課題を乗り越えてきた仲間がいるということを大切にしていかなないと、不安定なものの上を歩いていくことになってしまう。

3. 事業の実施体制

A:文化国際課の施策や事業には、国際交流が入っている。別府は留学生人口比が日本一であり、留学生の滞在や生活に関することでは、税や保険や健康などすべての領域に関わってくる。そのため、

あまり縦割りではなく、業務を行っている。その方が仕事しやすい。

今、BEPPU PROJECTによって紹介されるアートは、大文字で語られる「ART」というよりも、一人ひとりが持っている「文化」という側面が多い。その中から、興味を持った留学生がBEPPU PROJECTの活動に参加していつているが、様子を見てみると、まずは互いの食文化などの交流から始めている。あまり、みんなが親しみのないものから始めると遠慮してしまうので、親しみやすい文化の部分から広げていつている。

ー別府市ONSENツーリズム部とは？

K:ONSENツーリズム部は観光まちづくり課、商工課、温泉課、競輪事業課、農林水産課、そして文化国際課も部に含まれる。

ー「旅手帖beppu」のように、他の地方公共団体とは異なった、ユニークな行政とNPOの関係がBEPPU PROJECTと別府市の間に築かれているようだが。

K:BEPPU PROJECT以外にも市のパートナーとなって活動できる団体はたくさんあると思う。「旅手帖beppu」のような旅行誌やマップを行政が手がけると四角四面のつまらないものになってしまうところを、思い切った発想を持つ人々に任せることができる。「旅手帖 beppu」は緊急雇用事業で行われている。このために1年間人材を雇用して、事業に専念してもらっている。思いきった発想もそこから生まれている。おかげでこんなにいいものができた。まちは毎日毎日極端に変わるものでもない。年4回の冊子で別府の魅力が網羅できる。宝物ができるような感覚を抱いている。

A:何万部も刷っていると聞いた市民が、冊子がほしいとやってきたが、外向けに情報発信するための冊子なのでお断りしたこともあった。すごく人気が出ている。

ー行政の施策の枠組みの中でできること、できないことがあるが、ほかのアイデアによって読み替えていくことで新たな活動が生まれている。

A: BEPPU PROJECTの見せ方はとても魅力的なので、彼らの活動ばかりが注目されてしまい、他の団体の活動に日が当たらなくなってしまう可能性は考慮しなければいけない。BEPPU PROJECTが他の団体にとっていい刺激になっていくように誘導したい。

K: 行政としてそこは苦労している点である。BEPPU PROJECTは素晴らしいが、一方では全体のバランスも考えて、全員がよくならなければいけない。

—NPOが行政と協働するにあたって課題を共有できるということはパートナーとして心強いのではないか？

K: 子どもを対象とするプロジェクトを取り入れてもらえるのも、課題の上にできた産物であると理解している。

4. 事業による成果や効果

—混浴温泉世界について、留学生や在留の外国人の反応はどうだったか？

A: BEPPU PROJECTからのアプローチもあり、ボランティアとしては数名が関わっていた。こちらとしてはボランティアとしてではなくても、もっと学生に見に来てほしかったのだが、多国籍な環境のわりにはもとある日本の文化に慣れ親しもうとしている人が多く、どこの文化ともしれない文化にあまり関心がなかった。BEPPU PROJECTが仕掛けた「文化」という枠が、彼らにとっては新しすぎて、どうしていいかわからず消化不良になっていたようにも思える。

—市役所の一職員としてBEPPU PROJECTの変化をどのように感じているか？

A: 2005年に山出さんから、海外から帰ってきて別府でアートフェスティバルをしたいと聞いたときに、海外でパトロンを見つけて、その人が別府で何かやりたいといっていて、資金はすでにあると思って、いいんじゃないかと返事をした。

トークセッションがあったときに、アーティストの中村政人さんがやってきた。そのときに地元の美術の先生に「あなたはアートを信じているんですか？」と聞

かれていた姿を見て、いろいろなことを考えた。

自分も参加した2006年の全国アートNPOフォーラムの際に、「よく分からないけれども、もしアートというものが社会や人々にいいエネルギーを誘発するものになるのであれば、アートというものを応援したい」と発言した覚えがある。アートはそういうものであると信じているが、いろいろなものを見ていると必ずしもそうではない場合もある。

つい先日、アーティストのブブ・ド・ラ・マドレーヌさんが別府に来たときに、アートというものは時として正義ではないので、気をつけなければいけないと仰っていた。時にはアートを疑ってかかることも必要である。

何が正解かも分からず手探りでやる中で、別府の人たちや子どもたちに何かいいものを残していく努力をする姿勢をみんなで持っていきたい。

BEPPU PROJECTとして、その時々での成長段階に応じて、大きくなった、外部の評価がこうなった、まちの中にどのように存在しているのかを確認しながら、決して驕らずに丁寧に取り組まないといけない。

5. 現在の課題、将来のビジョン 等

K: 別府市民は、お人好しだが人をよく見ている。山出さんがやっていることは素晴らしいと思うが、市民参加型のフェスティバルになるにはまだまだ課題がある。

また、別府には小さな文化芸術の団体が無数にある。文化国際課ではそういった団体の活動に対して、少額だが補助している。それらの団体と、BEPPU PROJECTで行っている混浴温泉世界のような、大きな動きがリンクできれば、それが市民参加へとつながっていく。

別府市民にとって温泉は空気と同様のものである。現代アートと温泉が将来的にマッチングできれば、市民にとってより身近なものになるのではないかな。

A: 混浴温泉世界や中心市街地活性化事業で、いろいろな人が来てくれるのはうれしいが、まちの人と対立せずに、いい形で共存していけるかが気がかりだ。

何十年も別府で商業活動や文化活動を行っている人を尊重しつつ、新しいことを行っていく。そのバランスを見極めないと、お互いにもったいない。

中心市街地活性化に関しても、地域の人たちは、何度も失敗を繰り返しながら手探りで頑張っている。よそ者・若者というけれども、そこばかり応援していると、もともといる人の反発の力が予想以上に大きくなり、思わぬダメージを受けることもある。

別府は温泉地で一定数の観光客が持続的に訪れていて、それなりにプライドも持っている。

K: 協働のまちづくりとは何なのか、いつも問われている。市民の声が何よりも大切である。別府の中ではいろいろな文化事業があり、独自の文化・芸術がある。これがリンクできないかなと考えている。

A: 市民の皆さんが言ってくれる意見はありがたい。それらを敬意を持って聞いて、新しいプロジェクトの活動だけでなく、老人クラブや児童クラブが長年やっている活動も同じように見ていかないといけない。

K: 山出さんから子どもプロジェクトをやるという話を聞いているが、非常に期待している。子どもが来ると保護者が来る。そうすると人の集まりが広がる。

また、別府だけでなく、裾野を広げていく上で、国東などの県北地域なども視野にいれて活動をしていってほしいと思っている。

文化・芸術を活用した地域活性というのは市民が参加できるプロジェクト、フェスティバルも積極的に行い、最終的には外部から来た人にお金を落としてもらうことが大切であると考えている。

(8) 県職員へのインタビュー

日時:2011年8月31日(水)13:00~14:00

場所:大分県庁3階33会議室

対象:藤澤俊典(大分県観光・地域振興局 局長)、榎徹(大分県文化スポーツ振興課 課長)

1. 事業の目的・内容

◎地域振興局における施策、事業

藤澤(以下「F」):平成の大合併の際に、旧町村部から役場がなくなったことで、役場が非常に遠くなってしまったことやその地域の中核を担っていた役場の職員がいなくなってしまうという問題が起こった。このままでは町村部が寂れていくだろうということで、地域振興をどう図っていくかという取り組みが始まった。大分県が少子高齢化、人口減少という問題を抱える中で、集落の機能事態が維持できなくなってくる。市町村合併の問題とあわせて、どう地域を元気にしていくのか、どう地域を守っていくのかということが大きな施策である。

地域を活性化というのは2つあって、ひとつは住んでいる人を守る、もうひとつは住んでいる人を元気にすることである。文化は「元気にする」の部類だと位置づけている。その中で、文化をキーワードに地域を元気にする施策を打っていこうとしている。

文化スポーツ振興課では大分県の文化行政そのものを考えているが、地域振興局では地域の活性化を文化という切り口でどう元気にしていくかということを考えている。

地域振興局のツールとして、総額6億ほどの地域活性化総合補助金というものを地域のためになるような活動に出すという支援を行っている。

◎文化スポーツ局における施策、事業

榎(以下、「E」):県の文化振興施策は、「見せるもの」、「参加するもの」、「育てるもの」の3つに大きく分かれる。基本的には「見せる」ものが多い。

「見せる」では、例えば「別府アルゲリッチ音楽祭」を開催して、世界的なピアニストであるアルゲリッチさんに来ていただき、コンサートを開催している。また、文化スポーツ振興財団は大分県の「iichiko総合文化センター」を拠点として活動を行っている。ここでは、クラシック音楽やバレエや文楽、歌舞伎などのステージイベントを行っている。

別府や大分市はホールが近いのでいろいろなもの

を見る機会も多いが、それ以外の地域にも機会を作ろうということで、県内の中高生を中心に、彼らを文化事業に招待するという事業を行っている。

「参加する」では、「県民芸術文化祭」が大きなものとしてある。国民文化祭を契機として始まった催しだが、すでに13年目を迎え、参加者が3万人、来場者が30数万人となり、だいぶ根付いてきている。別府市にある「大分香りの博物館」では、常設展示を「見る」と香水の調合などの「参加する」ことの、両者が体験できる。現在では観光ポイントのひとつにもなっている。

「育てる」は学校に関わるものが多いが、独自のものとしては文化スポーツ振興財団の持つジュニアオーケストラがあり、そちらも軌道にのってきた。

2. 事業の実施体制

F:BEPPU PROJECTはNPO法人だが、組織もスタッフも充実している。自立的に、主体的に、さらには行政を巻き込みながら、地域に文化の風を起こそうと動いている。大分県にとって理想的な団体である。特に地方では、スタッフをそろえて専門的に文化で活動を行える民間の組織は育っていない。なかなか持続可能な活動がなく、さらに、行政や民間、市民が一緒になって地域づくりを行っていくのは稀有なことである。行政も地域振興局も引きずられる形ではあるが、BEPPU PROJECTと一緒にやっていきたいと思っている。

地域振興局では観光も担当している。大分県の観光地は湯布院と別府である。特に別府は、一時代前には団体客が大勢訪れていたが、今は個人旅行の時代であり、その流れに乗り遅れてしまっていた。別府を新しい観光地に生まれ変わらせようということで、若手の旅館経営者をはじめとして、いろいろな取り組みが行われている中で、BEPPU PROJECTによって文化活動が行われることが、新しい観光地に脱皮しようという別府の地域づくりの触媒として機能している。BEPPU PROJECTの活動は地域活性化という面もあるが、大観光地の別府の再生の切り札と

して頑張ってもらいたいと考えている。

現代アートを活用した地域おこしが全国で起こっている。それらを参考にしながら、少子高齢化、過疎化で寂れてしまった、八幡宮の総本山である宇佐神宮のある大分県の国東半島というところで、古い文化と現代アートをミックスさせることで人を呼び込む事ができないかということで、BEPPU PROJECTに知恵を借りながら、別府を核にした、アートを切り口にした地域振興を進めている。

－BEPPU PROJECTと、その他の事業(例えば「別府アルゲリッチ音楽祭」「県民芸術文化祭」「大分アジア彫刻展」)との違いはなんだろうと思うか？

E:文化スポーツ振興課における施策、事業とBEPPU PROJECTでは、だいぶ毛色が違うと考えている。「別府アルゲリッチ音楽祭」や「県民芸術文化祭」などは行政が深く関わって行っているが、BEPPU PROJECTはNPOが中心となり、まちなかでやるという点が大きく異なっている。特に参加という点で、観光客や別府の住民が数多く参加できることが稀有なイベントであると考えている。

一番の違いは地域密着の度合いである。廃屋や路地を利用するなど、地域にあるものをそのまま活かして、そこにアートや芸術を用いて人を呼び、交流を深めようとしている。

「別府アルゲリッチ音楽祭」は事業の性格上仕方がないことだが、ホールで開催するイベントである。「県民芸術文化祭」は、県内の様々な芸術団体、文化団体が主体となってやる点ではBEPPU PROJECTと似ているところもあるが、それぞれの主催団体が絵画やバレエなどそれぞれの領域で活動をしている。領域横断的という点はBEPPU PROJECTには敵わない。

「大分アジア彫刻展」は大分県出身の彫刻家の朝倉文夫の作品があったから始まったものであり、地域性というよりは海外に対して、若手の登竜門として位置づけている。

BEPPU PROJECTのイベントは既存の団体が今まで踏み込んだことのない領域に踏み込んでいることが大きい。

F:地域振興の観点からみると、アルゲリッチ音楽祭などはまちのブランド力を高めるひとつの点描、ひとつのシーンである。特に別府は観光地として有名だが、芸術祭や音楽祭があると観光客がそれを目指してやってくる。さらに町に芸術や文化に溢れている感じが感じられれば、観光客はまち全体をもっと見たいと思ってくるだろう。

別府の問題点として、温泉という宝はあるけれどそれにあぐらをかいてしまっており、観光客が温泉にはいるだけで帰ってしまうということが挙げられる。今は、癒しや健康、絆や人とのふれあいを求めている。別府が新たな観光地として脱皮するために、ただ温泉だけに入る仕組みだけではいけない。滞在型のプログラムをどう組んでいくかが別府の地域づくりである。

BEPPU PROJECTの場合は、まちをどのようにつくっていくかというコンセプトがきちんと根っこにある。コンセプトがあって、そこに温泉などの滞在型のプログラムが加わり、さらに文化という雰囲気を広めていくと観光地としての地域再生ができるのではないだろうか。それに向かって何をしかけていくのかという中で、「混浴温泉世界」やそのほかの活動がある。壮大なコンダクターであり、プロデューサーであると考えている。

E:BEPPU PROJECTは何をやっているのかという面白さがある。例えば、「別府アルゲリッチ音楽祭」はアルゲリッチがクラシック音楽のコンサートをやるということは明白であるが、BEPPU PROJECTではいろいろなジャンルが交じり合っている。まちのいろいろなところで面白いことをしているというのが、観光客にとって面白いものに映るのではないだろうか。また、アルゲリッチ音楽祭やハットウ・オンパクなど既存のイベントとつながり、相乗効果が生まれる可能性も秘めている。別府で行われている様々な文化イベントや文化活動が、行政の努力も必要だが、なんとかつながっていけばいいと思っている。

－大分県としては国東半島でもBEPPU PROJECTの行っている活動や手法が可能であると考えているのか？

F: 芸術について私個人はあまり分かっておらず、確信を持って言えないところはあるが、とにかく国東半島を何とかしないといけないという思いがある。しかし、古くからの仏教文化は廃れつつあり、それだけではどうすることもできないという状況である。別府と国東では、路地裏文化と仏教文化というように文化は異なっているが、国東で農業をする人が別府に湯治に来るなど生活圏が重なっている部分があることから、別府の推進力のひとつとして活動している BEPPU PROJECT にわらにすぎるつもりで相談をしている。それは、BEPPU PROJECT が、画一した手法を当てはめるのではなく、別府は別府、国東は国東として活動していける可能性を秘めていると考えているからである。

現在は、国東半島にある国見町というところにすでに芸術家が何人か住んでおり、年に2回ほど展示をしていることが核とならないかと考えているが資金力や構想力がない。そこに BEPPU PROJECT が関わることで新たな展開にならないかと考えている。あるひとつの画一的な手法を当てはめるだけでなく、もう一度再生できないかと考えている。しかし、正直に言うと私の中では次の着地点はまだ良く見えていない。文化とクロスさせながら地域振興ができるかどうか模索しているところである。

E: BEPPU PROJECT の一番面白い点はある種の猥雑さである。その猥雑さというのは別府のまちの持っているものである。BEPPU PROJECT は別府の猥雑さとアートがぎりぎりのところで融合している。

国東半島がどうなっていくかは分からないが、別府のまちの猥雑さをよく知って、それを活かすという視点を持っている BEPPU PROJECT だからこそ、国東においても、そこがどのような場所かよく見た中で、別府とは違った切り口で何かを起こしてくれると期待している。

－別府市と大分県との役割の違いについてお聞きたい。

F: 市町村合併の後、市町村の財政状況や人材確保が厳しくなり、市町村が疲弊しているという状況がある。そのような中で文化は一番理解されにくい分野

となっている。文化よりも農林水産業をどうするのか、道路の整備をどうするのかということが優先されてきた。ハードが整備されて、振り返ってみると、ハードにしか投資していないことに気付いた。そこで福祉に力をいれようと高齢者にばかりお金を費やすと、今度は少子化で子どもがいないということに気付く。そういう順番になっており、疲弊した地方にとって文化の優先順位は低い。文化を切り口にやっていこうということになっても、基礎自治体である市町村が住民と合意してやっていかないと持続可能な取り組みとならず成功もしない。まず基礎自治体にランドデザインを描いてもらい、それをバックアップしていくというのが県の役割としての大原則である。

地域の中には、文化を切り口に地域振興を行いたいという人はいるが、専門的な知識や、専門的に活動できるスタッフを持っている人はほとんどいない。気持ちはあるが力もお金もないというのが実情である。市町村を頼ってもお金がないし優先順位も低い。地域住民にも行政にもジレンマがある。市と県で役割分担と言いながら、きれいに役割分担ができることはなかなかない。なんとか県が市町村よりも前面に出て、地域住民と共に市町村を巻き込んでやるといった実情が多い。そのような中で、別府は民間の NPO 法人が自主的に、自立的にたくさん育っている珍しい地域である。

E: BEPPU PROJECT に関しては、行政からは地域活性化総合補助金による金銭的な支援を最初に行ったものである。活性化補助金は1年限りなので、プロジェクトを継続していくためにどうすればいいのかと考えているときに、運良く文化庁から支援があり、その中から BEPPU PROJECT に対して重点的に援助を行った。

これは、やる気があって頑張っている NPO が、何かステップアップしたいと思ったときに、行政がお世話するというパターンである。行政が主導してやってもなかなかうまくいかない。別府アルゲリッチ音楽祭に関しても、もともと実行委員会形式で頑張っていたものを市と県が助成するという広がりになったものである。そういった点では BEPPU PROJECT との共通点がある。

県もそこまで資金があるわけではないし、経済が安定してこそ文化があると考えており、文化を通して、経済交流や観光ができるような形にしていくのが県としての我々の役目だと思っている。

3. 文化・芸術を活用した地域の活性化について

－行政のパートナーとしてのNPOに、どんなことを求めているか？

F:組織としての能力である。結局、国の補助金をもらうときには誰でももらえるものではない。国でも役所の人ではなく、外部の専門家の委員を交えて事業を判断しているので、そのお金をもらうためには、企画力、能力があるプロフェッショナルでないとイケない。様々な切り口で補助金を得る頼もしさに持続の可能性を感じている。今は「新たな公共」ということもあり、行政だけでは事業を行うことができない。民間と一緒にやっていかなければいけない状況の中で、民間にスタッフもいて、組織もあって、プロフェッショナルであるという集団がいたら、絶対に一緒にやろうということになる。そのような中でパートナーシップが築かれてくる。

実際、構想を持っている団体はあるが、補助金をあげられる企画書を作りきれない団体はない。BEPPU PROJECTも財政基盤は安定していないが、毎年毎年が勝負をかけて補助金をとってくるその能力があり、たくましさがある。だから信用している。

－大分県に全国の模範となるNPOが育った土壌は何か？

F:別府のNPOや地域づくりを行っている人々は、自らが旅館を経営しているなど、まちが潤うことで自らが還元されるという人が多い。NPOは慈善活動だけでは成り立たない。地域のためとかまちのためではなく、最後は自分のためになるか、自分がいかにやりたいかが実は活動の原動力であり、それが活動を持続させていく。文化もあくまで手段であっていいと思う。使えるものは何でも使うべきである。そういう仕組みが長続きする仕組みである。

－地域振興という観点で文化が施策に重要だということを理解してもらうためにはどのように説明すればよいと思うか？

F:私は、以前は福祉を担当していたが、今でこそ福祉の重要性が説かれるが、昔は道路整備と農林水産業しか重要視されていなかった。そう考えると、文化は余裕ができてから導入されるものだという実感がある。情操教育というか、優しさというのは文化からしか出てこないのではないだろうか。

E:ある程度の衣食が足りているところで、文化というのが機能してくると思う。そうはいつでも経済活動だけでは日常に潤いがなくなってしまう。祭りなど、非日常的なものは文化によって形成される。地域の活性化なくして文化はありえないし、文化があるので地域が活性化する。補完的なものであると思う。

F:文化には公が金を出すという役割があると思う。何もかも民間に任せたままでは、特に地方ではなかなか文化が育たない。だから文化はいらないかというとなんか決してない。

E:地方では文化に触れる機会が少ないからこそ、自治体は文化にお金をかけて、もっと機会を作ることには力を入れる必要があるのではないだろうか。

(9) アーティストへのインタビュー

日時:2011年9月1日(木) 13:00~14:00

場所:清島アパート

対象:竹下洋子(ニットデザイナー)、勝正光(画家)

1. 自己紹介

竹下(以下、「T」):現在、大分県国東市に夫と娘と住んでいる。清島アパートにアトリエを構えており、毎日別府まで車で片道50分ほどかけて通っている。

勝(以下「K」):1981年大阪生まれである。大学は東京の美大に行っていた。作っている作品は鉛筆で描くものが多い。

2. 事業に参加した経緯、動機

K:別府に来るきっかけとなったのは混浴温泉世界の中のプログラム「わくわく混浴アパートメント」に声をかけられて参加したことである。わくわく混浴アパートメントは、老朽化して活用されていなかった、取り壊し寸前の清島アパートに、「来たい人は老若男女誰でも来い」というものだった。

僕は東京で作品を作っていたが、自分の関わる人たちとしか関わりあわない狭いコミュニティの中で生きていることや、アトリエで作った作品をギャラリーなど美術のための場所で展示するというスタイルに窮屈感を抱いていた。思い悩んで、鬱になっていたときに、以前から親しくしていた、わくわく混浴アパートメントのコーディネーターの遠藤一郎君に誘われて、これしかないと思って別府に行くことにした。

今日から清島アパートを掃除して使い始めるという日から参加していた。3月くらいから滞在していたが、5月の連休後に東京に一旦帰った。その頃、清島アパートが、混浴温泉世界の後も取り壊されずに残ることは噂話で小耳に挟んだくらいだったのだが、残るなら人がいなくてはと思った。自分が清島アパートに残るということは、帰る場所をなくすということだと考え、東京のアパートを引き払ってしまった。それ以降、清島アパートも管理の方法などが変わって今の状態となった。アパートのバイオリズムと共にしてきたという心情である。

T:混浴温泉世界の第1回は見ていたし、BEPPU PROJECTの名前は知っていたが、清島アパートに入るとは思っていなかった。きっかけは、娘が別府

の小学校に行くことになったことである。別府まで娘を送った後に、また自宅のある国東に帰るのは大変なので、別府にアトリエを構えたいと思い、知り合いに紹介してもらった。

自宅にはわりと広いアトリエがあるのだが、実際に清島アパートに入り制作をする中で、一人になれるけれど、孤独ではない環境で、とても集中できた。自宅の周辺は高齢者ばかりなのもあり、アートや感覚的なことを会話できるのは夫くらいしかいなかった。しかし、清島アパートでは廊下にでると勝くんをはじめとしてアート活動をしている人がおり、長い付き合いではないのに感覚的なキャッチボールができた。また、BEPPU PROJECTの周辺にも美大を出た人や美術に関心がある人がいる。そういう人たちがいることで、「美術孤独」から救われた気がした。清島アパートは自分にとっては特別な場所である。

K:竹下さんが入ってきたくらいの時期から、アパートが個人のアトリエとして使われるようになってきたが、それに合わせて僕もアパートに個人のアトリエを構えている。

混浴温泉世界が終わった直後から9ヶ月間ほどはBEPPU PROJECTのスタッフとして働いていたが、それらを経てようやく別府での作品を作ろうと思った。個人の活動としてBEPPU PROJECTに関わっているのは、昨年と今年のベップ・アート・マンスでの作品発表。

今年のベップ・アート・マンスでは、自主企画で個展を開く予定である。BP加盟店の喫茶店のマスターがずっと気にかけてくれており、彼から紹介してもらった古い公民館を会場に使う。

T:9月11日にベップユケムリ大学の中で初めてplatformでワークショップを行う。「即興コーディネーターワークショップ」と銘打って、私が制作した何百点のニットを会場に用意し、その人が着てきた服とどんどんコーディネートしていくものである。

ニットでワークショップといえば「ニットを編みましょう」というものが多いと思うが、私の作品は、私の作ったニットを人が着ることで完成され、さらにまちなかに人がでることでインスタレーションになるという

考え方なので、人が変化するのをライブで見てもらうという趣旨で行う。

3. 事業の感想、参加者の変化

T: ギャラリーや美術館だと美術を意識している人が入ってくる場であるが、platformには美術に対する目的意識がなく、まちなかを歩いている人が関われる場である。最近ではわざわざ美術を見にいくのではなく、突然出会うというきっかけをつくることに興味がある。興味がなかった人が初めて美術と出会う衝撃を生み出すことができる町であると思う。

K: 「ベップユケムリ大学」の絵の描き方を教える講座を月1回の頻度で、4回連続で開催している。毎回2時間を使って、本格デッサンを気軽に体験するという趣旨で行っている。絵の描き方講座をきっかけに初めてBEPPU PROJECTのプログラムに関わってくれた人もいる。

T: 今まででは自分が作品を作って、ギャラリーで発表するというスタイルだったが、別府に来てから「何かやらかしたい」という思いが強くなり、自分でイベントを企画した。そこで、「別府路地裏ファッションウォーク」という企画を行った。

その際にとてもお世話になったのがBEPPU PROJECTである。道路を使うにはどこに許可をとって、事前にどこに挨拶するというのを逐一教えてくれた。そのおかげで、ゲリラ的にやっても何も問題なく終えることができた。また、ボランティアもBEPPU PROJECTの関係で集まった。

一人だけで制作していたところから、人と関わりながら何かを行っていくということが実現できて、自分の制作の範囲が広がったように感じた

別府のまちは、素敵な路地裏や懐かしい感じがあり、場所にはまる要素が多い。ここにいるからこそ自分の中から湧いてくるものがある。P3の芹沢高志さんが言われる「地場の力」のような特殊な何か働いている。場所のエネルギーに自分に関わることで新たな活動が生まれてくる。自分のクリエイションの幅が広がった。

今年のベップ・アート・マンスでは「路地裏の隠恋慕

大会」を企画している。子どものときに自分のまち全体を使ってかくれんぼをしたいと思っていたが、実際はなかなか実現できないものである。しかし、別府の路地裏くらいの規模ならそれが可能なのではないかと考えた。私の制作したニットを着たモデルの女の子が路地裏に隠れており、一般の参加者がその場所が記された地図を片手にオリエンテーリングのようにまちを巡るというものである。

K: 東京にいるときと大きく変わった点は、一人で作ることから、美術関係の人もいつつ、一般の人にも作品や制作風景が見える環境である清島アパートに移り、両者がいる中で表現を磨いていきたいと思うようになったことである。

一人でもり、専門的な作品をつくることもあれば、まちの人との出会いの中で生まれてくるものも描いている。ようやく巻き込まれるばかりじゃなく、巻き込めるようになってきた。

T: 別府は実践の場である。町の規模がちょうどよい。地方だからこそ鍛えられる。人も興味を持って協力してくれる。東京のどこかのまちで同じ企画をしたとしても同じような衝撃はないだろう。いろいろな年齢層と出会う窓口を作ることがアーティストとしてやるべきことであると思っている。

ー ギャラリーでの展示・販売や美術館での作品発表と、「まちに仕掛けていくこと」は、どのように異なっているか？

T: 自主的に動いて自分の発表の場と機会をつくらうとしたのは別府に移ってからだ。どういう形態で様々な人たちに対して表現していくかということを考える。箱を取り払って考えるようになった。まち全体が箱のような感覚になっている。

K: 表現を発表するという行為が、ギャラリーではなくまちになったときに、対象が変わる。ギャラリーに来る人は美術を見る目的意識で来ているが、まちにいる人はそういうつもりで来ていない。美術を見る意識で来ていない人が面白さを感じてくれる場合もあるが、戸惑いを感じる姿も見られる。そこをなんとかしないと、と思い日々精進している。

表現は、表現者の考えをその人が持っている技術

を用いて具現化するものだが、作家の思いが伝わらず戸惑う人がいることを知った。そういう反応を見て、とまどうポイントはどこなのかを知ることによって、自分の制作に反映している。まちの中で展示することは自分の中では必要なことである。

別府では勉強しようと思ったので、鉛筆で描く以外にもいろいろなことをやった。ある教会で、クリスマスの演劇会をやってほしいと言われたので、演劇部を立ち上げて公演をしたところ、神父さんが喜んでくれて他の場所でもやることになった。去年は計12公演もやった。それもあって全然絵を描いていなかった。

喜ばれることもあれば、怒られることもあり、「なぜ怒られるんだろう」と考えることも勉強になった。勉強になったことを絵で表現しなければいけないのではないかと思い、作品を個展として発表することにした。

ークリスマスのお芝居をやってみて一番勉強になったことは何か？

K: 演劇に関してはみんな素人で、見ている人もそのことを分かっている。しかし、「空っぽ」で芝居をした方が、まちのストーリーに出会えることを知った。今まで、鉛筆で絵を描いて発表するサイクルの中にいたら出会うことがなかった場所に出会えた。それが自分にとって快感だった。

別府には様々なジャンルの表現者が訪れるので、彼らのワークショップに参加するだけでも、違う表現に触れられる。別府に住んでいるだけで、いろいろな人と出会うことができるのはラッキーだと思っている。

なかったら、知らない世界だったな」と言っている。アパートの向かいの教会の神父さんや、他にも何人か、地域の人たちが深く関わってくれている。

T: 勝くんたちは、巻き込みつつ、巻き込まれている。山本さんにキャンプなどいろいろなところに連れて行ってもらっている。

芸術に対する理解や共感が深まるということではなく、生活の中にそのようなものが入ってきて「なんだか楽しいぞ」と思ってくれればいい。アートであろうとなかろうと、楽しい時間を過ごすことは人生において大切なことであり、「たまたまアートが楽しくさせていた」という結果なのかもしれない。

K: 結果的にアートがきっかけとなり、面白さに気付いて関わってきいているけれど、そのことすらも忘れて自然と関わっている。

T: その人が一生「アート」という言葉を口にしなくてもいいと思う。

K: おじさんやおばさんの生活の中にだんだんと浸透していつているように感じるし、もっと浸透していけばいいと思っている。

T: おじさん、おばさんだけでなく、美術大学に行っているわけではない若い子たちがボランティアをはじめとして関わってくれている。アーティストにならなくても関わることで興味を持って、アートってなんだろうと考えてくれる。きっともっと変わっていくのではないだろうか。

4. 文化・芸術を活用した地域活性化について

T: アーティストが多様な感じ方で、様々な出来事を起こして、そこから影響を受けて関わってくってくれるおじさんもいる。地域への広がりを感じている。

K: 清島アパートによく出入りしている山本さんというおじさんがいる。山本さんは放っておいても様々な場面に顔を出すようなおじさんだが、「勝くんたちがい

4. DANCE BOX／神戸市

「触媒」として文化・芸術の価値を求めて

④ DANCE BOX／神戸市

——地域住民との関わりと革新的な芸術表現

事例の概要

◎市町村データ

市町村名	神戸市	都道府県	兵庫県
人口 ¹	1,544,200人	面積(人口密度)	552.66km ² (2,794.1人/km ²)
歳入決算額 ²	737,731百万円	歳出決算額	724,882百万円
市町村概要	兵庫県南部に位置する兵庫県の県庁所在地で、海と山の迫る東西に細長い市街地を持ち、神戸港を有する日本を代表する港町。古くから海運が盛んで、近代には世界の市場にその名を知られるほどに隆盛していった。2008年に、日本ではもちろんのこと、アジア内で初めてデザイン都市としてユネスコに認定された。		

1 総務省統計局「国勢調査報告」2010年 2 総務省自治財政局「市町村別決算状況調」2008年

◎主たる事業主体の概要

団体名	特定非営利活動法人ダンスボックス		
設置年	2002年(NPO法人化)	連絡先	078-646-7044
団体概要	1996年に大阪で活動開始。2002年にNPO法人化し、大阪市との公設置民営のスタイルで「Art Theater dB」を運営。2007年7月フェスティバルゲート閉鎖に伴い閉館を余儀なくされ、12月に大阪市東淀川区に事務所を移転。2009年に大阪から新長田/神戸に拠点を移し、120席の劇場「Art Theater dB Kobe」と、ダンススタジオ「Studio dB Kobe」を運営している。		

◎関連する文化施設の概要

施設名	Art Theater dB Kobe / Studio dB Kobe	運営母体	特定非営利活動法人ダンスボックス
開館年	2009年	管理時間	不定
施設概要	「Art Theater dB Kobe」客席数:最大120席／奥行き7.2m×間口9m×高さ6mの小劇場空間。 「Studio dB Kobe」面積:59m ² ／多目的ダンススタジオ		
URL	http://www.db-dancebox.org/index.html		
所在地	神戸市長田区久保町6丁目1番 アスタくにつか4番館4階		

◎事業の概要

事業名・クレジット	事業の内容	
劇団ティクバ+循環プロジェクト 主催：NPO法人DANCE BOX、しが県立芸術創造館 共催：劇団ティクバ	「循環プロジェクト」は、障がいのある人・ない人の境界線を、舞台表現を通じて、クリエイティブに超える試みとして2007年に始動。作品「≡2」(にあいこーのじじょう)は国内6箇所で開催された。 - 循環プロジェクトに携わったダンサーの砂連尾理氏が、2008～09年に文化庁の研修員としてベルリンに滞在中、障がい者の劇団ティクバと出会う。障がいのある人・ない人もパフォーマーとして鍛錬し、今日までベルリンでの舞台芸術シーンに一石を投じる役割を果たしてきた劇団ティクバは、40以上の作品を制作し、国内外で上演を重ねている。 「循環プロジェクト」の第2弾として「劇団ティクバ+循環プロジェクト」が2009年に始動。ベルリンの劇団ティクバの拠点劇場にて1週間のクリエイションの後、ワーク・イン・プログレスとして成果を公開。 2011年、ベルリンから劇団ティクバを招聘して「劇団ティクバ+循環プロジェクト」の日本ツアー(神戸・滋賀)を実施。神戸公演は3回公演、滋賀公演は2回公演。2013年にはベルリン公演を行う予定。	
	事業開始年	開催時期
	2007年(初演)	2月20日～3月6日
余越保子+高校生 ダンスプロジェクト 主催：NPO法人DANCE BOX	- 兵庫県高等学校ダンス大会で優れた成績を修める神戸市内の高校創作ダンス部の6名と、ニューヨークのダンス・シーンで数々の実験的作品を発表し続けている余越保子(ダンス、映像作家)が協働してダンス作品を制作するプロジェクト。 2009年、DANCE BOXが大阪から神戸・新長田に拠点を移す。そこで新長田にある野田高等学校創作ダンス部との出会いが生まれた。同年、DANCE BOXのワークショップ企画として、ニューヨーク在住の余越保子を招聘、野田高等学校創作ダンス部を対象にワークショップを実施。 2010年に兵庫県内の高校創作ダンス部にヒアリングを実施。ダンス部が抱えている困難な点や、課題点、今後の展望等を聞いた。 - 余越保子は2度のベッシー賞振付最優秀賞、グッゲンハイムメモリアルアワード、ニューヨーク市芸術助成基金、ファウンデーションフォーコンテンポラリーアートアワードを受賞。余越保子は本企画が初めての日本でのダンス制作となった。	
	事業開始年	開催時期
	2009年	2月20日

現地調査の要約

1. 事業の背景、経緯

1996年に大阪市中央区千日前のTORII HALL内にダンスボックス実行委員会を設立したのが組織の発端となる。2002年にNPO法人格を取得、同年、劇場《Art Theater dB》をアミューズメント施設「フェスティバルゲート」内にオープンし、コンテンポラリーダンスをメインとする日本で有数の劇場として、大きな役割を担う。以下、主な経緯を年表にまとめる。

DANCE BOXの大きな転機は、2007年のフェスティバルゲートの閉館に伴う劇場の閉館と事務所の移転である。それ以前から、劇場運営と並行して積極的に「地域に出る」活動を実践していたDANCE BOXだが、劇場という拠点を失い、会議室が主な機能である公共施設での活動期間中に、障がい者との共同作業によって「循環プロジェクト」が生まれている。

一方の「余越保子+高校生プロジェクト」は、DANCE BOXが大阪から神戸に拠点を移した際に、地域で活発な活動を見せている高校の創作ダンス部との出会いがあった。地域の人的資源である高校生とめぐり合うことで、地域との新たな接点と事業の可能性が生まれたといえる。

また、「劇団ティクバ+循環プロジェクト」と「余越保子+高校生プロジェクト」の両者に共通して、海外におけるアーティストとの出会いや交流が大きな要因となっている。DANCE BOXのスタッフや関わりの強いアーティストが、ネットワークを拡大する役割を担っている。

年表

2002年	NPO法人化。大阪新今宮・フェスティバルゲート内に新世界アーツパーク事業の一環として、独自の劇場「Art Theater dB」を大阪市との公設民営により設立。
2003年	まちとアートプロジェクト「コンテンポラリーダンス・ツアー in 新世界」実施。以降2006年3月まで年一回ペースで開催。
2005年	全国都市再生モデル調査事業・アートを活用したまちづくりプロジェクト「泉北アートプロジェクト」実施。
2007年	フェスティバルゲート閉館に伴い閉館を余儀なくされる。
2008年	Studio dBを運営、「循環プロジェクト」等を展開。明治安田生命社会貢献プログラムに採択、国内6箇所で行なわれる。
2008～2009年	循環プロジェクトに参加したダンサー・砂連尾氏がベルリンの劇団ティクバと出会う。
2009年	神戸市新長田に「Art Theater dB Kobe」を開設。
2010年	DANCE BOXの横堀氏がニューヨーク滞在中にアーティストの余越氏と出会う。
2011年	「劇団ティクバ+循環プロジェクト」、「余越保子+高校生プロジェクト」の実施。



Art Theater dB Kobeの劇場舞台

2. 地域と連携した事業の内容①: 劇団ティクバ+循環プロジェクト

障がいのある人・ない人の境界線を、舞台表現を通じて、クリエイティブに超える試みとして2007年に「循環プロジェクト」が始動した。

循環プロジェクトに携わったダンサーの砂連尾理氏がベルリンに滞在中、障がい者による劇団ティクバと出会い「劇団ティクバ+循環プロジェクト」が2009年に始動。ベルリンの劇団ティクバの拠点劇場にて1週間のクリエイションの後、ワーク・イン・プロGRESSとして成果を公開した。2011年、ベルリンから劇団ティクバを招聘して「劇団ティクバ+循環プロジェクト」の日本ツアー（神戸・滋賀）を実施した。2013年にはベルリン公演を行う予定。

3. 地域と連携した事業の内容②: 余越保子+高校生 ダンスプロジェクト

2009年、DANCE BOXが大阪から神戸・新長田に拠点を移す。そこで新長田にある野田高等学校創作ダンス部との出会いが生まれた。

同年、DANCE BOXのワークショップ企画として、ニューヨーク在住の余越保子を招聘、野田高等学校創作ダンス部を対象にワークショップを実施。公演に向けて、学校との様々な調整を乗り越えて、2011年に「余越保子+高校生 ダンスプロジェクト」は劇場作品として公開された。

インタビューから

- ・(循環プロジェクトは)障がい者の舞台芸術という捉え方ではなく、ダンス作品として優れた評価をもらえるような作品を目指した。(ディレクター:大谷氏)



「劇団ティクバ+循環プロジェクト」

インタビューから

- ・高校生とプロジェクトをやるということはなかなか一筋縄ではいかず、実施に至る経緯には数多くの障壁があり、実現しないのではと思ったことも何度もある。ここまでできたのは奇跡だと思っている。(プログラムディレクター:横堀氏)



「余越保子+高校生 ダンスプロジェクト」

4. 事業による成果や効果

◎変化する価値観や異なる価値観の提示

コンテンポラリーダンスという同時代の表現によって、社会環境とともに変化する価値観や、集団の多数者とは異なる価値観を提示し、相互の理解や尊重を醸成している。

◎「障がい」に対する見方の転換

ダンスを通じた障がい者との協働によって、「障がい」に対する見方や社会のあり方を問い直し、障がいの有無を越えて共に生きていくための創造的な関係を生み出している。

インタビューから

- 社会環境が変わる中で人間の幸せの考え方も変わっていくし、変えていかなければと思っている。(ディレクター:大谷氏)
- 型が決まっているダンスをみんなで揃えて頑張って踊ることを仕込まれていたが、頑張らないダンスも格好いい、きれいだという価値観を彼らに提示した。(振付家:余越氏)
- 今までの創作ダンスは部活としてのダンスだったので、何かしらの規律が常にあったように思う。今回はそれが一切ない自由の楽しさを感じた。(参加した神戸市内の高校生)
- 違いがあるということは見方を変えざるをえない。違いがクリエイティブに考えるきっかけを与えてくれる。自分のスタンスを変えるだけで、いろいろなものを豊かに利用したり、関係を結んだりすることができるのではないか。(振付・演出:砂連尾氏)

インタビューから

- 障がいとはどこからどこまでを指すのか、今まで感じていた「障がい」は自分の単なる偏見なのではないのかと思った。(ダンサー:西岡氏)
- 障がい者とは社会的・文化的枠組みによって作られている。文化の異なる人々がひとつのプロジェクトに参加することで、障がいを形作る枠組みを壊すことができ、ダンスとしてよい方向性を示せるのではないかと考えている。(ドラマトウルク:中島氏)
- 自分自身は障がいの有無に対する意識はほとんどないが、車椅子使用者であるからこそ健常者とのように共に活動できるのか考えることはある。考え方を変えれば車椅子使用者と健常者が共にできることはたくさんあるのではないか。(出演者:福角氏)

◎思春期の子どもたちの内面的な成長

多感な時期を過ごしている高校生にとって、ダンスを創り、踊る行為は、自己と他者との関わりの中で自分自身を見つめ直し、内面的な成長に大きな影響を及ぼしている。

5. 事業の実施体制

◎主催者、事務局

「劇団ティクバ+循環プロジェクト」、「余越保子+高校生プロジェクト」ともに、NPO法人DANCE BOXが主催し、事務局を運営した。DANCE BOXは、プロデューサーの大谷燮、事務局長の文、プログラムディレクターの横堀ふみ、その他、コンテンポラリーダンスの実演や企画制作の専門性を備えた人材で事務局を構成し、国内外との幅広いネットワークを有している。

◎アーティスト

「循環プロジェクト」では、2008年の初演時は「ナビゲーター」としてダンスを砂連尾理、美術を川井ミカコ、音楽をスカンクが担当。それぞれにディスカッションやワークショップを重ね、最終的に3コースが揃ってワークショップ、本番というプロセスを重ねた。2009年の第2期では、砂連尾が「振付・演出」、中島那奈子が「ドラマトゥルク」という役割で参加し、ワークショップやワーク・イン・プロセスを重ねてから公演を迎えている。

「余越保子+高校生プロジェクト」では、ニューヨーク在住の余越とDANCE BOXのプログラムディレクターの横堀が2009年に出会ったことが契機となった。このプログラムでも、高校生とのワークショップだけでなく、県内の高校創作ダンス部の顧問の先生等へのヒアリングといったプロセスを経て、協働制作に至っている。

いずれの場合も、企画の最初から上演作品の完成形が見えるものではなく、企画の趣旨を理解するアーティ

インタビューから

- 教育という観点はない。私(余越氏)がこうやって踊れと指示するのではなく、彼ら(高校生たち)から紡ぎ出されたものが踊りとなることを知ってほしかった。(振付家:余越氏)
- ダンスは相手の動きや気持ち必死で考えて読み取らなければならない。そのことは思春期の子どもにとって肉体的にも精神的にも自分を見直す機会になる。(参加した神戸市内の高校生)
- リハーサルで、高校生が自分たちの踊りに対して厳しき確かな意見を述べているのを見て彼らの成長を感じた。(プログラムディレクター:横堀氏)



大谷燮 NPO法人DANCE BOX 代表

インタビューから

- 文化庁の在外研修でベルリンに行った時に中島さんと出会った。彼女と話す中で、障がい者、健常者の概念を超えたフラットな関係の中でいろいろなことが循環できる「大きな循環」を創り出したいという思いが生まれた。(振付・演出:砂連尾氏)
- 「高校生プロジェクト」で、振付をお願いした余越さんとは、ニューヨークで出会った。余越さんの考え方が面白かった。そのとき、余越さんがアメリカの高校生とのプロジェクトを行っていたことから、日本の高校生にも会ってみたいという話になり、野田高校のダンス部の学生にワークショップを見に来てもらった。(プログラムディレクター:横堀氏)

ストの、柔軟で積極的な関わり方を引き出した結果が公演に繋がっている。また、アーティストの要求に応じる事務局やスタッフの裁量が大きい。

◎参加者の関わり方

「循環プロジェクト」は初演時に出演者を公募し、障がい者だけでなく、健常者もワークショップに参加した。障がいの有無に関わらず、ダンス、美術、音楽の既成概念から自由になれることが参加者に求められた。2年間の活動を経て、初演時のメンバーは解散したが、美術部門が独立して活動を展開するといった広がりも生まれた。また、第2期の「劇団ティクバ+循環プロジェクト」では、初演時のメンバーを核に置きながら再構築した。

「余越保子+高校生プロジェクト」では、神戸市内の2つの高校の創作ダンス部の3年生に参加を呼びかけた。ワークショップや稽古の時間帯が夜間に及ぶことが、生徒の参加を学校側が正式に認めることが難しかったため、実施時期を、高校を卒業してから大学に入学するまでの隙間に設定した。参加者の意思を大事にすると同時に、保護者や学校への理解や協力を丁寧に見求めている。

6. 現在の課題、将来のビジョン

DANCE BOXはNPO法人として行政から自立した活動を行っているが、2002年から2007年までの大阪市による「新世界アーツパーク事業」や、神戸市が2014年のオープンに向けて進めている「ファッション・デザイン・クリエイティブセンター」など、行政との協働事業に参加した経験も多い。そうした経験の中で、行政とNPOの協働性が重要であることを指摘している。

また、行政としては、NPOとの協働によって文化・芸術をまちづくりに活かしたいと考えているものの、まちづくりにとって文化・芸術が持つ価値をどのように評価するのか、どのように価値を共有するのかが課題だと考えている。

NPOとしては、文化・芸術の新たな創造と、地域社会との関係づくりの両面が必要であり、芸術性の追求とコミュニティとの関係のバランスが求められる。

インタビューから

- 「循環プロジェクト」のダンサーは公募したが、以前に行ったワークショップの参加者が中心となった。ナビゲーターにどのような障がいを持つ人で行うか決めてもらい、ダンスは身体障がい者に限定した。(ディレクター:大谷氏)
- 高校生とプロジェクトをやるということはなかなか一筋縄ではいかず、何人もの高校の先生や、高校創作ダンスの活性化に努めている愛媛大学の牛山先生に会って話を伺いながらプロジェクトを進めた。(プログラムディレクター:横堀氏)

インタビューから

- 芸術文化活動を行う際に行政だけでなくNPOと組むことは有効だが、NPOに丸投げするのではなく協働性を持つことが必要である。(ディレクター:大谷氏)
- 創造都市に関わった人々はその価値を理解することができるが、価値を示せる数値的実績や、評価基準がないこともあり、それ以外の人々はなかなか価値を共有することができないという課題を感じている。(神戸市デザイン都市推進室:衣笠氏)
- 分かりやすく評価しやすい部分ばかりが目されることは芸術にとって危険なことではないだろうか。しかし、コミュニティと関わることで芸術性がなくなるとは言いきれない。両者のバランスをとるのはとても難しい。(プログラムディレクター:横堀氏)

7. 文化・芸術を活用した地域活性化について

DANCE BOXが拠点を置く神戸市では、2004年から「文化創生都市宣言」を行い、2008年にユネスコ創造都市ネットワークの「デザイン都市」に認定された。神戸市が「デザイン都市」を標榜し推進する理由には、1995年の阪神・淡路大震災からの復興の過程で文化・芸術の重要性を認識したと同時に、地域社会の課題解決に文化・芸術の創造性を活かすことが期待されている。

社会の課題解決の道具として文化・芸術を活用するという考え方に対して、アーティストには様々な捉え方が存在しており、必ずしも「道具としての文化・芸術」に賛同する意見ばかりではない。しかし、文化・芸術やアーティストは社会から隔離した存在ではなく、個人や社会に対して影響や変化を及ぼす力があるという認識が共有されている。

またDANCE BOXでは、地域コミュニティとの関係性と芸術性の狭間に揺れる場合があるものの、地域住民との関わりを生み出す様々な工夫と、革新的な芸術表現の追求に妥協をしない姿勢によって、他に代替できない存在となっている。

インタビューから

- 創造力を持つということは、自分の幸せを考えることにつながり、それが自分の課題、都市の課題、世界の課題を考え解決していくことにつながるのではないかと。(神戸市デザイン都市推進室:衣笠氏)
- 無駄なもの(と思われる文化・芸術)をどう読みかえていくかということ、別の面白さや文脈を提示することは重要だと思う。それは今あるシステムを変えることにもつながるのではないかと。(ドラマツルク:中島氏)
- 作品だけが重要なのではないかと考えていたが、自分の作品が社会にどれくらいコミットできるかどうかということもアーティストとして必要なことではないかと最近は感じている。(振付家:余越氏)
- (難解だと思われるがちな前衛的な表現を)理解できなくても、劇場に足を運んでもらえるような関係性を(地域に)作っていくことをしなくてはならない。前衛というひとつの方向性だけを行っていくだけでは、そのような関係性は作れない。(ディレクター:大谷氏)

(1) NPOへのインタビュー

日時:2011年2月17日(木)20:00~21:00

場所:Art Theater dB Kobe

対象:大谷燠(NPO法人 DANCE BOX代表)、横堀ふみ(NPO法人 DANCE BOX)

1. 事業の目的、内容

大谷(以下、「O」):「循環プロジェクト」は2007年に始まった。もともとは障がい者の人々とのダンスワークショップがきっかけだったが、継続性がないことや、癒しにはなっているが先へ進まないということを指導しているダンサーが感じ始めており、参加者からももっと舞台づくりにアプローチしたいという声があった。

そこで、「エイブルアート・オン・ステージ」に応募したことがプロジェクトの始まりだった。障がい者の舞台芸術という捉え方ではなく、ダンス作品として優れた評価をもらえるような作品を目指し、ダンス、美術、音楽それぞれの分野の第一線で活躍しているアーティストをナビゲーターとして選んだ。

初演時は、DANCE BOXが劇場として使える場所を持っていなかった時期で、新大阪の東淀川勤労者センターの会議室やロビーやトイレを舞台として使い、観客も循環するような作品となった。次の年に東京の世田谷美術館や桜美林大学などでも上演することになった。そうしたことから、ダンス作品としての評価はある程度もらえたと思っている。

一方で、私たちとアーティストと障がいを持つ人が長期にわたって共にツアーを行ったことで、様々なことに気付かされた。例えば、出演者は7人しかいなくても、介助の方が必要になるので常に20人以上でプロジェクトを行うので経費が膨らんでアーティストへの人件費をなかなか払えないという状況もあった。2年間活動を行い、そのときのメンバーは解散した。しかし、循環プロジェクトをやめるつもりはなかったもので、新たな形を模索していたところ、砂連尾さんと劇団ティクバが出会ったことで、循環プロジェクトのメンバーがベルリンに行きコラボレーションをした。もう一度日本でできないかということで、今回のプロジェクトを行った。

循環プロジェクトはダンス、美術、音楽の総合的なプロジェクトだが、美術部門が独立して、来月に韓国の障がいのあるアーティストと共に個展を行うことになった。そのような部分的な広がりも出てきている。

横堀(以下「Y」):「高校生プロジェクト」で、振付をお願いした余越さんとは、ニューヨークで出会った。余越さんの考え方が興味深かったので、関西のアーティストとぜひ会わせたいと思い、振付家を何名か選り余越さんのワークショップを企画した。

その時、余越さんがアメリカの高校生とのプロジェクトを行っていたことから、日本の高校生にも会ってみようという話になり、野田高校のダンス部の学生にワークショップを見に来てもらった。

話はとんとんと進み、次の日に余越さんが野田高校にワークショップに行くことになった。手ごたえを感じ、今後も学生と何かできないかということでプロジェクトを立ち上げた。

高校生とプロジェクトをやるということはなかなか一筋縄ではいかず、何人もの高校の先生や、高校創作ダンスの活性化に努めている愛媛大学の牛山先生に会って話を伺いながらプロジェクトを進めた。実施に至る経緯には数多くの障壁があり、実現しないのではと思ったことも何度もある。ここまでできたのは奇跡だと思っている。

O:様々な障壁を乗り越えるために、実施時期を、高校を卒業してから大学に入学するまでの隙間を狙って仕掛けた。今回のアプローチはダンスを踊っている日本の高校生にとって新たな試みである。日本のダンス教育に一石を投じることができればとても面白い。表現よりも体育系の技能を重視したダンスを作っているところが多く、今回参加している高校はそこの中では進んだ考え方を持っている。

2. 事業の背景、経緯

O:「循環プロジェクト」は明治安田生命のエイブルアート・オン・ステージのプログラムが初めにあった。エイブルアート・オン・ステージを運営するエイブルアートジャパンや関西にあるたんぽぽの家とのつながり、桜美林大学で教えている木佐貫邦子さん、世田谷美術館の塚田美紀さんなど、実行委員から広がっているつながりは大きい。

エイブルアート・オン・ステージはプロジェクトのプロ

セスを発表する機会があるのだが、絶句してしまう団体もあるほど実行委員から厳しい指摘を受ける。しかし、その分熱意を持っている人が集まっている。そのときに「待ち望んでいたものだ」と評価され、そこからネットワークはつながった。

一方の「高校生プロジェクト」については、DANCE BOXが神戸に移転したことを、野田高校のダンス部の先生が喜んでくれた。それがきっかけで、ダンス部がDANCE BOXのプログラムに出演したり、アジアのアーティストが来たときに高校でワークショップを行ったり、少しずつ関係を作ってきたことが今回につながっている。

神戸市は政令指定都市であり地方都市としては大きい、新長田というローカルにこだわったときに、高校生は重要な資源だと思う。大学がないところにも高校はあるので地方の文化を担う役割を持っている。

コンテンポラリーダンスというまだ評価の定まっていない新たなダンスを行うときに、ローカルだからこそ高校生というような新たな人々と出会っていく機会を得ていると思う。

アジアコンテンポラリーダンスフェスティバルでも、高校生にワークショップを行ったことで、高校生が劇場に来てくれた。このプロジェクトが劇場離れした若い人々を呼び戻すヒントになればと思っている。

3. 事業の実施体制

O:「循環プロジェクト」のダンサーは公募したが、以前に行ったワークショップの参加者が中心となった。ナビゲーターにどのような障がいを持つ人で行うか決めてもらい、ダンスは身体障がい者に限定した。美術は目の見えない人にとっての美術をアプローチしたいということで視覚障がい者に限定した。音楽は障がいの有無に関わらず誰でも参加してよいということになった。

まずはワークショップから始めた。参加者が従来の美術や音楽の概念を頑なに持っていることも多く、どのようなものが求められているか理解できないこと

もしばしばだった。逆に知的障がい者の伸びしろのほう大きいと思う。体で発想する力があるのではない。

Y:「高校生プロジェクト」に関しては、保護者の理解という点では、部活の顧問の先生に対する信頼があり、先生から話をしてもらうことで進んだ。

DANCE BOXのプロジェクトに参加してもらったり、公演に招待したりと、DANCE BOXと密にやり取りしてきた経緯もあって、先生方はDANCE BOXに全てを任せてくれた。

しかしそれは、DANCE BOXが高校生に何かあった場合の責任を執らなければいけないということでもあったので、未成年を預かるということのプレッシャーを初めて感じた。

O:地域の人々をどのように巻き込んでいけるのか。劇場という拠点に地域の人々がどれだけ来るようになるのかは大きなポイントである。

Y:愛媛大学の牛山真貴子先生にアフタートークに来ていただいた。牛山先生は高校創作ダンスの活性化に努めておられ、高校創作ダンスの世界では影響力が強い方である。牛山先生に来ていただくことで、今回のプロジェクトに参加していない高校の先生方や生徒が公演を見に来てくれることになった。

4. 事業による成果や効果

O:障がい者が頑張っている姿をみせるためではなく、ひとつの表現としての作品を作ることができたということが大きな成果だと思っている。

また、海外の障がいのあるアーティストのコラボレーションだけでなく、立命館大学映像学部の先生や研究生と共に、身体とテクノロジーに関連した新しいメディアの実験を行っている。

社会環境が変わる中で人間の幸せの考え方も変わっていくし、変えていかなければと思っている。お金がなくても幸せな生活は送れるということを実践して、媒介していく存在がアーティストや私たちのようなコーディネーターなのではないか。

Y: 余越さんは、まず失敗をさせてからなぜ失敗なのか自分たちで考えさせる。与えるだけでなく自分で発想する力を養うことを丁寧に行っている。リハーサルで、高校生が自分たちの踊りに対して厳しく的確な意見を述べているのを見て彼らの成長を感じた。

O: 当事者意識をきちんと持つようになったと思う。また、以前よりも体がこわばらず、踊っている自分を客観的に見るようになってきている。この中からいい振付家が生まれたらいいなと思っている。

時代に対する柔軟性を持っていなければ継続できていないと思う。目的を設定して、そこに向かって論理的に動くというよりは感覚的に動いているが、そのぶん実践力はあると思う。

予算規模が小さく、一年先のプログラムががっちり組めないが、急に企画が持ち込まれても実現できる可能性があるので、面白いことができないかという人がやってくる。

新しいものをプレゼンテーションしていくということ、それらを一つのスタイルとして継続していくことをバランスよくやっていければと思っているが、面白いものをやろうと思うと採算度外視で新しいものをやろうとしてしまうところはある。でも何とかやっていけている。

5. 現在の課題、将来のビジョン

O: プロジェクトを始めて、とにかく課題が多いことを感じた。簡単にコミュニティアートという言い方では解決できないし、定まった手法がない。やり方を苦労して見つけることが面白いと思えるかがコミュニティアートをやっていけるかどうかの分かれ目だと思う。コンテンポラリーダンスを基本としているので、難解だと思われるようなものも多い。確かに前衛的な表現がとんがっていく必要はあって、地域の人々が理解できなくて当たり前だという部分はある。しかし、理解できなくても劇場に足を運んでもらえるような関係性を作っていくことをしなくてはならない。前衛というひとつの方向性だけを行っていくだけでは、そのような関係性は作れない。

たとえば、神戸市民劇団Vintageという、40歳以上の市民による地域劇団の公演の中で、地域内のカラオケ教室に通う方の歌謡ショーに、DANCE BOXのスタジオで開設されているダンス教室の踊りを組み込んでいる。その際に、劇場内を飲食自由にして、地元商店街の飲食店に出店してもらうなど地域の人々が関わる工夫をしている。

また、私自身も地域内の文化人クラブに所属して、劇場外でも地域の人々との関係を作っている。そのような中から、劇場に足を運んでくれる人がいたり、DANCE BOXが劇場外の商店街等でプロジェクトを行ったりすることに協力をいただいたり、新たなつながりは徐々に出来ている。

様々な事業を行ってきた中で、継続できないこともたくさんあった。私たちは活動の火をつけていくことはできるけれど、それを継続するには地域の力が絶対に必要である。

地域の人々がどのように自主的に動いていくかということ、DANCE BOXだけでなく、他のNPOなどと協働して考えていく方向性が必要である。そのためには小さな地域に限定して、顔が見える関係の中で活動を行うのがやりやすいと感じている。

— こうした事業に取り組む上で、行政に対する要望などはあるか？

O: 行政では事業に対して様々な助成を行っているが、何のための助成金なのか担当者自身も分かっていないことが多い。なぜ文化芸術が地域振興に役立つのかということを現場にいる職員が理解していないと芸術環境は良くなっていかない。

理解のある行政の担当者を生むためには、3年ほどで部署が変わってしまうような行政の仕組みも変わっていかねばいけないのではないかな。また、芸術文化活動を行う際に行政だけでなくNPOと組むことは有効だが、NPOに丸投げするのではなく協働性を持つことが必要である。

Y: 誰でも踊りに対する欲求は本能的にあると思うので、それを引き出していくことはとても大切なことだと思うが、コミュニティダンスをやれば何かいいことをやっているように見えてしまう風潮には抵抗を感じている。

分かりやすく評価しやすい部分ばかりが注目されることは芸術にとって危険なことではないだろうか。しかし、コミュニティと関わることで芸術性がなくなるといえるとは思っていない。企画毎の企画者やアーティストの立ち位置や、その企画の評価軸を明確にする必要があると思う。

○: アーティストと学校や行政をつなぐ人の育成は大事だと思っている。また、DANCE BOXの特徴は劇場という拠点を持っていることである。コミュニティアートについても、まずは劇場で何を見せたいのかということベースに取り組んでいくことだと思っている。

DANCE BOXの職員はそれぞれがそれぞれの考えを持つディレクターではあるが、劇場がどうあるべきか考える中である程度の多様性を受け入れることができている。運営する側の柔軟性と、プロジェクトに責任を持つことのできる組織体制にしている。

(2) アーティストへのインタビュー①

※ インタビュー対象者ご本人の希望により、WEB上での掲載を控えさせていただきます。ご了承ください。
(製本された別冊資料編では149～151ページに掲載されています)

(3) 参加者へのインタビュー

日時:2011年2月17日(木)18:00~18:30

場所:Art Theater dB Kobe

対象:神戸市内の高校の創作ダンス部(3名)

1. 自己紹介

– ダンスを始めたきっかけは何か？

A:高校から始めた。それまではいろいろなスポーツをやっていたが、ある程度技術がついた時点での面白みのなさを感じていた。NHKの番組で創作ダンスを初めて見て、「見せるスポーツ」である点に魅力を感じ、やってみようと思った。

B:小学校低学年のころに始めた。テレビでクラシックバレエを見て踊ってみたくなり、モダンダンスの教室に通い始めた。高校まではモダンダンス一筋だった。創作ダンス部の先輩の話や、創作ダンス大会の様子から創作ダンスにも興味が沸いた。創作ダンス部に入り、初めてダンスを創作したことで、ジャズダンスやヒップ・ポップも少しずつ踊るようになった。

C:自分で始めたいと思ったわけではなく、3歳のときに母にクラシックバレエの教室に連れられたのがダンスを始めたきっかけだった。入学した中高一貫校に創作ダンス部があり、いろいろなジャンルのダンスがあることを知り、クラシックバレエ以外のダンスも踊ってみたくなった。

– 創作ダンスとクラシックやジャズ、モダンダンスといったすでに振付けられたダンスとの違いは何か？

C:創作ダンスはテーマがあり、身体を使って見る人にそれをどのように伝えるかというものだと思う。

B:どのジャンルのダンスも奥が深いが、創作ダンスのほうにテーマを伝えることや、伝え方がより繊細なのではないだろうか。みんなで一緒に作り上げているという気持ちを持つことはもちろんだが、ひとつの舞台として見たときに、どれだけ伝わってくるものがあるのかということが重要である。伝わってくるものが大きいほど、創作の過程が充実しているのではないかな。

A:創作ダンスは、幼い頃からのダンスの修練や身体条件がなくても気持ちがあれば踊ることができる。しかし気持ちだけでも踊れるものではない。技術だけでも気持ちだけでも踊れるわけではない点に創作ダンスの深さを感じている。

– ダンスをやっていてよかったことは？

C:人前で何かをする度胸がついた。また、人に何かを伝える楽しさを知った。

A:人に対する優しさを持つことができた。相手の気持ちを知らうとし、他人のことを考えることのできる人間になれた。

2. プロジェクトの感想、自身の変化

– 今回、余越さんの指導は今まで教わってきた創作ダンスとは違っていたか？

B:ダンス部に所属していたときは、部としての作品のあり方がある程度固定されていたように思う。しかし、余越さんの指導はそのような固定概念をいい意味で覆してくれた。余越さんは「こうして」とは言わず、創作する上での考え方のヒントをたくさん投げてくれる。今まで踊ってきたダンスと違うことに戸惑わずに、新鮮さを楽しみながら挑戦することができた。

C:ダンス部では自分で振りを創作する機会は少なく、即興は経験すらなかったのが、今回のダンスの創作は新鮮だった。「個人」が作品を作り上げていく点も、「部」として作品を作っていく今までの創作とは真逆であった。初めは違いに戸惑ったが徐々に慣れてきた。

A:今までの創作ダンスは部活としてのダンスだったので、何かしらの規律が常にあったように思う。今回はそれが一切ない自由の楽しさを感じた。また、余越さんのアドバイスのによって自分の特徴に気づくことができ、思った以上にスムーズに体を動かせた。

– 余越さんのアドバイスによってどのような点に気付けたか？

A:迫力のあるダンスを見せることが自分のダンスだと思っていたが、余越さんにそれ以外の見せ方もあることを指摘され、とても脱力して踊ることができた。しかし、今までそのように踊ったことがなかったので、体がなかなか反応できない部分はあった。

B:練習のひとつに、自分の踊り方について余越さんやメンバーから意見をもらおうというものがあった。他人から客観的な意見をもらう機会は今までありそうでなかった。他人に言われて初めて気付いたことを

自身で咀嚼する時間があつたことで、自分の踊りの長所と短所のどちらにも気付くことができた。自分自身を見つめるいい機会であり、今後踊るときにも役に立つのではないかと思う。

C:私も他人から意見をもらったことは貴重だった。また、全員で踊る箇所を一人で踊るという練習があつた。一人で踊るのは初めての経験で緊張したが、他人から見られていることをより強く意識した。

A:ダンスがなかったせいで、人とうまくコミュニケーションをとることができない人が増えて、不登校のような現代特有の問題が起きてしまっているのではないかと、とは思っている。

3. 文化・芸術を活用した地域活性化について

– 今後、ダンスが社会の中でどのように使われたらいいと思うか。むしろ、ダンスはダンスを理解する人々の中で発展していったほうがいいと思うか？

A:学校のカリキュラムの中で、ダンスが国語や数学といった必修科目のようになってもいいのではないかと、思っている。ダンスは相手の動きや気持ちを必死で考えて読み取らなければならない。そのことは思春期の子どもにとって肉体的にも精神的にも自分を見直す機会になる。ダンスが、踊りたい人だけのものではなくもっと普及していくような環境になってほしい。

B:同じ高校の生徒はダンス部があるのでダンスを見る機会が多少あるが、日常生活でダンスを知る機会はまだまだ少ない。ダンスを知り、そこから何か感じることで、ダンスに興味を持ち、自分も踊ってみようと思う人が増えるかもしれない。そのことがダンスを取り巻く環境を変えていく。すでにパフォーマーである人々が、ダンスによって何かを伝えることをより意識することも重要なのではないか。

– 今回の企画で得た発見や体験を誰かと共有したいと思うか。また、コンテンポラリーダンスをやってほしいと思うか？

A:興味がない人に自分との体験を共有してもらおうとは思わない。やってよかったと思うことは話すが、一緒にダンスをやってほしいとまでは思わない。

– 社会にダンスは絶対に必要なものだと思うか？

(4) アーティストへのインタビュー②

日時:2011年2月18日(金)16:30~17:00

場所:Art Theater dB Kobe

対象:西岡樹里(ダンサー)

1. 自己紹介

- 今までも踊りを学んでいたが、大学に入ったときにコンテンポラリーダンスとマーサ・グラハムテクニックを学んだ。その頃から、踊りを仕事にしたいと思い始めた。

2. 事業に参加した経緯、動機

- 大学卒業後に日本のコンテンポラリーダンスに興味を持ち始めたため、今まではDANCE BOXの公演はほとんど見たことがなかった。DANCE BOXの他の公演の参加ダンサーのオーディションに合格したことがきっかけでDANCE BOXと関わるようになった。砂連尾さんが通っていた大学の非常勤講師だったこともあり、今回の循環プロジェクトに参加することになった。
- これまで障がい者とともに踊った経験はあったか。今回の企画の趣旨をどう思ったか？
- 障がい者と踊るのは今回が初めての経験である。初めは自分には務まらないと思ったが、ダンサーとして人とつながることは重要であり、よい経験になると思いプロジェクトに参加することにした。
- 日常生活での障がい者との接点やエピソードはあるか？
- 高校のときに、道を通りにくそうにしていた車椅子使用者を手伝おうとしたが断られた。健常者とは同じでないものの、障がい者には彼らにとっての日常生活があり、どの視点に立って日常を考えるかによって、障がいの対象が変わり、歩みよれるのではないかと気付かされた。

3. 事業の感想、参加者の変化

- 循環プロジェクトを通じて障がい者に対してどのような印象を抱いたか？
- 初めは障がい者とのように関わっていいのか分からなかった。接していくうちに、それぞれがダン

サーとしての自覚を持ち、障がいをマイナスとしてではなく強い個性として捉えて、それを活かしながら踊ること、人と接することに長けていると感じた。

- 車椅子使用者が車椅子を自身の身体の一部のように扱い踊っているのを見て、車椅子はその人にとっては障がいではないように思えた。障がいとはどこからどこまでを指すのか、今まで感じていた「障がい」は自分の単なる偏見なのではないのかと思った。

– 障がい者と接することで自分自身に変化はあったか？

- 自分が関わることで初めて分かることのできる世界が数多くあることに気付かされた。自分の踊ってきた環境や、できると思ったことの小ささを感じた。自分とは異なる様々な感覚を持つ人々に接することで、その人の見ている世界に触れることができることに驚いた。
- 決してつながることができないのではないかと感じていた障がいのある方と、小さな動きを通してつながったことで、誰かと一緒にいたり、ふれあったりすることが人にとって大切であり、幸せなことだと気付かされた。
- 大きな動き、激しい動きは観客にとって分かりやすく、評価されることは分かっていたが、細かい感覚を誰かに伝えることやそれが表現として成立することを、プロジェクトを通して学んだ。

4. 文化・芸術を活用した地域活性化について

- ダンス公演といった芸術活動によって、様々な人々とつながることができるだけでなく、単純に楽しみながら新しい世界に出会うことができる。障がい者やその家族が、彼らの世界に閉じこもりがちになってしまうのを防ぐことができるのではないか。このような活動がもっと増えればよいと思う。
- 世の中に出るアートを作品の到達地点として捉えようと、アートを道具としてみなし、それを使うことに抵抗がある人はいる。私は芸術やダンスが、それぞれの目的を達成するための、また、それぞれが

幸せになるための道具になればよいと考えているので抵抗はない。

- 今回の活動はダンスセラピーとは異なっている。ダンスセラピーとしてみると全く違う作品としてみえてしまうのではないか。観客にはダンスセラピーとしてではなく、ひとつのアート作品としてみてほしい。

－ 循環プロジェクトのように障がい者と共に行う芸術活動にはアーティストへのどのようなサポート必要か？

- まずは活動を知ってもらわなければ、興味を持って関わる段階に至るのは難しいのではないか。全国各地で公演を行うなど、多くのアーティストが活動を知るきっかけをつくるのが大切なのではないか。

－ 障がい者以外にどのような人と活動を行っていけると思うか？

- 私と同世代で、踊りとは別の分野の人々にもっと踊りに興味を持ってほしいとは思っている。どのような価値があるものなのかが理解されなくても、楽しいと思える環境ができればいいと思う。それによって、アートが生活の中で必要とされる可能性が生まれるのではないか。

－ ダンサーとしての今後のキャリアをどのように考えているか？

- 具体的にどのようにキャリアを積み上げていくかということはまだ考えられていないが、踊りを使って、誰かの、何かの役に立つことができればと思っている。

(5) アーティストへのインタビュー③

日時:2011年2月18日(金)19:00~19:40

場所:Art Theater dB Kobe

対象:砂連尾理(ダンサー・振付家)、中島那奈子(ドラマトゥルク)

1. 自己紹介

砂連尾(以下、「J」):ダンスは大学から始めた。ダンスを始める以前から、自らの身体や生への不安、所在のなさを感じていた。だから、それまでに経験したことがない、自分から一番遠いと感じるものに対してアクセスし、自分の思考の範囲の外に出ることによって、身体や生への感覚を取り戻せるのではないかと考えていた。そしてダンスが、そのときの自分にとっては一番遠いものだったのでダンスを始めた。ダンスをやっていく中で、自分から一番遠くにある未知なる物にどのようにアクセスして、独自の言語や身体を創造していくことに興味を持った。

中島(以下、「N」):日本舞踊を幼いときからやっていたが、コンテンポラリーダンスの制作現場に携わるのはアメリカのダンス研究者を通してだった。NY大学のパフォーマンス・スタディーズという学科に入学し、アンドレ・レペッキというダンスのドラマトゥルクとして活躍した方に師事し、ダンスの専門知識を実際のダンスの現場に還元していくという活動を始めた。初めは、実験的なNYダウントアウナダンスの分野で、振付家のドラマトゥルクとして新しいダンスの見方をどのように作品として見せていくかという活動を行っていた。その後、自らのドラマトゥルクとしての知見を深めるためにベルリンに移った。私の研究テーマが「踊りと老いについて」なので、ダンサーであるべき身体をどのように実験していくかということから、今までダンサーではなかった人々をダンサーとしていくことに興味を持った。

そこで、ベルリン移住後は、コンテンポラリーダンスのドラマトゥルクと同時に、今までダンサーとなりえなかった人々がダンサーとなるコミュニティダンスの分野での活動も視野に入れ始めた。

2. 事業に参加した経緯、動機

J:循環プロジェクトとは4年ほど前に出会った。障がい者に対する戸惑いはなく、彼らの障がいとどうコミットしていくか考えることが、自分にとってコミュニケー

ションでありダンスであった。障がいがあるという理由で、それがすなわち不自由であるとカテゴライズしたり、こちらからの一方的なケアやサポートする関係になるのではなく、私が彼らから何かを得て、彼らも私から何かを得ることができるという「循環する関係」を創っていけたらと思っている。

文化庁の在外研修でベルリンに行ったときに中島さんと出会った。彼女と話す中で、障がい者、健常者の概念を超えたフラットな関係の中でいろいろなことが循環できる「新しい循環関係」を創り出したいという思いが生まれた。また、ドイツにいたので言語の壁をどのように越えていけるかという課題も生まれた。ドイツでは、中島さんと半年間プロジェクトを行い、劇団ティクバのことも彼女との活動の中で知った。また、ティクバと循環プロジェクトのメンバーが共演し、ワーク・イン・プログレスで公演を行った。現在は、プロジェクトが一回きりのものではなく、循環する関係を継続しながら健常や障がいを越えたものをどう提示していけるのか模索している最中である。

N:砂連尾さんから循環プロジェクトのことを聞いて、ドイツ内ですでにひとつの文脈を持つティクバの活動と、循環プロジェクトといった砂連尾さんの行ってきた活動など、いろいろな文脈を持つものを結び付けられるのではないかと考えた。異文化をクリエイティブにつなぎあわせていく「インターカルチュラル」な形で、障がいや健常、ダンスのテクニックやダンサーとしての身体とは何かを考えていくきっかけが生まれればと思っている。

3. 事業の感想、参加者の変化

— 循環プロジェクトでの砂連尾さんの役割についてご説明いただきたい。

J:前はナビゲーターだったが、今回は振付・演出と明記している。ただ、私は演出家や振付家が権限を握るピラミッド型の構造には否定的である。なぜなら、作品はそのプロジェクトに参加した全員のものであり、その中では演出家も振付者も一役割に過ぎないと思っているからだ。だが、日本で公演を行う上

で、助成金を申請する際には代表者として振付家、演出家の名を書かなければいけない場合が多く、今回、そうしているのは便宜上な部分はある。

始めた当初の循環プロジェクトは、出演者が障がい者だけのプロジェクトであったが、それだとすぐに福祉の文脈に組み込まれてしまっていた。しかし、福祉の観点からだけではなく、舞台芸術として何か新たな価値観や生き方を感じたいと思っている観客に見てほしかった。今回、出演者に健常者のダンサーを起用したことや、「振付・演出、ドラマトルク」という役割分担を記すことで、エイブルアートではないことを強く押し出し、より多くの人が見にくる可能性を開きたかった。

カリスマが作品を作っていくような「天才システム」は20世紀のシステムとして確かに機能していた。しかし、本当はそのような「天才」からこぼれていった人々が、アートや歴史をつくっているのではないだろうか。劇団ティクバ+循環プロジェクトでは、これが「われわれ」の作品であるということを語っていききたい。

そして、この作品が舞台の歴史や現状においてどのように位置づけられるのか中島さんと共に考えていきたい。彼女は私とは違う視点で作品を言語化し伝えていく役割を持っている。公演だけで完結させるのではなく、言語化し伝えていくことが現在の舞台に必要なのではないかと考えている。

ー ドラマトルクの視点から、ドイツと日本における障がい者やダンスに対する違いについて、ご説明いただきたい。

N: 日本とドイツはもちろん文化が違うが、その違いにむしろ可能性を感じている。障がい者とは社会的・文化的枠組みによってつくられている。文化の異なる人々が一つのプロジェクトに参加することで、障がいを形作る枠組みをずらすことができ、ダンスとしてクリエイティブな方向性を示せるのではないかと考えている。

言葉は理解できないとどうにもならない場合があるが、身体の動きというのは社会や文化を超えたつな

がりとして存在しているように思える。そこがダンスの持つ可能性なのではないか。

ー 障がいの有無だけでなく、言語や人種や外見が、対等な「違い」として作品に組み込まれているのか？

J: 日本は人種や言語や価値観がわりと共通しているので一見すると便利ではあるが、共通しているという幻想自体がある窮屈感を招いているのではないかと思うことがある。ヨーロッパのような多人種、多宗教な環境では、それぞれ違いがあるということが前提であるため、様々に見方を変えざるをえない。ただ、そんな違いがクリエイティブに物事を考えるきっかけを与えてくれているようにも思う。自分の見方、スタンスを変えるだけで、いろいろなものを豊かに感じ直せるし、新たな関係を結んだりすることができるのではないか。

自分はダンサーという、今の日本社会の中ではマイノリティでわけの分からないものとして社会に存在している訳だが、そんなわけの分からないものが社会やコミュニティから拒絶、排除されるのではなく、様々なことを含んでいける社会のほうがより豊かなのではないのか。

4. 文化・芸術を活用した地域活性化について

ー 他分野と協働して活動を行うときにアーティストとして何が必要だと思うか？

J: アーティストによって異なると思うが、ダンスというメディアを通して様々な考えや活動を提供し、その力を信じながらも、自身のメディアだけでは語り切れないと思う謙虚さ、そして越境した関係で当事者意識を共有しながら、自身も何かを享受できる関係を作っていこうとする切実さなのではないかと思う。お金や経済など、政治家や企業には提示し得ない生き方や価値観があるということを投げかけている存在がアーティストなのではないか。

経済的には無駄かもしれないが、そこだけでは語れない価値が保障される社会を作ることに加担していければと思っている。そのためにはアーティストだけ

では太刀打ちできない部分があるので他分野と組んでいく必要性は感じている。

N:無駄なものをどう読みかえていくかということ、別の面白さや文脈を提示することは重要だと思う。それは今あるシステムを変えることにもつながるのではないか？

J:過去の歴史から学ぶと、単純に既存のシステムを潰し、新しいシステムを作るという発想には希望を持っていないと感じている。それよりは、今までとは異なるシステムの見方を提示することが、今までのシステムに参画できなかった人々を拾っていくことになるのではないか。

– 地方自治体や地方の劇場からのサポートについて、要望したいことは？

J:当事者性を獲得する実行力と、無駄かもしれないことを必要と思いこめる想像力かもしれない。今やアートは、無駄だということやわけの分からないものへの差別を乗り越えて無視される存在になっていると感じるときがある。今回のプロジェクトでは違う文脈の人がどんどん巻き込まれるように仕掛けている。関わる人々が増えていくことで、当事者意識を高め、行政を始めとした他分野の人々が無視できない状況を作ることが今の自分の役割だと思っている。

(6) 出演者へのインタビュー

日時:2011年2月18日(金)18:10~18:30

場所:Studio dB

対象:福角宣弘、白井宏美(劇団ティクバ+循環プロジェクト出演者)

1. 自己紹介／事業に参加した経緯、動機

－ダンスを始めたきっかけは何か？

福角(以下、F):これまではバスケットボールやテニス、マラソンといったスポーツをやっていたが、ダンスはやったことがなかった。循環プロジェクトに参加する以前に、DANCE BOXの企画したダンスのワークショップに参加した。循環プロジェクトはDANCE BOXから声をかけてもらい、3年前のワークショップに参加したことが始まりだった。

白井(以下、S):姉がダンスをやっていて、自分もやってみたいと思い、循環プロジェクトとは別のダンスのワークショップに参加した。それ以前にもダンスや演劇をやったことはあったし、コンテンポラリーダンスに対する抵抗もなかった。

2. 事業の感想、ご自身の変化

－ダンスもスポーツも体を動かすことは共通しているが、それらに違いはあるか？

F:テニスやバスケットボールでは車椅子を離れて動くことはなかった。しかし、ダンスでは、床に下りるなど、今まで使わなかった筋肉を使って今までしたことなかった動きをすることができた。ダンスによって、自分ができることを新たに発見し、自分ができるとはもっとあるのではないかという可能性を感じた。

－(白井さんの父親に)白井さんがダンスを始めてどのように変わったか？

●〈白井さんの父〉今までは質問されても答えられないことが多かったが、こうしてインタビューにも自分の言葉で答えていることから、自分の意思を表現していくことが以前よりもできるようになったのではないか。

－循環プロジェクトに関わって、ご自身の障がいやダンスに対する印象は変わったか？

●〈白井さんの父〉自分の心の中から自然とでてくるものを体言しているのだと思うようになった。以前に比べると、日常での自己表現が増えて、本人の

成長にも繋がったように思う。

－健常者と共に活動を行うことによって意識することはあるか？

F:自分自身は障がいの有無に対する意識はほとんどないが、車椅子使用者であるからこそ健常者とのように共に活動できるのか考えることはある。考え方を換えれば車椅子使用者と健常者が共にできることはたくさんあるのではないか。

－ダンスをすることで、人から見られる立場となることをどう感じているか？

F:車椅子でダンスをすることで、「車椅子でこんなこともできるんだ」というような感嘆や「こんなことを車椅子使用者にさせて」といった非難など様々な声が挙がると思う。しかし、自分自身は様々な見方があり、どのように見るかは見た人が決めればいいと思っているのでどう見られてもかまわない。

S:舞台に出ることが好きなので見られることに緊張はない。

－障がい者自身は感じていなくても、障がい者に対する見方にどんな誤解があるのか？

F:見世物小屋のように障がいを見世物にしていた時代もあったが、今の障がい者は、自身の障がいを見せたいから見せていると思う。障がいを持っている人が多くの分野で活動を行っており、障がい者が自らの活動を積極的に見せていくことで様々な見方が提示できると思う。

－逆に健常者が不自由に感じることはないか？

F:健常者が不自由だと感じるとすれば、いろいろな考え方ができないことではないだろうか。障がいのある人はその障がいゆえにいろいろなことを考え、工夫をこらして生活しているが、健常者にはそれを考える機会がない。

3. 文化・芸術を活用した地域活性化について

－循環プロジェクトを福祉として捉えることについてどう思うか？

F:日本の福祉には障がい者を保護してあげるという風潮が強いが、障がい者は保護してもらっただけの存在ではなく、文化やスポーツに健常者と同様に関わっていけないというところを見てほしい。

– 行政やNPO、そして劇場やホールはこのような活動にどのように関わっていいのか。またどのように関わるべきなのか？

F:劇場にスロープを造ることもできるが、4人の力があれば車椅子を持ち上げることができる。そのような「人」によるサポート体制があればいいと思う。また、今は車椅子が使えるトイレが多くあるが、「誰でも」使えるトイレというものもあり、車椅子使用者が使おうとしても「誰かが」使っていることがある。どこまでが「誰でも」なのかを考える必要はあると思う。

(7) 市職員へのインタビュー

日時:2011年2月17日(木)15:00~16:00

場所:KIITO(神戸商工貿易センタービル26階2620号室)

対象:衣笠収(神戸市企画調整局デザイン都市推進室企画推進担当)

1. 事業の目的、内容

- 「デザイン」とは、人の持つ創造的な力を利用し、問題の本質を捉えて整理をして、人の感性に訴えかけて人を幸せにするような解決方法を導き出し、ある成果に結びつけるということだと考えている。デザイン力を発揮するためにはその前提として創造的な力がなければいけない。それらを育むには文化・芸術が重要である。
- 神戸市では、2004年12月4日に芸術・文化の振興とその力を活用した街の活性化を目指す「文化創生都市宣言」を市民のみなさんと行った。さらにその、街の創造力を具体的な成果に結びつけていくとするのが「デザイン都市」である。その活動拠点として「デザイン・クリエイティブセンター神戸」の整備を進めている。
- 2014年のオープン予定の「デザイン・クリエイティブセンター神戸」は、昭和初期に建てられた旧神戸生糸検査所を再活用している。建物は旧館と新館から構成されており、約16,000㎡の延べ床面積を持つ。
- センターの目指す役割として、創造的な活動を行うデザイナー、アーティストといったクリエイターが集まるだけでなく、彼らと市民や事業者がどう結びつくかを実践する場として機能することにある。その中で地域の課題解決や、新たな価値創造が生まれるのではないかと考えている。
- 施設構成については、1階は広い空間を利用した多目的ホール、2階はライブラリーやギャラリー、情報発信スペース、3階にはワークショップスペースなどを想定しているが、最終的には指定管理者が決定することとなっている。
- 改修工事前に無料で開放をした。その使われ方から見えてくるものがあると考えた。107団体いろいろな活用をした。使い勝手が悪いところは様々な課題が出てくるが、そのことが逆に創造力を活かした何らかのアプローチを生み出すきっかけとなっていた。
- 予算の関係で整備が困難なスペースがあるが、そ

れらも逆にこの施設の魅力になるのではと考えている。そのために、自由度の高い活用を可能にしたい。本当に新しい創造的な活動はこういう自由度の中から生まれてくるのかもしれないと感じている。

- そのことによって、ある目的や課題に向かうデザインのアプローチ(課題解決型アプローチ)と様々な視点を持つ実験的な取り組みであるアートのアプローチ(課題発見型アプローチ)が両立する施設となることができるのではないかと。
- デザイン的行為に関わることができるのはデザイナーだけではない。課題認識やアイデアを出すことなどそのプロセスには、誰にでも開かれて参加が可能であるべきだ。地域の課題を一番的確に認識できるのは生活者である市民である。それを具現化するためにデザイナーやアーティストが真摯に市民の声に耳を傾けていくことが重要だ。
- また、創られたものが実用化され、ビジネスとしての可能性が出てくると事業者も関わってくる。最終的にはそういった成果を生み出すことも目指している。

2. 事業の背景、経緯

- 神戸市が「デザイン都市」を標榜して取り組むことになったのは、阪神・淡路大震災がきっかけである。1995年に震災があり、それから10年間は復興を最重点に取り組んできたが、ちょうど10年目を迎える頃から「未来の神戸をどうしていくか」を考えていく必要性を感じるようになった。
- 震災が起こって多くの人々が文化・芸術に励まされた。なぜ震災から立ち直ることができたのかということ考えたときに、人の持つ感性と創造的な力の大きさを認識した。そして、それらは文化・芸術によって育まれるものであり、文化・芸術の重要性を再認識したことでもあった。
- 震災から10年を迎えて、市民から文化力を使ったまちづくりをしようという動きや、全国で文化に関する条例が作られた中で、神戸市では権利義務的

に条例として定めていくよりも主体的に自分たちが動いていく意思を示した「宣言」を作る方がいいのではという考えが市民の方々から出てきて、「文化創生都市宣言」が生まれた。

- 神戸は港町として栄えてきたので、神戸のまちなみや暮らしには、異国の文化や技術が入ってきやすい環境にあった。そしてそれを日本らしくデザインしていく中で神戸らしさが生まれた。まさに「デザイン」とともに神戸は発展してきたといえる。
- また、経済界からも震災復興から未来の神戸に向かってデザインという観点でまちを魅力的にしていこうという提言があった。創造都市戦略として「デザイン都市」を掲げることになった。それが、ユネスコの創造都市ネットワークの認定につながっていくこととなった。

3. 事業の実施体制

- デザイン都市の推進は、何もかも行政が主体となって進めていっては意味がない。行政の役割としては、クリエイティブな人と人が出会い、新たな価値創造を生み出すようなきっかけを作りだしていくことが最も重要だと思っている。その自律的な力を生み出すことが大切だ。そう言いながらもデザイン的な考えや行動を最も取り入れないといけないのは行政かもしれない。
- 行政の仕事は、どうしても失敗が許されないのになかなか実験的なことができない。なので、今度オープンするデザイン・クリエイティブセンターの運営も、ぜひ、クリエイティブなノウハウを持った指定管理者にお願いしたいと思っている。また、すべてその指定管理者が仕切ってしまうのではなく、いろいろな人が主役になる場としていくべきだと思っている。
- 行政の体制では、神戸芸術工科大学の学長を統括官に迎えて、神戸市役所内の全局の局長が加わった内部の体制を作っている。現在の行政的な考え方を脱却して、どの分野でもデザイン的な考えや行動を起こすことは可能であり、それがプラス

アルファの効果を生み出していくとの考えを広めていこうとしているが、正直大変だ。

- デザイン都市推進室の職員は10人。神戸芸工大の学長である統括官だけが民間人だが、民間の人材がいることは、行政とは違う感覚から意見を言ってくれるので、貴重である。旧神戸生系検査所を、改修工事を開始する前に無料で使用する機会を提供しようとなった。そこからデザイン・クリエイティブセンターの使われ方が見えてくるかもしれないという考えに基づくものであった。これも統括監からの提案だった。
 - 現在の取り組みとしては、将来的にセンターで活動を行いたいクリエイターをフレンドシップ登録という形で登録している。登録されているクリエイターの活動スペースとして、センターがオープンするまでの間、神戸商工貿易センタービル内に設けているクリエイティブスペース「KIITO」という場所を無償で使うことができるようにしている。
 - 登録者の約半数がデザイナーであり、次に多いのは美術系のアーティストで、全体の2割程度を占める。あと、建築系、パフォーミング系や大学関係者も登録していただいており、登録者数は、約270件、約6,600人となっている。登録者のうちどれだけの人が「KIITO」やセンターで実際に活動をしていただけたのか分からないところもあるが、できるだけ実際の活動を通して密な関係性を作っていきたい。その中で新しいアイデアが生まれてくるのではないかな。
 - 経済界との連携はもっと強化していきたいと思っている。今は神戸市と神戸商工会議所が連携しながら、中小企業向けにデザインによる商品開発支援や、デザイン経営の理解を広めるフォーラムなどを行っている。
- ー 衣笠さんご自身はどのような市職員としての経歴をお持ちなのか？
- 以前は文化交流課にいた。6年在籍したが、3年目から神戸ビエンナーレの担当となった。1回目はビエンナーレという名前そのものが知られていなかったため、単なるイベントとしか見られず、来

場者数のような数値ばかりで評価されるところがあり苦労した。

- 2回目も困難なことは多かったが、船に乗ってアート作品を鑑賞しながら、神戸の港、そしてまちを一望できる「海上アート展」を開催できたことで、ようやくまちの資源を活かした展開ができたかと思う。震災から神戸がここまで復活したというまちの姿を海から眺めていただけたのではないかと思っている。
- 神戸ビエンナーレで自分が感じたことや経験をどう活かしていけるかとは常々思っている。今の部署に移って、デザインの力でまちをどうしていくかという取り組みを進めているが、いいデザインをしていくには人やまちに豊かな感性と創造力があることが大前提である。そのためにもこれらの力を育む芸術・文化の存在は非常に重要である。礎となる芸術・文化の価値をきちんと認識した上で、成果、結果を残していくデザインを理解していくこと、つまり真の創造都市の姿に対する理解を広めていくことに力を注ぎたいと思っている。

4. 事業による成果や効果

- 「issue + design」という、社会課題を掘り起こし、その課題に提案していくというコンペティションを行った。社会課題をtwitterで集めることで課題を掘り起こしてみた。
- 最終的に「震災」、「食」、「自転車放置」の3つの課題が選ばれた。提案だけでとどまるだけでなく、それを実用化していくことが重要だ。そうでないと、いつまで経っても、社会課題解決とデザインの関係性が理解してもらえない。「issue + design」は、市民、民間、行政が関わりながら、ひとつの流れができた事例であると思う。
- NPO法人DANCE BOXに、旧生糸検査場の建物を使ったダンス事業を行うように依頼したことがあったが、同時に地域へのアウトリーチ活動も行ってもらった。
- アウトリーチでは、老人福祉施設を訪問した。介護

士の指導に反応しない痴呆症の老人が、ダンサーの身振り手振りに反応する姿や、車椅子使用者が立ち上がる姿が見られた。

- ダンスの持っている力がどれほどの効果を示すことができるのか、それをあらかじめわかった上でしたことではなく、実験的な試みであったが、介護士も認めるような一定の効果があった。その後、継続的指導ができるようダンサーから介護士に研修を行ったと聞き、面白い事例だと思った。
- これらはデザイナーやダンサーが市民や地域にアプローチした事例だが、もっと推進していけるような働きかけと環境をつくっていかねければと思っている。

5. 現在の課題、将来のビジョン 等

- 大きな課題として一般の人々にアートやデザインの価値を認識してもらう必要がある。
- 創造都市に関わった人々はその価値を理解することができるが、価値を示せる数値的実績や、評価基準がないこともあり、それ以外の人々はなかなか価値を共有することができないという課題を感じている。
- 人々が創造都市に対する価値観を持ち得るようになるためには、センターとある地域が結びついて生まれた成果を積み重ねていくことと、それを分かりやすく発信していくことが大切なのではないだろうか。また、その成果を生み出すまでのプロセスにできるだけ多くの人が実体験として体感できる機会があればさらにいい。価値認識を広げていくしかない。その広がりがさらなる新しい創造への可能性となると考えている。
- 今は、越後妻有をはじめとして、全国でアートイベントが行われている。越後妻有を訪れた際に、地元の人々がとても生き生きと作品の説明をして、作品を誇りに思っている姿を見た。人に生命力を与えることはなかなか数値化できないがとても大事なことでと思う。ビジネスにつながるだけが重要なのではない。そういった幅広い成果を求めていくこ

とが重要である。

- 社会課題があつて、それに対するデザインからのアプローチと、アートからのアプローチとは異なる部分がある。そこで対立する場合も多い。多様なアプローチを認めていく前提でいえば、対立することは、お互いの立ち位置の違いを明確に持っているということであり、決して悪いことではない。デザイン・クリエイティブセンターでは、どちらの立場も俯瞰して考えられる人が必要だと思っている。
- センターは広大な建物なので、ひとつの「まち」をつくるような感覚で取り組んでいくことが重要だと思っている。まちの中では何でも機能的に動いているのではなく、無駄や遊びといった部分がある。その共存こそが人間的であり、またそこでの化学反応が面白いものを生み出す。そこをうまく仕掛けていくような場となっていければいい。
- 公共施設としてどこまで実験的な試みができるのか、そこが大きな課題である。成果を生み出すか生み出さないか分からないことに対しては、なかなか取り組みにくい。しかし、確実に結果を出してくると予想できる「デザイン」だけを取り扱ってはいは、何も新しい創造的なことは生まれない。
- いったい、今の社会課題は何なのか。課題発見の鋭い視点に力を発揮するのはアートの力だと思うが、そこから解決に向けた具体的な仕組みや形を作っていくのはデザインの力だと思う。
- 社会にとって、双方が生きてくるにはデザインもアートも必要だと言語化していく人が必要である。共通して存在する根底にある豊かな感性と創造力が何よりも尊いものである。
- センターは、人の持っている豊かな感性と創造力で、人らしい幸せを実現できる場になっていければいいと思う。市民一人ひとりがいかに豊かな感性と創造力を持つかがということが大事である。それは、自分の幸せを自律的に考えていく市民が増えていくことになると思っている。自分の人生や地域を他人任せでなく自ら考え行動していく力となる。自分自身の課題は、都市の課題、世界の課題を考え解決していくことにつながっていく。
- まちとして継続的に成長、あるいは暮らす人たちが

が永続的に豊かさを実感していくためには、創造性を高めながら自律的に地域解決に向き合っていくことが重要である。目先の利益や便利さに流されてはいけな。盲点をできるだけ作らずいろいろな課題に目を向けることができる力を持ってこそ創造力だと思う。

5. いわき芸術文化交流館・アリオス

市民のモヤモヤを地域の文化的活力に

⑤ いわき芸術文化交流館アリオス

——市民のモヤモヤを地域の文化的活力に

事例の概要

◎市町村データ

市町村名	いわき市	都道府県	茨城県
人口 ¹	342,249人	面積(人口密度)	1,231.35km ² (277.9人/km ²)
歳入決算額 ²	123,443百万円	歳出決算額	114,368百万円
市町村概要	福島県の東南端、茨城県と境を接して広大な面積を有する自治体。東は太平洋に面しているため、寒暖の差が比較的少なく、温暖な気候に恵まれた地域である。地形は、西方の阿武隈高地(標高500～700メートル)から東方へゆるやかに低くなり、平坦地を形成し、夏井川や鮫川を中心とした河川が市域を貫流し、太平洋に注いでいる。		

1 総務省統計局「国勢調査報告」2010年 2 総務省自治財政局「市町村別決算状況調」2008年

◎主たる事業主体の概要

団体名	いわき市(いわき芸術文化交流館アリオス) ※本資料の中では「いわきアリオス」と記載		
設置年	2003年(劇場計画プロジェクトチーム設置)	連絡先	0246-22-8111
団体概要	施設の設計、建設、管理運営を民間の資金やノウハウを活用して実施するPFI事業によって施設整備を行い、施設の運営はPFI事業の枠から外して市が直営で行う「いわき方式」を採用している。特徴的なのは、音楽・演劇のプロデュース、広報やマーケティング、舞台技術といった専門スタッフを市の嘱託職員として採用し、その中に、地域との連携を強化するため、マーケティングとコミュニティサービスという専属組織を設けた点である。		

◎運営管理する文化施設の概要

施設名	いわき芸術文化交流館アリオス	運営母体	いわき市(市直営)
開館年	2008年	管理時間	8:30～22:30
延床面積	27,547m ²	休館日	第2火曜日
施設概要	大ホール:1,840席／中劇場:685席／小劇場:233席／音楽小ホール:200席／リハーサル室:2室／スタジオ:4室／練習室:6室／稽古場:4室／レストラン／ショップ／ギャラリー／他		
運営スタッフ数	43名(市職員9名、嘱託職員32名、臨時職員2名)		
URL	http://iwaki-alios.jp/index.html		
所在地	福島県いわき市平字三崎1番地の6		

◎事業の概要

事業名・主催者	事業の内容	
アリオス・プランツ！ 主催：いわきアリオス、事業によっては実行委員会形式、他団体との共催、市民団体による主催など	「アリオスから発芽する出来事」をテーマに、「アリオスやまちなかを使ってなにか面白いことや大切なことができないかなあ」という市民のモヤモヤしたアイデアの種を持ち寄って、話し合いながら「発芽」させていこうというプロジェクト。「かえっこバザール」の発案者でもある、美術家・藤浩志のナビゲートで、市民を交えた会議を重ね、様々な事業や活動がスタート。 - かえっこバザール(08年県内初の開催。いわきアリオスはかえっこの地域拠点に)、どんどこ！巨大紙相撲(勿来、四倉、小名浜、平の4地区で力士づくりワークショップを実施後、中劇場で千秋楽を開催)、アリロック(「Alios paper」公式カメラマンの平間至との共同企画のロックフェスティバル)、いわきぼうけん映画祭(アリオス・プランツ！の中から生まれた実行委員化によっていわき初の映画祭を開催)、その他、「三函座リバース・プロジェクト」、「インディアン・ヴィレッジ・キャンプ」、「アリオス・プランツ！フェスティバル」など、市民が主体となった多様な活動が生まれている。 - アリオス・プランツ！の一環として、アートによる震災復興を検討する市民参加の「アートおどろくいわき復興モヤモヤ会議」を6月以降4回開催。	
	事業開始年	開催時期
	2007年	通年
おでかけアリオス 主催：いわきアリオス	- 市域が広いいわきにおいて、施設が立地する平地区から離れた場所に暮らす市民にとって、いわきアリオスが「私には関係ない場所」にならないよう、出張型事業「おでかけアリオス」に力を入れている。施設型とコミュニティ型の2つのタイプがあり、年間40本程度を実施(7～8割は施設型)。 - 施設型：各地域の学校や病院、福祉施設など芸術活動を必要としているが、自分で見に来るのが難しい地域や市民の元へ出かけていき、演奏会やワークショップを行う。 - コミュニティ型：地域に出かけて行き、まちづくりと絡めながらまちの人々と協働で公民館等で演奏会などを行う活動。弦楽四重奏団が1週間に滞在し公開リハーサルを経てコンサートを開催したり、赤ちゃんから老人まで誰でも参加可能な無料コンサートや、食のイベントを併催したコンサート、限界集落ギリギリの農村の廃校を活用したコンサートなどを実施。 - 東日本大震災によって、建物や舞台設備が被害を受け、しばらく避難所として使われた後も10月末まで閉館状態が続いたが、6月にはおでかけアリオスをスタートさせ、学校を中心に、3月末まで70件以上実施。	
	事業開始年	開催時期
	2007年	通年

現地調査の要約

1. 事業の背景、経緯

いわきアリオスは、平市民会館に代わる文化施設として、2008年4月に一次オープンし、その後、二期工事の中劇場などを含め、09年5月にグランドオープンした大型の複合文化施設である。

いわき市は広大な面積を有するため、会館当初から、地域との連携を強く意識した運営を目指しており、施設の基本コンセプトのひとつに「まちとつながり、まちを感じる賑わいの空間であること」を、また運営理念のひとつに「舞台芸術を通じたまちづくりに献身的な努力を注ぐ場であること」を掲げている。

地域と連携した事業や運営を具体化するため、いわきアリオスでは、運営組織の中に、マーケティンググループ、コミュニティサービスグループという2つの専門チームを設置し、地域や市民と連携した多様な事業を展開している。

2. 地域と連携した事業の内容①：マーケティンググループの仕事

マーケティンググループの仕事は多岐にわたる。従来のマーケティングの発想にとらわれず、市民全員が顧客であるという考え方に基づいて、劇場を多チャンネル化することに力を入れているのが特徴だ。そのため、多様な「マーケティングイベント」を開催し、今までのソフトではアプローチできなかった人々を引きつけることに成功している。

施設の基本コンセプト・運営理念

- 施設の基本コンセプト：1. 気軽に集い、ふれあい、楽しめるコミュニティであること。2. 自分を磨き、新たな価値を生み出す創造的活動拠点であること。3. みずみずしい芸術文化に触れ、地域への誇りをともに育む場であること。4. **まちとつながり、まちを感じる賑わいの空間であること**。5. 地域における公共劇場の新しいスタンダードであること。
- 運営理念：1. 音楽、演劇等の舞台芸術に関するアートセンターである。2. 市民サービスの場である。3. 市民と舞台芸術との出会いの場である。4. 発信の場である。5. 創造の場である。6. **舞台芸術を通じたまちづくりに献身的な努力を注ぐ場である**。7. 舞台芸術の社会的な価値を拓く場である。8. 市民とともに歩む場である。

インタビューから

- いわき市の隅々まで行政サービスを行き届かせることは不可能な状況で、行政に頼るのではなく地域住民が助け合って地域を守っていかなければならない。アートとアリオスがそのお手伝いをするのが、いわき市にとってのアリオスの設置目的である。（支配人：大石氏）
- アートを追求することで生み出される価値と、それを利用して地域住民の生活に役立てるという集会所としての価値は両輪で進んでいかなければならない。（同上）

インタビューから

- 構えなくても来られる場所であることをアピールする取組を行っていった。市民がこの施設を一部の音楽愛好家、演劇愛好家のものだと捉えてほしくない一心で様々なことをやっている。（マーケティング・マネージャー：森氏）

◎アリオス・プランツ！

その中心は「アリオス・プランツ！（以下、プランツ！）」で、実に多彩な取り組みが行われている。これはアーティストの藤浩志さんのアイデアに基づいたもので、「何かやりたいけど、どうすれば分からない」といった市民のモヤモヤした考えを持ち寄って話し合い、その中から植物（plants、プランツ）が発芽するように、何か新しい活動が誕生する、ということを狙って名づけられたものである。

当初は、具体的な進展のない会合が続く中、参加者の中から、とにかく何かをやろうという声があがって実施されたのが「アリオス・プランツ！・フェスティバル」である。かえっこバザール、野外コンサート、ワークショップ、フリーマーケットや足湯まで、ノンジャンルのフェスティバルだった。

その他にも、2008年に県内で初めて開催し、いわきアリオスが地域拠点となった「かえっこバザール」、勿来、四倉、小名浜、平の4地区で力士づくりワークショップを実施後、中劇場で千秋楽を開催した「どんどこ！巨大紙相撲」、「Alios paper」公式カメラマンの平間至との共同企画で生まれたロックフェスティバル「アリロック」、廃れた芝居小屋を再生する「三函座リバース・プロジェクト」など、多様な活動、プロジェクトが誕生している。

◎市民が誇りを取り戻し、街の可能性を提示した「いわきぼうけん映画祭」

中でも、「いわきぼうけん映画祭」は、プランツ！の中から市民のアイデアが具体化した代表例である。現在、映画祭の実行委員長を務める増田さんがプランツ！に映画祭の企画書を持ち込んだのがそのきっかけだ。

当初、プランツ！の参加者で「映研部」を作って検討を始めたところ、メンバーの中でイメージや方針について意見が分かれ、最初のメンバーのほとんどが離れてしまう。最終的なゴールを映画祭に設定して実行委員会を立ち上げ、上映作品を公募制とすることで実現にめどが立つ。そしてプランツ！への参加から1年半後の2011年2月に、公募による自主制作映画37本と招待作品6本による映画祭をいわきアリオスの中劇場等で実現させた。



藤浩志さんデザインのアリオス・プランツ！のロゴ

- プランツ・フェスティバルによって、参加メンバーも来場者もアリオスは自由に使えるものだという感触を持てた。最初の混沌がいろいろなものを生んだと思っている。（マーケティング・マネージャー：森氏）

インタビューから

- 自分は映画祭という場を作り、人と人をつないでまちづくりをしたいということに気がついた。自分の身の回りの範囲で、何か面白い場所を作っておけば、人が集まってきてくれる。その場から新たな発信があって、新たなつながりが生まれる。そういうイメージを持ってから形ができあがってきた。（「いわきぼうけん映画祭」実行委員長：増田氏）
- 「いわきでこんなことができるんだ」「アリオスはこんなことができるんだ」という声が聞こえてきた。「俺たちにもできるんだ」ということに気がつけるような場が提供できたと思う。（同上）
- 『誰かがやるだろう』じゃなくて、『俺がやってやっべ』というのが、映画祭を立ち上げたときのテーマだった。（同上）
- アリオスに対して、最初は、土足で入ってはいけないうような

プランツ！から生まれた映画祭が実現できたことについて、増田さんは、いわき市民の中に、街に対する誇りや自分たちにもできる可能性を実感できるようになった、という。同時に、そうした活動のきっかけ、環境を用意したアリオスについて、まるでアドバイザーのような存在で、「アリオスができたことで、人生が変わるかもしれない」とさえ言う。

◎ アリオスの「分身」を生むプランツ！

プランツ！の取り組みと成果は、アリオスという公立文化施設の誘導によって、市民の中に多様な活動が生まれていったことを示している。その活動は、従来のように音楽や演劇などの市民の文化活動、文化団体の育成という枠組みに収まるものではなく、いわきという街にいか

に活力を生み出すか、といった地域の活性化を視野に入れたものとなっている。

いわきアリオスは、運営理念のひとつに「舞台芸術を通じたまちづくりに献身的な努力を注ぐ場である」ことを掲げている。プランツ！の成果は、「文化を通じてまちづくりに献身的な努力を注ぐ市民」の誕生と考えられるが、マーケティング・マネージャーの森さんは、アリオスのイズムに触れた「分身」と表現する。

◎ 事業広報、事業評価調査からの展開

いわきアリオスのマーケティンググループは、事業広報、票券、施設広報、事業評価・マーケティング調査の業務も担っている。広報ツールの中核を担っているのが「Alios Paper(通称:アリペ)」である。単なる広報誌ではなく、それ自体を一種のアートプロジェクト、アウトリーチ活動的なものとして展開している。

具体的には写真家の平間至さんの「写真で街を元気にする」という発想に基づき、いわき市内で活動を行う市民を撮影し、表紙に掲載する「LOVEいわきプロジェクト」を実施。応募者の中から選ばれ、表紙を飾った市民の中には、それをきっかけに、摂食障害から立ち直り、パン屋を始めた方もいる。

最近では、市民が「編集部員」として参加するようになっている。市民目線の広報媒体とするため、チラシにも

敷居の高さを感じていたが、プランツ！に関わったことで、職員や市民との垣根が取り払われた。(同上)

インタビューから

- いきなり独立してもらうのではなく徐々に離れていくような関係を作ることが大事だということを感じていた。自分たちですべてを行うのではなく、アリオスのイズムに触れた人が自分で動き始めるのがよい。(マーケティング・マネージャー: 森氏)
- マーケティングという言葉から「顧客創造」を意識していたが、それよりもアリオスの分身のような人たちを生むことだと考えが変わった。(同上)

インタビューから

- 自分の編集長目線のアプローチにギャップを感じた。市民の考えるプランの方が市民の視点で作られた広報媒体となっており、彼らの身の丈にあった形だった。市民のアイデアを紙面の中に取り入れると紙面が活気づくということが確信に変わってきている。(マーケティング・チーフ: 長野氏)
- アリオスの広報では、携わる市民が本当に言いたかったことを引き出す産婆のような役割を果たしたいと考えている。(同上)

市民のアイデアを取り入れるようになっている。

さらに、事業評価・マーケティング調査の一環として実施しているグループインタビュー調査も、市民との連携を強化、発展させるプロジェクトとして機能している。

つまり、マーケティンググループの活動は、販売促進や顧客開発ではなく、市民との新しい関係をいかに作り、育てていくか、というマーケティング本来の意味に即して行われており、それが、いわきアリオスと地域や市民との連携を生み出す大きな原動力となっている。

3. 地域と連携した事業の内容②:コミュニティサービスグループの仕事

一方、いわきは市域が広いことから、施設の立地する平地区から離れた場所に暮らす市民にとって、いわきアリオスが「私には関係のない場所」にならないよう、出張型事業「おでかけアリオス(略称:おでアリ)」に力を入れている。いわゆるアウトリーチ事業に近いもので、「施設型」と「コミュニティ型」の2つに分け、音楽、演劇、詩、落語など多様な分野の事業を実施している。

◎ 施設型「おでかけアリオス」

施設型のおでアリでは、各地域の学校や病院、福祉施設など、芸術活動を必要としているが、いわきアリオスまで見に来るのが難しい地域や市民の元へ出かけていき、演奏会やワークショップを行っている。

◎ コミュニティ型「おでかけアリオス」

一方、コミュニティ型のおでアリでは、施設が何かを一方的に届けるのではなく、地域住民と一緒に考え、作っていく点が大きな特徴となっている。

例えば、川前という北部の山間地では、紆余曲折の末、地元のお寺の住職を紹介され、お寺を会場として実施することとなった。そこから、近所の手芸教室の方が作ったつるし雛をお寺に飾るように呼びかけてくれたり、川前で採れた小豆を使ったお饅頭を作って観客に配ってくれたり、近所の方が切ってくれた竹で竹灯籠を飾ったりと、近隣を巻き込んだユニークなコンサートが実現した。

コミュニティ型おでアリによって、いわば法事のような地域の人が集まれる場を作ることが実現している。

インタビューから

- 市域が広いので、アリオスに来られない人が圧倒的多数である。コンサートに来てくださと呼びかけるだけでは、市民が共有できるものがなくなってしまう。少しでもこちらから外に出かけていって芸術と市民がつながる場を創らなくてはいけない。(コミュニティサービスグループ:矢吹氏)

◎ 2010年度までのおでかけアリオスの実績

	事業数	実施回数	対象者数
2007年度	2	9	927
2008年度	9	26	2,271
2009年度	11	34	2,195
2010年度	14	39	2,458

インタビューから

- 若い人からお年寄りまでみんなが集まって、やりたいことを出し合って実行に移していく過程には感心させられた。こちらが完成させたコンサートを持っていくのではなく、まちの人が考えて、そのまちのいいところを紹介できるような企画を考えて実行してもらっている。(コミュニティサービス・チーフ:前田氏)
- 小さい集落にとってはとにかく集まることが大事だということが実感できた。一人でいると誰ともしやべらずに閉じこもってしまうけれど、誰かに会えばしゃべるし、その人が元気か

コミュニティ型おでアリの延長線上で、市民が主体的に事業を継続しようという動きも出ている。パーカッションの渡辺亮さんのプログラムでは、3年間の継続事業が終了した後に、子どもからお年よりまで30人弱が集まり、実行委員会を作って新しいグループ作りに動き始めているという。

◎ 高校演劇クリニック

おでかけアリオスの一環として、2009年度から市内の高校の演劇部員を対象にした演劇クリニックも実施している。2010年度は、演出家の阿部初美さんが、複数回にわたって福島県立桜ヶ丘高等学校を訪問し、演劇部員の指導を行った。

いわき市は、高校演劇が活発な地域で、この数十年間、市内の学校が県のコンクールでの上位入賞が続いている。そうした背景もあって、市内の高校演劇関係者が、自発的にアリオスのワークショップに参加する下地はできていたという。

阿部さんが構成・演出を手がけた「アトミック・サバイバー ワーニャの子どもたち」はいわきアリオスの主催で公演された。この作品は原子力発電をテーマにしたもので、原発の立地する地域の人々に取材をして製作されたものである。

高校生を対象にした演劇ワークショップを実施することについて、阿部さんは社会と演劇の関係、ワークショップの意味について、興味深い指摘をしている(右欄、インタビューからの抜粋を参照)。

演劇部顧問の小林先生からは、演劇づくりのプロセスが自分自身を深く見つめる機会になっていること、コミュニケーション能力や表現力はクラス経営の上でも意味があること、決して生徒を否定しない指導が参考になったことなど、高校生にとって演劇ワークショップは大きな意味あるというコメントが寄せられた。

いわきアリオスの開館が、高校演劇の活動を深化させるきっかけになったと言える。

確かめられる。「おでかけアリオス」は音楽を聴いてもらうことが目的ではあるが、実は法事のような集まる機会を作っているのかもしれない。そのことを受け止められるアーティストと一緒にいくことで、持っていくものの質をきちんと保つ。それはアリオスの責任だと思っている。(同上)

インタビューから

- 演出家として自立していこうと考えていくときに見えてきたのが、(日本には)社会と演劇との「地続き感」がないこと。ドキュメンタリーとして現実を作品化するのには、非常にデリケートな問題にも直面するが、ワークショップにも同じことが言える。演劇の世界を超えた部分に踏み込むわけだから。(演出家:阿部氏)
- (ある学校で問題行動の多い男の子を対象にワークショップをした経験から)母子家庭の育ちで、暴力的な振る舞いやいじめが多く、先生も「ひとつもいいところがない」と手を焼いていたが、他者からの愛情を欲していること、自分を見てほしいという思いがよく分かった。(同上)
- 実は、そういう経験を持つ人が俳優にも多い。そもそも俳優という職業は、大勢の人の前で演技を続けるという特殊な仕事であり、それは「自分を見てほしい」と訴え続けることでもある。(同上)
- 「この子はダメだ、ひとつもいいところがない、みんなが嫌い」という子に対して、「みんなが見ていない部分に、実はこんなに魅力があるんだ」ということを分かってもらいたい。(同上)
- 演劇づくりのプロセスは、高校生にとって自分自身を深く見つめる機会になっており、普段の生活にない貴重な時間だと思う。(磐城桜が丘高校演劇部顧問:小林氏)
- 決して生徒を否定されない指導を見ていて、そこが反省させられたところでもあり、非常に勉強になったところでもある。(同上)
- 私自身が、演劇部の指導者としてしっかり取り組みたいと思うようになった要因は、アリオスの開館が大きい。アリオスの職員は、自分にとって外の世界を見せてくれる窓のひとつ。(同上)

◎ おでかけアリオス研究会

おでかけアリオスの延長線上で、いわきアリオスは、市内在住もしくは市内出身のアーティストとともにアウトリーチプログラムを作るという試みを始めた。オーディションで4組のアーティストを選出し、アウトリーチの座学や体験を基にプログラムをイメージしてもらい、実際にアウトリーチを行う学校の様子や先生の話からプログラムを組み立て、さらに討議や意見交換によってブラッシュアップして本番を迎えるという半年間の事業である。

2010年度は本番が一度しかなかったため、次年度も同じアーティストと共に対象を広げ、回数を増やししながら可能性を広げていく計画である。

公立文化施設にとって、アウトリーチのできるアーティストを地域で育て、その地域を拠点に活動できる環境を整えることは、大きな課題となっている。いわきアリオスでは、研究会という形式でそのことに着手し、将来的にはいわきアリオスがあることで、いわきに帰って活動したアーティストを増やすことまでも視野に入れている。

アーティストが地域に住んで活動することになれば、子どもたちにも夢を与えることにつながる、という指摘は、地域にアーティストが存在することの波及効果の大きさを物語っている。

4. 事業による成果や効果

◎市民主体の活動の誕生と広がり

いわきアリオス自身が地域の活性化に向けた事業を行うのではなく、プランツ！というプラットフォームを用意することで、市民の主体的な活動が生まれている。地域の中から、文化・芸術をとおした活性化に取り組もうという人材を発掘し、彼らがやりたいことをいわきアリオスがサポートすることで、文化施設が単体で取り組む場合より、裾野が広く、新たな連鎖と発展を内包した仕組みができつつある点は注目できる。

そのことは、マーケティング・マネージャー森さんの「アリオスの分身」という言葉に集約されているが、おでアリでも、市民が主体となって事業を継続しようという動きが誕生している点は共通した効果であろう。

インタビューから

- このプログラムには、アーティストとしていわきのまちの中で生きていってもらうという面もある。彼らは生計のほとんどをレッスンによって得ており、演奏家として生業を立てていく経験はどんどん減ってきている。(コミュニティサービス・チーフ:前田氏)
- アリオスがあるからいわきに帰ってきてもいいなというアーティストが増えるといいと思う。「アリオスがあるから帰ってもいいと思えたそうだ」という声を聞くとアリオスのすごさを実感する。(同上)
- 自分のまちで育ったアーティストが、子どもたちや地元の人の前で演奏する威力は今までとは大きく異なっていた。子どもたちが具体的に自分の未来とつながられる憧れの存在となっており、保護者も自分の子どもの姿を重ね合わせていた。(同上)
- 音大を卒業して間もないあるピアニストが、普段は先生をしているが、おでかけアリオス研究会をきっかけにソロサイタルをアリオスで開くことになったというエピソードもある。(コミュニティサービスグループ:矢吹氏)

インタビューから

- (インディアンビレッジの活動について)かえっこにはまった彼らは、県内すべてのかえっこに出向き、かえっこを支え、しまいにはNPO法人化した。それだけでなく、自分たちで企画した自動車学校での子どもむけのイベントでは、かえっこのアイデアを活かして独自の企画を行った。(マーケティング・マネージャー:森氏)
- アリオスがハブ的な機能を持ち、ここでの取り組みがいろいろなところに伝播し、応用されて新たなものを生み出すきっかけとなることが求められているのではないか。(同上)

◎地域の誇りの再認識

プランツ！の取り組みによって、いわき市民の中に、地域に対する誇りを再認識したり、あるいはこの街で自分たちにも何かできる可能性があるということを実感できるようになったりした、という点も、大きな効果だといえる。

◎地域における交流の場の創出

コミュニティ型おでかけアリオスの場合、アリオスが地域に持ち込んだ文化的アクティビティが媒介となって、地域内で新たな交流の場が生まれている点も、地域活性化に向けた効果のひとつである。

◎震災復興への取り組み

この調査を実施したのは2011年2月末だが、その直後に東日本大震災が発生し、いわきアリオスも甚大な被害を受けた。震災直後に施設は避難所となり、施設の復旧工事を経て、11月1日に全館が再オープンするまでの間に、おでアリ、プランツ！はともに震災復興に向けた活動を展開した。

まず、6月初旬から、学校や福祉施設を対象におでアリオスを精力的に実施した。その数は、26事業、75回に達しているが、これまでおでアリオスを実施したアーティストの参加も多く、事業の蓄積が活かされた格好だ。

そして、6月末にはいわき産業創造館「ラトブ」を会場に、「アートおどろくいわき復興モヤモヤ会議」が開催された。プランツ！の一環として開催されたこの会議では、ゲストのトークを交えながら、ワールド・カフェ方式で参加者が小さなテーブルに分かれ、いくつかのテーマに基づいた自由な意見交換が行われた。

12月中旬まで、都合4回のモヤモヤ会議が開催され、最後には様々なアイデアが誕生したが、この会議を支えたのは、プランツ！で中心的な役割を担ったコアメンバーと呼ばれる市民である。

こうした活動は、いわきアリオスが、開館直後から地域に積極的に出向き、市民とのネットワークを築いてきたからこそ実現した活動であり、それが大震災という予期せぬ地域の課題に対しても有効に機能したと言える。

インタビューから

- 自分の目に付く範囲の人たちの反応は「いわきでこんなことができるんだ」「アリオスはこんなことができるんだ」という声が聞こえてきた。おこがましいかもしれないが、「俺たちにもできるんだ」ということに気がつけるような場が提供できたと思う。（「いわきぼうけん映画祭」実行委員長：増田氏）

第4回モヤモヤ会議のチラシ



アートおどろく
いわき復興モヤモヤ会議

やりたい！やっています！企画会議

アリオス・プランツ！は、アイデアの思い（モヤモヤ）を共有し、そこから立ち上げるアイデアを実際にやってみることで、まちや人に活動を連鎖させていこうとする会議です。震災後に始めた「モヤモヤ会議」もいよいよ最終回。「これからやってみたいこと」「やっている活動をもっと広げたい／深めたい」ことなどを、経験豊富なコメンテーターと共に集まって話し合い、新しい活動へのスタート地点としたいと思います。未来に対するモヤモヤした思いを共有し、この土地で少しでも明るい未来を築くためのアイデアを探しましょう。

●日時
2011年
12月17日（土）
開場 17:30 | 開会 18:00
(21:00 終了予定)

●会場
いわき芸術文化交流館アリオス
2F カンティーン

●出演
ゲストトーク
吉田拓也
(NPO法人インディアン・ヴィレッジ・キャンプ理事長)
レギュラーコメンテーター
藤浩志 吉本光宏
(実業家) (ニッセイ基礎研究所 主席研究員
芸術文化プロジェクト部長)

●対象・定員
高校生以上～（定員 50 名）

●参加費
無料（要申込み）
アリオスチケットセンターにて受付中！

内容 / 当日プログラム

- 前日までの会議の振り返り
- ゲストトーク
吉田拓也
(NPO法人 インディアン・ヴィレッジ・キャンプ 理事長)
「私がインディアン村をはじめた理由」
- 「○○○をやりたい！／○○○をやっています！」
テーマ発表：何かを始めたい人、既に活動している人が活動の趣を発表します。
- ディスカッションタイム
「○○○をやりたい！／○○○をやっています！」
企画会議：小グループに分かれて、具体的なアイデアを語り合い、プランを練ります。
- ディスカッション内容の発表
- ゲスト / コメンテーターによるコメント
- 交流タイム

「Alios plants！」とは？
美術館・博物館の運営により、公立文化施設の可能性を広げる仕組みとして始まった、市民による企画会議。アリオス開館の2008年に始まり「アリオス・パークフェス」「かえっこバザール」「いわきぼうけん映画祭」「おどろくエッセ」などの企画を生んでいます。

USTREAM 中継決定！！
モヤモヤ会議の様子は、USTREAM でも中継します。会場に来られない方ぜひご観覧ください！
いわきサンシャイン TV
<http://www.sunshine-tv.net/live>

<お問合せ・ご予約>
アリオスチケットセンター：
10:00～20:00
お電話にてお申込みください。
0246-22-5800
おかけ間違いにご注意ください。
この催しは、阿佐田サイトからの発信で行っていただきます。予めご了承ください。

主催：いわき芸術文化交流館アリオス
協力：いわきサンシャインTV、NPO法人インディアン・ヴィレッジ・キャンプ、(株)ニッセイ基礎研究所
PG art and environment、藤浩志企画制作室

Alios
いわき芸術文化交流館

5. 事業の実施体制

いわきアリオスの組織体制については、「アリオス・プランツ！」を担当するマーケティンググループが4名、「おでかけアリオス」を担当するコミュニティサービスグループが2名で、おでアリについては、音楽、演劇等のプロデューサーがサポートする形となっている。

しかし既に述べてきたとおり、両事業とも、地域の市民やNPOと連携した実施体制となっており、そのことが、地域を活性化する大きな要因となっている。

6. 現在の課題、将来のビジョン

マーケティンググループ、コミュニティサービスグループとも、インタビュー調査の中で、現在の課題や将来の展望について明確に認識している点が印象的だった。

まず、プランツ！については「協働連携」のしきみをさらに発展させることが次の展望となっている。具体的にはいわきアリオスがすべてを行うのではなく、街を元気にしたいという意識を持って実際に行動してくれる市民と協働で地域の活性化を進めよう、ということである。

おでアリについては、市域が広すぎるためにプログラムが一過性のものになっていること、おでアリの実施が一部の学校にとどまっていること、が課題となっているが、限られた人員や予算の中で、それを解決するのは容易ではない。

この点について、コミュニティサービス・チーフの前田さんは、「アリオスもいわきのことを考えるグループのひとつでありたい」と発言し、行政の担当部署や保護者のグループなどとの関係性ができたら、と述べているが、これは、公立文化施設が地域の活性化に取り組む際の重要なポイントだと考えられる。

インタビューから

- 「協働連携」ということで、いろいろなところとのパートナーシップをどれくらい仕掛けられるかという方向に向かわなければと思っている。Alios paperの編集部員のように、われわれが全部やるのではなく、たくさんの人がここのミッションに共感して、いいまちにしようという意識を持って動いてくれれば、これだけ大きな施設をわざわざ建てた意味があったのではないか。(マーケティング・マネージャー:森氏)
- アリオスがすべての学校に平等に何かを提供できるアプローチはないかと模索している。地域に関しては、一度関係を持った人々と今後どのようにつきあっていくか考えていかなければならないと思っている。(コミュニティサービスグループ:矢吹氏)
- 一度行くと次にいつ行けるか分からないぐらい広い市域に対して機会が少ない。プログラムが一過性のものになってしまっているので、長期的に関わる企画も立ててみたいが、そこに注力すると他の活動がおろそかになるというジレンマ。(コミュニティサービス・チーフ:前田氏)
- アリオスだけでは何もできないということを痛感している。子どもたちの未来を考えると、役所のさまざまなセクションや保護者などアリオス以外にも考えている人々はいる。彼らがいかにアリオスを利用してくれるかという関係性ができたらいい。アリオスもいわきのことを考えるグループのひとつでありたい。子どもの障害でも役所では精神障害、身体障害、発達障害は異なる部署が担当している。しかし、子どもたちは隣り合って学んでいる。みんな同じ子どもたちだという視点で考えるようになっていけたらと思う。(同上)

7. 文化・芸術を活用した地域活性化について

公立文化施設が地域の活性化に取り組む場合、1980年代から90年代頃は、文化イベントなどによって集客を図り、地域に賑わいを創出する、というアプローチが主流だったと考えられる。

その後、90年代の後半からアウトリーチの考え方や活動が普及し、学校や福祉施設にアーティストが出向き、ワークショップやミニ・コンサートなどを実施することで、地域の教育や福祉にも、公立文化施設は大きな役割を果たせることが明らかになってきた。

いわきアリオスでも、おでかけアリオスによって学校や福祉施設の事業を活性化する取り組みを行っているが、アリオス・プランツ！は、これまでの文化施設にはない、地域、市民へのアプローチと言えよう。それは、文化施設が文化や芸術を「提供する」という立場から、一緒に考え、悩み、文字どおり「協働」で地域の活性化を視野に入れた事業を展開しているためである。

つまり、文化・芸術を通して地域を活性化するパートナーを生み出し、劇場やホール施設では対象になりにくい芸術、アートを取り込みながら、地域における新しい活力を創出しようとしている点が、従来の文化施設にはない取り組みと言える。

インタビューから

- 東京では画一化されているところがあるが、いわきは会う人会う人面白い。そんな面白いまちの人々が、自分たちのまちをつままない、何もないと口癖のように言っている。(マーケティング・マネージャー:森氏)
- 自分たちの面白さを自覚して動くことはなかなか難しい。このまちの人たちが面白いということを外の人間からの視点から言ってあげて、アリオスと組んでその個性を活かす方向で何かやるだけでいわきのまちは十分面白くなる。(同上)
- アートというソフトとアリオスという公立文化施設であるハードをキーワードにして、人と人が助け合うというかつてのムラ社会が担っていた仕組みをどう再構築するかというためにアリオスを整備した、と捉えている。(支配人:大石氏)
- 社会環境が劇的に変化する中でそのニーズがなくなれば存在理由はなくなってしまう。普遍的価値を保ったまま、時代の社会環境に対応する新たな価値を構築していかなければ地方都市に必要な施設にはなりえない。(同上)
- そのためにハード面では劇場やホールだけでなく公園も含めた交流空間を整備し、ソフト面では施設広報という概念も含め、市民参加の視座をもつマーケティンググループを作った。アリオスを通じて新たな価値を生み出す実験を行っていることが他の公共劇場とは異なる展開なのではないか。(同上)
- 日頃の暮らしで平等に抱えている社会的課題に役に立つかもしれない、と思えるいわき市民が育っていけば、そのとき初めて追いかけていた先進モデルに近づいたといえるのかもしれない。(同上)

(1) 支配人へのインタビュー

日時:2011年2月27日(日)10:00~11:00

場所:いわき芸術文化交流館アリオス

対象:大石時雄(支配人)

1. 自己紹介

- 私がいわき市と関わり始めたのは2003年4月である。世田谷パブリックシアターを退任して2002年に岐阜県可児市に移り、2002年7月にオープンした可児市文化創造センターの企画制作課長となった。
- 2003年4月に、世田谷パブリックシアターの劇場監督であった劇作家・演出家の佐藤信さんから、いわき市が整備する公共文化施設の建設計画に関わるので手伝ってほしいと言われた。その後すぐに、いわき市の担当者と会い、正式に手伝うことになった。
- 当時の私は、大阪と東京という日本の二大都市で演劇や劇場に関わった後に、岐阜の山奥にある可児市に移り住んだところだった。そして、こんなところに演劇や劇場が必要なのかという疑問を持ち始めていた。大阪で活動していたときは、大阪や京都に面白い舞台を作るアマチュア劇団がたくさんあったので、それを劇場にどう取り込んでいくか考えていくだけで事業が展開できた。
- 東京では、演出家や劇作家、優秀な技術スタッフや俳優やタレント、マスコミも観客もいるという中で演劇と劇場に関わっていた。しかし、可児市にはアマチュア劇団もなければ、俳優や演出家もいなければ、演劇を見る観客もいない。今までの自分の価値観が揺るがされていた。そんなときにいわき市の新しい文化交流施設の建設計画に関わるようになった。
- 駆け込み寺があった時代に、駆け込み寺が果たしていた、人と人をつなげていく「講」や「結」を生み出す場をどう作るのかということはずっと考えてきた。それがいわき芸術文化交流館アリオス(以下、アリオス)をどうしていくかというビジョンにつながっていると思っている。

2. 事業の背景、経緯

- アリオスの設置者であるいわき市が、アートというソフトとアリオスという公立文化施設であるハード(文化施設)を活用して、人と人が助け合うという、かつてのムラ社会が担っていた仕組みをどう再構築するか、

という目的のためにアリオスを整備したと捉えている。

- いわき市の面積は広大で、中山間地域では高齢化が進む一方、高齢者を支えることのできる若者の数は相当減っている。また、市の財政が悪化し職員が減らされていく中で、いわき市の隅々まで行政サービスを行き届かせることは不可能であると誰もが分かっている。
- そのような状況で、行政に頼るのではなく地域住民が助け合って地域を守っていかなければならない。アートとアリオスがそのお手伝いをできないかということを実験することが、いわき市にとってのアリオスの設置目的であり、アリオスのミッションであると考えている。
- いわき市と関わり始めた2003年当時は、少子高齢化が進んで人口が減少すると言われ始めていた頃で、地域社会と文化施設、音楽や演劇がどんな影響を受けるのだろうかと考えて、人口減少がもたらす問題をイメージしようと試みた。従来の家族モデルが崩壊する中で、自己責任でどうにかしろというのは国として無責任だと思った。
- その中で自分にできる社会貢献は何かと考えたときに、今まで携わってきた演劇の力を問題解決に活かすことができると思った。そこで生まれたのが「市民とつくるシェイクスピア」の企画である。演劇に集まってきた人間が、同じ目的に向かって2ヶ月間稽古をする中で、人と人とのつながりが生まれ、互いに助け合う姿がみられた。
- 演劇というものが持っている本来の力はなんだと考えたときに、人と人をつなげる、コミュニティを構築することなのだとということを実感した。

3. 事業の実施体制

- アリオスでは、企画制作課と広報グループ、舞台技術スタッフと施設サービスグループの専門スタッフが、市民と関わりながら事業を構築している。

－ 職員について

- 市役所から10名、市と一年ごとに契約している嘱託

職員が34名である。運営母体として、直営か、財団による指定管理者か、市が出資する民間会社による指定管理者かという3つのパターンが提案された。佐藤信さんはお金がフレキシブルに使える財団がいいのではと言ったが、最終的に直営がいいと進言した。

- 世田谷、可児と続いて、財団の運営を経験したが、そこでぶつかってしまった問題があった。財団の運営では、館長をトップとする専門家のヒエラルキーと、財源や人事権、予算執行権という重要な部分を担っている行政のヒエラルキーの2つができてしまい、ひとつの組織としてはなかなかうまくいかなかったことだ。
- この問題を解決するにはヒエラルキーを一本化するしかないと考えていた。アリオスでは我々専門家が市の組織に入り込めばそれが可能だと考えた。
- 市直営の方がうまくいくということを立証してみたかった。館長を市の職員から出してもらい、現場の統括責任者として支配人の私が館長の下に入り、その下に市役所と専門家の混合チームが連なるような組織体制となった。

4. 事業による成果や効果

- 他の公立文化施設と異なる点について、例えばシェイクスピアの企画は、一見公立の文化施設が市民参加型の創造事業をやっているようにも見える。しかし、著名な演出家が芸術監督として君臨している公共劇場の創作事業とは目的が違う。
- 公共劇場は、日本の演劇を牽引する優れた舞台を作ることを目的としているが、アリオスではそんなことは目指していない。優れた演出家を招いて大きな作品を作ることは、いわき市の人口や財政の規模を考えたらありえない。むしろ福祉分野へのアプローチとしての創造事業を行っていると理解している。
- アリオスはパフォーミングアーツセンターとして舞台芸術を担うというアイデンティティを背負っているので、音楽や演劇やダンスは外せない。公立文化施設であり、パフォーミングアーツセンターとしての普遍的

価値と役割を保つために、企画制作課や広報チーム、舞台技術スタッフといった専門スタッフを配置している。

- しかし、社会環境が劇的に変化の中でそのニーズがなくなれば存在理由はなくなってしまふ。普遍的価値を保ったまま、時代の社会環境に対応する新たな価値を構築していかなければ地方都市に必要な文化施設にはなりえない。
- そのために、ハード面では劇場やホールだけでなく公園も含めた交流空間を整備し、ソフト面では施設広報という概念も含め、市民参加の視座をもつ広報チームを作った。アリオスを通じて新たな価値を生み出す実験を行っていることが他の公共劇場とは異なる展開なのではないか。

5. 文化・芸術を活用した地域活性化について

- 公共劇場として、先進国のモデルを理想として追いかけているのが悪いとは言わないが、先進国のモデルをそのまま導入しても、日本とは国民的価値観や歴史が全く違うので支えてくれる市民がいない。
- 一度、自分自身が信じて追いかけてきた理想に懐疑的になる必要があるのではないだろうか。みんなが向かう方向と別な方向から少しずつアプローチしていくことで、私を育ててくれた劇場と演劇に対するささやかな恩返しができるかなと思っている。
- 芸術が、日頃の暮らしで平等に抱えている社会的課題に役に立つかもしれない、と思えるいわき市民が育っていけば、そのとき初めて、追いかけていた先進モデルに近づいたといえるのかもしれない。
- 劇場やホールに来て作品を楽しむ観客も、公園で時間を過ごしてアリオスのお手洗いをを使うだけの地域住民も、アリオスにとってはどちらもお客様だと思っている。私がアリオスを運営していく責任の一端を担っている限り、この信念は絶対に変えられない。この信念にいわき市やアリオスのスタッフが同意できないならば、私を解雇して自分たちの望むアリオスを創っていけばいいと思っている。
- 人口減少時代に突入した21世紀を前提に、新しい

公立文化施設はどうあるべきか、そのイメージと理念を、全国の地方に在る文化施設と共有できればと思っている。

- しかし、私が追求しているモデルだけではアートそのものが劣化していってしまう。それではアートやアーティストを他の分野に活用することもままならない。アーティストやアートの質を担保するために、芸術監督がいて創造集団があるような、アートを追求していくようなホールや劇場の存在は必要である。
- アートを追求することで生み出される価値と、それを利用して地域住民の生活に役立てるという価値は両輪で進んでいかなければならない。

(2) マーケティンググループへのインタビュー

日時:2011年2月27日(日)11:00~13:00

場所:いわき芸術文化交流館アリオス

対象:森隆一郎、長野隆人、佐藤仁宣、村上千尋(マーケティンググループ)

1. 自己紹介

佐藤(以下、「S」):いわきの出身で、市内で10年間コンビニエンスストアを経営していたが、いわき芸術文化交流館アリオス(以下、アリオス)ができるということで職員に応募した。学生時代に吹奏楽をやっていたことや落語研究会に在籍していたことで、アリオスのような文化施設の事業に関心があった。現在は宣伝営業とチケット販売業務を担当している。平地区には官公庁や各種団体の本部が多いので、そちらや企業との連絡の窓口となっている。

長野(以下、「N」):学生時代からクラシック業界の情報誌の編集をしていた。レコード雑誌やクラシック音楽情報のフリーマガジンの編集部にも6年ほどいた。そこでは全国のホール関係者や音楽事務所、オーケストラの広報担当とやりとりし、いろいろなタイプの広報手法を観察することができた。その後、フリーマガジンの会社を退職した際にアリオスのことを聞き、マーケティングの経験はないが、広報なら今までの経験を活かせるのではないかとということでこちらに来た。現在はマーケティング・チーフであり、主に広報業務を担当している。取材依頼などマスコミとのやりとり、館内の公演やイベント時の取材陣の仕切り、「Alios paper」の編集の統括も行っている。

Alios paperは市民とのコミュニケーションペーパーということを大きなコンセプトに掲げている。アリオスができる前の文化施設である平市民会館には主催公演がなかったため、初めはアリオスで上演される公演の魅力を伝える側面が強かった。しかし、オープンから3年が経った今は、公演の魅力を伝えるのも市民の方が担うようにし、市民の手による市民のアリオスのためのサポートを行っている。

また、マスコミに対しては、アリオスが地域のためにメリットのある事業を行っていることが、きちんと紙面に反映されるように心がけて接している。

森(以下、「M」):もともと教師になりたいと思っていたが、卒業後1年間は高校の講師との掛け持ちで江東区文化センターという施設の非常勤もしていた。文化センターで働いているうちに、文化の仕事が面白くなっ

てきて、教師はもっと社会経験を積んでからでもなれるのではないかと思い、文化の仕事に携わることにした。当時、アートマネジメントという言葉はなく、社会教育主事として生涯学習講座の企画運営をメインの仕事としていた。その後、ホール事業の担当になり、ティアラことうの開館後に異動して、10年弱、そちらに勤務した。アリオスに来たきっかけは、アリオスのマーケティンググループの話を聞いたことである。ティアラことうでは制作の統括を行っており、マーケティングは専門ではなかった。しかし、ティアラことうを本拠地とする東京シティフィルと東京シティバレエ団の方々と一緒に、地域とどう関わっていくかということの主眼に置いて、交流会やアウトリーチなどを行い、劇場の敷居を下げることに注力した活動を行っていた。マーケティングにもいろいろあるが、新しい劇場を市民に開くような仕事であれば、これまでの経験を活かせると思い、いわきに来ることにした。

現在はマーケティング・マネージャーという立場。マーケティングといっても意味が広いので、ひとつ軸を据えたとしたら、劇場がただあるのではなくこちらから市民やまちに向かって手を伸ばして関係性を作っていくのがいいだろうと思った。また、ここは巨大な施設であるため、利用者が施設に対して萎縮してしまうように思えたので、好きに使えて気構えなくも来られる場所であることをアピールする取り組みを行っていた。ハイクルチャー的なものを、ただ素晴らしいものだからと提供しているだけでは、施設は一部の市民にしか開かれない。それよりも、ハイクルチャー的なものに興味のない人たちにこそ、「あなたと関係があるのだ」、ということ伝えるために様々な活動を行っている。

村上(以下、「C」):施設広報を担当している。アリオスに来るまでは、ずっと出身地の熊本にいた。劇場の仕事に携わりたいと思っていたが、地元では仕事なかった。そのとき、熊本県立劇場でやっていたアートマネジメント養成講座を受講した。他の受講者と一緒に、地元の公演情報を集めてフリーペーパーにして配布するという活動を始めた。アリオスに来た当初は、広報経験がなく基礎知識も少なかったため、経験豊富なスタッフにサポートしてもらっていた。現

在はアリオスからのダイレクトメールの配信、メールマガジンの発行や、施設パンフレットなどの印刷物を担当している。また、週1回いわきのコミュニティFMのラジオ番組「Alios Style」の企画制作とパーソナリティを務めている。

2. 事業の目的・内容

M: マーケティングとは顧客開発のことだが、われわれの顧客は市民全員である。きちんと関係ができていないところにはこちらからアプローチしていかなければならない。この3年間はとにかく劇場を多チャンネル化することに力を入れてきた。

N: 票券担当がマーケティンググループにあったことで、主催事業を企画する企画制作課に対して、事業広報と票券という2つの立場で様々な事業を提案することができる。市民やチケットセンターの声を集約するのはマーケティンググループであるし、票券担当がいろいろな方と接して施設や企画を客観的に見ることのできる立場にあることは販促プログラムを開発するうえでも大きいと思う。

S: 票券業務をやっていると企画制作課、施設サービス課、総務経理課といった他課と関わる。必然的に施設や企画の全体を見ることができたのはよかったと思っている。

M: 最初の頃は、「マーケティンググループがあるのになんでチケットが売れないのか」とよく言われた。そこで「関係性」といっても全然通じなかった。

N: 観客からのアンケートには、「広報と宣伝、営業ができてないからチケットが売れないんだろう、日本最初のマーケティンググループは何をやっているんだ」と書かれたこともあった。

M: それはマーケティングという言葉が誤解しているからだ。チケットを売るためだけにマーケティングがあるわけではない。

◎マーケティングイベント

M: このグループでイベントも企画している。「アリロック」のような、制作チームが網羅できないところを補完する役目も担っている。

N: 公共ホール主催のロックフェスはかなり珍しいのではないかと。「アリロック」の1回目はいわき市と福島県出身の有名アーティストが出演し、地元のFM局のパーソナリティがMCに入るなど、地元とイベントをよい形でコーディネートすることができ、「地元LOVE」な、よいロックフェスティバルになった。

M: アリロックのきっかけとなったのはアリオスの展示スペースの企画だった。アリオスには展示スペースがあり、その展示の企画もマーケティンググループが担当している。アリロックのきっかけとなったのは、その展示スペースの企画だった。そこで、Alios paperの表紙写真を撮っている、いわき出身の写真家、平間至さんの自己紹介を兼ねた展示を行った。その中かのサブイベントとしてロックフェスをやろうかということになった。

大々的に行うつもりはなかったが、今までやったことのない試みとして、市職員の方々の後押しもあり、かなり大きなイベントになった。また、KOSUGE1-16の「どんどこ！巨大紙相撲」も開催したときも、芸術は分からないけど相撲は分かるという人が来てくれた。意外な部分をやることで、普通の劇場ソフトではアプローチできなかった人々が来てくれた。市民がこの施設を一部の音楽愛好家、演劇愛好家のものだととらえてほしくない一心で、様々なことをやっている。これらのイベントや「かえっこ」や「アリオス・プランツ！」などのほか、挙げきれないくらいたくさんさんのイベントを「マーケティングイベント」というくくりで行っている。

S: 自分たちで企画するだけでなく、もともとあったイベントにアリオスが参画することも多い。

M: われわれよりも、市役所の担当者である津田一浩さんに、この施設はまちなかと連携しなくてはいけないという強い思いがあった。アリオスに来たばかりの頃に、館内で「演劇ポスター展」を開催した。そのときに、津田さんから図書館や生涯学習プラザなどのまちなかの施設で展示し、まちを巡れるようにしてほしいと言われた。今のいわき市は、まちとしての機能が失われつつあるというぎりぎりの状況の中で、行政はまちなかの活性化のためにこの施設に懸けている。市の思いは館内でコンサートや演劇をやっているだけでは届かない。アリオスにはアウトリーチなどを行うコ

コミュニティサービスチームがあるが、こちらのミッションはアリオスのある市の中心部から離れたところにプログラムを提供することにあり、まちなかに対するアプローチは対象ではない。その中で「まちなか連携プロジェクト」という事業が生まれてきた。

N: まちなか連携プロジェクトのひとつとして、「いわき街なかコンサート」で、いわき出身の音楽写真家、堀田正矩さんの写真展示を行った。いわき街なかコンサートは、今年で8回目を迎える、市街地のいたるところでアマチュアバンドが演奏するというイベントである。その会場や地元商店街の協力を得て、市内の店舗40箇所、そしてアリオス館内で、堀田さんが撮られた様々なジャンルの演奏家の写真を分散展示した。

S: アリオスには人が集まるというイメージを地元の人々が持っているので、地元の飲食店組合で利用できるチケットをアリオスで取り扱うことで販売促進の手伝いをしている。また、実行委員会にマーケティンググループの誰かが入るなど、地元とつながってられるようなスタンスで活動している。

M: 対象とする年齢層にも気を配っている。企画制作課が立てた開館初期のプログラムには小さな子どもや保護者に対するアプローチがなかった。子どもや若い世代に支持してもらえなければ、施設は将来的に尻すばみになってしまう。そこで導入したのが美術家の藤浩志さんの「かえっこバザール」であった。劇場が実施する子ども向けのソフトといえばリトミックなどが定番かもしれないが、これも意外なところからのアプローチを試みた。

C: かえっこは年に2回開催している。初回に来てかえっこにはまり、今では近隣で開催されているかえっこにまで出向いて、他の地域の情報を流してくれる方もいる。運営は実行委員会形式で、主婦や子ども好きな方がボランティアで関わってくれている。劇場で芝居を見て感動して泣く人はいるけれども、劇場で欲しかったおもちゃが手に入らなくて泣く光景が見られることはなかなかない。劇場が会場となっているのは珍しいし、そのような場を提供できていることに意義を感じている。

N: 2008年8月に第1回かえっこバザールを開催したが、それは福島県で初めてのかえっこだった。その後も

毎回500人～1000人規模の人が訪れ、藤さんからも「メガかえっこ」といわれるような成果を上げた。かえっこを開催すると、県内各地の行政の方やイベントを手がけている方が視察に来るようになり、その後、秋のように天気の良い季節には、毎週末どこかで必ずかえっこが開かれるほどの「かえっこブーム」が到来し、今も続いている。そのようなソフトを紹介できたことはよかったと思っている。

M: 残ったおもちゃの管理をわれわれが行い、個人でかえっこを行いたい方におもちゃを貸したり、ノウハウを教えたりしている。いまやアリオスがかえっこの地域拠点となっている。

◎マーケティングリサーチ

M: イベント以外のマーケティングとしては、アンケートをとったり、グループインタビューを行ったりして傾向を探っている。それを施設利用や企画にフィードバックしている。これはマーケティングをする上で当然のことだが、最近面白くなってきたのは、インタビュー自体がプロジェクト化していることである。

今年度は、まちづくりに携わる若い世代とわれわれの関係性を探るということで話を聞いているが、気付くと「まちの未来をみんなで語る会」のようになっている。その会話からは、アリオスがまちの未来を考えるための拠点として機能していくことへの期待を感じることができる。インタビューを通じて何か新しいことが立ち上がる。それはだんだん純粋な芸術からは離れていってしまうかもしれないが、アートセンターの面白さのひとつは、様々な課題に対して「アート視点」からアプローチすることで、どんな問題とでも対峙することが可能になってしまうことではないだろうか。

◎アリオス・ブランツ！

M: 劇場というのは、まず好きな演目があって、予定が合って、チケットを手に入れるという行為が必要である。このハードルをクリアしないと劇場が楽しめないのはおかしいと思っていて、他の楽しみ方が提案できないかと考えて、ロビー空間と施設の前庭のように整備された公園、そしてまちなかに着目した。そこで藤さんに相談したところ、「アリオス・ブランツ！（以下、

プランツ！)」という会議のプランをいただいた。

プランツ！とはまずはみんなで会議を行い、種を持ち寄る。種の話が面白かったら集まった人が賛同する。そうすると芽が出る。芽が出たらそれを育ててみんなで植物にしていこうというもの。

オープン初年度は、2ヶ月に1回、藤さんに来てもらい会議を開いた。会議場所はロビー横のサロンにし、クローズドではなく誰でも入ってこられる状態を作った。半年くらいは毎回新しい人が来て自己紹介だけで終わっていた。参加者もこれは何なのだろうと思っていたと思う。

初めの頃は、自分がやりたいことではなく、前にこんなことをやっていたのでここでもやったらいいのではという、館に対する提案ばかりだった。その中でもしぶとく来てくれる人たちがいたことや、地元で比較的クリエイティブなことをしている人に声をかけて参加してもらうようにしたことで、だんだんオリジナルのアイデアを出してくれるようになり、少しずつやりたいことが形になり始めてきた。

そのうち参加者から、とにかく何かをやろうという声が上がリ、やりたいことを詰め込んだ、ノンジャンルフェスティバルをやることにした。それが「アリオス・プランツ！フェスティバル」だった。かえっこバザール、野外コンサートやワークショップ、フリーマーケットのようなものや足湯まで、プランツ！参加者がやりたいと考えていたことは可能な限り実施した。ゲリラで演奏していった人もいた。プランツフェスティバルによって、参加メンバーも来場者もアリオスは自由に使えるものだという感触を持てた。

このとき、「インディアン・ヴィレッジ・キャンプ」というグループが市街地で子どもと一緒にごみ拾いワークショップを行った。以前、彼らは東京ビッグサイトで開かれていたショーにブースを借りて、いわきにいる若手アーティストを紹介するという活動を行っていた。彼らのネットワークにアーティストが多いこともあり、こちらからプランツ！に来てもらうようにアプローチしたが、逆にプランツ！でかえっこに出会ったことが彼らの活動のブレイクスルーとなった。

かえっこにはまった彼らは、県内すべてのかえっこに出向き、かえっこを支え、しまいにはNPO法人化した。

それだけでなく、自分たちで企画した、市内の自動車学校で開催した子ども向けのイベントでは、かえっこのアイデアを活かして独自の企画を行った。ワークショップがたくさんあり、参加することでポイントがもらえる点はかえっこと同じだが、カエルポイントではなく「子ども普通免許証」が発行されるという仕組みを取り入れたものだった。さらに大人向けのプログラムも組み込み、親子で勉強できる場を作った。警察や消防による交通安全プログラムのようなものはたいいてい堅いので、親子で楽しめる彼らの企画は大好評だった。

最初の混沌がいろいろなものを生んだと思っている。フェスティバルの後、市内のお店や作家が出店した市が「アリオス・パークフェス」として独立したり、主婦の方による医療問題のシンポジウムを企画したり、映画好きの方が映画祭を開催したりという動きが起こった。さらに、映画祭に参加してくれた人々が使われていない映画館を再生させようとしたり、かえっこにはまった主婦の方と共にアリオスと子どもの関係性を考える「こどもプロジェクト」というプロジェクトを立ち上げたり、様々な方向に派生していった。

◎アリオスペーパー

N: Alios paperそのものが、ある意味アートプロジェクトである。いわきで新しい広報紙を作るときに、森さんの知人であった写真家の平間至さんに、何か出来ないかと相談させてもらった。平間さんからは写真でまちを元気にしたいと言われた。そこで、いわきで何かしらの活動をされている方を、その人のお気に入りの場所で撮影しAlios paperの表紙に掲載することで、Alios paperを通していわきの魅力をいわきの人々に発見してもらうことを試みた。この「LOVEいわきプロジェクト」では、今まで15組の市民の方に登場してもらった。

C: 最新号の表紙は平澤有子さんという30代の女性である。彼女は9年前に無理なダイエットで拒食症になってしまった。2年ほど前におばあさんの介護のために郡山からいわきに移ってきたが、依然摂食障害が続いており、そのストレスで仕事をやめてしまった。ほどなくおばあさんも亡くなって一人で家にこもってい

ることが多かったが、拒食症をきっかけに始めたパン作りは続けていた。

それまで、表紙モデルに応募してくる人々はグループや小さな子どもなど、幸せな様子を写してほしい人ばかりだったが、平澤さんの書類から「私はここにいます」という、叫びのようなものを感じた。これは無視できないと思い、長野と2人で会いにいった。平澤さんは、Alios paperをきっかけに自分のパンをたくさんの方に食べてもらい、少しでも自分の世界を広げたいとおっしゃっていた。Alios paperをきっかけに元気になってほしいという平間さんの思いや企画の趣旨からも、平澤さんをモデルとして選んだ。

その後、平澤さんはいわきで営業許可をとり、他のお店で販売してもらえるように一人で交渉に行くなど動いている。Alios paperがひとつのきっかけとして使われるようになったということにプロジェクトをやった意義を感じた。

3. 事業による成果や効果

M: プランツに関して言えば、当初は1年で終わるつもりだったが、人が集まって動きができてきたので、サポートしていかなければと思った。何も制約を受けずに自由に集まった人々が活動が続けるときに、ある程度のところまで併走する人がいないとグループが分解してしまうところは、生涯学習の現場で数多く見てきたので、いきなり独立してもらうのではなく徐々に離れていくような関係を作ることが大事だということを感じていた。

この広い市域、35万の市民に対して、われわれはすべてに関わることはできない。自分たちですべてを行うのではなく、アリオスのイズムに触れた人が自分で動き始めるのがよい。そのために、芽が出ると思った人ときちんと付き合い、われわれの仲間になってもらっている。初めはマーケティングという言葉から、「顧客創造」を意識していたが、それよりもアリオスの分身のような人たちを生むことだと考えが変わった。また、今は一律の価値観を大勢に伝える時代ではなくなっている。劇場が一律の価値観を伝えるだけ

の存在であってはいけない。アリオスは施設が大きく、ある種「マス」な存在であるからこそ、あえて「一対一」の関係をつくっていかなければいけないと思う。

S: 自分が経営していたコンビニエンスストアでは、1日平均500人～600人の顧客のうちの200人～300人は常連客である。自分では「小商人根性」と言っているが、その人たちの顔をきちんと見て、顔や好みを覚えて商売することが染み付いている。今はチケットを販売しているが、アリオスは公共の施設で規模も大きいので相手は大人数になる。

しかし、大人数を相手にすることは、自然と対応の均一化が必要とされ、部署内では各人が同じ対応レベルとなる必要があるとされる場合もある。その中でも、マーケティンググループは横並びではなく個々の得意分野で動くことができています。私は一人ひとりを見てしまうので、なかなか全体を見ることができないが、最近はホスピタリティという概念が公共施設でも導入されているように一人ひとりを見る方向性もあると思っている。いわきのような田舎にある劇場にはそれが合っているのではないかと。施設運営も当初よりもやわらかい雰囲気になってきたと思っている。

N: 前はクラシック業界のマニアを相手にした限られた言語の世界にいたが、そのことに嫌気がさしてしまった。そして35万人の市民を対象とする新たなアートセンターの広報をつかさどる人間としてアリオスにきた。Alios paperは13万9000部で、12万6000部程度を新聞に折り込んでいる。マスメディアではあるが、一人ひとりにアリオスのミッションを届ける、紙の上での「おかけアリオス」という認識を持っている。

前の仕事では、編集長の個性を重視するような、編集方針を立ててそれに沿う記事や写真を載せるという手法をとっていたので、Alios paperも当初は同様の方針で作成していた。しかし、「いわきでつくるシェイクスピア」という、市民参加型の演劇プログラムを実施する過程で、市民の広報アイデアを聞き、自分の編集長目線のアプローチにギャップを感じた。彼らの考えるプランの方が彼らの視点で作られた広報媒体となっており、彼らの身の丈にあった形として浸透していくのだった。現在のAlios paperの編集には市民に関わってもらっている。彼らのアイデアを紙面の

中に取り入れると紙面が活気づくということが確信に変わってきている。

また、公演チラシを作成する際にも、総合案内担当やチケットセンターの受付担当など、観客に対応する市民スタッフにも意見をもらって公演チラシを作成している。その方が、メッセージが明確になり観客へのピン트가合う。前の仕事も今もクオリティを保つことは変わらないが、アリオスの広報では、携わる市民が本当に言いたかったことを引き出す産婆のような役割を果たしたいと考えている。

C:プランツ！はみんなのモヤモヤの種を持ち寄って話そうということで始まったが、全くイメージが湧かず、本当に続くのだろうか、どのような結果になるのだろうかと思っていた。しかし、モヤモヤというのが、私が地元でいたときの、何かやりたいけどきっかけもないし、どこにアプローチしていいかわからない気持ちと重なるものだという事に気付いた。「何でも来ていい」という場を自分以外に求めている人がいるとは思っていなかったが、プランツ！が始まって、自分と同じ気持ちの人が思った以上に多いことを知った。自分は半分主催者、半分参加者のような気持ちで関わっていた。

フェスティバルのときも、混沌としているが、プランツ！の中でぶつくさ言っていたものをどさくさにまぎれて実現しているように感じた。一人では面白いと信じきれなかったものもみんなで作るからできた。そこで小さな自信を持った人々が、プランツ！や映画祭など様々な形で今もアリオスとつながっているという実感はある。

プログラムが形になっていくのを見ているうちに、今までの自分の関わりのなかに、業務の一環としての姿勢が少なからずあった気がした。主催者とボランティアという関係ではなく、同じ目線で物事に取り組んでいきたいという気持ちが生まれてきた。携わってくれた人々と顔を合わせる機会を増やし、いろいろ仕掛けていくことで、今まで関わってくれていた人々の持っている、やりたいことの種をもっと育みたい。

例えば、かえっこやこどもプロジェクトを「子育て」という言葉でくくってしまうと、子どもがいる人だけに関係があるように聞こえるが、本当は高校生や子どもがい

ない方だけでなく、とにかく人と関わる場を求めている人にも関わってもらえることができる。キーワードはなんでもいいが役割のある場所を求めている人がいる。その人たちが必要とされていることを感じるができる場になっていけばいいと思っている。

4. 現在の課題、将来のビジョン 等

M:「協働連携」ということで、いろいろなところとのパートナーシップをどれくらい仕掛けられるかという方向に向かわなければと思っている。Alios paperの編集部員のように、われわれが全部やるのではなく、たくさんの人がこのミッションに共感して、いいまちにしようという意識を持って動いてくれれば、これだけ大きな施設をわざわざ建てた意味があったのではないかな。

アリオスがハブ的な機能を持ち、ここでの取り組みがいろいろなところに伝播し、応用されて新たなものを生み出すきっかけとなることが求められているのではないかな。

ー アリオスのような取り組みをする際に、行政や仕組みとして何が必要かな？

M:マネジメントの基本である「権限の委譲」は必要だと思う。ある責任をユニットに任せることが組織体としてできないと組織として存続し得ない。私は課長補佐だが、課長補佐と課長に信頼関係があり、課長からある程度任されればその範囲での仕事はできる。また、2人の間での報告・連絡・相談(ホウレンソウ)をしっかりしておくことも基本だが大切なことである。

私はアサヒ・アートフェスティバルの立ち上げに関わっており、そこでの全国の様々な人々とのつながりが今の自分に活かされている。行政だからといって行政の中だけで完結せず、今NPOが何をやっていて、そこに携わる人々がどういった考えを持ち、どういった人とつながって、どういったソフトを行っているのか研究していけば必要なものは自ずと見えてくるのではないかな。

アリオスには、専門性が高いが総務的なことには疎い人材が多いのだが、それらをサポートするチーム

がいる。市役所直営ならではの業務は、彼らが担当してくれて、逆に中身に関しては専門チームに任せてくれる。

5. 文化・芸術を活用した地域活性化について

N: 東京では画一化されているところがあるが、いわきは会う人会う人がことごとく個性的で面白い。そんな面白いまちの人々が、自分たちのまちをつまらない、何もないと口癖のように言っている。

自分たちの面白さを自覚して動くことはなかなか難しい。このまちの人たちが面白いということを外の人間からの視点から言ってあげて、アリオスと組んでその個性を活かす方向で何かやるだけで、いわきのまちはもっと面白くなるはずだ。

それは外部から招聘されたスタッフが多かったからこそ出来たことなのかもしれないし、外部からこれだけの人が来た意義なのではないか。

(3) コミュニティサービスグループへのインタビュー

日時:2011年2月27日(日)9:00~10:00

場所:いわき芸術文化交流館アリオス

対象:前田優子、矢吹修一(コミュニティサービスグループ)

1. 自己紹介

前田(以下、「M」):大学卒業後、新潟県佐渡の「鼓童」という太鼓のグループに所属し、10年間国内公演の制作を担当していた。2004年から東京に移り、フリーで制作をしながらワールドミュージックの企画制作、招聘を行っている事務所に所属した。

2006年の秋からいわき芸術文化交流館アリオス(以下、アリオス)の準備のためのミーティングに参加し、2007年7月にいわきに来了。いわきに移ってから、3年間は以前の仕事も続けていたため、現在も非常勤だが、アリオスの仕事に専念したいということで、この1年はアリオスの仕事にシフトしている。現在はコミュニティサービスを担当しており、アウトリーチを中心として活動している。他にはワールドミュージックなどクラシック以外の音楽企画も行っている。

矢吹(以下、「Y」):いわき市出身で、中高は吹奏楽をやっており、楽器とつながる仕事がしたいと思っていた。高校3年のときにいわき市に新しいホールができるという話を市内の楽器店の方から聞き、市の職員と市民のホール建設に関する会合も傍聴していた。そのことがきっかけで、将来いわき市で何か携わってあげたいと思い、大学もアートマネジメントを学べるところに行こうと考えた。

2002年に昭和音楽大学のアートマネジメントコースに入学した。卒業後の2006年にシアターサポートというホールの運営管理をしている会社に入社し、品川インターシティホールの運営を行っていた。そこで10ヶ月働き、その後アリオスの職員となることが決まり、トリトンアーツネットワークで研修させてもらい、2007年4月からアリオスで働いている。現在は、前田と同様にコミュニティサービス担当でアウトリーチ活動を行っている。

2. 事業の目的・内容

M:いわきは45年前に14の市町村が合併してできており、2003年までは全国で一番大きな市だった。そのため市域がとても広い。アリオスのある平地区は市の中

心部だが、そこで何かやっても享受できない人がいる。そこでアウトリーチ活動に力を入れようということになった。

内容は大きく2つある。ひとつは学校や病院、福祉施設など、芸術活動を必要としているけれども、自分で見に来ることが難しい人々のところへこちらから出かけて行き、コンサートを行うという施設型の活動。もうひとつは、地域に出かけていき、まちづくりと絡めながらまちの人々と協力してコンサートを行うコミュニティ型と呼ばれる活動。年間40本弱を行っているが、8割は施設型である。

コミュニティ型といっても様々なやり方がある。今年度始めたのは、赤ちゃんからお年寄りまで誰でも来ることのできる無料のコンサートを、市内の公民館などで開催するというものである。他には、こちらからアーティストを連れて行き、まちの人と一緒に企画するというものも行っている。アリオスが開館した時から「おでかけアリオス」に関わっているアーティストは3組いるが、そのうちの「ヴィルトス・クワルテット」という弦楽四重奏のグループには、まちなかに1週間弱滞在してもらい、公民館などでの公開リハーサルを経て、コンサートを行った。今年度は勿来という地区で、お寺と市で建てた「吹風殿」という体験型施設がコンサート会場となった。勿来の「勿来ひと・まち未来会議」というまちづくりの団体に相談したところ、駅前の活性化の団体や、吹風殿を管理している団体などを紹介してもらえた。それぞれのキャラクターや役割を考えて自分たちで動いてくださった。

Y:基本的に、アリオスはコンサートに向けて動き、それ以外の企画をまちの人たちに考えてもらった。今回は食のイベントもやりたいということで流しそうめんも実施した。吹風殿から海までが長い坂になっており、ギネスに挑戦しようということで盛り上がった。結局は挑戦できなかったが、竹でできた屋根つきの流しそうめんの台を地元の大工さんが作ってくれ、100メートルほどの長さになった。

M:オープン2年目の2009年には、小川地区の中でも限界集落と呼ばれる戸渡地区にある小さな農村の廃校でコンサートを行った。そこでは、廃校を利用した宿泊客の受け入れなどを行う「とわだりターンプロジ

ェクト」という活動をしている団体が、地元の野菜を振舞いながらまちのことを紹介し、コンサートを盛り上げてくれた。2回目に実施した勿来地区は市街地のまちづくり団体が連携相手だったので戸渡とは全く違うプランになるだろうとは思っていたが、その違いには驚いた。また、若い人からお年寄りまでみんなが集まって、やりたいことを出し合って実行に移していく過程には感心させられた。こちらが完成させたコンサートを持っていくのではなく、まちの人が考えて、そのまちのいいところを紹介できるような企画を考えて実行してもらっている。

ー アリオスが出かけていってそこに小さなアリオスが一時的にできているところが他のアウトリーチ活動と違うように感じた。

M: 以前、NUUさんというシンガーソングライターと共に田人という南部の山間地区を訪れた。地域の方がアーティストにまちのいいところを知ってもらうために様々な提案をしてくれただけでなく、田人以外から来る観客に向けての提案もしてくださった。NUUさんも3泊4日で田人地区に泊まり、小学生と一緒に特産のこんにゃくを作ったり、一緒に歌を歌ったりした。アーティストがまちに溶け込むことで、まちへの愛情が芽生える。そのことで、まちの人もなじみの薄い音楽やパフォーマンスでも受け入れることができているように見えた。いわきの人と溶け込むにはこういうやり方が合っているなと思った。

◎おでかけアリオス研究会

M: 「おでかけアリオス研究会」は今年度始まった、市内に住んでいる、または市内出身のアーティストと共にアウトリーチプログラムを作るという試みである。オーディションで4組のアーティストを選出し、アウトリーチの座学や体験を基にプログラムをイメージしてもらい、実際にアウトリーチを行う学校の様子や先生の話からプログラムを組み立て、さらに討議や意見交換によってブラッシュアップして本番を迎えるという半年間の事業だった。本番が一度しかなかったため、次年度も同じアーティストと共に対象を広げ、回数を増やす中で可能性を広げていくつもりである。自分のまちで育ったアーティストが、子どもたちや地

元の人の前で演奏する威力は今までとは大きく異なっていた。子どもたちが具体的に自分の未来とつながられる憧れの存在となっており、保護者も自分の子どもの姿を重ね合わせていた。また、このプログラムには、いわきにいるアーティストに、アーティストとしてまちの中で生きていってもらおうという面もある。彼らは生計のほとんどをレッスンによって得ており、演奏家として生業を立てていく経験はどんどん減ってきている。学校に向けてのプログラムを作ってもらったときに、アーティストが授業のように自らのことを先生と呼んでいた。おでかけアリオスは授業をやりたいわけでも、先生を連れて行きたいわけでもなく、アーティストを連れて行きたいのだと伝えたときに、予想外の抵抗があった。そのときに、普段の彼らが「先生」として生きていることを改めて実感した。彼らにはアーティストとして存在するという感覚が遠いものになっている。その中で、プログラムを経験することによって、彼らの生き方にも少しでも影響を与えることができればと思っている。アリオスがあるからいわきに帰ってきてもいいなというアーティストが増えるといいと思う。

Y: 音大を卒業して間もないあるピアニストが、普段は先生をしているが、おでかけアリオス研究会をきっかけにソロリサイタルをアリオスで開くことになったというエピソードもある。

M: 「アリオスがあるから帰ってもいいと思えたそうだ」という声を聞くとアリオスのすごさを実感する。

〈アリオスのマーケティング・グループの森さんのコメント〉: アリオスの、「おでかけしてコミュニティに入っていく」スピリットを持った人々が地元において、個々に活動を始めたら、アリオスだけではできなかったことができるのではないかな。おでかけ研究会はそこに一役買っていると思う。

3. 事業の背景、経緯

Y: 市域が広いので、アリオスができたからといってアリオスに来られない人が圧倒的多数である。そのような状態で、アリオスでコンサートをやるので来てくださと呼びかけているだけでは、アリオスに対して市民

が共有できるものが何もなくなってしまう。少しでもこちらから外に出かけていって芸術と市民がつながる場を作らなくてはいけないのではないか。

アリオスがオープンしたのは2008年の4月だが、2007年の秋からNUUさんとともに地域に出かける活動を始めていた。アリオスが知られていないので、まずは新しいホールができることを知ってもらうところからスタートしていった。学校は何をやるのか見えてこないもので不安がっていたが、とりあえず何かやってみましょうというところまではこぎつけることができた。今は評判が広がって、来てほしいという要望の方が多く、すべての学校に応えられていないところもある。

M: 最初の半年はアリオスというホールを知ってもらう広報活動の意味合いもあった。ホールができる前に「おんかつ」(財団法人地域創造の「公共ホール音楽活性化事業」の通称名)で小野明子さんに来ていただいたときは、病院での入院患者さんのためのコンサートや、市内から離れている学校への訪問、弦楽器を習っている子どもたちのワークショップなど、アリオスがこれからどのような形で市民と関わっていくかというポイントになるものをやらせていただいた。また、NUUさんのプログラムでは地域に深く入っていくことを試みたり、子育てや検診に関わる施設が入っている保健センターでは乳幼児を対象にしたコンサートを開催したり、今のアリオスで関わっている対象には初めの半年間で出会えたのではないかなと思っている。

小野さんのコンサートでは、病院内のホールで一般の入院患者を対象にしたコンサートと小児病棟の患者を対象にしたコンサートを行った。市役所や病院の上層部はいいことだからやろうと押してくれるが、患者さんや家族に触れる現場ではいろいろな問題がある。現場の人たちに分かってもらうために、ミーティングには看護師長さんに参加していただき、何が問題でどうすれば実現できるか一つひとつ解決していった。

Y: 初めて病院に行ってコンサートをしたときに、マスコミの方にも来ていただいていたが、こちらの対応や手法もまだ確立していなかった時期だったので、カメラマンがどんどん前に行ってしまう、子どもが泣いてし

まったことがあった。現場では予想できないことが起こることを実感した。今はスタッフもだいぶ慣れてきて、マスコミの方ともいい関係を築けているので、現場ではスムーズに動けるようになった。

M: 「ヴィルトス・クワルテット」とは、介護老人ホームが併設されている別の病院に行った。緩和ケア病棟で演奏したが、患者さんは呼吸器をつけていてストレッチャーでしか移動できない、感情が平坦になりつつあるなどの重い病状の方が多かった。最後に演奏した「浜辺の歌」を声の出ない方が鼻歌で歌っていたり、なかなかしゃべらなくなっていた方が感想を言うてくれたりした。病院に音楽があったらいいということはみんななんとなく思っているが、現実化しようとするれば何らかの問題が起きる。それをどのように乗り越えていくのかということが重要なのではないかな。

もちろん聴いてくれる方がどのように感じるかが大事だが、受け入れてくれるスタッフがどう理解して、やったことをどのように受け止めてくれるか、プロセスと一緒に作っていくことが重要である。アリオスと自分たちは関係ないと言われたり、「おでかけアリオス」ではなく「おしかけアリオス」だろうと言われたりしたこともあった。しかし終わってみると、「よかった」とか「喜んだ顔をたくさん見ることができうれしかった」という受け入れ側のスタッフの声が聞けた。終わるまではつらいけれど、そのような声があるからやめられない。

山間部のある地区で、一般の方を対象としたおでかけアリオスを行おうと思い、支所の方に相談した際に「実施は困難ではないか」と言われたことがある。その地区は65歳以上の方や独居老人も多く移動手段すらなく、コンサートを開いたとしてもみんな来ることができないので意味がないということだった。このまま引き下がれないと思い悩んでいたところ、以前その地区の支所に勤めていた市民協働課のスタッフが、山奥にあるお寺の住職を紹介してくれた。相談したところお寺を会場として提供してくださった。それだけでなく、近所の手芸教室の方が作ったつるし雛をお寺に飾るように呼びかけてくれたり、地元で採れた小豆を使ったお饅頭を作って観客に配ってくれたり、近所の方が切ってくれた竹で竹灯籠を飾ったりと、少しずつご近所を巻き込みながらコンサートを作って

いくことができた。そのことを支所に報告したところ、お寺の掃除や送迎バスの手配をしてくれるなど、手伝ってくれるようになった。たしかに「おしかけ」ばかりだが、実際にやってみると、小さい集落にとってはとにかく集まることが大事だということが実感できた。一人でいると誰ともしゃべらずに閉じこもってしまうけれど、誰かに会えばしゃべるし、その人が元気か確かめられる。「おでかけアリオス」は音楽を聴いてもらうことが目的ではあるが、実は法事のように地域住民が集まる機会を作っているのかもしれない。そのことを受け止められるアーティストと一緒に行くことで、持っていくものの質をきちんと保つ。それはアリオスの責任だと思っている。

4. 事業の実施体制

M: 学校で実施する場合は、まず教育委員会の学校教育課を訪問し、そこで企画内容の説明をする。教育委員会は場所の提供や提案をしてくれるという関係であり、実際のコーディネーションはアリオスと学校が直接行っている。病院や福祉施設の場合、事業を始めたばかりの頃は、いわきに13ある各地区の支所に相談に行き、趣旨を説明し場所を紹介してもらっていた。支所には、地域振興担当というまちづくりや福祉など住民との直接のつながっている方がおり、小規模の地区ならばたいいのことは彼らが把握している。もう少し大きい支所になると、社会福祉やまちづくりなどそれぞれのセクションの方に話を聞くことはあるが、とっかかりとしてまずは地域振興担当員に相談することがほとんどである。回を重ねるうちに、福祉関係の施設から、うちでもやらないかという誘いを受けるようになった。

他には、音楽科部会という音楽の担当教諭の研究会に出かけていき、おでかけアリオスをデモンストレーションし、アウトリーチを体験してもらう活動を年1回行っている。そこに連れて行ったアーティストには次年度いわき市内で実際のアウトリーチを行ってもらう。この活動を始めてからアウトリーチをやしてほしいという要望は増えた。また、音楽の先生からのアリオ

スに対する要望を聞くこともできる。こちらもしわきのアウトリーチのあり方を模索しているところなのでよい機会となっている。

Y: 毎年、研究会後に市内の全小中学校対象にアンケートを取り、実施校を決めていくが、去年は130校のうち30校からアンケートが返ってきたのに対し、今年は50校以上から返ってきた。そのうち46、7校は実施を希望していた。中学校は部活や授業量が多いので実施はなかなか難しいが、経験した学校からは毎年実施してほしいという声が上がっている。しかし、実際は希望校すべてで行うのは難しく、25校ほどしかできていない。特に児童数の多い学校は学校からの希望が出ておらず、こちらからもアクションを起こせていない。その背景には、先生方の考えが全校生徒に聴かせたいということもある。毎年行ける確約があるならば学年ごとに行うということも可能なのかもしれないが、間が開くとなるとやはり全校で行おうという流れになってしまう。おでかけアリオスでは、今年からワールドミュージックも取り入れ、もう少し規模の大きなアウトリーチを行うことで学校の要望に応えられるようにしていきたいと思っている。

5. 事業による成果や効果

M: これまでの3年間は、とにかく出かけていって地域内の人々の生活を知るのに精一杯で、むしろ地域の方から教えてもらうことが多かったので、成果や効果という視点をまだ持ちづらいところはある。渡辺亮さんというパーカッショニストと共に行ったプログラムは、公民館を使い1年間に2箇所ずつ、3日間にわたってサンバと美術の共同制作をするワークショップを経て、最後に2箇所合同でアリオスでの発表会を行うというもので、それを3年連続で実施した。リピーター率が高く、参加者の3分の1はリピーターだった。今年度で終了する事業だったが、これから亮さんと付き合っていきたいということで、子どもからお年寄りまで30人弱が集まり、実行委員会を作って新しいグループ作りに動き始めている。

Y: 6歳から小学生までが「子ども編」で中学生以上が「大人編」となっている。小学4年～6年まで3年連続で参加して大人編に加わるのを楽しみにしている子どももいる。その子の成長を見るだけでも楽しい。

M: 太鼓は叩けば音が鳴るので様々な人が参加できる。楽譜が読めなくても参加できる仕組みなので、60、70代の方や障がい者の方まで包括的なプログラムになっている。また、参加する子どもの保護者が自分の子どもだけでなく他の子どもも見てくれたり、子どもが受付や楽器を運ぶのを手伝ってくれたり、運営にも自然な形で関わってきたことが、続けていきたいという気持ちにつながった。来年度はアリオスの事業として実施するが、この1年間のうちにグループのサポーターを作り、再来年は独立して活動を行うことを目指している。

クシヨップに人々が包括的に参加していたのはひとつの理想の形である。

4. 現在の課題、将来のビジョン 等

M: アプローチしたところは好意的に受け止めてくれて少しずつ関係はできている。しかし、1回コンサートを開いただけで何が残るのかという疑問はある。一度行くと次にいつ行けるか分からないぐらい広い市域に対して機会が少ない。プログラムが一過性のものになってしまっているので、長期的に関わる企画も立ててみたいが、そこに注力すると他の活動がおろそかになるというジレンマ、そして私たちにやれることの限界を感じている。

M: アリオスだけでは何もできないのだということを痛感している。子どもたちの未来を考えると一口に言っても、役所の中の様々なセクションや保護者などアリオス以外にもそのことを考えている人々はいる。彼らがいかにアリオスを利用してくれるかという関係性ができたらいいと思っている。アリオスもいわきのことを考えるグループのひとつでありたい。また、役所では子どもの障がいと言っても、精神障がい、身体障がい、発達障がいはそれぞれ異なる部署が担当している現状がある。しかし、子どもたちは隣り合って学んでいる。みんな同じ子どもたちだという視点で考えるようになっていけたらと思う。そういう意味で亮さんのワー

(4) 市民へのインタビュー

日時:2011年2月26日(土)19:00~20:00

場所:いわき芸術文化交流館アリオス

対象:増田伸夫(「いわきぼうけん映画祭」実行委員長)

1. 自己紹介

- いわき市出身。工業高校を卒業後、最初は印刷所で働いていたが、その後は職を転々とした。工事現場の作業員として東日本各地を旅したこともあった。現在は実兄が経営する看板製作の会社で働いている。自分は専務という立場で、主に営業兼現場を担当している。昔は看板といえば手描きだったが、現在は手で描くことは全くない。
- 子どもの頃から特に文化や芸術に縁があったわけではなく、絵も苦手だった。強いていえば、漫画を読むことや映画館に行く程度。映画館に通うようになったのは高校生からである。初めは特撮映画やアニメ、アクション映画が好きでよく観ていた。また、幼稚園の頃から本を読むのが好きで、小学校高学年の頃には推理小説やSFを好んで読んでいた。中学校では部活動に参加せず、高校では柔道部に所属していた。

2. 事業に参加した経緯、動機

- いわき芸術文化交流館アリオス(以下、アリオス)については、旧平市民会館が解体されて新たに建設されるという情報を聞いていた頃から、自分には縁がないと感じて距離を置いて見ていた。地元にとりだけ貢献できるものなのか、という若干ひねくれた気持ちもあった。
- グランドオープンする前に、平間至さんの写真展が開催された。大手CDショップの宣伝で使われた写真の展示が行われるということで観に行っただが、展示方法を含めて、とても面白かった。そのときに、Alios paperで「アリオス・プランツ！(以下、プランツ！)」を知った。市民参加型の企画で、参加自由・無料ということもあり、「せっかくだし参加してみようか」と軽い気持ちで参加した。
- 「モヤモヤを持ち寄ってください」という一文を見て、自分は映画を観ることが好きだったので、映画祭の企画を持っていこうと思いついた。その1、2年前に、いわきが舞台となった映画「フラガール」が全国的に

も話題になったので、いわきで映画祭をやればいいのか、と思っていたが、そういう動きは起こらなかった。それを自分自身の「モヤモヤ」として、いわきで映画祭を立ち上げてはどうだろう、という企画書を手土産にしてプランツ！に参加した。

- 〈アリオスのマーケティンググループの森さんのコメント〉プランツ！は、藤浩志さんが仕掛けた企画で、市民が持っている「モヤモヤ」した気持ちを種に見立てて、それをアリオスに持ってきていただいた。アイデアの種をみんなで話し合い、面白ければ水をやって芽が出てくるだろうし、うまく芽が出なくても、それが肥しになっていくだろう、というイメージを持っていた。
- 私が参加したのは、すでにプランツ！が終盤を迎えている2009年の2月頃だった。それまではアリオスを引いた目で見ており、イベントに参加したこともなかった。
- 自分が「いつかできればいいな」と思っていた映画祭の企画書を、プランツ！の参加者に読んでいただいたところ、藤浩志さんが「ここまで企画書ができていたんだったら、やれば？」と一言、肩を押していただいた感じになり、ではやりましょう、ということになった。

3. 事業の実施体制

- そこで、プランツ！の中に「映画映像研究部」(以下、映研部)を立ち上げて、みんなで話をしながら映画祭をゆっくり立ち上げていけばいいと思っていた。ただ、ゴールが見えないと決まりがつかないのではないかと、という意見があって、(実際に映画祭を開催した)1年半後の2011年2月をゴールに定めた。その時点で改めて「映画祭実行委員会」(以下、実行委員会)という組織を作って具体的に動き始めた。
- 映研部は、プランツ！で初めて出会った方たちばかりで構成し、旧知の顔見知りは一人もいなかった。最初に映研部の「試写会」と称して、今回の映画祭でも実際に上映した作品「タイムカプセル・アドベンチャー」を見せた。そこで「こんな感じの映画が作ればいいね」という思いを伝えた。

– 最初は映画を製作するということもイメージしていたのか？

- いずれは映画を作ろう、と映研部では話し合っていたが、具体的な活動の柱が見えていなかった。「あれもやりたい、これもやりたい」という新たな「モヤモヤ」が映研部の中にも生まれてきた。
- メンバーの中でイメージや方針についての意見が分かれてきて、考えのズレが発生した。それは、何のために映画祭をやるのかということをメンバーの中で共有できていなかったため。自分自身の中でもそれを明確にできておらず、メンバーに伝えられなかったからだった。
- そこで話し合いの場を持ったところ、どうも納得がいかない、一緒には活動できないという方たちがグループを離れていった。一方で、せっかく立ち上がったから何かやろうという思いで引き続き参加するメンバーや、新たに参加したメンバーもいた。
- 組織から離れたメンバーの一人ひとりと、なぜ映画祭をやるのか、そもそも映画祭をやる必要があるのかという話をしていくうちに、自分は映画祭という場を作り、人と人をつなげる何かをしたいということに改めて気がついた。
- とはいえ、「まちづくりと言ったって、自分が何者であるのかも分かっていない、何もできあがっていないのに、まちなんてつくれるわけがない」という思いがあった。とりあえず自分の身の回りの範囲で、何か面白い場所を作っておけば、それに共感して面白がってくれる人が集まってきてくれる。その場から新たな発信があって、新たなつながりが生まれる。そういうイメージを持ってからなんとなく形ができてきた。
- そこで、最終的なゴールを映画祭に設定して、映画祭の実行委員会を立ち上げた。プランツ！から参加していたメンバーのほとんどが入れ替わることになった。映研部から実行委員会へと組織が変わったことで、方向性そのものは変わらないが、結果として自分の中で活動のイメージを固めること、モチベーションを上げることに繋がった。
- 映画に興味を持っている人が集まったものの、実際に映画や映像に携わっている人は1、2名で、あとは一般の市民。直接声を掛けて誘った方や、メンバー

からの紹介、あるいはブログやTwitterなどの情報を見て興味を持って声を掛けてくれた方々が集まり、現在に至っている。

- 最終的に軸になったメンバーは10人くらいで、世代は20代後半から40代。10人のうち9人は男性。映画づくりは現場仕事のイメージが強いので、女性よりも男性の方が向いていたのではないかと。
- 〈森〉結果的には、いわゆる「映画バカ」で、バカバカしいことを一生懸命やるような男たちが集まった。
- 「いわきぼうけん映画祭」の「冒険」というキーワードは、森さんが提案した。
- 〈森〉いわゆるアドベンチャー映画のように、映画のジャンルとしては多いけれども、他の映画祭にはないテーマだったということと、元来、いわき市が炭鉱のまちだったということが、何か冒険心をくすぐられる土地のイメージに合っていると思った。それを増田さんが拡大解釈をして、「アマチュアが映画を製作することも冒険のひとつだ」ということになった。
- まず、映画が好きな人たちが集まって楽しくなればいいな、と思った。関わった人々が、何か劇的に変化するようなことはない。ただ、映画祭に関わったことで、現場の楽しさを知ったという人はいる。
- 最初に企画書を妻に見せたときは「何やってるの」と言われたが、「とりあえず、やってみたら」と。メンバーが替わる、替わらないという問題が起きたときは「いい加減にやめれば」とも言われた。企画が動き始めた頃、企画書と協賛依頼書を持って飛び込みで企業に話をしに行っても鼻にもかけてもらえなかった。映画祭当日にテレビや新聞の取材が入って注目を集めたときに、初めて自分がやってきたことを家族が知って驚いていた。いわき市内では意外にも知られていないのが実状。新聞媒体にも数多く情報は露出したが認知が低かった。私が実行委員の代表をやっているとは予想もつかなかったのではないかと。
- 実行委員会で話し合った結果、映画祭の上映作品を公募制にした。当初は各地から作品を集めることも検討していたが、応募してもらった方が早いのではないかと意見により決定した。途中までは応募作品が全く来ずに心配していたが、締め切り時点には43本、締め切り後の応募も含めて最終的には51本の

作品が集まった。

– この企画がきっかけで広がったネットワークやつながりはあったのか？

- 応募を開始した当初、例えば水戸短編映像祭のクロージングパーティーに参加して、作家に直接交渉して応募を依頼したこともあった。福島県内でも、告知依頼を通じて郡山や福島で映画祭を実施している団体との新たなつながりが出来た。
- Twitterでの告知がきっかけで、埼玉県のみかや映画祭、したまちコメディ映画祭in台東、ショートショートフィルムフェスティバル、その他、遠方では下関の学生映画祭スタッフの方からも声を掛けていただいた。Twitterやブログといったインターネットによる広報手段が、これほど効果があるとは思っていなかった。チラシで認知してくれた人は予想より少なかったが、作品を応募した監督などが自身のブログやTwitterで情報を流してくださった。市外や県外の人から「いわきでこんなことをやっている」というインターネットでの情報が玉突きで伝わってきた。勿論その効果を期待してウェブを使い情報を発信したのだが、中でもTwitterの効果が最も大きかったかもしれない。
- 〈森〉ちょうど、世の中のTwitterブームの少し前くらいで、みんながTwitterをやり始めた時期だったこともあって、地域の話題としていいネタになったとも言える。

4. 事業の感想、参加者の変化

- 自分の目に付く範囲の人たちからは、「いわきでも映画祭ができるんだ」「アリオスはこんなこともできるんだ」という声が聞こえてきた。また、今まで映画や映像に関わったことのない方や、過去に関わったことのある方が「映画祭に合わせて映画を作ってみたい」と応募してくださった。今回の映画祭は、初めて映像や映画を作った初心者からプロまでと、応募者の幅が広がった。アンケートの感想を読むと、「これだったら自分でも自分にも作れるかもしれない」と思ってくれた人もいたようだ。
- おこがましいかもしれないが、「俺たちにもできるん

だ」ということを再認識できる場が提供できたと思う。まちづくりに繋がるかどうか、経済が活性化するかどうか、などは自分には全く分からないが、やって良かったと思う。

- 市内にはロードショー作品を上映する「ポレポレいわき」というシネコン形式の映画館がある。しかし、郡山、水戸内原、ひたちなかなどのシネマコンプレックスまで足を運んで映画を観に行く人も多い。そうした市外の映画館に行く人々に対して、今回の映画祭がインパクトを与えたかどうかは分からない。その結果が分かるのは2回目以降になると思う。
- まだ映画祭が終わったばかりなので、この映画祭がどんな効果があったのか、結果は見えていない。私自身も、あまりそういった効果に興味がない。次の映画祭をどうやるか、ということを考えるだけで精一杯だ。
- 第2回の映画祭が2年後なので、また違う動きが出てくるのではないかな。みんなボランティアでやっているのだから、映画祭の準備や映画の制作期間には1年半以上の時間がないと難しい。恒常的に映画祭を事業化することができて、携わっていることができれば、映画祭を毎年開催できるかもしれないが、今は全くそういう状況ではない。

– 増田さんにとって、アリオスはどんな存在か？

- 常にアドバイザーであり、パートナーである。アリオスに対して、最初は、土足で入ってはいけなような敷居の高さを感じていたが、プランツ！に関わったことで、公共施設だからというヘンな固定観念が薄れた。こちらから「こうしてほしい」ということを言うと、「では、こうすればどうか」という提案が返ってくる。そういった意味で、アドバイザーであり、パートナーであり、いろいろな手法を教えてくれるマネージャーでもある。
- アリオスができたことで、人生が変わるかもしれない。何らかの形で映画祭をやりたいとは思ってはいたが、それを形にできたのはアリオスであり、プランツ！のおかげだった。プランツ！に企画書を持ち込んだときに「もし、鼻にもかけてもらえなかったらどうしようか」と考えた。ダメだったら隣の町に持ちかけようか、とも考えていた。

- プランツ！で藤浩志さんに出会って「建物があっても、それを稼働させるOSがなければ、ただの形あるモノでしかない」「イベントは、誰とやるかによって中身が全然変わってしまう」といった趣旨の意見に共感し、影響を受けた。
- 森さんは、常にそばにいてくれて、会社の先輩、上司のような存在だった。アリオスのスタッフは公務員だと聞いているが、いい意味で公務員らしくない。それが気に入らないという人もいるかもしれないが、アリオススタッフのような存在が身近にいれば、こちら（市民）からも企画やアイデアといったボールを投げやすい。出したボールをすぐに弾き返されてしまうと出しにくいけれど、形になる、ならないは別にして、一時的にでもボールを受け止めてもらえれば、こちらとしてはうれしいし、やりがいがある。そういった意味で、今のいわき市には、アリオスは貴重な存在だと思う。
- － 市民のアイデアと、市民の賛同によって映画祭が実現したことは、いわき市にとって大きな財産なのではないか？
- 大変な思いをして映画祭に関わってくれたメンバーと打ち上げの場で話していたのだが、おそらく全員が「自分が好きなことを、やりたいようにやっているだけだ」と考えていると思う。自分自身は、さほど大層なこと、すごいことをしているとは考えていない。自分の肩幅、歩幅でやってたら何だか結果がついてきてしまった、という感じ。その「好きなことを、やりたいように」やらせてくれたアリオスの存在は大きいと思う。

5. 現在の課題、将来のビジョン

- 自分が実行委員長になったときからずっと思っていることは、「実行委員長の増田がいなければ映画祭ができない」と言うのなら、やらない方がいいということ。今回は、1回目で形をつくり、形を残すために自分がやったけれども、今後ある程度の軸ができれば、代表が替わったとしても成り立っていく。顔になる人は誰でもいいと自分は考えている。そうでなければ、映画祭は続いていけないと思う。自分は現在43歳だ

が、30代のメンバーがいて、次は彼らが、その次は、いま20代のメンバーが…というようになっていけばいい。そういうバトンタッチのできる映画祭でなければ、続いていけないと思う。

- 今回、困難だったことは実行委員会事務局の「部室」と「部費」がなかったこと。今までは空き店舗の一室をお借りしてミーティングなどしていたが、それも使えなくなったので、当面はアリオスの中の一室を借りてミーティングをすることになるだろう。人が溜まれる場所、できれば雑魚寝できる場所がほしい。
- 一昨年、水戸芸術館でアーティストによる自主映画制作のワークショップに参加した。水戸芸術館の近くにアーティストが展示やワークショップを行うことのできる一軒家があって、そこで朝まで語ったり飲んだりすることができた。そこを拠点として、いろんなジャンルのアーティストが交流していた。こうした多目的なスペース、あるいは目的がなくても人がぶらりと集まれるゆるいスペースが必要だと思った。
- 「部費」に関しては、今回はアリオスのおかげで何とか凌いだが、次回に向けて財源を確保するための手段を考えなければ、と思っている。第1回では「100円サポーター」という制度をやってみた。映画祭のアピールにもなるかと考えた。100円でもお金を出してくれれば、参加意識を持ってくれるのでは、というメンバーの提案を形にした。100円提供してくれた方には3～5秒の「一コマ」メッセージを撮影し、映画祭のエンディング映像の中で紹介した。実際には、映像を撮影させていただくほうが大変だったことや、集めたお金をどのように使うのか疑われることもあった。

－ この映画祭で、最も喜んでくれたのは、どういう人だったのか？

- 意外なことに自分たちよりも少し上の世代、50代から60代の方々だった。「誰かがやってくれるだろうと思っていたが、ようやくやってくれた」という思いを、わざわざ電話して伝えてくれた人もいた。つまり、自分もやりたかったけれども、結局は、誰かがやってくれるのを待っていたと。企画書の最初に書いていたことだが、『誰かがやるだろう』じゃなくて、『俺たちがやってやっべ』というのが、映画祭を立ち上げたときの

テーマだった。

- 〈森〉象徴的だったのは、映画祭が動き出す最初の仮チラシのコメントで、「とにかく何か動き出そうぜ」「人生は冒険だ」と書かれていたことである。
- ストレートな表現だった。その時点では何も伝えられる内容がなく、関わりたいと思っている人からも「どうやって関わっていいのか分からない」という声があり、その青写真を出してほしいといわれても出せなかった。それでも、切実な気持ちは出ていた。
- 実行委員会として動き出す前の自分の気持ちは、いろいろな方から頂戴したいろいろな意見をくっつけて、そこから少しずつ削ぎ落として形を作っていけばいい、と思っていたが、どうもそれが違っていた。そのときメンバーが欲しかったのは、「芯」になる部分。それを明示できないと納得してもらえなかった。そこで「ぼうけん映画祭」というのがキーワードになった。映画づくりも、映画祭づくりも、冒険だ。自主制作で、自腹を切って映画づくりをやっている人たちがいる。それは、これから映画祭を作ろうとしている自分たちと何も立場は変わらないじゃないかと。そこから「芯」となる映画祭のイメージが固まっていっていった。

(5) アーティストへのインタビュー

日時:2011年2月26日(土)15:00~16:00

場所:福島県立磐城桜が丘高等学校

対象:阿部初美(演出家)

1. 自己紹介

- 美術大学の学生時代に、美術家であり演出家でもあるポーランドのタデウシュ・カントールの演劇作品を見て、雷に打たれたように感動した。それがきっかけで舞台作品を見るようになり、美術よりも演劇に関心を持ち始めたところ、劇作家・演出家の太田省吾の作品に共感した。演劇を勉強したくて太田氏に弟子入りし、長い間演出助手を務めていた。
- 30歳の頃に太田氏の初期の作品を演出したところ、評価をいただいて演出家としての仕事をするようになった。職業として演出家が続けていくことは大変で、挫折も経験したが、どうすればそれを乗り越えて、カントールや太田氏のような深みのある世界を見せることができるのか考えてきた。
- 自分が演出家として自立していこうと考えていくときに見えてきたのが、社会と演劇との「地続き感」がないこと。演劇が、日常生活や政治や社会と繋がっていないように思えていたときに、ドイツで若手の演劇人の国際フォーラムに参加した。「演劇と人生にとって大事なことは何か」というテーマで作文せよ、と言われたときに、これほど大事な質問を投げかけられたことは今までなかったと思った。
- ドイツでは、その「地続き感」があり、観客も市民も演劇を必要なものだと感じていた。舞台で行われていることは自分たちの問題であり、生活での思いを代弁しているとみんなが考えていた。とくにベルリンは、東西ドイツの統合によって、アイデンティティを作り直さなければならなかったし、新しい価値を探し求めるような演劇が多かった。日本でも、60~70年代は演劇と社会が地続きだったと思う。
- それがきっかけでドキュメンタリー演劇に取り組むようになった。現実を調査し、インタビューをして、インタビューを受けた人が芝居を見に来てくれたり、観客もリアルに感じてくれたりした。
- 原子力エネルギーをテーマにした「アトミック・サバイバー―ワーニャの子どもたち―」という作品を製作するために、推進派、反対派、地元の人々などに取材した。取材中は、どちらの立場からも厳しい批判を受

けたことがあった。しかし実際に上演したとき、推進派、反対派、地元の人々が、同じひとつのシーンを見て同じように笑うところがあったり、立場が異なる相手の考え方を理解できたというコメントをもらったりもした。

- ドキュメンタリーとして現実を作品化するのは、非常にデリケートな問題にも直面するが、それはワークショップにも同じことが言える。演劇の世界を超えた部分に踏み込むわけだから。
- 現在、子どもを出産して1年足らずの時期なので、作品づくりには携わっていないが、落ち着いたらまたドキュメンタリー演劇に挑戦したい。

2. プロジェクトに参加した経緯、動機

- いわき芸術文化交流館アリオス(以下、アリオス)とは、オープンして間もない頃に関わった。プロデューサーの今尾博之さんとはアリオスに着任される前からの知人で、「アトミック・サバイバー」を製作した際には、福島県内の原子力発電所を俳優と一緒に見学しに行った。それもあって、アリオスで「アトミック・サバイバー」を上演させていただいたが、とても理解のある劇場だと思った。
- その際に、(財)地域創造の企画で市内の小学校でもワークショップをさせていただき、アリオス側からも継続したいと要望していただいた。今回で小学校での演劇ワークショップは3回目になる。
- 2009年からは高校の演劇部に対するワークショップを始めた。高校演劇部対象のワークショップは、山口情報芸術センター・YCAMでもやっていて、演劇に関する基本的な技術を教えていた。
- 小学校でワークショップを実施するときは、必ず担任の先生と打ち合わせを行う。演劇のワークショップを行うといっても、相手が演劇を必要としていないこともある。だから、事前に担任の先生と会って取材し、先生からクラスの状況を聞いている。
- しかし、ワークショップを実施した後の話というのはなかなか聞けなくて、ワークショップでどのような変化があったのかは、よく分からないことが多い。しかし、特

定の対象者とワークショップを長い間継続すれば、変化も見えやすい。

- 自分の今までの経験で最も変化が見られたのは、東京のある小学6年生を対象に、半年間ほどかけて7、8回のワークショップを実施したケース。クラスの中に問題行動の多い男の子がいて、先生も「ひとつもいいところがない」と手を焼いていた。彼は母子家庭の育ちで、暴力的な振る舞いやいじめが多かったが、他者からの愛情を欲していること、自分を見てほしいという思いがよく分かった。
- 実は、そういう経験を持つ人が俳優にも多い。そもそも俳優という職業は、大勢の人の前で演技をし続けるという特殊な仕事であり、それは「自分を見てほしい」と訴え続けることでもある。だから、幼い頃から「どうすれば自分を見てくれるのか」ということを学んできたことが俳優として生きてくるわけだが、心の傷に負けてしまうと、俳優としてはやっていけなくなる。それを克服し、マイナスの経験をプラスに変えることができるのが、職業としての俳優の技でもある。
- その小学6年生の問題行動の多い児童に対して、ワークショップの中で、彼が憧れを持ち、彼の気持ちを代弁してくれるような役を与えた。すると彼は生き生きとして、その役を演じることに熱中していった。担任の先生も、これほど積極的に何かに打ち込む彼を見たのは初めてだと驚き、先生が知らなかった面が見えてきたという。
- 半年間のワークショップを経て卒業が間近になったときに、最初に出会ったときの彼の落ち着いた振る舞いが想像できないほど、落ち着いていられるようになった。モヤモヤしたものを吐き出したようだった。それは、私にとっても忘れられない体験だったし、私自身も彼から何かをもらえたような気がする。理想的なワークショップだった。

3. プロジェクトの感想、ご自身の変化

- いわき市内で、ある小学校の5年生を対象に行ったワークショップでは、クラスに多動症と思われる児童がいて、その児童が周囲の児童に対して乱暴な言

動をすることがあるという話を事前に聞いていた。

- そこで、他者の気持ちを想像させるような内容を中心にワークショップを行ったところ、彼は、乱暴な言動をするような子ではなく、愛しいほど素直な子だった。ワークショップでペアになる場面でも相手の子をとっても気遣っていて、先生たちも驚いていた。小学生には難しいかな、と思うようなワークショップのメニューもこなし、素晴らしい表現が出てきて私自身も感動した。
- 校長先生や担任の先生も「ワークショップというのは体や心や感覚を開くということなんですね」ということに気づいてくれた。つい最近、その小学校でのその後の状況が、ワークショップをきっかけにして、全く変わったという話を聞いて、本当に嬉しかった。
- 〈アリオス・コミュニティサービスチーフの前田さんのコメント〉そのワークショップを受ける前までは、先生たちも、児童たちに対して叱ってばかりいたのが、ワークショップでは阿部さんが、とても誉めてくれた。それによって、先生方は子どもたちの良い面に気がついて、肩の力が抜けて変わったと同時に、子どもたちは、阿部さんが誉めたことで自信を持つことができた。当初、気にしていた多動症と見られる児童に対して、クラスの中で周囲の見る眼が変わっていった。そうした、学校内部の変化のきっかけになったのが、阿部さんのワークショップだった。
- 私のワークショップをきっかけに、学校としていろいろなワークショップを取り入れるようになり、良い方向に変化していく要因になったそうだ。そのきっかけになれて嬉しかったし、演劇が持っている力を使えたし、そうした結果こそ、ワークショップの目的でもあった。
- － 多動症と思われる児童に対して、先生や友だちも発見できなかったその子の魅力を、阿部さんが発見できたということが大きかったのではないかな？
- まさにそこが大事な点。「この子はダメだ、ひとつもいいところがない、みんなが嫌い」という子に対して、「みんなが見ていない部分に、実はこんなに魅力があるんだ」ということを分かってもらいたい。
- 子どもは親を選べない。温かい家庭で育つ子どももいれば、親も苦しい状況で十分に愛情を注ぐことが

できずに育つ子もいる。そこに生まれてきたのは、その子の責任ではない。いじめっこも、いじめられっこも、共通しているのは「ダメ、ダメ」と言われて育ってきたこと。そのときに、「こんなにチャーミングなところがあるんだよ」と光を当てて周囲に見せてあげられれば、その子の自信になる。みんなに認められたという経験や、ほんのちょっとの自信が、これから生きていくうえでの支えになる。また、そうした経験のある子どもが、苦しんでいる子どもを助けるようになれる。そこをお手伝いすること。

－ 高校の演劇部に対するワークショップの意義は、小学校の場合とどのように違うのか？

- 部活として演劇に取り組んでいるのは、義務ではなく、好きでやっていること。みんなが将来的に演劇の道に進むわけではなく、多くの場合は演劇活動を止めていく。ただ、演劇を経験したことで、演劇の歴史が持っている人間の知恵、演劇を通した生きるための力を得ることができる。
- あとは、観客の育成のためでもある。演劇を経験したからこそ、演劇を観て楽しんだり、劇場に来ることを楽しめたり、それを他の人に伝えてくれたりもする。そういう意味で、観客の育成につながっていると思う。
- ただ、どんなワークショップでもそういう結果が出せるわけではない。いずれのワークショップでも、子どもたちが大人になったときに、ワークショップでの経験を思い出してくれて、様々なものの見方があるということ、演劇が道具として役に立つものだということに気づいてくれように願っている。

4. 文化・芸術を活用した地域活性化について

－ アーティストによっては、文化・芸術を教育、福祉、まちづくりといったこと的手段に使うということについて、抵抗感を持つ人もいようだが、阿部さんの場合はどうか？

- 私には、演劇を道具として使うということに違和感はない。もちろん、良い作品を作ることが自分の仕事であって、それがどのように使われようと知ったことでは

ない、という気持ちも分かる。ただ、そうした意見が言えるアーティストには、ある意味で、余裕があると思う。そう言いたいけれども、日本では、そうは言えない状況だと思う。演劇人としてやること、演劇にできることはたくさんあるから。

- 例えば教育という面で言えば、過去に、いわき市内の高校で演劇部の生徒と一緒に作品づくりをしたときに、「KY」（空気が読めない）や「キャラ分け」（相手や状況に応じた性格を演じること）といった彼らが自分自身を苦しめている現実を、ドキュメンタリーとして取材し、作品化した。
- 彼らはそうした現実から逃れたいと思っているけれども、大人から言われるまで自分自身が苦しいということにも気がついていなかった。作品化する上で、その状況を丁寧に見ていこうとしたときに、「孤独になりたくないから、他人に合わせて自分を殺していたんだ」ということに気がついていった。自分の心理は解明できても、やはり仲間はずれにされたくないから「KY」や「キャラ分け」を気にせず済むわけではなく、葛藤がある。
- そうした葛藤の中で作品をつくり、公演が終わったところで、多くの生徒たちは「もう仲間はずれになったっていいや」と思えるようになった。後になって、その高校の先生に話を聞いたところ、その後、彼らは自分が抱えていた問題から逃れて、苦しみを手放した。
- 先ほど（本インタビューの直前に行っていた）の高校演劇部のワークショップの中でも、「クラスの中ではキャラ分けしなければならないけれども、演劇部では自分でいられる」という女の子がいたが、「クラス全員が演劇部をやったら、キャラ分けしなくて済むんじゃない？」と私が聞いたところ、「ああ、そうだ」と言っていた。それも演劇の力のひとつだと思う。

－ こうした機会を継続していくために、何が必要だと思うか？

- まず、演劇のワークショップを知ってほしい。知らないということの弊害は大きい。教育でも福祉でも、まず「演劇にはこのような効果がある」「演劇は社会の役に立つ」ということが知られていない。「この世に演

劇はなくてもいい」と思っている人の方が多いかもしれない。ドイツでは、演劇に対する社会全体の敬意があったが、日本では、ほとんどないと感じる。

- 商業演劇等から一般の人々が受けるイメージや先入観などで、演劇はかなり誤解されていると思うし、誤解を解かなければならない。たくさん演劇ワークショップをやる理由は、そこにもある。アリオスのスタッフにしても、実際にワークショップの現場を見てくれたから、これを継続したいと思ってくれた。
- 単に楽しくコミュニケーションゲームをやるだけであれば、私たちが行く必要はないかもしれない。私は、ワークショップの中で、かなりの時間を割いて参加者一人ひとりの話を聞き、彼らが今必要とする表現を探す。
- ワークショップの効果や影響を知り、それを利用したいと思ってくれる人が少ない。なぜ、もっと演劇ワークショップをやってくれないのか、とも思う。やりたくても予算が足りないのかもしれないけれども、それは相談してくれればいい。周りの劇場のスタッフや行政を説得していくための行動力やエネルギーも必要だろう。
- 学校での演劇には、どうしても正義や信頼といった道徳的な観念が付きまとう。自分が学校に関わる場合には、そこには多少の葛藤を感じることもある。形骸化しがちな道徳観念に風穴を開けるのも、演劇の役割だと思う。
- 1回だけのワークショップでそこに気がついてもらうことは難しいけれども、演劇は、ただ楽しいものではなく、人間の多様な心理や、微妙な違和感を表現することができるということを理解してもらいたいと思って取り組んでいる。繰り返して演劇に触れることで、演劇の深さだけでなく、この世界や人間の存在の深さが分かってもらえると思うし、それに対峙する心の筋力もついてくると思う。

(6) 参加者へのインタビュー

日時:2011年2月26日(土)16:00~17:00

場所:福島県立磐城桜が丘高等学校

対象:小林俊一(磐城桜が丘高校演劇部顧問)

1. 自己紹介

- 教職の経験は、今年3月で18年目が終わるところ。演劇部の顧問としての経験は3校目で15年間になる。もともと演劇をやっていたわけではないが、新採用のときに演劇部の顧問の担当を与えられた。
- 大学時代に演劇サークルに所属している友人が多かったのも、芝居を観に行くことはあった。自分から毎月必ず劇場に足を運ぶほどではなかったが、個人的には小劇場演劇が好きで、時々観に行っていた。
- 最初に赴任した学校では、他の部活の顧問との掛け持ちだったため、積極的に演劇部に取り組んでいなかったが、2校目の学校に移ったとき、少人数の演劇の同好会があって、会を潰すわけにはいかないと、顧問を引き受けて部員をかき集めた。その頃から演劇部の顧問として積極的に取り組むようになった。本校は、現在は共学だが、かつては女子高だった。福島県の高校演劇の草創期を支えていたが、現在の活動は当時と比べると小規模になっている。
- 福島県の中でいわき市は、高校演劇が活発な地域で、この十数年間、市内の学校が県のコンクールでの上位入賞が続いている。そうした背景もあって、市内の高校演劇関係者が、自発的にいわき芸術文化交流館アリオス(以下、アリオス)のワークショップに参加する下地はできていたと思う。

2. プロジェクトに参加した経緯、動機

- アリオスには、開館以来、地区の高校演劇連盟でお世話になっている。それまでは、いわき市文化センターで高校演劇連盟の大会を開催していたが、アリオスの開館を機に会場を移すことになり、それ以来、使わせていただいている。とても親切にいただき、年に2、3回は会場として使わせていただいている。
- 会場を借りる以外に、演劇部所属の生徒がアリオス主催のワークショップに参加したり、私自身も舞台技術講座に何度か参加したことがある。学校行事ではないので、生徒も私も、個人として参加してきた。

- 今回、アリオスのプロデューサーの今尾博之さんをお願いして、本校演劇部としては初めて単独でワークショップを行った。昨年度は市内の別の高校2校で、今年度は本校で実施している。本当は昨年度実施したかったが、希望が多かったため、今年度の実施になった。
- プロの演劇人から直接教えていただくことで、何かしら生徒の身になることがあればいいと思ってお願いした。1週間のワークショップは、学校にとってはかなり長い日数で、まとまった時間で指導を受ける機会は今まであまりなかったので、大変ありがたい機会だと思っている。
- アリオスにプロのアーティストの派遣をお願いした動機としては、生徒たちの演劇の技術面の向上ということもあるが、もっと演劇を好きになってもらえるきっかけとなればという思いが強い。
- 演劇部は、部活として3年間やり続けたいという思いで入部する生徒が多いが、どうしても芝居をやりたいと思って入部する生徒はあまりいない。運動部だと勉強との両立は厳しいが、月に1、2回の文化部だと物足りない、という思いの生徒が集まってくる。それでも、何か表現したいと思っているから演劇部に入ってくるわけだから、そういった子どもたちが、演劇を通して自分を表現することが好きになれるといいと思う。

3. プロジェクトの感想、ご自身の変化

- 毎日、阿部さんから指導を受けている生徒の表情が、とても生き生きとしているのが印象的だ。阿部さんが指導されていることの半分くらいは、私自身も普段の練習の中で言ってきたことだが、プロの方から直々に話していただくと、素直に聞き入れることもある。また、私自身も気づいていなかったことも多く、非常に良かったと思っている。
- 例えば、ストレッチや発声の手順、練習メニューの構成などは、今まで他校の演劇部の方法を参考にしたり、本を読んでやるが多かった。もちろん、様々な方法はあるのだろうが、今回、より効率のいい合理的な方法を、生徒にも分かりやすく教えていただいて、

大変参考になった。

- ある生徒は、今まで何が原因で声が響かないのかよく分からなかったが、昨日、阿部さんの指導を見ていて、呼吸法に課題があることが分かった。やはり、指導方法をきちんと勉強する必要があることに改めて気がついた。
- 私自身の演劇の指導面でプラスになることは、数多くあり、生徒たちの技術的な効果はすぐに変化が見えも。ただ、ワークショップを実施する動機でもあった、演劇を好きになってもらうことに関しては、正直なところ、まだよく分からない。今回のワークショップがどのように子どもたちの血肉になっていくのかは、終了後、しばらく時間が経過してみないと、実感しづらいし、計り知れない。
- 高校演劇部の顧問としては、外部から指導者を招くと、指導や演出の考え方が自分とは違うと感じる部分もあるのではないかと？
- たしかに、そういう部分はある。ただ、基本を教わるという意味では、あまり大きな違いはない。考え方が違うから受け入れられないかという、そうではなく、基本的な部分や優れた方法は、すぐにでも取り入れたいし、取り入れることに違和感もない。
- この数年間で、私自身が、演劇部の指導者としてしっかり取り組みたい、本当の意味で演劇に関わりたいと思うようになった。だから、今は時間の許す限り、いろんなことを吸収したいと考えている。
- そう思うようになった要因には、アリオスが開館したことが大きい。アリオスで様々な演劇、イベント、行事が行われるようになって、今尾さんのようなプロデューサーがいらっちゃって、常に情報を与えてくれる。その存在はとても大きい。
- 今尾さんは、アリオスの職員の一人というだけではなく、自分にとって外の世界を見せてくれる窓のひとつ。まるで、江戸時代における長崎の出島のような存在。今尾さんからの影響の大きさを感じている。

4. 文化・芸術を活用した地域活性化について

- 学校の中では、私の担当科目は歴史で、授業の中

で演劇が直接役に立っているわけではない。だからと言って、単に部活動の上で役に立っているだけではなく、クラス経営をしていく上でも、コミュニケーション能力や表現する力の大切さを念頭におく意味で役に立っていると思う。

- 教育現場に演劇を活用する具体的な方策があればいいと思う。先ほど(本インタビューの直前に行っていた高校演劇部のワークショップ)の中でも、授業で演劇ができるようになればいいんじゃないかという阿部さんの話もあったが、たしかに、それは有効かもしれないと思う。
- ただ、やはり授業の中で演劇を取り入れることは、現実的にはかなり制約がある。その取り組みを見せるといっても、直接、生徒が取り組む機会を与えることが大事だと思う。自分ができることは限られているが、演劇部の生徒がもっと増えてほしいと思っている。
- あとは、芸術鑑賞の時間に演劇公演を招聘することや、学校で演劇公演の宣伝に協力することもある。ただ、実際は、高校生が直接演劇に参加する機会は持ちづらい。本当は特別活動の場面でワークショップを受けられる機会が気軽にあればいいと思うけれども、なかなか難しい。本校は1クラス40人くらい、学年ごとに8クラス320人ほどいる。40人単位で演劇をやりたい、というのは正直、厳しいものがある。
- また、学校の教育目標や教育課程の問題で、大学への進学者数を競うような学校になると、あえて他の授業数を削ってまで演劇を取り入れるのは、正直、理解されにくいだろうという気持ちがある。保護者も演劇教育の必要性を感じていても、国語や数学の時間を減らして演劇に取り組むとなると、反対もあるだろう。
- こういう(演劇ワークショップのような)機会が増えることはありがたいことだが、できれば、中学生や高校生が参加しやすい日程や時間で開催してくれることを望む。夜間や平日の実施の場合、あるいは1週間から2週間拘束されるような長期のワークショップの場合は、高校生は参加しにくい。
- それから、学校でも演劇の稽古に適した場所が不足している。どこの学校でも音楽系の部活は音楽室が使えるが、演劇部の場合は練習場所に困っている学

校が多い。学校外の場所を使いたい場合は、競争率が高く有料でもアリオスを使わせてもらっているが、もっと気軽に活動できる場所がほしい。

- 現在の高校生たちには、卒業後に演劇の道に進んでほしいとは思っていない。それでもこの先、演劇を観に行ってくれるようになってほしいし、できれば自分の子どもにも演劇部に入るように勧めてほしいと思う。
- 少しでもファンが増えて、裾野が広がるといい。将来、時間ができたら市民劇団にでも入って演劇をやってくれると嬉しい。合唱や吹奏楽のように、もっと演劇人口が増えれば、もう少し日が当たってくるのではないかな。
- 演劇づくりのプロセスは、高校生にとって自分自身を深く見つめる機会になっている。それは、あまり普段の生活にないことで、貴重な時間だと思う。彼ら、彼女たちが自分自身や自分の周囲の人、自分の人生について深く考えるということは、とても大事なことだと思う。

－ 高校生という多感な時期に、深く自分自身と向き合う過程で、教員という立場では、高校生の心の中に踏み込むことが難しい場面もあるように思うが、そこにもプロの演出家に関わってもらえる意味があるのではないかな？

- そう思う。そこに関わってもらえることは、非常にありがたいと思う。私たち教員は、生徒に対して「それでいいよ」と肯定することが難しく、つい「それじゃダメだ」と言ってしまうところがある。
- 今回、阿部さんのワークショップを見ていて、「ダメだし」だと分かることでも、生徒を否定せずに、あえて肯定する形でアドバイスをされていた。生徒に対して「なぜそう動くのか」「なぜそう思うのか」「次はどうするのか」と問い続けて、返ってきた答えを受け止めてそれをやってみる、という作り方には、とても感銘を受けた。
- 学校は時間の制約が大きい場所なので、なかなか簡単にできることではないが、決して生徒を否定されない指導を見ていて、そこが反省させられたところでもあり、非常に勉強になったところでもある。

6. イザ！カエルキャラバン！

文化・芸術が醸成する防災への「気づき」

⑥ イザ！カエルキャラバン！ ——文化・芸術が醸成する防災への「気づき」

事例の概要

◎主たる事業主体の概要

団体名	特定非営利活動法人プラス・アーツ		
設置年	2006年	連絡先	[大阪事務所]06-4400-6108 [東京事務所]03-5655-2369
団体概要	特定非営利活動法人プラス・アーツは、教育、まちづくり、防災、福祉、環境、国際協力といった社会の既存の分野に対して、アートの発想やアーティストの持つ既成概念に捉われない創造力を導入し、それらの分野がそれぞれ抱えている様々な課題や問題を解消し、再活性化させることを活動目標に掲げている。		
URL	http://www.plus-arts.net/		

◎事業の概要

事業名	事業の内容	
イザ！カエルキャラバン！	「イザ！カエルキャラバン！」は、おもちゃの交換イベント「かえっこバザール」と「防災訓練」を組み合わせた、楽しみながら防災の知恵や技を学ぶ新しいカタチの防災訓練として、NPO法人プラス・アーツと美術家・藤浩志が共同で開発した。 - 藤浩志氏が考案したかえっこバザールは、子どもたちが遊ばなくなったおもちゃを持ち寄って「カエルポイント」に交換し、そのポイントで、ほかの子どもが持ってきたおもちゃと交換できるというルール。「カエルポイント」は、防災をテーマにしたゲーム形式のワークショップに参加することで獲得することができる。 「対決！バケツリレー」、「ジャッキアップゲーム」、「毛布で担架タイムトライアル」、「水消火器でのあてゲーム」といった、スポーツ競技のようなスタイルでゲームを楽しみながら、防災で必要となる技を習得する。 - 初回の事業だった2005年の阪神・淡路大震災10周年事業では神戸市内7ヵ所10日間の開催で延べ7,000人を集客するという実績を残した。 - かえっこバザールの集客力によって、これまで防災訓練になかなか参加しなかった若い世代の親子が積極的に参加するようになった。また、海外でも普及し始めており、インドネシア、グアテマラ、エルサルバドル、モンゴルなどでも開催されている。	
	事業開始年	開催時期
	2005年	通年

現地調査の要約

1. 事業の背景、経緯

2005年の阪神・淡路大震災10周年事業の「神戸からの発信」事業で、子ども向けの楽しいイベントの計画があった際に、藤氏の「かえっこバザール」の企画提案があった。提案を受けた藤氏は、当時、ワークショップの開発に興味があり、震災事業で子どもと一緒に何ができるかということを出発点として考え始めた。

その企画のコーディネイトを、現在NPO法人プラス・アーツの理事長である永田氏に依頼した。震災に関するリサーチや試行錯誤の結果、今までやってきた「かえっこ」に防災プログラムを組み合わせ、防災に関するワークショップを開発することになった。

2005年の初回のカエルキャラバンの反響は大きく、個人事務所で事業を実施していた永田氏は、カエルキャラバンを全国に展開するべく、2006年にNPO法人プラス・アーツを設立した。また、神戸市では「震災10年 神戸からの発信」の趣旨をふまえて「神戸からの発信ネットワーク」が2006年に設置され、「カエルキャラバン助成」などの取り組みが2011年まで継続された。

以後、カエルキャラバンは全国各地に広がり、NPO法人プラス・アーツも東京事務所を2010年に設置した。2011年の時点で過去の開催地は15の都道府県、開催回数が70回以上を数える。さらに海外でも普及し始めており、インドネシア、グアテマラ、エルサルバドル、モンゴルなどでも開催されている。

2. 地域と連携した事業の内容：イザ！カエルキャラバン！

イザ！カエルキャラバン！は、藤浩志氏が考案したおもちゃの交換イベント「かえっこバザール」と「防災訓練」を組み合わせ、楽しみながら防災の知恵や技を学ぶ新しいカタチの防災訓練である。

子どもたちが遊ばなくなったおもちゃを持ち寄って「カエルポイント」に交換し、そのポイントで、ほかの子どもが持ってきたおもちゃと交換できるというルール。「カエル

年表

2001年	永田氏が大手ゼネコンを退職、個人事務所でまちづくりやアートイベントの企画・プロデュースを開始。
2005年	神戸市による阪神・淡路大震災10周年事業の「神戸からの発信」事業において、「神戸カエルキャラバン」を実施。
2006年	神戸市が「神戸からの発信ネットワーク カエルキャラバン事業助成」を開始。NPO法人プラス・アーツ設立。
2010年	NPO法人プラス・アーツ東京事務所開設。
2011年	過去の開催地が15の都道府県、開催回数が70回以上を数える。



カエルキャラバンの最後を飾るオークション

インタビューから

- 「イザ！カエルキャラバン！」は、防災に真正面から取り組むのではなく、何かと防災をつなげることで、自然にそこに防災があるプログラムが必要なのではないかということが根本的な理念となっている。(プラス・アーツ：永田氏)
- カエルキャラバンは、子どもや地域で防災活動を行っている人たちのためのワークショップという面もあるけれども、そこでワークショップをつくる人のためのワークショップであるということが大きい。(美術家：藤氏)

ポイント」は、防災をテーマにしたゲーム形式のワークショップに参加することで獲得することができる。

「対決！バケツリレー」、「ジャッキアップゲーム」、「毛布で担架タイムトライアル」、「水消火器で的あてゲーム」といった、スポーツ競技のようなスタイルでゲームを楽しみながら、防災で必要となる技を習得する。

3. 事業による成果や効果

◎防災訓練への参加者の増加と防災への気づき

子どもにとって魅力的なイベントである「かえっこバザール」が組み込まれていることで、子どもが友だちを誘い、家族ぐるみで防災訓練に参加する。その結果、防災訓練だけを行うだけでは参加を見込むことが困難な、若いファミリー層の参加者が増加している。

また、真面目で堅いイメージのある防災訓練に、遊びの要素を前面に出すことで、楽しみながら防災に関する「気づき」を身に付けることができる。

非常時に、警察や消防などの行政機関の専門職に任せるだけでなく、地域住民の一人ひとりが意識を持って行動するという意識が、自然と醸成されるのである。

◎地域住民の顔の見える関係づくり

カエルキャラバンは、防災に必要な知恵や技を楽しく習得するものだが、その習得の過程で、地域住民が相互に顔の見える関係が生まれる。

カエルキャラバンの事前の講習会や実施当日で、企画・運営を担う地域ボランティアたちは、各種のワークショップやオークションなど、子どもたちとの楽しい時間を過ごしなが、大人同士の交流も着実に芽生えているのである。

そこから地域コミュニティの信頼が醸成され、お互いに助け合う人間関係の素地が形成される。それこそが、非常時の防犯や防災に欠かせない要因である。



カエルポイントの交換

インタビューから

- 楽しめることで子どもたちがより参加しやすくなり、防災にふれる機会がより多くなるのではないかと。防災の広がりという点では楽しむことも重要だと思う。神戸ではシリアスな訓練もやっている。楽しいものとシリアスなものを融和させていくことで防災が広がるのではないかと。(神戸市消防局:秋田氏)
- 防災に関してはその地域の人々全員に影響があるので、一部の専門職が頑張っただけではどうにもならない。その地域にいる人々一人ひとりが意識を持って行動を起こさなければ解決していかないことである。(日野市社会福祉協議会:浜野氏)

インタビューから

- 震災で学んだことに、防災の知恵も必要だが顔と顔が見えることも必要だということがある。この取り組みによって地域内での顔見知りを増やすことができた。(神戸市企画調整局総合計画課:都築氏)

◎地域における多分野のリーダー間の協力・連携

防災は、決して一部の人の課題ではなく、地域のすべての人たちに関わる課題である。そのため、地域における他分野のリーダーたちが、お互いに協力や連携できる体制を構築する必要がある。

例えば、子育てサークル、手話サークル、高齢者の傾聴ボランティアなど、日頃から地域でボランティア活動をしている多分野の活動がある。そのリーダーたちが、カエルキャラバンに関わることで、非常時に発揮すべき地域のネットワークを有効に活用することができる。

カエルキャラバンを通じて、地域における多分野のリーダーたちが、相互に協力・連携できるネットワークが構築される。

5. 事業の実施体制

各地の地方公共団体、NPO、消防団、子ども会、学校のPTAなど、様々な主体が主催者となり、企画・運営にはNPO法人プラス・アーツが協力する体制を構築している。また、基本的に、主催する団体が初回の場合は講習会を実施し、当日の運営に関わる地域のボランティアが、子どもたちに体験させるゲームのルールや実際の手順を経験しておく。

6. 現在の課題、将来のビジョン

行政とNPOが協働する場合、NPOを単なる外注先や委託先と捉えるのではなく、対等な「パートナー」としての信頼関係を構築することが必要である。また、活動を根付かせるためには、行政や地域住民の中に異なる立場や考え方を仲介する中間支援的な人材の存在が不可欠である。

まちづくりに本気で取り組む情熱を持ちながら、地域をマネジメントできる人材を育て、地域の課題とともに力を合わせて取り組み続ける姿勢が求められる。

7. 文化・芸術を活用した地域活性化について

地域に文化・芸術を活用する際に、既に評価が定まった高尚なものだけを文化・芸術として捉えるのではな

インタビューから

- ある人は児童福祉の分野で子どもたちと関わる活動をしており、ある人は障がい者に関わる活動をしており、ある人は傾聴ボランティアで平日頃から高齢者や障がい者の話を聞いており、ある人は純粹に防災についての取り組みをしている。そういった様々な立場の人たちが集まった。カエルキャラバンのプログラムのメインは防災であるが、様々な立場の人たちがこれまで経験してきたことや考えてきたことがうまく融合することができたのではないかと感じている。(日野市社会福祉協議会：浜野氏)



東京都日野市で行われた「楽しく学ぶ防災訓練」

インタビューから

- 本当のパートナーになれるかということである。私たちのような存在を外注先、委託先と捉えられて丸投げされると、こちらがいくら頑張っても効果が薄い。行政側の中にも熱い人、本気で取り組んでいる人がいて、その人たちの気持ちが熱いほど私たちが乗り込んでいったときに意味を持ちし大きな成果につながる。(プラス・アーツ：永田氏)

インタビューから

- 文化・芸術の中の「つくる力」、つまり流通している既存のものではない何か新しい価値観を立ち上げていく力が、時間

く、新しい価値観を生み出す力こそが重要である。その文化・芸術の力が、地域に課題がある場合の現状を変える力となる。

また、アーティストにとっては、文化・芸術が地域の活性化に「使われる」ことを快く受け入れるとは限らない。事業の趣旨を丁寧に説明し、アーティストが納得する形で関わってもらう必要がある。アーティストにとっても、その関わりが自分自身の創作活動にとって貴重な機会となるようにコーディネートすることが重要である。

を経て「文化・芸術」と呼ばれるようになっていく。本当はその新しい価値を立ち上げていく力が重要なのだが、あたかも完成されたものが重要かのような誤解や勘違いがある。(美術家:藤氏)

- 文化・芸術やアーティストを、まちを活性化する「道具」だとは思っていない。アーティストたちを巻き込まないと強度のある場につくれないので、協力してほしい。そして彼らアーティストに対してもそうした場に参加することで新しい作品を生み出したり、新しい活動につながるような場にしてもらいたいと常々思っていて接している。(プラス・アーツ:永田氏)



NPO法人プラス・アーツ 理事長 永田宏和氏

(1) NPOへのインタビュー

日時:2011年10月31日(月)10:30~12:30

会場:プラス・アーツ大阪事務所

対象:永田宏和(特定非営利活動法人プラス・アーツ)

1. 自己紹介

- 大学時代は建築を専攻していた。在学中に建築設計と都市計画や都市開発やまちづくりを学んだが、徐々に都市計画やまちづくりのほうに傾倒していった。
- 大学院では当時、大阪大学におられた鳴海邦碩という都市計画の大家に師事した。まちづくりや都市景観の調査を行い、まちづくりコンサルタントの基礎的な部分をたたきこまれた。
- 先生が主宰された勉強会や研究会がユニークで、文化人を招き、大学院生をアテンド役にして、祇園や鶴橋、新開地といった関西の古いまちを案内させるというものがあった。アテンド役はまちを徹底的にリサーチして臨むが、ゲストのほうがまちに詳しく、恥をかいだことも多かった。実際にまちを歩いて、まちに対する向き合い方が分かってきた。
- 最初は都市計画コンサルタントで働こうと考えてアルバイトもしてみたが、専門化しすぎて視野が狭いように感じた。これからはもっとコラボレーションする時代だと考えていたので、あまり当時のコンサルタントの仕事に魅力を感じなかった。
- 大学院修了後、大手ゼネコンに就職した。まちなかで大きなプロジェクトがどのように動いていくか見てみたかったので、ゼネコンに勤めることにした。8年間勤めたが、ハードを造る会社にいるのに、自分がハードを造ることに一番の興味が持てなかった。むしろ、建った後に何ができるかということに興味があることが分かった。
- ゼネコンでは仕事が分化されている。設計の人は設計だけ、施工の人は施工だけであり、そこから先はイベント会社や管理会社が行っている。そのような体制に違和感を持っていた。そんな中で、自分で勝負していきたいなと思うようになった。

◎パートナーシップ研究会

- 学生時代からパートナーシップやコラボレーションに興味があった。学生時代は鳴海先生の呼びかけで始まった、「都市デザイン学生の会」の事務局長を務めていた。建築、ランドスケープ、都市計画

を専攻する学生が所属し、まち歩きイベントや、単独では呼べない有名な先生を呼び、講演会を行うなどしていた。

- アメリカでは当時よく見受けられたのだが、いくつかの都市デザインや都市計画の事務所にプロジェクトにあわせて会社を超えてチームを組むという方法があり、フレキシブルでいろんなテイストがでて面白かった。しかし、大きな組織の中ではそういったことはなかなかできないことも分かってきた。
- 「都市デザイン学生の会」を母体に、社会人になってからは「パートナーシップ研究会」を立ち上げた。最初は20人くらいでスタートしたが、核となる人材は最終的には数人だった。2011年の水都大阪のディレクターを務めたが、中にはそのときのメンバーもいた。
- パートナーシップ研究会で応募した商店街の活性化のコンペが通り、2年間商店街の活性化事業に取り組むことになった。商店街の景観が一新されたことで、商店街の人たちの「何をやっても変わらないんじゃないか」という思いが払拭されたのが重要な点だった。
- 商店街があった場所が神戸で、ちょうど震災から5周年を迎えたときであり、ランドスケープデザイナーがデザインして、広場一面に、ガラスのコップに食紅で赤く染めた水をいれ、そこにろうそくを浮かべた。みんな感動してくれて、翌年からは商店街で自主的に開催するようになった。その後、私たちは直接関わらなくなり、最終的には全くタッチしなくなった。
- しかし、今はその商店街自体の活性化は下火となっている。商店街は普通のまちより難しく、商店街の中の様々な人間関係やリーダーの自分本位な行いが時としてその活性化に影を落とす。まちや商店街は生き物のようで、いい形で成長し続けることは難しいと痛感したプロジェクトだった。
- 今は「まちづくり」が注目を浴びているが、やはり難しい。ずっとまちづくりをやっているが、絶対的な成功と言えるような事例は本当の意味ではないと思う。そのときはサポートして元気になったかもし

れないが、5年、10年経ったときに、そのまちが元気かどうか分からないし、そこまで責任を取ることはできない。私たちができるのはまちや地域に寄り添い、まちが元気になるきっかけを与えることだと思う。

- その地域の人たちがどこまでやっていくか、最初に道をつくって背中を押すことができるが、ずっと手を引いていけるわけではないし、そうすべきではないと思っている。

◎Nature Art Camp

- 神戸市で6年間行っていた「Nature Art Camp」というプログラムでは、当時活躍されていた、私が「本物」だと思えるアーティストに山の上に来てもらって、オリジナルの教育プログラムを展開した。そのプログラムによって、様々なアーティストとの接点ができ、藤浩志さんとの付き合いもそこから生まれた。
- 柳幸典さん、野村誠さん、KOSUGE11-16、PHスタジオなど、今ではなかなか呼べないようなアーティストが当時参加していた。Nature Art Campでは、作家の面白さも体験したが、プログラムの作り方も学んだ。
- 藤さんは子どもたちが見つけられるような、見つけられないようなところに様々な「仕掛け」を作り、そこから子どもたちが思い思いに反応して森の物語を描くというワークショップを発案した。それを基に、関わっていたボランティアの大学生たちがブラッシュアップして素晴らしい作品に完成させた。学生たちのためのゼミのようなワークショップでもあった。
- 柳さんが行ったのは、架空の国を作って、そこをフィールドワークし、国家と国旗をつくるというワークショップ。作った旗をデザイナーの卵が関わりブラッシュアップして、プロジェクションし、その前で自分たちが作った国家を歌った。その旗をアイロンプリントしたTシャツを作って、それを来た子どもたちが国を背負ってチーム対抗戦を行った。
- 野村さんは「火の音楽会」をやりたいのでピアノを燃やすと言いだした。それが大問題になり、教育委員会に呼び出されてやめるように言われた。野

村さんにそれを伝えたら、なんとかするのが永田さんの仕事だろうと言われてものすごく怒られた。幸いなことに、プログラムの担当者だった先生と一緒に交渉に当たってくれて、なんとか廃棄処分予定のピアノを燃やせることになった。当日、実際に燃やしたら、途中で弦が切れてポロンと音になった。燃やしたピアノを一部解体して、弦にふれられるようにして、その新しく生まれ変わった楽器を使って、森の中で演奏会を行った。とても感動的な忘れられないプログラムとなった。

- 野村さんと協働したこのプログラムを実施したときは、すでに事業が4年目に入り、その進め方などが若干ルーティーン化、マンネリ化していた頃だったのだが、そんなときに野村さんにがつんとやられて目が覚めたような状況だった。プロデューサーとしての自分の役割を再認識するいい機会になった。本当にやってよかったと思っている。
- KOSUGE1-16を呼んだときは100人の子どもたちと一緒に湖上コンサートを作り上げた。オリジナルの舞台装置や衣装などはすべて子どもが作り、最終日のコンサートに子どもたちの親を招待した。運動会などの学校行事にアーティストが入って、子どもたちと一緒に作り上げたいのでは、というアイデアを当時KOSUGE1-16の土屋さんとしている。
- Nature Art Campのプログラムは、私がそのときに呼びたいと思うアーティストを呼ぶことができ、かなり自由にやらせてもらった。スポーツ体育課というスポーツ系の部署が担当で、文化について詳しくなかったため、私に任されていたのだと思う。
- 1年目は六甲復興祭という大きな復興事業のひとつとして予算が付き開催した。しかし、2002年以降は神戸市も財政危機で予算がつかなかった。そこで、宝くじ基金をはじめとして、助成金を財源にしていた。所管は市だが、市の資金は入っていなかったことも自由にさせてくれたひとつの理由だったかもしれない。もちろん信頼関係がその大前提ではあったと思うが…。

2. 事業の目的・内容

- 「イザ！カエルキャラバン！（以下、カエルキャラバン）」は、防災に真正面から取り組むのではなく、何かと防災をつなげることで、自然にそこに防災があるプログラムが必要なのではないかということが根本的な理念となっている。こないだは防災とスポーツを組み合わせて、防災訓練のプログラムをスポーツ競技化し、タイムトライアルなどで競争した。スポーツの楽しさに防災が組み込まれている。
- かえっこもスポーツも防災を学ぶための環境を演出するツールであって、場ができれば子どもたちは一生懸命やって、学ぶことができる。場をつくるために楽しさや競い合うことが大事だと思っている。そのほうが、継続もできるのではないだろうか。
- プログラムに関わる人たちがずっとやりたいと思うような惹き付けられる魅力が重要だ。カエルキャラバンにとって藤浩志の「かえっこバザール」というのがとても大きくて、かえっこバザールの楽しさがいろいろな形で様々な防災教育プログラムに転化している気がする。
- 2005年の初回のカエルキャラバンに関わった学生たちが、半分悪乗りして面白いプログラム案をどんどん出し、藤さんは「いいね」といってどんどん採用していった。その中でも、きちんと震災の体験談から得られた教訓を織り込んだ、練りに練ったプログラムがあり、プログラム一つひとつがそれぞれ強度を持っている。
- プログラムそのものに強度があり、自分たちでどんどん手をいれることができる。完成されたパッケージとは違った関われる余地をいっぱい残していることがポイントではないだろうか。強度を持っていて魅力的だが、どこまでもいじれるという二面性があること。それはカエルキャラバンだけでなく、都市計画においても必要である。
- 藤さんは「未完成」、私は「不完全プランニング」という言葉を使っているが、プランニングを完璧にせず、人が入ってくる余地が残しておく。謙虚に愛情を持ちつつ、我をはらないプランニングが必要である。カエルキャラバンはその最たる例である。

3. 事業の背景、経緯

- 2005年の阪神・淡路大震災10周年事業の「神戸からの発信」事業の実行委員の一人に知り合いがいて、その人から「藤浩志さんのかえっこバザールをやったらどうか」との提案があった。
- 10年目はシンボルプロジェクトがいくつか立ち上がる中で、子ども向けの楽しいイベントがないかという話になった。最初は防災というテーマは全くなく、震災から10年経って、神戸の子どもたちはこんなに元気でやっているよという姿を神戸内外に発信できるイベントを実施したいということだった。
- 藤さんは拠点が福岡だったので、神戸で何かやるときには関西に拠点を持つ「つなぎ役」が必要だった。そこで、以前から藤さんと活動したことがあり、神戸市のプロジェクトにも少なからず関わっていた私に声がかかった。
- 最初のオーダーは市内10箇所くらいでかえっこバザールをやってほしいというものだった。しかし、藤さんと企画に関する議論をする中で、今更、神戸市内各所でかえっこバザールをやったところで、シンボルイヤーのプロジェクトとなりうるのかということと、過去を振り返らずにいるスタンスも違うのではないかということになった。
- 未来に向かうために、暗くなってしまうから過去は振り返らないという姿勢に疑問を抱いた。教訓を伝えていくということにおいては、過去を振り返ったとしても、未来に向かっていけるはずである。それは神戸市が行っていかなければいけないことなのではないかと思った。
- 寄席や、キャンプなど様々なアイデアが出たが、もともとのオーダーはかえっこバザールだったので、最終的にはかえっこバザールをしながら防災ができないかということになった。クライアントに対するニーズにも応えているし、過去を振り返ることもできるということで、この案をぶつけてみた。

4. 事業の実施体制

- 2005年に初めてカエルキャラバンを行ったときは、個人事務所で事業を実施した。しかし、反響がすごかったことと、藤さんとも共有していたことであるが、カエルキャラバンを全国に展開したほうがいいという強い思いがあり、個人事務所ではなく、株式会社かNPO法人として事業を行ったほうがいいということになった。
- 株式では展開していく事業の性格上合わないと判断し、NPO法人プラス・アーツを立ち上げることにした。カエルキャラバンの応援団という感じで、防災の先生たちに理事になってもらった。
- お金が動く分野ではないので苦労する面は多い。私たちがなんとかやれているのは、企業からの仕事をたくさんやっているからだ。助成金はほとんど申請しておらず、委託事業が中心である。
- 半ば極論かもしれないが、日本の社会では、事業を行うことでしかNPOは継続的に成立し得ないのではないだろうか。助成金はもらえるかどうか分からないし、もらえたとしても2年ほどで打ち切られてしまう。助成金や補助金に頼り続けていたら、NPOの運営は立ちいかなくなる。
- 自分たちの取り分を減らしてでもきちんとデザインされたチラシを作ることや、記録を残すことが重要である。記録の重要性は前述のNature Art Campで学んだことのひとつである。記録を残さないと自分たちの実績を示すものがない。
- 地域の支援をしようとしたら絶対赤字になってしまう。地域支援をできる余裕をどこでつくるのかといったときに、それは企業との仕事でしかなかなか生み出せないものである。
- プラス・アーツの理事で防災の大家である関西学院大学の室崎益輝先生からインフラ企業を回って打診してみたらと言われた。インフラ企業にアプローチしたところ、東京ガスだけが話を真剣に聞いてくれて、すぐに資料を送ってほしいと言ってきた。
- ちょうどそのときに、東京ガスのCSRの基本方針にある「安心・安全」が達成されていないのではない

かということが社内で議論になっており、何かやらなくてはいけないという話が出ていた。そのような状況のところに、カエルキャラバンの話がきたので、すぐにやりましょうということになった。2006年の夏に話をしにいった、その年の冬には東京ガスの企業ミュージアムでカエルキャラバンを開催した。企画がきちんと評価されたことが嬉しかった。

- プラス・アーツは大阪を中心に活動していて、どちらかと言えば地域密着型のNPOであったが、東京ガスとの仕事からは回転が変わった。大きな実績となった。
- 株式会社iop都市文化創造研究所の開設の経緯についてもご説明いただきたい。
- 当時は企画プロデュースで食っている人はほとんどいなかった。そうした中で、その分野で生計を立てたいと思い、一念発起してこの業界に飛び込んだ。当時はまちづくりコンサルタントとして住民参加のまちづくりのコーディネイトも業務としてやっていたが、どちらかというとそちらの業務の方でぎりぎり生計を立てていた。
- 当時業務として取り組み始めた企画・プロデュースの仕事は成功報酬が基本で、リサーチをして一生懸命練り上げて企画書を書いても、資金繰りが厳しいなどの理由で計画が頓挫するとお金は全くもらえなかった。さらに、どの仕事でも、アイデアや企画に対していくら払うべきだという感覚を誰も持っていなかったので、なかなか報酬へと結びつかなかった。
- 貯金が底をつき始めた頃から、徐々に仕事が増えてきた。仕事が増えて実績ができてくると、それが信頼へとつながり、企画料をいただけるようになった。
- 見積りの体系をきちんと作ったことも信頼へとつながった。都市計画コンサルタントのノウハウを紐解いて、積み上げ式の見積もりを作るようになってからは、クライアントもそうした対応に信頼感を持ってくださるようになった。そうして実績を積み重ねていく中で、企画プロデュース(店舗設計)、まちづくりコーディネイトを業務の柱とする株式会社「iop都

市文化創造研究所」を立ち上げた。

- iopで行っている業務は、プラス・アーツで展開している事業にもとてもプラスになっている。店舗を造るときには、ブランディングを徹底して行う。ブランディングをするためにデザイナーと協同して「顔」(ロゴやパンフレット、ホームページ)を作り、さらに店舗のイメージをもっと強度を持って伝えるためにイベントや、時には運営に携わることもある。
- 店舗設計では、顧客の体験すべてをデザイン、コントロールするという「エクスペリエンスデザイン」というブランディングの基本的な考え方を大切にしている。そのためNPOを立ち上げたときに、その事業における「ブランディング」が重要であることは熟知していた。デザインの力でどれだけ人とコミュニケーションできるのかということがノウハウとして蓄積されていた。その経験がNPOを運営していくうえで大きかったのではないだろうか。

5. 事業による成果や効果

- カエルキャラバンは、実際に会場に来た人を通して広がるのが一番多い。会場に来て、子どもたちが防災で盛り上がっている姿を見て、自分たちもこのプログラムをやってみたいと思う。そのあとホームページなどでチェックして、私たちにオファーがくる。大規模なカエルキャラバンを開催した後は、だいたい2、3件は問い合わせがくる感じである。
- 行政がやりたいという場合もあれば、PTAや親父の会からオファーが来ることもある。やる気がある団体に対しては全て支援すると決めているので、予算規模に関係なく、お金がないならないなりに支援策を考えて支援をするようにしている。気持ちがあって継続したいという人がいたら支援するのは、NPOとしてのミッションなので。その思いはスタッフも共有している。
- 神戸にあるJICA関西が年間を通して、アジアから世界各国の防災省や教育省の方を招き、アジア防災研修や中米防災、コミュニティ防災など様々

な研修を行っている。そうしたプログラムのほぼ全てにカエルキャラバンのレクチャーが組み込まれている。その場でみんな惹き付けられて、様々な国の人たちが自分の国でもカエルキャラバンをやってみたいと思うことが多い。来年からはタイとモンゴルで本格的にカエルキャラバンの普及プロジェクトが始まる予定である。

- 日本よりも海外の方がうまくいくことが多い。日本だと頼めば来てくれる、という気持ちが支援先の方にもどこかにあって、自立しにくいところがある。継続しているところでもプラス・アーツのスタッフが応援に行くことがよくある。完全に免許皆伝とはいかないところがある。
- しかし、海外はなかなか簡単に行けるわけではないし、JICAの専門家派遣で行く場合は、「日本」としてどう貢献できるかという意識もある。この間は中米に行ったが、2、3週間の間、一地域で実施できるワークショップは2、3日である。その中で、どこまで伝えることができ、何を残していけるか、真剣に考え、とても気合いが入る。
- 現地にはJICAの長期専門家という人がいるが、その人が中間支援の人としてうまく機能している。いい意味で自立ということが分かっているのも、あまり手をかけすぎず、しかし、離れすぎずやっている。
- 私たちはグアテマラ人に教えに行ったのだが、彼らが中米5カ国の先生役となりどんどんカエルキャラバンを教えにいつている。ニカラグアやコスタリカ、パナマなどで広まっている。そういう状況が中米の人たちだけでできたかといったらそうではなく、長期専門家の存在も欠かせなかった。今は、専門家たちが徐々に離れており、中米の人たちで自立して続けていけるような状態になってきている。
- インドネシアでは、自分たちが持っていたプログラムが、システムもキャラクターも変えられてしまっすべて現地オリジナルの形で実施されているが、そこまでいってくれたら嬉しい。5年や10年経てばカエルキャラバンが日本から来たことも分からなくなっているかもしれない。そうやってこそ初めて根付いていると言えると思う。関係する人たちがそれ

それぞれの役割に応じた塩梅や作法を身につけておかないと本当の意味では駄目だと思う。

6. 現在の課題、将来のビジョン 等

- まちは難しさがあり、生き物みたいなものである。人も入れ替わっていくし、だんだん年をとっていく。次の世代の担い手をつくれるかどうか重要である。
 - マネジメントできる人がなかなか地域にいない。カエルキャラバンが一番うまくいっているところは中間支援の組織や人が必ずいる。ただいればいいというわけではなく、その人がカエルキャラバンのことをきちんと理解し、また能力も高くなければいけない。カエルキャラバンが継続したり、発展したりしているところには必ずそういう人の存在がある。
 - 私たちだけがいてもだめである。藤さんがよく言っているのが、「風の人」、「水の人」、「土の人」という話である。私たちはどこまでいってもカエルキャラバンという種を持っていて、刺激を与える「風の人」でしかない。そのあとそれに水を上げて育てていくのは「水の人」の存在である。
 - 「風の人」、「水の人」それぞれに作法があるが、両者に共通しているのは、謙虚さである。あまり入りすぎないという塩梅をきちんと持つことが重要である。
 - まちづくりコンサルでもずっと同じまちに関わっている人もいる。行政の担当者はどんどん変わっていくので、まちづくりに関しては、最終的にコンサルしか知らないということも多々ある。そうするとずっと頼られるし、抜けられなくなる。ビジネスの面から考えると、関わっている限りはずっとお金がもらえるので、その方が得だということもある。ただ、それだと自立しない。継続性を考えると、ある種の冷たさや潔さも必要となる。あるときは「もう知らないよ」と突き放すことも重要である。
- － 行政の方にはどのように接してもらいたいのか？ 行政に求めることやどういう立場で一緒にやっていきたいか？
- 本当のパートナーになれるかということである。私たちのような存在を外注先、委託先と捉えられて丸投げされると、こちらがいくら頑張っても効果が薄い。行政側の中にも熱い人、本気で取り組んでいる人がいて、その人たちの気持ちが熱いほど私たちが乗り込んでいったときに意味を持つし、大きな成果につながる。
 - 行政の人は中間支援の役割も持っているのだから、「水の人」としての想いをきちんと持って、やることを理解し、それを、気持ちを持って受け止めてくれるという環境がとても大きいと思う。
 - 信頼関係がきちんと築けていることも重要である。藤さんは、イベントや事業に失敗も成功もないと言っており、すべてデモンストレーション(実験)として位置づけている。失敗したときにはそこにきちんと理由があり、それが次の課題解決の鍵となる。行政と協働する場合も、成功するか失敗するかではなく、地域の課題にともに力を合わせて取り組み続けるという姿勢が最も重要である。
 - 失敗したときに、「駄目だったじゃないか」と責めるのではなく、なぜ失敗だったのか、そこからもう一度共に考えようと思ってくれる信頼関係がないと、都市の問題はそんなに簡単に乗り越えられない。
 - あとは、私たちのような行政と組む側も多く引き出しやノウハウを持っていること、実績があること、作法を身につけていることも重要となってくる。それらを大事にやっていけば、必ず道は見つかるし、成果もでてくると思う。そこまでの関係性を築けるかということである。
- － 行政との関係で一番難しいと感じるところは？
- 行政も地域側も人材育成ができていない。中間支援ができる人がなかなかいない。私たちは常に「風の人」であるので、地域に根付いていくためには中間支援の人の存在が不可欠であり、そういった人材が求められている。
 - しかし、それらの人を育成する社会システムがまだないのが課題である。神戸ではそのシステムを作ろうと取り組みを始めている。

7. 文化・芸術を活用した地域活性化について

- かつて、神戸を拠点に置くアートNPOのC.A.P.(芸術と計画会議)がやっていたまちの中でのアートイベントに参加して、アートがまちとコミットしている姿に共感して関わり始めた。そしてC.A.Pの拠点でもあるC.A.P HOUSEの立ち上げに協力した。
- もともとは神戸市の建物で、私はゼネコンの仕事として関わっていたが、初めて建物を見たときにアートセンターにしたいと直観的に思った。ゼネコンのプロジェクトが中止になり、自分でアートセンターの構想を練って、神戸市とC.A.Pに案を持ち込んだ。アートセンターとして使う話が進んでいき、私もひとつの部屋を任された。
- 建物が移民センターだったということを残していくメモリアルルームを作り、ブラジルの3世の人たちとイベントを行った。私はC.A.P HOUSEを外にどんどん開いていこうと思っていたが、C.A.Pに所属する人たちとの方向性に若干ズレがあって、途中で活動からは距離を置くようになった。
- C.A.Pでの経験でもっと外に開きたいと思っているアーティストがかなりいることが分かったので、これからそういったアーティストと何かできるのではないかという新しい可能性を感じたのは確かである。
- 文化・芸術をまちの活性化にコミットさせることに抵抗がある人はやはりいるのではないだろうか？
- アーティストよりも、キュレーターやプロデューサーの方に抵抗があるように感じることもある。水都大阪に携わっていたときも、藤さんたちは、アーティストがまちと関わることで、もっと鍛えられて自分たちの作品や活動が消費されないように揉まれる場になればいいのではないかと言ってくれた。だが、アートをまちプロジェクトに「使う」ことを嫌がる人はもちろんいたように思う。
- 私自身は、無理矢理アーティストやアートを「道具」として使ったことはない。きちんと趣旨を説明して納得してもらって関わっていただいており、文化・芸術やアーティストを、まちを活性化する「道具」だとは思っていない。アーティストたちを巻き込

まないと強度のある場がつかれないので、協力してほしい。そして彼らアーティストに対してもそうした場に参加することで新しい作品を生み出したり、新しい活動につながるような場にしてもらいたいと常々思って接している。

- アーティストやアート作品も「消費される」といった弱い存在ではなく、人が来る場、ハレの場に新しい「何か」をぶつけている。彼らも場や機会を活用しており、そうしたWIN-WINの関係がいいと思っている。私も利用し、彼らも利用している、そんな関係性がいい。
- それは企業とやるときも同じである。本当のパートナーシップとはそうでなければいけないと思っている。どちらかがどちらかに依存していると、すぐに駄目になる。イーブンな関係性を築くことが重要。
- 作品にももっと多様さがあっていい。アート業界の人が思っている純粋芸術のような作品を担保するあり方もあるが、作家によってはもっと違う可能性や広がりを持っている時代になってきている。人やまちと関わり、何かに自分のアートが貢献することを、ある面ではむしろ求めている作家も増えてきているような気がする。そうした流れの中においては、彼らや文化・芸術を単純に都合よく利用していることにはならないと思う。
- 社会の課題に対して文化・芸術を持ち込むときに、課題に立ち向かうには高いハードルがある。プロセスの中でさんざん議論し、アーティストが真剣に取り組んで、新たな自分の価値観やアイデアをぶつけてくる。そこから新しい作品、強度を持った作品が生まれてくる。社会の課題と向き合うことを糧にして成長する作家もいると思う。

(2) アーティストへのインタビュー

日時:2011年10月26日(水)10:30~12:00

会場:3331 Arts Chiyoda

対象:藤浩志(美術家)

1. 自己紹介

- 1988年〜92年までは都市計画コンサルタントの会社に勤務していた。当時のまちづくりは、ハードとソフトという考え方が主流であり、ハードよりもソフトが重視されていた。しかし、そこに違和感を覚えていた。
- 1993年から、鹿児島でカフェを経営しながら地域活動の中で活動を展開しようとしていた。あるとき、水害が起こったことで河川の拡幅工事が行われることになり、歴史的建造物の石橋が撤去されることになった。それに対して、アーティストや音楽家をはじめとした文化人が反対運動を起こした。私はその運動に巻き込まれて、カフェは運動の拠点となっていく。
- 座り込みをしたり、ストライキをしたり、石橋の拓本をとったりという様々なデモンストレーションが行われたが、結局、石橋は撤去されてしまった。そこで、仕組みに介入しないことには地域は変わらないということに気付かされた。
- その後、鹿児島を離れて福岡に移ったが、仕組みに介入するような表現を模索しなければ面白くないし、何も変わらないと思っていた。また、仕組み自体を変えていくことで、空間も変わっていく。そういうつくり方ができないかなと考えた。
- 1996年から「OS(オペレーション・システム)」に注目した。「OS」という意識や概念は80年代の半ばまではなかった。コンピューターが普及してきて、OSという仕組みに対してちょうど向かい合っていたのが90年代である。その中で、地域や自治体の仕組みにOS的な発想がないと思っていた。
- 私は作品や活動に対して「もの」と「こと」という考え方をしており、物をつくるのではなく、事柄をつくることに「OS」と同じくらい興味があった。そのときに、広島で「灰塚アースワークプロジェクト」に参加した。そこではどうやって仕組みに落とし込んでいくかを考えていた。
- 1998年に博多で「博多灯明」という灯籠の祭りを行ったときに、初めて物事ではない仕組みの表現を

試みた。「OS的表現」と言い始めたのはそこからである。

- 仕組みを作ることで、そこにいろいろなアプリケーションが発生していく。地域の人々の主体性をいかに引き出して、「地域の人々が主体的に物事を行うような状況」を生み出しながら、そのまちをつくっていくかなければいけない。そのためには、OSなしでまちをつくったり、イベントを行ったりしてはいけないと思っている。いろいろなアプリケーションが発生する仕組みがなければいけない。また、そのOSをいれるためのハードウェアというものがあり得ると思っている。
- どんな空き店舗でも空きビルでも、そこにOSを組み込むことで初めて機能する。しかし、ここでの仕組みは人のつながりであり、目には見えない。それはコンピューターでも同じことである。OSが変わることで、例えばデスクトップが変わり、デモンストレーションが変わり、そこから目にみえる形が変わる。
- デモンストレーションが重要である。それによって、いかに仕組みが変わったかを見せることができる。それが私たちアーティストの役割ではないかと思っている。
- システムを構築するためには、何らかのツールが必要となる。ツールは何でもいいと思うが、その地域ならではの、そのシステムならではのふさわしいツールを設定することが大切だと思う。私の場合は廃校や灯明というツールを作り、それを使って場をつくる、または場を使っていくということを行ってきた。
- その延長で、家庭からでた廃材を使って何かできないかということで「Vinyl Plastics Connection」を始めたのが1999年である。さらにそこから「かえっこ」が生まれてきている。
- 私は自分の作品や活動を、いろいろな人が使っていく、いろいろなアプリケーションが発生する仕組みとして提案したかった。仕組みを提示することでまちの風景が変わっていくのではないかと確信したのは1999年以降のことである。
- 防災も「かえっこ」のアプリケーションのひとつとし

て出てきたものである。その中で重要視しているのが、そこから活動が発生してくることである。

- 「イザ！カエルキャラバン！（以下、カエルキャラバン）」が、完成されたプログラムで、それをプラス・アーツのようなNPOが持ち込んでいくだけであれば、何も面白くない。その地域独自のアプリケーションをいかに発生させるかという想いが強い。そのための方法として、地域を読み込むことや、ディスカッションをする。そのことが、これから何かを作ろうとする人を集めてくるような仕組みになればいいなと思っている。

2. プロジェクトを開始した経緯、動機

- 神戸市が震災10年(2005年)に向けて「神戸からの発信」事業が検討された。委員会が開かれて、そこで子ども向けのワークショップをやりたいということになった。委員の何人かが知り合いで、かえっこをやればいいのではという話になった。
- かえっこが始まってから5年が経ち、すでにいろいろところで開催されていたので、ただやっても面白くないなと思った。当時は、ワークショップを開発することに興味があり、震災事業で子どもと一緒に何ができるかなということを出発点として考え始めた。
- 震災から10年が経ち、震災の風化をなくすにはどうすればいいのかということがテーマだったが、そこで思い出したのは漫画の『はだしのゲン』だった。漫画で体験したことを追体験する感覚があり、漫画メディアはとても強い。『はだしのゲン』的なものが必要だと考えたときに、メディアを変換する必要性を感じた。
- 震災後にたくさんの手記や体験談が出版されたが、10年が経ってみて、改めて子どもが見られる状態、もしくは一般的に広まる状態になっているかといえそうではなかった。子どもが分かりやすい形にメディアを変換することを思いついた。ゲームや絵本、小説、web上の何かでもいいが、変換することを若いクリエイターと一緒に作っていいと思った。
- どの地域でも避難所が指定されているが、普段はそこで寝泊りしたことがない。非常事態になったときにはそこで煮炊きをして、暮らさなければいけない。避難所指定されている小学校や公園でキャンプやバーベキューを訓練として行うことで、地域のつながりもできるのではないかと考えた。
- 採用されなかった案には「震災寄席」というものもあった。寄せ鍋のように、公園の中に煮炊きにも使える遊具が置いてあり、いざというときにはそれで煮炊きしつつ防災がらみの寄席を楽しむというプログラムだった。防災という枠にとらわれずに、日常的に使えて、年に1度くらいは実際に使えるものが何かできないかということでアイデアを膨らませていた。
- クライアントからオーダーされていたのはかえっこだったので、これらのアイデアは実は余計なことであつた。しかし、余計なことをするのが私たちアーティストの仕事なので、かえっこだけを実施するつもりはなかった。
- そこでコーディネイトを、現在のプラス・アーツの理事長の永田宏和さんをお願いした。彼とは前から一緒に仕事をしたいと思っていた。それは、彼がゼネコンの出身で、建築、都市計画、地域づくりをやっているだけでなく、アートに興味を持って、C.A.P HOUSEも立ち上げた経緯もあったが、結局C.A.Pから離れてアートやアーティストには何ができるかという根本的な疑問を持っていたからだつた。
- その疑問を持つことが私にとっては重要だった。これまでのアートやアーティストの概念に捉われず、これからの地域社会でアートがどのように使えるか、アーティストに何ができるかを知ろうとしていた。
- 永田さんに調整役となってもらい、防災の10年事業のかえっこのワークショップをやろうと動き始めた。私がプログラムのアイデアを出し、永田さんが組み立てていった。子ども向けプログラムを行うにあたって、震災時に子どもだった大学生たちにディスカッションしてもらい、今の子どもたちに対して何を伝えたいかリサーチする必要性を感じていた。永田さんが関西圏の大学を回り、学生たちに声を

かけていった。

- 今まで出版されてきたなるべく多くの手記を集めて学生に読み込んでもらい、子どもたちの心に一番響くのはどれか選んでもらい、新しいメディアに変換するプログラムを組み立てた。
- 結局、公園や学校といった避難所となるところを回り、手記を変換したメディアの展示を行い、同時に学生が開発した防災ワークショップ、シェルターづくり、宿泊体験、非常時のクッキング体験など、盛りだくさんのプログラムが計画された。
- 「かえっこ」はおもちゃを物々交換する仕組みであるが、それよりもそこで行われるワークショップの内容が重要である。ワークショップの内容をどうやって立ち上げ、そこにどうやって人を参加させるかというプロセスも重要だが、結果としてその防災プログラムに今までやってきたかえっこをドッキングすることができた。
- 初年は避難所に指定されている小学校や公園で震災10年事業のイベントとして夏の間、神戸市内7箇所で行った。
- 集客にむけて、防災プログラムをやるということは前面に出さず、「神戸カエルキャラバンやります。おもちゃ持ってきて集まってね。」と発信していった。初回は神戸のアリーナで行ったが、数千人が集まり、バンクには長蛇の列ができ、入場制限あり、25箇所のバンクを開いても2時間待ちという想定外の事態が起きた。オークションは2箇所で2時間行った。ボランティアスタッフも大学生を中心に100人近くいた。
- そのときは神戸市内の全小学校にチラシを配ってしまったので、このようなことが起きてしまった。防災プログラムなら反応しない人も「いらないおもちゃが交換できるなら行くか」ということでかなりの人が来てしまった。それ以降は地区を絞って広報を行った。
- 六甲道南公園という防災公園は通常は泊まれないのだが、オープニングイベントということで、自分たちで作ったシェルターに泊まることができたり、非常食を食べたり、サバイバルクッキングのワークショップを行ったりした。学生が的あてゲームやバ

ケツリレーを考案し、それぞれが担当となってプログラムを進めた。

- 全7回で、通常の防災イベントでは集まらないほど多くの子どもが集まり、それぞれのプログラムでも成果を感じていた。
- カエルキャラバンは、子どもや地域で防災活動を行っている人たちのためのワークショップという面もあるけれども、そこでワークショップをつくる人のためのワークショップであるということが大きい。ワークショップを重ねることで、一つひとつのワークショップを検証し、次に活かしていくというステップを踏むことが重要だと考えている。私にはそれを投げかける役割があると思っている。
- 2005年に初めて開催してみて、相当な成果があったので、やはり継続していきたいということを永田さんと話した。さらに、震災10周年事業の名前が「神戸からの発信」であったので、全国へと発信すべきなのではないかと考えた。
- カエルキャラバンの「カエル」というのは「イザ！」という危機的状態をどうにか変えるという意味を持っており、それが「キャラバン」形式でいろいろなところを回っていくというイメージだった。神戸市内だけでなく全国を回っていくためにはNPOを立ち上げる必要があるのではないかということになった。永田さんが準備をし、2006年にNPO法人プラス・アーツが設立した。
- プラス・アーツという名前は、私のアートに対する考え方が反映されている。私にとってアートというのは人生の中でも、様々な活動の中でも主語になったことがない。「アートをやる」とか「アートのためにやる」ということに興味を持ったことはない。防災でも環境でも何でもいいのだが、困った状態があって、そこに常識を超えた思いもつかない発想方法や考え方、手法等の技術を持ち込むことに興味がある。
- 地域社会や日常生活に常識を超えた思いもよらない素晴らしい手法、つまりアーツをプラスしていくというのが、プラス・アーツの考え方である。また、「アート」ではなく、様々なことを含む複数形の「アーツ」を使っている。アーツという考え方はプラス・

アーツの理事も務める京都橘大学の小暮宣雄先生のご意見でもある。

- 「プラス・アーツ」の理念のもと、防災だけでなく、環境や教育、地域づくり、まちづくりに今までとは全く違う手法を持ち込む仕組みや活動の種ができないかということで動き始めた。
- 永田さんはデザイン寄りの思考であり、普及や浸透と言った面でデザインの発想は重要だが、私からすると常識的な発想で突拍子もないものではない。アーティストの発想にイラストレーターや建築家が絡んでくることでデザインの発想がプラスされ、カエルキャラバンが生まれた。
- 素材の力は大きい。「かえっこ」ではおもちゃというツールが力を持っていて、子どもも大人も惹き付けられる。「かえっこ」は単なるイベントだけではなく、家にある大量のおもちゃをどうにかしたいという思いにマッチしていることで集客につながっている。

－ 防災というストイックなテーマに楽しさを持ち込むことについてどのように考えているか？

- 最初から、防災という重いテーマにどう取り組むかということにはぶつかっていたが、防災のための訓練が大変であってはいけないという想いがあった。防災はいざとなったら大変だということを知るための間口として訓練は日常的でなければいけない。日常的に行うためには、大変なことだとみんな離れていくので、楽しく、魅力的で、面白いことでなければならぬ。もっともっと参加したくなるようなものでなければならぬ。
- 事実を体験しているのかということはとても重要である。いざというときに出てくる咄嗟の発想や、自分を救うための判断は知っていること、イメージでできることからしか出てこない。カエルキャラバンでの毛布担架やジャッキアップゲームも、遊びとしてやっていたことが身に付いて、とっさのときの動きにつながっていくと思っている。何が生き延びるためのヒントになるか分からない。
- 私の実体験に基づいているのだが、どんなイメージが自分の命を救うか分からない。より多くの経験

とより多くのイメージを持っておくことと、絶対生き延びるという自信と確信を身につけなければならない。

- カエルキャラバンのような防災イベントに参加していることは、ひとつの自信になるかもしれないし、その中で様々なことを体験していることが、自分が生き延びる根拠となればいいなと思っている。
- 災害は予想を越えて大変だということを知らなければならないし、それを乗り越えることは大変だということも知らなければならないし、同時にそれを知る為の防災は楽しくなければならない。人間の感性を鍛え、イメージ力と行動力を身につける多様なプログラムが必要で、それが瞬間的にでることが重要である。

3. プロジェクトの感想、参加者の変化

- 「かえっこ」をやり始めた当時に注目していたことは2点である。一つは、中心市街地に子どもの場所がないということ。初めて「かえっこ」をやったときに、子どもがたくさん集まってなかなか帰ろうとしなかったのだが、昔に比べて子どもが集まれる場所がないということに気付いた。
- もう一つは、自分の子どもがいつもは全然働かないのに、かえっこの中ではよく働いた。よく考えてみると、子どもに責任を与えて、自分でやっていいよというチャンスを与えていなかった。
- 「かえっこ」はまちの中の使われていない場所を使うことと、子どもたちが自主的に動く仕組みを作ること、そこに大人が巻き込まれ、支える形で遊びを作っていくようにした、
- ワークショップをやるといっても普通はなかなか人が集まらないので成立するのが難しいし、ワークショップを企画するのも大変だが、「かえっこ」の仕組みの中ではお手伝いをはじめとして何でもワークショップになってしまうのは面白いと思っている。

4. 文化・芸術を活用した地域活性化について

- 文化・芸術が上からの視点である場合は、たいてい失敗する。文化・芸術というと、どうしても完成された質の高い物に視点が向いてしまう。様々な活動がある中で、評価されたものだけが淘汰された文化・芸術として残ってしまい、プロセスを抜きにした、物としての価値だけが語られることが多い。そういう意味で文化・芸術になりきってしまったものが地域にどう活かされるのかということに関しては疑問を抱いている。
- 文化・芸術の中の「つくる力」、つまり流通している既存のものではない何か新しい価値観を立ち上げていく力が、時間を経て「文化・芸術」と呼ばれるようになっていく。本当はその新しい価値を立ち上げてゆく力が重要なのだが、あたかも完成されたものが重要かのような誤解や勘違いがある。
- 文化・芸術を活かすと言ったときに、優秀な音楽家を招いてコンサートを開くことや有名な彫刻家の作品を置くことになりがちなのはとてもつらい。一部にはそういうことが必要な場合もあるが、多くの地域に必要なのはそれではない。
- 1997年に福岡でパブリック・アートの冊子を作っていたときに書いたのが、各地域にエリアがあって、それぞれが属性を持っているということである。歴史的な保存が必要なエリア、1年単位で変わらなければならないエリア、季節ごとに変わらなければならないエリア、毎日変わらなければならないエリアというように、様々なエリアがある中で、そこにどう動くものを持ってくるかというコーディネートが重要である。
- 例えば、完成された価値観のものは時代的、歴史的に「固定させよう」というところには有効かもしれないが、駅前や商業施設など常に旬のものを追いかけている場所では流動性や先鋭な感覚を持ち込む必要がある。さらに、つくろうとする態度そのものが必要なエリアもある。
- 作家にも作品にも活動にも旬と賞味期限がある。旬が死後にじみ出てくる人もいれば、早いうちに訪れその後枯れる人もいる。これから旬に向かう

人もいる。また、賞味期限は青いときから熟していくまでどんどん移り変わり、味わい方はそれぞれ違う。それを読み込んでいってどう地域社会に配置していくかということが重要である。それらをどう活かすかということがまだまだ語られていない。

- 今はアートプロジェクトが盛んに行われているが、全体にバランスよく関われる人が少ない。現代美術なら現代美術、コミュニケーションならコミュニケーションというように、それぞれの分野に接点がない。もっと地域を俯瞰しつつ、それぞれの視点から物事を見て、価値を創っていく必要がある。
- 私にとって「文化・芸術を活かす」とことは、住民がイメージ力を持つことと、活動力を持つことだと思っている。現状を抜け出すためのイメージと現状から動くための活動力を持っていることは幸せになる力を身につけているということである。
- イメージは与えられ続けているものではあるが、自分からイメージをつくりだすことはなかなか難しい。イメージの中で泳がされている中で、そこから一步を踏み出すのが活動力であり、表現力である。そういう力をありとあらゆる人が身につける、それが本当の意味での「文化・芸術を活かした地域づくり」であると思っている。
- 自分がイメージを持って自分の価値観で行動できる人が地域の中で育っていくことが重要であって、それは生活者や子どもたちの中に浸透しなければいけない。
- イメージをつくる授業というのが地域社会にない。子どもたちは頭や体を鍛える授業を受けているが、心を育てる授業はほとんど受けていない。感性を育てるということは心を使うことである。それは日常生活や地域の中で、どんどんやっていかなければいけないと思っている。「つくること」を前提とした文化・芸術という活動がその点においてとても重要になってくる。
- ー 様々な芸術の分野の中で、特に現代美術がまちづくりと相性がいいように思われるが、その点をどのように考えているか？
- どのジャンルがまちづくりとあうのかということに関

してはコーディネート次第だと思っている。しかし、現代美術と呼ばれているものは、ありとあらゆるジャンルからはみ出たものであることが多い。音楽をやっている中でも現代美術と呼ばれる分野で活動する人はおり、その他の分野からもそれぞれの分野で収まらない人が新しい活動を試みようとした結果として現代美術とフィールドで活動している場合が多い。

- 私は表現と仕組みという考え方をしているが、表現することは日常の自分から何か一歩踏み出して超えようとすることである。それらの表現をどう社会化していくかというときに、そこには必ず社会のシステムがあり、フォーマットがある。以前は、音楽ならばコンクール、絵画ならば公募展やグループ展、美術館やギャラリーというものがあつた。そこに新たなフォーマットとして地域系のプロジェクトが出てきた。
- 地域には空間だけでなく、場があり、人があり、仕組みがある。そこにどう落とししていくかということには、従来の表現活動とは全然違う能力を使わなければいけない。その面白さがあるのではないだろうか。
- 地域の中でやることで、演奏ということも今までとは違った接点を持たなければならなくなり、単なる演奏者、演奏会を離れて別の手法となる。それが結果として現代美術という仕組みの中で捉えられている。
- さらに違う側面から見ると、地域を読み込むこと、地域素材を再発見する視線は、ある意味では風景や空間に対するアプローチである。そこに潜んでいる歴史を含め、そこに存在するあらゆる現象を読み取り反応し、瞬間的に何らかの形に表出する技術は美術畑の人間の得意とするところでもある。一般的にはつまらないものや価値が付けられていないものに対して、面白みを見出す属性を持っている。
- 過去の経済成長が前提となっていた時代は、新たなものを作って地域に投資していくというやり方だったが、予算もなくなり、経済成長という前提を失った今、そこにあるものを活かしながらやるしか

ない。

- いじりたいという思いがある。自分で手を施したい。プランナーや建築家、コンサルタントやデザイナーは、空間を変えたいと思ったときに、プランや図面、予算を作るが、僕らの場合はいきなりその場にあるものに触って、実際に何かを作ってしまう。自分で手を動かして作れるというのは空間に対して直接アプローチができるので強いと思っている。
- 図面を書いて、予算化して、会議をしてというプロセスを踏まずにそこにあるもので作れる力は大きい。それは美術だけでなく、音楽なら音を出すこと、身体表現なら体を動かすことで直接アプローチする力を持っていることは重要だと思う。
- 地域を巻き込んで、地域の中から主体的な動きを導き出して地域を変えていくということと、自身の創作活動とのバランス感覚が必要ではないか？
- 地域を「面白い」と思ったことが関わるきっかけであつた。当時、作品を制作するにあたって、空間に対してニュートラルで何の属性もなく、そこに自分のイメージをぶつけろと言われたが自分から湧き出てくるものなど何もなく、描くことができなかった。しかし、まちに一歩出ると面白いものがあつて、そこに対して何をしようかという対話の中からやりとりができることが面白かつた。
- 対話の中からイメージすることが自分のやり方。その手法は一般化されないかもしれないが、いろいろな人やいろいろな空間、建物、組織、属性と対話することでイメージが湧き出てくる。だからイメージが枯れるということがない。
- 若いアーティストをはじめとして、何か湧き出てくるものを持っている人たちにも、まちのプロジェクトに接してほしいと思っている。私の場合は日本の中にアートマーケットやアートのシステムがなかったのもので、地域の中でやらざるをえなかったというところがある。また、ギャラリーの中だけでは、「いいね」、「面白いね」という言葉だけで終わってしまつて、その次の展開が見えなかった。
- 同じ絵でも肉屋に掛けるか、福祉施設に掛けるか、病室に掛けるかによって見る人との接点が違つて

アートのシステムを否定しているわけではない。私自身はギャラリーとも付き合いがあるし、アートマーケットで活動することもある。しかし、どうなるかわからなさで言えば、地域にでることの方がより混沌としている点で魅力的である。

- ・以前から「風土」という話をしているのだが、地域という「土」があり、アーティストはそこに種を運んでくる「風」に例えられることが多かった。芽が出て実を結ぶかは分からないが、いろいろな風が吹いて多種多様な種を蒔く必要があるのではないかという

考えのもと、1997年から「PLANT」というミーティングテーブルを行っている。

- 植物が成長するためには、さらに水と光が必要である。光というのは「光を当てる」という言い方をするように、評論や批評やメディアの役割だとすると、その中でも、最近注目しているのは「水」である。
- 「水」の存在は、「興味・関心・好奇心」だと思う。水の人は、例えば、純粋に「面白い」と思う活動を面白いがる人である。水の人たちは何の立場もないので、何の責任もない。だから面白くないとどこかに行ってしまう。面白いものだけに群がる。私の周りにも無名の「水」たちが常にいて、その存在によって私自身の活動はつくられてきた。
- 水というのはいろいろな状態があり、蒸気にもなれば、水滴にもなり、大きな流れにもなる。アイドルに大量に群がる群衆という水もあれば、些細なものに水滴を注ぎ続ける人もいる。
- アーティストと地域の話はよく語られるが、その周りにある水の存在についてはあまり語られていない。実は物事を育てる上では水の存在がとても重要である。越後妻有トリエンナーレや瀬戸内国際芸術祭のボランティアである「こへび隊」や「こえび隊」は水の人であり、彼らをどう集め、水を流し、育てるかという、水をコントロールすることが必要である。
- いくらアーティストが地域に入っていっても、そこで面白がってくれる、何の利害関係もない人が集まってこなければ、ものごとは成功しないのではないだろうか。
- 地域活性化という言葉がよく使われるが、最近は「豊穰化」という言葉や、「いかに醸すか」という言葉を使っている。これからのキーワードとなるのは「発酵」である。地域が豊穰化していく上で、発酵してゆく上でもやはり適正な規模の水の存在は重要である。
- 今やろうとしているのは、地域の中にすでに種はあるということを前提に、それを面白がる水の存在としてアーティストがいてもいいのではないかということである。面白がることで、種が育って発芽し、それが土に戻り発酵していく。その中で、地域という

土壌は豊かなものになってゆく。今まではアーティストが風であり、アートという種を運んできたが、アーティストが触媒としての水の役割を担い、地域の無数の種を発芽させるのもひとつの新しい表現であると考えている。

- 誰かが面白がるから、私たちアーティストも活動が続けられる。誰も興味を持ってくれないと何もできない。もちろんアート関係者やメディアも興味を持ってくれるが、彼らは仕事として興味を持っている部分がある。何の仕事でもないのに面白いと寄り添ってくれる人に支えられる面はある。その多層な人の関係の中に面白い状況が発生する。そのトータルな環境をつくる視点が行政には求められると考えている。

(3) 市職員へのインタビュー

日時:2011年2月18日(金)10:00~11:00

会場:神戸市役所1号館12階(企画調整部総合計画課)

対象:都築由美(神戸市企画調整局総合計画課)、秋田稔之(神戸市消防局)

1. 事業の目的と内容について。

都築(以下、「T」):「イザ!カエルキャラバン! (以下、カエルキャラバン)」は、「かえっこ」と防災のワークショップを組み合わせたプログラム。「かえっこ」は、いらなくなったおもちゃを持ってくとポイントがもらえ、誰かが持ってきた新しいおもちゃと交換できる。防災ワークショップに参加することでもポイントがもらえる。ポイントがたまればオークションにも参加することができるというシステムである。防災ワークショップではカエルをモチーフにした備品を使って、消火器やジャッキの使い方、簡易担架の作り方などを学び、防災を体験してもらう。

震災から10年目に「震災10年 神戸からの発信」という震災の経験、教訓や復興への取り組み、これからの神戸づくりを発信するという事業の一環として始まった。その後、「震災10年 神戸からの発信」の趣旨をふまえて「神戸からの発信ネットワーク」が平成18年に設置された。こちらでは、特に地域の人々に防災の取り組みを行ってもらうため、「カエルキャラバン助成」という取り組みを始めた。

若い人が地域の防災訓練に参加しないという問題を解決するために、この助成の対象は子どもたち向けのプログラムを付加した防災訓練としている。子どもが参加することで、その保護者のような若い人の参加を促し、地域の活性化を目指している。また、「神戸からの発信ネットワーク」主催でデモンストレーションとして年1、2回ほど「かえっこ」と防災プログラムを組み合わせたものを実施している。

秋田(以下、「A」):防災訓練を子どもと一緒にやることで、地域活性化や震災の経験や教訓の継承に役立っていると考えている。

2. 事業の背景、経緯

T:「震災10年 神戸からの発信」では「次世代を担う子どもたち」というのもテーマとなっていた。震災から10年が過ぎ、震災を知らない子どもたちも多くなり、震災の経験が風化するのを防ぐことが課題のひとつ

つとなっていた。子どもたちに伝えていくというのが事業の責務となっていたことがカエルキャラバンのきっかけなのではないか。

– 震災という深刻な状況を「楽しく」伝えることには、議論にはならなかったのか?

T: 深刻な状況を伝えることも重要だが、防災を「楽しむ」ことで記憶に残るのではないかと。

A: 楽しめることで子どもたちがより参加しやすくなり、防災にふれる機会がより多くなるのではないかと。防災の広がりという点では楽しむことも重要だと思う。神戸ではシリアスな訓練もやっている。楽しいものとシリアスなものを融和させていくことで防災が広がるのではないかと。

– カエルキャラバンを取り入れたことで地域にどのような変化が起こったか?

A: カエルキャラバンでは子どもが毎回楽しんで参加している様子が見られる。子どもが地域活動に参加することによって地域が活性化していると感じている。

3. 事業の実施体制

T: 主催事業のカエルキャラバンはNPO法人プラス・アーツが企画・運営を行っている。地域でのカエルキャラバンは助成のための審査、承認を「神戸からの発信ネットワーク」が行うが、プログラムの企画・運営は地域が行っている。

「神戸からの発信ネットワーク」は「震災10年 神戸からの発信」推進委員会のほとんどのメンバーが継続してメンバーとなっており、彼らが事業を企画している。行政は事業を行うのではなく、ネットワークづくりやサポートに取り組んでいる。

メンバーは神戸市の各分野で活躍している方であり、それぞれの強みを活かし、カエルキャラバンだけでなく、映画の発信やウォーターフロントでのイベントなど様々な活動を実施している。

「震災10年 神戸からの発信」推進委員会のネットワークで作り上げており、トップダウンでも行政が案

を作るのでもなく、「協働」をテーマに、行政が他の組織や団体と一緒に作り上げている。なので、メンバーには主体的に参加してもらっている。

A: NPO法人プラス・アーツと教育委員会と消防局では「防災教育支援プロジェクト」を立ち上げ、子どもと地域と消防が連携して子どもへの防災教育の支援をどのように行っていくか話し合った。その中でプラス・アーツから芸術やデザインによる組み入れたプログラムを提案いただいた。プロジェクトの成果として、防災訓練メニューなどが載ったスクールガイドを作成し各防災福祉コミュニティに配布している。防災教育支援プロジェクトの立ち上げもカエルキャラバンと同様にトップダウンではない。地域が抱える防災の課題を考えた結果、教育委員会や学校やプラス・アーツといった他の組織と連携する流れとなった。

－ 防災教育支援プロジェクトを行政だけで行うのではなくNPOであるプラス・アーツを入れた経緯は？

A: 今までカエルキャラバンでできたネットワークがきっかけではないのか。

T: 「震災10年 神戸からの発信」事業でカエルキャラバンを行政と共に実施したのがプラス・アーツであり、その後もプラス・アーツが各地でカエルキャラバンを行っており実績があったからではないのか。

－ 他の部局と話すときに困難なことはないか。他の自治体でも同様の取り組みをする場合、体制や予算も含めどのような準備をすればよいのか？

A: 神戸は震災を経験しており、他の部局も防災への意識は高いので連携は取りやすい。

T: 行政と推進委員会のメンバーが対等な立場で意見を言い合えるような信頼関係が必要なのではないか。また、地域に入っていくために地域のことを取りまとめているような方を紹介してもらい、その方と話をして、その地域に必要なことを互いに考えていきながら事業を進めるべきなのではないか。

4. 事業による成果や効果

T: 助成事業をきっかけに子どもたちに防災訓練に参加してもらおうという意識が生まれたと思う。助成事業も発信ネットワークも今年度で終了してしまうので、金銭的サポートはできないが、カエルキャラバン用の備品の貸し出しは継続していくつもりである。

A: カエルキャラバンの訓練メニューはスクールガイドに載っており、地域の防災訓練でもこのガイドを活用しているので、継続していくとは思う。

T: 地域だけでなく小中学校を巻き込んだ防災訓練が増えてきている。学校行事としてカエルキャラバンを行っている学校も出てきた。新たな形の地域交流が生まれてきているのではないか。

A: 神戸には191の防災コミュニティがあるが、昨年12月にインドネシアでも神戸の取り組みに共感して防災福祉コミュニティが結成され、カエルキャラバンが広がっている。訓練のコンテンツのよさはインドネシアの人々にも伝わっていた。

T: 震災で学んだことに、防災の知恵も必要だが顔と顔が見えることも必要だということがある。この取り組みによって地域内での顔見知りを増やすことができた。

－ 防災とアートを結びつけたことによってアートに対する印象は変わったか？

T: アートは高尚なイメージがあり、身近なところに「使う」ことができるというのは驚きだった。

A: 行政だけだとどうしても固くなってしまうので、アートやデザインを用いることで市民が親しみやすくなるのではないか。物だけでなくシステムをデザインすることもデザインだと思うので、様々な面で取り入れていきたいと思う。

T: 堅苦しいことが苦手な子どもには、アートによって「親しみやすさ」が増したことで参加しやすくなったといえる。

5. 現在の課題、将来のビジョン 等

T:発信ネットワークによる助成事業はあくまできっかけでしかないので、あとは地域が今まで作られたネットワークを活かして活動を継続していったほしい。

A:プラス・アーツは初めにノウハウを教えてくれるだけで、そこから先は地域が自分たちでやっている。防災訓練は継続して行っていく。そこにこれからもカエルキャラバンの訓練メニューは取り入れていきたい。防災訓練の参加者数の正確な統計はとっていないが増えたという実感はある。

(4) 主催団体へのインタビュー

日時:2011年11月8日(火)10:30~12:00

会場:日野市社会福祉協議会

参加者:浜野智之(日野市社会福祉協議会)

1. 自己紹介

- 日野市社会福祉協議会に入職して8年になる。社会福祉協議会は全国組織であり、社会福祉法という国の福祉に関する基本法の中で、全国の都道府県、市区町村に設置が義務づけられている。
- 立場としては、社会福祉法人なので公務員ではないが、法律で位置づけられているということもあって、公的な役割と民間的な役割の両者を担うことが求められている。
- 地域福祉の推進を図ることが組織の目的である。地域の中で、個人から団体、企業までその地域に住んでいる様々な立場の人が、あらゆる社会的な場面に参画できるように支えあっていく仕組みを作っていくことが求められている。
- 私自身は大学卒業後、すぐに社会福祉協議会に入職している。大学では社会福祉系の学部ではなく、商学部で貿易やマーケティングを勉強していた。社会福祉協議会の仕事に魅力を感じて、こちらの道に進むことにした。
- 自分たちが行動を起こすことで、まちが変わっていくというところに魅力を感じている。地域福祉の推進という言い方が難しいので、説明のときには「福祉をキーワードにしたまちづくり」と言っているが、人と人とのつながりによって生み出された効果がまちなかに広がっていき、まちが少しずつ変わっていくのが大きな魅力だった。
- 個人的には文化・芸術に魅力を感じている部分がある。小さなときからピアノを習っていたので、音楽には比較的興味があったが、最近では、同じことをやるにしても、そこにアートを加えることで、活動する団体のカラーやスタイルが少し出てくることに気付いた。ほんのちよつとの違いなのかもしれないが、見る人には伝わっていると思っている。

2. 事業の目的・内容

- 私が所属しているボランティアセンターは、ボランティアをしたいという人とボランティアを欲している

人をつなぐのが主な役割となっている。ボランティアに関わる人々のコーディネイトや、ボランティア活動に必要な知識や技術、心構えを身につけてもらうための講座の開催、ボランティア情報の発信などを業務としている。

- 同じ地域に住む人々で支え合うという社会福祉協議会の目的に則って、学区くらいの地域にターゲットを絞り、地域の人たちの中で支えあいの活動を行っていく地域担当という業務もある。
- 地域担当というポジションは、他の社会福祉協議会では地域福祉推進係やコミュニティワーカーという言い方をしているところもあり、いろいろな呼び方があるが、どの地域にもある。
- ボランティアのコーディネイトの対象は主に日野市民だが、必ずしも日野市民でなければいけないわけではない。市外から日野市でボランティア活動をしたい人もいれば、市外でのボランティア活動をしたい日野市民もいるので、他市のボランティアセンターと連携しながら柔軟に対応している。
- 日野市で現在ボランティアセンターに登録している人で一番多いのが、年齢層では60代、次いで70代、20代となっている。性別では女性が圧倒的に多い。個人と団体で登録してもらっているが、登録者の人数は延べで1,800人である。日野市の人口が17万5000人なので、約1%強が登録しているという数字である。実感としては少なくはないが、登録していなくてもボランティアをしている人はいるのでボランティアをしたことがある人数というのはもっと多いと思う。

3. 事業の背景、経緯

- 市の総合防災訓練の中での社会福祉協議会の役割は、ボランティアの受け入れである。そのルーツになっているのが市の地域防災計画というものであり、その中で社会福祉協議会が災害ボランティアセンターを運営するという位置づけになっている。
- 3月11日の東日本大震災でも現地で大勢のボラン

ティアが活動を行ったが、その受け入れの多くを担っていたのが、現地の社会福祉協議会である。

- 防災や災害について日頃から意識をして訓練するという事はなかなか難しい。社会福祉協議会でも市民が参加できる訓練をする機会を作らなければと思っていた。
- ボランティアの受け入れ訓練を通して、様々な立場の人々がボランティアとして総合防災訓練の社会福祉協議会のブースに来てくれるようになった。防災に興味を持ち、防災をどれだけ身近に感じてもらうかということが、実際に災害が発生したときの事前準備として必要だと感じた。カエルキャラバンのプログラムを通して、もっと防災を身近に感じてもらうことが導入した大きな目的だった。

－ どのようにカエルキャラバンを知ったのか？

- 隣の多摩市でNPOがカエルキャラバンを開催して、そこに日野市社会福祉協議会の職員がボランティアとして参加したことが、プログラムを知ったきっかけである。実際にやってみていいプログラムだと感じた。
- その後、今年の夏の総合防災訓練でカエルキャラバンを導入しようと思い、もっとカエルキャラバンのことを知りたいと思った。そこで、プラス・アーツのシンポジウムに参加した。それがちょうど2011年の3月11日の大震災の日だった。
- － 防災という深刻なテーマに遊びを取り入れることに対する違和感や、拒否感はなかったか？
- 抵抗感こそなかったが、組織の中ではカエルキャラバンとは何だということから出発した。社会福祉協議会で、去年から市民防災講座を開催していたのだが、その目的は防災についてまずは「気付き」を得て、それを「行動」に移して、「継続」していくことであった。気付き、行動、継続がカエルキャラバンのプログラムであれば形にできると感じた。
- 防災はとても大切なテーマであり、今回の震災でもそれに改めて気付かせられたが、そうはいっても継続していくのは難しい。継続のためには飽きないような仕掛けが必要である。カエルキャラバンで

あれば、飽きずに続けていけるのではないかと考えた。その点は、組織の中で話をするときのポイントとなったところである。

－ セミナーとカエルキャラバンの当日の様子を見て、どのように感じたか？

- 今回のカエルキャラバンを一緒に開催したのは市民のボランティアだが、ある人は児童福祉の分野で子どもたちと関わる活動をしており、ある人は障がい者に関わる活動をしており、ある人は傾聴ボランティアで常日頃から高齢者や障がい者の話を聞いており、ある人は純粋に防災についての取り組みをしている。そういった様々な立場の人たちが集まった。カエルキャラバンのプログラムのメインは防災であるが、様々な立場の人たちがこれまで経験してきたことや考えてきたことがうまく融合することができたのではないかと感じている。こちらが思っていたよりもみんなが協力することができたのではないだろうか。
- オークションを仕切っていた方は普段は障がいのある方たちの余暇活動として、レクリエーションや季節行事などの様々なプログラムを通して健常者と障がい者が一緒に過ごしてみるという活動をされている。そのグループの中で様々な経験を行っているし、個人のキャラクターもあるので、オークションを仕切るのはあの方だとすぐに決まった。
- カエルキャラバンのプログラムは来ている人も楽しめるように作り込まれているが、子どもたちが楽しんでいるところに、ボランティアも一緒になって楽しめる。ボランティアは時に、義務感が大きくなってしまうこともある。その点もとてもよいプログラムだと思う。
- 当日はかなりの雨が降っていたので、どうなることかと正直不安だった。事前に地域の児童館4箇所でプレ企画と称して、カエルキャラバンのワークショップの一部とポイントの事前交付を行った。そこでの子どもたちの反応はよかったので、来てもらえればうけるなと思っていたが、会場が駅から遠いこともあり、かなり心配した。

4. 事業の実施体制

- カエルキャラバンに関しては、社会福祉協議会が日野市と協働して行い、主に市民ボランティアとのつなぎ役として機能した。
- たまたまなのだが、今回は日野市でも子どもを会場に呼びたいという思いがあり、プログラムがそこにうまくマッチした。カエルキャラバンをやったことで子どもたちが来たので、主催者である市からは好評だった。初めての参加者もいたように見受けられた。
- 普段から地域の団体やNPOと社会福祉協議会のつながりがあるのか？
- 社会福祉協議会は、地域のあらゆる主体と協力して活動を進めていくということを目的としているので、様々な個人、企業、機関などとのつながりをもって活動している。日頃培ってきた関係性が今回のカエルキャラバンの中でも活かされたと思っている。
- 今回、事前のセミナーや、カエルキャラバンに参加してくれた人たちは、社会福祉協議会の日頃の活動にも参加してくれており、顔のつながった関係である。セミナーの中でもこの人にここに参加してもらいたいと思うなど、当日の動きのイメージができていた。
- 今回は東京都の行っている「東京アートポイント計画」の一環で行われているようだが、都とはどのような関わりがあったか？
- 東京都の生活文化局に東京文化発信プロジェクト室というセクションがあり、地域で行われているアートに関する取り組みを選定して支援を行っている。今回はセミナーに対して助成金をもらい、それで事業を実施した。

5. 事業による成果や効果

- これまでの総合防災訓練では防災に関心がある人が積極的に参加していた。その人たちはこれからも地域の防災ボランティアの要を担う重要な存

在であるが、防災は一部の人の課題ではなく、同じ地域の住むすべての人たちに関わる課題なので、もっと裾野を広げていかなければと思っていった。

- 今回カエルキャラバンを取り入れるにあたって、防災を身近に感じる人を増やすという目標があった。参加者の様子を見ると、その狙いは達成できたのではないかと感じている。
- 参加した子どもたちの表情や、親の様子を見てどう感じたか？
- まずはカエルキャラバンってなんだという反応だが、その中から1人、2人参加し始めると、「なんだ？」が「なんか面白そうだ」に変わってきた。さらに自分が参加すると「面白いじゃないか！」と変わってきて、「気付き」の変化が見られた点が興味深かった。参加者が少しずつ増えていき、最終的にはかなりのにぎわいとなった。
- タイトルだけだと何をやるかということがよく分からない。組織内では、防災だという帰宅困難者のことを思い浮かべるスタッフが多かった。そこから、ワークショップとかえっこバザールというおもちゃの交換会がセットになったプログラムだということを説明する中で、スタッフの中でも少しずつ「気付き」が見られた。
- 隣の演習コーナーでは、警察署や消防署、自衛隊、市の担当機関などの専門職が訓練を行っていた。今まで、その中に市民のボランティアも関わっていたが、それだけでは実際に災害が起きたときに一人ひとりの市民が訓練の成果を活かすという点においては難しいのではないかと感じていた。もう少し、普段の生活の中で災害時に活かせる訓練を行いたいと思っていたことが、カエルキャラバンを通して実現できたのではないだろうか。
- カエルキャラバンを目的でやってきた人が、演習コーナーのプロの訓練の様子を見て、何か気付くこともあるだろうし、市の総合防災訓練の中で行うことによる相乗効果もあるのではないだろうか。
- 専門職が災害発生という場面で協力し合い、一つひとつ解決するプロセスを見せる演習も重要であ

るが、防災に関してはその地域の人々全員に影響があるので、一部の専門職が頑張っただけではどうにもならない。その地域にいる人々一人ひとりが意識を持って行動を起こさなければ解決していかないことである。

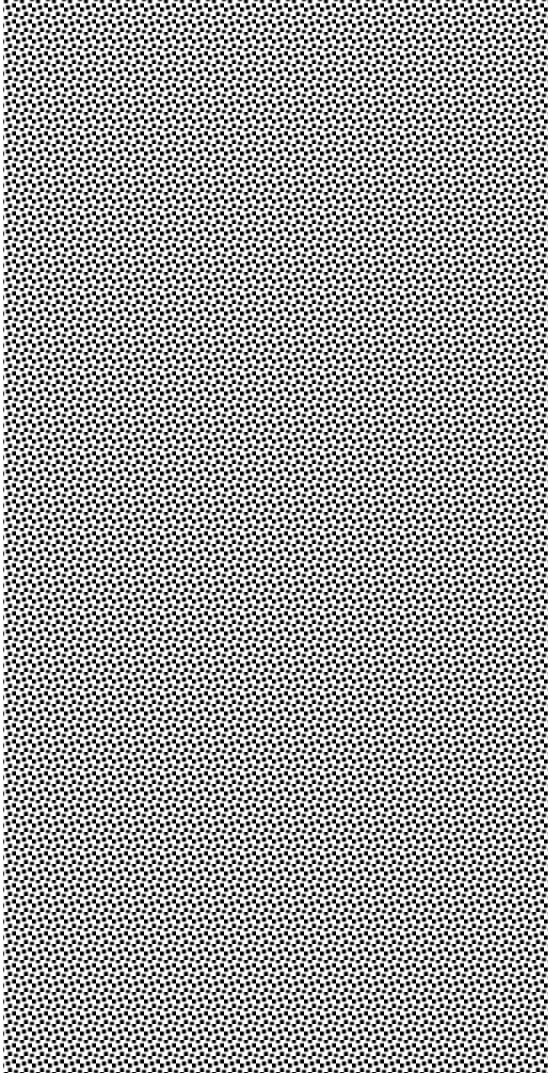
- 人によって違いはあるが、カエルキャラバンがそれぞれの人の中に何らかの意識を育んでくれるのではないだろうか。

6. 現在の課題、将来のビジョン 等

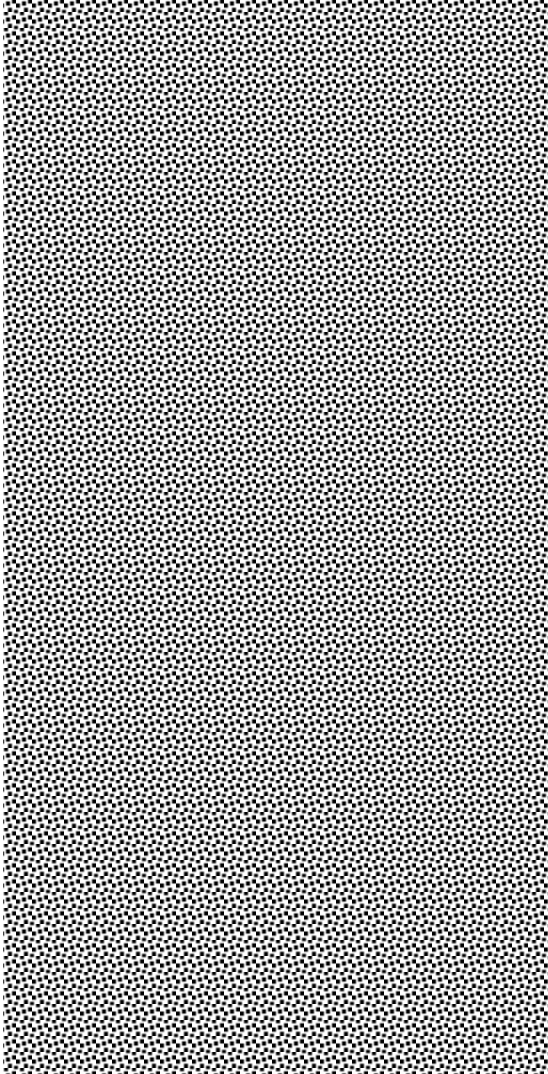
- 文化というのは、その地域に根付いているものだ。これまでの日野市の文化もあるし、今、日野市で日々生活している市民の私たちが作っていくこれからの文化もある。
- その中で、社会福祉協議会が地域福祉という福祉をキーワードにしたまちづくり、支えあいを進めることで、自然と培われていく文化もあるだろう。また、日野に住んでいる人々の特性を生かした、日野ならではの独自の文化もできてくるだろう。
- まちづくりや支えあいの活動は、普段の地道な積み重ねが多い。その中で、どうせやるのならば面白い活動や、時には人から「おっ」と言っていたいただけるような取り組みをしていきたいと考えている。
- 取り組みを続けていった結果、いい形のものできていたら、我々を含めて、活動に携わった人たちがやりがいや達成感を得られると思う。それを形として感じられるのが芸術ではないだろうか。
- いい形、いいものとみんなが感じられるものができ上がったときに、芸術性を持ったものになっているのではないと思う。また、芸術性があると人の目を惹くものになっているのではないだろうか。
- 社会福祉協議会の取り組みは日々の生活を支えているものなので、見てもらえれば活動の意味は十分感じてもらえると思うが、そこに芸術性というワンポイントが加わることでメッセージ性が生まれるという効果もあるのではないだろうか。
- カエルキャラバンに参加してくれることを想定していた若い世代の人たちは、どうせやるのだったら

かっこよくやりたい、楽しくやりたい、それが美しいならなおさらいいという思いがあると考えられる。そういう気持ちがあるならば、そこに寄り添って一緒に防災ということを考えていきたいと思っていた。

- 今回ボランティアに参加した人々が楽しんでいる様子がみられたのは、活動に芸術性を介していたことが大きいのではないだろうか。
- 防災という、絶対に必要なものにアートという面白さが加わることで、参加する人が前向きなエネルギーを出しやすい雰囲気が生まれている。その点で、カエルキャラバンに参加する人々が一緒にやることで面白いものが生まれてくるのではないかと期待感がある。
- 今回は参加できなかったのだが、地域内で聴覚障がい者にむけて手話を行っているサークルの方が、防災について何かしらを行いたいと言っていたので、来年のカエルキャラバンにはぜひ参加してくださいと誘っている。
- 例えば手話を活かしたワークショップにカエルポイントがつくことで、子どもやその親御さんが参加してくれて面白い形で防災に関われるだろう。様々な主体の人が参加するチャンスがあると思う。



参考事例集



参考事例一覧

掲載番号	企画名・施設名	団体名	地方公共団体の規模						開催地	関連する行政分野							活動の芸術分野					
			5万人未満の市町村	5万人以上の市町村	10万人以上の市	30万人以上の市	政令指定都市・東京23区	都道府県・全国各地		安心・安全	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他
1	アーティスト・イン・スクール	AIS プランニング						○	北海道全域			○	○		○		○	○	○	○	○	
2	中高年素人芸能サークル「生きがい探偵団」	生きがい探偵団					○		北海道札幌市		○						○	○	○			○
3	生活支援型文化施設コンカリーニョ	特定非営利活動法人コンカリーニョ					○		北海道札幌市						○			○	◎			○
4	市民創作函館野外劇「星の城、明日へ輝け」	特定非営利活動法人 市民創作「函館野外劇」の会			○				北海道函館市			○	○		○	○	○	○	○			
5	あさひサンライズホール	士別市	○						北海道士別市			○			○		○	○	○		○	
6	砂川市民劇団心呂座	特定非営利活動法人ゆう	○						北海道砂川市			○			○				◎			
7	富良野演劇工場	特定非営利活動法人富良野演劇工房	○						北海道富良野市		○	○	○		○		○	○	◎		○	
8	東川町「写真の町」	東川町役場写真の町課 写真の町推進室	○						北海道東川町			○	○	○	○							◎
9	国際芸術センター青森(ACAC)	公立大学法人青森公立大学 国際芸術センター青森				○			青森県青森市			○		○	○			○		◎		○
10	かれいざわアート ICHIBA	特定非営利活動法人あおもり NPO サポートセンター				○			青森県青森市				○	○	○					○		○
11	八戸ポータルミュージアムはっち	八戸ポータルミュージアム			○				青森県八戸市				○		○		○	◎	○	◎	○	○
12	南郷アートプロジェクト	株式会社アート&コミュニティ(八戸市南郷文化ホール、公会堂・公民館指定管理者) 、八戸市			○				青森県八戸市			○	○		○		○	◎			○	
13	盛岡劇場	財団法人盛岡市文化振興事業団				○			岩手県盛岡市		○	○	○		○				◎		○	
14	アート@つちざわ〈土澤〉	街かど美術館 2011 実行委員会			○				岩手県花巻市				○		○					◎		
15	「劇団ゆう」による創作ミュージカル事業	特定非営利活動法人劇団ゆう		○					岩手県滝沢村			○			○				◎			
16	アート・インクルージョン in ながまち	アートインクルージョン実行委員会					○		宮城県仙台市		○				○		○			○		○
17	“生きる”博覧会 2011 並びに年間を通した支援活動	ENVISI	○						宮城県南三陸町			○	○	○	○		○			○		○
18	仙南芸術文化センター(えずこホール)	仙南地域広域行政事務組合	○						宮城県大河原町		○	○			○		○	○	○			
19	ゼロダテ／大館展	ゼロダテ／大館展 実行委員会		○					秋田県大館市			○	○		○		○			◎		○
20	東北芸術工科大学「山形 R 不動産」	山形 R 不動産			○				山形県山形市				○									◎
21	会津・漆の芸術祭 2011 ～東北へのエール	福島県教育庁、福島県立博物館、会津・漆の芸術祭 2011 プロジェクト委員会			○				福島県会津若松市				○		○					◎		○
22	いわき芸術文化交流館アリオス	いわき市				○			福島県いわき市		○	○	○		○		○	○	○	○		○
23	水戸芸術館	財団法人水戸市芸術振興財団			○				茨城県水戸市			○	○		○		○	○	○	○	○	
24	取手アートプロジェクト	取手アートプロジェクト実行委員会			○				茨城県取手市			○			○					◎		○
25	ARCUS PROJECT IBARAKI アーカスプロジェクト いばらき	アーカスプロジェクト		○					茨城県守谷市			○	○		○					◎		
26	足利市民会館	財団法人足利市みどりと文化・スポーツ財団			○				栃木県足利市			○			○		○		○		○	
27	WATARASE Art Project 2011 イクスカージョン/それから。	WATARASE Art Project (WAP 実行委員会)			○				栃木県日光市、ほか				○		○			○		◎		
28	中之条ビエンナーレ	中之条ビエンナーレ実行委員会	○						群馬県中之条町				○		○		○	○		◎		
29	さいたまゴールドシアター	公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団						○	埼玉県さいたま市		○								◎			
30	北本ビタミン	キタミン・ラボ舎		○					埼玉県北本市				○	○	○		○		○	◎		○
31	富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ	財団法人富士見市施設管理公社				○			埼玉県富士見市		○	○	○		○		○	○	◎	○	○	
32	千葉アートネットワーク・プロジェクト(WiCAN)	千葉アートネットワーク・プロジェクト(WiCAN)					○		千葉県千葉市			○			○					○		
33	エイジアス(ASIAS=Artist’s Studio In A School)	特定非営利活動法人芸術家と子どもたち						○	東京都、ほか			○			○		○	○	○	○		
34	東京都写真美術館	公益財団法人東京都歴史文化財団						○	東京都目黒区			○	○							◎		
35	3331 Arts Chiyoda	合同会社コマンド A					○		東京都千代田区	○	○	○	○		○	○	○			◎		○
36	台東デザイナーズビレッジ	台東区文化産業観光部産業振興課					○		東京都台東区				○							○		○
37	墨東まち見世 2011	特定非営利活動法人向島学会					○		東京都墨田区				○		○			○	○	◎		○
38	江東公会堂(ティアラこうとう)	公益財団法人江東区文化コミュニティ財団					○		東京都江東区			○			○		○	○				
39	世田谷文化生活情報センター(世田谷パブリックシアター)	公益財団法人せたがや文化財団					○		東京都世田谷区		○	○	○		○		○	○	◎		○	
40	ワークショップデザイナー育成プログラム	青山学院大学・大阪大学					○		東京都渋谷区			○							○			○

掲載番号	企画名・施設名	団体名	地方公共団体の規模						地方公共団体の規模	地方公共団体の規模							地方公共団体の規模					
			5万人未満の市町村	5万人以上の市町村	10万人以上の市	30万人以上の市	政令指定都市・東京23区	都道府県・全国各地		安心・安全	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他
41	アート・デリバリー	特定非営利活動法人 NPO 芸術資源開発機構 (ARDA)					○		東京都杉並区		○						○	○		◎		○
42	アーティスト・イン・児童館	アーティスト・イン・児童館実行委員会					○		東京都練馬区		○	○			○					○		○
43	小金井アートフル・アクション！	小金井アートフル・アクション実行委員会			○				東京都小金井市						○		○	○	○	○		○
44	アーツコミッション・ヨコハマ 芸術不動産事業	アーツコミッション・ヨコハマ（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）					○		神奈川県横浜市	○			○		○							○
45	黄金町バザール 2011「まちえをつくるこえ」	特定非営利活動法人 黄金町エリアマネジメントセンター					○		神奈川県横浜市	○			○		○					○		○
46	KOTOBUKI クリエイティブアクション	寿オルタナティブ・ネットワーク					○		神奈川県横浜市		○				○					○		○
47	横浜市芸術文化教育プラットフォーム	特定非営利活動法人 ST スポット横浜 アート教育事業部					○		神奈川県横浜市			○	○		○		○	○	○	○	○	
48	横浜下町パラダイスマつり2011	ART LAB OVA					○		神奈川県横浜市		○	○	○		○		○	○	○	○		○
49	新潟市民芸術文化会館(りゅーとびあ)	財団法人新潟市芸術文化振興財団					○		新潟県新潟市			○	○				○	○	○		○	
50	大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2009	大地の芸術祭実行委員会		○					新潟県十日町市				○	○	○					◎		○
51	魚沼市小出郷文化会館	魚沼市	○						新潟県魚沼市		○	○	○		○		○		○			
52	伝統工芸と「ものづくり・デザイン科」	高岡市			○				富山県高岡市			○	○							○		◎
53	富山県氷見市におけるサスティナブルアートプロジェクト ヒミング 天馬船プロジェクト	アートNPOヒミング		○					富山県氷見市				○		○					○		○
54	黒部市国際文化センター コラーレ	財団法人黒部市国際文化センター	○						富山県黒部市			○	○		○		○	○	○	○	○	○
55	南砺市福野文化創造センター	南砺市		○					富山県南砺市						○		○			○		
56	金沢市民芸術村	公益財団法人金沢芸術創造財団				○			石川県金沢市				○		○		○	○	○	○	○	
57	ながのアートプロジェクト「メガとがびアート・プロジェクト2011」	N プロジェクト実行委員会				○			長野県長野市			○			○					◎		
58	多治見市文化会館	財団法人多治見市文化振興事業団			○				岐阜県多治見市		○	○			○		○	○	○	○	○	
59	隣人たけし文化センター!!!!!!!!!!!!!!	特定非営利活動法人 クリエイティブサポートレッツ たけし文化センター					○		静岡県浜松市		○				○		○			○		
60	ちいさなアートジャンボリー2011	長者町まちなかアート発展計画					○		愛知県名古屋市				○		○			○	○	○		○
61	「昭和日常博物館」高齢者を元気にする回想法と博物館活用法	北名古屋市歴史民俗資料館「昭和日常博物館」		○					愛知県北名古屋市		○				○					○		○
62	長久手市文化の家	長久手市		○					愛知県長久手市		○	○	○		○		○	○	○	○	○	○
63	信楽まちなか芸術祭	信楽陶芸トリエンナーレ実行委員会		○					滋賀県甲賀市				○		○					○		◎
64	京都芸術センター	公益財団法人京都市芸術文化協会					○		京都府京都市						○		○	○	○	○	○	
65	まいづる RB のその次 「yashima art port 計画」	まいづる RB		○					京都府舞鶴市		○		○		○		○	○		○		○
66	プレーカープロジェクト ex・pots2011	プレーカープロジェクト実行委員会					○		大阪府大阪市				○		○					◎		
67	OCA! (大阪コミュニティアート)	特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋					○		大阪府大阪市	○	○				○							◎
68	此花アーツファーム	此花アーツファーム事務局					○		大阪府大阪市						○					○		○
69	北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想	千島土地株式会社地域創生・社会貢献事業部					○		大阪府大阪市						○		○	○	○	○		○
70	淨るりシアター	能勢町	○						大阪府能勢町				○		○		○		○		◎	
71	KIITO(「デザイン都市・神戸」における創造的活動支援事業の拠点)	神戸市					○		兵庫県神戸市		○	○	○	○	○	○				○	○	○
72	DANCE BOX	特定非営利活動法人 DANCE BOX					○		兵庫県神戸市		○	○	○		○			◎	○			
73	音楽による次世代育成の多角的活動 ―TOA Meet! Music! Concept―	TOA 株式会社					○		兵庫県神戸市			○			○		○	○				
74	兵庫県立尼崎青少年創造劇場(ピッコロシアター)	公益財団法人兵庫県芸術文化協会				○			兵庫県尼崎市	○	○	○			○		○	○	◎	○	○	○
75	ノマド村	ノマド村	○						兵庫県淡路市				○		○		○			○		○
76	伊丹市立演劇ホール(アイホール)	公益財団法人伊丹市文化振興財団			○				兵庫県伊丹市			○			○			○	◎			
77	朝来市文化会館(和田山ジュビターホール)	朝来市	○						兵庫県朝来市			○			○		○	○	○			
78	鳥の劇場	特定非営利活動法人鳥の劇場			○				鳥取県鳥取市			○	○		○		○	○	◎	○		
79	松江市八雲林間劇場(しいの実シアター)	特定非営利活動法人あしぶえ			○				島根県松江市			○	○		○				◎			
80	浜田市世界こども美術館創作活動館	浜田市世界こども美術館		○					島根県浜田市			○								◎		
81	隠岐アートトライアル 2011「美田小の実験」	外浜まつり実行委員会	○						島根県西の島町				○	○	○					○		○

掲載番号	企画名・施設名	団体名	地方公共団体の規模						開催地	関連する行政分野							活動の芸術分野					
			5万人未満の市町村	5万人以上の市町村	10万人以上の市	30万人以上の市	政令指定都市・東京23区	都道府県・全国各地		安心・安全	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他
82	アートリンク・プロジェクト	特定非営利活動法人ハート・アート・おかやま						○	岡山県		○		○		○					○		○
83	広島アートプロジェクト「半農半芸＋ちよつと漁」	広島アートプロジェクト実行委員会			○				広島県尾道市						○					◎		
84	山口情報芸術センター[YCAM]	公益財団法人山口市文化振興財団			○				山口県山口市			○			○		○	○	○	○		◎
85	神山アーティスト・イン・レジデンス 2011	神山アーティスト・イン・レジデンス実行委員会	○						徳島県神山町			○	○		○					◎		
86	瀬戸内国際芸術祭 2010	瀬戸内国際芸術祭実行委員会						○	香川県高松市、ほか				○		○					◎		○
87	高知県立美術館	財団法人高知県文化財団						○	高知県高知市			○			○		○	○	○	◎		○
88	四万十川国際音楽祭 2011	四万十川国際音楽祭実行委員会	○						高知県四万十市			○			○		◎					
89	北九州芸術劇場	財団法人北九州市芸術文化振興財団					○		福岡県北九州市			○	○		○			○	◎		○	
90	大人の図工時間 the land school 2010-2015	槻田小学校おやじの会・八万湯プロジェクト					○		福岡県北九州市			○			○					◎		○
91	紺屋 2023	トラベラーズプロジェクト					○		福岡県福岡市						○			○	○	○		○
92	長崎おぢか国際音楽祭	おぢか国際音楽祭実行委員会	○						長崎県小値賀町				○		○		◎					○
93	熊本県立劇場	財団法人熊本県立劇場						○	熊本県			○			○		○	○	○		○	
94	熊本市現代美術館	財団法人熊本市美術文化振興財団					○		熊本県熊本市			○	○		○		○	○	○	◎		○
95	別府現代芸術フェスティバル 2009 混浴温泉世界	特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT			○				大分県別府市				○		○		○	○		◎		○
96	KOSHIKI ART EXHIBITION 2011 「アィムアダイバー」	KOSHIKI ART PROJECT			○				鹿児島県薩摩川内市				○		○					○		○
97	みしまジャンベスクール	三島村	○						鹿児島県三島村			○			○		◎					
98	コザクロッシング 2011シチビアート	スタジオ解放区			○				沖縄県沖縄市				○		○					○		
99	かえっこ	かえっこ事務局						○	全国各地	○	○	○	○	○	○	○				○		○
100	イザ！カエルキャラバン！	特定非営利活動法人プラス・アーツ						○	全国各地	○		○		○	○					○		

昨年度収集した参考事例の中から、次の選定基準を参考に、本調査研究の参考事例として相応しいものを選定した（必ずしもすべての基準を満たす必要はない）。

【選定基準】

- 複数の行政分野で地域の活性化に資するための幅広い取り組みを行っている事例。
- 行政分野は限られていても、事業の内容や運営体制などが今後の参考になりそうな事例。
- 現在まで複数年にわたって継続的に実施され、今後も継続が見込める事例。
- 地方公共団体や地域の NPO や民間団体などが連携して取り組んでいる事例。
- 公立文化施設（地域創造大賞受賞施設）については、地域との連携や市民参加型のプログラムを積極的、継続的にを行っている事例。
- 現在もウェブサイトや運営団体等で情報が確認でき、連絡と調査への協力が得られる事例。

※各参考事例の掲載内容は、各団体に内容を確認した結果を踏まえて、そのまま掲載している（2012 年 3 月現在）。

1	アーティストの学校滞在による年齢、世代を超えた交流												
企画名	アーティスト・イン・スクール												
施設名													
団体名	AIS プランニング												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○	○		○			○			○	
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	都道府県				北海道全域		
	○	○	○	○	○								
企画概要	「アーティスト・イン・スクール」事業は、2003年に北海道十勝圏内で始まり、これまで札幌を含む北海道内の小学校で展開してきた。アーティストが学校に1～2週間通う中期滞在型のプログラムで、学校の余裕教室にアトリエを構え、自身のプランに基づいて創作活動を行う。そして、休み時間や放課後などの自由な時間を利用して子どもたちと交流する。さらに、保護者や地域住民が子どもたちと一緒に活動に参加するケースも増えてきている。事業のねらいは、アーティストと学校にかかわる人たちが、年齢、世代に関係なく自由なスタンスで交流し、その環境の中に多彩な創造活動ができる「場」を創出することである。												
会期	2012年7月～2013年3月												
会場	北海道内の小学校												
URL	http://inschool.exblog.jp/												
画像	 札幌市立あいの里西小学校×富田哲司 「摩訶不思議プロジェクト」  札幌市立みどり小学校×山本耕一郎 「マルダ宮でまるだき湯」												
参加アーティスト	2011年度事業参加アーティスト:小助川裕康、富田哲司、山本耕一郎、遠藤一郎など												
クレジット	主催:おとどけアート実行委員会／十勝アーティストインスクール実行委員会 後援:札幌市教育委員会等開催地の教育委員会 助成:財団法人文化・芸術による福武地域振興財団 支援:札幌市 協力:各開催校 企画・コーディネート事務局:AIS プランニング												
団体概要	2007年4月設立。北海道を拠点に、芸術・文化を媒体としたプログラムやイベントの企画・コーディネートを行っている。実施地域内の人々の出会いと交流を育む新しいコミュニティ(出会いの場)の創出を目指した活動・プロジェクトを展開している。												

2	健康生きがいづくりと仲間づくり													
企画名	中高年素人芸能サークル「生きがい探偵団」													
施設名														
団体名	生きがい探偵団													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
		○											○	
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				北海道札幌市			
	○	○	○			○								
企画概要	「舞台経験のない人が退職後に初めて舞台に立つ」体験を通して、舞台活動で出会うさまざまな人たちとの出会いと活動から、退職前後・退職後からの健康生きがいづくりと仲間づくりを目的とした文化活動。演劇を中心とするが、歌・踊り・大道芸・読み聞かせなど、およそパフォーミングアーツらしきものなら、そして本人がやってみたいことなら何でも取り入れてやってみる、その活動の場を提供するのがこの企画。演劇においても作家・演出家より出演者中心の独自の制作・演出方法を取り入れて、誰もが活き活きと楽しく舞台に立てよう工夫している。自主公演はほとんどなく、病院や福祉施設、老人会・子ども会・町内会のイベントや自治体の高齢者大学や社会福祉協議会などの依頼・招聘で出演したり、同様の他地域団体との高齢者地域間交流などにも力を入れている。													
会期	年間を通じて活動中。													
会場	札幌市													
URL	http://business3.plala.or.jp/ikigai/tantei.htm													
画像														
参加アーティスト														
クレジット														
団体概要	「生きがい探偵団」は、北海道札幌圏を拠点とするアマチュア中高年の福祉的文化活動グループである。演劇に限らず音楽・踊り・大道芸等々、何でもやることから「中高年素人芸能サークル」の冠が付いている。始まりは中高年の健康生きがいづくりを支援する「健康生きがいづくりアドバイザー北海道協議会」が北海道演劇財団と連携し、自主研修として実施した演劇ワークショップがきっかけだった。平均年齢は70歳前後で現在の登録加入者は30名以上。													

3	コミュニティ拠点となる劇場づくり												
企画名	生活支援型文化施設コンカリーニョ												
施設名													
団体名	特定非営利活動法人 コンカリーニョ												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
						○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				北海道札幌市		
		○	◎			○							
企画概要	特定非営利活動法人コンカリーニョは、1995年から琴似・八軒地区を拠点として文化活動(舞台芸術)を通じたコミュニティづくりを積極的に展開してきており、異分野・異世代の「縁結び」を可能にし、芸術の力を社会に活かしていくコミュニティ拠点となる劇場づくりなどを中心に活動を行っている。												
会期													
会場	札幌市西区琴似・八軒地区												
URL	http://www.concarino.or.jp/												
画像													
	コンカリ夏祭り						劇団イナダ組「第2柿沼特攻隊」 撮影:高橋克己						
参加アーティスト	提携:劇団イナダ組、札幌ハムプロジェクト、intro、yhs、fire works、劇団パーソンズ												
クレジット	【平成22年度協賛、助成】 ニトリ北海道応援基金、財団法人アサヒビール芸術文化財団、財団法人北海道文化財団、北海道舞台塾実行委員会、財団法人北海道地域活動振興協会、(独)芸術文化振興基金、平成22年度札幌市芸術文化振興助成、札幌市さぽーとほっと基金 CGC こども基金、平成22年度札幌市地域商業魅力アップ事業、札幌市西区まちづくり団体活動助成、地域商店飲食店各18店 【平成23年度協賛、助成】 ニトリ北海道応援基金、ホクレンショップレジ袋削減運動協力御礼助成金、財団法人アサヒビール芸術文化財団、財団法人三菱 UFJ 信託地域文化財団、セブンイレブン記念財団、財団法人北海道文化財団、平成23年度年賀寄附金配分事業、地域商店飲食店各16店												
団体概要	コンカリーニョは「まちとアートの縁結び」を目指して活動している特定非営利活動法人。2003年に特定非営利活動法人化、2006年に生活支援型文化施設コンカリーニョを再オープンほかターミナルプラザことにパトス・あけぼのアート&コミュニティセンター(いずれも札幌市設置)も運営。												

4	市民ボランティアによる歴史劇														
企画名 施設名	市民創作函館野外劇「星の城、明日へ輝け」														
団体名	特定非営利活動法人 市民創作「函館野外劇」の会														
索引別 分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方							
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他		
			○	○		○	○		○	○		○			
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地				
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	10万人以上の市				北海道函館市				
	○	○	○												
企画概要	函館野外劇は箱館戦争の現場、特別史跡五稜郭跡に特設舞台を設置し、毎年夏に公演される歴史劇。次世代に向けて青少年の積極的な参加を意識し、全国に発信する未来志向イベントである。本野外劇は出演者からスタッフに至るまで市民ボランティアにより運営されており、ひと夏の公演で大人から子どもまで延べ5千人以上の市民が手弁当で参加する。会の活動方針は「まちづくりの推進」「文化、芸術の振興」「子ども健全育成」の三点を掲げ、函館観光や地域づくりに貢献している。今年は節目の25周年公演、次の四半世紀に向かって新たな一歩を踏み出すことになる。														
会 期	2012年7月6、7、14、20、21、22、27、28、29日 8月10、11日(金土日を中心に計12日間)														
会 場	特別史跡「五稜郭跡」 函館野外劇特設会場														
U R L	http://www.yagaigeki.com/index.html														
画 像															
参 加 アーティスト	特になし。芥川賞作家新井満氏はテーマ曲の作者、毎年初日には挨拶と歌唱指導がある														
クレジット	主催:特定非営利活動法人市民創作「函館野外劇」の会 後援:在日フランス大使館文化部、北海道、函館市、函館市教育委員会、函館市文化・スポーツ振興財団、函館商工会議所、函館国際観光コンベンション協会、ほか企業団体8社、および報道機関15社。														
団体概要	設立1987年。特定非営利活動法人化1999年。会員数個人300、企業63。函館および周辺地域の歴史と文化を題材とする創作野外劇公演を中心とした地域独自の芸術文化の創造をテーマとし、市民ボランティアによる地域住民参加型文化活動を広く興し、地域文化の発展とまちづくり推進に寄与することを目的とする。														

5	「観る・立つ・支える・つながる・感じる」ことのできる舞台												
企画名	あさひサンライズホール												
施設名													
団体名	士別市												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○			○		○	○	○	○	○	
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				北海道士別市		
	○	○	○		○								
企画概要	あさひサンライズホールでは市民参加型事業としてワークショップを数多く開催しており、これらの中にはホールで開催されるものや、学校などへお届けする(アウトリーチ)ものもある。1994年にオープン以来、鑑賞型事業を中心として運営されてきたが、2003年以降は鑑賞だけにとどまらず、自らも舞台に関わる機会を創出してきた。舞台を「観る・立つ・支える・つながる・感じる」ことのできる機会がより身近なものとなるように願い、これらの参加型事業を行っている。												
会期													
会場	士別市												
URL	http://www6.ocn.ne.jp/~sunrise/												
画像													
参加アーティスト	(鑑賞型) 中村中・鬼太鼓座・こまつ座・岡村孝子・PARCO ほか (参加・創造型) 中島淳彦・イナダ・人形劇団プークほか 〈2011年度事業〉												
クレジット	主催: ARCH あさひ・士別市 後援: 士別市教育委員会・朝日公民館 助成: 財団法人北海道文化財団・財団法人北海道公立学校教職員互助会ほか 協力: シアターネットかんげき												
団体概要	あさひサンライズホールの管理・運営は教育委員会地域教育課が行う。館長は地域教育課長が兼務。事業運営は市民中心で地域教育課職員も加入する任意団体 ARCH あさひ(1994年度設立)が主体となって実施。												

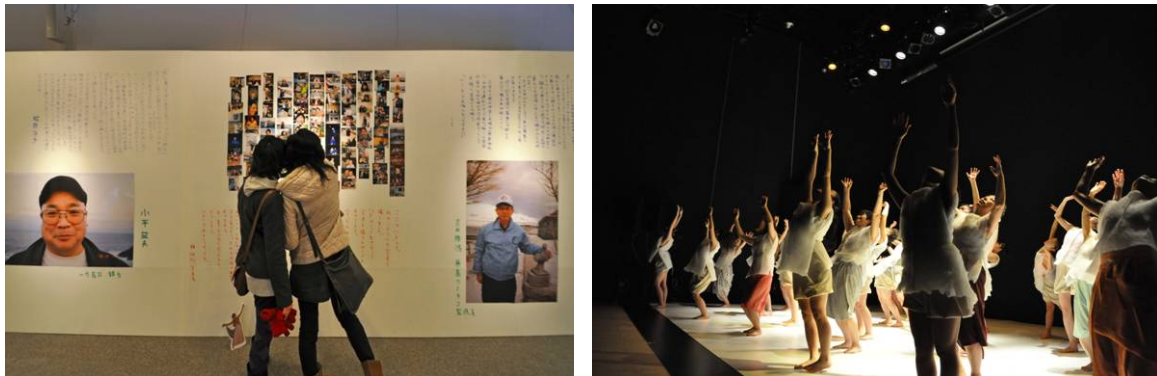
6	全てがオリジナルの市民創作音楽劇													
企画名	砂川市民劇団心呂座(ころざ)													
施設名														
団体名	特定非営利活動法人 ゆう													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
			○			○			○	○	○	○	○	
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				北海道砂川市			
			◎											
企画概要	2007年1月、砂川市地域交流センター「ゆう」の開館を記念して『砂川劇場物語～妖怪達がやってくる～』が上演された。上演半年ほど前に、市内外から特定非営利活動法人ゆうが主催となり参加希望者を募り、出演・裏方を含めた2～74歳までの総勢104名で、多くの方々の協力を得ながらワークショップや稽古を重ね、全てがオリジナルの市民創作音楽劇を満場の観客の中上演し、幕を下ろした。しかし、参加者たちの心の幕は下りる事なく、作品に携わった参加者の大人たちの熱き思いが、あらたなる形になって砂川市民劇団“心呂座”は出航となった。2009年、心呂座の大人たちが中心になって「砂川市民劇団一石」の旗揚げ公演を行った。													
会期														
会場	砂川市地域交流センターゆう													
URL	http://koroza.blogspot.com/													
画像	 													
参加アーティスト														
クレジット	主催：特定非営利活動法人ゆう 後援：砂川市／砂川市教育委員会／砂川市文化協会／砂川商工会議所／砂川観光協会／砂川ロータリークラブ／砂川ライオンズクラブ／（社）砂川青年会議所 協賛：砂川ポイントカード事業協同組合／御食事処泰弘膳／砂川ラーメン師会													
団体概要	砂川市地域交流センターを拠点とし、中心市街地に隣接する駅東部地区に市民や来訪者など様々な世代が集い、交流や芸術文化を通して新たな人の流れによる賑わいと活力を創出し、中心市街地の活性化を図ることを目的としている。													

7	「見る劇場」から「創る劇場」への転換													
企 画 名 施 設 名	富良野演劇工場													
団 体 名	特定非営利活動法人 ふらの演劇工房													
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他	
		○	○	○		○			○			○		
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	5万人未満の市町村				北海道富良野市			
	○	○	◎		○									
企画概要	富良野演劇工場は2000年10月にオープンした、全国初の公設民営劇場。全国認証第一号の民間非営利法人「ふらの演劇工房」がボランティア組織で運営を受託管理している。「見る劇場」から「創る劇場」へと、発想の転換がなされた日本でも初めての小劇場とっていいだろう。館内には軽食・喫茶コーナーやオリジナル商品のショップもあり、富良野の新たな観光スポットとして注目されている。ふらの演劇工房の事業内容は、「演劇の創造と鑑賞」「学校演劇の支援と育成」「演劇と健康」「市民芸術活動の支援」「富良野演劇工場の管理・運営」としている。													
会 期														
会 場	富良野演劇工場													
U R L	http://www.furano.ne.jp/engeki/													
画 像														
参 加 アーティスト	倉本聰(創造役)、富良野 GROUP(フランチャイズ劇団)													
クレジット														
団体概要	1997年9月、富良野演劇文化財団設立準備会として発足。1999年2月、国内初の特定非営利活動法人(NPO)として認証される。2000年4月より、富良野演劇工場の管理・運営を受託。2004年6月より、富良野演劇工場の「指定管理者」となる。													

8	写真文化による町づくり・生活づくり・人づくり												
企画名	東川町「写真の町」												
施設名													
団体名	東川町役場写真の町課 写真の町推進室												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○	○	○	○							◎
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				北海道東川町		
					◎								
企画概要	美しい自然を私たちが暮らす環境にまでひろめたい、人々がいきいきとした写真写りのよい心でいたい。東川町はまだ100年に満たぬ若い町であり、写真は町の誕生より、わずか50年はやく生まれた文化である。独自の文化や新しい伝統を育て、それを自分たちのものにしていくことこそ、これからの時代の変化にも対応し、日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育むと考え、1985年、東川町は、豊かな文化田園都市づくりをめざして「写真の町宣言」を行った。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みである。												
会期	2011年7月26日～9月5日												
会場	東川町												
URL	http://town.higashikawa.hokkaido.jp/phototown/declaration.htm												
画像													
	写真甲子園の風景						写真の町東川賞授賞式の風景						
参加アーティスト	我が国を代表する著名な写真家、編集長など写真界から大勢のゲストが参加												
クレジット	●東川町国際写真フェスティバル 主催:東川町写真の町実行委員会 (構成:東川町、ひがしかわ観光協会、東川商工会、東川町農業協同組合ほか) ●写真甲子園 主催:東川町写真甲子園実行委員会 (構成:東川町、美瑛町、上富良野町、東神楽町、旭川市、北海道新聞社、全国新聞社事業協議会、東川町写真の町実行委員会)												
団体概要	東川町は、北海道のほぼ中央に位置し、東部は山岳地帯で、大規模な森林地域を形成している。また、日本最大の自然公園「大雪山国立公園」の区域の一部になっている。												

9	自然と芸術が共存する新しい創造の場												
企画名	国際芸術センター青森(ACAC)												
施設名													
団体名	公立大学法人青森公立大学 国際芸術センター青森												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○		○	○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	30万人以上の市				青森県青森市		
		○		◎		○							
企画概要	青森公立大学 国際芸術センター青森(ACAC)は、平地と山岳地両方の自然系を有する豊かな森に囲まれ、自然と芸術が共存する新しい創造の場を目指し、2001年12月に開館した。センターは、春と秋の2回、それぞれ2～3ヶ月にわたるアーティスト・イン・レジデンス(AIR)を中心プログラムとし、芸術創作や鑑賞の機会を提供するとともに、芸術作品の作り手であるアーティストと市民との多様な交流を図りながら、青森市独自の新しい芸術文化を作り上げることを目的にしている。												
会期													
会場	国際芸術センター青森(ACAC)												
URL	http://www.acac-aomori.jp/												
画像													
参加アーティスト	国内外からアーティストを3～4人招へい												
クレジット													
団体概要	「国際芸術センター青森」は、時代を担う新たな芸術環境の場として、さまざまな芸術創作や鑑賞の機会を提供するとともに、芸術作品の作り手であるアーティストと市民との多様な交流を図りながら、青森市独自の新しい芸術文化を作り上げることを目的としている。												

10	産地＝市場＝展示が渾然となった集落空間												
企画名 施設名	かれいざわアート ICHIBA												
団体名	特定非営利活動法人 あおもり NPO サポートセンター												
索引別 分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他
				○	○	○					○		○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	30万人以上の市				青森県青森市		
			○		○								
企画概要	超難読、王余魚沢(カレイザワ)という地名は津軽平野から陸奥湾にぬける旧街道の峠、ここで一息腹ごしらえをする「餉(かれいい)」に由来する。この地にある廃校となった旧王余魚沢小学校を舞台に、アート、建築、食や産地＝市場＝展示が渾然となった集落空間を出現させる。制作にあたっては、地域内で食材等を生産調達し、継続可能な食料自給率日本一のレジデンスプログラム構築を目指したい。												
会 期	2011年8月18日～10月24日												
会 場	旧王余魚沢小学校(青森市浪岡王余魚沢字王余魚沢1-18)												
U R L	http://www.kareizawa-club.com/												
画 像													
	アーティスト展(安岐理加 作品展示会場)						リング箱市場						
参 加 アーティスト	狩野哲郎、水谷 一、川久保ジョイ、安岐理加、アマンダ・ベランタラ、多田友充												
クレジット	主催:特定非営利活動法人 あおもり NPO サポートセンター 特別協賛:アサヒビール株式会社												
団体概要	特定非営利活動法人あおもり NPO サポートセンターは、広く市民活動を行う個人或いは団体を支援することにより、市民の自己決定と自己責任に基づく自立性のある市民社会の実現に寄与することを目的としている。NPO 団体の法人化のサポートと各種相談、法人化後の運営・会計マネジメントサポート、NPO 団体への情報提供と人材派遣を始め、アート活動及びITサポート・農業等のサポート事業及びインキュベートを行い、全国のNPO 団体等との交流・連携を図っている。												

11	賑わいづくり・観光・地域文化の振興の創造拠点												
企 画 名	八戸ポータルミュージアム はっち												
施 設 名	八戸ポータルミュージアム												
団 体 名	八戸ポータルミュージアム												
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
				○		○		○		○			○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				青森県八戸市		
	○	◎	○	◎	○	○							
企画概要	賑わいの創出や観光と地域文化の振興を図る新たな創造拠点として、ものづくりスタジオ、ギャラリー、こども施設、レジデンス施設等を有するはっちをオープンした。中心市街地の活性化を目的に、商店街をフィールドとした多彩なイベントや、アーティスト・イン・レジデンス事業などを展開している。①アーティスト・イン・レジデンス事業に代表される、主に県外アーティスト招聘型(今後は公募も行う予定)の活性化プロジェクト ②地元アーティストの表現活動と連携した活性化プロジェクト ③三社大祭、えんぶりなど地域の祭、伝統芸能と連携した活性化プロジェクトを主な柱としている。												
会 期	2011年2月～												
会 場	八戸市三日町地内												
U R L	http://hacchi.jp												
画 像													
参 加 アーティスト	浅田政志、梅佳代、津藤秀雄、山本耕一郎、磯島未来、斉藤栄治、スー・ハイドゥー、アサダワタル、竹本真紀、類家心平 ほか												
クレジット	主催:八戸ポータルミュージアム はっち												
団体概要	八戸ポータルミュージアム“愛称:はっち”は2011年2月11日オープン。新たな交流と創造の拠点として、賑わいの創出や、観光と地域文化の振興を図ることで、中心市街地と八戸市全体の活性化を目指す。												

12	「アート×地域資源」による新たな価値観やコミュニティの再構築													
企画名	南郷アートプロジェクト													
施設名														
団体名	株式会社アート&コミュニティ（八戸市南郷文化ホール、公会堂・公民館指定管理者）、八戸市													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
			○	○		○		○	○	○	○	○		
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				青森県八戸市 南郷区			
○	◎			○										
企画概要	2011度よりスタートした、地域の方々とアーティストとの交流を通じた新しいまちづくり。「アート」を使って、南郷の日常の暮らしの中に新しい視点や面白い考え方、意外な方法を取り込み、新しい価値観の創出や地域コミュニティの再構築など、アーティストと地域の方々が一緒に実践していく。2011年度は「種まきの年」(プレ事業)と位置づけ、地域の方々がアーティストに興味を持ったり、「アート」の力を実感していただく契機となるよう、「ダンス」で南郷の地域資源である「ジャズ」を新しい切り口でとらえ、創造する試みを実施した。 このアートプロジェクトを通じて、南郷が、たくさんの人が多様な方法で関わりたくなる、創造的・自律的な地域へと発展していく事を目指している。													
会期	2011年9月ー													
会場	八戸市南郷文化ホールほか、南郷区内各所													
URL	http://nangoartproject.jp/													
画像	 													
参加アーティスト	森下真樹、鈴木ユキオ、Co.山田うん、大谷能生、Augusta Summit Band 浪男's DX、madrugada など(2011年度事業)													
クレジット	主催：株式会社アート&コミュニティ（八戸市南郷文化ホール、公会堂・公民館指定管理者）、八戸市 助成：財団法人自治総合センター アーティストサポート：EU・ジャパンフェスト日本委員会(鈴木ユキオ)、公益財団法人セゾン文化財団(鈴木ユキオ、Co.山田うん) 協力：南郷区のみなさん、特定非営利活動法人クローバーズ・ネット、島守神楽保存会、島守小学校、島守地区自治会連合会、ジャズの館南郷、八戸地区交通安全協会南郷支部、南郷区防犯協会、南郷朝もやの館、南郷観光協会、南郷区地域協議会、南郷公民館、南郷公民館緑分館、島守コミュニティセンター、南郷ジャズフェスティバル実行委員会、南郷図書館、南郷歴史民俗資料館、グリーンプラザなんごう(株)(道の駅なんごう)、山の楽校、島守駐在所、田代駐在所、さかもとストア、角金酒店、第3区区民会館、第4区区民会館「ハートピアー4区」、車新聞店、八戸市消防団、沢代消防団、島守保育所、市ヶ関京子氏、南郷区役所、八戸ポータルミュージアム「はっち」、そ〜るぶらんちカフェ、八戸石材企業組合、八戸消防署、是川縄文館、八戸第二養護学校、西モータース、オリエンタル酒販(株)、千葉学園高等学校、コミュニティ放送局 BeFM													
団体概要														

13	「演劇によるまちづくり」の推進を担う地域密着型劇場													
企 画 名	盛岡劇場													
施 設 名														
団 体 名	財団法人 盛岡市文化振興事業団													
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
		○	○	○		○								
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	30万人以上の市				岩手県盛岡市			
		◎		○										
企画概要	「演劇によるまちづくり」という旗印を掲げて活動。民間劇場の草分けとして市民に親しまれた旧盛岡劇場(1913年開場)の育んだ土壌を活かし、その跡地に建設した新劇場(1990年開館)で演劇愛好家を育成。演劇公演の鑑賞事業だけでなく、教育普及事業では、子どもから高齢者まで多様な参加者の「もりげき演劇アカデミー」をはじめ、「もりげき八時の芝居小屋」「盛岡市民演劇賞」「劇評誌『感劇地図』」「演劇ライブラリー」「盛岡文士劇公演」「劇団モリオカ市民」など、盛岡劇場ならではの多彩な事業を多くの市民・演劇人と協働で展開している。													
会 期														
会 場	盛岡劇場													
U R L	http://www.mfca.jp/institution/morigeki/index.html													
画 像	 左: もりげき演劇アカデミー「こどもエンゲキ体験・はじめての一步! <冬組>」(2011年1月)より。 テーマ「冬の街にでかけよう!」: 劇場近くの商店街で取材した内容で劇づくり。 右: 劇団モリオカ市民 第3回公演「わんこそばの降る街」(2011年3月)より。 「麺シリーズ」最終編でわんこそば店給仕を主人公に描く。													
参 加 アーティスト														
クレジット														
団体概要	設立年:1997年／設立目的(財団寄附行為より):盛岡市における文化の振興を図り、もって市民の心豊かな生活の実現に寄与することを目的とする。／主な事業(同): (1) 音楽、舞踊、演劇、美術その他の芸術文化の鑑賞事業 (2) 市民の文化活動の育成及び支援の事業 (3) 文化に関する情報の収集及び提供の事業 (4) 文化に関する調査、研究、展示等の事業 (5) 盛岡市から委託を受けた文化関係施設の管理 (6) その他この法人の目的を達成するために必要な事業													

14	美術館と住民との結束による運営													
企画名	アート@つちざわ〈土澤〉													
施設名														
団体名	街かど美術館2011実行委員会													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
				○		○		○	○		○	○		
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				岩手県花巻市			
			◎											
企画概要	岩手県花巻市の東和町土沢商店街では、地元の萬鉄五郎記念美術館とともに「街かど美術館アート@つちざわ〈土澤〉」を2005年に始めた。約1.5kmの商店街を中心に店舗や路地を舞台として、秋の約1ヶ月間開催される現代美術展。美術館が持つ企画力とネットワークをいかして多くのアーティストを迎え、商店街店主と住民ボランティアが結束して運営にあたる。													
会期	2011年10月8日～11月6日													
会場	土澤商店街・晴山商店街を中心としたエリア71箇所(岩手県花巻市東和町)													
URL	http://www.arttsuchizawa.com/													
画像														
参加アーティスト	田中泯、長谷川誠、原口典之、山本英治 他103人 計108人													
クレジット	主催:街かど美術館2011実行委員会 助成:朝日新聞文化財団、岩手県文化振興事業団、花巻市、財団法人文化・芸術による福武地域振興財団、文化庁「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」、ミュージアム活性化支援事業													
団体概要	花巻市の萬鉄五郎記念美術館を核として、美術館友の会、商工会議所、地元自治会、商店会が実行委員会を組織。													

15	子ども達が夢と感動を体験する機会の提供													
企画名	「劇団ゆう」による創作ミュージカル事業													
施設名														
団体名	特定非営利活動法人 劇団ゆう													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
			○			○			○	○		○		
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人以上の市町村				岩手県滝沢村			
		◎												
企画概要	団員80名、準団員350名(岩手県内6拠点)。年間20公演、通算154公演(来場者89,347)。文化庁・県市町村との協働事業「みんなでつくるミュージカル」は劇団ゆうが出向いて練習を重ねて、最後に一緒に舞台公演する参加型事業で通算50事業(参加者数は34,403名)。世界の子ども達への教育、医療支援として「チャリティミュージカル公演」。芸術鑑賞事業を行えない小規模学校をボランティア訪問する「夢いっぱいコンサート」。劇団のノウハウを文化会館の指定管理者として自主事業に取り入れて、かつ岩手県内公立文化会館複数館連携事業実行委員会を組織し文化会館のネットワーク化を図っている。東日本大震災では芸術文化復興支援事業を数多く実施している。													
会期	年間													
会場	滝沢ふるさと交流館、洋野町民文化会館、二戸市民文化会館、胆沢文化創造センター、宮古市民文化会館、大船渡市民会館、花巻市文化会館他													
URL	http://gekidan-yuu.com/index.html													
画像	 右・左:「美女と野獣」の公演													
参加アーティスト	常田富士男、樹原ゆり他													
クレジット	(20周年事業記載) 主催:特定非営利活動法人劇団ゆう 共催:国際ロータリー第2520地区ガバナー事務所 後援:岩手県・岩手県教育委員会・盛岡市・盛岡市教育委員会 滝沢村・滝沢村教育委員会・劇団ゆう支援ネットワーク・劇団ゆう賛助協賛会 劇団ゆう鑑賞会・劇団ゆう親の会・劇団ゆう宮古下閉伊地区後援会 国際 NGO 公益財団法人ケア・インターナショナルジャパン・岩手県内報道機関 助成:岩手県文化振興基金 協賛:国際ロータリー2520地区ガバナー事務所 国際 NGO 公益財団法人ケア・インターナショナルジャパン													
団体概要	1991年、かつて全国青年大会で優秀賞を3度受賞した青年会 OB が中心となり、子ども達に惜しみない芸術文化活動の提供を行うとともに、世代を超えた創作活動を通じて、子ども達が夢と感動を体験する機会、更にはその感動を成長に繋げて行くための手助けを行いながら、子ども達が自分の住んでいる郷里に夢と希望と誇りを持って生きることの出来る社会構築への一助となることを目的にしている。													

16	アートプロジェクトによるバリアフリーの実現												
企 画 名	アート・インクルージョン in ながまち												
施 設 名													
団 体 名	アートインクルージョン実行委員会												
索 引 別 分 類	関連する行政分野						地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
		○				○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				宮城県仙台市		
○			○		○								
企画概要	障がいのあるなし、年齢、性別、国籍、アートの基礎知識やスキルなど関係なく誰もが自由に参加できるバリアフリーのアートプロジェクト。様々なメディアを融合させ地域に根ざし継続していくことを目指している。												
会 期	通年でワークショップやイベントを開催。												
会 場	仙台市太白区長町												
U R L	http://art-in.org/												
画 像													
参 加 アーティスト	大越桂、松尾英章、村上タカシ、門脇篤、開発好明、ほか												
クレジット	主催:アートインクルージョン実行委員会 特定非営利活動法人ほっぷの森 共催:仙台市 後援:宮城県、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会、長町まちづくり市民協議会、長町商店街連合会、長町駅前商店街振興組合、長町1丁目商店街振興組合、長町サンカトゥール商店街振興組合、一般社団法人パーソナルサポートセンター、特定非営利活動法人スペシャルオリンピックス日本・宮城												
団体概要	2010年より活動開始。アートを通じての人にやさしい街づくりをめざしている。 地区の活性化と地区からの文化発信、地域に根差したサポート体制を作り上げる。												

17	固有の生活文化・精神性・誇りの記憶と維持												
企画名	"生きる"博覧会2011 並びに年間を通した支援活動												
施設名													
団体名	ENVISI												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○	○	○	○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				宮城県本吉郡南三陸町		
	○			○		○							
企画概要	町の人たちから聞き取ったエピソードを、地域の神社で作られる縁起物の神棚飾り「きりこ」を模した紙のオーナメントとして作り、町並みを彩る活動を地元の若い女性たちと震災前に行っていた。町のほぼすべてが失われた今、町の人たちの固有の生活文化や精神性、誇りを記憶し維持できるように、「きりこプロジェクト」をベースとしたさまざまな活動を行う。大切な人を失って前に進めない町民のみなさんが悲しみを共有する場、心を整理する場を音楽の力で創出する活動を5月～9月、そして3月に行った。また、仕事場が失われた町での産業支援をアート、デザインの側面から多岐にわたり行っている。												
会期	2011年8月11日～8月16日(きりこ展示)／通年にわたる多様な支援												
会場	宮城県本吉郡南三陸町志津川地区内												
URL	http://www.envisi.org/minamisanriku/												
画像	 photo: 福田沙織												
参加アーティスト	吉川由美、鈴木美紀子、佐藤正隆、渡辺祥子、浅田政志、津藤秀雄、BUGHAUS、榊原光裕、いがり大志、ほか												
クレジット	主催: ENVISI 共催: 南三陸町復興市実行委員会 後援: 南三陸町 助成: アサヒ・アート・フェスティバル ネットワーク活動支援募金、公益社団法人企業メセナ協議会「芸術・文化による震災復興支援ファンド」、財団法人アサヒビール芸術文化財団、財団法人文化・芸術による福武地域振興財団、アートNPO エイド 特別協賛: アサヒビール株式会社												
団体概要	アートは、まちの見えざる価値を引き出し、人と人との見えざる絆をつなぎ、新たな活力を生み出す。地域に生きる人たち、医療、福祉、教育、行政などさまざまな分野と協働しながら、アートの力でまちと人に生き生きとした活力をよみがえらせる。												

18	住民が創り、住民が支える												
企 画 名 施 設 名	仙南芸術文化センター(えずこホール)												
団 体 名	仙南地域広域行政事務組合												
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他
		○	○			○		○					
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	5万人未満の市町村				宮城県大河原町		
	○	○	○										
企画概要	「住民が創り、住民が支える」をコンセプトに、ヴァイオリンアカデミー、ギターアンサンブル、ウィンドアンサンブル、男声合唱団、ゴスペル隊、住民劇団などの文化団体を結成。参加者総数約3,000人という開館10周年記念事業として総合音楽劇を実現するなど、住民の文化リテラシーの向上に貢献している。また、地域の学校、福祉施設と連携し、芸術文化を通じた人と地域の活性化プロジェクトを通年で展開している。												
会 期													
会 場	仙南芸術文化センター(えずこホール)												
U R L	http://www.ezuko.com/index.html												
画 像													
	えずこシアター公演2011						保育園へのアウトリーチ(野村誠)						
参 加 アーティスト													
クレジット													
団体概要	仙南地域広域行政事務組合:仙南2市7町で構成する一部事務組合。えずこホールは組合の教育委員会の所管。事業は、えずこ芸術のまち創造実行委員会が企画・運営している。												

19	地元出身クリエイターが主導する新しい大館の創造												
企画名	ゼロダテ／大館展												
施設名													
団体名	ゼロダテ／大館展 実行委員会												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○	○		○						○	○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模			開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人以上の市町村			秋田県大館市			
	○			◎		○							
企画概要	秋田県大館市にて、老舗百貨店の閉店を機に衰退する市街地の活性化を図るため、同市出身のアーティストや市民が始めたアートプロジェクトが「ゼロダテ」だ。2007年、約20箇所の空き店舗のシャッターを開け清掃活動を行い、大館市に縁のある作家を招き空き店舗内に作品展示を行った。2008年、廃校で作家が滞在制作を行い、2009年、営業店舗も含め展示会場を拡大し、森の中でアートキャンプを開催した。2010年には、旧映画館の利活用など地域資源の発掘と可能性を目的に地域住民や多くの市民と作家とともに交流を深め活動の幅を広げる。												
会期	ゼロダテ／大館展 2007～2011 8月12日～6日間												
会場	秋田県大館市内、大館市中心市街地(大町商店街・御成町2丁目商店街)												
URL	http://www.zero-date.org/												
画像	 												
参加アーティスト	日比野克彦、藤浩志、池宮中夫、タムラサトル、遠藤一郎、中村政人ほか												
クレジット	主催:ゼロダテ/大館展実行委員会 共催:大町商店街振興組合、御成町二丁目振興組合、特定非営利活動法人秋田県北 NPO 支援センター、ゼロダテアートセンター 後援:秋田県、大館市、秋田県教育委員会、大館市教育委員会、大館商工会議所、大館商業連合会、社団法人大館市観光協会、社団法人大館法人会大館支部、社団法人大館青年会議所、秋田銀行大館支店、青森銀行大館支店、北都銀行大館支店、NHK秋田放送局、ABS秋田放送、AKT秋田テレビ、AAB秋田朝日放送、エフエム秋田、大館ケーブルテレビ、朝日新聞秋田総局、毎日新聞秋田支局、読売新聞秋田支局、河北新報社秋田総局、秋田魁新報社、北鹿新聞社、大館新報社												
団体概要	ゼロダテとは秋田県大館市出身のクリエイターが自発的に立ち上げたアートプロジェクトである。世代やジャンルや社会的地位さえもこえた活動を展開していく。ゼロダテ(0/DATE)とは、DATE(日付)を(ゼロ)にリセットし、もう一度なにかを始める、新しい大館を創造するという活動である。												

20	建築科の学生による中心市街地の建物の新しい使い方の提案												
企画名	東北芸術工科大学「山形 R 不動産」												
施設名													
団体名	山形 R 不動産												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
				○									○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				山形県山形市		
					◎								
企画概要	建築・環境デザイン学科の准教授として着任した馬場正尊氏のゼミ生が行っているプロジェクトで、空洞化が進む中心市街地の建物に対し、新しい使い方やデザイン、ライフスタイルを提案する試みである。学生が提案したリノベーション案は、街中の元旅館をリノベーションしたシェアアパート「ミサワクラス」と、元ホテルをリノベーションした「花小路トランク」、アパートの一室をリノベーションした「アトリエワンルーム」が実施されている。												
会期	2008年～												
会場	山形市												
URL	http://www.realyamagataestate.jp/												
画像													
	元旅館をリノベーションしたシェアアパート「ミサワクラス」のキッチン						「ミサワクラス」の個室						
参加アーティスト													
クレジット	運営元: 特定非営利活動法人 環境デザイン会議 運営サポート: 東京 R 不動産 不動産仲介業務: 千歳不動産株式会社												
団体概要	東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科馬場正尊研究室の学生が主に行っているプロジェクト。馬場の指導のもと、街中の空き物件に対して、改装の提案や、イベントの企画・運営などを行う。2011年には、地元の不動産会社と提携する事により、サイト上に記載されている不動産物件の不動産仲介業務も可能となった。												

21	漆とアーティストの新たな出会い												
企画名	会津・漆の芸術祭2011 ～東北へのエール												
施設名													
団体名	福島県教育庁、福島県立博物館、会津・漆の芸術祭2011プロジェクト委員会												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
				○		○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				福島県会津若松市		
			◎		○								
企画概要	会津は、縄文時代のはるか昔から今に至るまで、漆を守り育ててきた「漆のくに」である。漆と人が重ねてきた原始からの長い付き合い。自然が与えてくれたさまざまな素材の中でも漆は特別な存在として今に受け継がれている。漆と人の記憶をたどれば、そこには一つの「日本」の姿が見えるかもしれない。そんな漆とアーティストが会津の地で出会い新たなアートと漆の物語を紡ぐために2010年にスタートした会津・漆の芸術祭。2011年度は、東日本大震災を受け「東北へのエール」をサブテーマに掲げ、全国から寄せられた「東北へのエール」の受け皿となり発信元となることを目指した。東北・福島への想い、失われた多くの命に捧げる鎮魂と再生の願いが込められた作品を展示イベントを開催。文化の力による復興への道筋を照らし出した。												
会期	2011年10月1日～11月23日												
会場	会津若松市(七日町通り、野口英世青春通り、大町通り、その他) 喜多方市(中央通り、小田付通り、その他)												
URL	http://www.aizu-artfest.gr.fks.ed.jp/												
画像	 左:はと「起き上がる! 東北こぼしさん 小さな桃源郷・うるしのこぼし村」(撮影:篠原誠司) 右:石川美奈子「漆庭」(撮影:篠原誠司)												
参加アーティスト	小沢剛、三瀬夏之介、アンティエ・グメルス、青野文昭、井波純、いらはらみつみ、石川美奈子、木下晋、吉田重信、塩谷良太、はと、会津短期大学プロジェクト、金沢美術工芸大学田中研究室、上越教育大学伊藤研究室、筑波大学 LIFE!、須藤としを、角田弘司、照井邦彦、儀同哲夫、相田啓介、大塚隆ほか												
クレジット	主催:福島県教育庁／福島県立博物館／会津・漆の芸術祭2011プロジェクト委員会												
団体概要	会津・漆の芸術祭2011プロジェクト委員会 (福島県立博物館／福島県観光交流局／福島県会津地方振興局／福島県会津教育事務所／福島県ハイテクプラザ会津若松技術支援センター／福島県観光物産交流協会／会津若松市／会津若松市教育委員会／喜多方市／喜多方市教育委員会／喜多方市美術館／会津大学／会津大学短期大学部／会津若松商工会議所／会津喜多方商工会議所／会津漆器協同組合／会津喜多方漆器商工協同組合／会津塗伝統工芸士会／会津工芸新生会／東日本旅客鉄道株式会社／財団法人会津若松市観光公社／会津若松観光物産協会／喜多方観光協会／福島県教育庁)												

22	利用者の視点に立った新たな劇場運営のスタイルを追求												
企画名	いわき芸術文化交流館アリオス												
施設名													
団体名	いわき市												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
		○	○	○		○		○	○	○	○	○	
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	30万人以上の市				福島県いわき市		
	○	○	○	○		○							
企画概要	音楽、演劇等の舞台芸術に関するアートセンターとして2008年にオープン。市民との検討を基に、「コミュニティ空間」、「生産と創造の場」、「感動と共感の舞台」、「まちの広場」、「居心地の良い劇場」を施設のコンセプトに掲げている。鑑賞・創造系事業(みる・つくる)、普及・アウトリーチ系事業(ひろげる・ふれあう)、育成・支援系事業(そだてる・ささえる)の“3本の柱”に基づき、ワークショップや市民参加型公演だけでなく、各地域の学校、公民館、お寺、病院、福祉施設などにアーティストとともに出向くアウトリーチ事業「おでかけアリオス」や、子どもたちが楽しみながら社会のしくみを学ぶことができるイベントの開催や、街なかを使って「何かやってみたい」という人々が参加できる枠組みづくりとして、「アリオス・プランツ！」をはじめとしたマーケティングプロジェクトを行うなど、施設やジャンルにとらわれず、市民が関わることのできる事業を多岐に渡って展開している。												
会期													
会場	いわき芸術文化交流館アリオス												
URL	http://iwaki-alios.jp												
画像													
	いわきでつくるシェイクスピア「十二夜」 撮影:石川 純						木田奈保子「おでかけアリオス」小学校公演 撮影:鈴木穰蔵						
参加アーティスト													
クレジット													
団体概要	市の直営でありながら、施設の設計、建設、そして管理運営を民間の資金やノウハウを活用するPFI事業を取り入れている。運営の特徴として、施設サービス、音楽・演劇のプロデュース、広報やマーケティング、舞台技術といった専門スタッフを、市の嘱託職員として採用している。さらに、市の正規職員を総務や施設管理セクションに配置することで、それぞれの専門性を効果的に組み合わせ、利用者の視点に立った新たな劇場運営のスタイルを追求し続けている。												

23	多種多様な事業で長年にわたり地域の芸術文化振興を牽引												
企 画 名	水戸芸術館												
施 設 名													
団 体 名	財団法人 水戸市芸術振興財団												
索 引 別 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○	○		○			○				
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				茨城県水戸市		
	○	○	○	○	○								
企画概要	開館にあたり“市予算の1%ルール”を掲げ、芸術監督制を導入した総合芸術文化センターの先駆け。「新しい芸術文化を創造する」「国際的な視野に立って芸術文化の交流を行う」「楽しみながら考える」「市民の芸術文化活動の拠点となる」「都市の活性化に寄与する」を運営の基本理念に、芸術文化の創造と振興を図り、市民文化の向上に寄与するため、音楽、演劇、美術それぞれの分野で多種多様な事業を実施。水戸室内管弦楽団や劇団 ACM など専属楽団・劇団の公演、現代美術センターの先進的な企画展など、長年にわたり芸術文化の振興に貢献している。												
会 期													
会 場	水戸芸術館												
U R L	http://arttowermito.or.jp/												
画 像													
	水戸室内管弦楽団 子どものための音楽会(2011年) photo:大窪道治						大巻伸嗣「Memorial Rebirth - α -」2011 撮影:佐藤晃 写真提供:水戸芸術館現代美術センター						
参 加 アーティスト													
クレジット													
団体概要	芸術館を市民全体の文化意識の向上と芸術文化の高揚の場とするとともに、芸術文化の交流を図るための各種企画事業、教育普及事業、調査研究、作品資料の収集など、多様な事業を行い、市民のための充実した文化、余暇活動の場と機会を提供し、もって、市民の芸術文化の創造と振興に寄与する。												

24	若手アーティストの支援と、市民が広く芸術とふれあう機会の提供													
企画名	取手アートプロジェクト													
施設名														
団体名	取手アートプロジェクト実行委員会													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
			○			○							○	
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				茨城県取手市			
			◎		○									
企画概要	1999年に発足した TAP は、12年目を迎えた2010年度、これまでの公募展とオープンスタジオの隔年開催という枠組から、より長期的視野に立った取り組みを通じて新たな価値観をつくりだしていくことを目指し、《アートのある団地》《半農半芸》という2つのプロジェクトスキームを立ち上げた。合わせてこれまで取り組んできた、こどもプログラム、中間支援プログラム、国際交流プログラム、環境整備プログラムも地域におけるソフト・ハードの芸術環境づくりとして継続して行う。													
会期														
会場	いこいの+Tappino(井野団地内空き店舗改装施設)、駅前拠点 ARTOS かも ほかに取手市内各所													
URL	http://www.toride-ap.gr.jp/													
画像														
参加アーティスト	岩間賢、佐藤時啓、北澤潤、宮田篤+笹萌恵、徳久ウィリアム、馬場正尊、深澤孝史、佐藤未来、杉本克哉、高倉吉規、イノウエみ、大西利佳、栗山齊、桐生眞輔、森岡由美子、ほか(2011年度)													
クレジット	主催:取手アートプロジェクト実行委員会(取手市、東京芸術大学、アート取手、取手市教育委員会、取手市商工会、財団法人取手市文化事業団、社団法人 常総青年会議所、取手美術作家展、特定非営利活動法人 取手アートプロジェクトオフィス)茨城県南芸術の門創造会議(茨城県、取手市、守谷市、取手アートプロジェクト実行委員会、アークスプロジェクト実行委員会) 助成等:財団法人 文化・芸術による福武地域振興財団/EU・ジャパンフェスト日本委員会、財団法人 自治総合センター(半農半芸)、芸術文化振興基金(中間支援プログラム)、平成23年度文化庁「文化芸術創造都市モデル事業」、平成23年度茨城県「新しい公共の場づくりのための提案型モデル事業」 協賛:東日本ガス株式会社/株式会社安井建築設計事務所/株式会社新六本店/取手ロータリークラブ 協力:関東鉄道株式会社/独立行政法人都市再生機構/日本総合住生活株式会社/取手井野団地自治会/井野アーティストヴィレッジ/とりでアートコンシェルジュ													
団体概要	取手アートプロジェクト(TAP=Toride Art Project 略)は、1999年より市民と取手市、東京芸術大学の三者が共同で行っているアートプロジェクト。若いアーティストたちの創作発表活動を支援し、市民のみなさんに広く芸術とふれあう機会を提供することで、取手が文化都市として発展していくことを目指している。													

25	国際的なアーティスト・イン・レジデンス事業と地域プロジェクトが混在する拠点													
企画名	ARCUS PROJECT IBARAKI アーカスプロジェクト いばらき													
施設名														
団体名	アーカスプロジェクト													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
			○	○		○			○	○	○	○		
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人以上の市町村				茨城県守谷市			
			◎											
企画概要	アーカスプロジェクトは、茨城県を主催に1994年にプレ事業を開始した。当時、国内ではほとんど知られていなかった「アーティスト・イン・レジデンス」を核とし、5年間にわたり、守谷市等の協力のもと試験的に活動した後、2000年度から「アーカスプロジェクト」として本格的に事業始動した。アーティスト・イン・レジデンス事業は、公募によって世界中からアーティストを招聘し、小学校の校舎を転用した市の生涯学習施設「もりや学びの里」内の制作スタジオを提供している。アーティスト・イン・レジデンス事業では、新進アーティストの実験的な創作活動を支援すると同時に地域との交流の機会を創出している。ほかに「地域」を対象にしたプログラムを、1年を通して企画運営し、とくに子どもたちを対象にしたプログラムを充実させてきた。アーカスプロジェクトの現在は、国内のビジュアルアーツ対象の AIR 事業体としての老舗でありながら、国際的なアーティスト・イン・レジデンス事業と地域プロジェクトが混在する、先鋭的なアートが発生する個性的な拠点となっている。													
会期	通年													
会場	もりや学びの里、ほか茨城県守谷市内													
URL	http://www.arcus-project.com/jp/													
画像														
参加アーティスト	ヴォイチェフ・ギレヴィチュ、ワイ・クエン・ファイ、ファザル・リズヴィ、日比野克彦、金井圭介、ほか30名以上(2011年度事業)													
クレジット	主催:アーカスプロジェクト実行委員会(茨城県、守谷市、財団法人茨城県国際交流協会、アジア・カルチュラル・カウンシル) 茨城県南芸術の門創造会議(茨城県、取手市、守谷市、東京藝術大学、取手アートプロジェクト実行委員会、アーカスプロジェクト実行委員会) 助成:平成23年度文化庁文化芸術の海外発信拠点形成事業、公益財団法人ポーラ美術振興財団、財団法人アサヒビール芸術文化財団、公益財団法人花王芸術・科学財団、財団法人文化・芸術による福武地域振興財団 後援:ランド共和国大使館、香港特別行政区政府駐東京経済貿易代表部、パキスタン・イスラム共和国大使館 協賛:関商事株式会社、株式会社高橋合金、茨城県信用組合、株式会社常陽銀行、筑波都市整備株式会社、株式会社筑波銀行、守谷市金融団、関東鉄道株式会社、守谷市商工会、株式会社つくば研究支援センター、茨城県信用保証協会、コマツ、中央労働金庫、株式会社ジョイフル本田、医療法人クラーク会おかざき矯正歯科クリニック、株式会社ひたちなかテクノセンター、株式会社ミカミ、株式会社茨城ポートオーソリティー、茨城みなみ農業協同組合、株式会社千葉銀行 認定:社団法人企業メセナ協議会 協力:アサヒビール株式会社 ネットワーク:ART ROUND EAST、Res Artis (以上、2011年度事業実績を表記している)													
団体概要	茨城県と守谷市が中心となって、ACC(アジア・カルチュラル・カウンシル)や招聘国大使館など国内外の文化交流機関及び民間企業各社などとの幅広いパートナーシップのもとに運営されている。													

26	芸術文化による現代版「足利学校」創造プロジェクトを展開												
企画名	足利市民会館												
施設名													
団体名	財団法人 足利市みどりと文化・スポーツ財団												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○			○		○	○	○	○		
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模			開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市			栃木県足利市			
	○		○		○								
企画概要	足利市民会館は、産業、経済、文化の向上と市民福祉の増進を目的として1966年開館以来、小学生、中学生等を市民会館に招いた質の高い芸術鑑賞教室を開くなど、芸術文化の拠点として多くの市民に利用され親しまれている。2006年度からは足利市民会館「活性化計画」(コンセプト:芸術・文化による現代版「足利学校」創造プロジェクト)を立上げ、「あしかが市民ミュージカル“煌き”」の開催や「足利ユースオーケストラ」の発足、更には、「子どもたちへの和楽器&郷土伝統芸能小学校出前公演」など、様々な芸術・文化をとおして市民の生涯学習の推進に長年にわたって貢献してきた。そして、2011年度からは、栃木県「初」となる3つのプロフェッショナル専属芸術団体(「足利 ミュージカル」「足利 カンマーオーケスタ」「足利オペラ・リリカ」)養成機関(研究科)を開校し、2013年5月の発足を目指している。												
会期													
会場	足利市民会館												
URL	http://www.watv.ne.jp/~aka-hall/												
画像													
参加アーティスト	風岡優(「足利 カンマーオーケスタ」音楽監督、元群馬交響楽団コンサートマスター) 小嶋希恵(「足利 ミュージカル」芸術監督、元宝塚歌劇団・雪組) 大隅智佳子(「足利オペラ・リリカ」音楽監督、ソプラノ歌手・二期会会員) (2011年度事業)												
クレジット	主催:財団法人足利市みどりと文化・スポーツ財団(足利市民会館)／足利市教育委員会 後援:NHK 宇都宮放送局／株式会社とちぎテレビ／エフエム栃木／株式会社栃木放送 わたらせテレビ／栃木よみうり／毎日新聞社宇都宮支局／朝日新聞宇都宮総局 渡良瀬通信／足利商工会議所／足利よみうりタイムス 助成:財団法人地域創造／文化庁 特別支援:財団法人足利市民文化財団 特別協力:下野新聞社／両毛新聞社												
団体概要	財団法人足利市みどりと文化・スポーツ財団(MBS 財団)は、市民の文化の発展と公益の増進に寄与するため、都市緑化の推進に関する事業及び文化・スポーツ活動の振興・普及に関する事業を行っている。2006年4月からは、足利市の指定を受け、公園緑地、文化・スポーツ施設の管理運営を行っている。												

27	若手作家を中心とした美術展による地域の文化力の向上													
企画名 施設名	WATARASE Art Project 2011 イクスカージョン/それから。													
団体名	WATARASE Art Project(WAP 実行委員会)													
索引別 分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他	
				○		○				○	○	○		
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	10万人以上の市				栃木県日光市 群馬県桐生市/みどり市			
		○		◎										
企画概要	地域への住民意識の変革と、産業遺産・文化財などの美術展への活用による地域の文化力の向上を目的とする。また若手作家が主体のため、それぞれの今後の活動のためのネットワーク構築を行い、事業の実施によって地域と若手作家が共に成長することを目指している。													
会 期	2011年9月11日～25日													
会 場	桐生市、大間々、花輪・小夜戸(旧東村)、足尾 各所													
U R L	http://www.watarase-art-project.com/													
画 像														
参 加 アーティスト	赤本啓護、天沼穂乃実、安藤克也、飯山由貴、井崎奈々、石井香菜子、宇野あずさ、海老由佳子、大谷友花、笠島俊一、菊池奈緒、北田アキシゲ、キッズアーティストユニット「シンブンシヤ」、坂本英子、杉原信幸、高山夏希、寺村サチコ、西川祥子、中村岳、根岸陽、星睦、星野直人、前澤香苗、円桃子、圓山和幸、皆川俊平、森健太郎、宮寄浩、森矢かおる、山形淑華、山口貴子、ヤマグチリョウ、渡辺雅絵、BARBARA DARLING、Kieu Giang、Le Hao、Valentina Furri Tedeschi													
クレジット	主催:WATARASE Art Project 助成:財団法人文化・芸術による福武地域振興財団、公益財団法人 キリン福祉財団 協力:日光市、古河機械金属株式会社、わたらせ渓谷鐵道株式会社、足尾町商工会、足尾町商工会青年部、NPO 足尾に緑を育てる会、花輪小学校記念館管理委員会、水沼駅温泉センター、桑原イエ、小林美千子、小林彰、松島茂、ほか													
団体概要	WATARASE Art Project (WAP / WAP 実行委員会)は、2006年に発足した地域でのアートプロジェクトを企画・運営するチームで、構成するメンバーのほぼ全てが、現代美術・舞台・音楽などの表現活動を行うアーティスト、また美学・社会学などの研究者である。													

28	作家・住人・観客が共に作り上げるアートイベント													
企画名	中之条ビエンナーレ2011													
施設名														
団体名	中之条ビエンナーレ実行委員会													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
				○		○		○	○	○	○			
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				群馬県吾妻郡 中之条町			
○	○		◎											
企画概要	2007年よりスタートした、四万・尻焼など多くの温泉郷を有する群馬県中之条町を舞台に開催される、ビエンナーレ形式の大規模アートイベント。3回目となる2011年は、国内外から125人のアーティストが集い、木造校舎や商店街など町全体を使い展示を行う。「美術＋故郷＋温泉」をコンセプトに、観光客の誘致やアーティストと住民との交流を促進するだけでなく、住民がボランティアで参加するなど、作家・住人・観客が一緒にイベントを作り上げている。													
会期	2011年8月2日－10月2日(木曜定休)													
会場	群馬県中之条町 町内43箇所													
URL	http://nakanojo-biennale.com/													
画像	 													
参加アーティスト	アーティスト数:125人													
クレジット	主催:中之条ビエンナーレ実行委員会 後援:中之条町/群馬県/中之条町観光協会/四万温泉協会 助成:財団法人文化・芸術による福武地域振興財団													
団体概要	アーティストと中之条町役場の職員によって組織される。アーティストが企画・運営、ディレクションを担い、役場が渉外や会計をサポートすることで、互いに連携を図っている。													

29	高齢化社会の新たなあり方の提示												
企画名	さいたまゴールド・シアター												
施設名													
団体名	公益財団法人 埼玉県芸術文化振興財団												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
		○							○	○	○		
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	都道府県				埼玉県さいたま市		
		◎											
企画概要	2005年11月彩の国さいたま芸術劇場芸術監督に内定した蜷川幸雄が、就任後第一に取り組むべき事業として新たな集団作りを提案したことに始まる。2006年4月1,200名以上の応募者の中からオーディションで選ばれた48名で「さいたまゴールド・シアター」が発足。メンバー全員が55歳以上という世界的にも類を見ない演劇集団として注目を集めた。2007年6月、岩松了書き下ろしによる第1回公演『船上のピクニック』を発表。日本の高齢化社会の有り様に問いかけるモデルケースとして、演劇界にとどまらず社会的にも大きな反響を呼んだ。以降第一線で活躍する劇作家の戯曲を意欲的に上演し、「老い」を受け入れた新しい演劇のかたちは公演を重ねるごとに評価が高まっている。												
会期													
会場	彩の国さいたま芸術劇場												
URL	http://www.saf.or.jp/gold_theater/												
画像													
	アンドウ家の一夜 撮影:宮川舞子						さいたまゴールド・シアター第5回公演『ルート99』 撮影:宮川舞子						
参加アーティスト	蜷川幸雄												
クレジット	主催:公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団 助成:財団法人地域創造(平成19年度単独事業／平成20年度～22年度創造事業)												
団体概要	1993年7月設立。埼玉県の指定管理者として、「彩の国さいたま芸術劇場」「埼玉会館」「熊谷会館」3館を管理・運営している。彩の国さいたま芸術劇場では、蜷川幸雄芸術監督のもと、演劇、ダンス、音楽を中心に芸術性の高い作品を創造・上演するほか、「さいたまゴールド・シアター」や「さいたまネクスト・シアター」など公共劇場ならではの取り組みを実施するなど、「創造する劇場」として埼玉から日本全国、世界に向け芸術文化の発信を行っている。												

30	市民と行政が協働する文化によるソフト型のまちづくり												
企画名	北本ビタミン												
施設名													
団体名	キタミン・ラボ舎												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
				○	○	○			○				
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人以上の市町村				埼玉県北本市		
	○		○	◎		○							
企画概要	市民と行政が協働で行う文化によるソフト型のまちづくり。アートによる地域や市民の関わりあいを通じて、新たな創造の場を与えることで、まちの日常風景や、人、活動などからまちの“ビタミン”となる独自の文化を生み出し、根付かせていくことを目指している。2011年は「おもしろ不動産」をテーマに、空き家や空き店舗、雑木林や森、駅など、まちのさまざまな場所で、リノベーションやアイデアにより新たな価値を見出し提示して北本の魅力を広く内外に発信し、さまざまな人たちが「物件」を活用することでまちに新たな活動がおこるきっかけをつくっている。												
会期													
会場	北本市内各所												
URL	http://kitaminlabo.com												
画像	  左:200人によって持ち上がった一軒家 (wah documet+ORERA(京都造形大学生の有志)によるアイデア「家を持ち上げる」) 右:雑木林で開催された「森のレストラン」												
参加アーティスト	北澤潤、西尾美也、藤浩志、wah document ほか												
クレジット	(2011年度事業) 主催:北本市 企画:キタミン・ラボ舎 助成:埼玉県、財団法人アサヒビール芸術文化財団、財団法人文化・芸術による福武地域振興財団												
団体概要	2008年に開催された、北本のアートを考える「北本アーツキャンプ」で集まった20代～30代のメンバーを中心に発足。アートと地域がともに手を取り、まちのこれからのあり方や新しい魅力を考え、今までの北本にはなかった試みを実践していくことを目標に活動を行っている。												

31	地域の文化芸術活動を振興する中核的な劇場													
企画名	富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ													
施設名														
団体名	財団法人 富士見市施設管理公社													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
		○	○	○		○								
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				埼玉県富士見市			
	○	○	◎	○	○									
企画概要	オリジナリティあふれる地域の文化芸術活動を振興する中核的な劇場として、芸術監督とアソシエイトアーティストが持続的に地域に関わりながら展開される①公演(創造)事業。芸術監督とアソシエイトアーティストを中心に、市民が舞台芸術についての知識や方法を学ぶなどの事業展開で、文化芸術活動を担う人材や観客を育成する②教育普及事業。そして、芸術監督とアソシエイトアーティストが指導し、市民自らが演じる演劇、舞踊、音楽分野の舞台作品を創作する③市民参加事業と、多角的でバランスのとれた各種事業を展開。													
会期														
会場	富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ													
URL	http://www.kirari-fujimi.com/													
画像														
	撮影:青木司							撮影:北川桃						
参加アーティスト	芸術監督:多田淳之介 アソシエイト・アーティスト:田中泯(舞踊)、矢野誠(音楽)、永井愛(演劇) 白神ももこ(舞踊)、田上豊(演劇) など													
クレジット														
団体概要	住民意識の高揚、文化・芸術、青少年の健全育成のための諸施策を通し、豊かな地域社会の形成と市民生活の充実を図ることを目的とし1984年に設立。設立当初から多数の富士見市公共施設の管理受託を経て、現在では富士見市民文化会館キラリふじみ及び富士見市立市民総合体育館の2施設の指定管理者として運営を行う。													

32	「学校」の価値の見直しと新たなコミュニティ・公共性の構築												
企画名	千葉アートネットワーク・プロジェクト (WiCAN)												
施設名													
団体名	千葉アートネットワーク・プロジェクト (WiCAN)												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○			○							
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				千葉県千葉市		
			○										
企画概要	世界を新鮮な眼差しで捉えるアートの力で、将来を担う子どもたちや社会を支えるコミュニティにとって大きな可能性を持つ場である「学校」の価値を見なおし、「新たなコミュニティ・公共性の構築」の可能性を模索していく「アートからはじめる学校プロジェクト」に2010年度より取り組んでいる。今年度は千葉市立さつきが丘西小学校の空き教室を学校の新しい活動が生まれるような空間につくりかえるプロジェクトなどに取り組んでいる。												
会期	2003年～												
会場	千葉大学、千葉市美術館、千葉市民ギャラリー・いなげ												
URL	http://www.wican.org/												
画像													
参加アーティスト	住中浩史、曾我部昌史、山本高之、栗津裕介、石田和人												
クレジット	主催：千葉アートネットワーク・プロジェクト(WiCAN)												
団体概要	千葉アートネットワーク・プロジェクト(WiCAN)は、千葉大学教育学部芸術学研究室、千葉大学普遍教養展開科目「文化をつくる」受講生を母体とし、アーティスト、美術館、まちづくり NPO、サポーターの市民などと共にネットワークを形成し、社会におけるアートの様々な可能性を千葉において探求するプロジェクト。												

33	子どもたちとアーティストが出会う場づくり													
企画名	エイジアス(ASIAS=Artist's Studio In A School)													
施設名														
団体名	特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
			○			○								
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	都道府県				東京都、ほか			
	○	○	○	○										
企画概要	公立幼稚園・保育園・小・中学校にプロの現代アーティストを派遣し、ワークショップ型の授業実践をコーディネートする事業。いまの子どもたちが抱える様々な教育的な課題を、アートの力によって解決し、同時に、人材育成を通じて地域社会を活性化するという、いわば、文化政策と教育政策、都市政策を包含するような新しい動きと捉えることもできる。													
会期														
会場	東京都、ほか(首都圏)													
URL	http://children-art.net/asias/													
画像	 													
参加アーティスト														
クレジット	主催: 特定非営利活動法人芸術家と子どもたち													
団体概要	特定非営利活動法人芸術家と子どもたちは2001年に設立された。子どもたちとアーティストが出会う場づくりをしている。この出会いの場が、子どもたちにとっては〈潜在的な力を存分に発揮する機会〉、アーティストにとっては〈子どもたちと関わり、表現を深める機会〉になると考え、アートとの幸福な出会いを目的に活動に取り組んでいる。													

34	我が国初の写真の総合的専門美術館												
企画名	東京都写真美術館												
施設名													
団体名	公益財団法人 東京都歴史文化財団												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○	○					○				
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	都道府県				東京都目黒区		
			◎										
企画概要	我が国初の写真の総合的専門美術館である東京都写真美術館は、中心となる「写真美術館」に、映像分野全般について多くの都民にとって親しみやすく多様な関心に応えることが可能な新しい文化施設である。児童・生徒たちが写真や映像といったメディアとの出会いを通して、豊かな体験学習ができるように、小学校・中学校・高等学校の授業とリンクした「スクールプログラム」、都内70施設の入場券または割引券がつづられた「東京・ミュージアムぐるっとパス」など、賑わいのある美術館を実現。また、スタッフが共有できる年間目標の設定や多数の企業・団体に呼びかけた維持会員による外部資金の調達など、民間発想を活かした運営改革を推進している。												
会期													
会場	東京都写真美術館												
URL	http://syabi.com/												
画像													
参加アーティスト													
クレジット													
団体概要	東京都における芸術文化の振興並びに都市の歴史及び文化の継承とその発展を図り、もって創造性に満ち、潤いのある地域社会づくりに寄与することを目的とする。												

35	東京だけでなく世界中をつなぐ「新しいアートの拠点」												
企画名	3331 Arts Chiyoda												
施設名													
団体名	合同会社 コマンド A												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
	○		○	○		○	○			○		○	○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	東京23区				東京都千代田区		
	○	○	○	◎		○							
企画概要	旧練成中学校を改修した3331 Arts Chiyoda は、千代田区文化芸術プランの重点プロジェクトとして2010年にオープンした。3331が注目するアートシーンを、展覧会として公開するギャラリースペースのほか、従来の美術館に感じられた敷居の高さを取り払い、よりたくさんの人が心地よく過ごせるよう、無料で楽しめるスペースも備えている。また、かつて教室だったスペースにはアーティストやクリエイターが入居し、年間を通して活動や展示を見ることができる。最新のアートから、誰もが身近に感じられるものまで多岐にわたるテーマでイベントや展覧会を行い、さまざまな表現を発信していくことで、東京だけでなく、日本各地や東アジアをはじめとする世界中をつなぐ「新しいアートの拠点」となることを目指す。												
会期													
会場	3331 Arts Chiyoda												
URL	http://www.3331.jp/												
画像													
参加アーティスト													
クレジット													
団体概要	3331 Arts Chiyoda の統括ディレクターを務めるアーティストの中村政人が立ち上げ、2008年7月に設立。芸術・文化に関する展覧会、催事、パブリックアート、教育普及活動、街づくり、地域活性化活動等の企画、制作、運営、実施などを業務内容とする。												

36	ファッション・雑貨産業の活力を高める創業支援施設												
企 画 名	台東デザイナーズビレッジ												
施 設 名													
団 体 名	台東区文化産業観光部産業振興課												
索引別 分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他
				○									○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	東京23区				東京都台東区		
			○		○								
企画概要	台東区の地場産業であるファッション・雑貨産業の活力を高めるため、廃小学校を改修し、ファッション関連のデザイナーのための創業支援施設として転用。台東区産業部経営支援課が施設を管理。インキュベーションマネージャー（通称:村長）が核となり、入居者のニーズにあわせて、ビジネス相談、工場の紹介、販路開拓支援等ビジネスをサポート。 入居者はおもに靴、鞆、バッグ、アクセサリー、ジュエリーにアパレル等を加えたファッション・雑貨関連のデザイナー。 2011年、2012年度入居倍率は10倍超。ファッションビジネスの登竜門として注目を集める38組が卒業、そのうち19組が区内に事務所移転やショップ開業し、台東区南部がクリエイターの集まるマチとして注目を集めている。クリエイターと地域のモノづくり企業が連携しマチづくりを図る地域連携イベント「モノマチ」を開催している。												
会 期	2004年4月施設オープン～継続中(入居期間は最長3年間)												
会 場	台東デザイナーズビレッジ												
U R L	http://www.designers-village.com/												
画 像	 												
参 加 アーティスト													
クレジット	施設の管理運営: 台東区文化産業観光部産業支援課 入居者指導など: 株式会社ソーシャルデザイン研究所												
団体概要													

37	墨東エリアの魅力を再発見してもらう試み												
企画名	墨東まち見世2011												
施設名													
団体名	特定非営利活動法人 向島学会												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
				○		○			○		○	○	
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	東京23区				東京都墨田区		
		○	○	◎		○							
企画概要	隅田川と荒川、そして東京スカイツリーのすぐ横を流れる北十間川によって囲まれた、墨田区の北半分を占める地域「墨東(ぼくとう)エリア」で2009年から行われているプロジェクト。この地域は迷路のような路地のネットワークの中に住・商・工の混在する木造密集市街地、いわゆる「モクミツ」である。この複雑系のまち「モクミツ」において、3年目を迎えた墨東まち見世2011は“気がつけば、お向かいさんはアーティスト”をキャッチコピーに、《ネットワークプロジェクト》、《100日プロジェクト》、《まち見世さんぽ》や《まち見世塾》など、様々なプロジェクトを実施。まちに等身大で向き合う様々なアートプログラムを通し、内外の来場者に墨東エリアの魅力を再発見してもらう試みである。												
会期	メイン会期:2011年10月21日～11月23日の主に金・土・日・祝												
会場	主に曳舟・京島・東向島・八広・押上エリア												
URL	http://machimise.net/												
画像	  “妄想”自転車部カフェ (企画:自転車部) 墨東まち見世塾 float を会場にした第1回の講座風景												
参加アーティスト	ERT&ART TARO、自転車部、谷山恭子、村山修二郎、yahiro8(オカザキ恭和 木村吉見)、ほか多数												
クレジット	主催:東京都／東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)／特定非営利活動法人向島学会 後援:墨田区／一般社団法人墨田区観光協会／財団法人墨田まちづくり公社 協力:アサヒビール株式会社												
団体概要	墨東まち見世は、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、特定非営利活動法人向島学会の共催によって2009年度から開催されている。これら三者の主催のもと、学生や社会人スタッフによる事務局と、地域住民、アーティスト、地元の拠点や団体などのメンバーによる企画会議が設けられ、プロジェクトの実質的な企画・運営にあたっている。												

38	プロのバレエ団・オーケストラの本拠地を活かした人材育成												
企画名	江東公会堂(ティアラこうとう)												
施設名													
団体名	公益財団法人 江東区文化コミュニティ財団												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○			○							
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	東京23区				東京都江東区		
	○	○											
企画概要	ティアラこうとうは、創造と感動を生み出す空間、文化と芸術の出会いの場、限りない発想と、創造を追及する場として1994年に開館。東京シティ・バレエ団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の本拠地として、ジュニアバレエ教室、ジュニアオーケストラなど人材育成に尽力。子どもたちと芸術団体の共演による『くるみ割り人形』は「江東区のくるみ」として定着。また、普段劇場になかなか足を運べない子供たちのためのアウトリーチプログラムを、東京シティ・バレエ団と東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団とともに実施するなど、ホールを拠点にした文化活動の活性化に貢献している。												
会期													
会場	江東公会堂(ティアラこうとう)												
URL	http://www.kcf.or.jp/tiara/												
画像	 提携両団による共演 オーケストラ with バレエ「火の鳥」  小学校へのアウトリーチ事業 (東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団)												
参加アーティスト	東京シティ・バレエ団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団 ほか												
クレジット													
団体概要	公益財団法人江東区文化コミュニティ財団は、地域社会の発展と、豊かな区民生活の形成に寄与することを目的に、江東区文化センターをはじめ、14の施設管理・運営を行っている。自主事業・施設管理両面において区民相互の交流の促進、人間性の回復、地域連帯意識の醸成、郷土理解を深めるために、生涯学習事業、芸術鑑賞事業、伝統文化展示事業等を実施している。												

39	高度な専門施設と地域に開かれた場所としての機能を併せ持つ劇場												
企画名	世田谷文化生活情報センター(世田谷パブリックシアター)												
施設名													
団体名	公益財団法人 せたがや文化財団												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
		○	○	○		○							
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	東京23区				東京都世田谷区		
	○	○	◎		○								
企画概要	東京に立地した都市型公立文化施設の代表として、世田谷パブリックシアターは、現代演劇と舞踊を中心とする専門的な活動と、市民の自由な創作や参加体験活動を通し、新しい舞台芸術の可能性を探る高度な専門施設として学芸的な取り組みを行い、ドラマリーディング、ワークショップなどの手法を定着させた。また、コンテンポラリーダンスの情報発信、演劇での海外アーティストとコラボレーションを行うなど、国際的にも注目されている。さらに、秋の恒例フェスティバル『三茶 de 大道芸』など地元コミュニティと連携した事業により、地域の活性化を推進している。また、市民の自主的な地域創造活動の支援や地域の学校・一般を対象としたワークショップなど様々なプログラムを開催し、開かれた劇場として地域に根づいている。												
会期													
会場	世田谷文化生活情報センター(世田谷パブリックシアター)												
URL	http://setagaya-pt.jp/												
画像													
	現代能楽集VI「奇ッ怪 其ノ式」 撮影者:石川 純						三茶de大道芸 撮影者:Waits						
参加アーティスト													
クレジット													
団体概要	この法人は、世田谷区において幅広い文化事業を展開するとともに、区民の多様な文化創造活動、市民活動・交流活動を支援することにより、地域文化の振興と、心豊かな地域社会の形成に寄与することを目的とする。												

40	コミュニケーションの場づくりができる人材育成												
企画名	ワークショップデザイナー育成プログラム												
施設名													
団体名	青山学院大学・大阪大学												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○										○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	東京23区				東京都渋谷区		
		○			○								
企画概要	ワークショップデザイナー育成プログラムは、青山学院大学・大阪大学で開講している社会人向け履修証明プログラムとして、ワークショップ(参加体験型活動プログラム)の企画・運営、コーディネート、講師ができる専門家の養成を目指す。120時間のカリキュラムを修了し、ワークショップデザイナーとして認定されると、学校教育法に基づく履修証明書が発行される。												
会期													
会場													
URL	青山学院大学: http://wsd.irc.aoyama.ac.jp 大阪大学: http://www.fringe-tp.net/wsdtp/												
画像													
参加アーティスト													
クレジット													
団体概要	2008年度から2010年度は文部科学省の委託事業として、2011年度からは各大学の取り組みとして実施している。												

41	アートを通じた個々の潜在能力の発見												
企画名	アートデリバリー												
施設名													
団体名	特定非営利活動法人 芸術資源開発機構(ARDA)												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
		○											○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	東京23区				東京都杉並区		
	○	○		◎		○							
企画概要	「アートは個人が人間らしく生きるために欠くことのできない役割を持っている。空気や水と同様に重要な要素だ」という代表者の思いから、ドキュメント2000のプロジェクト助成を得て「アートデリバリー 高齢者ホームへ出張」を1999年からスタート。高齢者施設をはじめ携わる方々全てが、アートを通して個々の潜在能力を発見し、新たなコミュニケーションが生まれるワークショップの企画運営。人を豊かなところでつなげていくことを目指している。その他に現在、保育園、児童館、福祉施設や東日本大震災の被災地へのアウトリーチ活動に取り組む。2002年に特定非営利活動法人芸術資源開発機構(Art Resources Development Association: ARDA)を設立。												
会期													
会場	東京都内												
URL	http://www.arda.jp/												
画像													
参加アーティスト	新井英夫(体奏家) 藤原ゆみこ(美術家) 中津川浩章(美術家) みわはるき(美術家) 野村誠(作曲家) 岩下徹(舞踊家) 他												
クレジット	主催:特定非営利活動法人芸術資源開発機構(ARDA)												
団体概要	私たちの活動は芸術という資源を開発して、その新しい可能性を社会に活かすことを目的としている。同時代に生きる人間が直面している諸問題を、さまざまな視点から、芸術活動を通して共に考え、新しい方向をさぐる。ARDA は、一人ひとりが自分らしく、心豊かに生きられるコミュニティの創造と、社会の実現を目指している。												

42	遊び・創作・表現を通した子どもたちとアーティストの出会いの場												
企画名	アーティスト・イン・児童館												
施設名													
団体名	アーティスト・イン・児童館実行委員会												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
		○	○			○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	東京23区				東京都練馬区		
			○		○								
企画概要	アーティスト・イン・児童館とは、子どもたちの遊びの場である児童館にアーティストを招聘するプログラム。アーティストには、児童館を創作・表現のための「作業場」として活用してもらう。しかし、子どもたちにとって、アーティストはゲストでも先生でもない。子どもたちの遊びの活動と、アーティストの創作・表現の活動は対等なものとして児童館の中に共存する。アーティストは子どもたちの遊びの中に創作・表現の活動を見出し、子どもたちはアーティストの創作・表現の中に遊びを見出すかもしれない。こうした遊び・創作・表現を通して、子どもたちとアーティストが出会っていく場をつくっていくのが、本プログラムの目的である。												
会期													
会場	練馬区立東大泉児童館、練馬区立中村児童館、練馬区立上石神井児童館、練馬区立南田中児童館、練馬区立平和台児童館												
URL	http://jidokan.net/												
画像													
参加アーティスト	西尾美也、北澤潤、Nadegata Instant Party、山本高之												
クレジット	主催: 東京都、東京文化発信プロジェクト室(財団法人東京都歴史文化財団)、アーティスト・イン・児童館実行委員会 助成: 財団法人練馬区都市整備公社 後援: 練馬区教育委員会												
団体概要	アーティスト・イン・児童館でアーティストが行うプロジェクトの企画・運営を行う。アーティストが未知なる領域に踏み出し、子どもたちが新たな遊びの可能性を探求し始めるような出来事をつくりだすことが事務局の最もエキサイティングな活動。												

43	心豊かな生き方を追求するきっかけを提供												
企画名	小金井アートフル・アクション！												
施設名													
団体名	小金井アートフル・アクション実行委員会												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
						○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				東京都小金井市		
	○	○	○	○		○							
企画概要	小金井アートフル・アクション！は、市民がアートと出会うことから、日常生活で新たな発見を、そして自らの潜在能力に可能性を見いだすことより、さらに心豊かな生き方を追求するきっかけをつくりだすことを目指している。2009年4月に小金井市芸術文化振興計画は「誰もが芸術文化を楽しめるまちー芸術文化の振興で人とまちを豊かに」という理念を10年間かけて実現することを目指して始まった。小金井アートフル・アクション！は小金井市芸術文化振興計画推進事業として推進されている。小金井市芸術文化振興条例と計画はその策定プロセスにあたって「市民とともに」行うプロセスを重視してきた。												
会期													
会場	小金井アートスポット シャトー2F(ニーエフ)ほか、小金井市内												
URL	http://artfullaction.net/												
画像	  撮影:吉次史成 撮影:浦中ひとみ												
参加アーティスト	浅井裕介、ほうほう堂、岩井成昭、他多数。												
クレジット	主催:小金井アートフル・アクション！実行委員会 協力:株式会社シャトー小金井												
団体概要	小金井アートフル・アクション！は市民・行政・大学が連携した実行委員会によって運営されている。												

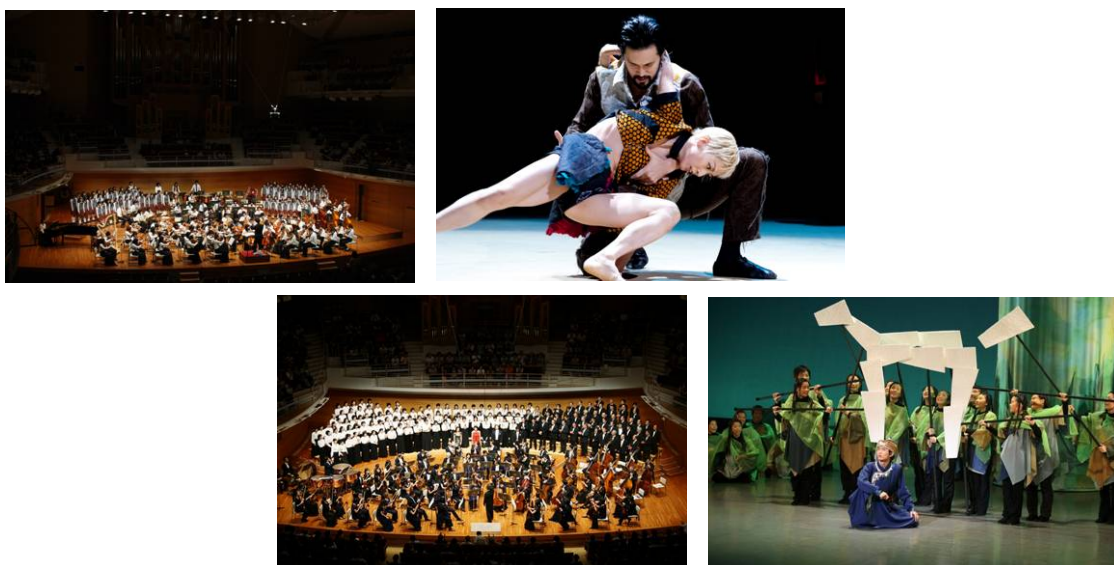
44	アーティスト、クリエイターの創作の場づくりと都市の活性化												
企画名	アーツコミッション・ヨコハマ 芸術不動産事業												
施設名													
団体名	アーツコミッション・ヨコハマ（公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団）												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
	○			○		○		○					
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				神奈川県横浜市		
					○								
企画概要	横浜都心臨海部エリアを中心に、アーツコミッション・ヨコハマが仲介・財政支援して、使用されていないアパートやビルなど不動産とアーティストを繋ぎ、創造拠点として再生し、街に開いていく事業。芸術不動産とは、アーティスト、クリエイターの創作の場づくりと都市の活性化を結ぶ、民間の賃貸物件を開拓していく事業の総称である。												
会期	通年												
会場	横浜市都心臨海部エリア												
URL	http://www.yaf.or.jp/artscommission/realestate01.html												
画像													
	長者町アートプラネット(CHAP)						宇徳ビルヨンカイ						
参加アーティスト													
クレジット													
団体概要	アーツコミッション・ヨコハマ(ACY)は、横浜に集うアーティストやクリエイター、NPO、市民、企業、学校など様々な創造活動を繰り広げる人たち(創造の担い手)をサポート(中間支援)する。												

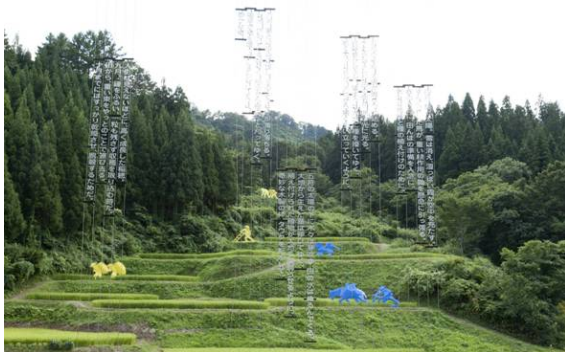
45	まちの再生に取り組むさまざまな人たちの橋渡し													
企画名	黄金町バザール2011「まちえをつくるこえ」													
施設名														
団体名	特定非営利活動法人 黄金町エリアマネジメントセンター													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
	○			○		○							○	
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				神奈川県横浜市			
			○		○									
企画概要	2003年に発足した「初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会」の継続的な活動と、2008年に開催された「黄金町バザール」の成果を受けて、2009年4月1日、特定非営利活動法人黄金町エリアマネジメントセンターが発足。地域、警察、行政、企業、大学、そして新しい住民となるアーティストや経営者など、まちの再生という共通の課題に取り組む人たちの橋渡しの役割を担いながら「アートによるまちづくり」をテーマに掲げて、様々な事業を展開。2011年は国内外のアーティストが、実際にまちに滞在しながら作品を制作し、そのプロセスを公開しました。また、地域の商店と協力し飲食の販売を行う「ナイトバザール」も行った。													
会期	2011年8月6日～11月6日													
会場	横浜市中区初音町、黄金町、日ノ出町地区													
URL	http://www.koganecho.net													
画像														
	安部泰輔 《アカイクツヲハイタネコ》 撮影:笠木靖之							遠藤一郎 《RAINBOW JAPAN～未来へ号バスがゆく!～》 撮影:笠木靖之						
参加アーティスト	国内外で活躍する若手からベテランまで、約50組のアーティストやプロジェクトチームが参加。													
クレジット	主催:特定非営利活動法人黄金町エリアマネジメントセンター、初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会 共催:横浜市 後援:神奈川県、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団、公益財団法人トヨタ財団 協賛:京浜急行電鉄株式会社、アサヒビール株式会社、アサヒ飲料株式会社 協力:神奈川県警察本部／神奈川県伊勢佐木警察署／社団法人横浜中法人会／日ノ出町町内会／初黄町内会／日ノ出町駅前 A 地区市街地再開発組合／Kogane-X Lab. 運営委員会／公立大学法人横浜市立大学／アーツコミッション・ヨコハマ／BankART1929／北仲スクール(横浜文化創造都市スクール)／キャンボン株式会社													
団体概要	新しい街の参加者となるアーティスト、ショップ経営者をはじめとして、地域住民、警察、行政、企業、大学等、この街の再生という共通のテーマに取り組む人たちの橋渡しの役割を担いつつ、黄金町エリアの「アートによるまちづくり」という大きな課題に向かって、黄金町エリアマネジメントセンターは新しい一歩を踏み出している。													

46	変わりゆくドヤ街の活性化や、地域に関わる多様な人々の自己実現や共生												
企画名	KOTOBUKI クリエイティブアクション												
施設名													
団体名	寿オルタナティブ・ネットワーク												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
		○				○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				神奈川県横浜市		
			○		○								
企画概要	アーティストやクリエイター、プロデューサーをはじめとした文化芸術に携わる活動の担い手たちが、日本三大ドヤ(簡易宿泊所)街のひとつの横浜・寿町エリアを舞台として活動する試み。簡易宿泊所・ホステルなどの宿泊施設やまちなかを活用したアート作品展示や滞在制作プロジェクト、これらをめぐるツアーやフォーラムなどのイベントを開催している。住民の高齢化が進み、ドヤの空き室が目立ちはじめたまちに独創的な視点を持ち込み、時には地域住人と協働しながら多様な活動を展開することで、まちの活性化や、住民と活動家それぞれの自己実現や共生につなげることを目指している。												
会期	通年												
会場	横浜市中区寿町												
URL	http://creativeaction.jp/												
画像													
参加アーティスト	浅井裕介＋襟草丁、いしかわかずはる、神奈川大学曾我部昌史研究室、幸田千依、坂口直也、塩津淳司、曾谷朝絵、高須賀千江子、武田陽介、竹之下亮、竹本真紀、畠中ひろみ、豚星なつみ、古川祥智雄、松下徹、水川千春、ユミソンほか												
クレジット	主催: 寿オルタナティブ・ネットワーク 助成: 財団法人文化・芸術による福武地域振興財団、ACY 横浜における創造的芸術活動助成事業 先駆的芸術文化活動部門 協力: (特別協力) BankART1929、Hostel Zen、(協力) 寿炊き出しの会、浜松荘グループ、Hostel Porto、関内外OPEN!連絡協議会、OPEN YOKOHAMA 実行委員会												
団体概要	寿オルタナティブ・ネットワークは、アーティストやクリエイター、プロデューサーをはじめとする多様な立場の担い手による文化的な活動により町に新しい可能性をもたらすことを目的として、活動拠点や各種催しなどの場づくり、ネットワーキング活動などを行なっている。												

47	芸術文化教育プログラムを推進していくための『連携の仕組み』												
企画名	横浜市芸術文化教育プラットフォーム												
施設名													
団体名	特定非営利活動法人 ST スポット横浜 アート教育事業部												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○	○		○		○	○	○	○	○	○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				神奈川県横浜市		
○	○	○	○	○									
企画概要	横浜市芸術文化教育プラットフォームは、横浜の子どもたちの創造性をはぐくみ、豊かな情操を養う「学校プログラム」の拡大や質の向上をねらいとして、アート NPO や民間の芸術団体、地域の文化施設を中心に、学校、アーティスト、企業、地域、市民、行政などがゆるやかに連携・協働する場として、平成20年3月に設立。横浜市教育委員会・横浜市文化観光局・横浜市芸術文化振興財団・ST スポット横浜の四者が事務局を組み、毎年70校程度の学校で芸術家による授業実施を行う「学校プログラム」が事業の中核。文化施設・芸術団体あわせて約30団体がコーディネーターとして事業の運営に参加している。												
会期	通年												
会場	横浜市内の小・中学校、特別支援学校、市内文化施設など												
URL	http://y-platform.org												
画像													
参加アーティスト	音楽、ダンス、演劇、美術、伝統芸能各分野のアーティスト、毎年約70組程度												
クレジット	企画:横浜市芸術文化教育プラットフォーム(特定非営利活動法人 ST スポット横浜、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団、横浜市教育委員会、横浜市文化観光局)												
団体概要	ST スポット横浜は、1987年に小空間「ST スポット」の運営団体として設立し、劇場運営や芸術文化事業の企画運営を継続。2004年にアート教育事業部を設置し、行政と協働して、子どもの健全育成・アートの普及のために、アーティストによる学校での授業の実施、専門的人材の育成、プログラムの開発等、アート教育に特化した事業を展開している。												

48	異世代交流をきっかけとした新しい下町の姿													
企画名	横浜下町パラダイスマつり2011													
施設名														
団体名	ART LAB OVA													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
		○	○	○		○			○				○	
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				神奈川県横浜市			
	○	○	○	○		○								
企画概要	古くから歓楽街として栄え、戦争、バブルを経て、様々な国籍の人々が移り住み、今でも開港当時から続いているであろう猥雑さや混沌とした空気の残る、ある意味「横浜らしい」地域で、まちなかの青年たちとともに、映画館を拠点に、日本、タイ、韓国、中国など近隣の商店を巻き込んで、「横浜下町パラダイスマつり」と「よこはま若葉町多文化映画祭」を平行開催する。「日本も含めた異文化交流」や「高齢化の進む日本人と多国籍化が進むこどもたちとの異世代交流」のきっかけとして、新しい下町の姿を模索する。													
会期	2011年8月27日～9月4日（2012年8月25日～9月2日）													
会場	横浜パラダイス会館(横浜市中区若葉町 3-51-3シネマ・ジャック&ベティ1階)、横浜市中区若葉町界限													
URL	http://downtownart.hama1.jp/													
画像														
	横浜「パラダイス会館」 写真:福田依子							門脇篤「若葉町ヒコウ場プロジェクト」 写真:福田依子						
参加アーティスト	安東和之、今井紀彰、来島友幸、鈴木カズキ+砂山典子、岸井大輔、門脇篤、農宗靖也、スズキクリ、霊能者ヒロムプロジェクト、ART LAB OVA、中村剛彦、小手川望、青山るりこ、宮間英次郎、福田依子、ワンダフル・ドアーズ、中川るな、女装アオちゃん													
クレジット	主催:ART LAB OVA (アートラボ・オーバ) 共催:シネマ・ジャック&ベティ 助成:アサヒ・アート・フェスティバル、平成23年度横浜市マザーポートエリア活性化推進事業補助金 協賛:アサヒビール株式会社 後援:横浜市文化観光局創造都市推進課、横浜市教育委員会、横浜市中区役所、かながわ国際交流財団、財団法人横浜観光コンベンション・ビューロー、財団法人横浜市国際交流協会、読売新聞東京本社横浜支局、朝日新聞横浜総局 協力:若葉町町内会、大岡川ゆないてっど、協同組合伊勢佐木町商店街、マジカルチャイルドクラブ、(特活)地球市民 ACT かながわ/TPAK、古河シネマ、ハートフルンルンたまごの輪、特定非営利活動法人在日外国人教育生活相談センター・信愛塾、特定非営利活動法人地球の木、ABC ジャパン 連携:よこはま若葉町多文化映画祭													
団体概要	スズキクリと蔭山ヅルを中心に展開するアーティスト有志によるアートプロジェクト。 OVA は Outsiders Various Art の略。社会的なマイノリティーに目を向け、彼ら／彼女らとの関係の中から、展覧会、上映会、カフェ、パーティー、ライブ、ワークショップなど様々な企画を行っている。「生存」の問題と「表現」の問題を切り離すことなく同時に思考し、複合的な社会の現実に対して芸術ができることを見極め、それを日常生活の現場において実践している。													

49	レジデンシャルダンスカンパニーなど新たな試みを実践する文化創造拠点													
企画名 施設名	新潟市民芸術文化会館(りゅーとぴあ)													
団体名	財団法人 新潟市芸術文化振興財団													
索引別 分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他	
				○		○		○	○	○	○	○		
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	政令指定都市				新潟県新潟市			
	○	○	○		○									
企画概要	新潟市民芸術文化会館は、1998年、文化と建築と環境の調和をはかり、音楽・舞台芸術の殿堂となるべく誕生。コンサートホール、劇場、能楽堂、スタジオの専門ホールを備えた公共劇場として、芸術分野の専門家や一般の方々と共に芸術文化を育んでいる。長年にわたるジュニアオーケストラ、合唱、邦楽教室の運営をはじめ、小・中・高校生を対象にした演劇スタジオ、充実した鑑賞事業、新潟発を標榜するレジデンシャルダンス・カンパニーNoism の創設など、全国的にも注目を集めている。													
会 期														
会 場	新潟市民芸術文化会館(りゅーとぴあ)													
U R L	http://www.ryutopia.or.jp/index.php													
画 像														
	左上:東京交響楽団第67回新潟定期演奏会 指揮:小林研一郎…① 右上: Noism1 & Noism2 合同公演改訂版再演 劇的舞踊「ホフマン物語」…② 撮影:村山勇 左下:新潟市ジュニア音楽教室(ジュニア邦楽教室・ジュニア合唱団・ジュニアオーケストラ教室) …③ 右下:演劇スタジオキッズ・コース APRICOT 誕生10周年記念公演「スーホの白い馬」…④													
	①指揮:小林研一郎、ヴァイオリン:大谷康子、ソプラノ:森麻季、メゾ・ソプラノ坂本朱、テノール:高橋淳、バリトン:青戸知、合唱:にいがた東響コーラス、交響楽団:東京交響楽団 ②Noism1 & Noism2 ③新潟市ジュニア音楽教室(ジュニア邦楽教室・ジュニア合唱団・ジュニアオーケストラ教室) ④演劇スタジオキッズ・コース APRICOT メンバー													
	参加 アーティスト													
	クレジット	①②③④ 主催:財団法人新潟市芸術文化振興財団 助成:文化庁優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業 ※②Noism に対する協賛 (チャコット(株)、(株)資生堂、(有)ユーコープ、(医社)はらだ歯科医院、Noism サポーターズ)												
団体概要	新潟市民の芸術文化活動の振興を図り、もって自主的自発的な市民文化の創造に寄与することを目的とする。													

50	アートを媒介とした地域に内在する価値の発信												
企画 施設 名	大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2009												
団体名	大地の芸術祭実行委員会												
索引別 分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他
				○	○	○		○					○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	5万人以上の市町村				新潟県十日町市・ 津南町		
			◎		○								
企画概要	大地の芸術祭は、越後妻有地域(新潟県十日町市+津南町)の里山を舞台に3年に1度開催される世界最大の国際芸術祭である。地域に内在するさまざまな価値を アートを媒介として掘り起こし、その魅力を高め、世界に発信し、地域再生の道筋を築いていくことを目指す「越後妻有アートネックレス整備事業」の成果の3 年ごとの発表の場として、2000 年のスタート以来、2003 年、2006 年、2009 年の4回が開催されている。現在、2012 年の第5回に向けた準備が進められている。												
会 期	2009年7月26日～2009年9月13日												
会 場	十日町市・津南町(越後妻有地域)												
U R L	http://www.echigo-tsumari.jp												
画 像													
	イリヤ&エミリア・カバコフ 《棚田》 撮影:中村脩						田島征三《絵本と木の実の美術館》 撮影:宮本武典+瀬野広美						
参 加 アーティスト	40の国と地域353組、作品数365(内、27の国と地域、228組、作品数216が2009年に新規・継続で参加)												
クレジット	主催:大地の芸術祭実行委員会 共催:特定非営利活動法人越後妻有里山協働機構 助成:(財)文化・芸術による福武地域振興財団、(財)地域活性化センター、(財)福武学術文化振興財団、(財)芸術文化振興基金、(財)地域創造、(独)日本万国博覧会記念機構、(財)アサヒビール芸術文化財団、(財)内田エネルギー科学振興財団、(財)花王芸術・科学財団、(財)朝日新聞文化財団、(独)国際交流基金、アジアリンク、オーストラリア・カウンスル、豪日交流基金、オーストラリア大使館、アーツ・ヴィクトリア、オーストラリア大使館、カルチャー・フランス、フランス大使館、オランダ大使館、モンドリアン財団、カナダ大使館、メキシコ大使館、Tomoko Mukaiyama Foundation、SNS REAL、Prins Bernhard Culturefonds、Prohalveti、Foundacion Coleccion JUMEX 他 協賛:福武総一郎(ベネッセアートサイト直島代表/財団法人直島福武美術館財団理事長)、株式会社大林組東京本社、株式会社ベネッセコーポレーション、鹿島建設株式会社、日興コーディアル証券株式会社、株式会社電通第20営業部、大日本印刷株式会社、カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社、ピー・エム・ダブリュ株式会社、北越急行株式会社、アサヒビール株式会社、日本ベンチャー協議会、ソフトバンクテレコム株式会社、サントリーホールディングス株式会社、CROWN CONFECTIONERY CO., LTD、野村證券株式会社、UBS 証券会社、株式会社野村総合研究所、日本アイ・ピー・エム株式会社、ターナー色彩株式会社、東日本旅客鉄道株式会社、平舘圭輔の会、ソニー株式会社、HAITAI CONFECTIONERY AND FOOD CO., LTD、アセット・マネジャーズ株式会社、LG Electronics Japan 株式会社、富士ゼロックス株式会社、凸版印刷株式会社、シブサワ・アンド・カンパニー株式会社、株式会社サイバードホールディングス、日本サムスン株式会社、岩手環境保全株式会社、株式会社伊藤園、トッパン・フォームズ株式会社、株式会社資生堂企業文化部、全日本空輸株式会社、ヤマサ醤油株式会社、株式会社きものブレイン、Tokyo CULTuART by BEAMS、Bonzaipaint、LOOPWHEELER、ホルベイン工業株式会社、株式会社アート・コア マエダ、株式会社 IMA、株式会社アクロディア、株式会社当間高原リゾート、株式会社ウィルコム、越後交通株式会社、エプソン販売株式会社、株式会社 office if、関越総合企画設計株式会社、キリンビール株式会社、株式会社群馬機械、小林保博、小松屋装飾株式会社、株式会社コメリ、三和タジマ株式会社、株式会社ジェイティーピーカーゴ、帝京大学グループ 学校法人帝京蒼葉学園 帝京長丘高等学校、東北電力株式会社、十日町農業協同組合、十日町旅館組合、社団法人新潟建設業協会 十日町支部、株式会社博報堂、原信ナスルホールディングス株式会社、高速印刷株式会社、藤田印刷株式会社、前田建設工業株式会社、有限会社松下アートサービス、松之山温泉組合、武蔵野美術大学、有限会社モノ工房、森ビル株式会社、湯沢温泉旅館組合、株式会社リブラン、株式会社ルネサンス												
	特定非営利活動法人越後妻有里山協働機構は2008年に設立した。越後妻有地域の潜在的な魅力を、「大地の芸術祭」を中心とした文化・芸術の力と地域・世代・ジャンルを超えた人々の志と協働によって育て、地域のアイデンティティの確立、雇用の創出、里山の保全を図ることで、住民が元気で誇りをもって暮らし、訪れる人々と夢や希望を分かち合える21世紀のモデル地域をつくることを目的とする。												
団体概要													

51	広域にわたるアウトリーチ事業をはじめとした人材育成に注力												
企画名	魚沼市小出郷文化会館												
施設名	魚沼市												
団体名	魚沼市												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
		○	○	○		○		○					
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				新潟県魚沼市		
	○		○										
企画概要	広域行政として公立文化施設の設置と運営に取り組む。音楽大学等高等教育機関と連携を図り、ホールを拠点に活動する子どもから大人までの幅広い文化団体の育成を行い、地域の人材育成に尽力。特に、広域をカバーするアウトリーチ事業によりクラシック音楽を普及し、多大な成果を上げている。												
会期													
会場	魚沼市小出郷文化会館、魚沼市内												
URL	http://www.city.uonuma.niigata.jp/bunka/												
画像	 鈴木江美ソプラノ・サロン・コンサート ©相田憲克 ケルト合唱アヌーナ 子ども達へのワークショップ ©相田憲克												
参加アーティスト	ケルト合唱アヌーナ、鈴木江美(ソプラノ)、アントネッロ(古楽アンサンブル)、渡辺克也(オーボエ)、三船優子(ピアノ)、オペラシアターこんにゃく座、子どものためのシェイクスピア、原大樹(マジシャン)、が〜まるちょぼ(パントマイム) 他 (2011年度)												
クレジット													
団体概要	1996年開館の行政直営ホール。大ホール1,132席、小ホール406席。「子ども達の感性を磨く場」等をコンセプトに、地域文化機関を標榜して活動している。1998年度から2011年度の間に、学校訪問コンサートは162回延べ10,620人、サロン・コンサートは72回延べ5,012人、小中学生招待コンサートは18回延べ8,780人、小中学生招待演劇公演は13回延べ5,489人。これを合計すると、市民全体(40,725人)の73.4%に該当する。2015年4月を目途に、新しい運営体制移行を検討中。												

52	高岡市の歴史や産業の特徴を生かした市独自の必修教科												
企画名	伝統工芸と「ものづくり・デザイン科」												
施設名													
団体名	高岡市												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○	○									◎
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				富山県高岡市		
			○		◎								
企画概要	国の構造改革特別区域計画「高岡市ものづくり・デザイン人材育成特区」の認定を受けて、2006年4月から、市内の小・中・特別支援学校全40校で、高岡市の歴史や産業の特徴を生かした市独自の必修教科「ものづくり・デザイン科」がスタート。2009年度からは、学校や地域の特色を生かした特別の教育課程を編成し、教育を実施する「教育課程特例校」として、文部科学省の承認を受け実施している。高岡市の「ものづくり・デザイン科」は、地域の伝統工芸や産業に目を向けた取り組みとしては、全国唯一のものとなっている。												
会期													
会場	高岡市内小・中・特別支援学校												
URL	http://www.city.takaoka.toyama.jp/kyouiku/2010/monohp/001.html												
画像													
参加アーティスト													
クレジット													
団体概要													

53	山と海に恵まれた場所の魅力を考えるアートプロジェクト													
企画名 施設名	富山県氷見市におけるサステナブルアートプロジェクト ヒミング 天馬船プロジェクト													
団体名	特定非営利活動法人 アート NPO ヒミング													
索引別 分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他	
				○		○							○	
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	5万人以上の市町村				富山県氷見市			
			○		○									
企画概要	富山県氷見市は、海と山に自然に恵まれ、定置網発祥の地と言われている。 2004年より、映像で町を切り取り、場の価値をリサーチするビデオアートプロジェクト「氷見クリック」がスタート。2006年より、氷見クリックのリサーチで出会った町の素材(築100年の堀埜家の石蔵や、天馬船など)を使っのプロジェクト『ヒミング』が始まり、この年から、氷見の漁業文化として重要な氷見型和船の復活を目的とした『天馬船プロジェクト』がスタートし、小さな木の船をサンバリングしてレースを行う「ミニチュア天馬船レース」を開催。2007年、2008年もレースを開催し、県内外からのレースの参加費で、2艘の天馬船を造船。この船には八代地区の木材を使用して『天空丸001』『天空丸002』と名付けた。また、2008年には、堀埜家の石蔵が「ヒミング・アート・センター」として活動拠点となり、山と海に恵まれた場の可能性を、アートの多様な視点で見つめながら、ワークショップやレクチャーなども、通年で行っている。													
会 期														
会 場	氷見市内													
U R L	http://www.himming.jp/													
画 像														
参 加 アーティスト	中村政人、日比野克彦、藤浩志など													
クレジット	主催:アート NPO ヒミング													
団体概要	ヒミング／himming とは「氷見＋ハミング」とした造語。「氷見(ヒミ)」の響きを大切に、「ハミング」持つ爽やかさ、調和、和音、リズム、幸、平和を大切に。そんな団体をめざして名付けられた。また、語尾に ING がつくことで現在進行形で変化する氷見のイメージも込めている。 地域ならではの場の魅力を、市民とアーティストが協働で見つめ、新しい価値を見いだし、創造的な事を動かすアートプロジェクトである。アートの目を通して、循環型社会を目指している。													

54	市民参画によるホールづくりを推進												
企画施設名	黒部市国際文化センター コラーレ												
団体名	財団法人 黒部市国際文化センター												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○	○		○		○	○	○	○	○	
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				富山県黒部市		
○	○	○	○	○	○								
企画概要	黒部市国際文化センターは1995年11月、「地方からの芸術と文化の発信基地」として産声を上げた。以来、年間延べ20万人のお客様をお迎えしている。「市民みずからの意志(企画)と手(ボランティア)による運営」を掲げ、準備段階から市民参画によるホールづくりを推進。実行委員会による「コラーレフェスティバル」「24時間ぶっとおしライブ」や子どもを対象とした「リトルカルチャークラブ」、世界の国の音楽や芸術・歴史・文化などを発見する「Earth Moving」など、市民の文化活動の活性化に貢献している。												
会期													
会場	黒部市国際文化センター コラーレ												
URL	http://www.colare.jp/												
画像	 リトルカルチャークラブ  コラーレワールドフェスティバル Earth Moving2011アメリカ篇												
参加アーティスト													
クレジット													
団体概要	センターは、国際的視野に立ち、市民の文化交流活動を推進し、国際交流、芸術文化の振興を図り、豊かで潤いのある市民生活の発展と個性的な国際文化都市の形成に寄与することを目的とする。												

55	多くのボランティアが支えるホール													
企画名	南砺市福野文化創造センター													
施設名	南砺市													
団体名	南砺市													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
						○								
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人以上の市町村				富山県南砺市			
	○			○										
企画概要	ボランティアの手づくりによるワールドミュージック・フェスティバル「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」を毎年開催。市民らによるスティール・ドラム・オーケストラが誕生するなど、異文化交流により地域の活性化に貢献した。また、舞台音響や照明を支える「ヘリオス・ステージクルー」や、コンサートや展覧会での受付などヘリオスの「顔」ともいえる「ヘリオスフェイス」といった、公立文化施設における裏方・表方への市民参加やボランティアの先進事例でもある。													
会期														
会場														
URL	http://helios.city.nanto.toyama.jp/													
画像	 													
参加アーティスト														
クレジット														
団体概要														

56	旧紡績工場を再生した先駆的な市民創作支援施設													
企 画 名	金沢市民芸術村													
団 体 名	公益財団法人 金沢芸術創造財団													
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
				○		○								
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	30万人以上の市				石川県金沢市			
	○	○	○	○	○									
企画概要	7つの屋内施設と大広場、そして加賀伝統工芸を伝承する「金沢職人大学校」を併設した金沢市民芸術村は、煉瓦づくりの旧紡績工場を再生した先駆的な市民創作支援施設(練習場)。市民ディレクターを登用した市民の自主運営により、「24時間365日利用」「自主企画事業」を実現し、全国に多大な影響を与えた。													
会 期														
会 場	金沢市民芸術村													
U R L	http://www.artvillage.gr.jp/													
画 像														
参 加 アーティスト														
クレジット														
団体概要	この法人は、金沢市における芸術文化の創造に関する事業を積極的に企画実施し、市民の生涯にわたる芸術文化の土壌を醸成することにより、芸術文化の振興に寄与することを目的とする。													

57	美術教育を基軸として子どもたちの豊かな心を育む												
企画名	ながのアートプロジェクト「メガとがびアート・プロジェクト2011」												
施設名													
団体名	Nプロジェクト実行委員会												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○			○							
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	30万人以上の市				長野県長野市		
			◎										
企画概要	「学校を美術館にしよう」をキーワードに、中学生がキッズ学芸員となり、作家や地域と協働して、ここにしかない美術館を作り出す。学校が中学生好みの「美術館」に変身。												
会期	2011年10月9日												
会場	千曲市立戸倉上山田中学校(千曲市大字戸倉2500)												
URL	http://www.gakko-bijutsukan.com/												
画像													
参加アーティスト	伊豆牧子、池山田、尾花藍子、柿崎順一+NE PROJECT、児玉やすつぐ、住中浩史、世界装置、クリスパー、Fuigo、山本耕一郎、圓井義典、桃蓮華鏡、信濃美術館・東山魁夷館、櫻ヶ岡中学校 美術部、北部中学校、長野県養護学校、丸子修学館高校 美術部、上田西高校 美術部、上田染谷丘高校 美術部												
クレジット	主催:Nプロジェクト実行委員会 共催:長野県美術教育研究会 助成:アサヒビール株式会社 協力:千曲市教育委員会、長野県信濃美術館・東山魁夷館 特別協賛:アサヒビール芸術文化財団												
団体概要	中学校選択美術受講生徒、美術部などの生徒が「キッズ学芸員」となり、生徒と美術作家との共同作品や有名作品などを校内に展示、解説し、学校を美術館に変身させる。開館期間は、地域に開放し、「キッズ学芸員」が訪れた人々と美術作品を通して交流することを通して、多くの方々に美術作品制作の楽しさや鑑賞の楽しさを感じてもらおう。こうした活動を支え、推進する実行委員会。												

58	生涯学習と文化芸術を組み合わせた事業を展開												
企 画 名	多治見市文化会館												
施 設 名													
団 体 名	財団法人 多治見市文化振興事業団												
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
		○	○			○							
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				岐阜県多治見市		
	○	○	○	○	○								
企画概要	マルチ財団が運営する文化会館として、生涯学習と文化芸術を組み合わせた新しい事業領域を開拓。市民の教えたいたい人・教わりたい人をマッチングする体験型講座「たじみオープンキャンパス」を入口に多彩な事業を展開し、生活と共にある文化芸術を推進した。また、小中学生に音楽を届けることを目的とした「おんがくのたね」や、地域の福祉施設や公共文化施設などに出向いておこなう「ちゃわんだふる音楽宅配コンサート」などの芸術普及活動、さらには地域の拠点である公民館と文化会館とが連携し、歩いていける距離で気軽に生の芸術にふれる機会を創出する、「たじみ Music トレイン」、「たじみ演芸サロン」も展開している。												
会 期													
会 場	多治見市文化会館、多治見市内												
U R L	http://www.tajimi-bunka.or.jp/bunka/												
画 像	 左:たじみ musicトレイン [出演:鈴木江美(ソプラノ) 山口陽子(ピアノ)、9月23日、多治見市旭ヶ丘公民館] 右:おんがくのたね [出演:森山威男(ジャズドラム) 田中信正(ジャズピアノ)]												
参 加 アーティスト													
クレジット													
団体概要													

59	多様性があたりまえにある社会の実現													
企画名 施設名	隣人たけし文化センター!!!!!!!!!!!!!!													
団体名	特定非営利活動法人 クリエイティブサポートレッツ たけし文化センター													
索引別 分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他	
		○				○								
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	政令指定都市				静岡県浜松市			
	○			○										
企画概要	新設の障害者福祉施設アルス・ノヴァを舞台にして、個人の想いや熱意を発信しコミュニケーションを生む「たけし文化センター」のコンセプトとすり合わせた施設の立ち上げを、施設職員とアーティストが共に行う。各々の興味や特性を活かした独自の目線を開拓し、障がいのある人たちのケアとともに毎日毎日の関係づくりに取り組み、そこにいる人達でしかなしえない新しい「なにか」を導き出し、創りあげる。また、多くの福祉施設がテーマとして取り組む「地域とのつながり」にも日常的に関わるきっかけを探る。													
会 期	2011年7月8日～8月31日													
会 場	障害福祉サービス事業所アルス・ノヴァ(静岡県浜松市西区入野町8923-4)													
U R L	http://takebun.exblog.jp http://arsnova22.exblog.jp/													
画 像	隣人たけし文化センター !!!!!!!!!!!!!!! WFO 3&Aクリエイティブサポートレッツ 展覧会 「佐藤は見た!!!!」  隣人たけし文化センター !!!!!!!!!!!!!!! WFO 3&Aクリエイティブサポートレッツ パフォーマンスライブ 「見てみようぜ!!!!!!」 インコハクビーツ ライブ  片岡祐介 レオ なるや たけし SHUN2													
参 加 アーティスト	浜松キャラバン隊、河合宏俊、カフェ放送でたれ、ヒダミチヨほか													
クレジット	主催:特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ 共催:障害福祉施設アルス・ノヴァ													
団体概要	障がいのある人達の生きる幸せのための文化芸術活動、場づくり、コミュニティー形成などを通して、障がい、性差、人種など様々な「ちがい」を認め合え、多様性があたりまえにある社会の実現を目指す。													

60	市民主導の人とまちとアートが出会うきっかけづくり												
企画名	ちいさなアートジャンボリー2011												
施設名													
団体名	長者町まちなかアート発展計画												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
				○		○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				愛知県名古屋市		
	○	○	○			○							
企画概要	「ちいさなアートジャンボリー2011」は、あいちトリエンナーレ2010のまちなか会場として賑わった長者町繊維街を舞台に、あいちトリエンナーレサポーターズクラブやボランティアをきっかけに集まった、有志「長者町まちなかアート発展計画」メンバーが手探りで知恵やアイデアをだし、企画、運営するイベント。長者町に関わる多くの方やアート関係者の力を借りながら、会社員や学生、主婦などの様々なバックグラウンドをもった、アーティストでもキュレーターでもない市民達が集まり、話し合いを重ねながら主体性をもってプロジェクトを進めていくなかで、人が出会い、協働することで生まれるちいさな始まりや繋がりが、少しずつ大きく広がり、アートに関わったり楽しんだりする場が生まれていくことに発展していくことを目指している。												
会期	2011年7月23日～8月21日												
会場	アートラボあいち、株式会社市川商店、ゑびすビル、吉田商事株式会社、レストランツキダテ など												
URL	http://choja.machinakart.com/2011.index.html												
画像													
参加アーティスト	石田達郎/ジェット達、山本高之、MOBIUM、キリコラージュ、柴幸男、杉原邦生、住中浩史												
クレジット	主催:長者町まちなかアート発展計画 協力:長者町アートアニュアル実行委員会／まちの会所／あいちトリエンナーレサポーターズクラブ／大ナゴヤ大学 長者町ゼミ／YEBISU ART LABO／STANDING PINE-cube 会場協力:株式会社市川商店／ゑびすビル／八木兵株式会社／吉田商事株式会社／レストラン ツキダテ パスカメラ協力:佐藤時啓＋RayProject(三友周太) 後援:名古屋長者町織物協同組合 提携:日本のへそ演劇祭 特別協賛:アサヒビール株式会社 助成:財団法人 アサヒビール芸術文化財団／財団法人 文化／芸術による福武地域振興財団												
団体概要	「あいちトリエンナーレ2010」をきっかけに長者町に集まった、アートファン、トリエンナーレサポーター・ボランティア、長者町ファンなどを中心に、トリエンナーレ終了後も継続してアートを楽しみたいという思いで立ち上がった組織である。『アートを表現することではなく、アートへの関わり方を模索し、表現していく』ことをコンセプトに、人とまちとアートが出会うきっかけとなるよう、まちなかでのアートプロジェクト、ワークショップなどを企画・運営している。												

61	地域の高齢者ケアを実践する博物館													
企画名	「昭和日常博物館」高齢者を元気にする回想法と博物館活用法													
施設名														
団体名	北名古屋市歴史民俗資料館「昭和日常博物館」													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
		○				○		○		○		○		
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人以上の市町村				愛知県北名古屋市			
			○		○									
企画概要	北名古屋市歴史民俗資料館は、昭和の時代をテーマにしたユニークな“昭和日常博物館”として市内外の人を呼び込み、加えてこうした収蔵品を活用し、福祉・教育・医療関係者と連携しながら地域の高齢者ケアを実践している博物館として知られている。博物館が認知症高齢者等を対象とした心理療法である「回想法」の実践の場として役に立つということを知り、医療費や介護費を軽減する旧師勝町の施策と合致して「地域回想法事業」がスタート。認知機能やQOLの向上、抑うつ傾向の改善、閉じこもりの軽減などの効果が確認されている。													
会期														
会場	北名古屋市歴史民俗資料館「昭和日常博物館」													
URL	http://www.city.kitanagoya.lg.jp/rekimin/index.php													
画像														
参加アーティスト														
クレジット														
団体概要														

62	市民の“家”となる文化拠点												
企画名	長久手市文化の家												
施設名	長久手市												
団体名	長久手市												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
		○	○	○		○		○					
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人以上の市町村				愛知県長久手市		
	○	○	○	○	○	○							
企画概要	開館にあわせて文化振興の基本理念をまとめた「長久手町文化マスタープラン」を策定した先駆け。町劇団、町合唱団を旗揚げし、地元芸術大学との連携によるオペラ事業などにより地域文化の向上に貢献している。1998年に策定された文化マスタープランは、町の文化を取り巻く環境の変化を踏まえて2007年に第二期の文化マスタープランを作成。これまで行ってきた取り組みを見つめ直し、次の10年の文化行政のあり方を定めるために、文化マスタープランを改定した。												
会期													
会場	長久手市文化の家												
URL	http://www.city.nagakute.aichi.jp/bunka/bunka/bunka/index-j.html												
画像													
参加アーティスト													
クレジット													
団体概要	2012年1月4日に長久手町から長久手市となる。												

63	“やきもののまち”信楽を世界に発信												
企画名 施設名	信楽まちなか芸術祭												
団体名	信楽陶芸トリエンナーレ実行委員会												
索引別 分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他
				○		○		○	○	○	○	○	◎
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	5万人以上の市町村				滋賀県甲賀市		
			○		◎								
企画概要	“やきもののまち”信楽を世界に発信するため、第1回信楽陶芸トリエンナーレとして開催(10月1日～11月23日)。まちなかの遊休工場、倉庫、空き店舗などを活用し作品展示を行う。甲賀市は2004年に水口町、甲南町、甲賀町、土山町、信楽町が合併して誕生。焼き物の里の活性化を目指し、信楽のまちなかと20周年を迎える「滋賀県立陶芸の森」などの専門施設が連携。												
会 期	2010年10月1日～11月23日												
会 場	信楽まちなか、滋賀県立陶芸の森、MIHO MUSEUM、信楽伝統産業会館ほか												
U R L	http://tri.shigaraki-sp.com/												
画 像	 												
参 加 アーティスト													
クレジット	主催:信楽陶芸トリエンナーレ実行委員会 後援:近畿経済産業局、近畿運輸局、滋賀県、社団法人びわこビジターズビューロー、読売新聞社、毎日新聞社、朝日新聞社、京都新聞社、産経新聞社、中日新聞社、共同通信社、NHK 大津放送局、BBC びわこ放送、毎日放送、朝日放送、関西テレビ、読売テレビ、KBS 京都、FM滋賀、FM京都、FM大阪、FM 三重、FM 愛知、FM802、FM Cocolo、平城遷都1300年記念事業協会、NEXCO 西日本												
団体概要													

64	閉校をアートセンターとして活用												
企 画 名	京都芸術センター												
施 設 名													
団 体 名	公益財団法人 京都市芸術文化協会												
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
						○							
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				京都府京都市		
	○	○	○	○	○								
企画概要	京都芸術センターは、京都市、芸術家その他芸術に関する活動を行う者が連携し、多様な芸術に関する活動を支援し、芸術に関する情報を広く発信するとともに、芸術を通じた市民と芸術家等の交流を図るために2000年に開館。中心市街地の閉校をアートセンターとして活用。行政、地元住民、アーティストの参加により、アーティストの創造環境の支援と地元住民との交流の両立を図るルールづくりを実現。伝統芸能、演劇、ダンス、美術などに関わる人々のネットワーク拠点となり、近代建築の資源を残した、遊休施設の新しい活用モデルとして全国に刺激を与えた。												
会 期													
会 場													
U R L	http://www.kac.or.jp/												
画 像	 左:「sweet memoryーおとぎの国の王子でも」(夏休み企画展)/2011年7月/中央作品:謝琳壁面作品:瓜生祐子/撮影:大島拓也 右:「Dance 4 All 2011 クリスマススペシャル」(コミュニティダンス企画)/2011年12月/撮影:草本利枝												
参 加 アーティスト													
クレジット													
団体概要	公益財団法人京都市芸術文化協会では、芸術文化に関する調査研究、芸術文化分野における創造的活動の助成、各種文化事業の実施等を通じて、京都市における芸術文化の発展に寄与することを目的に、会員による自主事業、京都市等からの受託事業及び文化施設の指定管理事業等を行っている。1981年9月財団法人設立、2011年4月公益財団法人に移行。												

65	赤れんが倉庫を拠点としたアートによるまちづくり												
企画名	まいづるRBのその次「yashima art port 計画」												
施設名													
団体名	まいづるRB												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
		○		○		○						○	○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人以上の市町村				京都府舞鶴市		
	○	○		○		○							
企画概要	京都府舞鶴市にある海軍が建設した明治・大正期の赤れんが倉庫群を拠点に、毎日の生活を楽しみながら、アートによって地域の魅力を掘り起す、まち創造プロジェクト「まいづる RB」。舞鶴市内の商店街にある未活用の建物を利用して、カフェやミーティングスペース、宿泊機能を持った交流拠点づくりを行う。赤れんが倉庫群と補完し合う形で、アーティストと市民がともに新しい文化や価値、思想を産む「場」をつくっていく。												
会期	2010年5月13日～2012年3月31日												
会場	舞鶴赤れんが倉庫群(京都府舞鶴市北吸)と、その周辺の東舞鶴商店街をはじめとする市街地、八島アートポート。												
URL	http://www.maizuru-rb.jp												
画像													
参加アーティスト	山田創平、小山田徹、日比野克彦、五十嵐靖晃、砂連尾理、西川勝、田中雅理、藤浩志、内田聖良、ロニータ・ムカルジー、山口恵子、遠藤一郎												
クレジット	主催:まいづるRB 後援:特定非営利活動法人赤煉瓦倶楽部舞鶴 助成:文化・芸術による福武地域振興財団、財団法人アサヒビール芸術文化財団、京都府(地域力再生プロジェクト) 協力:八島商店街商業協同組合												
団体概要	赤れんが倉庫を拠点としたまちづくりを図るため設立される。「まいづるRB」は、舞鶴市と特定非営利活動法人赤煉瓦倶楽部舞鶴の協働プロジェクトとして2009年度より新たに立ち上げ、魅力的なまちづくりを目指したアート事業を行っている。												

66	実験的な「表現の場」と地域住民の集う「共有の場」												
企画名	ブレーカープロジェクト ex・pots2011												
施設名													
団体名	ブレーカープロジェクト実行委員会												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
				○		○			○				○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				大阪府大阪市		
			◎										
企画概要	2003年より大阪市の文化事業として実行委員会形式にてスタートし、新世界・西成周辺にてプロジェクトを展開している。2011年から2013年にかけて地域に根ざした芸術表現活動を開拓する人材の発掘・育成、また地域資源を活用した創造活動拠点の創出に取り組んでいる。先端的、実験的な「表現の場」として、また地域住民などが集う「共有の場」として活動拠点を機能させると同時に、これまで同様まちなかのプロジェクトも展開し、地域における持続可能なアートプロジェクトのしくみづくりを構築する。												
会期	通年(①梅田哲也展覧会「小さなものが大きくみえる」:2011年11月12日～12月4日 ②呉夏枝ワークショップ「編み物をほどく／ほぐす」:2012年2月8・22日、3月1・8日③大友良英「子どもオーケストラ」:2012年2月4日、3月29日 ④ラウンドテーブル「ひと・場所・アート」:2012年3月18日)												
会場	①新・福寿荘 ②山王地域在宅サービスステーションみどり苑 ③今池こどもの家・南津守小学校 ④大阪歴史博物館												
URL	http://breakerproject.net/												
画像													
	新・福寿荘、2011 撮影:有佐祐樹						「子どもオーケストラ」大友良英、2012 撮影:仲川あい						
参加アーティスト	梅田哲也、呉夏枝、大友良英												
クレジット	主催:ブレーカープロジェクト実行委員会 助成:財団法人地域創造/財団法人文化・芸術による福武地域振興財団 協力:新世界町会連合会/新世界市場商業協同組合/山王連合振興町会/山王社会福祉協議会/社会福祉法人山王みどり会/山王女性会/飛田連合振興町会/飛田地区商店街連合/豊年食品株式会社/元荒忠商店/新世界援隊/株式会社明治大理石/Ohana 遊びの学校/今池こどもの家/愛染橋保育園・児童館/大阪市立南津守小学校/南津守連合振興町会/南津守社会福祉協議会/西成区地域福祉アクションプラン推進委員会/西成区役所市民協働課/社会福祉法人大阪市社会福祉協議会大阪市ボランティア情報センター/大阪市立大学都市研究プラザ												
団体概要	既存の美術空間、既存のシステムにはおさまりきらない独自の表現手段を開拓するアーティストとともに、地域に根ざした表現活動を探求するアートプロジェクトである。単にアートをまちの中に実現させるためでなく、また地域の活性化のみを目的とするものでもない、双方にとって有効なプロジェクトを目指している。												

67	アートと社会的課題の関わりを模索												
企画名	OCA!(大阪コミュニティアート)												
施設名													
団体名	特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
	○	○				○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				大阪府大阪市		
					◎								
企画概要	釜ヶ崎地区には歴史的な背景の中、社会的課題が集積してきた。課題の中からすばらしい表現が立ち上がる瞬間に出会いながら、しかしその可能性に対し言説やメソッドのようなものを持ちえていないのが現状である。この状況の中、アートは社会的課題や問題とどのように関わり得るのか。さまざまな人と考え模索するきっかけとして、アーティストが地域に滞在して、作品づくりや活動、OSづくりをし、そこから生み出される状況を再考する。												
会期	こころのたねとしてワークショップ 2011年8月30日、9月6日、9月17日、10月2日、 こどものワークショップ2011年8月28日、.9月25日、10月23日、11月11日、11月25日、12月9日 OCA!シンポジウム 2011年10月14日												
会場	カマン！メディアセンター、こころぎ、こどもの里、山王こどもセンター、飛田会館												
URL	http://www.cocoroom.org/												
画像													
参加アーティスト	谷川俊太郎、SHINGO★西成、岩淵拓郎、佐久間新、岩橋由莉、北村成美、上田假奈代ほか												
クレジット	主催:大阪市 企画運営:特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム) 特別協賛:アサヒビール株式会社 助成:財団法人アサヒビール芸術文化財団、財団法人文化・芸術による福武地域振興財団 協力:こどもの里、山王こどもセンター、大阪市立大学都市研究プラザ												
団体概要	"こえ"と"ことば"と"こころ"をキーワードとした芸術活動の普及と人材育成を柱に、表現者や表現をとりまく仕組みの新たなモデルを実践し生き生きとした市民活動に寄与することを目指し活動している。												

68	若手クリエイターの活動をまちの魅力にする環境づくり												
企 画 名	此花アーツファーム												
施 設 名													
団 体 名	此花アーツファーム事務局												
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
						○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				大阪府大阪市		
			○		○								
企画概要	高齢化が進み、空き家の目立つ大阪市此花区の梅香・四貫島エリアを舞台に、地元の不動産会社と協働してまちづくりプロジェクトを展開している。特に力を入れている活動として、アーティストやデザイナーなど創造的な活動を志している若者が集まる仕掛けづくりと、それらの活動が地域で連鎖し、まちの魅力へとつながっていくための環境づくり(場づくり)に取り組んでいる。												
会 期													
会 場	大阪市此花区梅香・四貫島地域												
U R L	konohana-artsfarm.net												
画 像													
参 加 アーティスト													
クレジット													
団体概要	国内外の子どもたちを含めた市民の方たちに対して、教育、防災、まちづくり、福祉、環境、国際協力等の社会の既存の各分野におけるアートの発想やアーティストの持つ既成概念にとられない創造力(これを総称して"アーツ"と呼ぶ)を導入した事業を行い、それらの分野がそれぞれ抱えているさまざまな課題や問題の解消と地域の活性化に寄与することを目的としている。												

69	北加賀屋エリアの文化や魅力が向上するまちづくり												
企 画 名 施 設 名	北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想												
団 体 名	千島土地株式会社 地域創生・社会貢献事業部												
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他
						○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	政令指定都市				大阪府大阪市		
	○	○	○	○		○							
企画概要	北加賀屋エリア(大阪市住之江区)を創造性あふれる魅力的なまちに変えていく試みとして、2009年に提唱された構想。創造的な活動を行う人々が北加賀屋に集うような取り組みを進め、国内だけではなく、世界に向けて情報発信することで、北加賀屋エリアの文化や魅力が向上するようなまちづくりを目指す。具体的には、大阪港につながる木津川沿いの名村造船所跡地を中心に、地下鉄「北加賀屋」駅の北エリアに点在する空き物件でアーティストやクリエイターがアトリエやオフィスを開設・運営し、「芸術・文化が集積する創造拠点」として再生することを試みている。												
会 期													
会 場	名村造船所大阪工場跡地(大阪市住之江区北加賀屋4-1-55)を中心とする北加賀屋エリア全体												
U R L	http://kitakagaya-cv.net/												
画 像	 旅館を改装した アーティスト・イン・レジデンス(AIR)大阪の外観  クリエイティブセンター大阪での イベント風景												
参 加 アーティスト	不特定												
クレジット	運営主体:千島土地株式会社地域創生・社会貢献事業部、クリエイティブセンター大阪												
団体概要	クリエイティブセンター大阪のプロデューサー・小原啓渡氏が2009年に本構想を提唱。現在は、千島土地を中心として、地域のアート関係者、住之江区役所により設立された地域活性化実行委員会等が、それぞれの立場から本構想に取り組んでいる。												

70	地域の財産を守り育てていく場所													
企画名	浄るりシアター													
施設名														
団体名	能勢町													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
				○		○		○	○	○	○	○		
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				大阪府能勢町			
	○		○		◎									
企画概要	能勢の地に、200年間余に渡って受け継がれ、親しまれてきた能勢の浄瑠璃。能勢町では、1993年に「浄るりシアター」を開設し、能勢の浄瑠璃を地域の財産として守り育てていくと共に、次の世代に向けての提案と発展のため、人形・囃子を加えたビジュアル化が計画された。1998年、伝統芸能の素浄瑠璃に人形と囃子を付けた「能勢人形浄瑠璃」をプロデュース。地域資源を活かした創造活動と人材育成を推進し、「浄瑠璃の里文化振興条例」を策定するなど、芸術文化による地域づくりを牽引している。													
会期	6月(「例年6月浄るり月間」として開催 2日間程度) 9月(神社公演)													
会場	浄るりシアター、町内各神社など													
URL	http://www.jyoruri.jp/													
画像	 													
参加アーティスト	能勢人形浄瑠璃 ろっかくざ 鹿角座													
クレジット	2011年度6月月間 主催:能勢人形浄瑠璃実行委員会・能勢町・能勢人形浄瑠璃鹿角座 後援:大阪府・大阪府教育委員会・能勢町郷土芸能保存会													
団体概要	能勢町													

71	創造都市戦略のシンボルとなる“創造と交流”の拠点												
企画名	KIITO(「デザイン都市・神戸」における創造的活動支援事業の拠点)												
施設名													
団体名	神戸市												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
		○	○	○	○	○	○						○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模			開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市			兵庫県神戸市			
			○	○	○								
企画概要	みなとまち神戸の近代化の歴史を物語る貴重な歴史的資源である旧神戸生糸検査所を神戸市が取得し、現在、推進している創造都市戦略「デザイン都市・神戸」のシンボルとなる“創造と交流”の拠点である「デザイン・クリエイティブセンター神戸」が開設(2012年度中)されるまで、クリエイティブな活動をささえ実践する場として「KIITO」を企画・運営。												
会期	2011年1月14日～2012年7月31日(予定)												
会場	KIITO (神戸市中央区浜辺通5-1-14 神戸商工貿易センタービル26F 2620号室)												
URL	http://www.kobe-designhub.net/kiito/												
画像													
	藤浩志によるセミナーの様子						フミノナによるワークショップの様子						
参加アーティスト	自主事業として: 曾我部昌史(建築家)、藤浩志(美術家)、寄藤文平(アートディレクター、イラストレーター)、土谷享(アーティスト)、山崎亮(コミュニティデザイナー)、甲賀雅章(アートプロデューサー)、岡本欣也(コピーライター)、奥田正行(シェフ)、中村政人(アーティスト ディレクター)、芹沢高志(エグゼクティブディレクター) 永田宏和(ディレクター)、槻橋修(建築家)、米山雅彦(シェフ) 等 KOBE DESIGN HUB フレンドシップ登録クリエイター: フミノナ(マスキングテープコラージュ作家)、HOUKO(アーティスト)、岡田有以(写真家)、和田武大(デザイナー) 等												
クレジット	主催: 神戸市 (神戸市企画調整局 デザイン都市推進室)												
団体概要	株式会社 iop 都市文化創造研究所 代表: 永田宏和 設立: 2001年3月1日 主な事業内容: まちづくりコンサルタント事業、店舗・建築プロデュース 主な事業: 家族向け体験型イベントソーシャル“かえっこ”ビレッジの企画・運営、水都大阪2009「水辺の文化座」企画・運営、此花アーツファーム構想企画・運営、stella 御幸町プロデュース、パシフィック心斎橋基本デザイン監修、ウーバレ・ゴードン トータルプロデュース等 URL: http://www.iop-c3.net/												

72	ダンス芸術の力を活かした環境・人・まちづくり												
企 画 名	DANCE BOX												
施 設 名													
団 体 名	特定非営利活動法人 DANCE BOX												
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
		○	○	○		○			○	○			
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				兵庫県神戸市		
	◎	○											
企画概要	1991年に大阪・TORII HALL を拠点に活動を始めた DANCE BOX は、2002年特定非営利活動法人化、2009年から神戸市新長田の「ArtTheater dB 神戸」を拠点として活動している。DANCE BOX は自主事業を通じて、優れた作品を紹介するにとどまらず、新しいアーティスト・作品を生み出すことに重点を置いている。同時に観客の育成についても、劇場が地域社会に果たす役割を考慮しつつ、積極的にアプローチしている。 障害者が美術、音楽、ダンスの3人のナビゲーターとともに新しい舞台づくりに挑んだ「循環プロジェクト」や、アーティスト・イン・レジデンス事業、「KOBE-Asia Contemporary Dance Festival」といった国際プログラムにも重点を置いている。												
会 期	年間を通じて												
会 場	ArtTheater dB 神戸、新長田界限												
U R L	http://www.db-dancebox.org/index.html												
画 像													
	劇団ティクバ+循環プロジェクト 写真:草本利江						コンテンポラリーダンス・ツアー in 新長田 KIKIKIKIKIKI						
参 加 アーティスト	ヤザキタケン、砂連尾理、セレノグラフィカ、contact Gonzo、黒沢美香、山田うん、余越保子、北村成美、きたまり、アンサンブル・ゾネ、モノクローム・サーカス、手塚夏子、平原慎太郎、三浦宏之、山賀ざくろ、劇団ティクバ、ピチュ・クランチェン、ジェコ・シオンポ、ディック・ウォン、チョイ・カファイ、アルカディ・ザイデスほか												
クレジット	主催:特定非営利活動法人 DANCE BOX 後援:長田区、財団法人神戸市民文化振興財団 助成:文化庁、神戸市、財団法人文化・芸術による福武地域振興財団、ほか 協賛:アサヒビール芸術文化財団、ほか 協力:新長田まちづくり株式会社、FM わいわい、丸五市場、大正筋商店街、ほか												
団体概要	DANCE BOX は、ダンス芸術の「自己表現の力」、「コミュニケーションを創る力」、「国際性」を現代社会に活かし、市民がより豊かな生活を享受できる環境をつくること、またダンスを通じて豊かな感性を持つ子供の育成、および人と自然が共生できる文化的なまちづくりの推進を図ることを目的としている。												

73	自社ホールを拠点とした未来の音楽の担い手の育成													
企画名 施設名	音楽による次世代育成の多角的活動 - TOA Meet! Music! Concept -													
団体名	TOA 株式会社													
索引別 分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他	
			○			○			○	○	○	○		
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	政令指定都市				兵庫県神戸市			
	○	○												
企画概要	音響・映像機器の専門メーカーである TOA は、グループ企業のジーベックとともに、自社ホールを拠点にメセナ活動に取り組む。うち、音楽による次世代育成活動「TOA Meet! Music! Concept」は、4つの世代別音楽プログラムと保護者の意識調査による複合プロジェクトとして、多角的に展開されている。小中学生が対象の「TOA Music Workshop」では音楽との最初の出会いを、中学生が対象の「トライやるウィーク」では音楽を創作し発表する喜びを、中高生には音楽のプロと接する「神戸 JAZZ」を、そして専門学校生・大学生以上に対しては「匠ワークショップ」で未来の音楽の担い手を育成することを目指す。													
会 期	1998年11月～(※4つの音楽プログラムのうち、最も長期間実施している「トライやるウィーク」の実施期間)													
会 場	ジーベックホール(神戸市中央区)、神戸文化ホール、全国の学校施設、等													
U R L	http://www.toa-csr.jp/culture/ http://www.toa.co.jp/mecenat/tmw/													
画 像														
参 加 アーティスト	東原力哉(ドラム)、清水興(ベース)、セレノグラフィカ(コンテンポラリーダンス)、安永早絵子(パーカッション)、高庚範(韓国伝統音楽)他 <2011年度実績>													
クレジット	ーTOA Meet! Music! Conceptー 主催:TOA 株式会社 企画制作:株式会社ジーベック、特定非営利活動法人子どもとアーティストの出会い 他 後援:神戸市、神戸市教育委員会 他 <内、「神戸 JAZZ」のみ実行委員会形式> 主催:神戸 JAZZ 実行委員会、日本学校ジャズ教育協会(JAJE)関西本部 共催:財団法人 神戸市民文化振興財団 協賛:TOA 株式会社 他 後援:兵庫県、兵庫県教育委員会、神戸市、神戸市教育委員会、神戸市吹奏楽連盟 他													
団体概要	拡声放送機器、通信機器、その他情報伝達機械器具の製造販売／音響機器、映像機器、その他電子・電気機械器具の製造販売／上記機器の賃貸ならびに工事の設計施工／不動産の賃貸および管理／ホール・スタジオの賃貸経営ならびに音楽等のイベント・催し物の企画運営／上記に付帯または関連する一切の事業													

74	青少年と舞台芸術との出会いの場													
企画名	兵庫県立尼崎青少年創造劇場(ピッコロシアター)													
施設名														
団体名	公益財団法人 兵庫県芸術文化協会													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
	○	○	○			○		○	○	○	○			
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	30万人以上の市				兵庫県尼崎市			
	○	○	◎	○	○	○								
企画概要	演劇による青少年の健全育成を掲げ、日本初の付属「県立ピッコロ劇団」を設立して長年にわたって活動。また、「ピッコロ演劇学校」「ピッコロ舞台技術学校」により人材育成に努め、阪神・淡路大震災では心の支援活動を行うなど、公共劇団として地域に多大な貢献を行った。さらには地域の学校・教育機関・鑑賞団体等と連携を図り、劇場施設の見学、中学生の職場体験学習(トライやるウィーク)、大学・高校生などのインターンシップ、教職員の研修など、積極的に受け入れている。													
会期														
会場	兵庫県立尼崎青少年創造劇場(ピッコロシアター)													
URL	http://hyogo-arts.or.jp/piccolo/index.html													
画像														
	ピッコロ演劇学校 研究科前期発表会							県立ピッコロ劇団 阪神・淡路大震災 被災地激励活動						
参加アーティスト														
クレジット														
団体概要	芸術文化の創造と交流、調査研究、普及啓発及び学習機会の提供など多様な芸術文化活動を展開することにより、芸術文化の振興を図り、県民文化の向上に寄与するとともに、こころ豊かな人づくりに資することを目的とする。													

75	未来型の生活スタイルの模索・提案												
企画名	ノマド村												
施設名	ノマド村												
団体名	ノマド村												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
				○		○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				兵庫県淡路市		
	○			○		○							
企画概要	4年間スイスで展開されたアートプロジェクト<Laboratoire Village Nomade>を運営したジュパジューカンパニーは、日本の淡路島に拠点を移し、「ノマド村」と改名して、新たな活動を開始。ノマド村とは、移動民と定住地という一見対立した概念だが、個人的な場の所有や利益の蓄積を目的とせず、多彩な人々がこの場を共有活用し、流動的に変化し続ける、開かれた場の創造をめざすことで、ノマド村と命名した。地域の活性化と新たな観光地として貢献すると共に、国内外から注目を集める、未来型の生活スタイルの模索・提案を事業目的とする。												
会期													
会場	ノマド村(淡路市長澤727)												
URL	http://www.nomadomura.net/nomadomura/index.html												
画像	 左・右:情報誌「パルライフ」より												
参加アーティスト													
クレジット	主催:ノマド村												
団体概要	団体の中心メンバーは、ドイツとスイスで活動してきた写真家、映像作家の茂木綾子、ドイツ人映像作家のヴェルナー・ペンツェルが携わり、地域の人々や国内外からの参加者、訪問者たちと、共にこの場を作り上げる、ソーシャル・スカルプチャーとして活動する。												

76	現在・未来の演劇人と観客を育てる演劇専門ホール												
企画名	伊丹市立演劇ホール(アイホール)												
施設名													
団体名	公益財団法人 伊丹市文化振興財団												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○			○							
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				兵庫県伊丹市		
		○	◎										
企画概要	都市近郊の演劇専門ホールとして、関西の小劇場演劇、コンテンポラリーダンスの拠点となるとともに、アーティストの育成を標榜し、実践した先駆け。土曜日の朝に演劇やダンスを体験できる「土曜日のワークショップ」、伊丹市内の中学高校演劇部のフェスティバル「アイフェス!!」、夏休み恒例の人気講座の子どものための演劇ワークショップ「元気！えんげき」など、未来の演劇人、観客を育てていく活動にも積極的に取り組み、地元をはじめ関西地域全体の芸術文化振興に多大な貢献を行った。												
会期													
会場	伊丹市立演劇ホール(アイホール)												
URL	http://www.aihall.com/												
画像													
	土曜日のワークショップ						子どものための演劇ワークショップ「元気！えんげき」						
													
アイフェス!!													
参加アーティスト													
クレジット													
団体概要	公益財団法人伊丹市文化振興財団は、市民一人ひとりがそれぞれ独自の個性を発揮し、豊かでうまいのある市民生活を実現できるよう、1992年に設立された。現在、アイホールをはじめ市内の8つの文化・教育施設を主な活動拠点として、生涯学習および芸術文化活動に関わる特色ある事業を推進している。												

77	少年少女オーケストラの拠点													
企画名	朝来市文化会館(和田山ジュピターホール)													
施設名														
団体名	朝来市													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
			○			○								
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				兵庫県朝来市			
	○	○	○											
企画概要	旧和田山町時代から少年少女オーケストラの拠点としてクラシック音楽の普及に力を入れ、学校などへのアウトリーチ事業を精力的に展開。但馬地域の広域連携にも努め、合併後も年間30回～40回の事業を行うなど、アウトリーチ事業の旗手として尽力した。													
会期														
会場														
URL	http://www.city.asago.hyogo.jp													
画像	 													
参加アーティスト														
クレジット														
団体概要														

78	演劇・劇場ならではの地域振興、教育分野への貢献													
企画名	鳥の劇場													
施設名														
団体名	特定非営利活動法人 鳥の劇場													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
			○	○		○			○	○				
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				鳥取県鳥取市			
	○	○	◎	○										
企画概要	〈祈ろう。がんばろう。未来をつくるために、劇場にできること。〉これを2011年度の活動のテーマとした。演劇を軸にいろいろな人がそれぞれの多様性を認め合いながら未来のために連帯する場として、劇場を一段成熟させることをねらう。 子ども向けの小作品／別役実の不条理劇／戦争を主題にした芝居と語りによる舞台作品／劇場専属音楽家のオリジナル楽曲による音楽会などの上演、芸術教育を中心にすえた週末の学校「夏休みの小鳥の学校」、映画を見て社会を考える企画「六ヶ所村ラブソディー上映会」を開催。鳥取県内外の学校などでワークショップや講演、秋には「鳥の演劇祭4」も実施。大学やアートNPO や韓国の劇団との連携、鳥の劇場俳優と外部アーティストとの交流も進める。													
会期														
会場	鳥取市鹿野町(鳥の劇場)													
URL	http://www.birdtheatre.org													
画像	 													
参加アーティスト	劇団鳥の劇場、やなぎみわ(現代美術家)、劇団ティダ(韓国)、三浦しをん(小説家)、白岡彪(家具デザイナー)、阿部一徳(俳優)、特定非営利活動法人JCDN とダンサー、他音楽家や弁護士など。「鳥の演劇祭4」にはフランス、フィンランド、韓国、イギリスと日本国内の芸術団体が参加。													
クレジット	2011年度プログラムへの後援・助成・協賛(※「鳥の演劇祭4」は別クレジット。) 主催: 特定非営利活動法人鳥の劇場 後援: 鳥取県 鳥取市 特定非営利活動法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会 鳥取大学地域学部附属芸術文化センター 新日本海新聞社 株式会社ふるさと鹿野 助成: 文化庁 優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業 アサヒビール芸術文化財団 ごうぎん鳥取文化振興財団 EU・ジャパンフェスト日本委員会 文化・芸術による福武地域振興財団 協賛: 日本海テレビジョン放送株式会社													
団体概要	2006年1月、演出家・中島諒人を中心に設立。鳥取県鳥取市鹿野町の廃校になった幼稚園・小学校を劇場施設へ手作りリノベーション。劇団の運営する劇場として、「創る」「招く」「いっしょにやる」「試みる」「考える」の5本柱で年間プログラムを構成。現代劇の創作・上演と併行して、ワークショップ、優れた作品の招聘、レクチャーなどを実施する。08年から地域や行政との協働による演劇祭「鳥の演劇祭」を実施。													

79	「演劇文化」による心豊かな社会の創出												
企 画 名 施 設 名	松江市八雲林間劇場(しいの実シアター)												
団 体 名	特定非営利活動法人 あしぶえ												
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他
			○	○		○			○	○			
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	10万人以上の市				島根県松江市		
		◎											
企画概要	劇団あしぶえと旧八雲村の協働により建設された公設民営劇場の草分け。演劇の制作・上演や、子どもたちや高齢者までを対象にした海外の優秀作品の上演を行う。3年に1度開催し、国内外の10数劇団が競演する「八雲国際演劇祭」では、あしぶえ・行政・地域ボランティアによる「演劇によるまちづくり」も全国から注目されている。2010年度からは、文化庁「優れた劇場・音楽堂からの創造活動発信事業」の5年採択を受け、地域の中核劇場として創造発信事業も行っている。												
会 期													
会 場													
U R L	http://www.yitf.org/												
画 像													
参 加 アーティスト													
クレジット													
団体概要	1966年創立。2005年より特定非営利活動法人。＜演劇を人々の暮らしの中へ＞をモットーに、「演劇文化」による心豊かな社会を創ることをめざす。宮澤賢治の『セロ弾きのゴーシュ』は、22年間で150回上演。6つの国際賞を受賞。学校や企業を対象に「表現・コミュニケーション能力育成のための事業」も実施。演劇だけでなく、特定非営利活動法人として学校、企業、行政、芸術団体、地域住民との連携・協働など、関係構築にも力を入れている。												

80	次代を担う子どもたちのための美術館												
企画名	浜田市世界こども美術館創作活動館												
施設名	浜田市世界こども美術館												
団体名	浜田市世界こども美術館												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○										
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人以上の市町村				島根県浜田市		
			◎										
企画概要	浜田市世界こども美術館は、1996年、次代を担う子どもたちのための美術館として誕生。幼い頃から美術にふれあうことで想像力を養い、感性を養うことをモットーに様々な展覧会を開催し、創作活動にも力を注いでいる。また、学校教育との連携を図るため、クラス単位で美術館を訪れてもらい、一日かけて鑑賞と創作活動を楽しんでもらう「ミュージアム・スクール」、世界の子どもの作品を無審査で展覧する「アンデパンダン展」など、「みること、つくること」を通して子どもたちの創造的な環境づくりに尽力している。												
会期													
会場													
URL	http://hamada-kodomo.art.coocan.jp/												
画像	 												
参加アーティスト													
クレジット													
団体概要													

81	アートの視点から提案する廃校の活用方法												
企画名	隠岐アートトライアル2011「美田小の実験」												
施設名													
団体名	外浜まつり実行委員会												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
				○	○	○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				島根県西の島町		
			○		○								
企画概要	この活動は、2007年から2010年まで開催されてきたアート協働企画「外浜まつり」を継承している。2011年春、西ノ島では100年以上の歴史を持つ美田小学校が閉校した。閉校後の学校活用は地元民にとって大きな関心事である。そこで「外浜まつり」で地元と深く関わっていた本土のアーティスト・岡田毅志、田島史朗の両氏に、アーティストとしてだけでなくディレクターとしても参画してもらい、彼らと「美田学校再生会議」(地元民)とのコラボレーションとして、展覧会やアートプログラムが実施された。												
会期	協働活動:2011年2月～11月、メインプログラム:9月14日～19日												
会場	元・美田小学校及び周辺地域(島根県隠岐郡西ノ島町美田)												
URL	http://oki-art-try.jimdo.com/, http://www.voluntary.jp/sotohama/												
画像	 撮影:丹野志摩												
参加アーティスト	岡田毅志、田島史朗、いいな、坂巻沙代、川村祐介、松田航 (岡田、田島はディレクターを兼務)												
クレジット	主催:外浜まつり実行委員会 共催:特定非営利活動法人てにやわず、ライブバンザイ実行委員会、西ノ島町商工会青年部 後援:西ノ島町、JFしまね浦郷支所、西ノ島町商工会、西ノ島町教育委員会、西ノ島町観光協会 助成:財団法人アサヒビール芸術文化財団、財団法人エネルギー文化・スポーツ財団 特別協賛:アサヒビール株式会社(アサヒ・アート・フェスティバル2011参加事業)												
団体概要	当委員会は、アーティストと島民の協働活動「外浜まつり」の運営を目的として設立した任意団体であるが、2011年はその目的を継承し、発展段階のプログラム「隠岐アートトライアル」の運営を目的とする。2006年設立。												

82	多分野の人たちが相互に関わることができる場づくり												
企画名	アートリンク・プロジェクト												
施設名													
団体名	特定非営利活動法人 ハート・アート・おかやま												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
		○		○		○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	都道府県				岡山県内		
			○		○								
企画概要	現代社会では、かつてのようなモノにおいて成長を遂げるよりも、知性や感性、魂の深さにおいて成長を遂げる事が重要な意味を持っていると考え、人と人、人と地域、人と自然が交歓し、あらゆる側面のつながりを回復させることを活動のテーマと考えている。その鍵を握っているのがアートであり、そのポテンシャルを活かす事で新しい価値を創造できる。表現においては、障がいや年齢はひとつの個性となり、彼らの自己表現から豊かな市民文化の創造が拓かれることを念頭に、表現活動を媒体として関わっている。障がいゆえに想像性の芽をもつ人、自由な発想をする子ども、自身のキャリアを生かし人生の終焉を生きている活力のある高齢者は、まさに概念をもっている人であり、その人の存在そのものがサイトスペシフィックである。												
会期	笠岡諸島文化祭(8月)、電車カメラ(9月)、池上遊覧鉄道展(10月)、学校ワークショップ(11～2月) 芸術と食の地産地賞(5～12月)、他ワークショップなど通年												
会場	笠岡諸島、岡山市内、総社市門田、学校ワークショップ(瀬戸内市立牛窓西小、岡山市立中央中学校、和気町立藤野小学校)ほか												
URL	http://www.heart-art-okayama.net												
画像													
参加アーティスト	タノタイガ、松岡映里、岡田毅志、伊達伸明、住中浩史、会田大也、岩本象一、佐藤時啓、三友周太、David Williams ほか												
クレジット	主催: 特定非営利活動法人ハート・アート・おかやま、岡山県、文化がまちに出る！プロジェクト in 備前実行委員会、おかやま県民文化祭実行委員会 共催: 特定非営利活動法人笠岡島づくり海社、かさおか夢アート実行委員会、特定非営利活動法人バンクオブアーツ岡山 後援: 山陽新聞社、RSK 山陽放送、岡山エフエム放送株式会社、OHK 岡山放送 助成: 梶谷福祉基金、福武教育文化振興財団、赤い羽根共同募金会 特別協賛: アサヒビール株式会社、岡山県備前県民局 協力: 白石公民館、特定非営利活動法人島づくり海社白石支社、												
団体概要	障がいのある人とアーティストを1対1のペアにして制作する「アートリンク・プロジェクト」、限界集落の島で高齢者や島の人と価値を問い直していく「笠岡諸島・島の文化祭」、地域・自然と人・表現にこだわった「食と芸術の地産地賞」、学校にアーティストを派遣しワークショップ形式で制作していく「アートの力×子どもの力」などを展開。長期コラボレーションや特別な場所でのワークショップなどを仕組み、現場で相互に関わっていく過程を重視し、高齢者・障がい者・子どもを含めた市民に表現活動を提供している。その活動を通じて縁ができた「池上秦川邸」で、教育・文化・経済などの視点から、池上家の人、近隣の人、交流のある大分市民など多分野の人たちが相互に関わることができる場づくりを行っている。1999年設立。												

83	農業(漁業)と芸術の協働による新たな現代アートの社会的役割の提示												
企画名	広島アートプロジェクト「半農半芸+ちょっと漁」												
施設名													
団体名	広島アートプロジェクト実行委員会												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
						○							
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				広島県尾道市		
				◎									
企画概要	2007年より活動を行っている広島アートプロジェクトは、過去4年間広島市中区吉島地区を中心に展覧会やイベントを開催してきた。2011年度からは「半農半芸+ちょっと漁」をテーマとし、農業(漁業)と芸術の協働による新たな現代アートの社会的役割を、日本の食文化と里山里海を支える離島での地域連携によって探求していく。主な実施内容として、百島芸術研究所実行委員会が計画する『百島中学校跡利用計画』の推進事業として、広島市立大学芸術学部現代表現研究室を中心に、地域との交流イベントや、農業体験、滞在制作などを通して、農業(漁業)・アートの双方から地域振興を考察し、その成果として展覧会の実施を予定している。												
会期	2011年4月ー												
会場	広島県尾道市百島町各所、旧尾道市立百島中学校跡地												
URL	http://www.hiroshima-ap.jpn.org/ 〔専用ブログ〕http://hiroshimaapomp.blogspot.com/												
画像	 												
参加アーティスト													
クレジット	主催: 広島アートプロジェクト実行委員会 共催: 広島市立大学、百島芸術研究所実行委員会、Yanagi & Associate 後援: 尾道市、尾道市教育委員会(申請中) 助成: 財団法人文化・芸術による福祉地域振興財団 協力: 有限会社百島農園、立花テキスタイル研究所 企画協力: 広島大学芸術学部現代表現領域												
団体概要	広島に居住、来訪する、もしくは広島に関心を持つ一般市民、青少年、アーティスト、団体に対して、展覧会、ワーク ショップ、講演会、イベントの実施などを通して、国際交流を含む、現代美術を中心とした文化芸術の振興に関する事業、広島の歴史に関する教育普及活動、都市空間のデザインに関する事業を行い、文化芸術の振興、国際平和の実現、および共生社会の推進に寄与することを目的とする。												

84	先進的な表現に対する地域の文化リテラシーの向上												
企 画 名	山口情報芸術センター[YCAM]												
施 設 名													
団 体 名	公益財団法人 山口市文化振興財団												
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○			○							◎
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				山口県山口市		
	○	○	○	○		◎							
企画概要	山口情報芸術センター[YCAM]は、展示スペース、劇場、ミニシアター、市立中央図書館を併設する複合文化施設として2003年に開館した、日本では珍しいメディアアートの拠点。コンピューター、映像などの専門スタッフを擁し、国内外のアーティストの滞在制作によるメディアアートやパフォーマンスなどの作品を発表。教育普及にも力を入れ、先進的な表現に対する地域の文化リテラシーの向上に貢献している。												
会 期													
会 場													
U R L	http://www.ycam.jp/												
画 像													
	チェルフィッチュ：2011年3月 岡田利規ワークショップ (提供：山口情報芸術センター)												
梅田宏明：2011年2月 梅田宏明「Holistic Strata」(YCAM 委嘱作品) (提供：山口情報芸術センター)													
参 加 アーティスト													
クレジット													
団体概要	財団法人山口市文化振興財団は、1996年3月に、山口市における文化の振興を図るため企画事業を実施するとともに、市民の自主的かつ創造的な文化活動を支援し、個性豊かな地域社会の形成と市民生活の向上に寄与することを目的として設立された。2011年4月に公益財団法人に移行した。												

85	たくさんの移住者を迎える「創造的な町」												
企画名	神山アーティスト・イン・レジデンス2011												
施設名													
団体名	神山アーティスト・イン・レジデンス実行委員会												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○	○		○			○				
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				徳島県神山町		
			◎										
企画概要	徳島市から車で1時間ほどの里山にある神山町では、1999年より国内外から3〜4名のアーティストを招聘する神山アーティスト・イン・レジデンス(KAIR)を開催。お遍路さんへの"お接待"の心で作品制作から生活面まできめ細やかなサポートをしている。アーティストから起業を考える若者までたくさんの移住者を迎える「創造的な町」へと成長してきた。今回は3名のアーティストが滞在制作し、展覧会を開催。また、夏に実施された町民が参加した「神山農響楽団」のパフォーマンス・映像作品も上映。												
会期	レジデンス期間 2011年8月26日～11月7日												
会場	神山町一帯												
URL	http://www.in-kamiyama.jp/												
画像													
参加アーティスト	Marina Carvalho (ポルトガル)、Kevin Yates (カナダ)、井上唯(日本)、神山農響楽団(日本、アメリカ)												
クレジット	主催: 神山アーティスト・イン・レジデンス実行委員会 共催: 特定非営利活動法人 グリーンバレー 助成: 神山町、文化立県とくしま推進事業、財団法人 文化・芸術による福武地域財団、アサヒ・アート・フェスティバル2011												
団体概要	特定非営利活動法人グリーンバレーが母体となって運営。神山町民に対して、芸術・文化の発展、国際交流の推進、環境の美化に関する事業を行い、神山町を活力があり、住みよい町にすることを目的とする。												

86	瀬戸内の地域資源を世界へと発信													
企画名	瀬戸内国際芸術祭2010													
施設名														
団体名	瀬戸内国際芸術祭実行委員会													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
				○		○		○						
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	都道府県				香川県高松市ほか			
			◎		○									
企画概要	世界に誇る瀬戸内海の島々の景観を生かした国際的な芸術の祭典を開催することにより、文化芸術の振興を図り、瀬戸内海の活性化、交流人口の増加、世界への情報発信に寄与することを目的とする。													
会期	2010年7月19日～10月31日													
会場	直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島および高松港周辺													
URL	http://setouchi-artfest.jp/													
画像	  大巻伸嗣 Liminal Air -core- Photo 中村脩2010.7.19 開会式													
参加アーティスト	18の国と地域から75組のアーティスト、プロジェクト及び16のイベント													
クレジット	主催:瀬戸内国際芸術祭実行委員会 後援:総務省、経済産業省、国土交通省、観光庁、日本観光協会 助成:(財)文化・芸術による福祉地域振興財団、文化庁、(財)アサヒビール芸術文化財団、オーストラリア大使館、豪日交流基金、オーストラリアカウンシル、伍集成文化教育基金會、香港大學通識教育 協賛:鹿島建設株式会社、株式会社ベネッセホールディングス、株式会社レクザム、アオイ電子株式会社、今治造船株式会社、株式会社NTTドコモ、株式会社大本組、株式会社香川銀行、香川県うちわ協同組合連合会、香川県漁業協同組合連合会、香川県信用組合、かどや製油株式会社、木下製粉株式会社、協和化学工業株式会社、株式会社サニーエイト、サンコー株式会社、四国電力株式会社、四国旅客鉄道株式会社、株式会社資生堂、神姫バス株式会社、株式会社セイワ地研、ソフトバンクテレコム株式会社、大日本印刷株式会社、高松琴平電気鉄道株式会社、高松信用金庫、株式会社中国銀行、帝國製薬株式会社、テーブルマーク株式会社、株式会社電通、財団法人南海育英会、社団法人日本商環境設計家協会、ハヤカワ電線工業株式会社、財団法人阪大微生物病研究会、株式会社百十四銀行、株式会社マキタ、財団法人松平公益会、株式会社丸ノ内ホテル、牟禮印刷株式会社、森ビル株式会社、株式会社四電工、信興集團、株式会社アムロン、株式会社ヴァレンシア、大倉工業株式会社、香川県造園協会、鎌田醤油株式会社、研精堂印刷株式会社、ゴールデンタイム高松、国際航業ホールディングス株式会社、讃州製紙株式会社、サントリーホールディングス株式会社、株式会社ジップ、NPO 法人瀬戸内オリーブ基金、株式会社創裕、高松帝酸株式会社、東洋オリーブ株式会社、東洋炭素株式会社、株式会社トーカイ、凸版印刷株式会社、株式会社トヨタレンタリース岡山、日本アジアグループ株式会社、日本生命保険相互会社、野村證券株式会社、株式会社ヒューリンクス、富士ゼロックス株式会社、株式会社フューチャー・デザイン・ラボ、蓬萊産業株式会社、財団法人本州四国連絡高速道路協会、みずほ証券株式会社、名泉鍵湯 奥津荘、ローム株式会社、株式会社ロフトワーク													
団体概要	設立:2008年4月25日 構成団体:香川県、高松市、土庄町、小豆島町、直島町、(財)直島福武美術館財団等 事業:瀬戸内国際芸術祭及びART SETOUCHI(芸術祭開催年以外の活動)の開催													

87	総合アートセンターとして県域の文化の向上												
企画名	高知県立美術館												
施設名													
団体名	財団法人 高知県文化財団												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○			○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	都道府県				高知県高知市		
	○	○	○	◎		○							
企画概要	優れた芸術鑑賞を通じて芸術に対する理解を深め、また、生活の中に潤いや安らぎを感じていただくため、1993年に高知市に開館した高知県立美術館。高知県の芸術文化の発信地としても県民の皆様に親しんでいただけるよう、幅広いジャンルの展覧会や各種の創作講座や講演会、あるいは映画上映会、コンサートや能、演劇などのホール・イベントを開催している。県内唯一の本格的美術館として意欲的な企画展と普及事業を実施し、併設されたホールにおいてダンス・現代演劇・映画・音楽などの新しい表現に触れる機会を提供し、総合アートセンターとして県域の文化の向上に貢献している。												
会期													
会場													
URL	http://kochi-bunkazaidan.or.jp/~museum/												
画像	 ストレンジ・フルーツ「スウォーン！」公演(2010年11月3日)												
参加アーティスト													
クレジット													
団体概要	県民文化の振興に資する芸術文化関連事業を、県、市町村、民間の力を幅広く結集して総合的、体系的に運営実施するとともに、県民の文化活動の拠点となる各種の芸術文化施設についてもその特性を生かし、公共性を確保しつつ、県民サービスの向上につながる、柔軟・弾力的な運営管理を行うなど、今後の本県の芸術文化活動の推進母体としての役割を担おうとしている。												

88	「人・自然・音楽」をテーマとした音楽祭												
企画名	四万十川国際音楽祭2011												
施設名													
団体名	四万十川国際音楽祭実行委員会												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○			○		○		○			
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				高知県四万十市		
	◎												
企画概要	①小中学生対象のジュニア弦楽アンサンブル講座を月2回開催(5月～3月:8月休み)②中村交響楽団第79回定期演奏会③京都大学交響楽団四万十市公演。中村西中吹奏楽部との共演及び楽器指導を実施する。④中川賢一メシアンコンサート⑤第6回チャイコフスキー国際コンクールで優勝したナサニエル・ローゼンのチェロリサイタル⑥四万十市立中村南小学校創立30周年記念コンサート(スクール出前コンサート)開催。上記の6つの企画を柱に「人・自然・音楽」をテーマに活動する。												
会期	2011年5月～2012年3月												
会場	四万十市立文化センター(高知県四万十市中村桜町2番地1)ほか												
URL	http://www4.ocn.ne.jp/~imujiku/												
画像													
参加アーティスト	中村交響楽団、京都大学交響楽団、中川賢一、ナサニエル・ローゼン ほか												
クレジット	主催:四万十川国際音楽祭実行委員会 共催:高知県立美術館 後援:高知新聞社ほか17社 助成:公益信託こうち特定非営利活動法人地域社会づくりファンド 協力:特定非営利活動法人 なかむら音楽振興会												
団体概要	中村交響楽団という「地域文化資源」、「文化のコミュニティ形成機能」、「文化芸術の公共性」、「教育普及活動」の4つをキーワードに、毎年夏から秋にかけて開催する音楽祭を企画運営する。												

89	文化を創造し、街ににぎわいを作りだし、人を育てる施設												
企 画 名	北九州芸術劇場												
施 設 名													
団 体 名	財団法人 北九州市芸術文化振興財団												
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○	○		○			○		○		
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				福岡県北九州市		
	○	◎		○									
企画概要	大・中・小3つの劇場、創造工房、芸術文化情報センターがあり、文化を創造し、まちににぎわいを作りだし、人を育てる施設としての役割を果たしている北九州芸術劇場は、「創る」「育つ」「観る」をコンセプトに演劇事業を展開。オリジナル作品のプロデュース、地域文化リーダーとなる若手演劇人の育成、小中学校での表現教育プログラム、多彩な鑑賞事業など、総合的なプログラムを展開し、地域に立脚した公立劇場のあり方を提示している。												
会 期													
会 場													
U R L	http://www.kitakyushu-performingartscenter.or.jp/												
画 像													
参 加 アーティスト													
クレジット													
団体概要	財団は、市民の芸術文化活動の振興に関する事業を行うとともに埋蔵文化財の発掘調査、研究及び保護などを行い、もって市民生活の向上と市民の豊かな芸術文化の創造に寄与することを目的とする。												

90	消費者から生産者へのスイッチを促す活動												
企画名	大人の図工時間 the land school 2010-2015												
施設名													
団体名	槻田小学校おやじの会・八万湯プロジェクト												
索引別 分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他
			○			○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	政令指定都市				福岡県北九州市		
			◎		○								
企画概要	都心部の小学校内にて簡易な農作業を行う。参加対象は小学校保護者を中心に小学生・小学校OB・地域住民などで、顔の見えるネットワーク作りにこだわる。農のサイクルに沿って参加者の得意分野や個性をふまえつつ種々の文化行事を行う。農作物ばかりでなく、その場で副次的に生まれるモノ・コトに注意深く目を向けながら、多様な価値創造の場を作り出す。消費者から生産者へのスイッチを促すことと、「生産する」だけでなく「生産しない・できない」ことの意義を探ること。以上の活動体を広く「大人の図工」として捉える。												
会 期	2010年4月1日～2015年3月31日												
会 場	北九州市立槻田小学校(北九州市八幡東区松尾町9-1)												
U R L	http://hachimanyu.web.fc2.com												
画 像													
参 加 アーティスト	八万湯プロジェクト、槻田小学校おやじの会												
クレジット	主催:槻田小学校おやじの会、八万湯プロジェクト 協力:槻田小学校、槻田小学校 PTA												
団体概要	■槻田小おやじの会 設立2002年 約20名北九州市立槻田小学校に子どもを通わせる父親のグループ。運動会はもちろん校内キャンプ、バザーなど種々の学校行事の舞台裏を支える。ほかに公園での畑作りなど。飲み会重視。 ■八万湯プロジェクト設立2009年 10名(2010年3月現在)北九州市の美術グループ。八幡ゆかりの建築家・村野藤吾設計とされる元銭湯「八万湯」を拠点に、日本の近代化を支えた工業都市・八幡の歴史や地域性をめぐり、展覧会、シンポジウム、ワークショップ等の企画運営を行う。												

91	多分野のクリエイターによる新たな価値と文化の醸造												
企画名	紺屋2023												
施設名													
団体名	トラベラーズプロジェクト												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
						○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				福岡県福岡市		
	○	○	○		○								
企画概要	九州最大の繁華街・福岡市天神地区。かつて紺屋町と呼ばれた場所に、2008年4月「未来の雑居ビル」をコンセプトとする「紺屋2023」プロジェクトがスタートした。1965年に竣工された5階建てのビルの、全17室の部屋は入居者たちの手によりリノベーションされ、プロジェクトの趣旨に共感したクリエイターたちの事務所が入居。建築、アート、IT、イベント企画といったさまざまな側面から社会を活性化させる刺激的な活動を行っている。												
会期	2008年4月～2023年3月												
会場	福岡市天神地区												
URL	http://konya2023.travelers-project.info/												
画像													
参加アーティスト	建築デザイナー、アートディレクター、IT コミュニティ、陶磁器プロデューサー、インディペンデントキュレーター、ファッションデザイナー、パフォーマー、編集者、演劇制作者、ダンス制作者、映画プロモーターなど												
クレジット	主催(企画・運営): TRAVEL FRONT 建物所有者: 有限会社ショーソン												
団体概要	紺屋2023は、トラベラーズプロジェクト(事務局トラベルフロント)が企画・運営する3つめの建物再生プロジェクト。期間は、2008年から2023年までの15年間。場所は福岡市中央区大名の紺屋町。築約45年のビルの17部屋には、様々な業種のディレクターが集う。「未来の雑居ビル」をテーマに、業種・年齢・国籍・民族・時間・用途・目的、など様々な要素が雑居し、これらの要素が、集合・離散しながら思考・試行を重ね、新たな価値と文化の醸造をめざす。												

92	自然と共生する豊かで潤いのある社会環境の構築												
企画名	長崎おぢか国際音楽祭												
施設名													
団体名	おぢか国際音楽祭実行委員会												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
				○		○							○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				長崎県小値賀町		
	◎					○							
企画概要	「芸術は豊かな自然の中に原点があるを信念において、真の音楽が生み出される場を創造し、芸術の発展に貢献するとともに、自然と共生する豊かで潤いのある社会環境の構築」を目的に2001年4月に産声を上げた。「教会コンサート」を始め、老人ホームや寝たきり老人の家に訪問し演奏する「アウトリーチ音楽宅配便」や離島で行う「離島演奏会」、お寺やターミナルなど島内各所で演奏会をおこなっている。その他、子供たちを中心にした音楽と自然を楽しむ「音楽ワークショップ」や、「アートセミナー」などを開催し、住民の心の活性化にも寄与し、住民に愛される音楽祭を目指している。新たな取り組みとして「芸術」と「音楽」を融合させた「ミージカル」への取り組みに挑んでいる。												
会期	2012年3月13日～20日												
会場	小値賀町内各所												
URL	http://ojika-ongakusai.net												
画像													
参加アーティスト	青柳 晋、山内達哉と愉快的仲間たちリサ・スミルノワ(ピアノ)、ほか												
クレジット	主催:おぢか国際音楽祭実行委員会、小値賀町 共催:小値賀町教育委員会、小値賀町公民館、特定非営利活動法人おぢかアイランドツーリズム協会、株式会社小値賀町観光まちづくり公社 後援:外務省、文化庁、長崎県、長崎県教育委員会、長崎新聞社、西日本新聞社、朝日新聞社、読売新聞西部本社、毎日新聞社、NHK長崎放送局、NBC長崎放送、KTNテレビ長崎、NCC長崎文化放送、NIB長崎国際テレビ 助成:財団法人地域創造、松園尚巳記念財団、ほか 協賛:九電工、海洋開発株式会社、野母商船株式会社、九州商船株式会社、株式会社武蔵グラフィックス、サウナ・サン、関西小値賀会、関東小値賀会、福岡県小値賀会、県北小値賀会、門田建設株式会社、博多都ホテル、ききょうや、ふるさと、小西旅館(要請予定)												
団体概要													

93	県内公立文化施設のリーダー館としてさまざまなノウハウを提供												
企画名	熊本県立劇場												
施設名	熊本県立劇場												
団体名	財団法人 熊本県立劇場												
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○			○		○	○	○	○	○	
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	都道府県				熊本県		
	○	○	○		○								
企画概要	熊本県立劇場は、県民の文化的欲求に対応し、音楽・舞踊・演劇のための施設及び設備を提供するとともに、県民の福祉及び文化の向上にかかる諸事業を実施することを目的とし、熊本県の文化振興に係る文化創造の拠点としての役割を担う施設として位置づけられている。県立劇場としてのノウハウを活かし、市町村ホールに対するソフト事業の提供、職員の研修受け入れ、舞台制作スタッフの育成、市町村との共催によるアウトリーチ事業などに尽力。県内公立文化施設のリーダー館として県域の文化力向上に貢献している。												
会期	熊本県立劇場ほか												
会場													
URL	http://www.kengeki.or.jp/												
画像	 												
参加アーティスト													
クレジット	主催:財団法人熊本県立劇場												
団体概要	法人の目的は、次に掲げるとおりとする。(1) 県民の福祉及び文化の向上を図ること。(2) 指定管理者として公立文化施設の管理を行うこと。												

94	温かな人間回復の「ホーム」となる美術館												
企 画 名	熊本市現代美術館												
施 設 名													
団 体 名	財団法人 熊本市美術文化振興財団												
索 引 別 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
			○	○		○			○	○			
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	政令指定都市				熊本県熊本市		
	○	○	○	◎		○							
企画概要	時に見る人の人生を変える力のある現代美術をはじめとした芸術文化を刺激的に判りやすく紹介することによって、熊本市及び市民の文化力の向上を図る。 「生人形」「いけばな」などの地域文化、「マンガ」「ファッション」などアートの領域を越えたアートに着目した企画によって、アートと人、アートと地域、そして人と人を繋ぐ活動を続けている。 企画展以外はすべて無料。待ち合わせや読書に使えるホームギャラリーや子どもが遊べるキッズサロンは自由にくつろぐことができ、中心市街地をはじめとした、まちの賑わいづくりに貢献している。館内では、ボランティアによるピアノコンサートや映画上映会、子ども向けのワークショップやファミリー向けのツアーなど多彩なイベントを開催。併せて、館外で活動する団体や商店街等とも連携し、アートの力によって様々な領域を繋げ、熊本市全体を元気にする活動を展開しようと努力している。												
会 期													
会 場													
U R L	http://www.camk.or.jp/												
画 像													
参 加 アーティスト													
クレジット													
団体概要	財団法人熊本市美術文化振興財団は、1994年に設立。熊本市民の美術文化への高い関心に応え、美術を中心とした、芸術文化の振興と発展に貢献している。2002年の開館当初から熊本市現代美術館の管理運営を担い、2006年度からは同美術館の指定管理者業務を受託、現在2期目となる。												

95	この町でしか体験できないアートの実現												
企画名 施設名	別府現代芸術フェスティバル2009 混浴温泉世界												
団体名	別府現代芸術フェスティバル2009「混浴温泉世界」実行委員会(中核組織:特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT)												
索引別 分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・ 安心	福祉	教育	観光・商 工振興	地域の 環境	地域再 生等	その他	事務局	財政 支援	場の 支援	人材 支援	情報 提供	その他
				○		○			○	○			○
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統 芸能	その他	10万人以上の市				大分県別府市		
	○	○		◎		○							
企画概要	中核組織である特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT は、世界有数の温泉地として知られる大分県別府市を活動拠点とするアート NPO として、別府市で国際芸術フェスティバルを開催することをマニフェストに掲げ、2005年4月に発足。別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」や、市街地の空き店舗をリノベーションする「platform」制作事業など様々な事業を実施。事業を通じ別府らしい、この町でしか体験できないアートの実現を目指している。そして、市民が自らその実現を望み、行動することで、より多くの可能性を秘めた豊かな社会へと変容することと信じ、活動を続けている。												
会 期	2008年4月11日～6月14日												
会 場	別府市内各所(別府市中心市街地全域、国際観光港みなとパレット、別府市中央公民館)												
U R L	http://www.bepupproject.com http://www.mixedbathingworld.com												
画 像													
	No Matter(入浴する女たち) ©杜多洋一 マイケル・リン 別府04.11-06.14.09 ©久保貴史												
参 加 アーティスト	「アートゲート・クルーズ」海外アーティスト8組、「ベップダンス」ダンサー10組。「わくわく混浴アパートメント」では、国内アーティストが132名、「ベップオンガク」ではミュージシャンが10組と多数。												
クレジット	主催:別府市、別府現代芸術フェスティバル2009実行委員会 協働パートナー:P3 art and environment、特定非営利活動法人アートNPOリンク、特定非営利活動法人 Japan Contemporary Dance Network、特定非営利活動法人ハットウ・オンパク、特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT 他 ※「混浴温泉世界」を実現しようとする意志と目的を共有しながら、自主的・積極的に協働する団体・個人 後援:カナダ大使館、フランス大使館、駐日韓国大使館 韓国文化院、トルコ大使館、九州日仏学館、観光庁、文化庁、大分県、福岡市、大分県教育委員会、別府市教育委員会、財団法人福岡市文化芸術振興財団、社団法人 ツーリズムおおいた、別府商工会議所、社団法人別府市観光協会、別府市旅館ホテル組合連合会、別府市中心市街地活性化協議会、JR 九州大分支社、JTB 九州大分支店、大分大学、大分県立芸術文化短期大学、立命館アジア太平洋大学、別府溝部学園短期大学、大分合同新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞西部本社、日本経済新聞社、西日本新聞社、共同通信社、NHK 大分放送局、OBS 大分放送、TOS テレビ大分、OAB 大分朝日放送、エフエム大分、CTB メディア、シティ情報おおいた 他 助成:財団法人アサヒビール芸術文化財団、財団法人文化・芸術による福武地域振興財団、財団法人花王芸術・科学文化財団、プリティッシュ・カウシンシ、財団法人ボーラ美術振興財団、他 新東九州観光整備事業、平成21年度文化庁国際芸術交流支援事業 協賛:アサヒビール株式会社、トヨタ自動車株式会社、株式会社日本航空インターナショナル、全日本空輸株式会社、株式会社おおいた観光サービス、財団法人大分県交通安全協会、大分銀行、大分みらい信用金庫、豊和銀行、大分県信用組合、中村病院、向井病院、株式会社クレオテック、大和ハウス工業株式会社大分支店、株式会社トキハ、三菱商事太陽株式会社、ゆめタウン別府、理想科学工業株式会社、亀の井バス株式会社、関西汽船株式会社 別府支社、山口産業株式会社、特定非営利活動法人鉄輪湯けむり倶楽部、特定非営利活動法人 別府八湯トラスト、別府地獄組合、観光施設連絡協議会、別府市中心市街活性化協議会 他 協力:トヨタ・子どもとアーティストの出会い、別府八湯ウォーク連絡協議会(別府八湯竹瓦倶楽部・特定非営利活動法人鉄輪湯けむり倶楽部・山の手倶楽部・浜脇倶楽部・亀川温泉亀カメ倶楽部・別府八湯語り部の会・別府市旅館ホテル組合連合会・社団法人別府市観光協会・堀田温泉郷倶楽部・ふるさと会・別府湾ウォーキング協会・朝見地域振興会) 他 制作協力:Winsor & Newton(サルキス作品) 会場協力:クリエイト Andoh-Ⅱビル 認定:社団法人 企業メセナ協議会												
	(2009年当時)												
団体概要	中核組織の特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT は、世界有数の温泉地として知られる大分県別府市を活動拠点とするアート NPO である。この町で、国際芸術フェスティバルを開催することをマニフェストに掲げ、2005年4月に発足して以来、現代芸術の紹介や教育普及活動、人材育成講座や出版事業、市街地の空き店舗をリノベーションする「platform」制作事業など様々な事業を実施している。												

96	若手アーティストによる島全体を展示会場とした展覧会													
企画名	KOSHIKI ART EXHIBITION 2011「アイムアダイバー」													
施設名														
団体名	KOSHIKI ART PROJECT													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
				○		○			○	○		○	○	
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				鹿児島県 薩摩川内市			
			○		○									
企画概要	若手アーティストが夏の1ヶ月間滞在制作を行い、島全体を展示会場とした展覧会を行うプロジェクト。参加作家が集落の空き家や空き地、廃校などを活用して制作を行うことで、プロジェクトに関わった島民や来場者は、島で失われつつあるその場所や島民の暮らしに息づく文化的な営みをアートという視点から改めて体感する。この島でつくる・いきるという活動が、相互の創造的関係を生み出し、地域の大きな可能性を見出す。その他にも音楽祭なども行う。													
会期	8月第3土曜～第4日曜													
会場	薩摩川内市里町を中心とした上甕島・中甕島一帯													
URL	http://koshikiart.chesuto.jp/													
画像														
	空き家での制作風景 Photo by コセリエ							野内俊輔「union changing+」 Photo by コセリエ						
参加アーティスト	毎年異なる。													
クレジット	主催:KOSHIKI ART PROJECT 後援:薩摩川内市・全日本空輸株式会社 鹿児島支店 助成:財団法人アサヒビール芸術文化財団 特別協賛:アサヒビール株式会社													
団体概要	KOSHIKI ART PROJECT は、表現活動によって上甕島、中甕島、下甕島の3つの島を緩やかに繋げ、この島と関わる人たちと、甕島という1つの島の可能性を創造的に作り出していく活動である。2004年設立。													

97	日本で唯一の村営ジャンベスクール													
企画名	みしまジャンベスクール													
施設名														
団体名	三島村													
索引別分類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方						
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他	
			○			○								
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地			
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	5万人未満の市町村				鹿児島県三島村			
◎														
企画概要	黒島、硫黄島、竹島の3つの島から成る鹿児島県三島村に、日本で唯一の村営ジャンベスクールがある。世界的なジャンベ奏者のママディ・ケイタ公認のスクールでは、毎年夏にママディによる国際ジャンベ集中講座「Mishima Camp」が開かれ、世界中から約60人の受講生が参加する。そんな三島村で、ジャンベ留学生制度が2005年からスタートした。5人の若者たちが、5月から11月までの半年間、奨学金を貰って硫黄島で共同生活を送る。そして、村の仕事を手伝いながらジャンベの演奏技術を磨くという、滞在プログラムである。													
会期														
会場	三島村(硫黄島)													
URL	http://www.ttmjp.net/													
画像														
参加アーティスト	ママディ・ケイタ													
クレジット														
団体概要														

98	地域固有の歴史文化と民間信仰に基づくアート行事												
企 画 名	コザクロッシング2011シチビアート												
団 体 名	スタジオ解放区												
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
				○		○							
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	10万人以上の市				沖縄県沖縄市		
				○									
企画概要	活動拠点である銀天街商店街が隣接するコザ十字路(コザクロッシング)は、沖縄のおへそに位置し、越來城を有する田園風景から、戦後アメリカ世となり黒人街が生まれ、近代化と共に衰退への危機と、度重なる世変わりのなかで様々な価値観が交差してきた場所である。本企画では、現代社会の中で埋もれゆく年中行事の風景や民俗を掘り起こし、年中行事(シチビ)の新たなアートの風景を生んで行く。旧暦の年中行事を支える銀天街を師匠に、土地の文脈からアートを生み出し、時代と地域を飛び越え、地域固有の歴史文化と民間信仰に基づくアート行事として、地域や人々の間に継承されていくものを生み出す実験を行い、土地と人の物語を結び直していく。												
会 期	2011年旧暦を中心とした各月のシチビ(節日)に開催 5月こどもの日編、6月ユッカスヒー編、7月七夕編、8月もうすぐ旧盆編、9月ヨーカビー編、1月正月編												
会 場	沖縄市銀天街商店街、コザ十字路周辺地域、沖縄県内各地(恩納村、那覇)、土着辺境ネットワーク地域(福島県いわき市湯本、小名浜、ほか)												
U R L	スタジオ解放区 http://kurosio.blog4.fc2.com/ アサヒ・アート・フェスティバル http://www.asahi-artfes.net/ 銀天街商店街 http://aaf2010.gintengai.net/												
画 像	 												
参 加 アーティスト	プロジェクトメンバー: 林僚児、藤森千夏、平敷卓、大城賢次、川副裕一郎、ティトゥス・スプリー、藁科邦利、上嶋円香、和田瑞希、神野恵美、小橋川啓、戸ヶ瀬哲平、安森大樹、大谷勉、ヨシハラコマチ、銀大アートクラス、ほか、シチビ毎にレジデンスアーティスト招聘												
クレジット	主催: スタジオ解放区 共催: コザ銀天大学 後援: 沖縄市銀天街商店街振興組合、沖縄市 特別協賛: アサヒビール株式会社 助成: アサヒビール芸術文化財団、文化・芸術による福武地域振興財団 協力: 湯本温泉街スマイル館、TNR(田仲なかなかレジデンス)、三函座リバースプロジェクト、湯本第1小学校、スマイルキッズオンパク、アクアマリンふくしま、つなぐ光、沖縄県学童保育支援センター、沖縄市一番街商店街、星槎国際高校、ウキウキおきなわ、沖縄市各学童クラブ、沖縄市児童館連絡会、安慶田小学校、コザインフォメーションセンター、コザサポーターズクラブ、TUMUGU プロジェクト、復興エイサー実行委員会												
団体概要	土地の文脈や民俗を作品化するシチビアートを展開中。琉球アニミズムや地域とアートの関係をテーマに毎年「アサヒ・アート・フェスティバル」に企画参加。だれもが自然と掛け合いコラボする場「老若男女の美術庭」を心がけ、コザ十字路銀天街に「漂流レジデンス(滞在制作合宿所)」を運営するほか、商店街組合とともに食とアートと交流の街づくりに取り組み、「コザ銀天大学」などの地域コミュニティの拠点を生み出している。												

99	子どもたちの遊びから地域に様々な活動を作り出すシステム												
企画名	かえっこ												
施設名													
団体名	かえっこ事務局												
索引別類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	全国				全国各地		
			○		○								
企画概要	かえっこはいらなくなったおもちゃを使って地域に様々な活動を作り出すシステム。「カエルポイント」という世界共通の「子ども通貨」(遊びの通貨)を使い、子どもたちが遊びの中で自主的に、自由な活動を実施し、地域社会に新しい活動が芽生える仕組みとして提供されている。かえっこを利用する団体や人材、地域の緩やかなネットワークを形成しつつある。												
会期													
会場													
URL	http://www.geco.jp/kaekko/												
画像													
参加アーティスト	藤浩志												
クレジット													
団体概要	2000年に藤浩志企画制作室から独立した個人事務所から派生するネットワークがベースになっている団体である。全国各地の様々な自主的な活動を支援し、良質な地域活動のネットワークの形成を目指している。												

100	防災を楽しく学べる新たなしくみ												
企 画 名	イザ！カエルキャラバン！												
施 設 名													
団 体 名	特定非営利活動法人 プラス・アーツ												
索 引 別 分 類	関連する行政分野							地方公共団体(または公立文化施設)の関わり方					
	安全・安心	福祉	教育	観光・商工振興	地域の環境	地域再生等	その他	事務局	財政支援	場の支援	人材支援	情報提供	その他
	○		○		○	○		○	○	○	○		
	活動の芸術分野						地方公共団体の規模				開催地		
	音楽	ダンス	演劇	美術	伝統芸能	その他	全国				全国各地		
			○										
企画概要	子どもたちや若い親子を対象に、震災時に必要な「技」や「知識」を身につけてもらう新しい防災訓練のシステム。美術家・藤浩志が全国で展開するおもちゃの物々交換プログラム「かえっこバザール」のシステムと、ゲーム感覚で楽しみながら消火・救出・救護などの知恵や技を学べる「防災訓練プログラム」を組み合わせたプログラム。2005年に神戸で始まり、全国各地のみならず海外にも広がっている。												
会 期													
会 場	全国各地												
U R L	http://kaerulab.exblog.jp/												
画 像													
参 加 アーティスト													
クレジット													
団体概要	国内外の子どもたちを含めた市民の方たちに対して、教育、防災、まちづくり、福祉、環境、国際協力等の社会の既存の各分野におけるアートの発想やアーティストの持つ既成概念にとられない創造力(これを総称して"アーツ"と呼ぶ)を導入した事業を行い、それらの分野がそれぞれ抱えているさまざまな課題や問題の解消と地域の活性化に寄与することを目的としている。												

文化・芸術を活用した地域活性化に関する調査研究
別冊資料集

調査・発行：財団法人地域創造

〒107-0052 東京都港区赤坂 6-1-20
国際新赤坂ビル西館 8 階
tel. 03-5573-4050 fax. 03-5573-4060

調査委託：株式会社ニッセイ基礎研究所
芸術文化プロジェクト室

〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-7
tel. 03-3512-1883 fax. 03-5211-1084

発行日：平成 24 年 3 月

©(財)地域創造、(株)ニッセイ基礎研究所

